KAIZO

改造

八月號

1929

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

法學士柳井義男先生著

活動寫眞の保護と取締

菊判總布 美裝函入 全一冊

定價金八圓五拾錢

送料 内地三十六錢 滿鮮六十五錢

最新刊

理想的シネマ法典成る

活動寫眞の原始的本質使命と其の文化價値とを論じ、以て著作物として活動寫眞を保護すべき法理を明かにし、進んで、我國及各國法上の著作權竝に興行權の保護を解説したのが本書である。◇◇社會動因として、活動寫眞の勢力と、他に比類なき其效用の無限なることを明かにし、以て、檢閲其他取締の運行を、内外に亙つて巨細に論述したのが本書である。◇◇本書は内務省映畫檢閲事務所長として檢閲當面の責任を負へる斯界の權威柳井先生が多年の蘊蓄を傾倒して完成せられたる眞に理想的シネマ法典である。

特許局出願課長 抗告審判官 辨理士試驗委員 法學士
吉原隆次先生著

▼特許法詳論 定價金貳圓八拾錢 送料内地二十七錢

▼商標法詳論 定價金參圓 送料内地二十七錢

▼實用新案法 意匠法 詳論 定價金參圓八拾錢 送料内地二十七錢

本三書は多年職を特許局に奉じ、斯法に精通せる吉原學士が其の蘊蓄を披瀝して成れるものにして、特許・商標・實用新案・意匠の四法を學理に據り實際に徴し精細に解説を施されたものである。

東京市神田區一ツ橋通町 有斐閣發行 振替東京三七〇番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

高血壓に

アニマザ

夏季に多き腦溢血！

高血壓に因る危險の突發を未然に阻止す、就中四十歳以上にして、卒中の遺傳的素質、體格の肥滿或は鉛毒・梅毒・腎臓炎・飲酒・精神過勞等により血壓昂進せるときに常用劑として最も貴重なり。

三〇錠……二圓四十錢
一〇〇錠……六圓八十錢
各地著名藥店にあり

血壓を下げ、
血管硬化を防止す

獨逸オスナブルク臓器治療藥會社
總代理店 株式 田邊元三郎商店
東京日本橋區本町

【說明小冊子送呈】





改造八月號目次

◇文學博士 上田萬年先生序 神谷敏夫氏新著◇

—（我出版界唯一の書）—

新刊發賣

國語學總說

菊判最上製美本
全壹册五百餘頁函入、

正價金 參圓八拾錢
送料廿七錢

（渴望の名著愈出づ）
（國語學界の明星!!）

近時國語學の書を渴望する聲益々甚しきに拘らず其の著書少く在るものは殆ど絶版となつてゐるのは誠に痛嘆に堪へない。幸なる哉本書生る。本書は上田博士の講義を中心に篤學の著者多年研鑽の結晶にして其の論述國語學の全般に亘り平易明晳である。内容は第一編序論國語學の概念・國語研究の態度及部門・・第二編國語研究東西の言語學發達・國語の音韻語姿變遷・第三編國語研究史・第四編國語の特質・國語國字問題等を說く。そして上欄に至便な見出を、附錄に索引參考書目錄を附せる等至れり盡せり正に國語學者の白眉國語研究者の絶好の師友たるは勿論文檢高等教員受驗者に取りての無上の福音である、敢て一本を諸賢にすゝむ。

大同館出版圖書

中島悅次氏著 ●參考 宇治拾遺物語新釋 本書は國民的にもつと弘く讀まれ親しまれてよい （好評） 金四圓五拾錢 送料廿七錢

吉澤義則校閱 奥里將建氏著 ●詳註口譯 萬葉集長歌全集 萬葉長歌の全部を口譯し註釋は詳細を盡せる良書 （新刊） 金參圓八拾錢 送料廿七錢

吉澤義則監修 奥里將建氏著 ●最新國文學史辭典 國文學鑑賞と研究の高い叫びに依て生れし良書也 （貳版） 金參圓參拾錢 送料廿七錢

目黑禧一氏著 ●最新東洋歷史辭典 著者が數年間の努力に成りし苦心の大著完成せり （新刊） 金參圓參拾錢 送料廿七錢

山上德信氏著 ●最新西洋歷史辭典 西洋歷史研究者の大福音本邦唯一の西洋史辭典也 （新刊） 金參圓九拾錢 送料廿七錢

文學士 吉村勝治氏著 ●近世世界政治外交史論 佛國革命よりロカルノ條約に至る迄詳說せり （新刊） 金參圓五拾錢 送料十八錢

大關增次郎著 ●カント研究 カント哲學の體系を探究し盡くしてゐる眞の參考用書好評 （三版） 金七圓八拾錢 送料廿七錢

日高瓊々彥著 ●國家に及ぼす宗教の害毒 國民啓發の爲我等の日本の爲に一讀希ふ （三版） 金壹圓八拾錢 送料十八錢

東京市神田區西小川町二ノ三 大同館發行 振替貯金口座東京八七貳番

英國 ラスキン著
文學士 栗原古城譯
八版

胡麻(ごま)と百合(ゆり)

原名「王者の寶庫と女王の花園」

本書は美術批評に關する以外のラスキンの著述中で最も有名で又一番弘く讀まれた書物である。原名又「王者の寶庫と女王の花園」と云ふ。王者の寶庫は讀書論で女王の花園は婦人論である。孰れも修養書の白眉と云はる。

四六判總布
定價 貳圓
郵稅 十錢

獨逸 ショーペンハウエル著
增富平藏譯
三版

宇宙及人生

原名「意志及び心識としての世界」全譯

本書は獨逸の大哲學者ショ氏の主著「意志及び心識としての世界」の逐字的國語譯である。原書はニイチエも「二週日の間、二時に寢ね、六時に起きて二千頁を讀破した」といつた位有名な世界的名著である。

上卷 四圓五十錢
中卷 三圓
下卷 四圓
郵稅各十八錢

石龍子著
三版

性相講話

「人は見かけによらぬ」とは其術を心得ないからで、「人は見かけ通りのもの」人の正邪、賢愚、雅俗、生涯の運不運等は悉く其容貌肢體に顯はれてゐる、とは觀相家の言ふ所である。此書は斯界の權威石龍子先生の「何人にもわかる種あかし」である。

圖面五枚入
四六判總布
定價 貳圓
郵稅 十錢

慶應大學教授 戶川秋骨譯
上 九版 下 十版

エマーソン論文集

近代に於ける最も幽玄にして最も健全なる思想家はエマーソンである。加之其文辭最も簡潔にして又最も雄勁、句々みな座右の銘とするに足る、譯文亦精透。

上卷 參圓
下卷 貳圓五拾錢
郵各十二錢

獨逸 ショーペンハウエル著
增富平藏譯
八版

處世哲學

偉大なる哲學者「人間を知れる者」としての著者が晚年に於ける深遠の觀察と老熟の思想とを舉げて人間處世の妙諦を說けるもの。譯文亦明快を極む。

四六判總布
貳圓八拾
郵稅十二錢

安岡正篤著
再版

東洋倫理概論

現代人の生活不安の根柢となり背景となつてゐるものは深刻な靈魂の飢渴である。此書は著者が多年聖賢の學を尋ねて實參苦修した中におのづから得た原理と確信とを細やかに系統を立てて論述し人間生涯の大道を明らかにしたもので、東洋人生哲學の寶藏を近代人の爲に開く無二の秘鍵である。

菊判總布製
貳圓四拾錢
郵稅十二錢

東京本鄉西片町
玄黃社
電話小石川一三九番
振替東京七九九五番

濱口內閣に警告す

我國大衆は政治家の社會的地位を妄信しておる。そしてその職務が尤も高尚であり、そして重要で何等か我々の上位にある階級の如く過信しておる。なるほどその職業は花々しく民衆に直接の利害を持つからそう信ぜらるるのも強ち無理ではないとしても、しかし現段階における我政治家の知識なり思索なりがどれほど優越せるものであるかを冷靜にきわめるがよい。第一にその學才が知識階級の中位以下であり、品性、思索力何れも第二義的價値しかない人々のみであることは十人の九人までが識認するところ。それ等の人々により人類のため、社會のためと呼びかけられるときどれほど知識階級は侮辱を感ずることだらう。その日暮しの政見政策が大衆にどれほど愚弄せられておるかを現在の政治家は深く省みなくてはならない。そして自己の見識、學問がどれほど大衆と差違あるかをも深く內省すべきである。否、自己に風格なるものありや、未來の社會にどれほど自己が重要であるかをも思料するならば自己の社會的存在が全く虚名の對象以外何も殘らないことを感知するだらう。濱口內閣の聲明した十ケ條の政綱がすべて金融資本家の走狗であるか否かは別として、少くとも大衆を中心においた政策でないことだけは言ひ得る。我々は多年苦勞しておる濱口君であるから失業群をいかにすべきかの具體案の一項位は當然這入るものと思つた。然るに社會政策の確立位で誤魔化したのは野黨として今まで何をなしておつたか、何を研究していたかを反問せざるを得ないのである。今日の政黨に組織なく、調査機關も粗大で何等の權威なきものだ位は解つておつたが、まさか、かゝる抽象的政綱を今日ほど進んだ國民の前に揭出してどうなると思ふのか、濱口君の政治的態度に對しては比較的に眞劍味を認めた我々ながら。我々はしかし硬化症にかかつたやうな誠意を、そして金融資本に隷屬的態度をとつておる誠意をどれほど汲み入れてよいか。百の誠意も、千の眞劍味も立脚點を異にしたもの、一部階段に偏重したものであつて見れば十年前寺內正毅君の秉公持平の說と五十步百步であることを斷ずるものである。しかし金解禁も斷行する誠意は井上君の入

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

閣によりて明瞭に看取できる。田中内閣は掛け聲ばかりで無誠意であり、實行力がなかつた。何等の準備もなかつた。國民はその掛け聲に瞞さるるまでに無知識ではなかつた。然らば井上君は金解禁に依る財界の將來に對し如何なる準備をなしつつあるか、その準備の基調がどこにおかれておるか、此處が我々の究むべきところである。何せ久しい問題であるだけ各方面に於てそれぞれ準備はされて居やうが、もしも一昨年初夏の財界動亂の如きを現出せば剡いて深刻なる社會現象を見るに至るであらう。國民大衆も亦當局の施設如何につき今度は訓練されたる態度を以つて接してもらひたい。金解禁斷行の準備として徹底的緊縮は止むなき政策である。ただ失業群の頻出に當面してその處置に一方に偏するが如きことがあつたら、取返しのつかぬ事態を惹起することを重ねて開陳しておく。

政權はきらびやかでややともすれば大衆を浮薄に導く。今日、明日と現實の華かさで愚人を誤魔化す。從つて政客の志が今日、明日を出でず、また一年二年の短日月の花苒瞞過に變身を寠す。命のあるうちに旨いものを食ひ、奇麗な衣を纏ふて威張つた方が得だ。そうした人生觀の反映に生きる人々がのさばり歩く政界の現狀である。これが命短けれど藝術は長しの目標に生きる藝術家、畫家の眞劍味に較べて淺薄低劣であることはまぬかれない結果である。その地位に咆哮し、其の地位に爭鬪して自分の大事の仕事を後世に遺そうとしない。利權、勢威に目も耳もくらみ果てゝ民衆の聲のあるところに永久的に聾である人達が——社會の爲めとは——どこを推して出る聲であらう。大業の前に死の前に、永遠の生命の前にといふ目標の前に進んでをる我々から見て現内閣が聲明した抽象的政綱が寸毫も勇氣を含まず、建設の用意を缺ぎ、粗枝大葉の維新の志士と選を同じくすることを嗟嘆するのみ。自分が國家民人を脊負つて歩く慨あらば自己の具象的信念を傾けて大衆の腹中に投ずべきである。我々は我政治家を徒らに第二義的以下の人々と貶黜するのではない。しかし世の動向がすべて科學的に立脚したるときに當りてあまりに非科學的の聲明なるが故にしか云ふのである。あの聲明では民衆は躍らないからである、生活難にあへぎつつある大衆の臟腑にピンと響かぬからである。流動しつつある社會をもつと組織的に掴むがよい。そして現代人を固く把握するがよい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



英雄的階級・階級的英雄

大山郁夫

一

英雄的階級・階級的英雄。——

これは、無產階級運動の理論と實踐との上に於ても、明かに一の當面の問題であり得る。否、それは問題としては、既に解決されてゐる問題だとさへ言へる。

言葉の正しき意味に於ける無產階級運動は、餘りにも當然に所謂『英雄主義』の否定に立脚してゐる。マルクスは既にマニフエストの中に於て、『すべての從來の諸運動は少數者による、少數者の利益のための運動であつた。プロレタリアー運動は不可測の大多數の利益のためになされる不可測の大多數の自主的運動である』と宣言してゐる。

マルクスのこの一句の近代史的意義は無限に廣大であり深長であるが、それは直接的には無論、近代プロレタリアートの解放は近代プロレタリアートの物質的生活諸條件の必然的歸趨だといふ事實に關聯して言はれてゐるものである。この一見平明なる眞理こそは、近代プロレタリアート解放運動の唯一の正しき解釋であり、若しくは少くとも、その正しき解釋を可能ならしめる唯一の出發點である。

この意味に於ける無產階級運動は、いふまでもなく、或る特殊の個人もしくは集團の利益のために行はれるものでもなければ、猶ほ更ら單純に或る特定の個人もしくは集團の功名心乃至權力意志の達成のた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

めに行はれるものではない。從つてそれは、たとへば、或る超人的存在の靈的偉力に魅せられたる大衆の盲目的な追隨的行動をその成立要素とするといふが如き英雄主義的解釋を絶對に容れ得るものではない。否、それはどこまでも、飽くまで冷靜透徹に獨自の階級的利害に眼ざめた大衆の創意を反映する自主的大衆組織による自主的大衆行動を以てその必須なる前提條件とするものである。無産階級の解放は無産階級それ自體の手によつてなされるべきものであり、またなされつつあるのだ。

かくて、『不可測の大多數者の利益のためになされる不可測の大多數者の自主的運動』の一句は、それだけで無産階級運動に於ける英雄主義の否定――それは英雄主義一般の否定に含まれてゐるのではあるが――を示唆してゐるものであつて、更らに我々が『ブリュメール十八日』のマルクスの自序の末尾に見出される次の一句をそれに對照するとき、我々は單に、その問題に關する彼の決定的な明答を得たことを感じるばかりでなく、同時に英雄主義否定の重要なる社會的意義をも極めて明快に知ることが出來るのだ。――

『最後に私は、本書が所謂ツエーザリスムス〔古代ローマの皇帝を意味するツエーザー＝シーザーといふ言葉から派生したもので、英雄主義を意味する。――引用者〕といふが如き、今日特にドイツ國内に流布してゐる學派的套語の排除のために役立つであらうことを希望する。かゝる皮層的な歴史的類比の下に、人は肝腎の根本事實を、すなはち古代ローマに於ては階級鬪爭がたゞ一の特權を帶びた少數者たちの圏内に、換言すれば自由富民と自由貧民との間に、行はれて居つたにすぎなかつたのであり、これに反して全人口中の廣汎なる生産大衆に當る奴隷たちは、さうした鬪爭に對してたゞ受働的な踏み臺となつたにすぎなかつたのだといふ、この根本事實を忘れる。人はシスモンヂイが『ローマのプロレタリアートは社會の犠牲に於て生活してゐたが、これに反して近代の社會はプロレタリアートの犠牲に於て生活してゐる』と言つた、この意味深長な言葉を忘れる。古代の階級鬪爭と近代のそれとの物質的・經濟的諸條件の間に横はる極度に全般的な相異の下に、それ／″＼の政治的諸派生物の間には、〔今日の〕カンタベリー寺院の大僧正と〔大昔の〕祭祀長サムエル〔舊約聖書中の人物。――引用者〕との間以上に相互に共通したものがあり得ないのである。』

二

かくの如く、正しき意味に於ける無産階級運動は、プロレタリアートの階級的イデオロギーの基底に横はつてゐる唯物史觀の立場から、社會事象の英雄主義的解釋を無條件的に否定する。だが、それは無論英雄的階級および階級的英雄の概念の現實性をも否定するといふ意味に於てではない。それどころでなく、近代社會に於ける一個の顯著なる現實の傾向として、殊に資本主義が益々強烈なる反動的特徴を帶び

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

け出すやうになつて來た今日、無産階級運動の全分野の上に、一方に於て所謂プロレタリアー的英雄への呼び掛けの聲が益々高まりつゝあると同時に、他方それと相呼應してプロレタリアー的英雄が踵を接して頻々として輩出し、否、全體としてのプロレタリアートそのものが英雄的階級としての面目を輝やかしく發揮しつつ登場してゐるのが、眼前の事實として見られるやうになつて來てゐる。

それにも拘らず、この事實は、ブルジョアジーの――そして一層大なる程度にプティ・ブルジョアジーの――一のイデオロギーとしての英雄主義とは、極微量の關係をも持つてゐないのだ。

三

如何なる外形に於て僞められるものにもせよ、英雄主義は本來、その實質に於て社會事象の解釋方法上の神秘主義から離れることは出來ない。如何なる場合に於ても、それはその出發點に於て、個人としての英雄に、多かれ少かれ、超人的資性を賦與する。それは多かれ少かれ、個人としての英雄に、社會事象の流れの方向を決定する力を、歴史を創る力をさへも、歸屬せしめる。それに於ては、戰爭、平和、文物、制度、等々、これらの一切の社會事象が、究極に於て大軍人、大政治家、大立法者、大藝術家、大宗教家、等々、一言にいへばそれ〴〵の分野に於ける不世出の英雄たちからの、凡俗大衆への贈り物とされる。偉大なる『創造的想像』と果斷なる實行力、壯烈なる權力意志、比倫を絶する洞察力、統率力、組織力、限りなく深き人類愛もしくは社會奉仕的精神、等々、……かうしたものが、それ〴〵の英雄たちのそれ〴〵の諸屬性として算へ立てられる。

根本に於てかうした本質をもつ英雄主義が、最近に及んで再び各方面に擡頭しだしたことは、何人の眼にも著るしく映ずる一事實である。尤も最近の英雄主義は屢々、或ひは社會學的に或ひは哲學的に聞えるやうな樣々の物々しき術語や表現を以て、多分の莊嚴味や幽玄味やを、時としては一掬の近代的感覺をさへも添へるやうに粉飾されてゐる。だが頓着は要らぬ。一度その一ト皮を剝いて見よ。そこには寸分違はず、ただの英雄主義――古來永遠に繰り返し繰り返し鉦大鼓で宣傳されて來た生地のまゝの英雄主義――が丸出しに現はれて來る。莊嚴味や幽玄味やは、固より神秘主義には附きものである。さらに近代的感覺の點出は、『新』の字のつく神秘主義には不可缺である。

四

かく新裝されての英雄主義の擡頭は、――もしくは支配階級との意識的乃至無意識的默契のもとになされてゐるそれの手廣き宣傳は、當面確實に一の社會的基礎を持つてゐる。、、、、、、、の危機を前にして、金融ブルジョアジーの大規模の統制下に産業合理化が刻々巨歩を進めつゝあるとき、强烈なる反動政治の笞と底知れぬ生活苦とに喘ぐ勞働者農民を始めとし、刻一刻益々奴隷化されて行く廣汎なる被壓迫

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大衆をして、しばしその苦痛を忘れしめ、鬱憤を散ぜしめ、さらに多彩的幻覺に陶醉せしめさへすることによつて階級鬪爭の波の高まりを喰ひ止めるための阿片の役割を演ずる宗教、――それも今日殆んど大衆把握力を失ひかゝつてゐる黴の生えかゝつた瀕死の宗教ではなく、或る意味に於て新鮮な時代色を帶びた新宗教、――それが、今や次第に新形態の絶對主義政治の確立に急ぎつゝある支配階級によつて、益々必要視されるやうになつて來てゐるのだ。かくして英雄主義が、特に新装された英雄主義が、或ひは大衆文藝の形に於て、或ひは『新人』たちの手による新評論の形に於て、等々、ともかく或る程度にその時代錯誤的な實質を糊塗して、舞臺の上を『高速度』に縱横濶歩する趨勢が促迫されて來たのではないか！

五

新装の英雄主義を振り廻はす『新人』たちの約一半は、何と親切にも、唯物史觀が片面的眞理を道破してゐるものであることを譲歩的に認識こそはするが、しかし結局は殘りの約一半と聲を合はせて、全體として見た唯物史觀の淺薄性を言ひ立てる。かうした批評に答へるのは、今はその場合でなく、またさうしてゐる勇氣も筆者には出て來ないが、彼等が唯物史觀を淺薄だといふのは、結局は唯物史觀が、彼等の議論の深味・莊嚴味・幽玄味、等々の究極の泉源である神秘主義を無慈悲に爆破した鐵的行爲に對する彼等の美學的公憤ともいふべき一種のセンテイメンタリズムに基くことが少くないのだ。さうしたセンテイメンタリズムは、茲では問題外とされなければならないが、ただ彼等が、さうした時代の銹に色づけられてゐる神秘主義の徹底的爆破それ自體の上に、より大なる、すばらしき新時代的な美學的價値を認めることさへが出來ないでゐるところに、彼等の主張の本來の內的動機の反動的性質が、それを隱蔽しようがための彼等の大なる努力の下から、まざまざと赤裸々に暴露されてゐるのが見られるのである。

彼等の或るものは更らに、一般的にマルキシズムの陣營に於て唯物史觀が固執されてゐるにも拘らず、マルクス、レーニンの徒が神化されてゐることを得々と指摘して、そしてそれが英雄主義への無意識的降服ででもあるかのやうに囃やし立てる。それは無知から出た世迷ひ言か、恥を知らざるデマゴーギーかであると、一口に言つて濟ませることであるが、しかしそれは我々に、當面の問題に關して、次の或る意味に於て重要な一事を顧みさせる契機となる。

マルクスやレーニンの名が、彼等の無產階級解放運動への歷史的貢獻によつて、マルキシズムの陣營に於て絶大の敬愛を以て記念されてゐることは事實であり、また餘りにも當然な事實でもある。だが、それは無論、彼等の名が、如何なる程度にも神化されてゐるといふのと同意義に當るものではない。エンゲルスはその『フオイエルバツハ論』に於て『マルクスは一個の天才であり、我々は高々秀才である』といつてゐるが、しかし彼は同時に同書に於て、ヘーゲルからフオイエル

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

バッハへ、更らにフォイエルバッハからマルクスへの思想系統的發展過程を述べて、マルクスの存在理由を學說史的に明かにしてゐるのだ。のみならず、エンゲルスは、マルクスのなきがらの埋葬に際しての感激の高潮に於てなした演說に於てさへも、マルクスが全生涯を通じて近代プロレタリアートの解放の事業に協力し、プロレタリアートにその獨自の地位およびその諸要求、並びにその解放の諸條件に對する意識を與へたことを切言したが、しかもマルクスがそれ以上の何物かであるといふやうなことを示唆はしなかつた。この意味に於てマルクスは、產業革命以後の資本主義社會の必然的產物としてのプロレタリアートの間に於て解放運動に協力した、、であり、その階級的戰士であり、階級的英雄でこそあつたが、その階級以外の何處からかやつて來て、その階級を提げて自己の意志を成し遂げたやうな超人的意味の英雄ではなかつた。レーニンおよびその他の幾多の、、、、、、たちについても、同じことがいひ得られるのである。

マルクス學の世界的權威であるリアザノフは、その『カール・マルクスおよびフリードリッヒ・エンゲルス』の卷末の或る個處に於て、父として及び夫としての老マルクスの人間味の異常なる深さを言つた後に、次の如く附け足してゐる。

『俗物連や未熟な革命家たちは、マルクスの生涯の最後の數ページを讀むとき、驚き訝かしんで當惑する。一個の革命家が革命といふこと以外の諸事物に彼の精力の一部をさへも捧げるのは、たしかに善いことでない。屢〻ただ一時間だけの勇士であるところの人々によれば、一個の眞の革命家は、二六時中、彼の生涯の各瞬間を通じて、眼を見張つてゐなければならない。彼は人間的諸感情を超越した革命家的堅石で固められなければならない、と斯ういふのだ。

人は人間的に判斷しなければならぬ。我々が大なる畏敬を以て仰ぎ見る人々が、畢竟我々と同じ人間であつて、唯ホンの少しばかり我々よりも賢明で、より多く敎養を持つてゐて、そして革命のためにより多くの有用な人物であるにすぎないことを我々が考へるとき、我々の心に喜びがある。ただ[illegible]いイカサマものゝ戲曲に於てのみこそ、人々は英雄として描寫された。彼等が步めば山々が常に震へた。彼が足踏みすれば大地が常に裂けた。彼等は英雄たるにふさはしく飲み食ひさへした。』

更らに、レーニンと共に多年の雨と嵐を潛り拔けて現に革命後のロシア共和國の屋臺骨を背負つてゐるスターリンは、人間レーニンについて、次の如く述べてゐる。

『一九〇五年十二月に、私はタンメルフオルス（フインランド）に於けるボルシエヴイーキ大會で、始めてレーニンと會見した。私はわが黨の意氣軒昂たる鷲を、一個の偉大な、單に政治家として偉大だといふだけでなしに、外貌から見てもまた偉大な人間として見るであらうことを期待してゐた。といふのは、私の想像には、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

レーニンが、威風あたりを壓する巨軀の人として映じてゐたからである。ところで私が、中肉中脊の、如何なる點からも、文字通りに如何なる點からも、常人と何等變はりのない、一個の全く平凡な人間を見たときに、私は如何に失望したことか。……「偉人」たちが時間を守らないのは普通の慣例だ。それによつて會衆が心臟の鼓動を以て彼等の臨場を待ち、その姿が現はれるや、一同の緊張した氣持の上に、荒らかな「シッ！　シッ！　靜かに！　來たぞ！」によつて、豁然と息拔きの途が開かれるのだ。かゝる事態は私には全然冗事だとは思へなかつた。それは勿體をつけて尊敬心を注入するからである。で、レーニンが他の代議員たちより先きに會場に來てゐて、そして、とある片隅で會議への單純な代議員たちと全く平凡な會話をやつてゐたのを私が見たとき、私は再び如何に失望したことか。私にはその時、その事が特定の必要な規則の違反のやうに思へたことを、私は敢て告白する。

程經て私は始めて、レーニンのこの純朴さと氣取らなさこそは、人中で眼立たないやうに、もしくは少くとも如何なる場合にも自己を押ッ冠ぶせたり、自己の高い地位を強調したりすることのないやうにするこの用意こそは、レーニンの最長所の一面であり、新しき大衆の、すなはち人類の最下層の「どん底」の單純な、そして普通な大衆の新しき指導者の一特徴であることを悟るに至つた。』

人間マルクス、人間レーニンについて、かうしたことを學び知るとき、我々は別に不思議には感じない。それでいゝのだと思ふ。否、それでなければならないのだ。それでこそ、新興プロレタリアートの典型的な階級的戰士たり、階級的英雄たるに不可缺な人間的素地が彼等の各々に具はつてゐたのだ。

六

前に述べた通り、言葉の正しき意味に於ける無産階級運動の理論と實踐とは、英雄主義の否定から出發する。それは當然のことゝして、現實の社會的諸關係を超越した天與の使命を帶びたやうな特殊の個人もしくは集團に、社會事象の流れを決定したり歷史を創つたりする超人的な靈的偉力が賦與されてゐるといふやうなことを、明示的もしくは暗默的にその前提條件とする英雄主義的立場を、無條件的に拒否する。それは、社會事象の流れを決定したり歷史を創つたりする現實の力は天與のものでもなければ、また或る特殊の天才的な個人もしくは集團の勝手な創意から出るものでもなくて、それは實に歷史的に現實の社會的生産諸關係の中から發生するものであるとの、飽くまで眞面目な認識から出發する。そして、若し、さうした現實の力を持つものが英雄だといふ風に『英雄』の意味を限定するならば、――この言葉の意味のかゝる限定は可能でもあり、合理的でもあり、從つて理論的に許されるべきことでもある、――それは先づ、その意味に於ける英

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雄を、特定の個人に於て見ずして、それを特定の階級に於て見る。そして、或る所與の時點に於て何づれの階級がそれであるかは、嚴密に歴史的に決定されるものと見る。曾て或る時期に於てブルジョアジーがそれであつたやうに、現代に於てはプロレタリアートがそれである。プロレタリアートは、現代に於ける英雄的階級である。

七

上來の論述から推論し得られるであらう通りに、或る特定の階級が或る特定の時點に於て英雄的階級として持つところの、社會事象の流れを決定し歴史を創るその現實の力は、その階級が當面の社會的生産過程に於て現實に占めゐる地位から、從つてその現實の生活諸條件から出て來るものである。そして、さうした現實の力が向けられる中心的目標もまた、無論歴史的に決定される。かくして、その階級が自己の前に置くところの中心的目標への到達のために遂行する事業の總和は、その階級の歴史的使命と正當に呼ばれ得るのである。

或る特定の階級が英雄的階級として歴史の舞臺に登場するとき、必然にその階級の内部に於て多かれ少かれ、階級的英雄の出現が要求され、またその要求と相呼應して、その階級の内部から多かれ少かれ階級的英雄が出現する。英雄的階級は階級的英雄をつくる。階級的英雄とは、一言にいへば、その階級の歴史的使命の重大性の意識の下に、その各自に宛てはがれた部署に於て、全階級の利益のために一身上の安危を無視して、各自の任務を献身的につくす階級的戰士を指していふのである。かゝる階級的英雄は、英雄的階級にあつては、指導者たちの間にも大衆の間にも見出されなければならないし、また實際上多かれ少かれ見出される。かゝる階級的英雄の存在なくしては、當該階級の、、、、、、、、などといふことはあり得ない。

八

近世紀初頭の西ヨーロッパ諸國に於て、中世紀以來の絶對主義的支配を維持してゐた封建制度が歴史の車輪の進轉を止めるやうになつたまでに固定化してしまつた時、それに向つて敢然として挑戰してそれを顛覆し、遂に近代資本主義の時代を導き入れることに成功したものは、實に當時の新興階級としてのブルジョアジーであつた。まことに當時のブルジョアジーは、英雄的階級として素晴らしくも堂々たる活躍ぶりを示したのであつた。そしてそこにまた、ブルジョアジーの内部に於て如何に多くの階級的英雄が雲の如く簇り起つたか！　第十七世紀のイギリスのブルジョア革命に關聯して想起されるパンプトンや、ピムや、クロンウエルや、エリオットや、等々々。また、それから一世紀を隔てた第十八世紀末のフランスの大革命を、或ひは華やかに、或ひは凄壯に彩つたマラーや、ダントンや、ロベスピエールや、サン・ジュストや、等々々。更らにまた、行動の世界を離れてイデオロギーの世界を覗いても、イギリスのミルトン、ホッブス、ロック・フラ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ンスのヴオルテール、モンテスキュー、ルソー、等々。かうした中天に燦々と輝いてゐた巨星を始めとし、處々の片隅に明滅隱顯してゐた小さき星の群れに至るまで、算へ立てれば限りがない。彼等はそれぞれに、或ひは芳ばしき、或ひは芳ばしからざる名を帶びてゐたが、そしてそれぞれの間に於て多少違つた意味に於てではあつたが、根本に於ては齊しく皆、新興ブルジョアジーの階級的英雄であつたのだ。

もとより彼等は、ブルジョアジーの階級的代表者としてよりは、寧ろ人類の代表者としてかの如き氣魄を以て封建的專制支配の打倒に立ち向つた。さうしたことが可能でもあり、また自然的なことにも見えたのは、從來第十九世紀に入つてから歷史的に第四階級としてのプロレタリアートを構成するやうになるべく運命づけられてゐた社會の最下層の『不可測の大多數者』が、當時にあつてはまだ、明確に一個の獨自の階級としての存立を持つに至つてゐないで、寧ろ新興勢力として急速に羽翼を伸ばしつゝあつたブルジョアジーと一體となつて第三階級を形づくつてゐたものと、漠然と考へられてゐたからである。新興ブルジョアジーは、かゝる最下層の大衆の力を糾合し、自らそれを統率し、その先頭に至つて封建主義の牙城に迫つたのだ。そこで彼等が大衆を奮ひ起たしめるべく叫んだスローガンは、『自由・平等・友愛』といふのであつた。かゝるスローガンは、中世紀式の封建主義的專制支配の傳統的精神に鋭く對立するものとして、一方に於ては極端に個人主義的に響いたと同時に、他方に於ては極端に人類的にも響いた。『自由・平等・友愛』。それは『第十八世紀の精神』の表現であつたと同時に、デモクラシー哲學の基調でもあつた。それは如何にも、階級的には響かなかつた。だが究極に於ては、『第十八世紀の精神』は實はブルジョアジーの階級的精神であり、デモクラシーは實はブルジョアジーの階級的哲學であり、『自由・平等・友愛』も畢竟はブルジョアジーの自由・平等・友愛以外の何物でもなかつた。といふことが、永き歲月の經過と共に、次第に明瞭に認知されるやうになつた。

全社會の最下層に追ひやられてゐた大衆が、まだプロレタリアートとしての獨自の階級的存立を持たなかつた間は、若しくは彼等がまだその階級的存立の事實を意識しなかつた間は、ブルジョアジーは尙ほ引き續いて、その公然の發言と行動とを人類的に粉飾することが出來た。彼等は彼等の『自由・平等・友愛』の主張を階級的必要物としてゞなく、人類的結合の原理として押し出すことが出來た。だが、さうした手品も、畢竟は永久に續かう筈はなかつた。破綻は必然に、早晩來なければならなかつた。そして間もなく來た。

九

さうした破綻は、ブルジョアジーの勢力昂進につれて段々と社會の最下層に沈淪して行つた不可測の大衆が漸次プロレタリアートとしての獨自の階級的存立を多かれ少かれ明確に持つやうになり、且つその事實を多かれ少かれ明確に意識するやうになつてから、遂に具體的に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現はれるに至つた。第十九世紀半ばのフランスは、この點に於ても再び最も典型的な實例を示した。

新興ブルジョアジーが、一時大衆の先頭に立つて、『自由・平等・友愛』のスローガンの下に、封建的專制支配の顛覆といふそれ自身の一大歷史的使命を遂行しつゝあつた間は、彼等は完全に英雄的階級としての實質を具へてゐた。だが、彼等が一旦その事業を完成したと同時に、彼等が自己の手で倒した封建主義の後繼者としての資本主義を導き入れて、そして自らその擁護者として立つたに及んで、彼等は最早、歷史を創る階級ではなくなつてゐた。否、逆に彼等は最早『秩序』の維持の名の下に、歷史の車輪を阻止する妨得物となつてゐた。しかもそれは、新生のプロレタリアートの犧牲に於てゞあつた。新生のプロレタリアートは、その新たな生活諸條件から、必然に、、、、、、、、といふ、、、、、、、、の負擔者として立つべく運命づけられた。即ちそれは、、、、、、、、、階級として發程しつゝあつた。かくて英雄的階級の炬火は、いつしかブルジョアジーの手からプロレタリアートの手に移りつゝあつた。——だが、かゝる狀勢の轉換は、何づれの階級にも明瞭に意識されずに、暗々裡に進行しつゝあつた。そして、今は最早支配階級として固定化して來たブルジョアジーも、外觀上だけは尙ほ依然として英雄的階級としての體面を保ちつゝ、依然として『自由・平等・友愛』のスローガンを繰り返しつゝ、實は新生のプロレタリアートの犧牲に於て、『秩序』の維持に沒頭することが出來た。

だが、前に言つた破綻の日が遂にやつて來た。それは獨自の階級としての自己を多かれ少かれ明確に意識し始めた社會の最下層の不可測の大衆が、すなはち新生のプロレタリアートが、明かにブルジョアジーへの、、階級として、『自主的運動』を開始した時に於てゞあつた。そしてその點に關して最も典型的な實例を提供した第十九世紀半ばのフランスに於ては、一八四八年の六月、、が、まさにその時であつた。この六月、、は、マルクスが指摘した如く、プロレタリアートの、、、、、、、としての最初のものであつたのだ。

これより先き、同じ一八四八年の二月、、に於ては、パリーのプロレタリアートは、まだ『自由・平等・友愛』の標語に陶醉したまゝの狀態に於て、急進的ブルジョアジーと協力して、ルイ・フイリップを王位から追ひ出して共和制を樹立し、、、後の臨時政府の下に、『自由・平等・友愛』が支配すべき新時代の到來を夢想した。だが、その夢想は忽ち破られた。即ちパリーのプロレタリアートがさうした陶醉から醒めて現實に歸つたとき、彼等は自ら臨時政府によつて絕望のドン底に追ひ詰められてゐたことを見出した。窮鼠は猫を嚙むより外に途がなかつた。彼等は英雄的に蜂起した。彼等は壯烈に戰つた。彼等は血河屍山をなして鏖殺された。ブルジョアジーの『自由・平等・友愛』は遂にその正體を暴露した。

『フラテルニテ（友愛）、相對立してその一が他を搾取する二つの階級の間の友愛、そのフラテルニテこそ、二月の、、に於て宣せられ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大文字を以てパリーの額の上に、各處の監獄の上に、各處の兵營の上に書き記るされたものだが、――それの眞實の、伴はらざる表現は、それは――、、、その最も恐ろしき姿態に於ける、、、勞働と資本、、、であつた。この友愛が、六月二十五日の夕べ、プロレタリアートのパリーが燃えあがり、血にまみれ、號泣の聲を放ちつつあつた一方、ブルジョアジーのパリーが華やかに照明されてゐたときに、この友愛がパリー全市の窓といふ窓に照り映えてゐたのだ。

………

二月、、は美事な、、〔ブルジョアジーの側から見て。――引用者〕であり、一般的同情を以て迎へられた、、であつた。といふのは、諸對立物は共同に王制に向つて爆發したので、まだ發展する遑なく、互に調和を保ちつゝ相並んで眠つてゐたからであり、また、それらの諸對立物の背景をなしてゐた社會鬪爭はたゞ一片の浮雲の如き存立を、卽ち空虛なる言葉の上の存立を得てゐたにすぎなかつたからである。六月、、は醜惡なる、、〔ブルジョアジーの側から見て。――引用者〕であり、憎むべき、、である。といふのは、空語の代はりに實際の利害が入り込んで來たからであり、共和國がその醜怪なる頭を覆うてゐた燦めく冠を脫ぎ棄てゝ本來の面目を丸出しにしたからである。

秩序! とはギゾーの戰ひの叫びであつた。秩序! と、カヴェニァック〔將軍〕は、フランスの國民議會の、そして共和黨系のブルジョアジーの反響を叫ぶ。秩序! と、この將軍の榴彈は、プロレタリタートの肉體をつんざいた時に唸る。

一七八九年以來のフランスのブルジョアジーの無數の、、の何づれの一つもが、秩序への襲擊ではなかつた。といふのは、それはその階級の支配をそのまゝに殘し、勞働者たちの奴隷狀態をその儘に殘し、縱し屢ゝその支配とその奴隷狀態との政治的形態を變へたにもせよ、ブルジョア秩序をその儘に存續せしめたからだ。六月、、はこの秩序を襲擊した。六月、、は禍ひなるかな!』(マルクス『フランスに於ける階級鬪爭』から。)

かくの如く、この六月、、に於て、パリーのプロレタリアートは、英雄的階級たるにふさはしく堂々と行動した。その陣營に於ける全大衆はまた、階級的英雄たるにふさはしく壯烈に戰つた。若きマルクスは、彼等の上に屠殺の魔手を加へたブルジョアジーに對して燃え立つ憤激の焰を吐きつゝ、その六月、、に仆れた勇敢なる戰士たちを記念する一文を書いた。上に引用した斷片は、それから拔萃されたものである。

だが、ブルジョアジーの陣營に於ける『六月、、の英雄』は、最早漫畫化された英雄にすぎなかつた。六月、、が勃發した六月二十五日の國民議會を支配した失神狀態と混亂狀態との交錯は、右のマルクスの一文中に活けるが如く描寫されてゐる。感傷詩人的詠歎辭のラマルティーヌ。野獸的狂暴を以て勞働者砲擊の殊勳を樹てた將軍カヴェニ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

アック。この二人こそは、ブルジョアジーの陣營に於ける『六月、、の英雄』の否、一般に反動的ブルジョアジーの陣營内の英雄の、二つの最も普通なタイプのよき見本であらねばならぬ。

一〇

最近の日本に於て頻々として我々の眼に觸れる英雄論のうちには、現實の階級關係を超越して概念化されたる英雄一般の問題を取扱つてゐるものが、最も多きを占めてゐるやうである。從つてさうした英雄論に於ては、レーニンもムッソリーニも、マルクスもトライチュケも、ビスマルクもナポレオンも、西郷隆盛もマホメットも、……すべてが皆ひとりなみに、一個の抽象的概念としての『英雄』といふ觀點から、全然同一範疇に屬するものと見做されて、ずらりと顏を並べて押し出されるのが普通である。就中レーニンとムッソリーニとは、彼等の名が持つ際物的興味も手傳つてだが、現代の英雄の世界の二つの代表者として俎上に上ぼされる場合、が最も多く見られるやうである。

かうした流儀の問題の取り扱ひ方は、我々から見れば、プテイ・ブルジョアジー――全然獨自の階級的行動意志を缺いてブルジョアジーとプロレタリアートとの間を行きつ戻りつフラ〳〵彷徨うてゐるプテイ・ブルジョアジー――の社會觀から來てゐるものである。いづれにせよ、、、、する二つの階級の指導者たちを拉し來つて、それらを二個の『英雄』として同一水準の上に置いて眺めるが如きことは、我々から見れば、せい〴〵一片の概念の遊戲としか受け取れない無意義の閑事業である。

レーニンに關しては、私は既に、彼がプロレタリアー的英雄として持つた豐かな人間味の一面に觸れておいたから、茲では重ねて何も言はないことにして、次にはたゞ、小市民的英雄論者たちによつて屢ゝ彼の相棒として引合ひに出されるムッソリーニの場合だけについて、短き一言を書きつけておかう。

私は既に、ブルジョアジーが曾て英雄的階級であつた時代には多くの階級的英雄を輩出せしめたが、そのブルジョアジーが次第に反動的傾向を取るやうになつてからは、その陣營内には漫畫化された英雄以上の何物もが見られなくなつたことを言つた。殊にブルジョアジーの支配が完全に頽廢期に入つてからは、猶ほ更らさうである。ムッソリーニの如き、背後の金融ブルジョアジーの絲に繰られてプロレタリアートの自主的階級運動を阻止する任務を遂行してゐる憐むべき奴隷的人物が新時代の英雄ならば、我々が屢ゝ街頭で遭遇する暴力團 矢張り金融ブルジョアジーに子飼ひにされて時々社會運動家に危害を加へるやうなことを職業にしてゐるところの――の如きは、少くとも新時代の英雄の卵ぐらゐには評價が出來るであらう。彼が金融資本の支配の確保のために、新形態の絕對主義政治の實現の途上に於て、强力の手段による徹底的彈壓を恣まゝにしてゐる點から見て、彼を『英雄』と呼ぶのは、『英雄』といふ言葉の意味を甚だしく歪めてゞなくては出來

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ない鑿當である。少くともそれは、一八四八年のカヴェニアック將軍を『六月、、の英雄』と呼ぶのと似寄りの意味に於てゞあらねばならぬ。もしくは更らにそれは、別の一例を取れば、マルクスがナポレオン一世の第二版——しかも誤植だらけの縮刷廉價版といふほどの心持で——だと冷やかしたルイ・ボナパルトを『一八五一年——例のクーデターはこの年の十二月に行はれた——の英雄』と呼ぶのと似寄りの意味に於てゞあらねばならぬ。さういふ意味でならば、我々のおなじみの田中義一大將の如きも、その、、、彈壓の功勞の故に、『一九二八——九年の日本の英雄』と呼ばれる日も、やがては來るであらう。

二

英雄的階級と階級的英雄に關する論究は、以上でまだ漸く序論に入つたばかりである。だが私は、今回はこの邊で一應擱筆せねばならぬ。その前にしかし、次の二三言だけは一應の結論として、是非とも附け加へておかねばならぬ。

プロレタリアートは現代の英雄的階級である。それが歴史を創る現實の力は、それの生活諸條件から來るものであるが、しかし當面緊切の一問題として今少し具體的にいへば、それは主體的にはそれの鬪爭力に關聯してゐるものであり、客觀的にはそれの鬪爭組織——主として組合および黨の——に關聯してゐるものである。無論、これらの主體的條件と客觀的條件とは、相互的に緊密に聯關を保つ。即ち、他に特別の故障なき限り、鬪爭力が增進すればするほど鬪爭組織は擴充し、その逆もまた眞である。しかも階級鬪爭の尖鋭化につれて、支配階級は益々執拗にその鬪爭力を減殺し、その鬪爭組織を破壞することに全力を傾倒するやうになる。かゝる狀態の下に於て、英雄的階級としてのプロレタリアートは、何よりも殊に、その鬪爭力と鬪爭組織との擁護のためにも、階級的英雄を益々痛烈に要求するやうになる。

今や、日本のプロレタリアートは、、、、、、の危機に直面して、資本家地主の政府の益々强化する彈壓と戰ひ、白色恐怖と戰ひ、更に自己の陣營內に動もすれば起り勝ちな日和見主義の傾向とも戰はねばならぬ。社會民主主義の策謀と戰はなければならないと同時に、更に自己の陣營內に動もすれば起り勝ちな日和見主義の傾向とも戰はねばならぬ。しかもかゝる危機的瞬間に於て、そのあらゆる鬪爭組織が、未曾有の程度に破壞されてゐるといふことも事實である。今こそそれは、苦難の絕頂にあるといふのも、決して過言ではない。もとより我々は斷じて失望する必要を持たないが、然しかゝる狀勢に應じて我々の從前の努力を倍加することを怠つてはならぬ。殊に我々はこの際、階級的英雄たるにふさはしく行動することが我々の陣營內の指導者たちにも大衆にも熱烈に要求されてゐることを忘れてはならぬ。そして我々が階級的英雄たるにふさはしく行動するといふことは、當面何よりも先づ、プロレタリアートの陣營の鬪爭力の增進と鬪爭組織の恢復および擴充のために全力的に蒐集することから始められなければならないのである。

——完——

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

英雄漫談

菊池　寛

日本に於ける昔からの幾多の英雄について私は、取止めのない感想を書いて見様と思ふ。

歴史小説を書くにしても、どうも戰國時代以前には、さかのぼりきれない。戰國時代以前の人物は、何となく實感が稀薄で輪廓がぼやけて了ふ様な氣がする。

まして、王朝時代乃至それ以前だと、歴史的な確實性がぼんやりして來る。

王朝以前の英雄は、おそらく藤原鎌足だらう。中大兄皇子を奉戴して大化の維新を、斷行した面目は此時代に於ける、唯一の英雄であると云ふ氣がする。

聖徳太子なども、佛教的文化の生んだ一大人格ではあるが、英雄と稱して好いかどうか。王朝時代の政治家の中では、菅原道眞などよりも、藤原道長等に英雄的な面影が散見される様に思ふ。

菅原道眞は、神にまつられてゐるのはどう云ふ譯なのか。其政治的功績などは、何處に優れてゐるか、その文教的な道徳についても、如何云ふものが有るのか。威徳大天神にしたことか、たゞ當時道眞を虐待しすぎた、藤原氏の迷信的恐怖からだとすると、一寸をかしいと思ふ。

此時代の武將の中では、源義家が傑出してゐる、義家は後世八幡太郎と云へば、軍神の如く尊崇されてゐるだけ、武將としては典型的な存在である。その威勇絶倫で「義家これにあり」と、叫ぶと逃げてゐる泥棒も足がすくんだと云ふ。然し後三年の役に、自分を罵しつた敵兵を捕へ、それを樹木につるして、其足下に其男の主君の首級を置きて、苦しめた如きは慘虐が過ぎて居て、良き大將らしくない。そこへゆくと、鎮西八郎爲朝は、生一本の武將で、古今の軍人のうち、彼、より以上の精兵はあるまいと思はれる。保元物語は此の人の武勇

あるが、然し、たとへ九州から馳上つた新進で其意見が採用されなかつたとは云へ、一戰にして、破られた所をみると、それ程大した英雄でなかつたのかも知れない。

平清盛は後世から、惡く云はれてゐるが、然しこれは滅亡した者の不幸で、其次の時代の權力者に據つて、行はれた惡宣傳が今でも傳つてゐる爲であつて、眞實は、相當の人物であつたと想ふ。

藤原氏の權力を平氏一門に引つけたのであるから、其の政治家的力量は想像せられる。

源賴朝は豐臣秀吉が、(天下の英雄は汝と我とのみ)と云つた樣に、英雄兒の樣に云はれてゐるが、然し果して其程の英雄であつたか如何か、どうも北條時政などに操つられてゐたのではないかと云ふ氣がする。

北條時政等の策謀を用ひて天下を取り、やがて又その策謀によつて、自家を亡ぼされたのでは無いだらふか。

其二弟に對する態度なども、正氣の沙汰とは思へない。結局北條時政父子、政子等に好い加減に操られてゐたのではないか。

賴朝が自分の父義朝を殺した、長田一族に對した處罰なども、少し無茶である。

彼は長田一族を、すぐには罰しないで、屋島壇の浦の戰爭に使ふ、彼等は自分等の大罪を免かれたい一心で忠戰を勵んで、そしてもう命は大丈夫だらうと思つて、鎌倉へ引揚げて來ると、捕へて慘虐な刑に處するのである。これはあまりに非人間的なやり方である。

源義經は、源爲朝の如く生一本の武將で、感じは好いが無論英雄をもつて稱すべき人ではない。英雄的素質があれば、奥州に落ちた後も、藤原一族を從へて、威武を奥羽の地に振ひ、鎌倉幕府の一敵國を爲し得たのではないかと思ふ。

鎌倉時代を考へると、武將の連中は大抵單純な、人間が多かつたので、少し智慧の發達してる人間が策略を弄すれば相當の事は出來た樣に思ふ。

畠山重忠などはひよとり越で馬を擔上げたと云ふ事が譃ではないと思はれる程の豪傑であるが、人間としては律義で單純で、北條氏などには、甘くあしらはれたのだらう。

武勇と云ふ點だけでは、木曾義仲が居るが、此人も攻城野戰の雄で、政治家的手腕にいたつては何等見るべきものがない樣だ。

王城の地に入つて優先權を取つてゐるのだから、最少し何とか方法があつたのだらう。から考へて來ると鎌倉時代の英雄は、結局日蓮上人でなかつたかと思ふ。

其教義から云つても、普教の仕方から云つても、英雄的な面目が躍勃として居る。他の如何なる祖師開祖と比べても、日蓮は偉いと思ふ。弘法大師たるにはたゞ頭がよければ、澤山であつたのであるが、日蓮は、マルチンルーテル等にも匹敵すべき英雄偶だと思ふ。

此人は俗人に生れても、あわよくば天下を取り得た人だと思ふ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

南北朝時代になつては、足利尊氏は英雄をもつて、許すべき人だ。楠正成、新田義貞などは、其政治家的素質に於て、到底尊氏の敵でなかつた。義貞は同じく天下を取つたと云つても、頼朝などよりも、實力をもつて天下を取つてゐると思ふ。九州落ちをしてから、其處で軍勢を催ふして攻め上つて來るやり方なども、政治家的大手腕がなければ、到底爲し得なかつた事だらう。

順逆を誤まつた爲に、其人物的評價もかなり損をしてゐるが、私は頼朝などよりは遙に偉い人だと思ふ。

戰國時代になつては、天下の英雄が雲の如く起つてゐる。然し秀吉、家康、信長の三人をのぞいて、天下を取り得る資格のあつた者は、私は毛利元就だと思ふ。

上杉謙信などは壯快な武將で、越後からわずか五六千の兵を率ゐて、長驅關八州までやつて來て、小田原城の堀端までおしよせ、城兵に鐵砲で狙ひ打ちされながら、悠閑無事の體で茶を一杯呑んだと云ふ豪傑であるが、瀟灑で短氣で策略がきらひだつたから、到底天下を取る樣な辛抱が出來なかつただらう。

それに比べると信玄は、人間が曲者であるだけ、まかり間違へば、中原に旗を進める事を出來たのであらうが、然し北に上杉をひかへ、西南に織田、德川、北條の諸豪を控へては、甲斐一國の實力ではどうとも出來なかつたらう。豐臣秀吉は、「謙信や信玄の樣なはかのゆかない戰のやり方では天下は取れない」等と、云つてゐるが然しそれは成功者の豪語であつて、秀吉だつて木下藤吉郎の當時に、上杉武田のどちらかと境を交へてゐたならば、一たまりもなく滅ぼされてゐたかもしれない。

毛利元就となると戰國時代の、英雄の中では、最も德川家康に似て居り、政治家的手腕と云ひ其重厚な性格と云ひ、ことに中國九州に於て、十餘ヶ國を切從へて居る實績から云つても、優に天下取りの候補者である。ことに息子の吉川元春、小早川隆景の所謂兩川は何れも、智勇兼備の良將で、吉川元春の如きは、但馬馬野山の對陣に、八千の軍勢で、秀吉の四萬の大軍を追返した程の名將であるし、弟の隆景はある人が中國の盜になる人物だと云ふと秀吉は、中國はおろか日本の盜になる人物だと訂正した程の人間だつたし、又その武勇は、碧蹄館外明の大軍を擊破した事で知られてゐるし、此二人の兄弟を左右兩翼に備へて中原へ進出したら、元就は天下を取つたかもしれない、が然しそれには元就は、早く死に過ぎた。死んだ時は七十五歲で、信長などよりも十四五年前に死んでゐるのだ。

信長は無論天下を取つたと云つても好い程の英雄である。然し桶狹間の戰捷なども、元就の嚴島の大捷に比べると非常に僥倖的である。元就が智謀をたくましくし數年間、計りに計つて、陶晴賢の大軍を嚴島に誘き寄せたのに比べると、桶狹間の戰は一六勝負の大當りであつて、元就の苦心の十分の一も拂つてゐないと思ふ。然し信長の其はげしい進出振りと、其徹底的な果斷とは日本人ばなれがしてゐる。然し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

出所進退の出鱈目さは、本能寺の最後に假いしてゐると思ふ。英雄は英雄として大をなすのには如何しても人間的でなければならない。長濱へ遠乗りした留守に、奥女中等が無斷で桑實寺へ摘草に行つたのを、怒つて慘殺し、命乞をした桑實寺の住職まで殺すなど云ふ事は、目茶苦茶で、これでは仕へて居る者が、不安になつて、光秀の如き謀反人をだすのは當然だ。

家康と秀吉とは、日本人中五指の中へ、入り得べき英雄である。秀吉は天性の大器であつて、戰爭なども個人としては、けつして強くなさ相であつて、しかもけつして負けてゐない所などは不思議である。生れながらにして戰爭や政治について、天授の妙諦を得て居たのだ。朝鮮征伐の如きも、彼が不世出の英雄の現れかもしれない。然し彼が天才的であるだけ、奔放な所があり過ぎ、二代にして絶えたが、然しこれは彼が適當な、繼嗣を得なかつた不運であつて、彼自身の責任ではないかもしれない、彼の正夫人が、(こう云ふことだつたら貧棒時代に宿つた子を下すのではなかつた)と嘆じてゐるが正夫人の腹に、二三人の男子があつたならば、豐家の社稷は二代にしては絶えなかつただらう。

かう云ふ點では家康の方が、餘程幸運である。繼嗣も、秀忠にしようか秀康にしようかと迷つた位、その外にも相當な息子が多く、其上秀吉よりもずつと長生してる。

家康は秀吉の如き天才でないにしても、努力大成した秀才で、それだけにソツのない大人格である。一生の間けつして無理をしてない、非道な殺人などもして居ない、秀吉も割合仁慈な大將で、非道な人殺しなど仕ないが、然し秀次の妻妾を屠殺した如きは(末頼母しき政道に非ず)と落書きがあつたごとく當時の識者の眉をひそめしめた。家康はそんな點で非難される様な、人殺しはして居ない。大阪城の寡婦孤兒を殺した事なども、政治的な必要事からやつた事で、止むを得なかつた事だと思ふ。家康は一生の間けつして無理をしないで、やたらに天下を取らふとはせず、實力を備へ時期を待ち、隱忍してゐた所なども偉いと思ふ。家康と秀吉との小牧山の戰ひに、何故秀吉は徹底的に家康を擊破しなかつたのであらふか、豐臣の天下が德川に歸す遠因はこゝに存してあると思ふ。秀吉のつもりでは徹底的に、家康をやつつけなくつとも、自分の力で制御することが出來ると、たかをくゝつてゐたのだらうが、然しそれは自分の力を過信したあやまりであると思ふ。

私は、秀吉がこのとき家康と和を講じたときの云ひ分には不服である。

關ヶ原の戰後、十五年間も大阪へ手をつけなかつたことなども家康がいかに、辛抱人であるかを物語つてゐると思ふ。

かう云ふ大頭格をのけると、やつぱり石田三成は傑出してゐる。わづか佐和山二十四萬石の大名で、天下の大諸侯の半を動して、關ヶ原の戰爭をしたのだから、その大手腕を認めずにはゐられないと思ふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

この外にも、この時代には蒲生氏郷、黒田如水、直江兼續その他英雄らしい人間が澤山ゐるが、ある程度の實績を擧げてゐない以上、英雄を以て論ずるわけには行かない。

德川歴代の將軍の中では、家光よりも吉宗の方がはるかに偉いと思ふ。家光などは、家康の三分の一も偉くないやうに思ふ。少し人間が、しつかりしてゐれば家光だけのことは出來たと思ふ。そこへ行くと、吉宗は苦勞人で、幕府の京都化を矯正し、中興の實を擧げたあたり政治家としても秀れてゐると思ふ。吉宗が表御座所から大奥へ行くとき、御錠口で彼の佩刀が小姓の手から侍女へ引きつがれるのであるが、あるときその小姓と侍女とが戀中になり、その佩刀を引きつぐとき、そつと手を握りあつてゐた。それを吉宗がはしなく見つけたので、兩人は色を失つたが、吉宗は「度々はするなよ」と、一言云つただけだつたと云ふが、これはあらゆる名君逸話中の白眉であると思つてゐる。

德川光圀なども名君であるが、どこか道學者的なところがある。親殺しを三年儒者に預けて、親殺しの大罪たるを悟らせてから刑したが如き、さう感じがよくない。それに比べると、家康が親殺しの訴へがあつたとき「親はなか〳〵殺しがたきものなり」と云つて調べさせると、果して過失殺傷だと云ふが、「親はなか〳〵殺しがたきものなり」と、喝破するところに、人心を知る大人物の面影があると思ふ。

德川光圀、德川頼宣、池田光政と比べると、頼宣が天成の大器であつたと云ふ氣がする。由井正雪の事件のとき、嫌疑をかけられ老中列座の席で

「さて〳〵、めでたき事だ。これが外様大名などに嫌疑がかゝつたなら、その人も辯解に苦しむだらうし、天下の人心も動揺するだらうが、將軍家と肉親の自分では、誰も本當にするものはないだらう。これで天下も落着いたと云ふものだ」と、云つてしづかに席を立つたので、老中達が後で舌をふるひ「あれなればこそ怖れられるのだ」と云つたと云ふが、相當の人物だと思はれる。

この四月の讀賣の名寶展のとき、上杉鷹山公が、嗣子に對する訓言の中に「國家人民のために立てたる君にして、君のために立てたる國家人民に非ず」と云ふのを讀んで、恐らくこの人など、封建の諸侯の中では、最も民主的な名君であつたゞらうと感心した。

政治家でない英雄の中では、劍客の中で、宮本武藏は兼て僕の推賞する人格である。その人の格が認められてゐる如く、劍ばかりでなく、人としても完成された人であると思ふ。恐らく古來日本人の中では、宮本武藏よりも強い人は澤山ゐたゞらう、がしかし宮本武藏と一騎打の勝負をやつたならば、誰も武藏には敵はなかつたゞらう。彼は、勝負の妙機を解したことに依つて、古今第一人者だと思ふ。一生の中、六十三回眞劍的仕合をして、一度も負けたことがないのである。その自分の行動を律するために作つた獨行道は（神佛を尊んで賴まず）を第一條として、十八ヶ條あるが、如何なる聖賢の戒律とも比敵すべき

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

名言が多いと思ふ。この人に比べると、腕だけの劍術など、タワイもなく負けたのは當然である。

話は、維新に飛んでしまふが、維新の人傑などは、明治時代の權力者及びそれに迎合する者の追從的傳記ばかりが多くつて、到底それをまともに信ずることが出來ない。維新の功業を讃美するあまり、祭り上げすぎてゐると思ふ。私は、西郷隆盛なども、どう考へても腑に落ちない所がある。僧月照と情死し損つた如き、いろ〳〵辯解するものがあるが、ハッキリした目的意識を採つた大人物のやることではないと思ふ。征韓論などもどうか。たゞこの人が「命も入らぬ金も入らぬ名も入らぬ人にして初めて大事をなすべし」と云つてゐるのは名言であり、かう云ふ人間が二三十人居れば、どんな大事業でも出來ると思ふ。維新のときには、かう云ふ人間が百人位はゐたのである。天誅組の連中、生野銀山の連中、寺田屋、池田屋で死んだ連中、安政の大獄でやられた人々、蛤門の變に、六角の牢屋で殺された人々の中にはかう云ふ人間が相當ゐたと思ふ。維新の功臣など云ふ連中は、運よく生き殘つたのであつて、生き殘つたことが、彼等が偉かつたといふ證據にはならないと思ふ。生き殘つてゐれば、誰でも相當な所に行けたので、維新の三傑などと云はれてゐても、あの前に死んでゐれば、大抵贈正四位で、收まつてゐたゞらうと思はれるのである。

私は、明治維新などには、志士烈士は多くても、それほどの英雄はゐなかつたやうな氣がする。あゝ云ふ時勢の大波にうまく乘ると、少し特色や才能のある人間は、頭角を現すことが出來たのではないかと思ふ。勝安房など云ふ人が、この時勢の大波をハッキリ見分けて、それを巧みに扱つたことで、薩長の連中よりは、もつと頭がよかつたと云ふ氣がするのである。

維新の事業でも、木戸、大久保、西郷がゐなければ、また別の三傑が出てあれだけの仕事、少くともあれと大差のない仕事は出來たと思はれるのである。時勢の大勢がその方へ向いてゐるのであるから、誰がやつても、その方向へ向けられるのである。

その人が居なければ、それだけのことは出來なかつたと思はれる人でないと、私は英雄とは云へないと思ふ。その人が居なかつたら、また別の人がその人と同じ位な事が出來たと思ふ場合は大英雄とは考へられないのである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

英雄は死んだ

山川均

□

地球の歷史には、恐龍や魚龍のやうな大きな爬虫類、動物界の古英雄で滿たされてゐた時代があつた。人間の歷史の地層の底にも、人間界の大爬虫類たる英雄の遺骨と化石で滿たされてゐる謂ゆる英雄時代があつた。

　地殼の上層に近づくにつれて、その中から發掘される動物の骨が、今日吾々の見てゐる普通平凡なものに段々と近づいて來るやうに、人間の歷史も現代に近づくにつれ、英雄の傳記から、普通平凡な吾々の如き人間の記錄に變つてゆく。英雄はだんだん珍らしいものになる。不出世の英雄を出だした時代から、もつと進むと、英雄は全く不世出なものになり、英雄は天下を支配する代りに、恐龍の骨と共に、博物館を支配する時代になる。

　尤もこの時代になつても、時たま、英雄然とした凡人の現はれることがある。また最も平凡な情勢や行き掛りに引きずられ、若くは追ひ立てられて、心にもない非凡な英雄的な行動に追ひ込まれる凡人がある。この凡人が、かういふ『英雄的な』行動を反覆してゐるうちに、自分自身の行動に陶醉し、一とかどの英雄をその幻想の中に描き出す。そして自ら英雄然と身構へるやうになる。かういふドン・キホーテの登場が、この乾からびた人生をどれだけ賑やかにし、屈托の多い世の中に、どれほど滑稽味を與へてゐることか分らない。しかしこれとても、現代が英雄の時代をさること甚だ遠いといふ事實を反映してゐるものに外ならぬ。

□

英雄は絶滅したか。恐龍や翼手龍が絶滅したやうに？　英雄は絶滅したといふよりも、寧ろ多くの優秀な、或は非凡な、凡人に分解したといふことができる。

　歐洲大戰の前後から、戰後十年の今日にいたる世界の形勢は、『非常』の二字に盡きてゐる。人間の歷史が、今まのあたり、非常の時期を通過しつゝあることは疑ひがない。唯た見る人々の立場と觀點とによつて、或る人々に取つては或る意味から他の人々に取つては他の意

味から。

この時期は、地球の歴史で云へば、中世代から新世代への推移の時期にも比較することが出來る。あの時期に、人間の原型たる原人が初めて地球の上に現はれたように、この時期において、新しい社會生活の原型、プロレタリア國家と名づけられる社會の一新變種が初めて歴史の上に現はれたといふだけのことによつても、この時期が『非常』の時期たることを想像することができる。

ところがこの人間歴史の『非常』な回轉は、英雄によつて行はれてゐるかと云へば、決してそうでない。五ヶ年間の前代未聞の大戰爭も、一人の英雄を生まなかつたし、戰爭以上の大戰爭とも云ふべき戰役の謂ゆる再建も、一人の英雄らしいものをも生まなかつた。そこには幾多の優秀な政治家、科學者、戰術家、思想家、專門技術者、投機者――あらゆる種類の非凡な凡人が右往左往する。けれども一人の英雄らしいものも姿を見せなかつた。

□

昔の社會または民族は、分量も小さかつた。その生活も單純だつた。その機構も簡單だつたし、その成員の利害も比較的に一樣であつた。かういふ社會の歴史的役割は、一人の英雄によつて代表せられるに適して居り、その生活と活動とは、英雄を集成するに適してゐた。社會が地域的にも擴大され、その機構と生活とが複雜となり。さらに社會との關係が、單なる武力的な征服や剩餘生産物の交易から、複雜な作用と反作用とに變はるにつれ、人間の社會はだん／＼と、英雄に適せぬ環境となつた。

近代的なブルジョア國民國家の出現は、人間社會のかような方向への飛躍的な變化であつた。社會は、前代未聞の大いさに擴大した。その機構と作用とは、あらゆるブルジョア社會科學とその最大の社會科學者の探求の前にも、その眞實の姿と眞實の法則とが永久の秘密のうちに殘されてゐたほどに、複雜なものとなつた。社會は初めて、明白に、直接に對立した階級に分裂した。そしてブルジョア階級自身の内部においてさへも、幾多の異つた利害が對立し交錯した。近代ブルジョア社會の成立によつて、最後の英雄は死んだ。そして英雄主義に代はる平民主義の時代、英雄政治に代はる民主政治の時代が到來した。この新しい社會では、人々は一人の（又は少數の）英雄によつて指導せられる代りに、無數の町人は、おの／＼その資本と企業とを指導する。この新しい社會は、その運命と歴史的使命の遂行とを、一人の英雄の手に委ねる代りに、これを利害を異にする個人とその集團との間の鬪爭に分解する。人には經濟上でも政治上でも、この利害の鬪爭に參加することにより、そして各々異つた利害を追求することによつて、その社會的な目標と方向とを追求する。かような生活と活動と憧憬とは、一人の英雄を集積する代りに、一つの黄金の塊り――一つの巨大な資本――に集積する。

云ふまでもなく、かような鬪爭を有効にするためには、或る程度に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おいて、これを統制しなければならぬ。そしてこれを統制する必要のある限りにおいては、ブルジョア社會にもまた統制者を必要とする。けれどもこの統制者は最早や英雄ではなくて、政黨と政治家となつた。

□

無産階級の解放には英雄が要るか？たしかに、無産階級運動も、時としては、過つて英雄に似たドン・キホーテを拵らへ上げることがある。けれども近代無産階級の鬪爭はドン・キホーテによつて指導せられるものではない。無産階級の鬪爭が統制を必要とする限りは、指導的な勢力と指導的な人物とは、この鬪爭が有効に遂行せられるための、必要欠くべからざる要件の一つに相違ない。たゞこの指導的人物は、マナと劍とを持つてイスラエルをカナンに導びくモーゼではなくて、階級戰における專門の職術家にほかならぬ。近代無産階級の資本の搾取からの解放運動がエヂプト王の搾取からのイスラエル民族の解放運動と違つてゐる最も主要な性質の一つは、モーゼを必要とすると否とにある。

英雄、特に最近の英雄

三宅雪嶺

英雄と云ひ、豪傑と云ひ、漢語であつて、支那の聯想を伴ふ所が多い。日本でも史記列傳によつて、傳へ語るに至る。支那では、歴代多少の變遷ありながら、ほゞ史記を繰り返した形になり、英雄も管仲とか漢の高祖とかを標準にしてゐる。支那でも一定の意義がなく、頗るゑらくしたり、左程ゑらくなくしたり、様々であつても、標準は管仲とか漢高とか云ふ所にある。

大體上、天下を一にすると云ふのが、人間の力の最も著しく現はれる所であつて、如何なる人も天下を一にするほど秀でたのがないと思はれる。我國では領土が狭いにしろ、之を統一さへせば功名心が滿たされる。如何に統一すべきかゞ、英雄の力を用ふべき所であつて、特殊の技能に於て勝るを要せず、將に將たることが何よりのことゝなる。兵を率ゐて百戰百勝するのが大いに稱すべきことではないとされる。

歐洲で史記に相當するのがプルターク列傳であつて、之が英雄の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を示し來つた。けれど、支那の如く領土が廣くなく、力あるものが新に征服を志すのであつて、尤も多く征服し得たのが、英雄の絶頂と認められる。得べくんば世界を征服しようと思ひ立つ。アレキサンドル王は、父の遠征するのを見、私の征服すべき餘地を殘されるやうにと願つた。ペルシヤを征服し、印度に入り、尙之を征服して東に及ぼうとしたけれども、部下が附き從ふを好まなかつたので止むを得ず思ひ止つた。人をして征服せしめるのでなく、屢〻自ら陣頭に立ち奮戰併鬪した。當時文武の才に於て、その以上に出るものがないとせられた。ローマのケーザル王は、之に比して最初より領土が廣いに拘はらず、なほ新に征服すべき地を求め、大きから大ぎと征服した。アレキサンドルほど陣頭に立たなくても、自ら指揮し、兵卒と起臥を共にした。歐洲で英雄と目せられるものは、自ら坐して人を遣はすのでなく、自身で進んで戰つてゐる。

支那の所謂英雄が歐洲で何と譯すべきかが明白を缺く。支那では特別の意義を備へ、よく天下を一にし、帝位に卽き、群臣を朝賀させるを以て志を遂し得たとする。之れが第一の英雄で、これに次いで力を伸ばしたものが、第二第三の位置に居る。第二の對象たるのは何程功を樹てえても、皇帝に及ばない。漢高が韓信に問ひ、我は何程兵を率ふるかと云ひ、信が十萬と答へた。兵は十萬でも將に將たるを得るとつけ足した。將に將たるを得ればよく、秦皇漢武が武を黷すと云はれても自ら兵を率ゐず、人を派遣するに止まる。三略にも主將の法は務めて英雄の心を攬ると云ひ、云はゞ人心を籠絡せば足るのであり、そこで英雄人を欺くとか英雄人を忌むとか云ふ語が行はれる。歐洲にもその傾向がないでなけれど、自ら坐して人を動かすのは、特に英雄と稱してゐない。英雄を何と譯すべきか、通常 Hero を以てするが、Hero も意義が明確でないとし、人にすぐれて勇氣を現はすのが多く、何にしても武勇の譽あるのを指す。之は、日本で俗に英勇と書くのに似てゐる。日本で英勇と書くのが間違ひよりしたものの、日本には支那の英雄よりも英勇を稱讚し來つた。源賴光とか源爲朝とか源義經とかを稱讚した。後に武田信玄、上杉謙信を稱讚して居る。歐洲で Great man と云ふのは、英雄をも含むけれど、大人物と譯し、必ずしも英雄に限らない。日本で英雄の語を用ひつつ、支那と意義を異にし、それでゐて歷史家は支那を標準にし、英雄の何たるかに就いて、一致を缺く所がある。支那の漢の高祖、又唐の太祖に比ぶれば、義經は小さい人物と思はれる。併し、軍事上に天才たるを失はず、實際の戰爭でその右に出るのがなからう。

人間の才能は何の方面にも伸びさへすればよく、決して軍事に限るべきでなけれど、從來の歷史は、戰爭の歷史とすべき所が多く、それだけ、軍事に長じたものが現はれる順序になる。軍事でも支那では、天下の統一を主にし、他國を征服するに重きを置かない。歐洲では、他國を征服し領土を擴大する所に力があらはれる。併し、歐洲でも、ローマ帝國建設後、統一を主にし、新に征服するよりも、自ら防禦

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

じ、支那と趣きを同じくするやうになつた。再び支那と異るやうになつたのは、列國分立し、互に相爭ふ所より來た。列國分立し、各々領土を擴大しようとし、アレキサンドル又はケーザルの理想を實現し得なくても、いくらか之に似た所があり、次いで世界に新領土を得るに努め、領土の獲得で競爭した。アレキサンドル又はケザールにならはふとして得ないので、領土を得ること、之よりも廣きに及ぶ。しかし、アレキサンドル等もどこまでも遠征したものの、どこに世界の限りがあるかを知らずに終り、後には世界の隅々を知り、或領土を得ると之を失ふと、何の結果になるかゞわかつてゐる。支那では天下の統一を主にし、歐洲では領土の擴大を主にしたが、此の二つの方針を合一したものが、東西の中間に現はれ、成吉思汗が古今を通じて最も廣大なる土地を占め、帖木兒が之に次いだ。併しかかることが畢竟何の利益あるとするか。何等かの利益あるとして之を再びするのが、殆んど不可能に屬し、ただロシア皇帝が成吉思汗の領土より起り、世界を統一しようと夢みるかに思はれた。列國分立し、互に領土の擴大を競ふのも、世界の隅々までわかり、漫然遠征するが如きを考へるものがない。併し、列國分立し、前のローマ帝國に比べて、小さくなつても、前に知られなかつた世界の各地を知り、著しく活動の舞臺を廣くした。一國として小さくても、國際的干係に於て頗る廣く、それだけ力を伸すことが出來る。

支那は日本と共に東半球の一半を占めるの形であつたが、歐洲はその一半より更に廣くし、西半球の全部を占め、尚ほ西より東に及び、歐洲が世界の大舞臺で、歐洲史が世界史の別名であるやうに思はれるに至つた。上古及び中世は東洋と西洋とが相對立し、近世に入つて、西洋が世界を代表するの形を呈するに到つた。近世に入つて、歐洲の形勢が一變し乍ら、尚ほ過去の連續として判斷を下すこと多く、ギリシヤラテンを學ぶと同じく、プルターク列傳に依つて人物を考へずに措けぬ。併し、時代が變つて、人も變らねばならぬ。英雄は自ら尋常に勝るの能力あると共に、他に勝るの勢に惠まれねばならぬ。種もよく培養もよくするの必要がある。種がよくて、培養が惡いのと、種がわるくて培養がよいのと、共に思はしい結果を見ない。プルターク列傳を標準として判斷するには、列傳に似た事情を要する。そして近世に入つて、伊藤公に似た事情が多いとはない。プルターク列傳と事情を異にした時代にはこれに似た人を見出しがたい。

英國の如く、立憲政治にならうとする國柄では、ギリシヤ、ローマに似た英雄の輩出すべき機會に乏しく、若し輩出するとせば、革命で秩序の紊れた際に於てする。そこで、英國に英雄と云ふのはクロムエルを主要の人物とする。一時傳統的の地理上の位置が消滅し、新に地理上定めるに際し、クロムエルが現はれた。國威の發揚よりせば、前にエリザベス女王があり、スペインの必勝艦隊を擊破したけれど、女王自ら戰つたのではない。クロムエルは自ら兵を練り、自ら之を率ゐ、自ら戰つて、新政府を建設した。英國のために最善と信ずると

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ろを行ふに努めたと云ふので、近世英雄の標本と認められる。他に依ろべきものなく、專ら彼のいいと信ずる所によつて動く。英雄は、功名心を滿たすがために活躍し、一將功成つて萬骨枯れると云ふに對し、一風劇を作つたと云へる。然しその後にそれほどの變動なく、延いて特に英雄と稱すべきものがなく、ピットなりウエリントンなり、大舞臺に活躍するけれども、世俗に評判するが如き英雄とすべきかに惑ふ。

之に比ぶれば、大陸諸國は比較的舊ローマの傳統多く、人物もギリシャ式、ローマ式と見るべきものがある。佛國にリセリユーが出た。マザランが出た。頗る性格を異にしながら、佛國を歐洲第一の國とするに與つて力があつた。ルイ十四世が久しく位に居り、歐洲の覇權を握ると見えたのは、ローマの君主よりも支那の君主に似てゐる。特殊の才能なく、人を籠絡するに長じ、或は英雄人を欺くと云ふを以て得たりとした。併し、十五世は破產に瀕し、朕の後に洪水と云ひ、果して洪水が來り、止まる所を知らない。若しミラボーが今少しく存命せば、何程か止めたらうと考へられるが、二年間糸の絕えない小細工を敢てして歿した。これ支那に於ても、眞に英雄とする所であらう。普通に英雄とする所の殆んど總べてを具へた。その歿した後、紛々擾々、血を以て浸され、次いで不世出の英才ナポレオン一世が出た。これほど才能に富んだものは、長い歷史にも珍らしい。それでもコルシカ島に生れ、偶々島が佛國に屬し、佛國の兵籍に入つて活躍したのであつて、若し島が佛國に屬しなかつたならば何となつただらうか。どこぞで力を現はすだらうか、ナポレオンの傳記は全くちがつたらう。

大陸にも英國的思想が擴がり、頻りに憲法を要求し、議會を設けたけれど、英國の如く効能が顯れず。ナポレオンの甥が三世となるや、帝政を復活した。一世もローマを模範とし、三世も之を模範とし、支那でも英雄と稱するに異議がない。三世は後に戰ひ敗れて捕虜となつたればこそ才能がないと思はれたれ、戰役前に歿したなら、一世に劣らぬと思はれたかも知れぬ。

佛國が帝政より共和に變じた時は、獨逸帝國が新に起り、ビスマルクが力を伸ばした時である。リセリユー以來の政治家であり、全身悉く英雄式に出來上つてゐる。獨逸の興隆する時代であつて、ビスマルクなくとも興隆したが、ビスマルクは興隆を象徵するの資格を備へた。容貌態度及び機略何れも英雄と思はれる。皇帝ウイルヘルム二世が之れを免職し、新に大宰相を任命して何の妨げがなかつた所よりせば、ビスマルクとて特に云ふを値しないやうであつて、後にカプリビがあり、ビユーローがあり、ベトマンホルリヒがあつて、それほどに認められないのは、ビスマルクが皇帝の名に於て自ら經營し、他が皇帝の旨を受け、その云ふがままにしたのに依る。ビスマルクは主動者であり、他は受動者である。ビスマルクは帝國の將來を憂慮した。在職しても特別の効果なかつたかも知れぬけれど、後繼者が皇帝の意のままにしたのが、帝國に災したと後になつて知られる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

十九世紀から二十世紀に跨る時、誰云ふとなく、世界の三男として獨逸のウイルヘルム二世、英國のチヤンバレン、米國のルーズベルトをあげることになつた。當時の人氣はそう云ふものであつた。獨逸の盛なる間は、佛國の何人も頭が上らない。ガンベツタが英雄の資を具へたけれど、短命で歿し、その後にそれほどの者がなく、一層有力なるものがあつても、世間で特別に認めない。大陸は獨逸の大陸であり、之に對して海を隔て、英帝國があり、米共和國がある。英にチヤンバレンが現はれたのは、南阿戰役を以てした。米にルーズベルトが大統領となつたのは、米が世界の大舞臺に乘り出さうとすることを表明した。ルーズベルトは英雄に重きを置き自ら英雄たらうとする所があつた。彼は英雄を論じ之を謳歌した。その好んで擧げるところは、ワシントンであつて、かかる人は他に類例ないとし、ただ性格を異にするけれど、クロムウエルが之に匹敵すると言つた。ワシントンに次いでリンカーン及びグラントを擧げ、尙ほ南軍の將リイ將軍を擧げ、更にストンウオル・ジヤクソンをほめ上げた。ストンウオル・ジヤクソンと言へば、日本で明治維新の際、唯一の鋼鐵艦として名が上り、後に東艦と命名した。大佐で味方の彈丸にて斃れたけれど、敵も味方も哀悼し、英國のゴルドン將軍と並び稱せられた。ルーズベルトは自ら兵を率ゐて大いに戰ひ度く、ただその機會に逢はず、後に世界大戰が勃發し、米が參加し、ルーズベルトが自ら出征しようと思つて意の如くならず、子をして出征せしめ、一人が戰死した。

世界大戰にて、歐洲の形勢が一變し、佛國が再び起り、獨逸帝國が仆れた。さきに、佛帝國か仆れる時、ユージエニー皇后が四十五歲にて英國に逃れ、幾何もなく夫ナポレオン三世が歿し、唯一の子なるルイ・ナポレオンが、アフリカに戰死し、味氣なき世を送つたが、九十五歲まで生き延び、具に佛軍の起り獨軍の仆れるのを見た。前に獨逸を助けた露國は革命起り、皇室一族皆慘殺された。露は後に佛の同盟國となつたけれど、何が幸となるか何が災となるか計り知られぬ。

大戰が起つて、ビスマルク以來の英雄が佛國に現はれた。即ちクレマンソーである。彼はビスマルクと同じく、喧嘩に秀で、決鬪に長じ、才能及び知識に於て勝る。内閣破壞者と見られたのは十分に驥足を伸ばす場所なかつたがためであつて、戰時中に首相となり、戰捷を全く博するを得た。一九一八年十一月十一日佛國上院で議決してゐる、「佛國軍隊及びフオツシユ元帥と共に市民ジヨージ・クレマンソーは、よくその國に盡した」と。

ビスマルクにモルトケがある如く、クレマンソーにフオツシユが伴つた。大戰中フオツシユが第一の軍功を樹て、ナポレオン以後にモルトケあり、その以後にフオツシユがありと云ふほどになつたが、モルトケが政治家でないと同じく、フオツシユも政治家でなく、それだけナポレオンの樣に英雄と見られない。フオツシユも自ら英雄と見られるを好まなかつた。軍事にも道德的精神を重んずることであつて、自身を人格高潔、普通の英雄と並べて云ふわけにゆかぬ。佛國は流石に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て陸軍を以て全歐洲に冠絶したほどのことがあり、一度び機會が開け、名將が續出した。ジョッフルが出で、ニベルが出で、ペタンが出で、ペタンが佛軍總司令官となり、フォッシュが聯合軍總司令官となり、物の見事に敵軍を驅逐した。併し、共和政治でもあり、軍人が政治の權を恣にせず、悪い意味の英雄となるを脫れた。必ずしも幸不幸がないではなく、シオッフルやニベルや場合によつて一層成功したらう。獨逸軍がではなベルギイの中立を破つて雪崩れ込むとの報告が來た時、ジョッフルが尙ほ備へなかつたのは、少なからぬ手落ながら、まさかそんなことがなからうといふ人の好い所もあつたらう。フォッシュは本年七十九歲で歿し、國葬となり、列國から弔慰したが、獨逸で果してフォッシュをモルトケ以後の名將とするか。

獨逸は戰敗國となり、悲慘なる最後に終つたにせよ、ヒンデンブルグと云ひ、マツケンゼンと云ひ、ルーテンドルフと云ひ、英雄の器を具へたとせねばならぬ。聯合軍は寄つてたかつて攻め立てるけれど、多くの場合に獨逸軍が攻勢を執り、戰局を支配した。ヒンデンブルグもマツケンゼンも七十に近くして、斷えず戰場に敵軍を脅し、尙敵軍が進擊に躊躇する所を攻め、金城湯池の觀あると稱せねばならぬ。ルーデンドルフは年も比較的若く、戰亂の發頭人と云はれる。近頃、妻を離別し、妻が著書を公にして、前の夫を譏るなど、東洋の豪傑と云ふべき所がある。獨逸は外交の失敗であつて軍事の失敗でなく、皇帝が今少しく處置の宜しきを得たならば、少くとも互角の勝負で終結したらう。オーストリーは曾て佛國と覇權を爭つたほどであつて、後に兵力漸次衰弱し、遂に獨逸の附屬の如くなつたが、伊太利に對して强味を占めた。伊太利は最初カドンナが總司令官となり、後にヂアズが之をつき、相應に戰捷を得たけれど、重なる舞臺は佛獨間であつて、佛獨の勝敗が直ちに他に影響し、若し佛が勝たなかつたならば、餘は何とも仕方なかつたらう。ヂアズも佛國に在つて今一層力を伸ばし得たかも知れぬが、伊の軍隊はしばしば戰つた割合に、ほめることが出來ぬ。ローマ軍として武名を轟した伊太利は、現に兵をもつて强くない。併し、特殊の人物の力を伸ばすのを認めずには置けぬ。詩人なるダヌンチオが騎兵となり、軍艦に乘込み、次で飛行機を以て縱橫に飛躍し、後にフユーメを占領したところ、明に、天才肌を示す。國家が愈〻混亂に陷り、破產に瀕し、社會黨が左傾し、共產黨が力を得ようとする時、ムツソリニが黑シャツ黨三十萬人を率ゐて、ローマに乘込み、獨自の政府を作つたこと、かくて禍亂より救はねば國家を如何にするといふ所、舊ローマ人の血の全く乾かないのを察するに足る。伊國にムツソリニの出たのは、露國にレニンが出たのと主義に於て正反對に出でつつ、國難の急に赴き、鐵拳を揮ふに於て相並行してゐる。

英雄たるの才あつても、之を伸ばすの場所を得ねば、現はれずに終る。ギリシヤには、首相ヴェニゼロスが、陸軍のダングリスト、海軍のコンドリオチスと三頭政治を形作り、何れも一廉の人物であり、大國に位を占めれば大いに現はれたらうが、ヴェニゼロスの他に殆んど

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

知られない。併し、ダンクリストは總司令官となつたのみならず、スナイドル・ダンクリスト銃を發明し、露國に行はれた。小國の悲しさ、世に知るものが甚だ少い。

英國は、模範的憲政國であり、國民の力を以て事を成すに定め、英雄の自由手腕を伸ばすに適しない。バルフオアにしても、ロイド・ジョージにしても、カアドンにしても、英雄と云へば英雄とならうが、何處となく英雄らしく覺えない。法治國には英雄が出ないと見て宜からう。陸軍でヘーグ元帥が大陸の名將に劣らぬ力を伸ばしたが、海軍國としてビーチが嶄然頭角をあらはしてゐる。ゼリコーが大艦隊司令長官として、ビーチも之に屬し、ジヤットランドで大いに戰つたが、之は決戰に到らなくて、毀譽褒貶區々である。戰爭に勝つたものの、ネルソンは單に勝つを望まず、敵艦隊を擊破せねば止まなかつた。ゼリコーは水雷を恐れ、大事を取り、進むべきに進まなかつた。尙ほ將來があり、危險を冐すべきでないとしたけれど、そのために敵の潜水艦に惱まされるを免れなかつた。その後敵の艦隊が出でず、英國は空しく大艦隊をもつて、警戒するに止つたが、ビーチはどこまでも敵を擊破するの態度をとり、最も望みを屬され、ネルソンの後にビーチがあると云ふことになつた。海軍で單に勝つを望まず、敵の全滅を期せねばならぬと云ふ意見の出た時、ネルソンと共に日本の東郷が引用された。東郷元帥ははじめ、屢々敵を見失つたけれど、對馬海峽で敵を全滅するを得た。海戰には敵の全滅を期せねばならぬと云ふ結論になつた。東郷元帥は日本のヒーローであり、グレート・マンであるが、英雄と云ふべきものであるかは疑はしい。支那で英雄とする所を標準とせば英雄と云ひ難からう。西郷隆盛は、どこから見ても英雄と云へるやうで、之も漢の高祖の如きを標準とせば、頗る趣きを異にすることになる。日本では、英雄としてもヒーローとしても豐臣秀吉を第一位に置く。これも勢に惠まれたものの、兎も角も高く水平線を出て居る。之に先んじて武田信玄、上杉謙信、毛利元就、織田信長があり、その後に、德川家康、前田利家、蒲生氏郷等がある。幕末から明治維新に及び、薩州の西郷隆盛と長州の高杉晉作とが、良い意義の英雄式を發揮した。薩の大久保、長の木戸も英雄と云へぬでなけれど、支那の英雄を標準とせば後藤象二郎がよい點を得るであらう。伊藤が天下の英雄眼中に在りと云つても、木戸に從ひ、大久保に從つた。從ふのみでなく、之に力を貸したにしても、その力を借りて重きをなした。他は尙更のことである。後藤は幕府を變革すると共に薩長をも抑へようとし、思ふやうに行かなかつたので、官を去つて商人となり、大儲けしようと企てゝ大損に逢ひ、そこで大同團結を唱へ、其向から政府を攻擊し、中途で遞信大臣となつた。一時臣大の官をかちゑて安んずるのではなく、事ある每に總理大臣とならうとした。薩長藩閥の盛なる時、自ら首相とならうとしたのは、大膽とせねばならぬ。六十歲で致して志を得なかつた。

支那を標準とせば、かかる人を措くべきことになるが、世界でヒー

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ローと云ひ偉人と云ふ所よりせば、西郷、高杉、東郷、乃木等を擧げることにならう。併し、ヒーローは武勇を重んずるやうで、偉人の別名とすることもあり、カーライルのヒーローは普通のヒーローと意義を異にして居り、エマーソンの代表的人物と云ふと同じになる。それならば、商工業に學術技藝に功を樹てたものを悉く列擧せねばならぬ。それもよけれど、今は前より英雄豪傑と稱するが如きに限つて置く。

既に擧げた所でも、どこまで時勢の力か、どこから個人の力か、之れを詮索すれば議論の餘地があり、或は一世に謳はれる人で案外に力なく、世間に知られなくて案外に力あるのがあらう。英雄は、わかつたやうでわからず、今はわからぬ中でわかつたと考へられる所のみを擧て置く。

「英雄」は過ぎゆく

辻潤

英雄と云ふと——すぐジユリアス・シイザアとか、ナポレオンとか、ビスマークとか、豐太閤とか、西郷南洲とか云ふやうな名前が頭に浮んでくる。これは年齢の關係で、少年時代から、學校の教科書や、物の本などから自然に詰めこまれた智識の結果に他ならない。

英雄とはどんな人物か?——と云ふことを論じることになると色々とむづかしくなることだと思ふが、普通に「英雄」と云ふ言葉から聯想される人物はどうしても一國を經綸する宰相とか、三軍を叱咤する將軍とか云ふキアテゴリイにあてはめて考へるのがこれまでの常識であるらしい。

近頃、鶴見と云ふ先生が「英雄待望論」と云ふ書物を著はされて評判ださうであるが、僕は未だ拜見してはゐないが、「待望論」と云ふのだから、現代日本にはまづ英雄は目下のところ拂底であると云ふのが先生の意見らしい、憂國の士が「未曾有の國難時代」にあたつて、英雄の出現を待望するのは如何にももつともなことだと肯かれる。しかし、いくら待望しても、池の鯉や金魚のやうに「出て來い、出て來い」と云つてもさうオイソレと出て來るものでもあるまい。しかし、出て來る時は別段催促しなくつても突如としてどこかの片隅から現れて來るかも知れないのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

實を云ふと、自分のやうな人間は少年の時分から、まだ一度も所謂「英雄」を翹望したことも憧憬したことも、ないのである。從つて、アレキサンダアや、ジンギスカンに感服したこともないのである。

しかし「英雄」――を廣義に解釋して非凡な人物と云ふ意味に取り扱へばさまざまな觀點から、さまざまな解釋が生じて來るし、勿論、時代や、國柄や、人種によつてその色彩を自づから異なつて來るわけである。新らしい常識から考へても大政治家や、軍人ばかりが「英雄」でもあるまい。今時、英雄と云ふとすぐ伊大利のムツソリニが例に擧げられるが、在來の日本的趣味から押しても、たしかにレーニンよりはムツソリニの方が英雄の型にはまつてゐるらしい。かりに印度のガンヂイを英雄の仲間に入れれば、ムツソリニこそは全然對蹠的な英雄だと云ふことになる。

かつて或る人の英雄論を讀んだら、英雄の資格として十三の特色を擧げてゐた――曰く、天樂、天職、識見、至誠、節義、度量、忍耐、氣膽、經綸、神機、權威、濃情、雅懷――さうして、この中の一つが缺けてゐても眞個の英雄たる資格がないのださうである。かう云ふ英雄理想論になると、中々その資格を具備してゐる英雄を探がすのに骨が折れるし、一々その尺度で、古今の英雄を計ることになると、落第する方が多いのではあるまいか、これに比べると、カアライルの英雄觀などは至極簡單で英雄の本質を「至誠」に歸して、「至誠」を貫徹した人物を英雄と見做してゐるらしい。豫言者のマホメットや、詩人のバアンズなどは彼の目には立派な英雄として映じたのである。

全體歷史上の英雄や、偉人など云ふ連中も餘程、割引きして考へなければならない。それ等の人物を傳へる歷史と云ふものが抑も甚だ怪し氣なものであるから、さう考へてくると現代の日本にも隨分と澤山の英雄がゐるのぢやないだらうか、つまり後世になると英雄の資格を備へる人物がゐるのぢやあるまいか？　伊藤博文、乃木將軍、東鄉元帥などもみんな立派な英雄ぢやないだらうか？

人生は猿芝居だ――などと無理に猿の芝居にしないでも、單に雜劇にしてみるとわれわれはすべて見物であると同時になにがしかの役をふりつけられてゐるのだ――英雄はつまり雜劇の上の立役者なので、大向からの大喝采を博すために登場する人物なのである。もつとも見物の方にも色々と贔屓があるのだから、必ずしも萬人の滿足を買ふことは出來ないわけである。それに人間は本來アキツポイものだから、役者の人氣にも從つて盛衰はまぬかれない。

なにごとによらず新らしいことの好きな所謂モダアン的觀點から云ふと「英雄」などと云ふ言葉のもそのからしてなんとなく古臭いかんじがすると云はれるにちがひない。現代のモダアン青年子女の理想の英雄はまさか伊藤博文や、乃木將軍でもあるまい。もつとも同じモダアン青年の中にも、文學青年もあれば、マルクスボーイもあれば、シネマフアンもあれば、スポーツ青年もゐるから、各自の立場から見た理想の偉人はそれぞれ異なつてくるわけである。いづれにしても、齊武

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

な政治家や、軍人はこれから次第に人氣がなくなるぢやないだらうか？つまり、政治家の代りに、勞働運動の指導者とか、軍人の代りに飛行家とか云ふ人達が人氣の對稱になるのであらう。

現代はまた一方に於て大衆の時代であると云はれてゐる。つまり大衆の輿論が時代を支配することになつて來た。かうなると、特別に「英雄」などと稱して自分ばかり大衆から毅然として優越したやうな顔をしてゐる人物はかへつて大衆から輕蔑されることになるのぢやあるまいか？　寧ろ大衆の心を心として大衆の意向を代表して、大衆の犠牲となるやうな人物こそ大衆の待望する理想的英雄であると云はれるのではあるまいか？

さて、自分のやうな人間は、たいていの人達を見てすぐに感心してしまふのである。なぜなら、たいていの人達は自分に出來ないやうな能力の所有者だからである。しかし、それだからと云つて、英雄が無數に現はれて來ても、自分は特別にそれ等の英雄に感服したり期待したりはしないであらう。

マルクス、レーニン、トルストイ、ムッソリーニ、クロポトキン、——いづれもみな偉大なる人物に相異ない。みなそれぞれ大きな影響を世の中に與へてゐることたしかである。しかし、それ等の偉人が現はれないでも、われわれの生活には大差がないかも知れない。單に生きてゆくと云ふ上から云へば、われわれは食料の生産に從事する人々なしには一日も生きてゆくことは不可能ではあるが、それ等の英雄偉人なしでも生きる上には一向差支ひないやうである。

革命家時逸仙などは在來の東洋風な英雄の型を破つた近代的英雄の風貌を備へてゐると思ふ。伊太利のマラテスタなどもまだ死んだと云ふ噂はきかないが、たしかに非凡な人物だと思はれる。

「英雄」と云ふ言葉の範疇にあてはめられないかも知れないが、エヂソンとかアインシュタインなど云ふ人達は單なる發明家とか、學者とか云ふよりもつとなにかしら偉大な人物だと云ふかんじがする。これ等の人達は自分などのまつたく窺ひ得ないやうな世界に棲んでゐるせいか、よけいエライやうな氣がする。僕の個人的な考へから云ふと、新時代の「英雄」と云ふのはかくの如き人達ではないかと思はれるのである。また自分のロマンチック趣味から云へば、エレンブルグの書いてゐる、フリオ・フレントは最も興味ある。理想的英雄である。

最後に自分は破愛惜く能はざる現代の世界的英雄として、チヤアリイ・チヤップリンをその玉座に安置し、世界に散在する無數のファンと共に改めて彼の前に叩頭しやう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

英雄の二要素

鶴見祐輔

一

英雄といふ文字の意味を、私は簡單に考へてゐる。

それは時代精神を確實に把握して、これを現實の社會に於て實行する人々だ。

ゆえにそれは、先づ明白なる時代の要求を理解することを必要とする。時代を離れて英雄はない。

しかしたゞ時代を理解するだけでは足りない。この理解を地上に引き下ろして現實に實行して見せることを必要とする。

ゆえに時代が英雄を作るのか、英雄が時代をつくるのかといふことは、一つの水掛論にすぎない。時代の姿と心とがある一人の生活のうちに、鮮明に表現せられてゐるときに、我々がこれを英雄と呼んできてゐるに過ぎない。

そうゆう意味に於て、英雄といふものは、永久に地上に姿を絶たないであらうと思ふ。

たとへば現代の英雄的事業である新聞界に於て、英雄らしい氣魄を示したノースクリフ卿のごときは、僅か十八歳のときから、ぴり〱と時代精神の電氣に搏たれて身震してゐた漢子だ。だから僅か二十三歳のときにはちいつぽけな『ご返事』といふ雑誌を出して、二年間に百萬圓の儲けを示してゐる。彼が殆んど破産しかけてゐた『イヴニング・ニュース』を買取つたのは、二十九歳のときであるが、忽ちにして、他の新聞をあつと言はす程の勢力を示し、遂にデーリー・メールを三十になつて出版するに至つては第一號が三十九萬七千二百十七枚といふ素破らしい發行部數を示してゐる。

それは彼が少年のときから貧乏して苦勞しぬいてゐるうちに、民衆を意識をはつきりと理解して、民衆の待ち望んでゐる新聞を知つてゐたから、彼は無から有を生ずる魔術師のごとく、型破りの新しい新聞を作つて、全世界の新聞といふ觀念を一變し、さうして終始一貫した目標を睨んで、英國の輿論を引き摺つてゐつたのだ。

若し彼が、ただ社會大衆の一時の出來心に媚びて、その日暮しで新

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聞を作つてゐたら、あのやうに成功するわけはない。彼の一生を見ると、彼は明瞭に一つの目標を睨みつゞけてゐる。さうして、その睨んだ目標は、矢張り英國の大衆を睨んでゐた目標であつたゝめに、彼は死ぬまで大衆に捨てられなかつたのだ。

それは彼が大衆の本當の要求と、一時的の氣まぐれの要求とを區別して、この永續的要求を把握して、これを新聞といふ形式で表現して見せたから、英國の大衆は約三十年間彼と一緒に歩んで來たのだ。

大衆は必ずしも常に自分自身の要求を知つてゐるとは言へない。ただ無意識に、暗中に手さぐりしてゐる。それを鋭き直觀を持つ人が、君等の要求するものはこれだ！と太い線で明瞭に描いて見せるのだ。

露國の戰爭末期の革命のときに、ケレンスキーは一時は大衆の波に乘りながら、本當の露西亞民衆の要求を見破らずして、ふり落されてしまつた。その次に來たレーニンは、はつきりと露西亞の大衆の要求を讀んだ。それは平和と土地といふことだつた。だから彼は戰爭をやめて農民を土地に歸へした。さうゆう棧道を往きながら彼は自分の本當の目標の方へ、漸次に大衆を引つ張つてゆかうとしてゐたに違ひない。

ノースクリフは、永い間のヴィクトリア朝の形式文化が漸く民衆に厭かれて、新しき生氣潑溂たる、現實にぴつたりくる生活が、一般大衆の要望となりつゝあることを直觀した。そこで彼は人間的興味を本旨とするニュース本位の新聞を作つた。だからあのやうに一般の玄人から罵倒せられお上品な人々から批難されたのだ。

しかし一般大衆は、それ等の人々を後に取り殘して、さつさとノースクリフと一緒に歩いてゐつた。

同じことを、米國でやつたのが、紐育ウォールドのピュリツァーだ。紐育ウォールドが、どんなに當時の米國の保守的傳統の反逆者として、指彈されたか。しかし、一般大衆は、ボストン・トランスクリプトを要求しないで、紐育ウォールドを要求してゐたのだ。

しかし、ノースクリフの場合には、舞臺が全盛期の英國であつたゞけに、ピュリッツアーよりはるかに、面白い芝居を打つてゐる。

彼は民衆の要望が胃の腑から、出發することをよく知つてゐた。英國傳統の理想主義と、胃の腑の要求と調和することを必要とすることを知つてゐた。故に彼は英國の商工業の繁榮と、庶民階級の生活の向上とを目標とするやうな政治に向つて、彼の新聞の方向を操つて居た。

彼は十九世紀末に於て、英國の民衆の要求にぴつたりゆくものは、グラドストーンでなくして、ジョーゼフ・チエームバーレーンであることを心讀した。それはチエームバーレーンが、英國の新興階級から起つて、庶民階級の生活改善のための徹底的社會政策を唱導し、その社會政策を實行する財源を、海外發展、即ち新しき帝國主義に求めたときに、ノースクリフは、それが彼の新聞の目標と軌を一にすること

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を感じたのだ。

英國の帝國主義の善惡は別として、兎に角、この要求が英國の民衆の頭の中に深く入つてゐることを、我々は英國人に會ふときに痛切に感じる。今日の英國勞働黨の人々と雖も形は違つてゐるが、英國人の繁榮といふことに反對して、選擧場裏で勝つことは出來ない。

素よりチエームバーレーンの時代は去つた。ノースクリフの時代も去つた。しかし此等の人々は、生きて働いてゐた間は、しつかりと時代精神を把握してゐた。彼等が今日の英國に居たなら、また別の角度から、英國大衆の要求を觀破して、これを表現しておつたであらう。

二

豐太閤といふ人の一生を見ても、彼が當時の民衆の要求を心讀してゐた眼光には驚かされる。彼はある意味に於て、日本民族の民衆的要求を永久に表現する一つのシムボルかも知れない。

西郷南洲といふ人も、一見茫漠としてゐるやうで、實によく時代精神を表現してゐたと思ふ。ゆえに彼は永久に民衆の記憶から消えてゆかない。

エマーソンは、英雄といふものは、民衆の卑しい慾望を表現するがゆえに、民望渇仰の對象となるのだ、と言つた。しかし、卑しいとか、卑しくないとかの標準は、一たい誰が定めるのである。胃の腑を持つた人間の胃の腑の要求を全然卑しいといふことは出來ない。

それは或る目標よりも、目標に到達する態度が問題なのだ。人間の地上の生活にはある目標とか、思想とか、事業といふ外部にあるものよりも、この目標、思想、事業に到達する道行が大切なのだ。目に見へる結果よりも、偉大なる結果を生む高貴なる精神が大切なのだ。

我々の目標が結果でなくして、結果を生むごとき精神である場合に我々の人生に對する態度が全然變つてくる。作法といふものが大切になつてくる。

英雄の英雄たるは、事業を成し遂げたりや否やで、決するのではない。どうゆう態度で、その事業完成に努力したりしやで定まる。そこに本當の男らしい男と、男らしからざる男との差別がある。

男らしからざるものは如何に大きい事業を形式的に成し遂げても、公平なる後世は、これを英雄と見ない。

英雄といふものは、勝つても負けても、堂々としてゐる人間のことだ。

南洲は戰爭に敗けて城山で死んだ。しかし、彼は堂々と死んだ。奈破崙は、ウオーターローでウエリントンに敗けた。しかし彼は如何にも堂々と敗けた。

ロバート・リーは三年間少數の南軍を率ゐて、北軍を惱ましぬいた。さうして、刀折れ矢盡きると堂々と降つた。

これ等の人々は、形式の上、結果の點から論ずればみな敗軍の將である。であるにもかゝはらず、彼等は年と共に、偉大なる姿として偉

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

びてゆくのは、何故であるか。それは彼等には、一生を通じて、如何にも男らしい堂々たるところがあつたからだ。だから我々は、此等の人々を呼んで英雄といふのだ。

三

於玆、私の英雄に關する結論が、客觀的なる外部的成果の外に主觀的なる内心的態度に存することが明になつたと思ふ。

時代大衆の要求を洞見して、これを實現するといふ點より見れば、英雄の形式は、必しも政治家軍人學者宗教家と限らない。今日の世界に於ては、技術家、發明家、新聞人、俳優のごときも、一大英雄たるべき機會を充分に持つてゐる。この意味に於て從來の限局せられたる英雄觀を私は抱いてゐない。

乍併、これ等の實際社會に於ける事業者、思想界に於ける指導者等が一般大衆に――ことに後世の大衆に――英雄といふ印象を刻み込むためには、單純なる成果のみでは足りない。

英雄は常に一つの氣品を必要とする。

この英雄的氣品は色々の文字で呼びなされた。或は忠誠とか、守操とか、社會奉仕とかいふ道德的文字や、人格とか、人道的とか、無私とかいふやうな、抽象的概念をもつて表現せられた。

しかし、道德といふ觀念は、時代と民族とで色々に變化がある。ゆえにある釘付けにしたる道德觀念のもの指しのみを當て、英雄と否とを決するとなると、足利尊氏や、奈破侖や、クロムウェルなとは、是否黑白の論が全然異つてしまふ。しかるにも關らず一般大衆は、此等の三人物を、全然英雄ならずとする道學者や歷史家の說を無視して、ある爽快な觀念をもつて、此等の人物を眺めてゐる。

それは英雄の心的要素が、ある民族がある時代に於て容認したる形式的道德觀念の上に超然たる存在を爲すからだ。ゆゑに我々が、英雄の文字の內容を、精神的に求めるときには、かゝる一時代の形式道德觀念以上にこれを尋ねなければならないのだ。

それは要するに、結果を生みたる精神の問題である。古代希臘の地中より發掘せらるゝ石片木塊が、今日も藝術的逸品として天下に讃嘆せらるゝに反し、羅馬の附近より發掘せらるゝ同樣の石片が、何等の生命をも有しないところに、我々は明瞭な證據を發見する。

古代希臘人の偉大は、彼等が結果を貴ばずして、結果を生むごとき精神を重んじた點にある。彼等は美しき彫刻を作らんとして努力したのでなくして、美しきものを美しと眺め得るごとき高貴なる精神を作らんために、彫刻の道に精進したのである。偉大なる戲曲を作ることを名譽とせずして、かゝる戲曲を生むごとき精神的境地に到達することを尙んだのである。ゆえに、往年の希臘人の手澤の存するものは悉く不朽の逸品たるべき生命が刻み込まれてゐるのだ。

反之、羅馬人の目的は、現世に於て事功を樹てんとするにあつた。ゆえに彼等は現實に眼に見ゆる結果を目標として、彫刻し、描寫し、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

詩賦し、政治した。ゆえにあれ程の大帝國を築きつゝも、遂に蕞爾たる亞典の殘したるごとき足跡を、世界文化史上に殘してゐないのだ。

英雄の氣品は、このところに存する。

彼等は事功の世界に奮鬪努力しつゝも、その胸臆には綽然として地上一切のものを忘るゝの雅懐があつた。英雄回首卽神仙の境地がこれである。それは、現實にこの地上で成功しやうとも失敗しやうとも、光風霽月何等介意するところなき心境である。それは、有意識たると無意識たるとに關せず此等の巨人たちは、結果自身よりも、結果を生むごとき精神を養ふことを重んじたからだ。それが、此等の漢子の行藏のうちから、薄絹につゝまれた珠玉の光のやうに、微光して見るものの心中に無限の詩興を喚るのだ。

それが英雄の氣品である。

かゝる心的境地に味到すると、彼は成敗を眼中に置かざるがゆえに、一切の行動が堂々としてくる。太陽のごとく公明正大な態度になつてくる。これを見るものゝ胸臆にある抑へ難き憧憬の情を喚つてくる。

如何なる時代に於ても、人間が美を慕ひ、詩を愛するの情を失はざるかぎり、我々は人間の世界に於ても、強く正しき外に、かゝる一抹の詩趣詩情を求める。その一時的成敗の跡に至つては、千年の後に於ては、殆んど吾人の眼中に殘らない。たゞその人の氣韻のみが殘る。

ゆえに史上の英雄は、必しも現世的の成功者のみでなかつた。必しもその時代の道徳觀念の表現者のみではなかつた。彼等は一方に民衆要求の具現者たり、他方に成敗以上に卓立する詩的氣品の所有者であつたのだ。

かゝる見地に於て、私は九郎判官義經と木村重成と、西鄕南洲と、楠正行と、ロバート・リー將軍と、岳飛と、ハンニバルと、吉田松陰と熊澤蕃山とのうちに、多量の英雄味を看取する。

人間社會の評論は、一時的には非常に不公平であり得る。乍併永い千年の歷史から見れば、人類大衆は公平な正直な審判をするものだ。シラーの言つたやうに、

「世界歷史は、世界の法廷」

である。

その世界の法廷に立つて、千年二千年の後に、眞價の出る人々が、それが英雄なのだ。さうして、之の大切なる要素は、現世の事業といふ外に、かゝる事業を作り出でたるその人々の精神なのだ。

さうゆう英雄を、今日の日本は要求してゐるのだ。(四、七、一〇)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新『英雄』製造法

前田河廣一郎

『英雄主義』——この單純な言葉の底にも、人類の史的發展過程が、潮のやうに流れてゐる。

興味ある著書『史的唯物觀』に於て、ブハーリンはこんな文學的表現を用ゐてゐる。『レニン、ロイド・ジョージ、クルップ、これらの人達は中世紀の存在ではない。又一方では我々は、モスクワの赤い廣場に、貴婦人の微笑みに惠まれようとして、死を賦して格鬪する騎士道の中古的鬪技をも見ることは出來ない。』(第六章、)

英雄は變る。英雄主義といふ思想も變革する。同じ型の英雄が、どんな時代にも、どんな社會にも必ず週期的に循環出現するものだと信ずる方法は、それ自身に立腐れのしてゐる古るいブルジョア教化の延長にして過ぎない。菊水の紋所を打つた紫の幕をめぐらしたりして、近代プロレタリアートの政治運動に對抗する暴力もあると聞くが、英雄主義もこれまで文字通りに封建的であれば、歷史を逆行する無智にはむしろ憫みを感ぜざるを得ない。私達が『講談倶樂部』式の雜誌の購讀者の多いことを、單的に笑殺してしまふことの出來ないのも、同じ恐るべき理由からである。大部分の日本の無産大衆にとつて、又、それよりも遙かに讀者率の多い小ブルジョア層にとつて、加藤清正再生說が何の疑問もなしに受け入れられ、日本に於けるファッショ團結が無條件で信じ得られるといふことは、日本の文化的發達の上には致命的な支障でなければならない。しかも、民衆の無智に乘じて、己が爲にする教育家、政治家が、國粹主義の名によつてますますこの加藤清正再生說を助長して私權の增長を計るにいたつては、末代まで憎んでもなほ足らないことである。

同じことが、プロレタリアートの陣營に於ても、屢々過誤的に繰返される。日本語『英雄主義』に殘存する封建主義的要素を清算することなしに、近代社會主義運動の科學的戰術に基いた行動に、私達は往々にして『英雄主義』といふ言葉のまぎれ込むのを知るのである。恐らくこれなどはちよつとした不注意からであらうが、上野書店發刊『廣東から上海へ』(アヂアチカス著、別夫雨夫譯)第一部第五頁、原著者の序文の個所に、こんな譯文があつた。(傍點前田河)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『……就中プロレタリア的及び農民大衆の最大の英雄主義の下に、彼等の最も、英雄的な犧牲の下に、プロレタリアートの事實上のヘゲモニーの來るべき段階へと發展したのである。』

私はアヂアチカスの原文を讀んでゐないので、誤譯指摘といふやうなことは出來ないが、推察するところ譯者は『ヒロイズム』及び『ヒロイツク』といふ言葉を、西郷隆盛的風格を備へる『英雄』といふ言葉に寫し取つたものであらう。カーライルの『Heros, and Hero-worship』の邦譯以來、『ヒーロー』を『英雄』とだけ譯す習慣が第三インターナショナルによつて內助を與へられた廣東革命政府の運動にまで適用されようとはすこし時代錯誤も甚しい。だが、これはこの譯者だけの獨占する罪過ではない。屢々の場合、私達の談話の間にも、『プロレタリア英雄主義』を說く人の存在を認める。むきになつて議論したことも再三ではない。

かういふ人に對して、私達は、ソウエート・ロシアの歴史家ポクローフスキーが、レニン崇拜熱の高潮に達してゐた同志達に、英雄といふものの社會的役割を說明した鐵のやうな、言葉を引用したい。

『われわれマルキストは、個性が歴史を創造すると考へてはゐない。われわれにとつては、個性は單に歴史そのものが働くために使ふ道具にしか過ぎないのだ。この道具を、或ひは人技的に、今日ちようどわれわれが電氣機械を製造するやうに、拵へ出すことの出來る時代が來るかも知れない。だが、われわれはまだそこまで進歩してはゐない。で、現在のところ、歴史がそれらを通じて具現される道具、すなはち社會過程を要約する人達は、いまだに全くエレメンタルな方法で、人間として產まれ、生まれてゐるのである。』

勇氣、訓練、智識、活動力、智慧、犧牲的精神——さういふものを、近代社會では必らずしも『英雄主義』といふ惡くどい言葉では呼ばない。『英雄主義』などといふ古るい言葉は、奴隷制度の上に立つてゐて、他民族、他集團と血腥臭い鬪爭だけをしてゐたホーマーの時代だけで澤山である。その時代の貴族主義の下にこそ、英雄は英雄であり、英雄主義は極惡なる彩光を放つ。

昨年一杯、私は自己清算の意味から、歴史物に讀み耽つて、出來るかぎりの史的人物を取扱つた、戯曲を發表した當時、アナーキスト系の新居格君が、新聞で、史的人物の取材化についてアナーキズムの立場から抗議を試みたことがあつた。それを機に私も辯明して置いたのであつたが——私の立場は、頭から『英雄』の存在を否定し去ることではなくて、それぞれの社會の史的過程に於て、その社會環境が『英雄の名乘り上げを要求するのであるが、昨日の英雄は必らずしも今日の英雄ではない、しかも、本質上、英雄といふものは彼れを盛り立てる下部構造の色合によつてどんなにも變化するものだ、といふ點にあつた。

一人の『英雄』將軍が十の勳章を下げてゐる。その勳章の一つ一つには、五百人の兵卒の犧牲になつた戰爭があつたと假定すれば、つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り五萬人の青年達の個性が、誰れの『英雄』であることを世界に知らせるために地下に埋沒されたわけである。それらの五萬人の社會生活を考へ、それら十回の戰爭の社會的意義を考へると、私達にはわりに、英雄といふ最大級的存在が下らないものであるのを知ることも出來ようし、又、『英雄』生成の偶然性をも知り得よう

遠くアレキサンダーからシーザーの例を引くまでもない。『現代のナポレオン』と先づ彼自身によつて呼ばれ、次に彼れの御用新聞によつて呼ばれ更らに、ヴエニスの船漕ぎによつて歌はれるベニト・ムツソリーニを拉して來ても、ブルジョア教化の下に甘んじてゐる階級的に無自覺な大衆の非凡化、神秘化、宗教化、詩化する『英雄』なるものが、どんな正體を曝露するかがわかる。

ムツソリーニをして『英雄』たらしめた原因はどこにあつたらか？

フアシスト出現當時のイタリーは、戰後疲憊と動搖する政局のために、國民のモーラルは極度に低下してゐた。ことに農民の貧乏は甚しかつた。この難局を救濟し得るものはひとりプロレタリアートの努力と、その政治的ヘゲモニーの把握のみにあつた。あの一九一九年の工場占領などによつて知られてゐるやうに、イタリーのプロレタリアートは現實的にさういふ努力は持つて居つたのである。しかるに、指導者側のマキシマリストやサンヂカリストの一團には、政治行動に對する恐怖から大衆に適宜の鬪爭目標を與へることが出來なかつたのである。情勢は『、、、、、をソウエートへ！』の標語の出現を待つてゐた。プロレタリアートの指導者達の優柔不斷から、そこには同じやうなゼネラル・ストライキや工場管理丈けが繰返へされてゐた。その結果、ブルジョアジーとプロレタリアートの勢力はいつまでも伯仲の間にあつて、容易に雌雄を決し難かつた。内閣は瓦解に瓦解を重ね、國家の生産力は衰へはて、失業者の大群が都市に田園に工場地帶に氾濫し、戰爭の報酬である土地分割が講和會議の結果イタリーには惠まれて來ないといふ絶望と共に、急進的なボルデイガ一派のコムミュニストは焦燥的な革命に數度の失敗を繰返へし、右翼との聯結を斷たれてしまつた。かういふ形勢下に、祖國運動といふ『一つの約束』を思ひついたのはムツソリーニである。彼はもともとサンヂカリストの一指導者であつたが、自分の野心からロシアと提携してイタリーに革命を起さうとしたところが、その不純な動機が見あらはされ、殆んど自暴自棄的に民心籠攬術としての暴力團をつくり、忽ちにして最初に掲げたフアシスト綱領の革命的保護色を剝ぎ去り、窮迫した無政府狀態にをかれた群衆の最も陋劣な本能に訴へて、遂に黒色暴力團を組織し、陰謀、誘拐、撲殺、襲撃、欺瞞のすべてを盡して飽くことのない彼の野望を逞しうしたのである。そして、この不逞な暴徒の集團があらゆる野次馬を吸引して、軍閥と結び、飛び上り者のダヌンツイオの如きと提携し、見る間に集團的勢力を形成した。

此のムツソリーニが、果して『英雄』であるかどうかは、當時のイターリの社會的政治狀勢、殊にブルジョアジーとプロレタリアート

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

との死鎖（デッドロック）が小ブルジョア政黨たるファシスト團をしてヘゲモニーを握らせたといふ事實からだけ證明されるものである。山賊の窟に於ては、賊の頭領は『英雄』である。同じ頭領が都會へ出れば一箇無頼の徒にしか過ぎない。ファシズムの政治に於てファシストの集團に於てファスト化したイタリーに於てのみムッソリーニは『英雄』たり得るのである。そこに所謂『英雄に附着する何等の神秘性も、宗教性も超人性もないのである。現代に於ける、最も神秘的最も個人主義的な英雄主義の信奉者は、小ブルジョア階級である。此の小ブルジョア階級の英雄崇拜熱を心理的に描寫した小説に、ドストイエフスキーの『罪と罰』がある。此の小説の主人公たる大學生ラスコリニコフは、自己の個性が果してナポレオンの偉大な個性に匹敵し得るや否を試すために或る金貸の老婆を殺し、その結果自分自身の運命をも又破壊する。彼によれば、普通人は凡て『虱』であり、從つて捻りされてよいものであり、選ばれた個性のみが生存の權利を持つ。普通ニイチエ主義と呼ばれるこの神秘的、冥想的、個人主義的英雄主義は果して何から發生したものであらうか？　ニイチエの超人の思想なるものが貴族主義の現はれであることは誰でも知つてゐる。しかしこの思想を受け容れるのは、現代に於ては獨り小ブルジョアのみである。ブルジョアジーは自由競爭、私有財産權等の使徒としては個人主義者であつても、決して『哲學的な個性』などゝいふ非現實的なものゝ信奉者ではない。それ自身の階級的基礎と紐帶とを持たず、しかも宿命的に沒落し行くより道のない小ブルジョアのみが冥想的な個性の信奉者たり得る。我々が非常に急迫した經濟的狀態の下に置かれ、しかも右を見ても左を見ても眞實の友を發見することが出來ず、信頼し得るものは只一つ自分自身の能力のみと考へるとき、我々の中には如何なる心理狀態が發生するであらうか？　偉大なる個性への翹望！　選ばれたる個人の思想！　ゴルキーの初期の小説の中の多くのルンペン・プロレタリアートの心理狀態も小ブルジョアのこの思想的傾向と同種類に屬する。彼等は『強大な個性』を誇ることによつてのみ、僅かに自殺することを思ひ止まつてゐる人間達である。

この古い『英雄主義』思想の反動性、神秘主義、宗教的要素、個人主義から本來のヒロイズムの持つ優秀な要素を科學的に抽出し得る者はひとり近代の階級思想に眼醒めたプロレタリアートがあるだけである。彼等は此の新しい英雄を訓練された指導者であるところの、、、の如き人物に發見する。彼等はヤロスラウスキーのマルクス・エンゲルス傳』を讀み、また『レニン傳』を讀み、どうして偉大なる個性の活動もその勢力も、その社會に於ける役割も、明晰な判斷力も、常にそれ等の個人の置かれた社會的、政治的、經濟的情勢に於てのみ、その密接な連鎖に於てのみ、偉大さを承認する。やがては、ポクロースキー教授の豫言したやうに、モスクワのスヴェルドロフ大學やレニングラードでのジノヴエフ大學に於ては、『新英雄製造法』ともいふべき最良の指導者の製造に取りかゝる時代が來ないとも限るまい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

プレブス教科書編纂委員會の合議によつて著はされた『心理學の綸部』によれば、階級鬪爭に於ける勞働者の指導者に缺くべからざる要素として次のやうな諸條件が分析されてゐる。――第一には、指導能力の先天的な所有であり、二には經濟的環境の性質に關する知識、第三、肉體的並に精神的の人間といふ生活體の性質、及びこれが環境に反應する方法に關する知識、第四には、環境の歴史並びにそれと人間の相互關係の歴史を知ること、最後に歴史の啓示せる進化的傾向及び人間がその聰明なる行爲によつて唯物史觀が、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、且つ、之を自らの目的のために最も有効たらんが如くに運用する方向の指示に關する知識。世界の階級鬪爭史上に於ける尖鋭な分子はかういふプロレタリアートの持つ科學によつて、刻々新しい時代の『英雄製造法』を研究しつゝあるのである。之に對して、ブルジョアジーは、依然として加藤清正再生說を繰り返し革命支那に豐臣秀吉の再起を促がすことによつて、日本人の最も、、なる武斷思想を鼓吹し、非科學的な反動性を助長することにのみ努めてゐる。私は日本にプロレタリアートの新しい『英雄』が現れたとは云はない。しかし、階級意識によつて洗禮され、その鬪爭によつて尖銳化され、新しい辯證法的科學によつて武裝された無產階級の勇敢な鬪士が現れることは、白色恐怖の現在の支配階級の政策下に於ては、むしろ、當然なことであらうと思ふ。若し、人間が死を怖れないで、、、、の前線に起つことが偉大なるヒロイズムであるとすれば、私は支那に於ても、日本に於てもかなりの人達を見てゐる。生命の持つダイナミズムを極度までに發揮して、血みどろになつて鬪爭してゐた人間が一發の銃彈と共に、咄嗟に、一塊の石になつて了ふことが新しいヒロイズムであれば、私達は、それを五・三十事件に、廣東沙面事件に、濟南事件に、一昨年の廣東クー・デ・ターに屢ゝ之を見受けてゐる。これ等の新しい英雄は、名も名乘らず、妻子も顧みず、他人に自分の、、さを知らせずに、英雄的死を遂げるのである。この『新英雄』を造り出すものは、實に、偉大なる、、、、、、の大工場と、そこに、、されつゝある、、、の世界の、、、、、、、、、、、、、、、、、、、。そして、これ等の新英雄は、單純なブランキストでも、テロリストでもないのである!

(了)

改造社近刊書豫告

惡漢と風景　前田河廣一郎著

饒舌錄　谷崎潤一郎著

市町村法律必携　奈良正路著

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

唯物史觀と共産主義的歸結



小泉信三

今更の如くいふ迄もないが、エンゲルスに出れば、唯物史觀と餘剩價値論とが社會主義を科學たらしめたマルクスの二大發見であるといふ。併し乍ら、唯物史觀と餘剩價値論とでは、そのマルクシズムに取つての意義に於て遙に輕重がある。前者は重く、後者は輕い。

固より餘剩價値論なるものは、マルクス得意の一理論であつて、其大成の爲めに彼れは餘程の苦心を費したには相違ないが、併しこれは彼れに獨特の理論と見るべきものではない。餘剩價値論は、畢竟勞働賃銀以外の所得は皆な支拂はれざる勞働を以て成るといふことを教へるものである。然るに、元來社會主義者といふ社會主義者は、皆なこれ搾取の撤廢を志とするものであるが、抑も强奪に依らず、任意交易の方法に依て搾取が行はれるといふ事實を證明する爲めには、必ず何等かの價値理論に據らなければならぬ。即ち價値理論に基づいて、勞働者は其勞働に依て提供し、若しくは造り出した丈けの價値を、其報酬として受けては居らぬといふことを明にしなければならないのである。極めて自然の次第として、それをするのに社會主義者は大概働價値説に據つた。然るに、その勞働價値説は、通常解せらる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

由ればリカアドオに依て大成せられたものである。此に於て彼れと略ぼ同時代の英國は、彼れの價値論に基づいて勞働搾取論を立て、又社會主義的改造案を主張する一團の著作家を出した。所謂「リカアドオ派社會主義者」がそれである。併し乍ら、リカアドオの價値論に餘剩價値論の出發點を求めることは、決して此一派の人々に限つたものではない。否な、近世の重なる社會主義諸系は、經濟理論上に於てはみなリカアドオに出發してゐるといつても差支ない位である。ロオドベルトスが然り、プルドンが然り、而してマルクスも亦た然るものである。故にマルクスの餘剩價値論と他の諸家の其との間に如何に精粗の差異はあるにもせよ、是を以て彼れの新發見とすることは當を得たものではない。

更に新發見なるか否かを措いて、そのマルクスの共產主義に對する關係如何といふことになると、二者の輕重は更に甚しきものがある。マルクスの餘剩價値論が教へる所に由れば、資本家の利子利潤、地主の地代は、勞働者の產出した價値の搾取に成るものである。併し乍ら彼れは此の勞働搾取を不當として此に其の共產主義の論據を求めたのでないことは、態々エンゲルスも指摘してゐる通りである。價値の全部がその產出者たる勞働者の手に歸せぬことを不當として、此理由から共產主義的結論を引くといふことは「經濟に對する道德の適用に外ならぬ」ものであつて「經濟上に於ては形式的に謬つて居る。」然らばマルクスの共產主義的要求の根據は何處にあるか。彼れは「之を我々の目前に日々進行しつゝある資本家的生產方法の必然的崩壞に」求めたのだといふのである(「哲學の窮乏」序)。而して此の資本主義必然的崩壞の結論が唯物史觀の上に立てられたものであるのは言ふ迄もないことである。然らば、資本主義崩壞の結論に對して餘剩價値論はどれ程の用を爲してゐるかといふに、その寄與する所は極めて輕少であるやうに見える。マルクスの唯物史觀は、一八四七年の「哲學の窮乏」には既に殆ど完成に近い形で現れてゐるが、近年リヤザノフに依て發表せられた「獨逸イデオロギイ」に由て觀れば、其根本思想は既に此原稿の起草せられた時、即ち一八四五年に把握せられてゐたことが明である。否な、更に其前の「神聖家族」の一節にも、マルクスは私有財產の制度の消滅をば、富とプロレタリヤとの對立から必然的に生ずる論理的歸結として說いてゐるのである。而かも此の當時に於ける彼の經濟學的素養は、極めて幼稚不十分なものであつて、未だ餘剩價値理論と稱し得べきほどのものを持つてはゐなかつた。大體に於て、彼れが價値論餘剩價値論に着想し、之を大成したのは、その共產主義的結論に到達した以後の事であつたと謂つて好からう。故に私は別の機會に說いて斯ういつたことがある「餘剩價値論に出發するブルジョワ社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會の經濟學的解剖は……毫も此結論（資本主義崩壞の結論）を動かしては居らぬ。マルクシズムの大建築は、既に唯物史觀に依つて其構造が決定してゐる。彼れの『宣言』以後に於ける經濟學の研究は、此構造を改變せぬ限りに於ての竣成必要工事——恐らく若干の補強工事及び裝飾を含む——であつた」。

更にマルクスの餘剩價値論及び其根據たる價値論の殆ど致命的の缺陷ともいふべきは、それが賃銀の決定、從つて搾取餘剩價値額の決定理法を說明し得ないことである。餘剩價値は餘剩勞働に依て造り出されるといふ。併し乍ら、その造り出された餘剩價値が勞働者自身の手に收得せらるゝか、或は利潤、地代となつて有產者のものとなるかは、一に賃銀率の高低に由て定まる筈である。その賃銀率の高低が價値論餘剩價値論を以てしては說明し得られないのである。

マルクスの思索が其から出發したリカアドオの經濟學に於ては、正しかれ正しからざれ、兎に角商品の價値價格、勞働の價値價格に對する統一的の說明がある。商品の市場價格が其自然價格、卽ち其生產費を其引力中心として變動する如く、勞働の價格たる賃銀も亦た同じく其自然價格卽ち其生活費に歸向する約束を持つてゐる、と說いたのである。市場價格が自然價格の上下に離隔する時は、供給を自働的に之に適應せしむる作用が行はれる。商品の場合には、價格が生產費を超過すれば、生產が增加し、勞働の場合には、賃銀の生活費を超過すれば、同じく勞働の生產、卽ち人口が增加すると說いたのである。然るにマルクスは、リカアドオの賃銀論の根據となるマルサス人口原則を排棄したから、彼れにあつては、勞働力の價値は勞働力の價格、卽ち賃銀に對して最早吸引作用を行ふことが出來なくなつた。從つて、彼れに於ては、賃銀は勞働力の供給と之に對する需要との關係に依て定まるといふ丈けに止めるの外はなくなつたのである。而して勞働力の供給を定めるものは、結局勞働人口であり、勞働力に對する需要を定めるものは總資本中の可變部分であるといふのであるから、マルクスの賃銀說も結局は一種の賃銀基金說に歸着する。たゞその賃銀基金が、彼れにあつては、流動資本の一部分たる可變資本たることを一の特色とする相違がある丈けである。斯くマルクスの價値論は賃銀の決定理法を說明することが出來ぬものであつて、此點に於て彼れの價値論が彼れの分配理論に取つて價値なきことを主張したヂイツエルの意見は、私の全然贊成し得る所である。(H. Dietzel, Vom Lehrwert der Wertlehr und vom Grundfehler der Marxschen Verteilungslehre, 1921)

本誌前號所載の論文に於て、福田博士はマルクスの勞働價値學說が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

決してマルクシズムの「本營」にはあらざること、此を其本營と考へ其攻撃其排撃に主力を集中することの誤りなるを說かれた。(「餘剩の生產交換分配」第七頁)。私は上段述べ來つた理由に由て、結論として博士の此意見に同感なることを欣幸とする。私は前年數度に亘つてマルクスの價値論を批評する文章を本誌に掲げたが、それは彼れの價値論が一個の價値論として正しきや否やを論ぜんが爲めと、又我邦に於ける彼れの辯護者の辯護論が何れも根據薄弱と認めらるることを云はんが爲めにしたものであつて、決してマルクシズムが彼の價値論と共に立ち共に倒れるとは當時も今も考へては居らず、又既に其意味に類することを附記したこともあるのである。但し當時私は、勞働價値說が成り立たぬからとて勞働搾取の事實をも無視せんとするのは甚しい即了である云々と記して置いたが(拙著「價値論と社會主義」二二四頁)、此點今日は少しく所見を異にし、勞働價値說の崩解と共に經濟理論的には搾取論は成立せず、之を成立せしむる爲めには、別に倫理的の標準を必要とすると考へるやうになつた。此點は今日は措いて別の機會に詳論したいと思ふ。

少しく岐路に亘つたが、兎に角マルクスの價値論餘剩價値論は、マルクシズムの最要部分を成すものではない。繰り返していふ。「唯物史觀と餘剩價値論とでは、そのマルクシズムに取つての意義に於て遙に輕重がある。前者は重く、後者は輕い」。次に私はマルクスの共產主義的結論と唯物史觀との間に如何なる關係があるかを考察したいと思ふ。

マルクスの思索はヘエゲルを以て出發し、次いでフオイエルバハの「現實的人本主義」に依てヘエゲル的思惟の檻から脫出したとは、殆ど何の書にも書いてあることである。フオイエルバハは決して宗教其者は否認せぬが、之を天上から引き卸ろして、神の代りに、人間其者を人間に取つて最高本質たらしめんとし、「・・・人間が有する丈けの價値を人間の神は有する。而して其以上を有せぬ。神の意識は人間の自意識である。神の認識は人間の自己認識である」といひ、又「神は我が第一の思想、理性は我が第二の、人間は我が第三且つ最終の思想であつた。神性の主體は理性であり、理性の主體は人間である」と謂つた。フオイエルバハの「基督教の本質」が出た時に(一八四一年)マルクス、エンゲルスが如何に之を歡迎したかは、四十幾年後エンゲルスの尙ほ熱情的に物語る所である。(「フオイエルバハ論」)。マルクス其人は、當時もエンゲルスほどには此に傾倒しなかつたと認むべき理由があり、又比較的早く其心醉から醒めたのであるが(Riazanov, Marx-Engels Archiv Bd. I, 216)而かも猶ほ彼れも「神聖家族」(一八四五年)の一節に、フオイエルバハの功績を揚げて下の如く言つてゐる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

實證と自意識に關するストラウスとバウエルとの爭は、ヘエゲルの思辯哲學內部の爭ひである。ヘエゲルにはスピノザの實體、フイヒテの自意識、此兩者のヘエゲル的必然的矛盾的統一、即ち絶對的精神といふ三要素がある。神學の領域内に於て、ストラウスはスピノザの立場に於てヘエゲルを、バウエルはフイヒテの立場に於てヘエゲルを、徹底せしめた。兩者は、兩要素の各々をその一方的、即ち徹底的遂行に迄發展せしむる一方、ヘエゲルに於て兩要素が各を他方に依て不純化せらるゝ限りに於ては彼れを批判した。――故に二人ともその批判に於てヘエゲル以上に出でゝ居るが、二人も亦た彼れの思辯哲學內に留まつて、各自彼れの體系のたゞ一面を代表するに過ぎぬ。「フオイエルバハは形而上學的なる絶對精神を『自然の基礎に立つ現實の人間』に解消することに依て、ヘエゲルをばヘエゲルの立場に立つて完成し、且つ批判したのであるが、そのフオイエルバハに至つて始めて、ヘエゲル思辯哲學の批判、從つて又一切形而上學の批判の爲めに偉大にして美事なる輪廓を描くことに依つて、宗教の批判を完成したのである」(改造版マ、エ全集第一巻六六四頁參看)。マルクスが「ヘエゲル法律哲學批判緒論」の中に於いて「宗教の批判は人間に取つての最高本質は人間であるといふ教義、即ち人間をば賤しめられ、奴僕とせられ、見棄てられたる、輕蔑すべき存在たらしむる所の一切の關係を覆へすべき無上命令を以て終る」。「唯一の實踐上可能なる獨逸の解放は、人間を人間に取つての最高本質と爲す理論の立場に立つての解放である」といふが如きも、亦た同じくフオイエルバハの影響を示すものと見て好からう(マ、エ全集第一巻四四九、四五五頁參看)。

併しマルクスは斯く一切事物は矛盾の止揚に依て發展するといふ論理學をヘエゲルに學び、而して其次にフオイエルバハに從つて、ヘエゲルの形而上學を放棄して、人間に對する絶對的精神の支配を否認するに至つたとしても、それ丈けでは、その矛盾の止揚に依て起る發展が何故に共産主義へ向つての發展でなくてはならぬか、又所謂矛盾が何故にプロレタリヤ對ブルジョワジイの對立でなくてはならぬかに對する説明にはならぬ。換言すれば、辯證法と唯物論と丈けでは、未だ直ちに人を社會主義者たらしめるに足らぬのである。

此點に就いては、マルクス其人の境涯、性格、氣質殊に其道義感が強く作用してゐることは否定し難い所であらう。フオアレンダアはその近刊のマルクス傳の中に、(K. Vorländer, K. Marx. 1929 S. 54)マルクスが萊因新聞紙上で、萊因州會に於ける所謂竹木盜取法問題を評論して、始めて法律的道德的理由に基づいて力強く貧民の身方をした事實を擧げ、之を當初マルクスを驅つて社會主義に赴かしめたものは道德であつたことを示す一例として居るが、詢に其通りであらう。併しこ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れと同時に考へなくてはならないのは、當時の社會主義者のマルクスに及ぼした影響である。然るに一八四〇年代の始めに於ては、獨逸本國の社會主義には殆ど言ふに足るほどのものがない。一八四二年に、直ぐ次に述べるシュタインの佛蘭西社會主義に關する名著が出た時にも、其の説く所は獨逸の公衆には「遠國からのお伽話」の如く聞こえたといはれてゐる。其位であるから、假りにマルクスに影響を與へたとしても、それは無論佛蘭西の社會主義及び共産主義である。當時「佛蘭西社會主義の淡く哲學的着色を帶びた反響が」聞こえて來たと、後年マルクスは記してゐる。當時のマルクスが記す所に由れば、彼れは一方に於て、當時現在の形に於ける共産主義思想には「決して理論的現實性を認めず、從つて況や其の實踐的實現を希はず、それを可能とも考へ得ぬ」といつて居るが、併し同時に、ピエエル・ルルウ、コンシデラン、就中烱眼なるプルドンの著作の價値を認めて、是等の著作は根本的な研究をした上でなければ批評し得られないものだといつて居る。同時に彼れは共産主義の「危險」が其實踐に存せずして其理論に存することを說いてゐる。實踐的の試みは大砲を以て鎭壓し得るけれども、「吾々の知性に打ち克ち、吾々の心術を征服し、吾々の良心が悟性に依て其に緊縛せられた思想といふものは、人が其胸を裂くことなしには絕つ能はざる鎖であり、人が其に服從することに依て始めて征服し得る惡魔である」からである。これは一八四二年十月十六日登載の萊因新聞論說の二三節であるが、此一篇の文章はマルクスの最初の社會主義共産主義觀を窺ふ爲めの最も有用の資料である。彼れは此時、一方で共産主義の「危險」を言ひながら、既に他方で其理論的價値を認め、且つ其魅力を感じてゐたのである。

然るに、其後久しからずして彼れは社會主義者になつた。彼れは「營利と商業、所有と人間搾取の制度は……現存社會の內部に於て舊制度が治癒し能はざる一の破裂に導く」ことを認め(一八四三年五月、ルウゲ宛書簡。全集第一卷四〇五頁)次いで、ヘエゲル法律哲學批判の緒論に於て、獨逸の解放はプロレタリヤに依て始めて行はれると說くやうになつた。それに謂はく、獨逸に於ては、今日市民社會の階級には一般的解放を行ふべき欲望と能力とを有するものは一もない。たゞ一の階級がある。それは「人間の完全なる喪失であり、從つて人間の完全なる回復に依て始めてよく自己を獲得し得る」一階級、特殊の一身分として社會の解消たるもの、即ちプロレタリヤである。此のプロレタリヤは、獨逸に取つては工業運動の侵入と共に生成し始めたものであるが、此階級が「從來の世界秩序の解消を告げるのは其自身の存在の秘密を表明するに外ならぬ」ものであり、彼等が私有財產の否定を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

要求するのは、社會が、「プロレタリヤの原理にまで高めたものを…社會の原理にまで高めるに外ならぬ」。「哲學がプロレタリヤに於て物質的武器を見出す如く、プロレタリヤは哲學に於て其精神的武器を見出す。」獨逸人「解放の頭腦は哲學で其心臓はプロレタリヤである。哲學はプロレタリヤの止揚なくしては己れを實現すること能はず、プロレタリヤは哲學の實現なくしては己れを止揚することを得ぬ」と（マ、エ全集第一卷四五四―五頁）

マルクスは更に進んで「神聖家族」の一節に、私有財產とプロレタリヤとの對立が私有財產なくプロレタリヤなき狀態に止揚されることを說いてゐる。私有財產は私有財產として己れ自身と共に其對立者たるプロレタリヤを存續せしむることを餘儀なくせられ、反之、プロレタリヤはプロレタリヤとして己れ自身と共に己れを制約する對立者、卽ち私有財產を止揚することを餘儀なくされてゐる。前者からは對立維持、後者からは對立絕滅の運動が起る。併し對立を維持せんとする私有財產は、その對立者を造り出すことに依て、結局己れ自身を止揚する。「…私有財產は其經濟的運動に於て、自ら己れを驅つて自己の解消に赴かしめる。併しそれは、己れ以外に獨立せる、無意識なる其意志に反して行はれ、事の性質に依て定めらるゝ發展に依つて、卽ちプロレタリヤをプロレタリヤとして造ることに依つて…それをする」のである。併しプロレタリヤが勝利を得ても、それは其に依て決して社會の絕對的方面とはならぬ。何となれば「それはたゞ己れ自身と其對立者とを止揚することに依つてのみ勝利を得るのだからである。其暁にはプロレタリヤも之を制約する對立者、卽ち私有財產も等しく消滅してゐるのである」（全集第一卷五五一―二頁）。

此に至ればマルクスは、「共產黨宣言」の思想に餘程近づいてゐると言つて好い。然らば右述の如きプロレタリヤの歷史的使命に彼れの着目を促したものは果して誰であつたらうか。此問題は畢竟屢々論ぜられた、マルクスはシュタインの「佛蘭西社會主義共產主義論」(Der Sozialismus und Kommunismus des heutigen Frankreichs. 1842)から果して何處迄の影響を受けたかの問題に歸着する。(福田博士著「唯物史觀經濟史出立點の再吟味」前册一〇九頁には下の如く言つてある。「マルクスのフランス社會主義及共產主義に關する研究、またブルヂオア社會の解剖を其中に求むべきものだとの結論に達した經濟學の研究、而して ヘーゲル說の撿討、それからの進出については、彼が潛心之れに從事してゐた最中、恰かも公刊された一先覺者の一著作が、輕からぬ關係を有つてゐることは、或は誇大せられ、或は故意に輕視せらるゝの別はあれども、兎に角、誰人によつても全く否

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れてゐない事實である。其著作とは、前にあげた一八四二年刊のロレンツ・フォン・シュタインの『今日のフランスの社會主義及び共産主義』これである。」）此問題は相當の興味ある問題であつて、マサリック、メエリンクが此影響を否定するに對して、ゾムバルト、アアドラア（Georg Adler, Die Anfänge der Marxschen Sozialtheorie und ihre Beinflussung durch Heg l, Feuerbach, Stein und Proudhon, Festgaben für A. Wagner, 1305）ムツクレ（Muckle, Henri de St Simon. 1908）プレンゲ（J. Plenge, Marx und Hegel, 1911）其他は之を肯定してゐる（此以外の關係文獻は前記福田博士著書一一五頁に列記されてゐる）。私自身はシュタインの記述とマルクス自身の言說とに徵して、後者は恐らく前者に依て學び得たものが尠なからずあつたものと認定するけれども、本文の比較丈けでは此以上の確乎たる斷定は下し得ないし、又旁證も十分でない。たゞ固より動かし難い證據とは言へぬが、私の認定の根據としてはシュタインの書の第一章「プロレタリヤ論」以下諸章の文言を引くことが出來る。

シュタインはプロレタリヤを以て社會主義共産主義の「眞正の生命力」の源泉としてゐる。而してプロレタリヤ其者に就いては大凡そ次の如く說いてゐる、佛蘭西最近史の歸結として、國家團體の諸要素が徐々に變化して、其の中に全然新なる一個の要素が出現した。「其要素は第一革命以前に於ては全然注意せられず、又尊重せられずに横はつてゐたものであり、何人もそれに獨立に意欲し思惟する權利を許容せず、否な、國家も個人も之を助けることを其品格に拘るものとして、愛又は實行的扶助を與へず、精神的物質的賜物の分配に際して謂はゞ神にすら忘れられてゐたものである。これがプロレタリヤであり、プロレタリヤとはその社會生活上に於ける資格の基礎としての教養も所有も持たず而かも人格に始めて其價値を附與する彼の諸財を全く缺いて存せざるべき使命を有するものと感ずる人々の全階級である。（六―七頁。）

プロレタリヤは往時の貧民とは異なる。後者は啻に所有なきのみならず、又肉體的に其生計の資を稼ぎ得ぬものである。前者は「所有は持たぬが併し乍ら勞働力と而して勞働力を行使する」意思とを有する。舊時の貧民は、勞働を欲せざるやくざ者であつたが、プロレタリエルは左樣でない。プロレタリエルは喜んで、善く、且つ多く働かんことを欲する。たゞ彼れは其勞働に對して相當の賃銀を欲する。而して彼れの努力と彼れの贏得する所との不均衡が、本來不滿足に對する第一の、而して最も直接の刺戟であり、同時にプロレタリエルと煩勞少なくして利得多き人々との對抗、更に全然勞働することなくして而かも所有の喜悅を享受し得る人々に對する一層の對抗の刺戟たるものである。（一三頁）。所有は名譽や智識や國法の如く、同時に二人の人に屬す

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ることを得ない。而かも文明實現の爲めにそれは缺くべからさる條件をなしてゐる「一人の人に屬すれば、それは其人に其使命成就の可能性を與へる一方、正に其事に依て他人から此可能性を奪ふ」のである。故に所有を持つ者と、之を獲んとして空しく努力する者とでは、之を見ることが異ならざるを得ぬ。「前者に取つてはそれは不可侵の條件であり、後者に取つては拒否すべからざる要求である。前者に取つては現存事物は正當であり、後者に取つては不當である」(二七頁)。

そこで必然一の結論が生ずる。曰く「、、、はプロレタリヤに於てのみ可能である。」(三五五頁)。而してプロレタリヤ階級は近世工業の必然的産物である「吾々が玆でも決定せられたものとして豫定し得ることは、今日の工業形態は必ずプロレタリエルの階級を造り出さゞるを得ぬといふこと、次に、人格の使命及び權利の意識の進歩は、此階級をば特に其に指定せられたる原理の上に立つ、一個の獨立の全一體たらしめるであらうといふこと是である」(三五九頁) 以上は極めて粗略な拔抄であるが、而も此中にもマルクスとシュタインとの類似は認め得られると思ふ。固よりシュタインにはレイボオ其他の典據があり、マルクスが直接佛蘭西の著作其者を讀み得なかつたと斷定すべき證據はない。それは詢にメエリンク其他の言ふ通りであるが、併し所說の內容に近似あるに徵し、又周圍の事情を考へて、年少のマルクスが先づ此書に由て佛蘭西の社會主義に接し、又プロレタリヤの現存事物の、、、たるの意義に着目を促されたとするのは、大過なき認定であらう。

シュタインを通じてか、或は直接にか、兎に角マルクスは佛蘭西の社會主義共產主義に接し、又プロレタリヤの歷史的使命を理會した。ヘエゲル左黨の哲學者として出發したマルクスは、、、、の、、、、たるプロレタリヤを獲た。彼自身の言葉でいへば、「プロレタリヤに於て物質的武器を見出し」たのである。而して一度び此の物質的武器を見出すや否や、彼れは退いて單に「世界を樣々に解釋する」哲學者の一人たるを以て甘んぜず、「之を變更」せんと欲する、、、、、として、直ちにプロレタリヤとの觸接を求めた。彼れは巴里に於て熱心に佛蘭西及び獨逸勞働者の會合に出席し、又リヤザノフの力說する如く、ブラッセルに於て勞働者の間に組織を造ることに努力した。

然るに、斯く實踐的革命家たるのマルクスを以て觀れば、一度びは彼れを導いてヘエゲルを離れしめたフオイエルバハの哲學にも、更に不滿を感ぜざるを得なくなつた。彼れはフオイエルバハ哲學の抽象的、客觀的、觀照的、理論的なるに慊らずして、具體的、主觀的、實踐的行動的なる唯物論を求めたのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

尤もフォイエルバハにも實踐を重んずる一面がなくはない。マサリツクの指摘してゐる通り、彼れは實踐は理論の解決し得ぬ疑問を解決すると謂ひ、「眞實の哲學は書籍でなくて人間を造る所に存する」とも謂つたのであるが、(Masaryk S. 30) 併しマルクスには其が遙に不充分に思はれたのである。故に曰はく、「一切從來の唯物論——フォイエルバハのも含める——の主なる缺陷は、對象、現實、感性が單に客體若しくは觀照の形式の下にのみ把握せられて、人間的、感覺的活動として實踐として把握せられず、主觀的に把握せられざることである。」フォイエルバハは思惟の客體と區別せらるゝ客觀的客體を欲してゐる。併し乍ら、彼れは人間行爲其者を對象的行爲として把握して居らぬ。故に彼れは基督教の本質に於て、獨り理論的態度をのみ純人間的態度と見て居る一方に、實踐は、其の汚穢なる猶太的現象形態に於てのみ把握せられ、固定せられて居る。從つて彼れは『革命的』實踐的、批判的活動の意義を理解して居らぬ」と。これはいふ迄もなく普通に Thesen über Feuerbach と稱せらるゝマルクスの手記の一節であつて用語は一々異なるが、殆どその全體を通じて同じ意味に歸着することが言はれて居る。

此のフォイエルバハ批評は社會主義者たるマルクスの政治的實行的意志に發するものである。併し乍ら其と同時に、フォイエルバハの純理論的態度を非とする批評には、マルクスの新に獲た獨特の理論的根據があつた。それは一切の理論は單獨獨立して存在するものではなくて、必ずその物質的基礎を有するものであり、理論は物質的事實の反映に過ぎぬから、單純なる理論、單純なる理論的批評は、無意義であるといふ認識である。若しも理論が、或は更に廣くいへば哲學、宗教、國家、法律等一切のイデオロギイが、其自體單獨に存立し得るものならば、之に攻擊批評を加へることは無論至當であるが、反對に、若しも理論には別に物質的基礎があつて、一にそれに依て左右せらるゝものであるならば、その基礎たる物質的事實はその儘にして置いて、此事實の反映のみに手を加へることは、宛も鏡中の影と格鬪するにも比すべき無意義の所爲である。唯一の有効有意義の批評は、映像の實體たる現實の物質生活其者に手を下すもの、即ち、、、、でなくてはならぬ。

此の、、、、、、、、、、、、、、、、。然るに理論が單獨に存立するものでないと同樣に、プロレタリヤも亦た隨意に發生し、隨意に革命を行ひ、且つ隨意に之を成就するものではない。之を決定するものは、階級の背後若しくは脚下に存する物質的事實であつて、階級は謂はゞ之に操られて舞臺上に演技するものに外ならぬ。玆で少しく簡單に纏めていへば、一切のイデオロギイに畢竟物質生活の反映であるから、その物質生活其者を實踐的に攻擊せぬ、單純なる

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

理論的批評は無効無意義であるが、さてその、、、、、も亦た窮局は物質的生活の左右する所であるといふのであるから、此の物質的生活なるものは自律自存自變のものとしなければならぬ譯である。而してマルクスは此物質的生活の本質を求めて生産力を得た。彼れは既に神聖家族の一節に一時代の「工業若しくは生活の直接生産方法」を知ることなくしては其時代の歴史的現實を認識することは不可能である旨をいひ、又「、、の出生地は天上の雲霧の中」でなくて「地上の粗なる物質的生産」に求めなくてはならぬと説いてゐるが、彼れの此方向への思想は特に「神聖家族」の著作後、急角度を描き、又長足の歩を以て發展したらしい。而して此發展をなさしめたものは、凡そ此頃に始まる彼れの異常なる經濟史經濟學研究の努力であつた。後に(一八五九年)彼れ自ら回顧して「私の研究は斯ういふ結果に到達した。法律關係並に國家形態は、其者自體よりして理解すべきものでもなく、又所謂人間精神の一般的發展よりして理解すべきものでもなくて、寧ろ其總體をヘエゲルが、十八世紀の英吉利人及び佛蘭西人の先行に從つて『市民社會』の名稱の下に總括した、その物質的生活に根ざすものであるといふこと、然るに市民社會の解剖は之を經濟學に求むべきものであるといふこと是である。」(「經濟學批判序」)と謂つたのが宛もこれに該當する。

此の經濟學研究の大體の結果として得られたものが彼の「人間は其生活の社會的生産に於て其物質的生産力の一定段階に適應する一定の必然的なる、彼れの意思より獨立せる關係、即ち生産關係を結ぶ云々」といふ唯物史觀である、其思想は既に一八四五―六年の交に執筆せられて大部分其儘最近まで埋沒せられてゐた「獨逸イデオロギイ」の原稿に現はれてゐる。マルクスはヘエゲルを以て出發し、先づフォイエルバハに依てヘエゲルを脱却し、更にフォイエルバハを超え進んで、唯物史觀に到達した。此の第二の重要なる發展の里程標を示すものが、「獨逸イデオロギイ」である。これを發見校訂して發表したのは(そのフォイエルバハ論の部分丈けではあるが)正にリヤザノフのマルクス文獻考證事業中最も價値あるもの丶一に屬する (Marx-Engels Archiv Bd. I. S. 203―306)

發表せられた「獨逸イデオロギイ」は相當の紙數に亘るものであり、且つ其論述の順序も整つてゐないから、此處に其の正確な梗概を掲げることは困難であるが、一時代の歴史的現實を認識するには其時代の「工業若しくは生活の直接生産方法」を知らねばならぬ といふことに就いては略左の如く記して居る。

人間が歴史を造り得る爲めには先づ生きなければならぬ。生きる爲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

めには先づ「食、飲、住、衣其他若干のもの」を必要とする。そこで「第一の歷史的行爲」は「是等の欲望を充たすべき手段を造り出すこと、物質的生產其者の生產」である。これが一切の歷史の根本條件である。第二の行爲は他人の生命を生產すること、即ち生殖することである。男女親子の關係、即ち家族が此に於て生ずる。これが、歷史の始めに於ける唯一の社會的關係である。(原文には欲望の滿足其者が更に新たなる欲望に導くことを第二に擧げてあるが、重要とは思はれぬから、此に省略した)此の生命の生產は、勞働による自己の生命の生產も生殖による他人の生命の生產も、共に二重の關係として、——即ち一面に於ては一個の自然的關係、他面に於ては一個の社會的關係、即ち多數人の協動活動として現れる。そこで斯ういふ結論が生ずる。「一定の生產方法若しくは工業段階は常に協動活動の一定方法、若しくは社會的段階と結び付いて居り、而して此の協動活動の方法は其自身一の『生產力であること、』「人間に許されてゐる生產力の量が社會的狀態を定める。從つて『人類の歷史』は常に常に工業及び交換との關聯に於て學ばれ、又編まれねばならぬといふこと」これである(216)。

此生產力の發展が階級的對抗を發生せしめ、而して此の階級的對抗が、同じく背後に於ける生產力の發展に驅られて、獨り階級的對抗のみならず、、、、、、、、せんとする、、を生み出すといふことを、

マルクス等は稍々公式的に左の如く述べてゐる。(257—8)

(一)「生產力の發展上に到達する或段階に於て喚び起こさるゝ生產力及び交易手段は、現存關係の下に於ては、たゞ害のみを爲し、從つて最早生產力たらずして破壞力たるに至る。——而して…社會の利益を享受することなしに、其の一切の、、、、せねばならぬ一階級、社會から押し出されて、他の凡ての階級に對して決然たる、、に立つことを餘儀なくせらるゝ一階級を出現せしめる。此階級たるや全社會成員の多數者を成し、根本的革命の必要に關する意識、即ち、、、的意識の其よりして發生する所の階級である。」

(二)「一定の生產力が其內部に於て適用せられ得る諸條件は、社會の一特定階級の支配の條件である。此階級の、其所有に由來する權力は、其時々の國家形態を其の實踐的、觀念的表現とし、從て革命的鬪爭といふ、、は、皆な從來、、たりし、、に向けられる。」

(三)「一切既往の革命に於ては、活動の種類は其儘に委せられて、たゞ此活動の種類のみが改められ、別の人々への勞働の新なる分配が行はれたるに對し、、、、、、は從來の活動の種類に向けられ、勞働は排除せられ、有ゆる階級の、、を階級其者と共に止揚する。何となれば、此、、は、現社會內に於ては最早階級たるの資格なく、階級として承認せられずして、既に一切の階級、、、性の解消の表現たる

所の一階級に依つて行はれるからである。」

（四）「此の、、、、、、の大衆的產出、並に、主義其者の貫徹の爲めには人間の大衆的變更が必要であり、而して此事は、、、、、に於て、、、に於てのみ行はれ得るものである。」

此歷史觀の特色は、「唯心史觀の如く」各時代に於て一個の範疇を求めることをせずして、市民社會、即ち物質生活を歷史全體の基礎と解し、「樣々なる理論的產出物、意識の諸形態、宗教、哲學、道德等の全部を此よりして說明し、此等のものから生ずる其發生過程を尋ねること」實踐を理念から說明せずして、理念の形成を物質的實踐から說明し」、「一切の意識形態及び意識產物は「精神的批評に依て…解消せらるゝものでなくて、此等唯心論的冗言の發生の源なる、現實的社會關係の實踐的顚覆に依て始めて解消せられ得る」となすことに存する(239)。

意識と物質生活の關係に就いては斯ういふ說明が試みられてゐる。人間は意識を有するが、併し「純粹の意識といふものはない。『精神』は始めから物質から脫離し得ぬ約束のものであるが、其物質が、茲では音聲といふ氣層の運動の形に於て、即ち言語として現れる。言語は意識と同時に始まるものであり、而して其は意識と同じく他人との交通の必要から發生したものである。されば「意識は當初から既に一個の社會的生產物であり、抑も人間なるものゝ存在する限り、依然として然るを失はぬ」(237)。後に「經濟學批判」の序文から屢々引用されてゐる。「意識が生活を定めるのでなくて、生活が意識を定める」といふ文句も既に「獨逸イデオロギイ」の中に見出される(240)。

私は前に「獨逸イデオロギイ」をマルクス思想の重要なる發展を示す里程標だと謂つた。此事は此書を取つて此書以前の著作と比較する者には容易に首肯せらるであらう。此書以前と以後とでは彼れの思想行論の態度、其文體筆致に明かに趣を異にするものがある。マルクスは此書以前に於て、例へば「神聖家族」に於て、既にヘエゲルの思辯哲學から脫却したといひ乍ら、猶は到處現實生活と離れてたゞ抽象的に論理的に結論を求めることを已めてゐない。例へば前にも引用したる如く、彼れは富とプロレタリヤとの對立が止揚せられて私有財產從つて又プロレタリヤが消滅するといふ共產主義的歸結を引いて居る。併し乍ら、彼處の數節に說かれてゐる丈けの事ならば、ヘエゲルに由て正―反―合の階梯に由る辯證法的發展といふことを學び、而して現社會に於ける貧富の懸隔對立といふ事實を正及び反として、是に適用しさへすれば、此以外には現實の商工業に就いて全然何事をも知らぬ者にも同じ結論は引かれ得る。此時マルクス自身「生命の直接生產方法」を知るの肝要なることをいひ乍ら、また其を究めてゐなかつたの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である。「獨逸イデオロギイ」にあつてはさうでない。此にあつては、彼れは單に論理的必然をいはずして、現實生活上の經驗的事實に由て事物因果の關係を明にせんと努めてゐることが見える。一言を以ていへば、彼れの態度は著しく實證科學的になつてゐる。此事は無論彼自身の意識してゐる所であらう。「現實生活にあつて思辯の已む所は、即ち現實的、實證的科學、即ち人間の實踐的活動、實踐的發展過程の敍述の始まる所である」(「獨逸イデオロギイ」)と彼れは言つて居る。前にプロレタリヤを獲た哲學者たるに過ぎなかつたマルクスは、玆にイデオロギイの世界から現實的物質生活に降り來つて、科學者となつた。其意味に於て、彼れは哲學的或は論理的社會主義者から科學的或は實證的社會主義者となつたと謂つても好いのである。

唯物史觀は「獨逸イデオロギイ」から「哲學の窮乏」、「共產黨宣言」「經濟學批評」に到る迄に漸く精錬を經て行つた。併し原理の上では、其間に殆ど何等の新しきものが附け加へられて居らぬやうに見える。此時期及び其後に於けるマルクスの進步は、大部分その經濟學者としての進步であつた。而かもその經濟學研究の進步が、既に夙く與へられた共產主義的結論を毫も動かさなかつたことは、前述の通りである。

以上私はマルクスがヘエゲルに出發してから唯物史觀に到達する迄の思索道程の大略を述べた。それは本論に入る準備の爲めにしたのであるが、それに時と紙幅とを費し過ぎたので、遺憾ながら肝心の唯物史觀と共產主義との關係を極く簡單に論じなければならぬ。私が準備に紙數を費したのは、畢竟マルクスを而め共產主義たらしめたものは恐らく其境遇、性格、氣質殊に其道義感であつて、唯物史觀ではなかつたこと、唯物史觀は彼れに共產主義の結論を得た其後に始めて打ち立てられたものであるといふことを言はんが爲めである。マルクスは先づヘエゲルに由て一切事物は固定不動のものではなくて、皆な發展の過程上にあること、不變なるものはたゞ過程其者のみなることを知つた。而して其發展は矛盾の止揚、即ち肯定—否定—否定の否定へと、低きものからより高きものへの發展であることを學んだ。少壯ヘエゲル黨の一人たる彼れは、政治上宗教上に於ける現狀否定者となつた。そのマルクスが多かれ少なかれ佛蘭西社會主義思想の影響を受けて共產主義者となつた。彼れに取つて共產主義は現存事物の矛盾の止揚に依つて到達せらるゝより高きものになつた。次いでマルクスは、現實的物質的生活に着目し、之を解剖した結果として、歷史を造るものは物質的生產力の發展であるといふ認識に到達した、ヘエゲルに於ける理性、イデエ又は絕對的精神の位置をば生產力が代つて占めることになつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

これが卽ちマルクスが、自家の辯證法はヘエゲルの辯證法と正反對だといひ、或は辯證法を足で立たしめたといふ所以である。而して彼れをヘエゲルの唯心論から導き出して此に至らしめた第一の道案內者は、フオイエルバハであつた。是に由て見らるゝ通り、マルクスは生產力發展の傾向と結果とを考察して始めて共產主義者になつたのではない。先づ共產主義者であつて、而る後に市民社會の實證的解剖に突進したのである。マサリツクのいふ如く政治上的に、實踐的に且つ感情上「マルクスもまた科學的社會主義者たるよりも遙に夙く社會主義者であつた。」(39. Anm.)

併し先づ社會主義者となつて而して後に唯物史觀を得ても、唯物史觀が當然社會主義の結論に導くものならば、落想の先後は問ふに及ばぬ事である。併し私の見る所では、生產力の發展が共產主義的社會秩序を齎すといふ結論には必然性はないのである。

生產力が歷史的發展の起動力であるといふのは先づ好い。併し此發展は果して、又何故により高きものへの進步であるか。ヘエゲルにあつては然りといへる。マルクスにあつてはいふことが出來ぬ。ヘエゲルに取つては、世界は絕對者たるイデエ、又は理性の論理的自己發展の過程であり、從つて彼れは世界史に於て、遂行せらるべき、且つ遂行せられたる合理的なる世界計劃、世界精神の形に於ける神の啓示を認めて居る。歷史的經過は此神的計劃遂行の經過である。從つて、此發展は究局的には背後の原因に促されて起るのでなくて、豫定せられた最終のデスケネエシヨンに向つてする發展である。然らば、世界史の終極目的は何であるか。それは自由の意識の實現である。固より直接歷史を造るものは人間であつて、その人間は各種の利害、欲望、激情等に動かされて活動するのであるが、此等の利害、欲望其他は素と謂はゞ世界計劃を遂行せんが爲めに人間に賦與せられたものであつて、各個人はその各自の樣々なる動機に驅られて行動することに依て、期せずして世界計劃の遂行に參加する。「意欲、利害及び行爲の無際限の群集が、世界精神が以て其目的を遂行し、之を意識にまで高め、且つ實現する爲めの道具であり、手段である。」時代精神を我精神とし、時代の必要を我必要とする英雄偉人は畢竟世界精神の傀儡に外ならざるものである。故にヘエゲルにあつては、發展は當然より高きものへの進步であり、此進步の必然は、形而上學的必然である。形而上學的必然は又論理的必然であると謂つて好い。

然るに、マルクスは生產力を以てイデエ又は世界精神に代らしめた。生產力は現實的物質生活上の事實であつて、固より形而上學的の意味を有する筈のものではない。生產力の發展が、或結果を齎すといふことは無論認められる。マルクスの謂ふ生產力其者の何たるかに就い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ても必しも定論なく、それが共に由て定められるといふイデオロギイと全く獨立して自己發展をなし得るものか否かに就いても議論はあるが、兎に角、例へば手磨臼に代つて蒸汽製粉機が採用せられ、鐵道が驛傳馬車に代つたといふことが人間關係の上に或變化を齎すといふことは認められる。併し、苟も結果は必ず原因よりも善く、後の者は必ず先の者よりも高いとせぬ限り、此變化が進歩であるとは言はれない。ヘエゲルの場合にそれが言へるといふのは、彼れは一切の歷史的過程を最終の目的に向つての必然必要の階段と見たからである。形而上學を放棄したマルクスには是が出來ない筈である。彼れはたゞ生產力の發展が究極の原因となつて、法制、政治、科學、哲學、宗教等の上に變化が起ると謂ひ得る丈けである。而してその變化は、一定の目的に向つて進むのでなくて背後の原因に依て起るのであるから、盲目的發展だといはねばならぬ。一言にしていへば、生產力の發展は動かす。が併し乍ら、導かぬのである。ゾラの小說「獸人」の末尾に、軍隊を搭載した急行列車が、機械手と火夫とを失つた無人の機關車に曳かれて轟々として走り去るところが描かれてゐるが、マサリツクはマルクス、エンゲルスの歷史哲學は此の突進する列車を憶起せしめるといつて居る。（「絶大なる歷史的運動は宿命的規則性を以て時といふ大洋中に突進する。但し幸福なる結末へ。と……如何にして？何處から？何故に？」2:9）然るに、マルクス及び其亞流は、往々生產力の發展が當事者たる個々人の意志、意識に拘らず、必然的に之を特定の方向、即ち共產主義の方向へ導く約束があり、個々人の行動は皆な期せずして此結果を齎す爲めに豫定せられたものなるかの如く說く所に、ヘエゲルの「理性の狡計」を憶起せしむるものがある。此點に於て、ヘエゲル形而上學はまだマルクスの中に充分活きてゐると謂て好いのである（例へば J. Plenge, Marx und Hegel, 1911 參照）。

一切事物は矛盾の止揚に由て發展するといふ。併し矛盾といふことは思惟に就いていふことではないか。ヘエゲルの場合には一切事物がイデエの現れであるから、矛盾に依て發展が起るといふことは至當であらう。併し彼れのイデエ、理性を放棄した唯物論者が矛盾に由る發展を云々するのは、稍々比喩的の言葉として取るべきものではなからうか。私は嚴格なる意味に於て唯物辨證法なる成語が果して意味を成すや否やを疑ふものである。少なくも、此論理は論者の都合如何に由て如何樣にも濫用し得るものであつて、吾々は愛と憎、戰爭と平和、撞突と牽引等々々々を隨意に正と反とすることに依て、如何樣にも隨意の結論を引くことが出來よう。而して唯物辨證法なるものが、是を以て身を粉飾せんとする學界の snobs に依て如何に濫用、曲用、誤用せられつゝあるかは、近年の顯著なる現象である。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

マルクスの「人間の意識が其存在を定めるのでなくて、反對に、其社會的存在が其意識を定める」といふ公式は、一方そのモノマニヤ的濫用者も出したが、近代の史學社會科學に取つて最も價値ある洞察を含んでゐることは疑ない所である。併し此命題は一の思想、一の理論、一の運動が如何にして生產關係上の原因から發生したかは說明する、がその思想其他が何故に正しいかといふことは決定せぬ。如何なる原因の爲めに起つたかを明にすることは、其思想其他のジヤスチフイケエシヨンにはなるものでない。若しさうなるならば、苟も有るものは皆な原因があつて有るのであるから、有るものは皆な正しい、と謂はねばならぬ。而して誤謬の見解も亦自らその由て生ずる原因がある。然らば、誤謬も亦た正しいといはねばならぬか。若し謂へばそれは學問の絕滅である。而してさう言はぬ爲めには由て起る原因以外、別に一見解の當否を判定する基準がなくてはならぬ。度々引く例であるが、伊太利に於けるフアシズムの隆盛、露西亞に於けるボルシエキズムの勃興は共に現前の事實である。若しも唯物史觀が正しきものならば、それはフアシズムの隆盛をも經濟的原因に由て說明し、ボルシエキズムの勃興をも同じ、經濟的原因に由て說明し得るに相違ない。併し其說明が出來たからとて「理解することは恕することである」とはいへぬ。若し其原因が明になつたから、フアシズムも正しく、ボルシエキズムも正しいといへば、それは主義の絕滅である。若しさう言はずして、一方は正當で一方は不當だといふ爲めには、二者の因て起る原因以外、別に其正邪を判定する基準がなくてはならぬ。而して其基準は唯物史觀に依て與へられずして倫理的確信に由て與へられる。此場合、或種のマルクシストに見るが如く、フアシズムの出現は歷史的必然、歷史的秩序に逆行するものであるから不當であるといふやうに說くならば、それは再び形而上學的歷史觀に復歸せんとするものであらう。尤もマルクス其人の裡に、猶ほヘエゲル形而上學が活きてゐたと認むべきこと前述の通りであるから、斯る意見にも理由がないことはない。但しそれはヘエゲル辯證法を足で立たしめるといひ、イデエは人間頭腦に反映せる物質世界に過ぎぬといふ場合のマルクスとしては斷然許し難いことである。私は上に凡そ「獨逸イデオロギイ」の起草に至る迄のマルクスの思索發展の順序を述べて、形而上學を棄て倫理を棄てた唯物史觀が、共產主義的結論の定まつた後に得られたものであることを記した。這般の消息を知ることは右の問題を論ずる上に多少の助けとなり得るものと思ふ。

附記、時間不足の爲め、末段二三節の議論を甚だ簡略にした。更に之を詳論する機會のあることを期する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人參政權の十年間

山川菊榮

婦人參政權の實施狀態

一九一七年十一月、ボリシエウイキ政府の確立と共に宣言せられた男女平等の參政權は、半世紀に餘る婦人參政權運動の歷史をもつブルジョア諸國に對して、解決のシグナルを與へたものであつた。ドイツ、イギリス、アメリカ等の主要な資本主義國は、相次いで婦人參政權を認め、ひいて過去十年間にわたり、東西兩半球に跨がる三十三ケ國の民族が、この制度を確立するに至つたのである。

尤も婦人參政權が部分的に採用されたのは、大戰より遙か以前のことで、例へば一八八〇年代からオーストラリア、ニウジーランド、カナダ、北米のワイオミング等に於ては、地方自治體における選擧權及び被選擧權が認められてゐたし、大戰までにはデンマークを始め、英米、露等の諸地方で、種々なる制限──その多くは本人又は夫の財產資格により、有產階級の婦人にのみこの權利を認めた──の下に、この制度が徐々に適用の範圍を擴大されてゐた。一九〇二年にはオーストラリヤ聯邦、議會に對する男女平等の選擧權が認められ、越えて一九〇六年には、日露戰爭當時のロシアの內亂に乘じてツアーに叛逆し獨立の國家たる地位をかち得たフインランドは、卽時に男女平等の參政權を認め、最初の議會に十五名の婦人議員を送つたのである。

一九一四年──大戰勃發の直前には、國際婦人參政權運動はその高潮に達し、特にその中心的な勢力をなしてゐた英國では、選擧法改正によつてその實現が目睫の間に迫つてゐた矢先、參戰のために、愛國心の名において運動は中絕せられ、問題の解決は戰後に持越されたのであつた。

五年にわたる帝國主義戰爭の遂行のために、婦人の獻身的な協力を必要とした資本主義諸國は、破壞と荒廢の極に達した戰後の經濟復興のために、婦人の積極的な參加を求めねばならなかつた。産業界における婦人勞働の勢力に相應して、參政權の承認に、避け難い勢となつた。大戰後の十年間に、それは次のように、急速な發展を示したのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國名	實施の年	條件	
オーストラリア	一九〇二年……	選舉權 二一歳 被選舉權 二五歳	男女共
フィンランド	一九〇六年……同	二一歳 二五歳	同上
ロシア	一九一七年……同	一八歳	同上
デンマーク	一九一八年……同	二〇歳 二五歳	同上
ドイツ	一九一八年……同	二一歳 二五歳	同上
オーストリー	一九一八年……同	二一歳 二五歳	同上
ハンガリー	一九一八年……同	二四歳	同上
イギリス	一九一八年……同	二一歳	同上
アメリカ	一九二〇年……同	二一歳	同上
ベルギー(地方自治體)	一九二〇年……同	二五歳	
トルコ　(地方自治體)	一九二六年……同		

この外スウェーデン、ノルウェー、オランダ、ポーランド、クリミア、アッシリヤ等の諸邦も又、續々として男女同等の條件の下に婦人參政權を認めた。特に世界大戰の結果、戰敗國の逆境に立ち、革命によつて更生したもの、又は分裂して新たに獨立國となつた中歐及び東歐の國々は、例外なく婦人參政權を認めた。其等の國々では革命又は建國記念日は、同時に婦人參政權の記念日でもあつた。それに引かへ、フランス、ベルギー及びイタリーの如く、戰勝國の餘威に誇つて舊い傳統を破壞し切れず、改革の機を逸した者が、頑強に婦人の要求と戰つてゐるのは、皮肉な對照である。

本年五月二日、ベルギーの上院では、婦人の普通選擧實施案が、ブルジョア諸黨によつて提出されようとした。然るに社會民主黨はこれに反對し、その代表者ルクーをしてから言明せしめた。

『この提案は單なる策略的選擧法案にすぎない。これは階級的利害のために、多年の間、男子の普通選擧に反對してゐたのと同じ右翼の提案である。目下のところ、吾黨は婦人參政權には觸れたくない。何故なら吾々は婦人が政治的に教育される日を待つてゐるからである。(右翼派より笑聲)。第一に男子を教育し、それから彼等に選擧權を與へるがよいと諸君がいはれた時、吾々は笑ひはしなかつた。吾々は男子を教育した。そこでなほこの仕事を續けようとしてゐるのだ。實際には、諸君は一石二鳥を志してゐる。即ち諸君は地方における社會民主黨の地盤を覆へし、上院に幾箇かの議席をかち得ようとしてゐるのだ。それは、諸君が上院において多數を占めると同時に、下院に於ても、社會黨から多數黨たる地位を奪はんがためである。吾々はこの策動に反對し、婦人の參政權を、諸君によつて好都合な時機でなく、吾々にとつて好都合な時機に、實施しようとするものである』

自由黨代表者もこの案に反對した。反動派の代表はから主張した。

『婦人參政權はカトリック同盟の綱領の一部分である。これに敵對する者は、婦人の地位改善に反對する者である。』(社會黨員憤激

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

す)。

一社會黨幹部はこれに對して、『數ヶ月前、諸君は民法上における婦人の地位改善に反對したではないか』、と追窮すると、右黨代表はかう答へた。

『婦人參政權は、民法上の地位をも改善する。婦人參政權に反對する者は、進歩と平等とに反對する者である。婦人參政權は婦人教育を完成し、かつ國家を益するであらう。』(右黨大喝采)

二百五十万人の婦人有權を加へることゝなるこの提案は、社會黨政府の名に於て反對され、六十九對五十四票の少數で敗れた。

これは、曾てフランスでも社會黨政府が、右翼諸派の婦人參政權案に反對したのと同じ歷史を反復したものである。ムッソリニ治下のイタリーは勿論問題でない。これらの國々は舊式な生產方法による小農が人口の主要な部分を占め、工業勞働に從事する婦人は比較的少く、その從事する者とても、近代的な大工場よりも、小手工業に從事する者が多い等の關係から、婦人運動が後れて居り、然かも戰勝のために政治的改革の機を逸した結果として、今日なほこの古い問題をめぐつて古い鬪爭をくり返してゐるのである。

最も古いデモクラシーの國として知られたスウイスが、このおいてきぼりの仲間に殘つたのも皮肉であつた。スウイスには大きな工業都市がなく、勞働者の集團が小さく、且散在してゐる點でも、婦人參政權の唯一の味方である無產者運動の發展のために不利な條件を作つてゐるが、又スウイス特有の直接投票の制度も又、その障害をなしてゐる。卽ち婦人參政權は、たとへ中央議會を通過したところで、それだけでは足りないので、その上に二十五縣で各別に多數を占めなければならないから事面倒である。昨年バーズルにおける一般投票の結果は、この運動の前途を一層暗黑にしたものだといはれてゐる。バーズルは共產黨の根據地で、共產黨が優勢な唯一の地方であるが、ここで共產黨の提唱により、社會黨の支持をうけて、五月十五日に全縣にわたつて、婦人參政權の可否に關する一般投票が行はれた。その結果は前回の一般投票の場合よりも不成績で、贊成六千百五十二票に對し、反對一萬四千九百十七票といふ、壓倒的多數によつて美事に否決されてしまつた。こゝでは社會黨は男女同等の婦人參政權を主張してゐる。

こんな風に舊いヨーロッパの國々が躊躇してゐる間に、半野蠻と目されてゐる屬領や植民地、又は植民地に民族運動と共に、勃興した婦人運動が着々としてその功を收めて來た。英領インドの諸洲、同南アフリカ、東部アフリカ(但しこれらは白人だけ)は一九二二年に相前後して婦人參政權を認められた。支那も國民黨の下に男女同等の參政權が認められ、サウエート同盟に屬する極東及び中央アジアの諸民族と共に、婦人參政權の仲間入りをした。メキシコ、ビルマ、南洋諸島の間にも此運動は發達して、その解決は時機の問題と目されてゐる。

婦人代議士を有するものはドイツ三十(十名社會黨二名共產黨)名、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

フインランド十八名、オーストリーの六名（全部社會黨）ポーランドの十二名（五名社會黨二名共産黨）、イギリスの十三名（八名勞働黨）、オランダ七名。スウエーデン二名（社會黨）等を始めとし、他は一二名にすぎず、各國を通じて、婦人代議士の中、五割乃至七割までは勞働黨又は社會民主黨に屬し、殘る一部分がブルジョア黨に、更に少數が共産黨に屬する。

共産黨は、黨そのものが社會黨に比して甚しく小さく、かつ議會運動に第一義的の重要性を認めぬ關係上、一般に代議士數も少く、時に婦人代議士の少數であることも自然の勢ではあるが、ブルジョア黨に至つては、各國を通じて、婦人の立候補に對して消極的態度を採り、確實な地盤は男子の獨占に歸し、從つて婦人の當選率の甚しく低いのが常である。ブルジョア婦人代議士の場合は、黨の地盤によらず、むしろその人個人の社會的地位や名聲によつて成功する例が多く、その背後には、表面政黨的中立を標榜しつゝ、ブルジョア政黨のために犬馬の勞を辭せぬ婦人團體がある。

議會に僅か數名の婦人代議士の加はゝると否とは、實質的に何ほどの相異をもち來すものでない。しかしその精神的効果に至つては極めて重大である。參政權の意義を解するだけの政治的自覺をもつ者は、婦人の中の一少部分にすぎない。しかし同性の中の幾人かゞ、男子と共に議政壇上の人となつたのを目擊することは、黨派を問はず、すべての階級を通じて、婦人の注意をひかずにはおかぬ刺戟的な出來事である。これは婦人の政治的關心を呼び起し、その自信と自覺とを促す點で、最も効果的な教育の方法であると認められてゐる。從つてその反對に、婦人參政權が認められても、只一人の婦人も當選しなかつた時には、婦人一般の失望と意氣沮喪とは、蔽ふべくもなく、その教育や組織運動の進展を妨げるほどの政治的無關心を、少くとも一時は伴ひがちのものである。

プロレタリア獨裁下のロシアは、さすがに這般の消息をよく理解してゐると見え、すべての段階のサヴエートを通じて、選擧の度毎に、婦人代議員の率を高めることに努力してゐる。サヴエートの組織が議會制度のそれと異り、かつ選擧に際して支配的黨たる共産黨の意志がよく反映し得る制度となつてゐるだけに、この點については特異の面目が發揮せられてゐる。婦人は同盟のサヴエート大會代議員約千名の八%。地方都市サヴエート大會代議員の一五%を占めて居り、その率は徐々に高まつてゐる。

ボリセキキ政府の成立と同時に、婦人を社會人民委員の要職にあげたのもロシアであるが、一九二四年にはデンマークの社會黨内閣が、一九一八年來議員であり、有名な地理學者で、かつ黨の有力な幹部であつたニナ・バングを文部大臣に任命した。彼女は内閣の崩壞まで二年餘りその職に留まり、一九二八年三月、病を得て歿した。現在ではフインランドの社會黨内閣の社會大臣が、スパーンと呼ぶ婦人黨員であり、英國の勞働大臣、保健次官が、ボンドフイールド、ローレンス

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の二婦人によつて占められてゐることも知られて居る通りである。

婦人と反動勢力

婦人の投票は何人に投ぜられるか。

婦人參政權實施の日まで、否なその後までも、婦人の政治的活動を呪うておかぬ反動的な諸黨派こそは、少くとも實施の直後に於ては、そのために最も利益をうける立場におかれてゐるといふのは、實に皮肉な現象といはねばならぬ。現在までのところ、各國を通じて精確な調査がないので、統計的に事實をあげることは困難である。たゞドイツの或都市では男女によつて投票箱を異にし、オーストリーでは、男女によつて投票用紙を入れる封筒の色を異にしてあつたので、さういふ場合だけ、明白にその色分けを知り得たゞけである。チエツコスロバキヤの社會黨婦人は、すべての選擧に際し、男女の投票別を明かにする方法を採ることを政府に對して要求した。一九二六年のコミンテルン國際婦人書記局の報告はかう述べてゐる。

『英國の總選擧(一九二四年)では婦人の大多數は保守黨に投票した。ドイツの大統領選擧の際には、婦人の大部分は、國民黨及びカトリツク黨に投票した。社會民主黨も共産黨よりは得票數が多かつた。コローヌでは中央黨へは男子百票、女子百四十三票、共産黨へは男子百票、女子四十六票、ベルリン近郊の大工場地帶スパンダウでは、ドイツ國民黨へは男子百票、女子百二十二票、中央黨へは男子百票、女子百四十四票、共産黨へは男子百票、女子六十八票の割合であつた。』これで見ると右黨に對する婦人の投票は男子の一倍半、共産黨に對するそれは、男子の五割弱にすぎない。

オーストリーでは一九一九年二月に、新たに成立した共和國憲法の下に婦人參政權が實施された。この當時は謂ゆる革命の滿潮時代で、戰爭と荒廢とへ導いた王朝や貴族僧侶に對する反感の强い時代であつたから、婦人は大衆的に社會黨を支持した。しかし反動勢力の擡頭と共に、再び舊い宗敎家の力が婦人を支配し始めた。婦人を苦しめる經濟的困難、社會不安の一切は、社會黨の政策の結果であるといふことが婦人の間に深く廣く信ぜられるやうになつた。そこで一九二〇年の總選擧には社會黨は一敗地に塗れたが、これは全く婦人の投票の結果であつた。なぜなら、社會黨に對する男子の投票數は前年度と變らず、婦人の投票數だけが激減したのであるから。

一九二〇年十月から六年半を經過した一九二七年四月の總選擧までの間に、社會黨は婦人の敎育と組織とに鋭意努力した結果として、ウインナでは、婦人參政權實施以來、始めて社會黨の得票數のうち、婦人の投票が男子のよりも多數を占めた。卽ち總得票數六十九萬五千のうち、男子三十二萬六千、女子三十六萬七千餘に達し、女子の投票數が男子のよりも、四萬一千六百ほど多數であつた。

英國と同じく、戰後のヨーロッパ諸國はどこでも女子有權者が男子より多數であるために、その向背は特に重大である。ウインナの如き

も女子有權者七十萬に對し、男子は五十六萬にすぎず、兩者の開きは十五萬人に達してゐる。一般的にはまだ社會黨よりは資本家黨を支持する婦人の方が多いことは事實であるが、ともかくも全有權者に對して占めると同率だけの婦人を、社會黨のために投票せしめ得たのは、ひとへに教育運動の効果であると見なされてゐる。このことは、一九二〇年に七萬人であつた婦人黨員が、一九二七年には十九萬人に達してゐる事實によつても裏書されてゐる。けれども婦人の投票者の全部が黨員でもなければ、永久的な黨の支持者でもないので、總選擧當時の昂奮狀態の後、彼等が政治的無關心に陷り、又は資本家黨の手中に陷ることを防止するためには、平時における教育と組織の努力が、最も重要な役割をもつてゐるのである。

一九二八年度に行はれたスウェーデンの總選擧では前回に比し、社會黨は二〇%、保守黨は五〇%だけ得票數を增加してゐる。これも投票の男女別は、數字的には不明であるが、一般的に見て婦人が保守黨の優勢にあづかつて力あることは明白だと認められてゐる。一般的な現象として、ブルジョア階級の婦人は參政權を重要視し、男子と共に投票場に赴くが、無產者、特に地方の貧農は、男女を通じて無關心であり、わけてもさういふ階級の婦人は棄權する者が極めて多い。婦人の參政權がブルジョア政黨を支持する結果となりがちなのは、婦人の中の政治的自覺あるものはブルジョア階級に屬し、無產階級に屬する大部分は無自覺であるといふ事實によることが、これによつても明かである。

各國を通じて、婦人有權者は直接當面の、日常の利害によつて最も動かされ易く、從つてその投票が浮動しがちであると認められてゐる。これは各政黨共に、平素に於ては婦人の存在を全く忘れて居りながら、選擧に際しては投票かき集めの必要上、場當りの人氣取政策を並べて婦人の御機嫌を取結ばうとするにすぎないので、婦人の政治的教育と訓練との不足の結果であると認められてゐる。

婦人參政權が、少くとも實施の直後に於ては、反動勢力を支持する結果となることは、大體先進國の經驗によつて疑ふ餘地がないと思はれる。そのせいでもあらう。昨年夏、政友會が婦人參政權をその政策の中に加へると傳へられた時、ブルジョア婦人團體は一せいに歡呼したにひきかへ、無產婦人團體はうろたへ氣味で、むしろ不機嫌であつた。その聲明書の中には、既成政黨が反動の支柱たらしめんがために婦選を利用することに反對する。吾々はその時機はおくれても、無產政黨の手で婦選を獲得せんことを誓ふものである、といふことが主張された。これは前揭のフランスやベルギーの社會民主々義者と同じ立場に立つところの、一種の婦選尙早論である。かく主張する人々は、社會民主黨內閣出現の日まで、又は××××××××、――婦選の要求を保留するべきだといふ――結論に達せねばならぬ。然らば現にブルジョア政黨が壓倒的多數を占めてゐる議會に向つて、婦選即行を要求することは、根本的な矛盾であるといはなければならない。婦

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

選實施後、婦人の投票が直ちに自黨に來ないことを恐れてこれに反對するのは投票かき集めをもつて能事とする社會民主黨の立場からのみ許さるべきことであり、『投票用の家畜』としてのみ婦人を見る人々にあつて、始めて當然と見なされる。婦選實施後の諸國の例が、いかに無産婦人の無自覺、無組織の結果を示してゐるかと見れば見るほど、吾々は彼女らを敎育し、組織するの必要を悟らねばならぬだけで、婦選の阻止によつて彼女らを無産階級の陣營に引込むことは出來ないではないか。

參政權が直ちに無産階級のために有利な作用をするものでないことは、實の所、男女によつて變りはないので、男子の普通選擧の場合とても同じことである。現に昨年の日本の總選擧でも、九百萬人の新有權者中、無産政黨に投票した者は四十八萬人にすぎなかつた。しかしそれを理由として普選に反對したもの、又は選擧權の擴張に反對した者が、無産者團體の中に一人でもあつたであらうか。

ブルジョア政黨によつて婦人參政權の實施されることに反對する者は、男子の普選にも反對しなければならぬ。男子の普選が――ブルジョアジーの支配的勢力に根本的變化を來さないにもかゝはらず――無産階級の立場から要求せらるべきだとするならば、婦人參政權の場合とても同じことである。要は、婦人參政權がいつ、何人によつて實施せられるかを問はず、無産階級としては必要な準備をしておくことの重要さの問題である。婦人は男子と根本的に異る動物ではない。敎育と組織の度合に比例して、味方ともなり、敵ともなること、男子の場合と同じことである。必要な準備を放置して、たゞ婦選實施の時機の迫ることを恐れるものは、婦人をブルジョアジーに賣るものである。

婦人參政權の收穫

婦人參政權の結果は、その社會的地位にどういふ變化を來したか。ロシアの場合には、婦人參政權と同時に、一切の不平等法律の撤廢が一擧に實現されたから問題はないが、他國の場合には、なほ取殘されたあらゆる不平等法律の撤廢や、特殊の經濟的保護が、徐々に、ぼつり／＼と行はれてゐるのだから事態は甚だ退屈で、しかも面倒である。

婦人の權利擁護は、家庭婦人に關するものと勞働婦人に關するものとの二つの部分から成つて居り、一方では男子と同等の權利を要求すると同時に、他方では特殊の保護を要求するといふ、二重の性質を帶びてゐる。

立法上の地位改善について、各國を通じて第一の問題となつてゐるのは婚姻法の改正である。これは婚姻及び離婚における男女の平等、親權、財產權の平等を主張すると同時に、婚姻に對する敎會の干渉を排除し、これを專ら民法上の制度たらしめる點に、最も重きをおかれてゐる。婚姻に對する敎會の干渉を排除し、これを純然たる民法上の契約としたことは、ロシアの新婚姻法の重要な成果の一つとして認

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

められ、基督教國、特にカトリックの勢力の强い國々では、今なほこの難關を乘切ることができずに、婦人運動は教會や僧侶に對して惡戰苦鬪を續けてゐる。婚姻が民法上の制度以外の何ものでもない日本では、この點について、ロシアその他の國々の當面せる障害を理解することが困難な程である。例へばオーストリーの如き各宗派によつて異る婚姻の規定を有し、最も嚴重な規定をもつカトリック教の如きは、絕對に離婚を承認しないので、其結果として種々なる弊害が生れて來る。

婚姻及び離婚の自由は、必然に姦通者處罰の廢止、私生兒に對する差別撤廢の要求を伴なつて來る。最近にはベルギーで姦通によつて離婚した婦人に對し、その相手方との結婚を禁ずる法律の廢止が議會で問題となつたが、結局離婚後三ケ年間の猶豫を附する條件つきで、社會黨とカトリック黨との間に妥協が成立した。

ドイツでも民法中婚姻法の改正が昨年度の議會に上程せられた。即ち姦通を理由とする離婚の後、姦通者同士の結婚を禁じた法律を撤廢し、婚姻の繼續が不可能と思はれるやうな關係に立ち至つた場合には相互の協議により、又は一方の意思のみによつても離婚を許可し、且つ配偶者の一方が發狂した場合にも、離婚を卽時に許可する改正案が提出せられた。フランスとアメリカでは、婦人は外國人との婚姻後も本國の國籍を失はず、本國の法律の保護を受け得るやうに法律が改正された。婚姻における平等は、原則として既に異論なきにもかゝはらず、法律の改正は遲々として進まない。

家庭婦人の利益に關しては、産兒調節法の公認、人工流産——墮胎處罰法の廢止が要求されてゐる。前者は專門家による姙娠防止の安全な方法の傳授を、國家の保健衞生事業の一部として、健康相談所の仕事の中に加へることを要求し、後者は、墮胎に關する刑法を改正して、これを犯罪と認めさせまいとする要求である。(ロシアでは健康上、家庭又は公務の都合上、姙娠中絕を希望する者に對しては、醫師が適當な方法を講ずることが許されてゐる。)これらの要求はいづれもまだ承認されてゐない。

母子保護法は、産業勞働者たる婦人の、産前産後の休養と其期間の手當に關する制度と、寡婦遺兒に對する年金制度との二つの方面に分れてゐる。各國の勞働法は形式的には産前産後二週間乃至六週間の勞働を禁ずることによつて母體を保護してゐることにはなつてはゐるが、其期間の手當と乳兒保護の施設が伴はないので、實質的には有名無實に歸してゐる。たゞ英國は、健康保險制度の一部分として被保險者たる女子又は男子勞働者の妻に、出産手當を支給することになつて居り、ドイツでも申譯許りの手當が支給される。ドイツでは産前産後の保護規定を家婢にも適用しようとする運動が行はれ、中流婦人の憤激を招いてゐる。産前産後各六週間乃至八週間の休養とその期間の賃銀全額支給、乳兒哺育に關する手當と施設等は、勞働婦人の國際的要求ではあるがロシア以外では未だ實現されない。社會黨、勞働黨

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の政府が、この點で公約を果した例はまだ存在しない。

　有名な寡婦年金法は勞働黨自慢の政策の一つであり、保守黨內閣がその案を踏襲して骨拔きにした擧句、形骸だけを實施したものである。寡婦は末子が十四歳半に達するまで、極めて僅少の扶助料を下附される。數人の子を持つ時は、次子以下の扶助料は長子の三分一ほどの割合にしか當らず、しかも資格が面倒なので、全英國を通じて、この恩典に浴してゐる寡婦は、僅かに二萬五千人にすぎない。

　婚姻法の改正、母子保護法と並んで重要なものは、婦人勞働の保護である。婦人の坑內勞働、夜業及び危險又は有害なる作業の禁止等は主要な資本國では昨今漸く實施期に入つたが、其等の國々の統治する屬領又は植民地は、さういふ法令がまだ實施されてゐない。英國は國際勞働會議の八時間勞働法に漸く批准を與へ、ドイツは革命によつて獲得した八時間法を、ドーズ案のために放棄せしめられた。同一勞働に對する同一賃銀、婦人に對する失業手當の差等撤廢、既婚婦人に對する就職上の制限撤廢等は、婦人勞働の增大と共に、ます〳〵強く要求されながら、ブルジョアジーの省みるところとならない。なるほど職業の自由は、殆んど無制限に擴大された。しかしそれは男子と同じ仕事を、より劣惡な條件で遂行する場合に限られて居り、從つて一般的に賃銀低下を來し、失業の脅威、職業爭奪戰の激化等、一層深刻化した奴隷化を結果したにすぎなかつた。婦人參政權の十年間は、期待せられた通り形式と名目の解放にすぎなかつた。

參政權の意義の教訓

　けれども、それならば婦人參政權と、その運動とは、全然無意味であつたらうか。

　參政權が直接に婦人問題を解決する力を持たないといふ點では、それはさほどの犧牲や鬪爭に價しないものであることは疑ふ餘地がない。けれども最初からさういふ期待をもつて參政權を要求することそれ自身が誤まつてゐるので、參政權のもつ意義と教訓とは、全然別個の方向に求められなければない。

　參政權の獲得は、第一には、全世界の婦人大衆に――最も後れた東洋の半未開國の民族の婦人にさへも、社會における婦人の正しき地位と權利とについての自覺を與へた。自分らも男子と同じ人間であり平等の權利を要求すべきであることを、最も虐げられ、最も奴隷化された婦人にまで教へて、始めてその目を開かせた點では、參政權は最も効果的な教育の手段であつた。第二に、勞農ロシアにおける婦人解放の實驗が、資本主義國の婦人參政權と同時的に行はれ、この二つの事實の相並行した發展の過程を比較硏究する機會を得たことは、殊に後者の意味を知る上に少からぬ貢獻をなした。婦人參政權は、最後の決勝點であり、一切の問題を解決する鍵であると教へられた者は、今やその性質を、その限界を、參政權そのものを通じて、現實に知ることができたのである。**參政權は、その實施によつて、婦人の政治的自**

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

覺を刺戟すると同時に、その結實として、參政權そのものに對する幻影をも打破するといふ、二重の教育的效果をあげつゝあるのである。

世界の無產政黨は、過去において婦人の教育と組織とに無關心であつた必然の結果として、彼女等がいかに完全にブルジョアジーの影響力の下にあるかを、參政權によつて始めて知り、且つ驚かねばならなかつた。第三インタナショナルは一九二一年以來、國際婦人局をおいて無產婦人運動の發展に努め、第二インタナショナルも又、これに對抗すべく、中央委員會の下に、國際社會主義婦人委員會をおいて、各國の運動の聯絡統制に任じてゐる。

ロシアに於ては、資本主義撤廢、新社會建設のために、婦人の協力が必要とされた。ブルジョア諸國では、資本主義の沒落食止のためにその復興と安定のために、婦人に形式的平等を與へて、その協力を求めてゐる。平等參政權の裏には、資本家的搾取に對する平等の負擔、來るべき帝國主義戰爭に對する平等の參加義務が要求されてゐる。一部の極端な女推論者は、婦人勞働に對する特殊の保護及び制限の撤廢を要求してゐる。又ドイツに於けるが如く、婦人に對して二ケ年の徵兵制度實施を要求してゐる婦人團體もあり、すべてのブルジョア國家は、國家總動員計畫の中に、婦人の受持つべき役割を明白に規定してゐる。平等參政權は、婦人をして意識的に、自主的に、一切のブルジョアジーの計畫と、その挑む戰ひとに參加させる武器として渡されつゝあるものである。しかし無產階級は、反動的ブルジョアジーの意圖を恐れて平等參政權を回避してはならない。却つてこの武器を奪取して、自分自身の目的に利用するために、進んで階級的な立場からこの要求の貫徹を圖らねばならぬ。婦人參政權をもつて解放そのものと見なすことはもとより誤まつてゐる。けれどもその深大な教育的効果を無視して、卑屈な利己的な、目先の打算主義の上に對策を立て、婦人の進出を阻止することもまた同じ重大な、根本的な誤謬に陷るものである。婦人參政權にとつて代表される平等の地位と公的活動とは、資本主義社會に於ては、專ら破壞的な任務をもつと同時に、その後に來る社會主義社會の建設と組織とのために、婦人を準備し、訓練する任務をもち、そのために利用されねばならぬことを忘れてはならない。社會主義の社會は、資本主義社會の胎內に孕まれつゝある。舊き社會秩序の破壞にも、もとより婦人の協力は必要である。けれども×××の瞬間から着手されねばならぬ建設的な一切の事業は婦人の協力に俟つことが一層必要であり、重要であるとされてゐる。そしてその準備は×××になされねばならぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

封建殘存勢力の批判

龜井貫一郎

不人氣を極めた田中内閣も終に倒壞した。倒壞の原因が何にあつたかは今日之を一々探聽するにも及ばないことであるが、滿洲某重大事件と共に樞密院が詮議立てをした不戰條約問題も田中内閣の倒壞に向つて重要な一作因であつた樣に認められる。かるが故に田中内閣の倒壞を喜ぶにつけて、やゝもすれば、樞密院が不戰條約に關して取つた態度が世論から看過せられんとする惧れがないでもない。私は國民の一人として政友會内閣の倒れた事を慶賀する一人ではある。だが併し、近時舊官僚の徒が樞密院に蟠居して之を先にしては若槻内閣を倒し之を近くにしては政友會内閣に對して政治的恫喝を試みた事を以て、誠に許す可からざる事と感ずるものである。

× × ×

だが、聲を大にして、樞密院先に憲政會内閣を倒し之を後にして田中内閣をとつちめると云へば、如何にも樞密院と云ふ一團が有機的に結合して、斯如き致す可からざる立憲政治上の罪過を行つて居る樣に見ゆる。だが私の云はんとする處に其の意味ではない。私の知り得た限りに於て、樞密院中、一部の人々は近時の樞密院の傾向を見て誠に苦々しく思つて居らるゝ樣である。之は主として濱尾男や穗積男の逝去によつて著しく其の影を薄めた觀はあるが學者團である。他の大部分は、樞密院が其の活動の一定の制遏を加へらることに對して積極的な反對を爲さざる人々であるとのことである。然らば、形式上は樞密院の名に於て爲されて居ることでも、實質上何人の力に於て爲されるかと云へば、之を前にしては伊東巳代治と平沼騏一郎、之を後にしては再び伊東巳代治である。彼等二人の野心と老人の共通心理の巧妙なる把握の前に他の人々の謙譲勝ちの魂と又老人として樞府顧問官の地位に對して有する歴史的見解とが其の人々の理論と他の感情に打勝つて、四五人の例外を除いて、樞密院の大勢を造り出だすのだそうである。

× × ×

現在の政治に於て何が不愉快だと云つて、伊東巳代治伯の存在程不愉快な存在はあるまい。

恐らく田中内閣を倒すと云ふことは、この前には積極的に若槻内閣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を倒さうと云ふ意志の下に彼の行動がとられたのに反し、今回は左様ではなかつたらうと考へられる。故後藤伯から總裁を貰つたことを繰返し度かつたのか、田中前首相を通じ久原前遞相から名刀一振献上されたことを今一度繰返したかつたのか、或は百五十萬圓位の相場を出したかつたのか、侯爵になりたかつたものであるのか、いくらよく踏んでも、後繼內閣の首相に出直らうと云ふ考からであつたとは毛頭考へられない。內閣を潰さないで只いぢめ樣と云ふのである。彼の憲法論を直截簡明に押し進めれば、內閣を潰しても、不戰條約は御批准なき樣にと御諮問に奉答するか或は第一條に關する明瞭な留保でなければならないのである。政府は中外に對して何と云つて居るかと云へば「政府は第一條の文句が憲法違反であるとは思はないが憲法違反なりと解する一部の議論が出て來た。其處で不戰條約其のものの重要性に鑑み國論を統一して御批准を奏請することを必要なりと信じ「帝國憲法の條章より見て我國に依り適用なきものと了解する宣言書を附し本條約の御批准を仰ぐ可く提案したものである」と發表して居る。然るに伊東精査委員長の報告書並に報告說明には、前の方には憲法違反なりと述べて居らるゝ樣でもあるが、後の方では「我國體の名譽の爲め且つ帝國憲法の擁護上御批准書中に「右政府の宣言を存して御批准あつて」然る可きものなりとし、恰も政府の宣言及び解釋を妥當とし、從つて、必ずしも直ちに以て憲法違反と一概に解す可きものにも非ざるやの印象を抱かしむるに成功して居る。尤も私は本會議の樣子は新聞の傳ふる處と二三の人の話から承知した次第を眞實なりとして論じて居る點は了承を乞はねばならない。だが、眞に斯如しとするならば、此處に伊東顧問官は明に、一面政府を脅かし、他面政府と共に兩面的解釋の責任を分擔しながら、他の顧問官をしては、兩面的解釋の孰れかは、各自が自ら解釋する處に從つて行動を決することを許したものである。

だが、兩面的解釋を許す此の名案も結局は行詰らざるを得ない筈であつた。若しも田中內閣が存續したならば、必ず引掛る筈であつたのは、宣言書の英又は佛譯である。是は和文を英佛文に飜譯する多くの人々が逢着する處の困難であるが、和文は往々にして一讀極めて具體的の觀念を表現して居ることと思つても、再讀三讀すると漠然として明確なる觀念を捕捉し得ざる事が多い。「憲法の條章より見て我國に限り適用せざるものと諒解する」と云ふ文句は、日本文として兩面的解釋の上乘のものである限りに於て、果して憲法違反を意味して居るのであるか、そうでないのか、不明瞭でありながら、一讀何かの意味を持つて居る樣に見える處の日本文の一例である事を洩れない。然るに英文若しくは佛文は、殊に法律又は條約關係の文章に於ては、たとへ文句は非常な論理的外觀を持つて居らなくとも、其の表現する意義は極めて具體的な明確な觀念を表現す可きこととなつて居るのであるが故に、この飜譯は——之は外務省の某高官も言つて居られたことであるが——兩面解釋中孰れか一方の觀念を明瞭に表現しなければ、全

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く意味のない英文又は佛文になつて仕舞はなければならないものである。そして孰れかに意味を明瞭にする場合に於ては、田中內閣は或は議會と或は樞密院と重大なる意見の相違を經驗す可き立場にあつたものであると言はねばならない。だが、不戰條約問題を論ずることは今日の目的ではない。此處で知らねばならないことは、伊東顧問官は、法律又は條約の解釋問題に關して――か丶る問題に樞密院が手を觸ることの可否は別として――意義明白なる可き報告を爲さねばならない地位に置かれながら、極めて意義不明確なる報告をして得々として居ると云ふ極めて單純な事實であつて、內面事情に關する道途の風聞は暫く措くも、同伯の報告が單純なる法律條約の解釋のみに立脚して居るものに非ずして、一の政治的顧慮が加味せられて居ることは、事柄の性質を甚だ重大にするものであると云はねばならない。

× × ×

樞密院官制には樞密院は施政に干與することなしと規定してある。或る人は伊東伯の今回の擧措を辯護して斯く言つて居る。「此前には、樞密院が施政に干與せずと云ふことは、樞密院が御諮詢を受けない事項に關して彼れ此れ主動的に內閣や議會や行政官廳に干渉出來ぬと言ふことで、御諮詢の事項に關して何を言はうとは勝手である。夫れが內閣の政策に衝突する場合に施政に干與するに至るのは免れ難き處であると言ふ立場から、若槻內閣をして辭職の不已得るに至らしめたものであるけれ共、其の結果、世論の反對を買つたのである。故に今回は一方に於て樞密院の機能を發揮しながら、他方施政に干與しない樣にした處に伊東伯斡旋の苦心が存したのである」と。施政に干與しないとしたならば夫れは甚だ佳い。だが、夫れならば何も今回の樣なゴタ／＼を引起さず共、數回の前例にあるが如く警告附で政府提案を承認すればよかつたであつて、本條約が樞密院に御諮詢にならない前に伊東伯が取つた行動の如きは、大權干犯の問題も起らうし、他方少く共實質的に施政に干與したと云ふ非難は免れ難きものであると云はねばならない。

× × ×

一番厄介なのは、だから、樞密院の伊東巳代治伯であるとか金子堅太郎子とかの持つて居る處の自分等は憲法の生神樣であり、自分達こそ憲法の最後の番人であると言ふ自負である。彼等は伊藤公の對手をして憲法の起草に與つた。起草された憲法を起草者自身を首班とする內閣で議して居つては何にもならないとせられた。又國民議會を召集す可しと云ふ民間の議論も採用し難いとせられた。其處で特別に樞密院を組織して之に內閣各大臣を加へて憲法草案を附議することとなつて出來たのが今の樞密院の前身である。この樞密院は憲法、皇室典範、議院法、選擧法、貴族院令を制定して其の當面の任務を終つたのであるが、更に憲法發布迄存續し、明治二十三年十月憲法發布と共に新官制として制定されて更生したのが今日の樞密院である。伊東伯、金子子は其の間終始顧問官たりしもので、彼等のみが憲法の有權的解

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

釋を爲し得るものであるとの飛んでもない自負が其處から生れるのである。起草者が解釋者たり得ざることは三權分立の精神であることは別として、彼等のイデオロギイを分析するに於て、此處にマザ／＼と我國近代經濟史の上層建築としての我國近代政治史の如實の姿を見る。畢竟彼等は官僚政治に轉下したる我國藩閥政治の――山縣死し松方死したる今日に於ての――殘存物であると云ふことである。

× × ×

彼等の政界攪亂の影響が如何に大なりとしても、彼等の實勢力は社會的に見て今日決して強くない。今日既に彼等の嘗つて依據したる處の元老はないのである。五六年前に政界の上層の一部に元老の後繼者を作ると云ふことが問題となつた時に、傳へらるゝ處に依れば、西園寺公は斷然之に反對されたと云ふことである。

政權の受授は決して元老の容喙す可き限りでない。政府が內閣を投出した時に政權は當然反對黨の第一黨に赴く可きものである。此の慣習さへ樹立せらるゝならば、元老の必要がないと云ふのが西園寺公の意見であつたと承知してゐる。今回田中內閣が總辭職を決行した時に、西園寺公は躊躇する處なく民政黨總裁濱口雄幸氏に大命の降下ある可き樣奉答されたことは、明に前述の西園寺公の意見を裏書したものであると云つて差支ない。今日元老はない。かるが故に、樞密院の憲法の生神樣をして其の實勢力以上の權威を政界で擅まゝにせざる樣にする爲めには、相當の處迄爲し得るものであると信ぜられる。

樞密院廢止とか其の官制の改正も近き將來に於て實際政治論の問題として考へられなければならず、又其れに向つての輿論を起しても行かなければならないが、何より必要なことは、樞密院を例へば英國の如く三百幾名の顧問官が實質上は皇室の儀式に參加することによつて其の職分の全部を果して居る樣な狀態に導くことに對して、樞府の官制は其の儘としても、政黨が不斷の努力を續ける事が肝要であると云はなければならない。然るに既成政黨は之等に對して殆んど言ふ可き努力を爲して居らない。畢竟樞密院の今日は、既成政黨の無力、それは必然的に日本に於ける新興ブルジョワジイの封建的絕對勢力に對する鬪爭心の缺如其のものに原因を求めなければならないと信ぜられる。マルクスは一八四八年獨逸の新興ブルジョワジイの無力を指摘して居る。筆者は少く共、現在の既成政黨は、一方に於て樞密院を厄介視しながら、他方夫れと共通のイデオロギイを多分に持ち合せて居る事實に、樞密院が立憲制度運用上の障害たるに至つた今日の狀態の原因の最たるものを發見する。

× × ×

樞密院と政府が爭つたことは、加藤友三郎內閣の時、支那と日支郵便條約を締結した時に於て一度あつた。樞密院官制に一國家の約束は諮詢を經べきことになつて居るに拘らず、加藤內閣が日支郵便條約を樞密院に御諮詢を奏請しなかつたと云ふ事が原因であつた。外務省は前例を引いて釋明をしたが樞密院が收まらず、樞密院の上奏となり一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

方政府の反對上奏となり、終に兩方に御沙汰書が下るに至つたのである。然るに若槻内閣の時はどうであつたかと言へば政府は卒然として掛冠した。政府は憲法第八條「天皇は公共の安寧を保持し又は災厄を避くる爲め緊急の必要により帝國議會閉會の場合法律に代る可き勅令を發布す」の緊急勅令で、日本銀行をして臺灣銀行に對し無擔保で特別融通を爲さしめんとし、又第七十條「公共の安全を保持する爲め緊急の必要ある場合に於て内外の情形に因り政府は帝國議會を召集する能はざる時は勅令に依り財政上必要の處分を爲すを得」で日本銀行に對し二億圓を限度として補償し得る事としようとしたのである。之に對して樞密院は銀行恐慌は「公共の安全を保持し又は災厄を避くる爲め」の場合によらず、又補償は議會召集の上で爲すべく議會召集の暇はあると云ふ意見に基づいて反對した。私は若槻内閣の措置を無條件にいいと云ふものではない。併乍、先づ反對の上奏をし、其の是と信ずる政策で補弼の責任を全ふする上から、窮局迄樞密院と爭つて見ることは、日本の政治史の上で決して意義なしとしなかつたのである。況んや其後瞬時にして政府の見解を救ふ可き情形は展開されたのである。銀行恐慌は公共の災厄であつたのであり、議會召集の暇もなかつた事が明になつたのである。田中内閣の不戰條約の場合に於ては、政府は第五十六議會で明に不戰條約第一條は憲法違反に非ずと稱し原案のまゝ御批准を奏請す可き勢を示しながら、樞密院一角の洞喝に逢つて忽ち膝を屈して宣言文の附加を承諾するに至つたのである。若し田中内閣が不戰條約に對する其の元來の見解を固守して堂々と樞府と爭つたならば、定めし死花が咲いた事であらうと思はれる。だが田中首相も樞密院の議論もいゝと思ふ氣持を持合せて居る處に樞密院の勢力を强大ならしめる原因があるのだ。

歷代の既成政黨内閣が樞密院の構成自體に對して取つて來た措置も決して積極的だとは言はれない。有力者自然の死滅を指をくわへて待つて居たことは、政黨者が元老に對してとつた態度と何等選ぶ處はない。山縣公が樞密院議長であつた間は殆んど沈默を守り通して來た。只、流石に原敬氏は、大正十年三月皇太子御外遊問題に關して樞密院一部の内議に對し敢然として戰つたことはある。英國では日本に於ける政界最上層の有力なる封建勢力が御外遊に反對して居ると言ふ事から、五月七日英國ヴイクトリア停車場に下り立たせ給ふた當時の皇儲殿下は、恐れ多いことではあるが、實は皇儲殿下の御身代りであると云ふ風評を信じた二、三の新聞もあつた位であつた。だが此の當時、原氏が皇太子妃冊立問題共に本問題とに關連して山縣を葬むることに腹を決めたのは、山縣公晩年の衰弱を見越した上でのことであつて、大して積極的な行動とは言はれない。だが原氏が斷行に依つては樞密院議長としての山縣公の引退を迫る迄の覺悟であつたと云ふことは筆者の二三の人から傳聞した處である。大正十一年淸浦子が議長となり又子が宰相の印綬を帶ぶる爲めに議長を辭するや、學者の濱尾男が議長になつた。之は傳聞する處に依れば、樞府の政治的勢力を純中立化

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

する爲めに爲された處の西園寺公の奏請が與つて大なる力があつたとのことである。

濱尾男の逝去の結果、之も學者である穗積男が議長となられた。之は半ば西園寺公の前述同樣の動機に基く意向と故加藤伯が矢張其の趣旨の奏請の結果であると承知して居る。故加藤伯と云へば、昔の英國流の憲法論から、明治三十一年以來、外務省機密文書は之を元老に送付する慣例になつて居たのを、大隈内閣の外相時代に斷然中止したり、又は例の對支二十一個條交渉の時に當つて山縣公から外相宛に來た大部の意見書を封も切らずに机の抽斗に押込んで置いたと云ふ人であつたから、西園寺公の樞密院を純中立化する意見に個人として贊成した譯でもあつたのであらう。若槻内閣の時、穗積男の逝去に當つては若槻首相は副議長倉富男を議長に奏請した。之は若槻氏としては西園寺公の意見も考へた事であらうが寧ろ單に前例を追つたものであると考へられる。が兎も角山本伯淸浦子齋藤實男の樣な大物を樞府に捲き込んで來て樞府の勢威を加へんとする一部の策動は阻止されて來たのである。斯く概觀すれば、有力な二三の政治家が個人として樞府改造に向つて二三のはかない努力を試みた以外に、憲政常道と云ひ樞府の純中立化と云ひ、當然之に努力す可き政黨は反つて一方に怯懦であり他の一方には反つて憲政逆轉の策動を試み、憲政常道、樞府の純中立化は、主として一進歩主義者自由主義者たる老人に依つて實現されんとするのは、如何に現在の既成政黨が、口に立憲政治を唱へながら、其理論的意識は自由主義倫理觀の洗禮だも受けざる處の、保守的封建的政權獲得集團であることを雄辯に證明するものである。封建的保守的絕對主義排除の鬪爭が政黨自體の力に依つて意識的に爲されざる處に現狀が横はると云つて差支ないであらう。此原因は後で簡單に觸れて見るであらう。

× × ×

既成政黨が樞密院と鬪ひ度く共、現行樞密院官制の下に於て、鬪ひ得ないではないかと云ふ人がある。限られた紙數に於て此點に關る具體的な案は今日之を提示しないで置く。今は單に樞密院の議決は、唯其の意見を開陳して參考に資するに止まり、其の採決せらるゝや否やは、國務大臣の輔弼に依り、勅旨を以て定まるものであつて、其の採決せられざる場合と雖も、毫も國家の意志としての効力に影響することはないものであり、諮詢ありたる事項に對し樞密院が反對するも、諮詢ある可き事項に對し諮詢を經ずして勅定せられたりとするも、其の効力は之が爲めに何等妨げらる可きものでなく、公式令の規定の「諮詢を經たる旨を記載し」とあるは樞密院が承認しても反對しても其の結果如何に拘らず、單に御諮詢があつた事實を記載す可きものと解す可きもので、若し此解釋に異論があつたとしても、公式令は憲法附屬の勅令と解し得ざるが故に、内閣は必要ならば樞密院の諮詢を經ずして公式令の文句を改正する勅令の制定の奏請を爲し得ると云ふ根本原則だけを明にして置けばいゝと思はれる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

餘りに平面的な敍述を試みた爲にこの紙數に於て盡し得ないことがある。夫れは何によつて樞密院を封建的殘存勢力と規定するかと云ふことである。だがこの事は今日の我國政治史の理解に於て今更說明を必要としない程明であると信ぜられる。又私は現在の旣成政黨の、又其の經濟的に依據する處の新興ブルジョワジイの封建的勢力に對する無力又は苟合を指摘した。この事は從つて眞の民衆的政治確立の任務が新興勤勞階級の上に轉落するものであることを意味する。即ちあらゆる政治的改革は無產階級の動力なくして又は其の手に依らずして行はれ得ないことを意味する。乍併、我國新興ブルジョワジイの封建的勢力に對する無力又は苟合の必然性は、其の發展の歷史過程を吟味することによつてより明瞭となる、ものであると信ずるが故に此點を附加して本稿を結び度い。獨逸に於て舊帝國の支柱は封建的主權と近代資本主義の適合にあつた。封建的主權の支持者はユルケルと稱する地主階級であり、之が近代國家組織の强さの洗禮を受けて、王權の下に强力なる軍隊を編制し、高度の中央集權制政治と官僚的地方政治を編み出した。其の所有地の生產力の發展の爲めに喜んで新興商工階級と握手し、新興商工階級は、前者によつて、自個に有利な關稅政策、自個の爲めの外交政策、運賃又は他の特權による輸出奬勵政策を保證し、反社會運動立法を獲得して自個の地位を安全にしたものである。即ち佛國の中產階級が封建制度打破の任務を果たした間に獨逸商工階級は元來自由主義倫理觀を獲得して封建制度を一掃するの其の任務を懈怠したことから、戰前の獨逸專制政治を招來して破局を見るに至つたのである。我國に於て明治の維新が如何なる特徵の下に於て行はれたかと云ふならば、德川幕府の鎖國政策の故に、海港都市即ちブルグに發生した商業階級即ちブルジョワは其當時十分に成熟して居らず、工業階級即ち「座」と稱するギルドは諸侯の保護の下に立つて自力を有せず、維新は、國際的狀勢の上から國家を統一し國內商業生產力を擴大し工業生產力を開發すること喫緊なりと認識した智識階級主として武士階級の力に依つて爲されたのである。彼等の團結「私緣的共同社會」であつて、從つて其の最初は明瞭なる鄕士關係であつたが中央集權的官僚政治の組成に當つては能動本位が加味されて藩成關係に移つた。之を通稱して藩閥と言ふのである。大商工業層は、紡績資本を唯一の例外として、悉く藩閥の手によつて育成された。かくして地主から近代產業資本家に移らなかつた地方ブルジョワジイは藩閥政府の虐遇を受けた。明治六年の地租改正條例が夫れである。之に對する地方地主の政治的反抗が政友會の前身たる自由黨であり、之が明治三十四年藩閥の一部と夫とを提携したまゝの都市ブルジョワジイの一部と結合して出來たのが今の政友會である。之に內部的に對立する藩閥の他の一部と夫れに結合したまゝの都市ブルジョワジイの結合から發生した處のものが同志會であり民政黨であるに過ぎない。さすれば、外國に於て都市ブルジョワジイが自力で發達し、封建的王權的勢力を排除

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

してチャータード・シティを建設し、其の都市から近代民衆政治を生んだ苦闘の傳統や訓練や意識は日本の兩大政黨にあらざる所であつて、反つて其の片影は舊實業同志會現國民同志會に見得るに止まつて居る有様である。私は結論を急ぐ。だから、重ねて云ふ、我國民衆政治確立の全面的任務は、擧げて、勤勞階級にあり、其の自らの手に依るに非んば、或は其壓力に依るに非んば自由主義の任務の一つだにも完成されないであらう。從つて新なる自由は、封建的勢力に對抗するブルジョワジイの自由に非ずして、封建的勢力とブルジョワジイとに對立する勤勞階級の經濟的自由と政治的自由に方向轉換する事に、歷史必然の推移があると云はねばならない。(終)

河上肇著
資本主義經濟學の史的發展
特製定價金五圓
郵税金二十四錢

河上肇著
經濟學大綱
經濟學全集第一篇
○資本家的社會の解剖○資本家的經濟學の發展
(配本濟)

山川均・石濱知行・河野密著
唯物史觀經濟史
經濟學全集第三十二篇
○資本主義以前經濟史○資本主義の成立とその後に於ける經濟の發展○社會主義經濟の發展
(配本濟)

カール・マルクス著・高畠素之譯
改造社版 資本論(全譯)
全五冊
定價各冊一圓
郵税各冊十八錢

改造社發行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

時評

憲政の常道

山川均

今から一年前、張作霖の荅乘した特別列車の中から、或は外から、爆彈が飛び出した。この爆彈の破片のために、張作霖は横死した。この爆彈の怪むべき素性については、當時いろ〲の奇怪極まる風評がほとんど公然の秘密として（少くとも田中內閣の檢閱の手の屆かぬ諸外國では）流布された。しかし一般大衆の眼には、一切萬事は爆發が起して濛々たる白煙黑煙の煙幕のうちに終りを告げたものと思はれた。ところが意外にも、この爆彈のかけらの一つは、その時以來、滿洲から日本を目掛けて飛行をつゞけてゐた。そして一年後の今日、田中內閣の頭の上に落下した。田中內閣が反對黨の攻擊のために斃れず、無產政黨の打倒反動內閣の聲に倒れないで、却つて張作霖を斃したその同じ爆彈の破片で横死を遂げたことは、何かの因緣といふものかも知れぬ。

田中內閣の成立の理由は、外に向つては、滿洲および支那に對して帝國主義政策を强行し、內に向つては、資本帝國主義の發展の途上に横はる一切の抵抗力、なかんづく新興階級の反對勢力を殲滅することにあつた。田中內閣は、この使命を大膽に且つ忠實に遂行したと云ふことができる。ことに對內的な方面においては、究極的な效果はしばらく別として、少くとも差當り、殆んど完全に近い成功を博したと云ひ得られる。

田中內閣の對支外交は、そこゝでボロを出したにも拘らず、大局においては、ブルジョア的意味において必ずしも失敗ではなかつた。支那の國民革命は、兎も角も、ブルジョア的所要の範圍內で堰き止めることが出來た。支那は曲りなりにも、ブルジョア的政府の下に統一の曙光を見た。政權が蔣介石と國民黨多數派の手に固定する限りには、

國民革命は、、、、、、、、、、、に發展する氣遣ひはない。反帝國主義的革命運動の波は、所要の如く、滿洲の入口で、見事に喰ひ止められた。言ふまでもなく、かような政策を强行するためには、若干の摩擦を起こさゞるを得ぬ。これは對日反感の增大と對支貿易の障害であつた。そこで田中外交のブルジョア的意義は、わが國の帝國主義的資本は、先づ政治上の目的を遂成するために、若干の經濟上の損失を犧牲にしたといふことを意味してゐる。帝國主義的資本の支那における政治上の目的が、ほぼ成就せられた今日は、剩すところは、この政策の强行によつて起つた摩擦を除き、油を差し、そして經濟上の損失を唯だに取り返へすばかりでなく、これを擴大することである。今日以後の對支外交は、實質上の利益を中心目標としなければならぬ。通商條約の具體的な締結の如きも、寧ろこの部類に屬してゐる。この役割が、赤面の田中外交に不向なことは云ふまでもない。この邊りで拍子木と共に舞臺が回はり、別個の役者によつて別個の役割——云ふまでもなく同じ筋書の——が演ぜられる仕組は、ブルジョア二大政黨主義の妙味の一つにちがひない。

對內政治においても、田中內閣は、その委託せられたところの任務をほゞ成し了へた。田中總裁が××の殲滅を、田中內閣二ヶ年半の治績の第一に數ぞへてゐることは別としても、勞働階級の大衆的な組織たる組合は、（農民の組合もまた）田中內閣の下において徹底的に潰滅し、もしくは徹底的に無力化された。勞働者と農民と小市民層との一切の反ブルジョア的勢力が、帝國主義的資本に對して獨立した一致治勢力に結成しようとする作用は、田中內閣の下に、ほとんど致命的に打ち破られた。帝國主義的資本は、經濟上の方面では、最小の抵抗によつて『合理化』を完成することが出來るように、政治上の方面では、最小の反對勢力と最小の攪亂的作用の前に、反動勢力の最大の結成を遂行することが出來る。

しかしながら斯ような政治上の目的を成就するためには、田中內閣は——對支外交においてのように——幾多の經濟上の讓歩と妥協をした。この讓歩と妥協は、十八億を突破した田中內閣の空前の大豫算に現はれてゐる。帝國主義的資本の所要は、產業の徹底的な整理に基づく再建であつて、この整理と再建とは、政友會の放漫政策ではなくて、民政黨の緊縮政策によつて實現される。田中內閣の謂ゆる積極政策は帝國主義的資本がその同盟者を得るために、そしてこれによつて新興階級に臨むべき最大な勢力をその周圍に糾合するために、若干の經濟上の讓歩をしたことを意味してゐる。かような政治上の目的は、完全に成就せられぬまでも、最も順調に進行すべき軌道の上に乘つてゐる。舞臺は回轉し、役者は交替しなければならぬ。

かういふ役割を持つた田中內閣が、無產者小市民の大衆に取つて『反動內閣』以外の何ものでもなかつたことは云ふまでもないが、既にその役割を演じ終つたあとの田中內閣は、ブルジョア反對派に取つても厄介な荷物であつた。田中內閣の存在は、ぢめ〳〵した梅雨空と共に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

國民大衆の心を陰鬱にした。田中内閣の行動のうちで、何か一番、廣汎な國民大衆を喜ばせ、その希望を代表したかと云へば、その瓦解であつた。田中内閣の瓦解によつて、國民は梅雨晴れの如くせいくとした。梅雨晴れのあとには、民政黨内閣の蒸し暑さが必然的に續づくといふ事實には、暫らく眼を閉ぢて。

かういふ場面に續づく前述の如き役柄を割りつけられた民政黨内閣の政治が、對支外交においても國内政治の方面においても、田中内閣の政治に較らべて幾分（幾分である）リベラルな色彩を帶びるといふことは、容易に考へられる。けれども、これは決して民政黨内閣が、田中内閣の筋書とは別個の筋書別個の脚本を演出するために登場したことを意味するものではない。反對に、民政黨の爲さんとするところ**爲し得るところは、同一の筋書、帝國主義的資本の筋書の單なる續づきにほかならぬ。**たゞに續づきといふばかりでなく、互いに引き離すことの出來ない、有機的に續づき合つてゐる後續の一齣にほかならぬ。從つて、民政黨内閣の政治が、田中内閣のそれよりも、幾分リベラルな色彩を帶びてゐようとも、これは民政黨そのものが、政友會と對立して、その本質においてブルジョア・リベラリズムの政黨であるといふことを意味するものでもない。若し個々の人的要素について見れば民政黨の代議士のうちには、ブルジョア・リベラリズムに近い若干の人々のあることは事實である。しかし斯ような要素は、政友會の中にも見出すことができる。問題は政友會ないしは民政黨のうちに、かような要素が存するか存しないかにあるのではなくて、却つて個人的には斯ような要素が存するにも拘らず、民政黨にあつても政友會においても同じように、かゝる個人的な要素が畢竟個人的な要素として終り、黨の本質の上に何らの影響をも與へ得ぬといふ事實にある。

そこで若し、呪ふべき爆彈の破片が獨り張作霖をのみ斃して、田中内閣の頭の上を通過してゐたならば、そして田中内閣が、決して執着の無い政權に尚ほ一年の間かぢり附かしめられてゐたならば、民政黨一座によつて演出せられようとしてゐる筋書の一齣は、恐らくは、衣裳と假髮とを取り替へた政友會一座の役者によつて演出せられたに違ひない。現に政權から離れた政友會が、看板の塗り替へを急いでゐる**ことが、この形勢の變化を物語る。**

田中内閣の終焉といふ限りにおいては、國民の大衆は、今度の政變に何らの異存もない。けれどもこの政變が、何故に政友會内閣から民政黨内閣への、『憲政の常道』による政權の移轉であるかといふことについては、國民の多數はよし異存を持たないまでも疑惑を持つてゐる。議會において壓倒的な多數を占め、そして議會においては決して倒れることを知らぬ内閣が、議會の閉會中に、一たいどのやうな『憲政の常道』的な事情によつて、晴天の霹靂的に倒れたのか。これは何人も知らんとして知ることのできない憲政の秘密に屬してゐる。内閣總辭職後の議員總會における演説のうちに、森政友會幹事長は議會および地方自治體において政友會が壓倒的な多數を占めてゐる事實を强調し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たあとで、『濱口内閣の成立が憲政の常道によつたものとすれば、この實際勢力の相違を如何に見るか、雲深き所君側に侍る人々は、これを何と考へるか』と叫んだのは（七月四日『東京朝日新聞』）、この政變について、國民に何事をか暗示しやうと試みてゐるもの丶如くに見えた。

　しかしながら、更にもう一歩か二歩かを進めて考へたなら、ブルジョア政治とブルジョア政黨との關する限りにおいては、『憲政の常道』——言葉を換へて云へば、ブルジョア政治の常道、ブルジョア政治の便宜的常規——は、一ブルジョア政黨から反對ブルジョア政黨への政權に移轉が、直接何をきつかけに行はれるかに存するのではなくて、筋書の一齣を演じ終つた瞬間に、在野の役者とその黨派とが、何時でも素直に、その筋書と舞臺とを次の役者に引き渡すといふことに存してゐる。そしてこの交換が最も圓滑に行はれる方法こそ、彼らに取つての憲政のより良き常道でなければならぬ。

　このより良き常道は、ブルジョア民主主義の發達した國々においては、疑ひもなく總選擧と議會の多數にちがひない。なぜならば、ブルジョア政黨の關する限りでは、政權の移轉は……なくて競技である。競技はフエヤー・プレーを要求する。けれども政治がブルジョアの政治となつて幾何にもならず、競技としての政治の練習の足りないところでは、アウトが幾つ續づいてもバットを放さうとせぬ。そこで何人かの絶對的な審判が必要となつて來る。この審判官は、或る時は西園寺公であり得るし、また或る時に樞密院であることも出來る。現に政友會も、この審判官によつて政權を授かつた。そして何らの不平を云はなかつた。民政黨は今、他の審判官によつてこの政權を授づけられ少しの不滿をも感じない。たゞこの審判によつて敗北を宣言される側のみが、いつでも多少の愚痴を言ふ。けれども政友會も民政黨も、曾てかやうな政權移轉の方法を、徹底的に變革しようと試みたことはない。そして今日もまた試みない。なぜならば、少くとも現在の事情の下においては、そして彼らの關する限りにおいては、これは二つのチームの間の政權移轉も最も圓滑に行はれしめるところの、最も便宜な常規であり、即ち彼らに取つての、憲政のより良き常道なのだから。

ガスは漏洩せぬか？

ガス値下げ問題を挾んだ獨占的大企業と二百萬の市民の對立は、最近における社會事象のうちの、僅かに壯觀といふべきものである。ガス料金値下げの建議は、初め無産黨議員の間に計畫せられてゐたが、これを嗅ぎつけたブルジョア市會議員は、この運動のイニシエチーヴを横取りした。彼らの發言の下に、ガス料金値下げ要求の建議は、彼らのためには不幸か仕合せか、滿場一致を以つて市會を通過した。一たい彼らは、ガス問題の荷物を何處に擔はうとしてゐるのか。

ガス會社側の料金値下げの拒絶によつて、問題は第二段に入つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

報償契約の破棄か買收市營かを決定するために、問題は調査委員會の手に移された。この調査が、何時決定的な結論に達するかは、もとより疑はしい。そしてこの結論の得られるまでは市の側からは何ら積極的な行動に出ることはできぬ。市會そのもの丶間にも、契約破棄論者があり、買收論者があり、更に破棄でもない買收でもない論者がある。たゞこの間に望み得られることは、何處からか仲裁者の現はれること丶主務大臣の裁定あるのみである。

これに較らべると、會社側はその作戰において一枚上は手の觀がある。會社は料金値下げの要求に答へる代りに、早くも一億增資の一目を下ろした。この一目は、恐らくは最後まで料金値下げ運動に祟る苦手にちがひない。市會は、會社の料金値下け拒絕に對する次の一目の打ち場所――破棄か買收か――を今から調査する。會社はこの爭議が畢竟は仲裁（主務大臣の裁定も一種の仲裁以外のものではない）によつて結末するといふ豫想の下に、一目を下してゐるかのやうである。仲裁は妥協である。妥協は双方が、要求の幾割かを割引し、又は反對側の要求の幾割かに對する承認を交易することにほかならぬ。會社はこの交易物を用意する。

そこで調査會が確定的な結論に達するまでは、市の態度は、要するに破棄でもなく買收でもない。破棄でも買收でもないことは、市の値下げ要求の背後には、會社を壓迫する何らの力もないことを表明する。調査會の設けられた意圖がどうあらうとも、現に調査會がこの爭議の上に演じてゐる役割は、爭議に對する一種の婉曲なサボターヂにほかならぬ。それは仲裁と妥協の日まで、ガス運動そのもの丶中に鬱積する恐れのあるガスを、漏洩してゐるものにほかならぬ。

ガス値下げの要求が、市民自らの運動として展開せられぬ限り、滿足すべき解決の望まれぬことは明らかであつて、無產黨議員團その他の團體によつて着手せられてゐるガス料金供託運動は、この問題の解決を左右するものとして、極めて重要である。たゞこの運動が、果してどの程度まで市民大衆の運動に發展するかは、おのづから別問題である。若し供託運動が大衆化したならば、勝利は疑ひもなく多數の市民にある。多數は何時でも力である。けれども單なる多數は、何らかの力ではあるが、有力ではなくて無力である。この爭議において、一會社の一重役をして二百萬の市民を向うに廻して戰はしめる大資本と大企業との威力は、既に充分に立證された。これに反して、若しガス運動が市民自らの大衆的な運動に發展しないなら、そして料金値下げの要求がせい／＼會社に增資の（即時の、または他日の）口實と機會とを與へる妥協として終るなら、東京市民は、再び多數の無力を實證するものにほかならぬ。

會社は云ふ、一割何分のガスのロス値下げを困難にすると。けれとも眞實に値下げを不可能にするものは鉛管からガスが漏洩することではなくて、値下げ運動から大衆的要求のガスが漏洩することである。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

最近の勞働爭議

最近の勞働界に見る著しい現象に罷業の頻發、特に小企業における小罷業の頻發である。試みに、五月中旬から六月中旬にいたる約一ヶ月間に、報導せられた罷業三十三件を取つて見ると、東洋モスリンの爭議を除いては、いづれも中位以下の企業であつて、三十三の企業のうち、從業員百名以上のものは僅かに七つに過ぎないで、從業員二十名三十名といふ家內工業を去ること遠からざる地方の小經營が少くない。これらの從業員の總計は八千三百五十人であつて、一企業戶平均二百五十三人であるが、東洋モスリンを除外すると平均從業員は百四人となる。罷業に參加した人員は六千百六十四人、東洋モスリンを除くと二千六百六十四人であつて、平均僅かに八十人となる。

これらの爭議のうちには、勞働條件改善の積極的な要求に基づくものもあるが、これさへも、最近一兩年間漸次に低下した勞働條件が最早や忍びがたいものとなつた爲め、これが復舊を試みようとするものであつて、本質においては、防衞戰にほかならぬ。解雇手當の要求馘首に對する復職の要求は、依然として多數を占めてゐる。企業の閉鎖に基づく爭議が一二に止まらぬことは、小企業が如何に『整』理されつゝあるかを物語る。

さらに著しい事實は、これらの爭議の大多數は、未組織勞働者によつて行はれてゐるといふことである。職業の性質上、組織の困難な戶外勞働者の場合が、三十三件のうちの數件を占めてゐる。要するに昨今頻發してゐる勞働爭議は、主として、吾が國の產業の根幹たる主要部分に起つてゐる主要部隊の戰爭ではない。いな反對に、吾が國の產業の最も脆弱な部分、資本家階級の戰線の最も薄弱な部隊と勞働階級中の最も武器の不完全な、最も抵抗力に乏しい部隊との部分的な遭遇戰にほかならぬ。かような爭議は、一方においては、產業の整理ないしは合理化の方向に向いて行はれつゝある資本主義經濟の再建の作用が、その末梢部において極めて銳利に働いてゐるために惹き起されたものであると同時に、他方においてはこれらの爭議そのものが、直接に小企業の整理を促がす作用ともなつてゐることである。

之に反して主要產業においては、謂ゆる合理化の進行が、比較的有力な抵抗に遭ふことなしに行はれてゐる理由は（少くとも主要な理由の一つは）組織せられた勞働階級の力の薄弱に求められる。吾が國における勞働者の組織率、なかんづく主要な大產業における勞働者の組織率の極めて低くかつたことは云ふまでないが、既に强大であるとは云ひ得なかつたこの力は、最大の抵抗力を必要とする正にその瞬間において、一層無力になつてゐた。左翼組合をもつて任じた鬪爭的な勞働組合は、文字通りに潰滅した。自ら右翼組合と稱して安全地帶に立たうとした組合さへも、果してどれだけの實勢力を維持し得てゐるかは疑問である。況んや勞働組合が、勞働組合の職能を放棄することによつて僅かに形骸を存續してゐることは、事實において潰滅と擇ぶとこ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ろはない。かりに吾が國における全ての組織勞働者が、鞏固な單一の組織と統制の下に結合せられてゐたにしても、その力は、現在の時期における資本の攻勢に對抗するためには、決して充分ではなかつたらう。旣に不充分なこの力が、さらに最も戰鬪的なクリームを拂ひ取つたあとの脫脂乳的右翼組合と、孤立した左翼組合とに分裂對立してゐたとするならば、その結果は容易に豫想することができる。

勞働組合の潰滅無力の狀態が、直接どのような理由に基づいてゐようとも、その結果は同一である。即ち、産業の合理化をモットーとして行はれる資本主義の再建復興の作用が、勞働階級の側からの最小の抵抗と摩擦とをもつて、圓滑に都合よく（資本に取つて）進行するためには、先づ勞働階級の組織を無力にしなければならぬといふ資本のプログラムが、註文通りに行はれたといふことに歸着する。

最近の爭議のうちで今一つの特徵的なことは、紡績の爭議（東洋モスリンはその一つ）であつて、これらの紡績爭議は、いづれも七月一日から實施せられる深夜業の廢止を前にして、實收賃銀が低減せられようとする脅威のために起つたものである。深夜業の撤廢は、勞働者の多年の翹望であつた。しかもその實施の日は、却つて爭議と罷業によつて迎へなければならぬといふことは、深刻な皮肉である。紡績業は過去數年の間、深夜業廢止のために準備した。そしてこの準備が畢竟、勞働の搾取を增大することにあつたことは云ふまでもない。昭和元年と本年五月との數字（紡績聯合會の報告、『東洋經濟』による）を較らべてみると、運轉錘數はこの間に六十二萬一千餘（約一割二五）を增加したが、女工の數は反對に一萬六千四百餘（約一割一五）を減じて居り、從つて女工一人當りの錘數は三四・七から四五に激增した。即ち僅々三年の間に、勞働の張度は三分の一弱を增大したことになる。さらに深夜業の實施を名として實收賃銀が低減せられるなら、深夜業の撤廢によつて得る者は獨り資本であつて、失ふ者は唯だ勞働者である。深夜業の撤廢は、あらゆる進步と改善とが、資本の支配下にあつては如何に曲歪せられるかを物語つてゐる。

森口繁治著
憲政の原理と其運用
定價三・五〇（送料・二四）

坂　內務事務官
三宅　司法書記官　著
增補　普通選擧法要綱
定價・六〇（送料・二〇）

改造社

政界展望台

馬場恒吾

政友會の後任總裁

政友會內閣の田中義一首相は山のやうな、岩に頭を打突けて倒れたのである。事實は頭が砕けてゐる。だから、普通ならば、大に悲觀してゐるべき筈である。所ろで、內閣が潰れた故に、床次の新黨倶樂部との合同の席上で、床次と握手してゐる田中の寫眞を見ると、床次の泣き笑ひの顏に比較して、田中は天空海濶、何の屈托のなささうな、朗らかな笑顏をしてゐる。成程ドンキホーテでなくては出來ぬ藝だと感心させられた。

內閣が潰れると、田中は直ちに政友會總裁をも辭職するであらうと一般に期待された。總理大臣として在職二年余、顧みて何一つこれを成したと云ふ功績の徵るべきものがない。否寧ろ、頓馬な失策の連續で田中首相は自分の與黨共に反對黨から、殆んど間斷なく窘められたのであつた。これ丈けでも、彼れは二度と總理大臣となる野心は起すまい。從つて其準備である政黨總裁たる事を避けるであらう。これが一般常識からの期待であつた。田中自身も心の底の底では少しはそれに氣が付いてゐるかもしれぬが、それは顏に表はれない。少くとも外部に現はれてゐる所では、田中は政友會總裁として大盤石の如く座はつてゐる。彼れの周圍にはさう云つて田中を煽てるものがあらうが、田中はおらでなくて、誰れが日本國民を救ふ事が出來ると確信してゐる如く見える。

內閣が沒落すると同時に、床次竹二郎氏は新黨を率いて政友會に復歸した。世間は田中の後に床次が政友會總裁になると觀測する。床次自身が其期待を以て政友會入りを決行した事に疑ふ餘地はない。併し政友會が果して後繼總裁として床次を迎へたか。床次の總裁は果して實現の可能性があるかと云へば、問題は複雜を極めてゐる。

永く問題になつてゐた所の床次復黨が、田中內閣沒落と共に何故急速に進展したか。世間では之を總裁後任問題と關聯して考へるものがあつた。然るに事實はそれとは全く方角違ひの別の事情に依つたものである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

別の事情とは、政友會には田中内閣の次ぎに、床次内閣を擁立する猛烈な運動があつた。内閣投出しを決心したのが六月二十八日、田中が床次を訪問したのが三十日、床次が田中を訪問したのが七月一日、其會見の後に政友會幹事長森恪氏が床次を追かけて行つて、床次内閣ならば政友會は全力を擧げて支持すると云ふ所の、田中總裁の意志を正式に傳へた。それが新聞に出た。即ち政友會の支持する床次内閣ならば、衆議院の絶對多數を占めて、議會を解散せずに濟む。これこそ政局を安定せしめ得る内閣だ。だから内閣組織者として床次を推薦され度いと云ふ所の、元老西園寺公に見せる示威運動が行はれたのである。政友會は示威運動ばかりでは滿足せず、七月一日には鐵相小川平吉氏を西園寺公に直接會見せしめ、そして床次内閣を推薦したのである。

驚くべき事實は、七月二日内閣組織の大命が民政黨濱口雄幸氏に降る其瞬間迄、床次氏は自分に内閣組織が下るものと信じてゐた事である。床次氏にさうした幻象を描かしめたものに、前には松本剛吉氏が居つた。松本が故人になつてから、最早床次の幻象を培かうものはないかと思つてゐたが、この類の策士は後から後から出て來る。

民政黨にも床次氏を引張るものはあつた。何分民政黨百七十二名で政權を取るよりは、出來るならば床次を引込んだ方が心強い。それ故に床次を民政黨に復歸せしめる運動は當に存在した。田中内閣が沒落と決定した後も、此運動は繼續された。併し何分にも床次自身が、自分に大命降下するものと思つてゐるのだから、民政黨の内閣へ入る話しなどは、絶對に耳に入らない。それ故に、民政黨の床次引入れ運動は少しも表面に出なかつた。

田中と床次が一夜作りの提携で、政權をカツ拂はんとする芝居は、前にも一度打つた事がある。大正十四年七月加藤高明伯の三派内閣が沒落したときも、田中の政友會と床次の政友本黨は提携の格恰を作つて、政權の來るを待つてゐた。其時も此期待が外れて、大命は加藤高明に再降下となつた。それに懲りずに今度再び同じ筋の芝居を打つて同じ筋の失敗を經驗した。創造的の知惠に缺けてゐる事と、失敗に懲りない神經遲鈍さが世人を驚かした。尤もさうした特長が、現代政治家としては成功する一要素だとも云へる。

大正十四年の時の政本提携は政權が外へそれると同時に、水に流がされて了つた。今度は嘘から出た眞と云ふが如く、政權は外へそれたが、床次の政友會入りは實現した。

だから政友會が床次を迎へたのは、床次を後繼總裁にする積りで迎へたのではなく、政權獲得の芝居を打つた其はずみでさうせざるを得なくなつたのである。別にそれを政友會が後悔してゐると云ふのではない。只後任總裁としての床次は、今日ではまだ考へられてゐないと云ふ迄である。

此事情の下に田中義一の政友會總裁としての地位は當分動きさうにない。併し來年春の議會に解散になつて總選擧がある。其時田中が政友會總裁としてゐるときは、田中内閣二年間の惡政が數へ上げられて、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政友會攻擊の材料になる。總選擧で政友會が勝てばよし、若し負けた場合には、それが凡べて田中が總裁で居るからだと云ふ事になる。そして田中は箒で掃き出される如くにして追はれる。總裁後任問題は其時初めて眞劍の問題になる。

既成政黨の分裂主義

無產政黨が分裂主義に災されてゐる事は人の知る處だ。其の悩みは無產政黨のみかと思へば、寧ろ其本家本元は既成政黨にあると云つてよい。そして彼等は分裂主義の根本原理をより的確に、より露骨に、表白してゐる。

分裂主義の總本家は床次竹二郎氏である。大正十三年に彼れは二百七十八名の政友會から、百四十九名を率ゐて脫黨した。これは分裂主義の大芝居たるを失はない。一昨年彼れは憲政會に合して民政黨を作つたが、昨年は民政黨から脫した。其率ひた二十八名の新黨は今度政友會に合流したのである。

何故彼れは分裂したか。初めの時は清浦內閣を助ける爲めであつた。後の時は總理大臣たらん夢を見た爲である。今度の合同も又政友會總裁を經て、總理大臣たらん爲めである。彼れは浮き草の如く西へ東へ流れる。だが彼れ自身には終始一貫した方針がある。卽ち總理大臣になる最短距離を選んで動きつゝあるのだ。それが何時も見込違ひになるのは、彼れが日本の古い諺の急がば廻はれと云ふ事を忘れてゐるからだ。

床次の分裂主義はだから政治家の本質から出てゐる。政治家の本質とは其權力慾を云ふ。政治上の最大權力を握り度い。それは總理大臣になる事だ。苟くも政治家になつてゐるものには、それが口に出すと否とに關らず、皆んな此野心を有つてゐる、政治家の胸から權力慾が消滅しない限り、此野心が存在する。只外の人が、床次程露骨に此野心を發揮せぬのは、それを發揮しない方が、却つて其望みを達する近道だと信ずるからだ。

權力慾は分裂主義に轉化せざるを得ない。何となれば自分の權力慾を滿足せしめる爲めに、自分の競爭者を自分の黨派の中から排斥せねばならぬからである。若し自分の競爭者を排斥する事が出來なければ自分が別派を立てゝ正面から公々然と爭はなければならぬ。床次は民政黨から濱口を排斥する事は出來ない。排斥を企てる事は初めから無駄と判つてゐるが故に敢てそれを企てなかつた。其代りに自分が脫黨して別派を立てた。政友會に入つたは田中の後釜を狙つてである事は勿論だ。若し其後釜が彼れに廻つて來ないときは、彼れの行動の指導原理は、彼れをして再び分裂主義を實行せしめる。

併し床次の相手は田中ばかりでない。田中の後に政友會總裁にならんとするものに、鈴木喜三郎、中橋德五郎、小川平吉、久原房之助の諸氏が居る。此連中、何れもまだ羽翼が滿足に出來てゐない。羽翼が出來てゐない中に、親鳥に逃げられる事は不利益である。それ故に彼等は暫らくは田中を引き止め、そして彼等自身の都合よき機會の來る

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のを待つてゐる。

機會が來ると、彼等は各自に總裁の椅子に向つて突貫する。其時に露骨に現はれるのは政治家の本質的な權力慾である、分裂主義である。其分裂主義は、利害の打算に依つて幾分かボカされるが爲めに、事實の表面に現はれない事もある。併し彼等の行動は分裂主義に依つて指導される。

既成政黨は政黨人の權力慾の上に立てられたる建築である。權力慾は其必然的に、嫉妬排擠を生み、從つて亦分裂主義に墮するも敢て怪しむに足らない。だが無產政黨は其眞似をしてはいけない。

無產政黨の成立動機は個人の權力慾ではない、願くは無產大衆全部と共同して、無產大衆全部の解放を實現せんとする意圖である。自分丈が無產階級から飛出して、權勢の地位に座はらんと欲するのでなくして、飽くまでも無產階級の中に踏み止まつて、無產階級全部と共に浮き上がらんと志すものだ。其中に嫉妬排擠のあるべき筈がなく、從つて亦分裂主義のあるべき筈がない。

過つてそれがあるのは、既成政黨流の權力慾が無產政黨の陣營にも存在するからである。玆に自分の權力を増さんとする者が居るとき、其所に必ず分裂主義が發生する。權力慾は政權奪取主義に依つてより多く培養される。從つて政權奪取を標榜する左翼に近いほど濃厚になる。これは最右翼たる、そして政權獲得を本質的の念願とする既成政黨のよき反映である。

民政黨内閣の前途

濱口内閣の前途には幾つもの難關が横つてゐる。これ丈けは疑ふ餘地のない事柄だ。

國民の大部分は田中内閣の存在を忌々敷思つてゐた。それが倒れたので、眞實に心の底からホッとした。それで、濱口内閣の成立に對しては是も非もなく祝賀氣分になつた。だが併し、其前途に横はる難關を思へば、祝賀氣分はいゝ加減に打ち切るべきだ。

難關の筆頭となるものは金輸出の解禁である。政府は諸般の準備を整へて「近き將來」に斷行すると宣言した。其近き將來と云ふのは六ケ月乃至一ケ年迄の事だらうと想像される。諸般の準備は今から整へる筈である。株式の相場は其準備として下落しつゝある。まさか一昨年のやうな恐慌は來るまい。併し若し來たとすれば、政府はどうするであらう。再び銀行救濟の爲めに樞密院と衝突しなければならぬ。樞密院は反民政、準政友系である。それは過去二ケ年の經驗が證明して疑ふ餘地がない。難關は無限に想像される。

尤も金解禁をやるぞと云ふ聲丈けで、日本の圓の相場が急速に上りつゝある。幸にして、早く平價に近づけば、其時は何日でも解禁が出來る。解禁しても財界に衝動を與へない。此場合には幸運が濱口内閣を見舞つたのである。

これと關聯して今一つの難關は總選擧である。民間では純理論から

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今直ちに臨時議會を召集して、衆議院を解散せよと云ふ叫びがある。政友會は、政府がさうなし得ない事を見越して、これも議會の卽時解散を要求してゐる。政府はまだ何れと決してゐないと、口では云ふが總選擧に勝てる見當が付かずして、誰れが解散をするものか、餘り人を甘く見るなと云ひ度さうな顏をしてゐる。

臨時議會は召集されずとも、來年春の議會は解散になる。それは殆んど確定的だ。扨其總選擧に勝てるや否や。田中內閣の不人氣であつた事から見れば、民政黨は必ず勝つかの如く見へる。現在の分野は民政黨が一七二名、政友會は新黨を加へて二四八名であるが、總選擧後には、それが丁度地位を顚倒するであらうと觀測するものさへある。民政黨二四〇名以上になれば、それは衆議院の絕對過半數であるが故に民政黨內閣の基礎が動かなくなる。併しさう行くか否かは大なる疑問だ。

これは今更云ふ必要のない程明白な事實であるが、日本の地方農村の選擧民心理は都會のそれとは非常に違つてゐる。都會に浮動してゐる投票は大抵純理で動くが、地方に着してゐる投票は大部分地盤關係で動く。政友會は床次黨の地盤を併合した。民政黨が絕對多數黨になる事は不可能ではない。併し吾々想像する以上に、努力と資本を必要とする。そして勝利は確定的だと云へない。

假りに民政黨が負けたとしたら、濱口內閣は其平生の主張通りに、恬淡に引下がるであらう。濱口內閣の引き下るのは已む得ないとして次ぎの政友會內閣は再び金解禁を幾年かの先きへ押しやる。そして日本は再び經濟界不安の幾年かを思はなければならぬ。

濱口內閣の前途多難だ。それは同時に日本の前途多難を意味する。私は此內閣に、其聲明書にあるやうな十大政策を實行さして見たいと思ふ。併し果してそれを實行するに必要な丈けの壽命が、此內閣に與へられるや否やを疑問とする。或は玆に內閣更迭が頻繁に起る時代が來たのではないかとさへ思はれる。

濱口內閣の人物評

金解禁の難事業を加へての濱口內閣には、前首相の若槻禮次郞氏か財界に絕對的信用を有する山本達男が、大藏大臣になるのではないかと期待された。然るにそれが比較的に若い井上準之助氏であつたので世間は驚いた。

井上は天才的に鋭敏な頭腦を有つ紳士である。彼れは山本權兵衞內閣の大藏大臣であつた。其前にも日本銀行總裁であつた。財界の世話燒きとしては澁澤第二世たらんとする。彼れは浪人してゐても銀行家仲間に押しが利く。大藏大臣になれば殊更さうである。

彼れに對して非難があつた。それは何かやり掛けて困難に出くはすとき、彼れは逃げ出す癖があると云ふ事である。一昨年若槻內閣末期の、財界救濟案は彼れの卽言に依つて立案された。それが樞密院に引懸つて、財界の危機が切迫すると、彼れは旅行して東京には居なかつた。若槻內閣は無慘な最後を遂げた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼れは名譽恢復をしなければならぬ。今度は誓つて逃げ出さないと云ふ悲壯な決心を以てかゝつてゐる。

彼れは財政家であつて、政治家ではなかつた。今彼れは政治家になるか否かの大事な瀬戸際に立つてゐる。金解禁の大藏大臣としてはどうせ怒濤狂瀾に打たれるべく運命付けられてゐる。其れに毅然として立ち通す事に依つて、彼れは政界の大立物となり得る。今日こそ、彼れの奮闘すべき時だ。

濱口首相は謙遜な人だ。謙遜なライオンなるものが、此世に存在する筈がない。ライオンは彼の顏を云ふのであつて、彼れの心を云ふのでない。

或政黨總裁であつた者が私に話した。自分の經驗では、大臣になる爲めには子分の代議士がある方がよい、併し總裁になるには子分を作らない方がよいと。さう云へば思ひ當る事がある。政友會の總裁であつた原敬は二百八十名の代議士を碁石と見立てた。碁石はどんな石でも一つは一つだ。一つ以上の價値もなければ一つ以下の價値でもない。だからどれをも同樣に、平等に取扱ふ。これが黨員を統制する秘訣としてゐた。其點から云へば濱口には濱口直系の子分を作る事が少いだけ、それ丈け總裁たる資格があると云へる。

子分を作らない總裁は親分らしき色彩に乏しい。從つて英雄的色彩に乏しい。所ろで田中前首相が講談本仕込みの英雄を氣取つてゐた後で、濱口の非英雄主義は甚だ氣持ちがよい。英雄主義は鼻につかへる。非英雄主義らしく見へるだけでも、聊か溜飲が下がる。

勉强家である。策士と云ふよりは、寧ろ地道過ぎる程の稼ぎ人である。所ろで彼れには安達系と云はれる子分の一團がある。其圏外にあるものは、安達は黨派を作つて小さく固まると云つて非難する。安達の方からは、自分が好んで黨を作るのではないが、向ふから來るのだから已むを得ないと云へる。

人は見かけに依らぬものだ。安達は冷酷鐵の如き顏をしてゐるが、甚だしく涙脆い點がある。それが彼れに親分的素質を與へる。其爲めに子分が出來る。それが彼れの總裁たる妨げになりはせぬかと心配される。

宇垣陸軍大臣は天下の囑望を一身に集めてゐる。世間は何を彼れに期待してゐるか。それは望む人々に依つて種々だ。併し時代の潮流を理解するものゝ希望は只一つある。それは彼れに依つて陸軍の大縮少を實現せん事である。

前に陸相であつた時、彼れは四個師團を減じた。今度其倍の八師團を減じて、日本を九ヶ師團にしたら、天下は驚きの目を見張るであらう。

露西亞と戰爭する事は當分ない。支那と戰爭しても大いした兵力は不用であらう。米國に陸軍を送るなどは夢物語だ。それに工業が機械化する如く、軍備も機械化する。だから此機會を利用して軍備の根本立て直しをやる。軍事費減少に依つて、同時に日本の財政立て直しを可能ならしめる。さうしたら國民は宇垣に感謝するであらう。そして彼人を軍人としてゞなく寧ろ政治家として見るに至るであらう。

濱口内閣は前途多難だ。それ丈けに、閣僚は各自の受持方面に於て力一杯に働く機會を與へられてゐる。彼等が如何に働くかに依つて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

濱口內閣の政策批判

局外者の立場から新內閣に要望する若干事

福田德三

(一)

田中內閣の樣な出鱈目千萬な政府の跡を繼ぐ者は、如何樣な政黨でも甚だ割のいゝ役目を引受けたものと云はねばならぬ。裏面に於ては、相當の努力を拂つたではあらうが、表面に現はれたところでは、此度の內閣は自分の力で政權を獲得したのでないことは明瞭である。然るにも拘らず新內閣が比較的に好感を以て迎へられる所以は、前內閣の滅茶苦茶さ加減が國民をすつかり飽き果てしめた爲めである。公平に云へば、政友會こそむしろ同情さるべきであらう。元より田中氏を總裁に迎へたと云ふ根本的過誤に對して代價を拂はせられるは仕方がないとして、政友會其ものは、民政黨に比して、より甚しく罪を重ねたわけではない。兩者五分々々で甲乙を分つことは出來ない。然るに田中氏の不評の道連れをさせられたことは、たしかに氣の毒千萬である。早く其の根本の過誤に目ざめて、サッサと總裁を更迭し陣立を建て直して、他日に備ふ可きである。其の他方に於て、民政黨は、其正直性に關して誰人も疑を容れない濱口氏を總裁に頂いた聰明さに對して、過分とも云ふべき報を得たわけであるから、擧黨一致此總裁を助けて、若槻氏の二の舞を踏ましめざる樣努力すべきである。

(二)

濱口氏が財政通であることは民政內閣の強みである。氏以外にも財政の局に當り得るもの猶二三を算するは、民政黨のみ之れを有し政友

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

會が全く之れを缺くところの長所である。然るに黨外から井上氏を拉へ來つたことは、裏面に如何なる事情ありや、我々の測知し得ざるところであるが、憲政の常道――私は其樣なものがあるか否かを全く知らぬ者であるが――とかの上からは、たしかに一のアブノマリテーである。況んや其の井上氏は、ツヒ數ヶ月前民政黨の元老たる山本達雄氏と銀行俱樂部の新年會か忘年會かの席上かなり激しい論戰を交へた人であることは、猶鮮かに我れらの記憶に殘つてゐる事である。（其事は、改造掲載の『日銀の動脈硬化に關する論戰』てふ拙文に論じて置いた。）政治家の離合集散は、我々には分り兼ぬること多いのは致方なしとして、如何にも明瞭に相容れざる二つの立場を代表するものとして、公會席上論戰した二人の財政巨頭が、一內閣を支持するとは、摩訶不可思議なことの樣に聞える。しかし、あれは濱口氏の盡力によつて、兩者の間に意見の一致を見るに至つたが爲めと見て置く。然れば、其一致は山本氏の變說によつて得られたか、或は井上氏の降參によつて得られたか、其れは向後に於ける民政內閣の行藏によつて判斷するの外はない。

世人或は井上氏を以て、聰明は卽ち之れあり、操守の堅固は之れを缺くと認むる樣である。更らに或一部の人士の間には、可なり猛烈な惡評を、氏に對して下すものもある。然れども、私は今日までの事實に徵しただけでは、其れら世評を輕信することが出來ない。殊に大正九年の大破綻を以て、井上氏一人の打算誤びに歸するが如きは、速斷の甚しいものなることは、公平な觀察をしつゝあつた人の一樣に認めるところと思ふ。片岡前藏相の失策は、裏面には、井上氏に分つ可き責任があつたのかも知れないが、當面の責任者は飽まで片岡氏であつて、井上氏でないことを忘れてはならぬ。又た金解禁に對する井上氏の變說を指摘する人が尠くない。成程井上氏は決して終始同一說を一貫したものとは云へない。乍併、此問題については、武藤山治氏一人を除くの外、終始一貫を誇り得る公人は殆んど一人も見出せない。我ゝ學究者なら終始一貫はむしろ易ゝたることで、却つて柳の下に鯰的の終始一貫論の爲めに、人を過る虞なきにしもあらずである。少しでも、時ゝに變化する日本の國情に卽して考ふる人ならば、何時でも金輸解禁なら贊成と云ふが如き素朴なことは言ひ能はざるべき筈である。一例をあげて見れば、今日現在最も有力に大膽に平價切下げ解禁論を唱道して、世論をリードしつゝある東洋經濟新報の所說は、此の新案に想到するに至るまでは、金解禁の問題について、右顧左眄、時としてはしどろもどろの論を公けにしつゝあつたことは、私の指摘に對して、同誌の明かに自認したところである。其れは、我國情がしどろもどろであつたから、此實情に精通する右筆者の議論またしどろもどろであつたので、筆者の頭の中が左樣であつたのではあるまい。而して、其實際の事情の判斷に至つても、例へば大正十一年八月加藤友三郎內閣のとき、禁止解除をせぬ方が世論と共に誤斷したことを、東洋經濟記者は慚愧にたへぬと告白してゐる。（同誌本年三月十六日號

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二四頁)。私は同年八月十三日の時事新報において『十分愼重なる調査を遂げたる上にて解禁すべく、今遽かに誤謬を墨守しつゝ、其解禁を妄斷するは危險』なりと主張して、囂々たる世論に反對したのである。(世間或は私を以て武藤山治氏と同一筆法の解禁主張論者と誤解する者があるから、特に記して置く)。同日の時事新報で武藤氏、若槻氏、小林博士何れも共に即時一般的解除を主張してゐる。反對は堀切善兵衛氏と私とだけであつた。東洋經濟新報は六七年後の今日、其の非を悟つた。其他現內閣に大藏次官たる小川郷太郎博士の如きは、嘗つては、口を極めて、金解禁反對を言明して居た人であることは、健忘な世間は忘れても、私共は忘れて居らぬ。其れら何れも恥づ可きこととは言はれまい。判斷の齟齬は人間には免れ得ぬ。殊に事情の急變は判斷を誤らしむることが多い。井上氏が守株待兎的の一貫論者でなかつたとて責めらるべきものならば、責めらるべき人の數は、實に多數と云はねばならぬ。唯要は、氏にして局に當る以上は、自己の聰明をのみ恃んで獨斷を以て事を處することなく、衆智を集め、一切の事情を廣汎に愼重に判斷し、然る後立てたる方針こそは、これを終始一貫——但し事情の急變するときは、勿論別である——敢行すべきこと、これである。かくてこそ、氏は世上に流布する惡評を一掃することを得る。もし然らざるとき、曩時のカルムニーば再び擡頭し來りて、氏をあらゆる惡評の下に埋め去るに至るであらう。其れは、氏一人の爲めには、致方なしとするも、我國民が其の爲めに被る損害は、かくて實に莫大なものたらざるを得ぬ。濱口氏よく井上氏を指導して、此大任を成就せしめ、他の閣僚も亦た、三土氏に對する政友閣僚の所爲を模倣することなく、擧閣一致、金解禁の實現に努力せんこと、これ私共の先第一に、新內閣に要望するところである。

序に、三土氏は正直な人であらう、然し如何にも無氣力、氣意地であつた。他の見る目も氣の毒なくらゐ弱腰であつた。個人としては氏は決して落第せぬ、否、恐らく大抵の人は氏の爲人を愛す可く重んず可く學んであらうと思ふ。其れと共に、氏はたしかに大藏大臣の落第生である。しかし氏にして節を屈して、修養——財政智識はモーあれで澤山——を積み隱忍自重するならば、他日今一度再試驗の特典に浴することが出來よう。藏相たるべきもの殆んど皆無なる政友會の爲めには、三土氏をアノ儘落第生として斷念せしむるは、重大なる損失である。私は氏に望む、此際下らぬ倒閣運動などに沒頭せず、一つ決心してやゝ永く外遊して、西洋の政治家、財政家に數多く面會し、修養の機會を確保せんことを。これが最賢明な而して最も多く國に盡す所以であると思ふ。他の亡者は如何樣なるも損得なし、氏の如き近來稀に見る『セルフ・メード・マン』の伸ると縮るとは、我ゝ局外の國民として、必ずしも無關心なるを得ないのである。

(三)

濱口內閣が、擧國大緊縮の標語を提げて起つたは、痛快である。前

職相も無駄省きを唱へ出したが、其れは餘りに遲過ぎた。而して唯一人これを唱ふるのみで、他の閣僚は、一向それに與みせず、否、無駄を重加して恬として顧みなかつた。濱口內閣の閣員とて、果して、皆が皆、衷心から緊縮主義の洗禮を受け了したりとは考へられぬ。玆に濱口氏の統制力の大小を試すべき試驗が行はれねばならぬ。但し突然關稅何十割を引上る如き暴擧は、眞平御免である。緊縮は單なる消極であつてはならぬ。生產力を萎靡せしむるが如き緊縮は大禁物である。濱口氏には、此憂が多大に附きまとふ。氏が個人として徹底した緊縮の標本であることは、我ゝをして心强からしめる。しかし、其れと共に、其の素朴性の可なり大なることに對しては、杞憂なきを得ぬ。（また金融業者、大財閥のみを肥えしめて、國民に「にえゆ」を喫せしむる底の緊縮亦た桑原ゝゝである。）井上氏には、必ずしも、此杞憂無用ならずである。

今日の政府に無駄の多いことは、民間に於けるよりも、遙かに甚しい。行政各部門に亙つて、マサカ武藤山治氏の主張する樣なことの行はれ得る見込はないが、しかし節約の餘地極めて大なることは、之れを否定することを得ぬ。海外支拂だけについて見ても、緊縮の餘地は相當にある。無用なる老朽官吏の海外派遣、殊に甚しいのは、文部省の留學生派遣の杜撰さに至つては、誰知らぬ者ないところである。行政各廳の人件費は著しくこれを切詰め得る。各人の能率を引上げさへすれば。

然るに他方、社會政策的支出に至つては、政府は今まで極めて吝嗇であつた。勞働會議など云ふ體裁的のことは、有象無象を何ダースとなく派遣しつゝ——每年の旅費實に勿體ないものである。現在の派遣費の數は三分の一に減ずるも、實質に於いては決して異ることはない——眞に勞働階級の爲めに役立つ費目に至つては、實に切詰め切つたものである。殊に職業紹介事業の如き、右から左へプロレタリアートの役に立つ事柄は、豫算不足の爲めに歪められて居る。電話一つ無料で架設出來ぬ紹介所すらある。他方失業救濟事業は、今や日本內地の勞働者の失業救濟には、餘り役立たず、朝鮮からの失業者招來の逆作用と爲す爲めに、處によつては九割以上も費消されて居る。此れは、根本方針確立せず、唯失業救濟と云ふ形式だけを揃へた結果である。職業紹介や失業救濟の事業に當る人ゝには如何ともし難い高政治的過誤の爲めに、可惜莫大な國費を銷耗して、却つて內地の勞働市場**を搔き紊しつゝあるのである。**

緊縮とは、單に經費を天引することであつてはならぬ。より有効に支出する事でなければならぬ。なまじ何割引などと云ふよりも、全部中止にすべき事項は山の如くにある。其代り支出すべき項目には、更らに思切つて多くを支出せねばならぬ。幸ひ天引緊縮には社會政策的費目は繰込ぬ由傳聞する。しかし社會政策的費目とて、其內容の如何を篤と吟味して貰はねばならぬ。夫れ〱の事業に精通し、而して當事の爭事に何等の利害關係を有たぬ公平なる立場に立つ人ゝをして、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一ゝに稽査せしむ可きである。其れは今年度の間には合ふまい。大年度の豫算編成に對しては、是非實行して貰ひたい。

(四)

思想問題の取扱並に無産政黨に對する態度について、新內閣に深く囑望せざるを得ぬ。財政上の緊縮を思想上の彈壓と結付けることを、當初から嚴に自戒して貰ひたいことこれである。思想警察など云ふものは全廢すべきである。殊に外國へ思想警察官を駐在せしむるが如き其費用は小なりと雖も、其無駄なることに至つては極端的なことである。第三インターナショナルが日本を放念して居るのでないことは、爭はれない事實であらう。其れに對するには、決して大仕掛な道具立は入らぬ。今日の大道具立は、全部無駄である。殊に警察當局の一知半解に至つては驚く可きである。共産黨事件の眞相を語るとてわざ〳〵有識者の間へ出張つて與る幹部の人々の、世界に於けるコミンテルンの實狀を知らざるの甚しき、我々は啞然として言ふところを知らなかつた。此云ふ手合だから、、、か、、せられて後永い間手を拱ぬいて居て、、、、云々の『聞き込み』とかで、やつと出動する樣なヘマをやつたのである。而も其、、には、、、、、のだと傳へられる。他方、勞農黨の解散、赤化教授の馘首などと見當違ひの事に力瘤を入れるに至つては、若し眞に第三インターナショナルが眞劍に日本に赤化運動を起さうと決意して起つたならば、其は寒心すべき事態を釀出したであらう。歐洲各國とも赤化防止には心を用ゐて居るは事實である。しかし、我邦の樣な無駄にして見當違ひの事をやつて居る國は、これあるを見ない。近頃は外國から歸朝する旅客の荷物について、書物の檢閱を極めて嚴重に行ひ、且頻々として沒收が行はれる。しかし其沒收せられし書物なるものは、すでに何千部となく國中に散布してゐるが尠からずあると云ふに至つては、頭かくして尻かくさず、笑止千萬なことである。檢閱沒收はこれを全廢するも、決して思想の惡化を來す如きこととなきは、我々の確信するところである。此れらこそ先第一着に廢止す可き無駄である。

(五)

學生の思想善導とか稱する文部省の行事こそ全廢すべきものである。學校主事とか學生課長とか、其樣な人ゝに善導も惡導もされ得可き學生は一人も居らぬ。彼等何の學德あり、何の思想的權威あつて、何萬の青年の指導を行ひ得べしとなすのであるか。校長あり教授ありしかも、猶惡化する樣な學生を、一人や二人の學生主事——教授ほどの信賴をも有せざる——などが、如何出來るものか。實例を示せとならば、私は私の身邊から幾らでも例をあげて文部大臣の參考に供し得る。私共は自ら行はずして大言壯語するものでないことは、大臣一たび我々の近くに來るなら、直ちに諒解し得ることである。文部省の思想指導に關する一切の費目を削れ、各學校の學生主事を全廢せよ。其結果は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

必ず其れだけで、學生思想の善化を齎するに相違ない。無駄の骨頂である斗りでなく、却つて極めて有害なるは前内閣の此愚擧であつた。其れよりも先づ學生の公金を一錢たりとも費消する樣な校長を嚴罰に處せ。割り込み榮轉運動に浮身をやつす校長や教員を一掃せよ。生徒の排斥を受くる樣なヤクザ教員をサッサと陶汰せよ。殊に在外研究員の人選を根本的に建て直せ。學力劣等は我慢するとしても、人物がテンから成つて居らず倫敦巴里で同胞の恥ざらしをする樣な研究員を即時召還せよ。二年經つても會話一つ出來ぬ樣なものを即時免除せよ。其無駄は實に大なるものである。恐らく日本の專門學校ほど、下らぬ人間、學力劣等な先生を持つて埋まれて居る學校は、歐米には一も見出せないであらう。其人員もたしかに多過る。現在の三分の二或は二分の一でも十分間に合ふこと受合、其代り任に留める者の俸給を思切つて引上ぐ可し。經費は其れ丈けで現在の三分の一は節約し得られる。中學程度の教員の方遙かに勝れり。殊に最も勝れたるは小學教員であらう。近來師範學校卒業生の過多なる爲め老朽淘汰が已むを得ずドシく行はれる。此は一方には、老朽教員に取りて、由よしい問題であると共に、他方たしかに、日本の小學教員の――少くとも學力――を高めたことは疑はない。其代り其徳化の方面が若干害せられたことは爭はれないことである。これは緩急宜しきを失した結果である。しかし、大體に於て、日本の學校中、比較的に適任者を以て充されてゐるは小學校、其反對側に非適任者の蝟集して居るのが高等の學校である。而して卒業の粗製濫造をやる。無神經な實業界は、大學、專門學校の免狀さへ所持すれば、其卒業丈けの學力、素養あるものと思つて採用する。大たわけとは此事である。此頃の大學などの學生の出席率を文部省は調べたことがあるか。更らに教員共のなまけ率の如何に大なるかの實狀を知つてゐるか。一學年に五六回しか講義に出ぬなどと云ふ輩のあることは、――一ヶ年の半分を全く休み、殘る半年三分の二か二分の一しか出勤せぬなど云ふ手合もある――恐らく芋の煮えたと同樣御存知あるまいと思ふ。具體的に云へとなら何時でも舉示して上げよう。此くて學生思想の善導の爲めに莫大な經費を消耗する。緊縮内閣の先づ手を着け可きは、實に玆に存する。

(六)

卒業生の就職難などとは事理を顚倒した說言である。日本の文部省は何時高等教育修了者に對する勞働市場の需給關係などと云ふことを考へたことがあるか。又た私立學校の經營者にして、眞に學生の爲めを圖る立場から、此問題を眞面目に考へたものがあるか。私は斷言する。皆無と。だから勞働市場の繁榮とは全く無關係にパン教育は益々擴大されてゆく。資本主義の擴張的自滅は兎に角、日本の教育界は其の擴大的パン教育の上に於いて、終には自然的崩壊を招くことは、今より適[illegible]、學生思想惡化の一面はたしかに此の崩壊過程の有力なる現れである、思想善導などで如何とも出來ることでない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

パン教育に內在的な無限擴張病は、善導などされ得るものではない。所謂智識階級的就職難、失業難は、かくて永久に如何ともし難い病として、我經濟界のデット・ウエートとして殘ることを、私は斷言するに憚らないものである。

實業界の無神經、無理解は、他方此勢を助長する。彼等は、學校教育必ずしも萬能ならずと常に唱へつゝ、其實際爲すところ如何と見れば、全く其を裏切ることのみをしてゐる。新社員を採用するに先づ學校の高低大小を問ふ、次に卒業成績を問ふ。かくして何大學の何番を第一に、以下學校の程度、當人の番に從つて取る。だからパン教育の亡者共は、少しでも月給の多く取れる學校の門へと蝟集する。これが所謂入學難を招致する最大原因、決して學校數の不足から來るのではない。パン教育の現態にして根本的に建て直されない限り、學校數を今日の三倍にし四倍にし否十倍にするとも、入學難は決して消滅するものではない。其無駄の大なる、ひとり國費や地方費の上のみでない。父兄の負擔を合算するとき、國民經濟の損失は實に莫大なものである。生活改善の何のと少し斗り家計費の上で節約を行つたとて、日本中の父兄が、高等教育を受くべき素質の乏しい子弟を無理により大なるより高きパン取學校に割り込ませんとするが爲めに捧ぐる無駄に比すれば、其れは、九牛の一毛にすぎないのである。向上心の強く、好學心の大なるは、たしかに日本現代の誇りであつて、日本に居る外人の一樣に感歎するところであるは、爭ひ難き事實である。殊に女子の好學、向上心の强烈なる如何なる赤毛布外人と雖もこれを看取せぬわけにはゆかぬ。これはたしかに日本現代の一大長所である。これを適當に指導し統制し行けば、實に世界無敵と云ひ得る。然るに日本文政の局に當るもの朝となく野となくこれを適當に指導統制することなどは少しも考へぬ。文部の役人諸君は、朋黨の離合集散に浮身をやつす斗り、少しも遠大な國家の教育政策などを考へず、私學の經營者亦野球の繁昌に拂ふ關心の十分の一も此點に拂はぬ。入り來る者は如何な鈍物も之を厭はず、何千何百の學生をやたらに取り入れ、これを粗製濫造して卒業免狀を雨下しつゝある。かくて就職難が起らざれば、其は却つて摩訶不思議と云はざるを得ぬ。私は新内閣が此大なる無駄の除却に少しにても指を染めんことを切望せざるを得ぬ。序に、軍事教練、青年訓練所の即時的廢止は言ふまでもないことである。學生の惡化は軍教が著くこれを助けつゝあることは、誰人の目にも明なるところである。其經費は無駄の骨頂である。

（七）

無産政黨の進出はたしかに歡迎すべきことであるが、今日の現狀では、何事を爲すにも其の貧乏が累する。近來無産諸黨の間に起つた内紛も、其原因の一はたしかに擧黨一致の財政難にある。武士とて飯を食はねばならぬ。無産黨とて政黨である以上、空拳では立つて行けぬ。彼等をして常習的貧乏者たらしめて置く結果は如何なるべきか

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、篤と識者の考ふ可きところであらう。これは黨派的立場のみに立つ人には、或は諒解に苦しむところと思ふが、私は少數具眼の人士だけなりと、篤と思案せられんことを切望する。其れには他にも多々方案はあるだらうが、消費組合の進出も亦有力な一法であらうと思ふ。消費組合によつて勞働者の家計に若干なりとも餘裕を生じ、若干の黨費を負擔し得られる樣にならしめ、無産政黨は其切り詰めた豫算を大體に於いて黨費によつて支辨して行く、これが無産政黨を健全化する所以であらうと思ふ。寄附金や內職を賴りとする限り、無産黨內の紛々たる鬪爭は絶えず起るものと思はねばならぬ。其れは日本政黨全體の進歩を害すること甚しい。民政黨は自黨を肥す斗りが能でない。無産黨の存立要件を確保することに力を藉すならば、黨派としての立場もたしかに高まるに相違ない、況んや廟堂に立つものとして、其れは國民の感謝を購ひ得るに相違ない。今日まで世上未だ一人の此問題を眞面目に取扱つた人なきは不思議である。唯聲を高くして無産黨進出せよと野次つて斗り居たとて、其れは親切な所爲とはならぬ。無産黨の進出が眞に希はしいものと信ずる人は、其の財政的基礎の確保について、思慮を旋らさなければならぬ。

社會政策、勞働立法の方面について希望するところは多々ある。しかし現內閣は近く其政綱を發表すと傳へられる。其れを見た上で具體的に卑見を陳述する折もあるかも知れないから、今はそれに言及せずに置く。(四、七、九)

對英米外交と軍縮問題

安富正造

一 我國の外交上に於ける軍縮問題の地位
二 最大難關たる比率問題
三 政治的解決法——脅威性の除却、經費の節減性、條約效果の保護性——沿岸防備と通商保護——壹萬噸以上の軍艦を全廢せよ——根據地の現狀維持

一

國際協調の吾等の時代、世界の輿論を友とせざれば對外的に殆ど何

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事をも成し得ぬ現代に、平和を維持しつゝ正義を貫くに努むべき昭和の四年七月、執政中やゝもすれば「義の準備成る迄は力の世なり」と古い哲學を强調し倒施逆行を耻とせなかつたところの田中反動内閣が遂に泥舟の沈むが如く崩れて、大局に通ずる幣原男を再び外相とする濱口民政黨内閣が大命を拜して出現したことは先以て之を喜ぶべきと共に、此際吾等は敢て警告を發して國際政局の改善を望まなければならない。ソレは民政黨内閣が財政の緊縮方針を精神上にまで及ばして、何事にまれ引込思案に墮れるようでは困るからである。しかも偶然なる天の配剤か、海の彼方に於ても極めて近き過去に局面は一新した。米國は活氣に充ち滿ちたるフーヷア大統領の執政時代に入り、英國は清新の意氣天に冲するマクドナルド内閣の世になつて居る。世界の主なる三方面に於て反動的色彩が影を潜めて、誰しも夏の日の明るさを感じないわけには行かない。濱口内閣が世界の各方面から好感を以て迎へられたのは自然の因果であるが、當初の期待が大きいだけそれだけ將來の仕事に骨が折れるものと見なければならぬ。

我國の外交と云へば勿論直に境を接する露國及中華民國、特に對支問題が最主要なるものである。そして對支外交は畢竟對英米外交に他ならぬ事は冗々しく論ずる迄もなからう。現今所謂太平洋問題は歸するところ殆ど支那問題であるとして先づ差支ない位のものである。此點に於て日英米間の海軍問題が死活的重要さを有つて居る。

唯此處で考慮に入れて置かなければならぬ事は、支那に關して日英米は三角關係に在るとも云ふべく、我國は英米と利害の一致する點もあり不合一の點もあると等しく、英と米との相互間にも利害得失は交錯して居るのであつて、しかも英米の角逐は東洋に於てのみならず、南米に於ては更に一層激烈なるものがあり、波斯及小亞細亞方面或は英領印度にても激烈であるのみならず、モット廣く見れば倫敦は紐育に對し世界金融の中心市場を尙爭つて居る。血は水より濃しの常套語は、他方に於て佛米間では獨立戰爭と革命戰爭とに行はれた相互援助の實情を繰返し語り合ふようなものである。今日の米國人は英國移民の子孫ばかりでも無く、又現代の經濟生活に活きて居る米國人は血は水より濃しで行動する程の感情家でも無い。それ位の事は老巧な實際家たる英國人が萬々承知の上である。そこで海軍軍縮問題に當面しても英米間の一致は却々容易では無い。

吾等は英米を相爭はしめ其の隙に乘じて自らを利せんとする如き舊式政治を排する。何となれば英米相戰はゞ延いて全世界を兩分する最大戰爭を惹き起し、戰爭絕の爲の戰爭では無くして、今度こそは文明破滅の戰爭に終局することを憂ふるからである。然しながら此の英米の利害が全部的に一致し得ないところに第三者が介入發言の餘地がある。ドウせ國際會議は各國の議會と比べて根本的に性質を異にするのであるから、議會の如く多數決で押片付けることは能きない。國際會議の特質は協調である。結果は不徹底にてもあれ、互讓妥協以外に國際約定の成立つ道は認められない。軍縮會議に直面し、我國が誠意を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

達して世界の平和增進と各國民負擔の輕減とに貢獻し得べき機會が斯うして與へられる。

顧みて華府會議の場合、人或は疑つて英米間に豫め制限協定の內交渉が濟んで居たとか云ふのであるが、それは全然訛傳臆說であつて實際にヒユーズ原案の內容は祕密を嚴守されてゐた。筆者も在歐中交遊のある種々な方面から研究し且出所の信ずべき打明け話に依れば、原案はハーヂング大統領とヒユーズ及ルードの政界三巨頭で成案に達したもので、其の內容は米國海軍でも大臣、次官及作戰部長くらいの外には誰も知らなかつたとのことである。そして會議當時の英海軍代表等の言動に徵しても、英米が事前に豫備協定を了して日本を壓迫強制したのでは無かつたと信ぜられる。昨今英米間には海軍軍縮に關して色々と瀨踏みが行はれて居るようであるが、我國としては少しも疑惧を要しないのみならず、むしろ英米間の內交渉が好調に進んで居るかに見えるのは反對に宣傳では無いかとも解せられる節がある。

一九二七年壽府に於ける軍縮會議は、其の決裂の名目として直接に比率問題を以てする程度には進んで居なかつたけれども、實際は比率問題が根本原因であつた事は人の知るところである。一般に受諾し易き均等の比率を以てしてすら、英米兩國間に在りては越え難い關門となつて居る。しかも其際英國が硬化した一面の理由は、其の隣國フランスが會議に參加しなかつたからであるのは誰しも之を否み得ない。協定の基礎を固める爲に三大海軍國間に先づ妥協案を作るのも一法であろうが、事の巡洋艦以下各種艦艇に關する限りは、佛伊を加へずして眞の協定に達し得る筈がない。佛伊は又此の場合隣接する多くの小海軍國を算に入れずして協定に應じ得られないであらう。此の傾向は旣に國際聯盟の軍縮準備委員會に現れてゐる。まして佛伊を初め列國は大戰に因る疲弊から漸く國力を回復して來た今日、一九二一年華府會議當時と情勢に格段の相違がある。吾等は前述の如く英米の協調を甚だ容易ならずと見るものであるが、縱ひ英米が勝手に妥協案を作つた場合を想像しても、若し我國が會議に當り英米に對抗せんと欲すれば、此の意味に於て佛伊兩國及其他多數の小海軍國と握手し得る筈であつて、華府會議の場合と異り、補助艦制限に關し佛伊兩國に對して我國は深厚なる友情を有たなくてはならない。

二

海軍軍縮會議に當り、各艦種毎に個艦の大さ、武裝、其他の要件を協定するとして、此の程度の取極めに對しても各國は獨自の用兵上の見地特に其の地理的事情に基き多少の利害を異にする。しかし右の制限は各國に一律平等であるから、或る協定に到達するのは大して困難でなかろう。けれども比率問題に至つては現實に差等を設定することであるから、或る國家に取りては會議の決裂を賭けても爭はねばならぬほど利害と名譽との重大問題にもなろう。

例へば華府會議の際、我國は初め英米に對し七割比率を要望し、後

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に根據地の現狀維持を代償として六割比率を受諾した。此の七割は、戰史的調査、地理學的推理、有形無形の人力及機械力に關する研究の三方面から見たる純軍事的判斷に加へて、有り得べき國際政局の推移及顧慮を以てし、國家安全の自主的見地から出たものであるが、國際會議としては各國の主觀を衝突させて解決さるべき筈は無いから、客觀的に軍縮會議當時の現有勢力比を取つて協商の鍵とせなければならないのであつた。尤も此方法も國に依り場合に依り幸不幸を生ずるので完全とは云へないか、華府會議當時其の計算は我國の算定法に從へば偶然七割比率の主張に適當且充分であつた。然るに會議主催國にして當然原案提出國たる米國の計算では六割程度に算出したのであつて此の相違點が會議の最大難關となつて危く決裂の瀨戶際まで押詰まつた。その難關に途を開いたのが、我が加藤全權から提案したところの根據地現狀維持の制限であつた。

根據地は艦隊に活動力を附與する源泉であるから、根據地を制限することは作戰行動を拘束するの結果となつて東洋の海面に在る對抗的根據地を一九二一年の現狀に停止したことは、結局東洋の平和を脅威する暗影を一掃し明るさを增した所以である。右の代償に加へて、問題が主艦力及大型航空母艦限りであつたから、力の足らざるところは適當なる補助艦艇の配合と其の助攻的効果とに期待して我國は五・五・三の比率を受諾したのである。

即ち、我國に於ては補助艦と主力艦との關係は、むしろ二元的なものである。勢力の比較は主力艦の比率と補助艦の比率との相乘積を用ふるの必要が有る。然るに米國の見方では海軍の兵力は一元的であつて、補助艦は主力艦に對し從屬的に不可分のものであり、勢力の比較は主力艦と補助艦との總和を以てせんとする。であるから、既に主力艦及大型航空母艦に於て五對三である我國が補助艦に於ても重ねて五對三となることは、米國流ではドコ／＼までも算術級數的に五對三であろうが、我國の見方では二十五對九に相當する。次の會議に於て如何に之を妥協せんとするか。若し依然五・五・三を適用すると假定せば如何なる代償を得て以て保障とすべきであろうか。

補助艦と主力艦との相對關係を二元的に見るのは單獨に我國ばかりでは無く、佛伊兩國も勿論我國以上に熱烈な二元論者である。

他方では周知の如く、英米が均等比率問題と巡洋艦の大さ及隻數割當の點で容易に一致しないで居る。英米が右の點で爭ふのは兩國領土の地理的事情の相違から來るのであつて、英國が全部的對米均等を遮るのは、國情上補助艦と主力艦との關係を米國の如く純然たる一元的に認識し得ないからである。しかも佛伊と全然同一步調に出ることも能きない。此點に英國の痛切深刻なる惱みがあり、半ば米國に左擔し、半ば我國などゝ得失を共通にする。

右等の如き比率問題の難關を突破するために案出されたのが「海軍力の尺度」を先決する問題である。尺度問題は去四月二十二日國際聯盟軍縮準備委員會に於て米國代表ギブソン氏から暗示され、次で五月

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三十日アーリントン國葬墓地記念祭に於てフーヴァア大統領が「海軍力の相對價値算定の尺度」を唱へ、六月十八日倫敦ピルグリム・クラブの晩餐會に於てドーズ大使が新任の初演說として軍縮の政治的解決のため「海軍力の尺度」を先決する意見を公表した。然し此問題は專門家の間には新規な研究では無くして、我國に於ては明治の末期から大正の初頭にかけ、戰艦と巡洋戰艦との優劣得失論となつて現はれ、英國に於ては大戰中一九一五年に高速戰艦の出現と共に高調に達した。しかし列國の間を通じて砲力のみの比較とか、艦齡のみの比較とかならば容易であるけれども、一艦の武力構成要素としての砲力、速力、航續力、艦齡、居住性、等々の價値比較を數字で算定することは從來不可能とされて居る。又各國專門家の所見が合致する筈も無い。一艦ですら然り、某國海軍の綜合的兵力は、前にも言へる如く、戰史的調査、地理學推理、有形無形の人力及機械力の研究、之に加ふるに活きたる國際政局の步みを考慮して編み出さるゝ海軍政策の結果であつて、綜合兵力を適確に測定する合理的海軍尺度が國際的に發見されようとは先づ考へられない。尺度問題は主義として美しく見える提案ながら、其の結果は每回の軍縮準備委員會に佛國の提議する理論的意見が然る如く、到底實際的効果を望まれない。恐らくは軍縮討議を益々複雜に導くまででは有るまいか。

其れを悟りしが否か非乎、昨今は「海軍力の尺度」といふ問題は立消になつたのか、サッパリ音沙汰がない。然らば何れの國も口を緘して正面から之に反對しないのは何故であらうか。誰しも國際的善事である折角の提案に對して之を破壞するの責を負ひたくないからである。我等は外國の宣傳に臭々も用意周到なるべきの必要を痛感する。

斯くも比率問題の解決は至難であるが、比率々々と米國はそれ程氣に病むだけの價値があるのか？五・五・三であるとか、五對一・七五であるとか云ふけれども、好むと好まざるとに拘らず、又「國策遂行の具」としての戰爭は不戰條約に依り放棄せられ、否、其の以前から米露以外には聯盟規約があり、太平洋に四國協約、歐洲にロカルノ認定書があるにせよ、萬一已むを得ざる戰爭が行はれた場合には、當事者以外の國際政局に何等の分解作用絕無と保證が能きるや否や。そして分解作用が一度起らば比率は卽時變化して、其國の心掛次第にて十對三ともなり、五對八ともなる。比率協定も畢竟平時安心の爲であり、國際間の疑惧を除去して國際關係を改善し、列國の親交を增進することに依り戰爭の機會を最小最少ならしめる爲に過ぎない。米も英も更に心胸を大きく開きて互讓妥協の餘地なきや否や。又英米が日佛伊に對する關係も同樣であり、佛伊が他の諸小海軍國に對する關係も又然り。特に米國は例に依り軍縮の間際に巨大なる製艦計畫を樹立して、協定不成立の場合に卽應するの氣勢を示すが如き威迫的態度（米國以外より之を見れば）は緩和するの必要があらう。世界の輿論を友とせずしては悔ゆべき日が來ずして濟むまい。自給自足の天惠に豐かなる米國の大觀すべき好機會は近づきつゝある。「海軍力の尺度」といふが

如き餘りに專門的に墮する方法は寧ろ之を避けて、謂ふところの「政治的解決」を根本から建直し、各國民の實生活に觸れ得る軍縮手段に出づべきではなからうか。

三、

謂ふところの「政治的解決」とは一般人の耳に入り易き巧言美辭である。ドーズ大使の言の如く「民衆の意思に訴へ」るには好都合な辭柄である。然らば「政治的解決」の定義如何。吾人の解するところにして誤らずんば、けだし「專門家の計算を資料とし政治家が大局から見て互讓妥協に依り協定する」の意なん、乍併、「海軍力の尺度」の論定は前記の如く不可能に近しとすれば、專門家の討論を超越する政治的解決の方法若くは「政治的尺度」の用意ありや將た無しや？

「不戰條約は軍縮と同伴する」けれども、此條約は勿論軍縮の政治的解決法では有り得ない。或は仲裁條約、或は調停條約、之等は不戰條約又は軍縮の「後產」では有り得ようとも之又斷じて軍縮の政治的解決手段で無いことは明かである。

海洋自由の問題は最近又々問題になつて居るが、實質的に見れば、此問題は今日寧ろ歷史附のシロ物に過ぎない。往時に於て海戰の機會が多かつたところの英國が積極的に海上の制御を占有せんと欲し、之に對して中立の機會に富んでゐた米國が消極的に海洋の自由を欲したればこそ海洋自由の論爭も價値が認められたけれども、最近の飛行機飛行船、各種艦艇及兵器の異常なる進步は封鎖戰の形態及精神に大變化を影響し、延いて制海權の觀念にも著しい改訂を要する。其の實例は既に過般の大戰中に歷然として居た。それと同時に英國海軍の覇權が永久の世界を支配し得ない時期に到着してしまつた。ましてや戰爭防止の平和的精神が種々に具體化されつゝある現代に於て、しかも英米の參加するが如き大の戰爭があれば其れは恐らく世界兩分の大戰たるべく豫想能きる場合に於て、空念佛にも等しい海洋自由の問題は軍縮問題解決の政治的手段には適しないと言はねばならぬ。

論じて此處まで來ればもはや端的に結論を述べ得る。既に上述の如く大勢が變化し新たなる時代が始まつたことを認識すれば、會議に臨んで人々は次の三大鐵則を以て政治的尺度と爲し得るであらう。

第一には脅威性の除却である。一艦としては如何なる天然の暴力にも抵抗して燃料の續く限り隨時隨處に威力を振ひ得る艦種。綜合力としては分量巨大にして他を威迫するもの。そして右に對し勢力附與の策源たる根據地。之等を制限して軍備の脅威性を除却すべきである。

第二には經費の節減性である。軍縮の大目的は第一に平和の增進即ち戰爭の防止であるが、其れと共に福祉の增進即ち國民負擔の輕減が重要である。現實に經費の節減を伴はないのでは軍縮の意味を成さない。故に他の事情が許す限り經費節減性の最大なる點に軍縮の矢を向けねばならぬ。

第三に條約效果の保續性である。吾等は不戰條約に忠實なるもので

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はあるが、前にも述べし如き萬一の場合直ちに條約の實効が空文に歸し易きもの、例へば戰時急造し得る種類の艦艇兵器は之を平時制限し置くも殆で無意義である。効果を戰時にも相當確實且有力に期待し得なければ安心して軍備制限條約に信賴し能はぬのは勿論である。

以上の三大鐵則から歸結すれば、各國兵力の分量は「沿岸防備」と「通商保護」に足りるを標準として決定すべきである。

卽ち華府條約に認めたる如き三萬五千噸の主力艦、二萬七千噸の大型航空母艦の類は之を全廢し、あらゆる軍艦の最大限を壹萬噸に留め最大備砲を八インチ(二十糎)に制限すべきである。

比率問題の解決に至つては之を理想と實際とから一言したい。理想論としては、各國が優越感を棄てゝ國際平等の精神に基き、互に主權を尊重しつゝ成るべく低く軍備の均等標準を協定し、其の範圍に於て各國は相對的に必要とする最小限の經濟的軍備を維持するよう、大國は大國の程度に、小國は小國の程度に、自發的の制限を誓約すべきものである。現代に於ては如何なる國家と雖無用に軍事費を負擔せしめ得ず又好まないから、大國が進んで謙讓の態度を取れば小國は自然に必要なる最低限に落着く筈である。論より證據、華府條約を一般に普及するの案は一九二四年二月限り立消えの狀況であるけれども、其の實特殊なる獨逸の一例を除き、世界何れの方面に於ても華府條約の內容は準則として實行されて居る。

併し、右の理想論は吾等の時代に於て尙實現能きないとすれば、敢て云ふ、巡洋艦以下に關し華府條約の比率を適用する前に、主力艦及大型航空母艦を以てするハンデイキャップを除去せよと。換言すれば一切の軍艦の最大排水量を壹萬噸、最大備砲を八吋(二十糎)として然る上の比率ならば佛伊は知らず英米日に關する限り五・五・三の比率も勿論差支ないであろう。

此の便宜論として見たる比率の解決法が、軍縮の本質論として二大目的たる國際平和と負擔輕減、前述の三大鐵則及二大標準より導かれたる結果と全く合致するのは欣快である。

終に英米間の比率問題に就きては、兩國の當事者が華府會議に於ける加藤、ヒユーズ、バルフオーア三巨頭の心境に立返り相當の代償を用ふれば、强ひて數字上の同一を固守することなく解決するに難くないと考へらる。例へばフイリツピンを脅威する新嘉坡根據地の施設中止、米國の大西洋岸に近く暗影を投ずるバーミユダ根據地の撤廢、南米の南關を制するフオークランドの現狀維持、斯くの如き協定を以てすれば英國の特別な事情に應ずる若干艦艇の餘分を英米均率の外に認め得るであらう。

一言以て掩へば、主力艦及航空母艦の最大限の徹底的引下げと根據地の現狀維持とを實現して、比率の決定を公正に行ふに於ては、次の軍縮會議に眞の意義が生ずる。之こそ、今迄大勢順應を本とした我國が世界民衆のために、素晴らしいイニシアチーヴを取つて力說强調すべき天與の好機會、好着點であろう。(四、七、八)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

壯士外交、學士外交、處士外交

嘉治隆一

一

前内閣が滿洲某重大事件と軍縮協定調印問題とに躓いて倒れたといふことは餘りに皮肉である。假にかゝる事件を惹起した者を攻撃する立場になることはあつても、自ら之を惹起して他から攻撃されるやうなことにならうとは誰一人夢想しなかつたに相違ない。事件の眞相は内地でこそ發表せられてゐないが、、から、うと想はれる。兎に角何れにしても、意識的には勿論のこと、假令無意識にしろ、自分の傀儡を破壞して喜ぶやうな者は子供の外には居ない筈だ。然し例外は何れの場合にもあるものと見える。況んや事の結果が終に反對派の想ふ壺に嵌つたといふのであるから愈々矛盾といはねばならぬ。も一つの軍縮問題にしてもさうである。前内閣の中でサーベル關係の人々を一通り見廻したところ、何れもシベリア出兵、郭松齡事件、山東出兵等の際に於ける英雄揃ひで、軍備擴張の申合せならばいざ知らず、軍備縮少の相談に乘る資格のある者などは一人もなささうである。所が現實に於て軍縮協定調印が行はれたのであるから全く抗辯の餘地はない。而も他の「、、、、、、、、、、」何事かをなすことはあつても、「、、、、、、」だけ斷じて何事をもなさないであらうと信ぜられてゐた連中が、どうした風の吹き廻しかうつかり「、、、、、、」、、をして了つたのであるから、反對派に尻尾をつかまれたのも無理はない。前内閣としては之亦誠に矛盾といはざるを得ない。

尤も、支那やロシアのやうな國々に對してはどんなことでもやりかねないが、軍縮問題は列强の提案だから追隨して置かないと後が怖ろしいといふのならば止むを得ないが、まさかそんな譯でもなからう。恐らく一から十まで橫車を押してゐるやうに見えてゐた前内閣と雖も、現代世界に生活してゐる以上は、多少とも時代の趨勢に影響されない譯には行かないために——當事者が自らそれを意識してゐたか否かは問ふ所でない——一つ位は縱車を押して調印といふ事になつたのであらう。が、計らざりき、縱車を押した時に顚覆して了ふやうなことになつたのである。すべて此種の外交上の矛盾はたつた一つ犯した

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゞけでも大變な害であるのに、それが二つも重複したのであるから、今日の狀態に立ち到つたのも無理ならぬ次第である。

二

前內閣は外交上の矛盾に禍せられて瓦解したのであるから、後繼內閣たるもの、亦、同じ問題に就て特に愼重の態度を採る可きことは當然である。而して今日、日本の外交上最も重大なのは對支政策であること勿論である。否、啻に日本のみに限らない。世界の諸國が東洋に注意を集中し、而もその焦點が支那に置かれてゐることは萬人の認むる所である。現內閣の如きも、これを忽諸にしては到底、對內政策を切り拔けることも出來ない有樣にある。

さて前內閣と現內閣との外交方針の相違は、通常、田中外交と幣原外交との對立として考へられてゐるやうであるが、兩者は果してどの程度に異つてゐるのであるか。慣習によれば、幣原外交といふのは世界の大勢に順應して外交問題をすべて合理的に解決しやうとするものであり、反之、田中外交は徒らに時代錯誤の大帝國主義を夢想し、無定見無軌道に横車を押さうとするものであると解せられて來た。所が先づ考へて見なければならないことは、前內閣に果して一貫した對支政策があつたかといふことである。最初に大滿蒙政策を標榜して立つたかと思へば忽ち排日に會ふや立どころに前言を食み、事を構へて山東出兵を斷行したかと思へばいつの間にか撤兵を行ひ、國民黨の南北統一を阻んで東三省に於ける靑天白日旗揭揚に横槍を入れてゐるかと思へば、忽ちにして自ら國民政府承認について人後に落ちることを恥ぢるが如き容子を示すなど、全く以て行き當りばつたりであつて、何處に所謂、田中外交の特徵があるのか皆目不明といふの外はない。若し强ひて之を求むるとすれば、終始、頭上高く鐵拳を振り翳してゐ乍ら、而も結局、支那に引摺られて行く所まで行つて了つたといふ位のものである。無論、鐵拳も場合によつては必要でもあらうが、それは同時に一定の效果を目指してゐる點から肯定せらる可きものであるのに、前內閣の場合は鐵拳を振り翳して大聲叱呼して置き乍ら、一寸刻みに退却して了つた末、引込みがつかなくなつてから、到頭先方の云ひ分を通してやつて、之こそ既定の方針だといつてゐるにも等しい。肩を怒らして乘出しておき乍ら、鼻端を挫かれてどのつまり腰を折つたやうなもので、時代遲れの壯士が大見得を切つて却つて失敗したのと同じで見苦しいこと夥しい。尤も、田中外交が對支政策を朝改暮變したことについては、國民政府が共產黨と袂を別つて以來、漸次右傾して來た事も與て力あらうと思ふが、蔣介石並に國民政府が今日のやうになるであらうといふことは最初から見透しのつかないことではなかつたのであるから、それが解らなかつたとすれば目先の見えないにも程がある。而已ならず、假令、國民政府が右傾しても依然として日本の支那に於ける「特殊權益」なるものが安定を失ふに至るべきこと、之亦自明の理であるから、若し、國民政府の右傾に安心して初期

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の鐵拳外交から末期の妥協外交に移つたとすれば餘りに咽喉元を過ぎて熱さを忘れるものであつて明かに前後撞着といはなければならぬ。然し、この撞着無定見は壯士外交の特徴である。

三

その點になると幣原外交の方は稍々一貫してゐる。蓋し、最初から外交の合理化を標榜して立ち、斷じて無理はしないといふにあるからである。之は單に外交のみならず、現內閣の成立の經過そのものが已にこの方針に據つてゐるのであつて、凡百の政策に共通したやり方である。それは忍從であり、逡巡である代りに決して田中外交のやうに逆轉する虞だけはない。前者を假に壯士外交といふならば、之は學士外交とでもいつたらよからう。學士といふのは必ずしも學者といふ意味ではなく、唯、一通りの學校教育をうけた者を指すのである。學校出にはがむしやらが出來ない。覇氣がない。表面は如何にも紳士的に出來上つてゐるが、宛も軌道に乘つた鈍行列車のやうなもので、何一つ創造的な仕事は出來ない。事務は運べるが大局に眼は行き屆かない。同時に多少の官僚氣質と狡猾さとは持ち合せてゐる。壯士外交の積極的であるに反して、學士外交は消極的である。所が今日の外務當局は總てこの後の範疇に入るべきものであるから、往々にして前內閣當局の壯士外交に反する事が多かつたので、對支外交にしても大きな問題が起る毎に、現地の外交官を信任せずして、一々內地から老骨を起用して態々向ふまで出張させるのを常とした。

現內閣の如き合理化外交に對する非難は、その消極的態度が對支外交の如き定石外れの場合には不適當であるといふ點にある。そして論者は先の幣原外相時代に突發した南京事件に對する忍從的態度などを極力攻擊する。あの事件については種々の考察が下され得るであらうが、要するに幣原外交に於ては、英米と同じ方針を採つて在留民の引上を主張したのであつて、その根據は在留民に正業者の少いこと、そして正業についてゐる者ならば假に一時引上げても軈ては復歸する機會が來るであらうと考へた點などもあらうが、今一つ根本的理由は支那本部に於ては出來るだけ消極的政策を採つておいて、、、の、、、、を死守しやう、それも、散兵線で防衛するのではなくして實質的に、、、、を以て擴從しやうと考へてゐたものと思はれる。これは一應理由のあることゝ見られぬこともない。然し、現內閣になつて先の時と同じ政策を續けた場合、果してそれと引かへに「、、、、」を固守することが出來るかどうかゞ疑はしくなつて來た。それだけ時勢が迫つて來たのである。そして所謂、幣原外交が、支那及び列國に好感を以て迎へられつゝあるといふにつけても、前途益々多難なるを思はざるを得ない。

四

田中外交は國民政府を承認したゞけで、後から生ず可き種々の難問

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

題を自ら解決せずに濟んだのであるから、或意味に於て、國民政府とは好感の裡に訣別したものといへるが、幣原外交はいはゞ後始末といふ貧乏くじを引き當てたわけである。その最大の問題はいふまでもなく滿蒙の利權である。永らく關內に入ることを躊躇してゐた張學良の北平入りと共に南北三巨頭の會見となり、急轉直下、東三省に於ける外交は擧げて南京政府に委ねるといふことになつた。隨つて、幣原外交も今後は一切の問題について王正廷等を相手にしなければならなくなつた。之れ滿蒙問題を特殊扱ひすることを許されなくなる第一步である。次に、極く最近に至り東支鐵路回收の問題に着手せられつゝある狀態である。新聞紙は之を以て直ちに滿鐵回收の前提なりと報導してゐるが、東支鐵路と滿鐵とは類似點はあり乍ら、尙、管理其他について可成り多くの相違もないでもないから、今俄かに同一視する必要はないとしても、少くも滿蒙の特殊權益が脅かされんとしつゝある第二步と見て差支ない。

國民政府は恐らく、東三省問題を特殊扱ひせずして、先づ、關稅自主權の回復、治外法權の撤廢、租界の回收、租借地の回收と順序を追つて一般的に主張して行つて、結局、滿蒙に於ける特殊權益の牙城に迫るに相違ない。第一に關稅自主の確立は要するに支那の財政的獨立の基礎であり、引いては鞏固なる統一國家成立の根柢をなすものであるから、それが遂げられて、支那が例へばアメリカ合衆國の如き市民的聯邦となれば幣原外交としても必ずしも難局に導入されるとも限らない。次に自主法權、租界回收の問題なども、明治二十年代の日本に於て治外法權及居留の撤去、外人內地雜居の許可等の諸問題が喧傳せられた當時の歷史を回顧すれば思半に過ぎるものがあるのであつて、國家狀態の安定と共に之等の問題の解決も至當の事として中外に承認せられるに至る可きは疑ない。さればこの歷史上の趨勢に順ふことがあつてもそれによつて幣原外交が暗礁に乘り上げるといふやうなことはよもやなからう。たゞ問題は最後の租借地回收の問題が起つて來た場合に學士外交は如何なる態度に出づるであらうかといふ點にある。この點は假にそれが世界的趨勢であるとしても、世界各國の租借地全部が同時に解決せられる前に、單獨に之を解決しやうとするならば、明に暗礁に直面するに相違ない、幣原外交が如何に之を切りぬけるか多少の興味なしとしない。

五

昔から處士橫議といふことがある。處士として止まる者は縱橫に問題を批判することが出來るが、朝に在る者は左樣に簡單に參らぬといふのが、一般の實例である。然し乍ら、大體に於て恒に在朝者の見界よりも野人の見界の方が正しいものである。だから、學士外交たるもの、若し、行詰らないことを欲するならば、盛に處士の意見に學ぶ處なければならぬ。但し處士は本質上、自ら外交の衝に當ることはしない。故にたゞその意見を採用するより外に道はない。學士外交は須ら

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ず處士外交たらんと心掛く可きである。

所が現代には處士少しとしない。殊に既成社會制度が從來の如く一般に對する權威を有しなくなつた樣な時代には益々その數を增すものである。されば今や處士は天下に橫行、盛に橫議しつゝあるが、たゞ困つたことには現代の處士は學士外交の協力者たる可く、餘りに別個の階級意識に醒め過ぎてゐる。つまり、言葉通りの處士外交なるものは現代社會に於ては成立し得ないと見る可きであらう。

壯士外交が行詰つて學士外交が之に代つたが、後者もやがて行詰る時が來るに相違ない。その時之に代るものは何であらうか。恐らくそれは在來の外交の範疇には入らない何等か別のものであるに相違ない。

緊縮政策の正體と金解禁

高橋龜吉

一、國民を愚にした緊縮政策

井上新藏相に由ると、今日の我が經濟困難の最大原因は、戰後財界の大反動、大震災後收入の激減せるにも拘らず、國家及び個人の暮し向が、之に伴つて建直されてゐないからだと云ふ。『されば、この困難を切拔けるためには、國民一般の精神が緊張し、消費節約を行ふのが最も有効な方法である。それがためには先づ政府自ら財政を緊縮して國民に範を示す外はない。それで新内閣では財政の大緊縮を斷行することに閣員一同固く覺悟した次第である』と。（七月六日東京朝日）

いかにも、その限り間違はない。しかし乍ら、我が經濟が大正九年の反動、大震災等のために一大打擊を受けながら、しかも、それとは無關係に有產階級の多くが放漫なる暮し向を續け得た根因は何處に在つたのだ。要するに、井上新藏相自らが、當時日銀總裁として、財界救濟の名に由り、放漫なる資本家救濟をやつたからでは無かつたか。就中、我が財界が今日の如く、二進も三進も出來ざる行詰狀態に陷つた近因は、昭和二年金融大恐慌の善後策として、各種『特融』に由り、約十億圓近くの巨額を國民の負擔に於て放出し、以て、資本家を救濟したことに在る。

即ち、あの金融大恐慌に由つて、資本家の資產の尠くとも約二十億圓近くが空洞になつてゐることが突如として曝露せられ、それだけ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

有產階級の消費は一大節約を强ひられる筈であつた。然るに、國民の負擔に於て發せられたる「特融」約十億圓の救濟に由つて、有産階級はその損失を免かれ、從つて又、その消費は依然として減少しなかつた。之れ、今日、我が經濟界が、その實力以上の物を消費する根因である。しかも、當時の井上日銀總裁は、斯くの如き「救濟」を受けたる銀行に對し、其の救濟金返濟迄、「利益配當金を禁止するだけの責任すら課せなかつたがために、それ等銀行會社は、蛸配當を續けて、それだけ有產階級の購買力を欺瞞的に膨大せしめてゐるのである。

然るに、井上藏相は、右の事實を棚に上げ、その方面の節約に全力を擧げることなく（卽ち銀行、會社等の減資減配を强要する手段をとることなしに、）之に代へて、政府一切の新事業中止と云ふが如き、專ら國民大衆の利害を犧牲にする手段を敢行せんとしてゐる。而して曰ふ、我が經濟困難を救ふ途は此の外に無い、と。之を他の言葉で云へば、銀行家や資本家を救濟する間は、而してそのためには、いくら冗費しても構はぬ。しかしその救濟はもう濟んだ。サアー、これからは國民一同一大儉約だぞと、專ら國民大衆の生活程度を低下せよと云ふ。しかも、今日の世の中では、消費の節約はその所得を減少せしめる外、效果的方法無きにも拘らず、有產階級には救濟に由る蛸配當（利益無きにも拘らず利益ありと欺瞞して株式に利益を配當する）を公許してゐる。以て、新内閣の緊縮政策が、如何に人を喰つたものであるかを理解するに難くないであらう。

二、解禁準備には御門違ひの緊縮策

新首相及び新藏相並に九日の政策聲明書に由ると、金解禁準備の第一は財政緊縮、第二も第三も財政緊縮である。而して、このたて前で、財政緊縮及公債整理をやるのだと云ふ。いかにも、歐洲諸國の解禁準備は、第一に財政緊縮、第二第三にも財政緊縮であつた。その爲替不安の根因が、歐洲大戰に基く財政異常の膨脹に在つたからだ。しかし乍ら、我國に於ける爲替不安の根因は財政關係では決してない。然り、これ迄、金解禁の斷行を阻止し來つた病は、財政關係ではなくて、財界の整理未了で在つた。現に、大正十五年憲政會内閣が解禁斷行の準備として極力整理に努めた點は、財政ではなくて財界整理ではなかつたか。震手法はその準備として議會に提出されたものだ。然るに、其の折角の解禁努力が水泡に歸した原因も、周知の如く昭和二年の金融大恐慌であつて、決して、財政關係ではなかつた。今日と雖も、金解禁の斷行を阻止する根本原因は、依然、財界の未整理であつて、財政關係ではない。

然るに、最近に至つて、解禁準備として、財政緊縮と公債整理が絕叫せられるに至つた所以は、特融以來、遊資に苦しむ銀行家が巨額の公債を買込みし所、解禁恐怖のため、その市價が暴落したので、その救濟策として、卽ち銀行家救濟策として、財政緊縮、公債整理が叫び出されたのである。濱口首相、井上藏相の財政緊縮論は、要するに、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此の銀行家の利害を、そのまゝ、鵜呑みにしたものに外ならぬ。

尤も、此際に於ける財政緊縮は、それだけ、消費を節し、爲替を騰貴せしめ、その範圍に於て、解禁準備としての效果は在る。去り乍ら我が現在の爲替下落、財界不安の根因たる財界の整理に主力を注がず之を直接の對象とせずして、御門違ひの財政緊縮を以て之に代えた所で、その效果は知れたものである。現に、新內閣必死の緊縮をやつた所で、一億圓の財政緊縮が出來れば大成功の方であらう。之に反し財界整理を此際徹底せしめることに主力を注がんか、一方には數億圓の購買力を整理し、一方には之に由つて生產費を低下せしめてその輸出力を增進し、兩者相俟つて、最も有效に解禁準備を整え得るであらう。

こゝに、財界整理とは第一に、銀行、會社の蛸配當を一切嚴禁することだ。銀行に對しては、大藏省の檢査を通じて容易に之をなし得る筈だ。會社にしても、保險、電力、電鐵道等等亦、各種の監督機關を通じて之をなし得るのである。たゞ、政府が、資本家に阿諛して之を斷行しようとしないから、放漫になつてゐるのだ。之を强制し得る方法がないのでは決してない。第二には特融の回收に全力を擧げることだ。

然るに、新內閣は、解禁準備に最も肝心なこれ等の財界整理に對しては何等之を强要する手段を採らず、少くとも之をその政策聲明中に記さず、(而して此方面の整理ならば少しも失業者を出さず、却つて、生產費低下のために失業救濟の效用がある)、之に代つて御門違ひにも多大の失業者を約束し、且つその解禁準備としての効果の極めて限られたる「新規事業全部中止」と云ふが如き盲目的財政緊縮政策を强行せんとしてゐる。誰か、斯くの如き露骨極る資本家本位の解禁準備を承認しようぞ。

三、不公平極る金解禁打擊の緩和策

新內閣の解禁準備が、如何に國民大衆を愚にした、露骨極る資本家擁護策なることは、以上已述の如くであるが、その資本家偏重策は、これに止るものではない。即ち、新內閣の政策聲明書に由ると、財政緊縮に由る整理額の全部は、之を公債の整理に充當し、それだけ、或は公債を償還し、或は公債の新發行を減少し、以て、銀行家の全力を擧げて支持する經濟審議會の公債整理答申中に從ひ、國債の總額を昭和四年度末現在(約六十億圓)以上に增大せしめず、更に進んでは其の總額を遞減せんとするものである。

即ち、之に由つて分る如く、財政緊縮の隱されたる眞の目的は、公債整理に在る。之れ、已述の如く、最近の財政整理要望の聲が、銀行家救濟のための、公債市價釣上策(公債を償還し、その新規發行を減少すると公債市價は騰貴する)に在りし當然の歸結である。しかも、濱口首相及井上藏相等が、之を以て解禁準備だと云ふわけは、若し、これ等の公債整理の準備をなすことなくして金解禁を斷行せんか、公債暴落して巨額の公債を所有する銀行、保險會社等が莫大の損失をする。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それでは、可愛想だ、と云ふので、その損失の打撃を豫め緩和する必要があると云ふのである。

だが、金解禁に由つて打撃を蒙る者は單に銀行家連のみではない。それ以上、農民、勞働者、中小商工業者その他の無産大衆の蒙る打撃は深刻である。だから、いま若し、解禁準備として、銀行家に對する解禁の打撃を豫め緩和する必要ありとせば、それ以上、如上の如き無産大衆の打撃を豫め緩和する必要がある。果して然らば、財政の一大緊縮に由つて捻出し得たる財政上の節約は、之を公債の整理に振向ける代りに、先づ、民政黨在野時代の公約たる教育費の國庫支辨、消費稅の撤廢又は削減に振向けるべきである。さうしてのみ、金解禁の農民其他の無産大衆に對する打撃を幾らか緩和し得るのである。にも拘らず、新内閣の聲明するところに由ると、公約の義務教育費の國庫負担消費稅の撤廢乃至削減、社會政策的立法等は、すべて、之を金解禁斷行後に延期し、財政整理の全部を擧げて、之を公債整理に振向け、以て、銀行家の利益を只管に擁護せんとしてゐる。顧るに、三土前藏相すら、新内閣の財政政策を評して銀行家偏重の財政緊縮政策なりと斷言せること周知の如くであるが、その意圖せる點の何れに在るかは兎に角、以て、新内閣の財政政策が如何に露骨に銀行家本位のものなるかを知るに足るであらう。

しかも注目すべきことは、財政整理の金額を以て、此際、公債整理に振向けると云ふことは、それだけ、金融を緩和し、却つて、金解禁準備に全然逆行するものであると云ふことだ（解禁準備としては極力金融を引締めねばならない）。然るに、之を或は義務教育費國庫負担に振向け、或は之を消費稅の撤廢に充當せんか、それだけ生活費を低減し、生産費を安くし、以て、貿易關係を改善して、金解禁を積極的に促進する効果を有するのである。にも拘らず、新内閣は、金解禁準備に逆行して迄も銀行家救濟のために、公債整理に全力を擧げんとしてゐるのである。

こゝで一言説明して置くが、新内閣や銀行家は、公債が六十億圓に激増したことを以て、無條件に、財政的危機であるかの如く吹聽する。いかにも、銀行家救濟のために特融で七億圓からの公債增加をなしたり、地主擁護の米價引上策で一億圓近くの損失をし、資本家救濟で預金部に損失を轉嫁し、それ等の結果が皆公債の增額となるが如きことは財政の危機である。だが、電力、鐵道、電話、港灣改善、河川修築等のための生産公債は、それが濫用せられない限り、如何に增額しても決して、財政の危機ではない。何となれば、その元利はその公債支辨事業を以て之を償還することが出來、毫も、一般財政を壓迫することにならないからだ。されば、現在の我國の如く、解禁不安のために、資本家的企業の一切は見送られ、失業者續出の場合には、政府は公債支辨で生産事業を起し、以て、失業者救濟の手段をこそ講ずべきであつて、財政上生産公債の增額を少しも恐れる必要はないのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

にも拘らず、銀行家や新内閣が、生産不生産公債の別なく、公債總額が増加することを只管に恐れるわけは、要するに、そのため公債市價が下落して、銀行家が損をするから困る、と云ふに過ぎないのであつて、財政上の立場から、公債が過多だとか、危險だとか云ふのでは決してないのである、尤も銀行家や新内閣は、左もさうであるかの如き口吻をするが、それは要するに、銀行家の利益のために、民衆を欺瞞せんとする一手段に過ぎない、斯かる點から云ふも、此際、他の一切の政策を犠牲にして、公債整理に全力を擧げる目的が、結局、銀行家保護に過ぎざる所以を容易に看取し得るであらう。

新内閣の財政緊縮政策の不公平は以上に止らぬ。等しく資本家の陣營内に於ても、金解禁の打撃を蒙ること大なる事業家は、毫も、その緩和策に接してゐない。此の方面からも、財政緊縮に由る整理額を以て、營業收益その他の輕減を運動し、又、保護關税引上を要求するに至らう。而してその結果は、一般國民の生活費を騰貴せしめ、愈々、無産大衆の反對を大にするであらう。

斯くの如き不公平極る財政整理案が、國民大衆の支持を得る筈がない。尤も、只今の所、田中内閣に對する惡感的反動と、その緊縮政策の内容不知のために比較的反對が表面に見えないが、しかし、その内容の漸次明かとなるに連れて、必ずや、新内閣の財政政策は國民の一大反對に面するであらう。

四、愚直無策な財政緊縮

腎臓病の水腫をとるためには鹽分を禁止する、と云ふのが病理學の公式である。そこで、若い醫者などは、之を「斷行」したがる。しかし鹽分を禁止すれば食欲が減じ、衰弱を増し、遂に、腎臓病を治療するために、肝心の生命を衰弱のために失ふに至る。筆者の家族は、かつて、藪醫者のために斯様な危險に陷つたことがあつた。良醫は、斯かる場合には水腫の治療は後れるとも、鹽分を減らして食欲を増進し、先づ體力の回復を圖りつゝ、水腫を克服する手段を採るものである。然るに、新内閣の金解禁政策は、要するに、良醫の策を捨て、この藪醫者の療法を採らんとするに似てゐる。いかにも、金解禁には緊縮政策に由る消費の節約が必要だ。しかし、それを強行しようとすれば、財界の衰弱が増大して、金解禁の斷行に至る迄に、財界の健康は、その療法に耐え得ずして死に至る危險が多大である。

だから、此際に於ける解禁準備としては、一方に緊縮政策(それも軍備その他非生産的のものに全力を擧げよ)をやると共に、他方に我が經濟の生産力を増進し、以て輸出の發展と輸入の阻止とを圖ることに全力を擧ぐべきである。そのためには、已述の如く、此際、專ら資本整理に全力を擧げた財界の整理を斷行して、産業の資力を充實し、生産費を低下し、以てその對外競爭力を大にすべきである。(斯くの如き資本整理は、又、平價切下げに由つても、最も巧妙に且つ大規模に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

達成せられる）又、新規事業一切中止と云ふが如き盲目的緊縮政策の代りに眞に産業の發達に必要なる施設には經費を惜しまず（公債支辨でも構はぬ）之を斷行すべきである。然るに、新内閣の解禁準備は、斯くの如き體力增進政策に先づ全力を擧げる代りに、緊縮政策に先づ全力を擧げんとするものである。かくては、解禁準備に對する財界の抵抗力は極めて薄弱にして、中途に於て斃れる危險が多大である。

已に株界（財界の健康は）一種の恐慌的暴落を演じた。米も生絲も暴落した。爲替は投機的に上騰して輸出産業及び輸入品の競爭に曝露せられたる産業は何れも少からぬ打擊を受けつゝある。而して、解禁準備の進步すると共に、これ等の苦痛は更に增大するであらう。一體同じく殺されるにしても、一思ひにやられるのは左程苦痛でもないが、一年も二年もかゝつて、或は指を切り、或は耳を取り、或は足を捨てると云ふが如く、ジワ〳〵とやられるのではタマツタものではない。それと同じく、財界にしても、一思ひに解禁斷行と云ふことならば、その打擊は强大でも、兎に角、やつてやれないこともないが（而して一度び斷行せば否應なしに之に順應するか、、かであるが）、しかし、已に、著しく衰弱してゐる我國の現狀に於て、一步々々、解禁準備を進めやうと、云ふのでは、民衆の大多數はその苦痛に耐え得るものではない。途中に於て、それの中止を要求するに至るは餘りにも自然である。

現に、明治十四年より十八年に至る不換紙幣整理（その經濟的意味は今日の金解禁準備と同一だ）に際し、當時の、、、政府すら（而して當時の我が經濟は尙ほ農業中心で不景氣に對抗し得る力は今日よりも遙かに强大であつたが）、その整理進步の途中に於て、民衆がその苦痛に耐え得ずして、その中止を要求し來るべきことを慮り、時の藏相松方正義は、わざ〳〵御前會議を要求して、其の席上、陛下より親しく中途で之を中止せしめざる御言葉を頂戴して、始めて、その紙幣整理に着手したと、松方氏親ら文獻に記してゐる。

然るに、新内閣はどうであるか。來る議會には、解散する外に仕方のない少數黨である。而して、新議會に絶對多數を占めるためには、約七八十名の新議席を獲得せねばならないが、それは極めて難事である。なる程、現在の人氣は政友會への惡感に對する反動として意外に好いやうであるが、しかし、緊縮政策の進步に伴ふ苦痛の現實化すると共に、及び已述の如き銀行家本位の財政政策の正體曝露すると共に（而して政友會も之には連帶責任である）反民政黨熱は漸次に濃厚となるべく、結局、中途に於て倒閣するか、又は、無産政黨その他の少數黨にキヤスチングボートを握られ、現在の如き、財政經濟政策に一大訂正を强ひられるを餘儀なくするであらう。斯かる暁に於ては、平價解禁は斷々絶望となり、遂に平價切下解禁を餘儀なくせらるるに至らう。（七・一〇記）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

緊縮政策の行方

阿部賢一

風手と思想——

その間にどの樣な關係があるか知らない。が、尠なくとも田中前首相と濱口首相とについて云へば、何だかその間が無關係の樣ではなさそうだ。見たところ奥行も門口も大ではないが何處ともなく茫洋として締括りのありや無しやが疑はれる田中總理と、幾量一天張で手堅さそのものを思はしめるやうな濱口首相。つまり無軌道式に何處へでも積極的に突進しようと云ふ政友會と、軌道はあつても無理は一切しない樣にと心懸ける民政黨。さても首相の風手が政黨の本質をよくも代表したものである。柳は綠花は紅であつて何れ優り劣りはないと云ふもの丶、その眼差を見よ、その額の皺を見よ。そこには民衆の深き惱みが浸み出てゐない。この點は兩氏同一であり、兩政黨に變りない。そしてそこに二大政黨の財政經濟策を批判する鍵がある。

× × ×

どう云ふ廻り合せか、無政黨はいつも政友會が思ふ存分やつたふしだらな財政經濟の後始末をつける役を仕つてゐる。政權を奪取することは政友會の得意とする所で、奪つた政權の中味を吸つた殼の整理は棚牡丹主義の民政黨が引受ける。大正十三年の加藤內閣はそれでありその藏相は濱口氏であつた。そして奢侈輸入品十割税でモダン老少年を吃驚さしたその濱口氏が重厚の資質に磨きと强さを加へて今度內閣の首班に坐して出現した際、例によつて財政の掃除が豫期せられたのは無論である。

濱口首相の大藏省內での循吏として經歷やその健實ぶりについては誰か論ずる人があるだらう。で、古い話は措いて、六月五日——まさか月餘にして大命が自分に降下するとは神ならぬ身の知る由もなかつたその日に、黨としての方針を濱口總裁は闡明した。民政黨臨時議員總會でゞある。總裁は財界不安の原因は政友會內閣の傳統的財政經濟政策に歸せざるを得ないこと、特に政府の公債政策がさなきだに疲弊困憊せる財界に重大なる壓迫を加へて窮迫の度を甚しからしめたこと、なほ金解禁問題に對する政府筋の輕率なる言動が——三土藏相が兩税委讓を犧牲としても金解禁を斷行するとか汽車中の漫談で口すべらかしたことが株界を震憾したのであつた——財界を不安に突落したこと、等、等を鄭重に說いたものである。つまるところ財界不安の原

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

因は政府の公債膨脹政策と金解禁に對する浮薄なる態度に歸すべきものとなした。

で、民政黨は之をどうしようと云ふのであるか。

「我黨の財政々策は公債整理政策を中心として財政の整理をなすといふに存するのである。それは又金解禁を達成するための手段の主なる一となるのである。‥‥一面においては財政の緊縮によつて極力新規公債の增發を抑へ、他面においては公債の償還額を多くすることを趣旨とするのである。‥‥我黨の公債政策は原則として少くとも公債の總額を現在額よりも增加せざることを期し、更に進んで相當の方法を設けて公債の總額を遞減して行くことに努力すべきである。‥‥政府當局は愼重なる用意をもつて當面の重要問題に關する廟議を一決してその態度を確定し實行的計畫を定めて國民に示し、その決心と用意とを促すべきである。まづ第一に速かに閣議を定めて兩稅委讓の放棄を聲明すべきである。第二にこれ又閣議を開いて積極政策の放棄と緊縮方針の採用を聲明し天下に向て從來の方針の誤れるを謝すべきである。第三に右の緊縮方針に基いて速かに本年度實行豫算を編成し、特に出來得る限り公債發行額を減少すべきである。第四に自發的に國債整理の大方針を立て之を聲明すべきである——。」

これが濱口總裁の口を通して發表された民政黨の財政經濟方針である。そして之が乃ち今日濱口內閣によつて實行せられんとする緊縮財政の基調である。

濱口首相とその一黨の財政方針はこれで明であるが、その實行の當事者として井上準之助氏が——事務引繼で大臣室で三土前藏相が「まさか君が來るとは‥‥」と面喰はした事程左樣に、誰しも豫想しなかつた人が舞臺に表はれた。井上氏の過去における功罪はまた論ずるに其人があらう。だが曾ては大戰當時高橋是淸藏相の下で日銀總裁として——放漫無軌道の財政と金融に大童とあつて共力した其の人が十年經てば緊縮內閣の本尊として入來あるとは——恐らく井上氏自身も今更の如く感慨無量であらう。

だが、いつから改宗せられたかは知らないが、近年は財界の世話役として一本立となるに從ふて財政緊縮の必要を自覺するに至つたことはその言說によつて明であつた。また舊い證文を出して兎や角云ふのではないが、昨年の冬、一月二十五日と云ふ日に銀行家の新年宴會が銀行集會所で催された。元老澁澤子などは冗言も勞せずに「功を奏するは窮苦の間にあり、事を破るは得意の日に其の原因を作る」と云ふ箴言を以て列坐の偉い若衆を戒めた。この後を享けた民政黨顧問の山本達雄氏は昭和二年のパニックが當然の報いであることを說き、日銀が銀行救濟に沒頭してゐるのをたしなめ、金解禁の斷行を强調した。銀行家時に日銀が槍玉に擧げられたのを心に据へかねてか井上準之助氏は立つて一矢を報いた言葉がこうであつた。今日あるを思はせるに十分である。

『實業を保護せざる政治はまことに悲しむべきである。吾人は過去における政治の腐敗に憊りてゐるが今後において國民の希望に副ふやうな內閣が果して何時の日に出現するかを疑ふ。今日は財政上眞に節約を必要

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とする。然るに歴代内閣何れか眞に財政の緊縮を實行したるものありや。年々豫算は膨脹し公債は同樣増加する。しかして忠實なる國民は平然としてこれを呑み乾してゐる……。』

云ふ心は政治家を十把からげにしてその無能と無節操を痛罵したのである。事實とし我國の政黨政治の財政上の有害なるを冷評したのだ。歴代の内閣一として眞劍にやる財政の緊縮を敢行したるものなしと斷言したのはたゞに一山本氏に對する腹癒せだけでなしに慥かに支配階級者群における一大警世の言であつた。そしてその言や實に宜し若しも井上氏の過去がなかつたならばと吾々に思はせた。が、こんどは彼自身同樣の罵倒を將來受けぬかどうかのテストに立つてゐる。實は財政緊縮の必要を感じたゞけでなしに、その實行をば國民多衆は久しく希望してゐた。政府特に政友會内閣の過年の無茶な豫算膨脹や公債政策や利權漁りの政治は誰か來て大鉈振つて打切つて貰ひたかつたのである。ところへ從來政黨關係の不明な、恐らく政友系と目されてゐた井上氏が顏を出した、それも山本氏等の賛成の下に引出されたのだから面白い廻り合せと云つて無理でなからう。

井上藏相は、かくて、去る日民政黨に入黨までして政界に復活した譯であるが、どこまでこの才人と剛直な濱口首相が道伴で行けるか、閣僚が又與黨の濟々たる多士がその下風に立つを屑しとするか。それは判らない。人事の事は銘々の考に委してよいが、とても多難なのは内閣それ自身だ。

よく云へばこんどほど玄人揃ひの財政内閣は曾てなかつたであらう。既成財政の問題にかけては嚢中に物を探るやうに精しい濱口首相の下に、金融問題にかけては胸中何人にも讓らないであらう自信のありそうな井上藏相、その下に講壇には財政學を說き街頭には黨人として財政を戰ふて益々冴えて來る小川次官、それに省内での計數の人たる河田次官、等、等。船頭は多い。だが——また。

× × × ×

新内閣は七月九日閣議においていよ〳〵實行に着手すべき十大政綱を決定し、奏上して勅裁を仰ぎ、廣く國民に向つて之を發表した。曰く、一政治の公明、二民心の作興、三綱紀革正、四對支親善、五軍縮促進、六財政緊縮、七非募債と減債、八金解禁斷行、九社會政策の確立國際貸借の改善關稅改正調査委員會設置、十教育機能の更新社會政策的見地に基く中央地方稅制の整理義務教育費補助増額其他の政策に至りては機に望み事に應じ更に闡明實行すべきこと。等、等。

事財政經濟に關するものに就て云へば次の三點をその重要な論點となすであらう。

一、財政の緊縮、この點については戰時好景氣時代に馴致せられた浮華の弊風が減退せず近時却つて甚しきを加へて來たので社會の指導的地位にあるもの宜しく率先して勤儉力行もつて一世を警醒するの覺悟あることを要す。即ち政府自から中央地方の財政に對し一大整理緊縮を斷行し依つて以て廣く財界の整理と國民の消費節約とを促進せん

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とす。財政の整理を實行するに當り陸海軍の經費に關して國防に支障を來さざる範圍において大に整理節約の途を構ずる所あらんとす。――とこれがその本文の一部である。次は、

二、非募債と減債。國債の累積が財政の基礎を薄弱ならしめ、財界の安定を脅威し、公債の信用を毀損すること甚しいものがあるから、昭和五年度から一般會計において新規募集を打切り、特別會計においてもその年額を既定募債計畫の半額以内に止めること、國債償還の歩合を增加し更に獨逸から受領する賠償金を減債に向けること。かくして國債の總額を昭和四年未現在額より增加せざることゝなし、地方債も同一の方針によつて極力その抑制を斷行することゝする。また現在施行中の豫算も實行豫算を編成して出來得る限り募債額の低減に努力すること。――これによつて吾々は政友會内閣の公債卽生產主義の財政政策をば根こそぎ斷ち切らうと云ふ現内閣の方針が判ると共に、公債そのものを偏重して行く金融資本本位の財政思想を窺ひ知るのである。で、その次は、

三、金解禁の準備と斷行である。金輸出解禁は「國家財政及び民間經濟の建直しをなす上において絕對必要なる基本的要件たり。しかもこれが實現は甚しく遷延するを容さず、上述財政經濟に關する事項はたゞに我財政經濟的を整救する上において必要なるのみならず金解禁を斷行する上に於て必要欠くべからざるの要件たり。政府はかくの如く諸般の準備を整へ近き將來において金解禁を斷行せむことを期す。これ卽ち我が財界を安定したの發展を致す唯一無二の方途なるを信ず。」

これが新内閣の金解禁の問題に對する態度である。乃ち財政經濟の緊縮節約その他諸般の準備をして現行法定通りの金本位制度に復歸しようと云ふことである。所謂ゆる舊平價解禁だ。つまるところこれを現内閣の財政方針の大綱について云へば、一は財政の緊縮の實行と民間經濟の節約の勸說をなすのは「實に國民經濟の根抵を培ふ所以なるのみならず又もつて國家財政の基礎を强固にし他日大に伸びんとする素地を作る所以なり」となすからである。二は國債の新規募集打切と減債基金の增加であつて之によつて謂ゆる財政の基礎を强固にし財界の安定を所期し、かねて公債の信用を高めんとするにある。そして第三金解禁は財界安定の唯一無二の良法なるが故となすのである。

× × × ×

濱口内閣が成立すると、財界は流石に沈んだ。證券相場の急落は財界の人々が金解禁の眞意を理解しないからだと井上藏相が說明したり、首相は首相で他の總ての政策を犧牲としても金解禁を斷行しなければならんと汽車中で語つたので更に財界をおびえさした。そこへ付け込んで政友會に屬する魔手が財界擾亂を陰密の間に煽動して倒閣を策しつつある等と傳へられるゝに及んで不安が增して來た。が、皮肉にも爲替だけは政府の眞面目らしき態度を賞でてか、ぢり〳〵と上つて四十五弗を拔いて來た。

今でこそ閣員も與黨の面々もしきりに緊縮〳〵と何でもないやうに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

云つてゐるが、物價は下落する、米價は天氣次第だが今の處好都合で下落の傾向であり、生絲價も金解禁を控へて下り、輸出は思ふやうに行かず、不景氣は深刻となり、失業者の數が殖へる…と云ふやうに悲觀材料ばかり列べ立てゝは不公平かも知れないが、まづ財政經濟の緊縮と金解禁の豫想と實行に伴ふ幾多の苦痛が沈鬱な顏をして出て來だすと、政友會の攻撃材料は增して來る理で、それが地方與黨員の陳情となり、與黨內の不平分子の動搖となり、引いて內閣の硬ばつた顏と手を動かすやうになり落つるのではなからうか。しかも議會で多數を持たない內閣ではないか。先の事を案じすぎるやうだが既成政治の行方は大抵こうであつたのである。

×　×　×

財政の緊縮は國にも道府縣市町村のいづれにおいても常に緊要だ。特に租稅を收入の大宗とする現代國家においては民衆の名において一圓の無駄費ひをしてならない事は當然である。それに事實について云へば歲出の膨脹は避くべからざる傾向として各國各地方團體の財布を膨らしてゐる。我國の一般會計では世界大戰前の六億五千萬圓弱のものが現行の豫算では十七億七千萬圓强となつてゐる。もつと近く世界大戰後の大正八年の決算の十一億七千萬圓に較べてゞも四割弱の膨脹率が十年間に增加してゐる。なほ地方團體の歲出膨脹は一層甚しいのである。

歲出の膨脹がそのまゝに民衆の生活の安定と向上を來してゐれば、又一般文化の向上にそれだけ役立つてゐるとすれば、それは我慢が出來ると云ふものだ。ところが事實は一方においては民衆の生活不安と低下と、他方においては有閑者流の豪奢と道德降下とのこの二つの間隔が神經的にますます隔りつゝあるが、しかも其の間何等の積極的緩和に膨脹せる歲出が與らないとあつては財政そのものは民衆のものでなくなるのみならず、この十年間には我國の物價指數も、國際的物價水準から云へばまだ大に高いが、それでも我國だけでは二三割は下落してゐるのだ。それだけ人件費も物件費も減少すべきある。尤も濱口氏が藏相のとき大正十四年度の更正豫算と十五年度豫算の各財政整理とで約一億圓の節約をなしはしたが、それはホンノ皮相のものであり暫しのものに過ぎなかつた。そして總じて之を云へば殖へる方は殖へる一方である。つまりそれは最低能率の官吏行政組織を失業救濟の意味で維持してゐるのと、その上無用な官省局課を濫設して國庫を蕩盡するからである。この點は曾て武藤國民同志會長が歲出三割減かを、行政の統合と局課の廢合によつて實行し得ると喝破したのは妥當の見解であると今でも考へてゐる。私營會社を整理するほどの事をせぬまでも、國民の膏血を一錢も無駄をせぬと云ふ誠實があつて財政を整理統一すれば一般會計の十七億を十四億臺にすることは出來ねばならぬ。

現內閣が昭和五年度の豫算でどれだけの見識を見せるか判らないが、國防費の節約を陸相宇垣氏が——曾て四箇師團減を敢行した——調査しかけとかの報はその實現を希望せしめる。現今陸海軍航空の軍

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

事費は四億八千七百萬圓に達し、一般會計に屬する歳出の二割八分と云ふことになつてゐるが、なほその他に間接に軍事費に屬するものが數多あるから實際は五億圓を越すであらう。それで、軍事費の一國の財政上の地位を諸外國と比較するには、各國その會計制度、豫算の立方、國家政務の內容が相異するから、單に我國の一般會計中の軍事費と他國の歳出部の軍事費とを比較することは無理だ。寧ろ國民租税負擔額の中何れだけ軍事費として負擔してゐるかの率を比較するのが合理的の觀察であると思はれる。この方法によると率の最も小なるものは獨逸で租税收入の約八分が軍事費であり、次で英國の一割七分、佛蘭西の二割二分、北米合衆國の二割三分、伊太利の三割五分、最後に我國は實に四割五分と云ふ宇內に冠たる重荷を負ふてゐるのである（煙草專賣益金を租税收入に加へてこれである）。それで世界に比類稀な負擔率の元であるこの國防費が節約せられることは最も希望する所である。そして可能であるべき筈である。

現行豫算內の節約でどれだけ浮び上るか、次年度が豫算でどれだけ功れ味を見せるかは目下のところ判らないが、前者は何れ謂ゆる義務費外の基本額から節減するものだから大した事ではあるまい。後者に至つては眞劍でやれば相當の成績を示し得る譯ではある。曾ては濱口藏相の下において大正十四年度豫算は前年度更正豫算の後を受けて二億五千五百萬圓の節減繰延額を捻出した（內一般會計で一億五千二百萬圓と特別會計で一億三百萬圓）が、新規要求もあり結局に豫算面では六千五百萬圓減となつた。翌年度では又五千萬圓增加したが、で、昭和五年度の豫算が觀物なのであると同時にもつと吾々にとつて重要なのは節約から浮び出るべき餘裕を如何に向けるかゞ問題だ。それで最後に公債の問題に之を絡めて考へねばならぬ。

× × × ×

濱口氏が民政黨總裁として組閣一ヶ月前になした聲明では、財政經濟の緊縮整理は公債整理を中心として行ふべきものであると云つた。それはさきに述べた通りである。

現代資本主義經濟の基礎の上に立つてゐる各國の財政が公債の累積に苦しみ拔いてゐるのは觀るも哀れな位である。現今最もひどいのは佛國で公債額は歳出の五割五分近くを公債の元利支拂としての公債費に宛てゐる。次は英國で歳出の五割は公債費だ。かやうに公債が未曾有の額に上つたのは世界大戰のお蔭であるが、財政上で公債が苦痛になるのはその金額そのものよりか元利の償還額そのものなのである。

英佛等に比較すれば我國の約五十九億圓の國債と五億圓の借入金、合計して六十四億圓は必ずしも大とは云へない。が、現在實行の國債高萬分の百十六と、國庫剩餘金四分の一繰入との支拂で年々二億九千萬圓近くの負擔でも小さい世帶では苦痛だ。それは租税收入の三割にも當るのである。公債費の減少は無論必要だ。經濟審議會あたりが國債不增加と、國債總額の五十ヶ年償還方針で毎年度一億二千萬圓歳計剩餘金二分ノ一繰入等を決議し出したのも彼等の利益から云へば一理

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

がある。しかし問題はそう簡單であるか？

資本家的國家の下に於ては公債は資本蓄積の一具である。金融資本の餘裕は有利にして確實に投資物件を求めて都合さへよければ公債に流れる。なる丈け割引發行法で發行して貰つて、償還のときは時價で買上げずに抽籤で額面を返して貰ふ。そうなれば二重の利だ。そして公債は紙幣發行の保證準備に用ひられ、一般財界では最良の擔保物件である。友人によれば二三十億圓の公債は常に金融の一基礎として必要なのだ。だが昨年來遊資をウンと公債に轉じて抱込んでゐる金融資本から云へば公債の價格が下落しては困る。それには公債の條件にもよるがその額が多過ぎるのは何より禁物だ。ところが我國現今の利率は資金の病性偏重の故に諸外國に比して低きにゐる。これが金解禁により金利が騰貴するとあつては公債の價格下落は火を見るやうに明だ。この事は明白に想像せられるので、金融資本の政治的勢力は經濟審議會をして又今日では民政黨內閣をして公債價格の維持出來れば上向を目標として財政方針——減債を中心とする——を樹てしむるに至つたのである。

現內閣の方針で行けば昭和五年度は既定の定率減債基金繰入が國債六十億圓として七千萬圓、昭和三年度剩餘金四千萬圓とすればこれから一千萬圓、更に獨逸賠償金からの六百三十萬圓として合計八千六百萬圓になり、更に定率及び剩餘金繰入率を增加すればこれ以上になる。それに一般會計は非募債、特別會計の募集半減で五千五百五十萬圓だけを起債するとすれば他年度に比し差引三千萬以上の償還超過となる計算であると云ふ。そしてこれが最低度で節約で得た金も公債償還に大に向けるらしい。金解禁を控へての金融資本の自家擁護は到れり盡せりである。で、一旦これで支へておいて、又政友會が政權を取る頃となつて安全とみれば又候公債の膨脹であらう。過去が之を語る。

そこで問ひたい。何故に公債の價格を神經に惱まねばならぬかと。實は今後起債しようと思へば現下の公債を釣上げて置く方が政府にとつては起債に有利だ。然し非募債主義で行くのに既發の公債の價格を中心としたりするのは、餘りに金融資本に忠實すぎる。

國民の要求は財政の節約から浮んで來る餘裕は自分にまづ返して貰いたいのである。國民の負擔によつて不當に膨脹してゐる財政の節約は當然に國民の負擔輕減を標目とすべきだ。假りに財政の節約と繰延と新規事業の不要求とで一億圓の節約が出來るとして、その中多少は失業對策を講ずる費用に充てるとして之を減稅に當てゝ行けば砂糖消費稅も營業稅も地租も半減に出來る譯だ。方法よろしきを得れば小農、小商工、勞働者一般に少しでも息をつかすことができよう。租稅負擔の問題はこゝでも論ぜぬとして、とにかく國民の租稅額負擔の一割を減じ得る譯なのである。これが正道なのだ。これを假りに減債に當てるとすれば金融資本にはよからうが、國民直接の負擔の輕減は、減債額の元利の償還高として二三百萬圓にすぎなからう。なほ又國民多衆は政客が節約を强ゆる爲に宣傳するやうにそう浮華でも奢侈で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ない。節約する餘裕のない階級者である。節約の必要が本當にあるものは當の民政黨內閣を取卷く、そして見へざる又見ゆる手を以て政府を指導しつゝある支配階級者、資本階級者、有閑階級であることを氣付かないか。諺に森にゐる者森を見ずと云ふ。

財政の緊縮は常に必要だ。そして現下最も必要だ。しかし之によつて浮び出る金はまづ國民に返還する意味で減税すべきである。でなければ折角の財政緊縮も意味を失ふであらう。

× × × ×

國家は經濟上においての最大の權力者であると同時に最大の消費者だ。右手で收入した金を左手に支出するまでに、凡ゆる傀儡師の魔棒が財政の手をあやつつて、民衆は昔ながらの納税機關にされて終ふの虞が多分にある。民衆の厚生からかけ離れた誅求、民衆の要望を抑壓しての浪費。財政がともすれば國民から分離して敵となる危險が多すぎる位ある。然も、かくして、なほ國家自身は資本治下に於ては貧乏だ。少數の民が富む結果國家は哀訴嘆願して借金しその背に公債を累積加重して行く。借金國家である。そしてその元利の償還を中心にして營む財政は苛斂誅求國家である。民衆は依然としてこの間に油を絞られる胡麻である。

濱口內閣が思ひ切つた緊縮財政經濟政策を標榜し實行せんとする誠意を有するに拘はらず、依然として變りばえもなく反民衆の姿がある。民政でなく金政の臭味が濃い。崩壞の端もこゝから發するものと思ふ。

——(七月十日)——

思想政策の對象

(新內閣の聲明について)

清瀨一郎

○空虛なる思想對策

過去二年有半の間、田中內閣は極度の反動ぶりを發揮した。治安維持法は緊急勅令を以て改正せられた。某政黨は解散を命ぜられた。左翼の大檢擧は敢行せられ、演說會は中止せられ、學生監は增置せられ、思想檢事、思想刑事は全國に網の目を張つた。田中內閣の瓦解は、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

[illegible]新内閣は其思想對策を發表するといふ事であつたから、世間は新内閣の思想對策に關する聲明には幾分期待をかけて居つたのであつたのであつたが、七月九日午後五時二十分發表せられたる聲明を讀んだ者は今更失望を禁じ得なかつた。右聲明の第二項中には次の如く陳べられて居る。

「輓近、世相の變遷に伴ひ民心漸く輕佻放縦に流れ、思想動もすれば中正を失する者を生ずるに至れるは深憂に勝へざる所なり。政府は益々國體觀念の涵養に留意して國民精神の作興に力め、經濟政策の確立と相俟つて時弊の匡救に努め、民心の一新を圖らんことを期す」

と。いかにも空虚なる文字と評せざるを得ぬ。此聲明ならば、田中内閣が發したるものとしても通用する。或人は此聲明を評して、雨が降る時は、天氣が惡いと云ふと同一であると言つた。今回の聲明の全體に對する批評としては無論失當であるが、思想政策に對する部分に關しては實に其通りであると言はざるを得ない。

然らば、何故我々は此聲明を見て空虚の感を抱くか。それは次のやうなわけである。今日我國に於ける問題は政府の力で擁護し、作興せねばならぬ國民精神とは何ぞ、といふ事である。此限度さへ明白になれば思想問題は半ばは解決せられたものである。言を換へて言へば思想政策の對象物は何物であるかをハツキリさせることが先決問題である。作興すべき國民精神の限度について迷ふて居る際に、此限度を明[illegible]言しだして單に國民精神の作興を聲明して見ても、それは畢竟、問を以て答ふるものである。雨が降る日には天氣が惡いといふと同一轍である。

○明治時代の「國家思想」は必ずしも我國民精神には非ず

明治時代に於ては國家の統一といふ事が、官民共通の時代的要求であつた。恰も此時代に外國では獨逸帝國が出來、獨逸學者は一種の主權論を唱導した。尤も此主權論は西洋に於ては相當歷史のある一系の國家論であるが、此考と、我國民の愛國心、尊王心とを結びつけたものが明治時代の國家思想である。此新しき國家論を以て、我國の國體なりと心得ることは極めて淺はかなことである。然るに驚くべきことには、今日は官民共に明治の國家論を以て我國體の本質と考へて居るやうである。第五十一議會に於て治安維持法が通過した。其第一條に

「國體を變革し、私有財産制度を否認することを目的として結社を組織し又は情を知つて之に加入したる者は十年以下の懲役又は禁錮に處す」と在つた。其年(大正十四年)六月、司法省と内務省は合議の上、此治安維持法の解決を決定して發表した。其内に、國體とは主權が天皇に在ることを意味するものであると言ひ切つて居る。これは前にも指摘した、明治時代の國家論其までである。主權が　君主に在る國は日本だけではない。英國もそうである。伊太利も、西班牙もそうであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。我國體は世界無比といふではないか。世界に共通なものを指して國體といふは當らない。たゞ皇室を全國民の宗家とし、之を以て民族團結の基礎とすることは我國のみである。目をこゝに注がずして明治時代の國家論を振りまわしただけで我國體の本質を盡せりと爲すは誤である。近時永井亨氏が日本思想論といふ本を著はされ、此間の消息を明快に論破せられて居る。今其一節を引用する。「……かくて、今日一般に國體觀念といはれ、國民精神といはれてゐるのは、その實、明治時代の官僚政府の下に統一され劃一された當時の國家思想に外ならぬ。それは近世ヨーロッパの主權思想や、神權思想が、封建時代の忠君思想や、君國思想と結び、然らずんば、王朝時代の王道思想や、神國思想と結んだものである。いひかへれば、西洋の主權論や、東洋の君國論や、傳統の神國論と結んだものこそ、明治時代の國家論であり、それが卽ち今日の國體論である。云々」と。

○國體は歷史的事實なり

國民精神は民族的確信である。國體は歷史的事實である。政權は藤原氏が擅行した事もある。武家が掌握した事もある。しかし、我國體は曾て渝つた事がない。皇室を宗家と仰ぎ奉り、之を以て民族結合の中心と考ふるの念は藤、豐、德の武家專政の時代に於ても曾て渝る所はない。政權の處在を以て、國民精神の基根と考ふるは過去五六十年來、我國法學界に行はれたる主權論であつて我國體ではないのである。曾て民政黨が其立黨の宣言の內に「吾人は普通選擧により全國民の要求を帝國議會に集中し、天皇統治の下に、議會中心の政治を徹底せしめん事を要求する」と書いたところが、これは我國體に反するものであると批難した者が出た。民政黨たる者、其所謂、議會中心主義が我國體に反せざる事を明快に證明すべきであつたに拘らず、問題は今日まで其儘に持ち越されて居るのは殘念である。之を批難した者、此批難に共鳴した者は要するに明治時代の國家論あるを知つて、歷史的事實たる眞の國體あるを知らぬ短見者流である。

○捕はれたる憲法論

明治法學の暴威はなほ之に止まらぬ。憲法に書いてある多くの事を以て我國體なりと唱へ、我國の政治の運行を固定せしめる傾がある。最近起つた問題が彼の不戰條約調印問題である。不戰條約の第一條は、「各自國の人民の名に於て」本條約を締結する者の規定となつて居つた。日本の　天皇が人民の名に於て條約を締結せらるゝといふ法はない。これは憲法違反である、國體無視であるといふのである。條約締結權は帝國憲法では、天皇の大權となつて居る。大權は權利である、義務ではない。天皇に條約締結の大權がある以上は、天皇が條約を締結せらるゝのも權利、締結せられないのも權利、天皇自身の名に於て締結せらるゝのも權利、人民の名を御使用になるのも權利である。人民の名を御使用に成つては相ならぬなどといふべきものではない。況んや、此事が我國體に反するものである筈がない。明治二十三年までは　天皇が勅令で人民の權利義務を立法をせられて居つた。同年憲法が發布せられて、人民の權利義務に關しては必ず議會の協賛を得つて立法せられることゝなつた。憲法發布を以て國體に反

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し、國民精神を紊す者なりと論ずる者はあるまい。條約の締結權が天皇の大權であればとて、天皇が獨自の意志に於て條約の締結をせられず、人民の意思を忖度せられ、人民の名に於て締結せられたとて、我國體に反するとは考へられない。

○況んや資本主義制度を以て國體の延長と考ふる勿れ

國體は歷史に依つて定まる。我國民精神は、無窮の皇室を宗家と仰ぎ、之を以て國民團結の原動力と爲すの一點に在る。政權行使の方法は必ずしも問はぬ。況んや、彼の資本主義制度を以て、我國體の延長なるかの如く考ふるは以ての外の事である。資本主義は近代產業の一組織である。古代及び中世に於て、資本主義制度が發生しなかつた場合に於ても我國體は儼存して居つた。之と同じく、今後、資本主義制度が崩壞したる後に於ても、我國體は少しも傷つかずに存續せねばならぬ。資本主義制度と我國體とを以て相關の關係あるもゝの如く吹聽するは怪しからぬ事である。新內閣はよろしく、思想政策の對象物についての明確なる考を把握すべきである。資本主義と國體とを結びつける結果はどうなるか。資本主義制度には不合理の點が多い。資本主義は行きつまつて居る。世間の隅々より資本主義變改の聲は日に月に高まりつゝある。もし資本主義と國體とを結びつけるならば資本主義に對する攻擊を國體に名に於て受けねばならぬ事となる。國體を愛する者にして斯の如く輕卒の行爲を爲すべきであらうか。世人に怨まれたる人物と同じ汽車に乘るは安全でない。もし怨を有つ者が汽車を顚覆すれば乘り合せた客は皆怪我をする。我國體の貴き、區々たる資本主義と道伴れとなるべき性質のものでない。

○新內閣に望む

田中內閣の爲した事は、これは論外である。明治時代の國家主義に膠着し、反動的國粹主義あるを知つて他を知らぬ。社會思想を以て危險思想なりと呼ばはり、右傾の暴力團は其爲すが儘に任せ、社會思想は手足を縛した。二人の子供が爭つて居る。不公平なる繼母が其一方だけを縛して置いたとすれば他方は必ず之を打たん。子供が打つに非ずして母が打たせるのだ。田中內閣の下に於ては右傾派は遂に社會思想家たる代議士某を暗殺した。人道の罪人之より大なるはなからう。

新內閣の當局は更に右傾左傾双方を取締ると發表して居る。（七月十日各新聞記事）取締る事も、好からう。合法的に取締れ。田中のやうに一方を縛り、他方をして之を擲かせるよりは双方共縛る方も亦一策であらう。しかし、それだけでは眞に我民族を想ふ者の態度といふ事は出來ない。我國の社會環境の變化と、國民の個性の發達は今や明治時代の國家思想を突破し躍進すべき時期に際會して居るのである。政權の所在は固定的のものである。資本主義も我國體と不可分であるなどゝ錯覺し、新進の氣運を阻止する事は我民族の爲めに百害あつて一利もない。國體觀念の涵養可なり、國民精神の作興亦妨げず。しかし其涵養し、作興すべき對象物について專心熟慮し、苟も我民族生活の發展進步を妨ぐる事のないやうに留意されん事を新內閣の諸公に對し冀望して止まぬ者である。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

濱口内閣と議會解散

赤松克麿

一、

待ちに待つた反動内閣没落の日が來た。そして所謂憲政の常道に從つて政權は民政黨の上に落ちた。政界の賣春婦たる床次一派も愈々運が盡きて政友會に最後の身賣りをすることになつた。我々は長い梅雨がやんで、久し振り天の一角に青空を仰いだ感がする。反動内閣に代つて政權を掌握した民政黨内閣は、一般世間から頗る好感を以つて迎へられた。しかし新内閣の人氣は、民政黨固有のものではなくて、反動内閣の極度の不人氣に比較した相對的の人氣に過ぎない。この點を民政黨が自惚れるならばそれは甚しい見當違ひといはねばならぬ。無產政黨から見るならば、民政黨といへども根本に於いて有產政黨たることは政友會とかわるところはない。民政黨が口先きではどんなに新しいことをいつても、彼れが有產政黨の本質として、某々の財閥、某々の貴族、某々の官僚等と切つても切れぬ關係にあることは明かである。それは今度の組閣方針にも現はれて居る。だから我々は新内閣の施政によつて、無產大衆の生活幸福が大いに増進されるだらうといふやうな期待を持つ勇氣はない。

しかしながら新内閣の成立は、前反動内閣に比較して善き一歩前進を示すものであることはたしかである。新内閣が積極的に善政を行はなくとも、消極的に前内閣のやうな無理押しの反動政治を行はないだけでも、社會運動の健實なる發達にとつては、それだけ利益である。我々は既成政黨だからといつて、どんな内閣に對しても頭から打倒一點張りで邁進するやうな粗雜な劃一主義をとるものではない。社會運動の現實的立場を重んじ、客觀狀勢に對する正しき認識に立つて社會運動の現實的發達を遂げて行かうとする我々は、つねに相手の勢力、相手の性質をよく見究めて、これに適應する戰術を立てゝ行かねばならぬ。そこで舊き内閣と新しい内閣とに對する我々の戰術の相異も自ら生じてくる譯である。すべての内閣を簡單にブルジョア内閣と定義して、劃一的戰術を以つてこれに當ることは、左翼的公式主義であつて、我々現實主義者の取らざるところである。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二

新内閣に對して我々の先づ第一に要求するものは、議會の卽時解散である。所謂憲政の常道によつて政權を掌握した民政黨内閣は、宜しく直ちに議會を召集して、施政方針を天下に宣明し、しかしてこれを實行する理由の下に議會解散の奏請をなすことが最も立憲的態度であると信ずる。新内閣は前内閣の惡政を淸算して、國民の期待に副ふべき新政を施さんと大いに意氣込んで居り、世間もまた新内閣の施政に相當の希望をかけて居るやうであるが、しかし若し政府が直ちに議會を解散しないで、冬の議會を待つことになれば、來年の四月までは前内閣の豫算に準據しなければならぬ。もとより新内閣は十七億五千萬圓といふ前内閣の放漫豫算をそのまゝ踏襲しないで、これに多少の變改を加へるであらう。けれども兎もかくも放漫豫算とはいへ、議會を通過したものであるからには、改めて國民の意志を問はない以上、大體これに準據して行く義務があるといはねばならぬ。

新内閣が一方に明るい政治を高調して新政の腕前を見よとばかりに宣傳しながら、他方に議會卽時解散を躊躇し、老人じみた自重論を唱へ、そして來年四月までは彼等の最も反對した前内閣の豫算に準據して行かうとするが如きは、出發點に於いて鮮やかさを缺ぐと共に、態度の卑怯さを示すものである。由來民政黨にはその發達過程からくるところの官僚的正義心と自由主義的上品さとがあつて、政友會のやうな傍若無人の策動的惡事を働く勇氣を缺ぐと共に、自己の主義主張を貫徹するためにどこまでも押し强く戰ふといふ積極性に乏しい。政友會の積極主義と民政黨の消極主義は、ひとり財政方針に現はれるばかりではない。政友會は惡政に於いて積極主義であり、民政黨は善政に於いて消極主義といふことが出來る。

我々は前内閣に比較して、新内閣の成立はたしかに政治の善き一歩前進なりと考へる。その財政緊縮に於いて、平和的對支外交に於いて綱紀肅正に於いて、社會政策に於いて、我々は幾分の明るい政治を期待して居る。尾崎行雄、鶴見祐輔氏等の自由主義政治家の一群が、新内閣を支持すべく決議したことは當然である。しかるに政府が議會解散を回避し、グズ〳〵の態度で以つて冬の議會まで漕ぎつけやうとするのは、新内閣のスタートに於いて「明るさ」を缺ぐものであつて、國民は民政黨の痼疾たる消極主義が早くも現はれたのに對して失望禁ずる能はざるものがあるであらう。

三

昨年二月の普選第一回の總選擧は、政友會内閣の干渉下に行はれた。故に時の内相鈴木喜三郎氏は臨時議會の反對に遭ふて失脚したのであつた。その後政友會は議會の狀勢を有利に導くために、露骨な議員誘拐を始めた。誘拐の魔の手は民政黨に向けられ、民政黨からは續々として身賣りするものが現はれた。買ふ方も買ふ方だが賣る方も賣

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る方だ。その結果として前の總選擧直後から今までの僅か一年半たらずの間に、政界の分野は餘程かわつてきた。床次一派といふ政權病的夢遊者がフラ〳〵と出て來て、しばらく日和を見て居たが、遂に不運を諦めて政友會へ併合されてしまつた。憲政一新會といふ意地のきたない一派も現はれて、當然政友會へ合流すべき義理があるのに、昨今きまりが惡くてたじろいて居る有様である。そんな譯で前の總選擧によつて國民が表示した意志は、今日ではそれが大いに歪められて居る。政友會は二一九名から二四八名になつた。民政黨は二一七名から一七二名となつた。前の總選擧直後に於いて政府黨と反對黨とはほゞ伯仲の勢力であつたのが、今日では七十名以上の差を見せて居る。

現在の議會分野は選擧干渉、議員誘拐等の不正行爲によつて國民の正しき意志の反映を歪曲した結果の所産である。ところで民政黨は議會政治を高調してきた政黨である。政友會に反動的色彩があり、時々議會政治否認の口吻を洩らしたりするのに對して、民政黨が議會政治の完成を期すると宣明して居るところが、一般知識階級などが政友會よりも民政黨に好意を寄せて居る一點でもあるのだ。しかるに民政黨内閣は議會政治の中心たる衆議院の分野が、不純なる策動によつて生成された變態性のものであるに拘らず、これを看過して、事勿れ主義で來議會を待たうとするのであるか。事勿れ主義といふものは官僚政治の持つ惡イデオロギーである。新内閣が無理をしたくないとか、慎重なる態度を取りたいとかいつて、現下の變態極まる議會分野を革新するの勇斷を缺ぐならば、それは民政黨の有する官僚意識の惡弊と見なければならぬ。民政黨が政友會に比較して、野人的勇敢性を缺ぐことは一般の定評であつて、民政黨がこの性格を持續する限り、彼れの運命は英國自由黨のそれの如く、政友會と無産政黨との挾撃に遭つて次第にその勢力を弱化せざるを得ないであらう。

四

議會解散が早やければ早いほど、民政黨にとつて有利であり、政友會にとつて不利であると一般にいはれて居るが、たしかにそれは事實であらう。いづれにしても若し議會が解散になれば、どんな形勢を生むであらうか。民政黨、無産黨が増加し、政友會が激減するであらうことは豫想出來る。特に大都市に於いて政友會が慘敗するであらう。一しかし民政黨が議會の過半數を占めるまでに勝つかどうかは疑問としなければならぬ。そこに一つの興味がある。我々にとつては無産政黨の進出如何が最大の關心事である。若し小選擧區制下であれば、進出は困難と見なければならぬが、現行の選擧區制下であれば、可成りの進出を示し得ると信ずる。社會民衆黨の四代議士は再選疑なしと見て差支あるまい。大衆黨の河上丈太郎君も間違ひない。同じく淺原健三君は最近舊民憲黨が分裂騷ぎを起して紛糾して居るが、八幡地方は淺原君個人の歷史的地盤であるから、宣傳宜しきを得れば當選するであらう。勞農大衆黨の水谷長三郎君は、大都市の地盤が水谷一派と奥

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

村一派の左右兩翼に分裂したから、この前の選擧のやうな好調子に行くまいと思はれる。しかも奧村一派の政獲同盟では河上肇氏を推すと傳へられて居るから、水谷君も樂觀を許さないことになつた。

今度の選擧で無產各黨から何名位の代議士が出せるであらうかといふに、私一個の豫想では無產黨全部で當選者は十五名位のものではないかと考へる。社會民衆黨が十名、日本大衆黨、勞農黨、堺氏一派地方無產黨が合算して五名といふ見當である。十五名といへば少ないやうだが、けれども現在數の約二倍であるから、相當の進出である。しかして總選擧後に於ける議會內の無產黨の地位は、前議會よりも一層有力となるであらうことはたしかである。そして若し政民兩黨の數が接近した場合には、尙更無產黨の地位は有利となる。我々の勢力は上り坂であるから、選擧每に一步一步健實な地步を築いて行くであらう。そして恐らく次の次あたりの總選擧によつて、無產黨は交涉團體まで漕ぎつけるとも思はれる。海の彼方では既に勞働黨內閣が生れたが、我國の政界では無產政黨の基礎工事時代である。しかし我國に於てもまた輝しき未來を有するものは、無產政黨のみであることは何人も否定することの出來ない歷史的鐵則といふべきである。

五

議會解散となれば、濱口內閣は所謂十大政策を振りかざして、逐鹿戰に必勝を期するであらう。そして彼等の政策は政友會の陣營を驚威するに足るであらう。しかしながら無產政黨から見るならば、彼等の政策に對して十分批判の立場に立つて戰ふことが出來る。私は今彼等の金看板とする財政緊縮と金解禁に就いて批判の矢を向ける。

財政緊縮方針は民政黨の傳統的政策である。今日の不景氣に善處するには、民政黨の消極主義が政友會の積極主義に比較して、より善き政策に相異ない。しかし我々は前の加藤及び若槻內閣がこの消極主義に於いて龍頭蛇尾の醜態を演じたことを記憶して居る。前の憲政會內閣が最初に編成した大正十四年度豫算は、相當に消極主義を實現するものであつた。しかるに大正十五年度豫算、更に昭和二年度豫算となると、宗旨が變つて、いつのまにか消極主義から積極主義に變節してしまつた。今當時の豫算の歲出總額を示せば次の通りである。

大正十四年度	十五億二千三百萬圓
大正十五年度	十六億五千五百萬圓
昭和二年度	十七億三千萬圓

憲政會內閣が倒れて、その後を受けた政友會內閣の發表した昭和三年度の豫算を見るに、歲出總額は十七億七千四百萬圓である。これを憲政會內閣の昭和二年度の豫算に比較すると、僅かに四千四百萬圓の增額に過ぎないのである。これでは憲政會の緊縮主義も全く事なしであつて、公黨の面目は泥土に委されたのである。なぜ憲政會が自己の主義を裏切つて、かくの如き大膨脹の豫算を編成したかといへば、彼等の辯解は色々あるが、實際のところは、黨勢擴張のための資本投

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

下と彼れを取り巻く、、、、、、、との取引とに依るものと見なければならぬ。つまり彼れも矢張り本質は有產政黨だからである。故に濱口内閣が果して緊縮を以て一貫するかどうか、また龍頭蛇尾の醜態を演ずることはないか、我々は一個の危惧の點を持つものである。

若し濱口内閣が誠意を以て財政の整理緊縮を行ふとしても、いかなる具體的方策によるのであるか、たしかに重大なる問題である。緊縮政策を取れば、不景氣は更に深刻化するであらうが、いかに財界建直しのためとはいへ、無產階級はこれ以上の失業苦に堪えることは出來ぬ。不景氣に辛抱するといつても、有產階級の立場と無產階級の立場とを同一に論ずることは出來ない。政府が鳴物入りで國民に節約を宣傳しても、國民の中には有產階級と無產階級とがあつて、無產階級はこれ以上節約を實行したら命を縮めるより外はない。我々はもとより財政緊縮には賛成であるが、新内閣が如何なる立場に立つてこれを行はんとするか刮目して監視せんとするものである。

次に金解禁は當面の最大問題であつて、政友會内閣が手をつけ得なかつたものであるが、新内閣は在野時代にこれが解決を高調したのであるから、是非ともこの難問を打開すべき責任がある。ところで問題は金解禁の方法にある。新聞紙の傳ふる所によれは、井上藏相は金解禁を斷行するためには、一時的不景氣も已むを得ないと述べて居る。こゝに我々が注意すべきことは、現在金解禁の即時斷行を最も要求しつゝあるのは金融資本家であることである。彼等は所謂特融によつて生じた遊資を持てあました結果、その一部を海外に放資しやうと考へて居るが、それには前提として金解禁により爲替相場の安定を圖らねばならぬ。彼等の金解禁運動の動機がこゝに存して居ることは明瞭であつて過般東西の大銀行家諸君は金解禁を決議し、その中に「非解禁を續行するに於いては、その影響たるや、この際解禁を斷行するによりて惹起すべき影響に比し寧ろ重大なるものあるべし。故に今日に於いては多少の犧牲を忍ぶも、解禁を決行するは最も緊要のことなりと信ず」と述べて居る。

しかし金融資本家の立場のみを偏重して、他の方面の犧牲をあまり考へないで、金解禁を斷行すればどんなことになるであらうか。必ずや爲替相場の騰貴により物價の激落を來たし、事業家は商品利潤の上に打撃を蒙ることゝなる。その結果事業の休止又は縮少が行はれ、勞働者の失業、勞働條件の低下等が起らざるを得ない。勞働階級は產業資本家の打撃を轉嫁されて、多大の犧牲を強いられることになる。さうなれば勞働爭議は各地に起り、死物狂ひの經濟鬪爭が展開されるであらう。しかし結局に於いて勞働階級は現在の組織力を以てしては、この恐慌狀態に抵抗して、その犧牲を免れることは困難と見なければならぬ。かうして勞働階級は益々深刻なる生活難に脅かされると共に今日まで築いてきた組織力をも削殺される破目に陷るに相異ない。この勞働階級の犧牲を井上藏相の「一時的不景氣」大銀行諸君の「多少の犧牲」として簡單に片づけられては堪つたものではない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

我々は金解禁には賛成である。我々は極左主義者のやうに資本主義が急激に崩壊するとは思はれないし、また現在の不景氣が益々深刻化して近い將來に××が起るとも思はない。だから我々としては現在の不景氣を出來るだけ緩和して、無産大衆の生活難を救はねばならぬ。それがためには金解禁を實行して、爲替相場の安定、貿易の發展、諸産業の振興に資することが當面の政策として妥當でなければならぬ。しかしてその最良の方法として、我々は平價切下げによる金解禁の斷行を措いて他にないと信ずる。濱口內閣は金解禁實行の責任があり、またこれに向つて全力を傾注するといつて居るが、彼れの實行方法如何によつて、彼れが金融資本閥の傀儡であるか否かが試驗されるのである。我々は嚴重なる監視的態度を以つて彼れの手並を見ることにしやう。

著者	書名	價	送料
末弘嚴太郎著	農村法律問題	二・五〇	・二二
末弘嚴太郎著	嘘の效用	二・六〇	・二二
末弘嚴太郎著	法窓閑話	二・五〇	・二二
末弘嚴太郎著	勞働法研究	三・〇〇	・二四
堀江歸一著	國際經濟總論	三・三〇	・二六
堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（上卷）	三・〇〇	・二六
堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替（下卷）	四・〇〇	・二〇
高橋龜吉著	資本主義末期の研究	二・五〇	・二四
渡邊一郎著	勞働問題原理	二・〇〇	・二〇
小泉信三著	改訂價値論と社會主義	三・〇〇	・二八
福田德三著	社會運動と勞銀制度	二・五〇	・二〇

發行所　東京市芝區愛宕下町　振替東京八四〇二番　改造社

商品券發行禁止問題

前田繁一

一

最近百貨店の商品券に對して、其の發行を禁止すべしと云ふ議論が非常に喧しくなり、東京商工會議所に於ては六月二十七日、聯合部會を開いて遂に「百貨店の商品券發行禁止若くは嚴重なる發行の制限を爲すべし」と云ふ決議を爲し、之れを監督官廳たる大藏省及び商工省警視廳へ建議するに至り、東京實業組合聯合會に於ても委員會を設けて着々之れが研究を進め、七月一日遂に商品券發行禁止の決議を爲し當局に之れを建議するに至つたのである。又大阪商工會議所に於ても小賣業者の苦境打開策と商品券問題に對する研究を進める事となつたと云はれる。

二

近來百貨店が益々發展するに反して、さなきだに同業過多に失し、同業相食むの苦境に在る小賣業者が、不景氣の益々深刻化するのと、百貨店の繁榮に伴ふ顧客の減少とに依つて益々其の苦境の度を增し、經營がより一層困難に陷つたのに鑑みて、自己の今日の此の苦境は一に百貨店の横暴、百貨店の顧客奪取に因るものなりとし、昨年春以來、小賣業者は隨所に百貨店不買同盟なるものを組織し、或は講演會を開いて痛烈なる百貨店攻撃を爲し、或はビラを配付して鉾を極めて百貨店の横暴をならし、以て小賣業者の完全なる百貨店よりの不買を實行せんとし、一面消費者の同情をかち得んとしたものである。然しながら大資本を投じて商品は直接生産地から安價に購入し、賣れ行きの迅速なるが爲めに爲し得る販賣價格の比較的低廉なる、而も顧客の取扱ひ丁寧にして、品物の配達其の他總ての設備がお客を吸收するに十分なる百貨店とは到底戰つて勝利を得難く、況んや下手な宣傳は顧客をして百貨店の賣品の低廉なるを熟知せしめ、自己の顧客を自ら退けるの結果とすらなつたのである。然も小賣店の百貨店を敵視するの態度愈々益々猛烈を極め、遂に東京商工會議所議員の改選に對しても、果然小賣業者對百貨店の猛烈なる選擧戰を見るに至り、結局東京

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

商工會議所の議員として百貨店も小賣業者も、共に自己の代表者を送る事に成功し、爾來東京商工會議所の議員總會は利害相容れざる百貨店と小賣業者の論爭場となつたのである。さうして小賣業者を代表する議員が他の議員を說いて百貨店の商品券發行禁止を企て、百貨店又之れに對抗して猛烈なる反對運動を爲すに至つたのであるが、遂に商工會議所に於ては小賣業者側の勝利となり、前述の如く六月二十七日「百貨店の商品券發行禁止、若くは嚴重なる發行制限を加ふべし」と云ふ決議を爲して之れを當局に建議するに至つたのであり、東京實業組合聯合會が又同樣の決議を爲して專ら之れが實現を期すると云ふ事になつたのである。

三

百貨店に對する不買同盟に失敗せる小賣業者が第二段の對策として百貨店の商品券發行禁止問題を捕へ來つたのは、見方に依つては一個の戰法として當を得たものと云ひ得るかも知れない。何しろ東京市に於て市來市長時代に財政難に苦しんだ揚句、此の百貨店の發行する商品券に對して課稅する目的の下に調査した所に依つて見ても、一ケ月一千圓以上の商店券を發行するものが、極めて内輪に見て東京市内で昭和三年中に枚數が百六十八萬三千百三十枚、此金額二千八十八萬九百四十圓と云ふ事になつて居り、百貨店の考課狀に現はれた諸預り金中の役員身元保證金と商品券發行高の割を三越は商品券が八割、白木、松屋、松坂屋等は商品券が約七割と假定し、商品券が平均五十七日目に回收されると云ふ事になつて居るさうであるから、之れ等を斟酌して全國百貨店の發行して居る現在の商品券額を算出して見ると、大體六千萬圓程度と云ふ事になるのである。或はもつと多いかも知れない。

たゞさへ大資本を有し、大資本の力に依つて生産者を自己の手足の如く働かしめ、自己の欲するがまゝの意匠、製法を以て安く良い品を手に入れ得る百貨に對して、紙切れ一枚を渡す事に依つて十圓、二十圓の金を吸收し實に六七千萬圓と云ふ巨額の資金を無利子で常に使用し得るの大なる特典を與へ、而も中には數年間も何處へ行つたか商品券が出たつきり歸らなかつたり、火事その他の爲に消失して全然發行高の利益となるものさへ出來ると云ふ狀態に置くと云ふ事は小資本なるが爲に商品の仕入れに非常な不利な立場にあつて、勢ひ賣品を高價ならしむるか口錢を少くするかの外なき立場に在る小賣業者、而うして一個の店なるが故を以てその店内及び本支店に在る種々雜多な品物を如何なるものでもお好みに依つて渡し得る百貨店に商品券の發行券を與へながら、菓子なら菓子以外の品物は店が違ふの故を以て紙幣類似取締規則に依つて商品券の發行を絕對に小賣業者に許されないのであるから其處に强きを助けて益々强くし、弱き者をして强者と爭ふに益々不利ならしむるの大なる不公平が生れるのである。故に小賣業者に於て、此の不公平を除かんとするのは當然過ぎる程當然であると云はねばならぬ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四

然しながら此の百貨店の商品券が今日の如く盛に發行せらるゝ理由は、贈答品として持ち運びに便利であり、貰つたものが自己の欲する品物を自由に選擇し得ると云ふ大なる便利があるからである。更に又大資本家の發行するものとして、大なる信用を得て居るからであつて、一般民衆が非常に便利であるとして盛に之れを利用する以上、又信用取引を排斥し難く寧ろ助長する必要ある今日であり、國庫に於てすら納税や供託金等に手形その他の代用を認むる今日、而して更に資本主義的經濟社會の常として大資本家なるが故に信用し得ると爲すの今日に於て、多少の制限は爲し得ても、之れ等諸種の事情を全然無視して百貨店の商品券發行を絶對に禁止すると云ふ事は到底不可能な事である。假りに百貨店に對して、其の發行する商品券に發行年月日を記入せしめ、或は商品券金額の五分の一、又は三分の一の支拂ひ準備供託金を爲さしむるとしても、それだけの影響を百貨店が受くる事は事實であるが、之れが爲に百貨店と競爭する上に於て、小賣業者が果して幾何の利益を受るか甚だ疑問であり、小賣業者が想像するが如く百貨店に大打撃を與へ、自己の立場を有利に轉換せしめ得るものとは思はれない。況んや之れに依つて小賣業者の苦境を救ふ事は全然不可能な事であつて、百貨店に對抗して小賣業者の地位を安固不抜なものたらしめんには、斯くの如き事はそも〳〵末の末である。今少し根本的の問題に着眼し、根本的の改善策を講ずるに非らざれば、小賣業は遂に救はれないであらう。

五

根本的の小賣業者救濟策とは何か、曰く「小賣業者の數が多過ぎる」、曰く「百貨店の賣品と小賣店の賣品とに何等異つた特色がなく、百貨店がお客誘引設備を完全にして客の取扱いが上手であり、同一店内で如何なる品物でも購ひ得るし配達その他も完備して居るのに對して、小賣業者は總ての點に於て比較にならない事」、曰く「小賣業者同志相反目し、共食ひするの狀態に在ること」曰く何、曰く何と、世に論ぜらるゝ所の小賣業者救濟策なるものは決して少しとはしない。然し如何に小賣業者が多過ぎるからと云つて、現在の小賣業者の數を適當なりと認むるまでに減ずる事は容易な業でないばかりか、之れを強いて減少せしめんとすれば其處に大なる社會問題が起り、大なる失業問題が起つて遂には拾收すべからざる事態を惹起すべく、云ふべくして行ひ得ない事である。然らば他の事項はどうか、必竟その何れもが資金の問題であると云ふ事になる。卽ち資金を充實する事に依つて商品の改善も出來、商品の安價購入、廉價販賣も爲し得るのであり、配達その他の諸設備改善をも之れに依つて爲し得るのである。之れ等の事を實行し、小賣業者としての特色を發揮する事が出來る樣になれば、小賣業者は百貨店を敵視し排斥するを要せずして其の地位の安固

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を期し得る譯である。

然らば如何にして小賣業者が資金を充實するか、資金少きが爲に今日の不利益を注き寢入りせざるべからざる小賣業者であり、他より資金の供給を受けんにも担保信用の薄弱な小賣業者であるとするなれば、何等かの方法に依つて担保信用を作り、それに依つて他より資金の供給を受くるの外ないのである。担保信用の薄弱なる小賣業者が確實にして大なる担保信用を得んとするには、小賣業者が一致團結し、組合を組織してお互ひに出資もし貯金もするか、或は小賣業者が合同する事に依つて信用の増大、資本の増加、担保物の増加を期する外ないと自分は信ずる。之れを斷行せんが爲には、苦境にあるお互ひ小賣業者が相互救濟、共存共榮の爲に自ら覺めなければならないのである。若し小賣業者が相互救濟に目覺めず、共存共榮の外なきをさとらず、相變らず小賣業者同志相反目し拔け掛けの功名に浮身をやつし、内輪が始終不統一でごた〱しながら、百貨店と戰つて勝たんとして見た所で、それは到底望んで得られないであろう。

六

小賣業者今日の苦境を救ふが爲には、今少し根本的の方策、即ち資金の充實、商品の共同購入等を考究し實現するの必要なる事は前述の通りであるが、商品券の發行上百貨店と小賣業の間に多大の不公平の存する事が事實である以上、小賣業者が此の不公平の除去を希望し、若し成らずとせばせめて嚴重なる制限を加へる事に依つて、此の不公平の度を少なからしめんとするのは、よし小賣業者に直接何等益せずと雖も、小賣業として當然の希望であると云はねばならぬ。然も一面世の信用の厚きを良い事として、無暗に商品券の利用を勸めて無暗に商品券を發行した者が、もし萬一にも破産でもした場合に受くべき商品券所有者の少なからざる損害等を考慮する時には、監督官廳たるもの相當の供託金を徵收するとか課税をするとか、何等かの方法に依つて相當嚴重なる制限及び取り締りを爲すの必要があると云はねばならぬ。故に監督官廳は斯ふした不公平、斯ふした弊害は出來るだけ少くし、出來るだけ之れを防止すると同時に、一方に於て小賣業者の自覺を促し、組合組織又は合同を奬勵し、進んでは組合を組織し又合同したるものに對して、金融上其の他の便宜を計る樣に努力し、百貨店對小賣業者、消費組合對小賣業者の問題に關聯して、憂ふべき事態の惹起せざる樣、今日に於て十分考究し善處すべきである。

無代
進呈
ワキガ藥
今回『東京市京橋區常盤町グランド社』で新發見したワキガ救治藥は、如何なる頑固のワキガをも卽座に救治せしめます、論より證據には雜誌名記入の上申込み次第右の救治藥を無代で送呈します。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

マルクス＝エンゲルス全集

壯年時代の力作を網羅す

―主なる内容―

カール・マルクス經濟學批判第一冊（エンゲルス）。マルクス自傳手記（マルクス）。ウィーン・プレッセよりの諸論文（マルクス）。價値、價格及び利潤（マルクス）。國際勞働者協會の諸文書（マルクス）。フランスに於ける內亂（マルクス）。政治上の不偏不黨主義（マルクス）。國際勞働者協會に對する陰謀（マルクス＝エンゲルス＝ラファルグ）。ゴータ綱領批判（マルクス）。資本論第一卷批判（エンゲルス）。戰役雜記（エンゲルス）。

第十回配本＝第十三卷

既刊配本濟

第一回 第一卷 學位論文以下二十數篇
第二回 第十二卷 反デューリング論以下二十篇
第三回 第四卷 ドイツに於ける共產黨の諸要求以下卅篇
第四回 第五卷 革命反革命以下四篇
第五回 第六卷 東方問題以下六篇
第六回 第二卷 經濟學批判大綱以下四十篇
第七回 第七卷 經濟學批判以下十篇
第八回 第十一卷 剩餘價値學說史第三卷
第九回 第三卷 哲學の貧困以下二十篇

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

改造社版

經濟學全集

第三十回配本

租稅論

（第三十一卷）

法學博士 京大教授 神戸正雄著

博士の「租税研究」は帝國學士院より恩賜賞を受けた權威書、今更呶々の辯を要しない。本卷の「租稅論」はその深遠該博なる學識と三十年に垂んとする多年の研鑽努力の結晶であり、創意を傾けて成つた偉著である。

今、堂々の風貌をもつて諸君にまみゆ。

改造社　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二

既配本

第一回　經濟學原理　福田德三著

第二回　經濟學大綱　河上肇著

第三回　日本社會經濟史　本庄榮治郎著

第四回　唯物史觀經濟史　山川均・河野密・石濱知行著

第五回　各國經濟史　野村兼太郎・知行嘉治・隆一・石濱・丸岡重堯・平貞藏著

第六回　經營經濟學　增地庸治郎・太田哲三・吉田良三著

第七回　經濟學前史　高橋誠一郎著

第八回　マルクス經濟學說の發展（上）　河西太一郎・猪俣津南雄・向坂逸郎著

第九回　商業學（上）　向井鹿松著・吳文炳著・內池廉吉著

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本探偵小說全集 全十二巻

第三回配本(二冊)

3 江戸川亂歩集
6 岡本綺堂集

内容

江戸川亂歩集

惡夢
恐しき錯誤
二癈人
火星の運河
お勢登場
毒草
双生兒
木馬は廻る
人でなしの戀
D坂の殺人事件
映畫の恐怖
一人二役
屋根裏の散歩者
接吻

岡本綺堂集

半七捕物帳
異人の首
あま酒賣
お照の父
鬼娘
熊の死骸
蝶合戰
半鐘の怪
一目小僧
椰子の實
劍魚
女俠傳
慈悲心鳥
有喜世新聞の話
馬妖記
穴
蜩
蟲

配本済

第一回 谷崎潤一郎集・大下宇陀兒集

第二回 佐藤春夫集・保篠龍緒集
芥川龍之介集

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世界大衆文學全集

第十八回配本(八月)二册

第二十四卷◇木村信兒譯（價五十錢）

海底旅行（ヱルヌ）
宇宙戰爭（ウェールズ）

この二篇こそ科學小說の帝王篇であり、神秘と啓蒙と奇想天外よりなる興味溢るゝ傑作である。海底旅行—十九世紀の頃世界の海運界を驚かし一大問題を惹起した正體の知れぬ怪鯨が出現し到る處の海洋に神出鬼沒した。米國政府は各國に先だちこれが捕獵に努力した。果して此怪鯨の正體は？七つの海底の神秘と驚異は？宇宙戰爭—一八九四年のこと、凡みる科學的武器、熱線放射器、戰鬪器、毒瓦斯、等で武裝した地球征服の怖るべき戰士がイギリス海岸に現はれ、先づ英國陸海軍を一蹴しロンドンを征服した。これこそ偉大なる科學知識を有する見るから醜怪な火星人の一隊であつた。人類を征服する火星人にも敵はあつた。それは下等な細菌軍である。

第三十五卷◇岡本綺堂譯（價五十錢）

世界怪談名作集

聞いただけでもぞつとする、凄涼と鬼氣の交響樂、一讀暑熱を拂ふ銷夏第一等の讀物である。英、佛、獨、露、米、支の六ケ國に亘り其代表傑作十七篇を收錄した本篇こそ他の追蹤を許さぬ最も完璧なる世界怪談集である。◆貸家（リットン）スペードの女王（プーシキン）妖物（ビヤース）クラリモンド（ゴーチエ）信號手（ディッケンス）ヴォール夫人の亡靈（デフォー）ラッパッチーニの娘（ホーソン）北極星號の船長（ドイル）廢宅（ホフマン）聖餐祭（フランス）幻の人力車（キップリング）上床（クラウフォード）ラザルス（アンドレーフ）迷靈（モウパッサン）鏡中の美女（マクドナルド）幽靈の移轉（ストックトン）牡丹燈記（瞿宗吉）

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二番

好評嘖々◇新選名作集◇各冊壹圓
送料各廿錢

新選島崎藤村集

最新刊

藤村紀行文の出現！此こそ雲霞の癖ある遊子には驚喜であるのみならず靜寂溫雅悠久流麗なる氏の筆華を愛する者にも亦喧噪煩瑣な生活に在つて魂の飢渇荒廢に惱む者にも確に旱天の慈雨にも勝る安堵であり感謝である。特に佛蘭西紀行文中に於ては世界大戰の渦中に在つた共かみの巴里の情況を知り其の他全卷に亘り著者の透徹した直觀に觸れた山河草木世態人情或は自然兒の胸に溢るる旅愁の描寫は確に一讀千鈞の價がある。先づ一讀を乞ふ。

（內容）▲海へ　第一章　海へ。第二章　地中海の旅。第三章　燕のごとく歸る。第四章　故國を見るまで。第五章　故國に歸りて。▲佛蘭西紀行　自序。佛蘭西紀行。佛蘭西紀行の後に。▲山陰土產　一　大阪より城崎へ。二　城崎附近。三　大乘寺を訪ふ。四　山陰道の夏。五　浦富海岸。六　鳥取の二日。七　三朝溫泉。八　松江まで。九　境港と美保の關。十　出雲浦海岸。十一　宍道湖の旅情。十二　菅田庵を訪ふ。十三　杵築より不見益田まで。十四　雪舟の遺蹟。十五　高角山。十六　津和野。▲熱海土產

――五百二十六頁――

新選吉田絃二郎集
新選北原白秋集（詩歌篇）
新選北原白秋集（散文篇）
新選前田河廣一郎集
新選前田河廣一郎集（續）
新選山本有三集
新選横光利一集
新選菊池寬集
新選谷崎潤一郎集
新選永井荷風集
新選藤森成吉集
新選長田幹彥集
新選武者小路實篤集
新選小山內薰集
新選久保田万太郎集
新選宇野浩二集
新選近松秋江集
新選岡本綺堂集
新選葉山嘉樹集
新選森鷗外集
新選夏目漱石集
新選豐島與志雄集
新選相馬泰三集
新選久米正雄集

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四二〇

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

田中貢太郎著

奇談全集

現代篇一冊
歴史篇一冊

（谷中安規氏裝幀）
（四六判各五七〇頁）

價各壹圓五拾錢
送料各十八錢

涼味万斛鎖夏
第一の讀物!!

物語作家として文壇に特異の地位を占むる著者が、曩に發售した怪談全集の姉妹篇として輯錄したもので、發表當時嘖々の好評を博したものゝ中から會心の作を精撰したものである。現代篇は獵奇的讀物たると共に明治大正を語る者の見逃すべからざる好資料。歴史篇は明治以前に材を採れる一粒撰りの實話。何れも物語文學の最傑作として、一面日本歴史の裏面史として、將た世相史として絕大の興味ある好讀物である。

（現代篇內容）脂取り一揆。松木騒動。閨閣秘記。模範教師。村の盗人。針打ち。近江の巻。遺言狀。多喜の野猪。丸山教祖物語。仙術修業。畸人列傳、神仙河野久。木食僧と語る。癩、蛇田の話。鷲、白つぽい洋服。鬼熊一代記。殺人鬼横行。枇杷葉湯賣。破獄囚の話。播磨屋橋濱閑。一犠牲者の話。幕末の暴力團。水金町綺談。木ノ江港挿話。南瓜の苗。温泉宿の狂婦。嘘、惡戯。少佐の夫人の情死。心中の唄。數奇の戀。比律賓獨立物語。朱塗重籐の杖。馬關街頭の刺客。青年の陰謀、大隈侯狙撃の人々。自由黨共設。自由黨物語。自由黨續話。三多摩壯士行。逝ける先輩の印象。中江兆民の一生。見しは今日聞きしは昨日、選擧干渉物語。喜劇代議士候補者。明治大正瀆職事件。

（歴史篇內容）青の洞門物語。唐人殺し。袈裟懸の辻斬。岡崎巷說。紅鹿子の笠紐。有馬温泉物語。總穏寺の復讐。瀧山に砦を構へて。御諫。伯夷叔齊。松風村雨物語。橋本兄弟。朝比奈が曾我を訪ふ日。楠正行の中風。女塚の主。安土への使者。祖先のまぼろし。長曾我部盛親。蟬の痛み。花見物語。酒合戰物語。芭蕉庵の春。痩蛙負けるな一茶ここにあり。仁義行。吉田御殿原話、月前の怪異。鬪術國。七人の夫人。文錢牌樓。虞姫。女の市。支那歷朝帝位纂奪史。妓生春香物語。虎妖奇談。人蔘の精。心の奉加。京の土妓。遊女殺し。黃楊の水櫛。雀の宮物語。ある神主の話。姉妹の復讐。木彫の像についての話。俳諧修業。海賊。偸盗篇。鷄物語。鼓の音。旅僧。猿の話。日出度い話。龍を生捕つた、坂本龍馬の一面。四國巡禮記。兄弟の死。

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

改造文庫

（恒川義雅裝幀）

百頁十錢

（數字(1)は拾錢(2)は貳拾錢以下之に倣ふ）

（送料(1)二錢(2)四錢(3)六錢以下之に倣ふ）

第一部

第十篇 社會主義の發展 エンゲルス著 堺利彥譯 (1)
第十一篇 マルキシズム認識論 デイツゲン著 石川準十郎譯 (1)
第十二篇 辯證法的唯物觀 デイツゲン著 山川均譯 (2)
第十三篇 哲學の實果 デイツゲン著 山川均譯 (1)
第十四篇 神と國家 バクーニン著 本莊可宗譯 (1)
第十五篇 婦人論 ベーベル著 山川菊榮譯 (6)
第十八篇 エミール(上卷) ルソー著 內山賢次譯 (4)
第十九篇 エミール(下卷) ルソー著 內山賢次譯 (4)
第二十篇 國家論 オッペンハイマー著 廣島定吉譯 (2)
第二十一篇 金融資本論 猪俣津南雄著 (4)
第二十二篇 日本開化小史 田口卯吉著 (1)
第二十三篇 日本經濟論 田口卯吉著 (1)
第二十四篇 日本經濟學說の要領 瀧本誠一著 (2)
經濟的帝國論
第二十五篇 日本商業史 橫井時冬著 (4)
第二十六篇 日本工業史 橫井時冬著 (4)
第二十七篇 經濟學の實際知識 高橋龜吉著 (2)
第二十八篇 リツケルト論文集 リツケルト著 (2)
第三十篇 女工哀史 細井和喜藏著 (4)
第三十二篇 社會進化と婦人の地位 ラッパポート著 山川菊榮譯 (2)
第三十六篇 幸德秋水集 幸德秋水著 (2)
第三十七篇 中江兆民集 中江兆民著 (2)
第三十八篇 財產起原論 レヴィンスキー著 貫島克己譯 (1)
第三十九篇 組織論 レエニン著 鈴木厚譯 (3)
第四十篇 三民主義 孫中山著 金井寬三譯 (3)
第四十一篇 唯一者とその所有 スティルネル著 辻潤譯 (6)
第四十八篇 マルキシズム國家觀 マックス・アドラー著 山本琴譯 (5)

第二部

第十三篇 俳諧七部集 萩原蘿月校 (3)
第十四篇 蕪村七部集 萩原蘿月校訂 (2)
第十六篇 神皇正統記 宮地直一校註 (3)
第十七篇 奧の細道 芭蕉翁文集 萩原蘿月校訂 (3)
第三十五篇 北村透谷選集 島崎藤村編 (1)
第三十六篇 樋口一葉選集 樋口一葉著 (1)
第三十七篇 平凡 二葉亭主人著 (1)
第三十八篇 子規俳話 正岡子規著 (3)
第四十篇 坊つちやん 夏目漱石著 (2)
第四十一篇 草枕 夏目漱石著 (2)
第四十二篇 それから 夏目漱石著 (3)
第四十三篇 一握の砂 悲しき玩具 石川啄木著 (2)
第四十四篇 我等の一團と彼 雲は天才である 石川啄木著 (1)
第四十五篇 山陰土產その他 島崎藤村著 (2)
第四十六篇 作曲白秋民謠集 北原白秋著 (2)
第四十七篇 獄中記 オスカア・ワイルド著 神近市子譯 (2)
第四十八篇 厭世家の誕生日 佐藤春夫著 (1)
第四十九篇 日輪 横光利一著 (1)
第五十篇 勞働者の居ない船 葉山嘉樹著 (1)
第五十一篇 海に生くる人々 葉山嘉樹著 (2)
第五十二篇 小公子 バアネット著 若松賤子譯 (2)
第五十三篇 ホワイトファング ジャック・ロンドン著 堺利彥譯 (3)
第五十五篇 自歌選集 朝の螢 齋藤茂吉著 (2)
第五十七篇 自歌選集 川のほとり 小泉千樫著 (2)
第五十八篇 自歌選集 松の芽 中村憲吉著 (2)
第五十九篇 自歌選集 海山のあひだ 釋迢空著 (4)
第六十篇 自歌選集 立春 木下利玄著 (2)
第六十二篇 自歌選集 人間往來 與謝野晶子著 (2)
第六十三篇 自歌選集 槻の木 窪田空穗著 (2)
第六十四篇 自歌選集 野原の郭公 若山牧水著 (2)
第六十五篇 自歌選集 原生林 前田夕暮著 (3)
第六十六篇 自歌選集 空を仰ぐ 土岐善麿著 (2)
第六十七篇 白秋作曲 童謠集 北原白秋著 (2)
第六十八篇 白秋作曲 國民歌謠集 北原白秋著 (2)
第六十九篇 白秋作曲 舞謠曲集 北原白秋著 (2)
第七十篇 背德者 アンドレ・ジッド著 石川淳譯 (2)
第七十一篇 チエホフ書簡集 內山賢次譯 (5)
第八十八篇 寡婦マルタ エリイザ・オルゼシユコ著 清見陸郎譯 (3)
第九十篇 井泉水句集 荻原井泉水著 (5)

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

社會科學

七月號內容

論文

資料

社會科學文獻批評

（年四回發行）　定價壹圓五拾錢　（送料四錢）

東京芝區愛宕下町　改造社發行　（振替東京八四〇二番）

古本販賣値段

◉改造　改造社編　（初號より現在迄）價参拾八圓

◉女性改造　改造社編　（初號より廢刊號迄）價五圓

◉社會問題研究　河上肇編　（一巻より現在迄）價六圓

◉國民の友（初號より休刊號迄三七二册）　德富蘇峰編　（合本二十八册）價百五拾圓

◉社會問題講座　新潮社編　（揃）價拾圓

◉無類保證三菱會社内事秘聞錄　（明治十五年刊）價七圓

◉ウールセイ氏古今社會黨沿革説　宍戸義知譯　（明治十五年刊）價拾貳圓

◉蹇々錄（日清外交秘史）　陸奥宗光著　（元本）價八圓

◉新社會　矢野龍溪著　（明治卅五年刊）價五拾錢

◉大杉榮全集　アルス版　（十册）價拾五圓

◉マルクス主義講座　上野書店編　（揃）價拾圓

◉レーニン著作集　白揚社版　（十册）價拾参圓

◉日本財政經濟資料　大藏省藏版　（十二册）價四拾五圓

店頭の常設展覽
設備相整い
ました

巖松堂書店古典部

東京神田中猿樂町・神保町電停前

振替東京三八八九　電話九段二二六一

古本買入
目下註文輻輳のため、錦繪和漢洋書、寫本等、充分高價に買受けます

古本買入値段

◉廣文庫（群書索引共）　物集高見編　（二十三册）百貳拾圓

◉日本百科大辭典　三省堂編集　（十册）百五拾圓

◉日本社會事彙（三版）　經濟雜誌社編　（三册）拾八圓

◉大日本人名辭書　大日本人名辭書刊行會編　（三册）参拾五圓

◉大日本地名辭書　吉田東伍著　（七册）七拾圓　（五册）六拾圓

◉支那人名辭書（新版）　吉川弘文館版　（三册）拾六圓

◉大日本貨幣史　大藏省藏版　（八册）五拾圓

◉日本米食史　岡崎桂一郎著　（壹册）貳拾圓

◉日本醫學史　富士川游著　貳拾五圓

◉支那通史　那珂通世著　（五册）拾圓

◉讀書餘錄　和田維四郎著　百六拾圓

◉文學に現はれたる我國民思想の研究　津田左右吉著　（四册）拾八圓

◉我等　我等社編　（創刊號より揃）参拾圓

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

バスチイユ陥落

小牧近江

バスチイユが陥落して、のこのこ匍ひ出て來た囚人の數が七名だつた。

大革命の火蓋となつたあの名うての牢獄から自由の天地を仰ぎ見たのが、たつた七人だつたとは、些か腑に落ちぬ節のないでもない。だが、それを洗ひさらして見ると、そこには言ひ知れぬ眞理が含まれてゐる。

國家が、仰々しく囚徒を扶養して行ける間、その國は先づ安泰である。だが、それの解放を餘儀なくされてゐる時、すでにそれ自身に破綻が兆してゐる。あながちしも、それは時世の勢ひ許りではない。その國の財政の逼迫はかかる無用の長物をそれ以上維持することを許させぬ時がそれだ。かうした狀態にバスチイユが置かれてゐた。されば、當時、破產しかかつた國家の大世帶をきりまわしてゐたネケールはつくづく感ずるのだつた。「何の役にも立たないバスチイユ、あれはいい、節約上廢止に限る」と。彼の腹の中は、かうだつたのである。

これより先き、バスチイユの別館ともいふべき、ヴアンセンヌの牢獄はバスチイユの落城に先立つこと五年、囚人の拂底を口實に、一七八四年二月限り閉鎖してしまつた。囚徒を食はして行けなくなつた時、ブルボン王朝は根こそぎぐらつき出してゐた。

さて、七名の解放された囚徒といふのは、若いサデイストのソラジユ伯、この男は死刑に相當するのだつたが、名門のお蔭で、バスチイユにぶつ込まれて命拾ひした。それに、ベシヤド、ラロシユ、ラ・コレジユ、ピユジヤド、の四名の贋札使ひ、タヴエルニユ、ウイトの都合七名だつた。タヴエルニユはモンマルテル家の門番の伜といふ到つて卑しい身分の男だつたが、國王に對する陰謀事件で投獄されたのだつた。むろん、この七名の、、、受難者は街頭を練り步かされたが、到るところ、、をもつて群衆に迎へられたことは云ふまでもない。だが、やがて、タヴエルニユとウイトの兩名は狂人であることが發見された。そして、差あたり松澤村とも云ふべきシヤラントンに送られた。飛んだ凱旋將軍だつた。

實のところ、バスチイユの占領者たちに取つて、後暗い囚徒より

は、獄鎖が問題だつた。これこそは、史家ミシユレの言つてるやうに、「數世紀と數千の人間苦によつて使ひ古された殘虐、非道、極惡」の象徴だつたのだ。それを分捕つた民衆は凱歌をあげて街頭を流し歩いた。自由を奪ひ取つたのである。

一說によると、第八番目の老囚人がゐたといふことである。ド・ロルジユ伯といつて、卅二年間鐵鎖につながれた英雄こそがそれだ。だが、後からも先きからも誰れも彼の老人の存在を見たものがなかつたといふ。これも、卅五年間バスチイユ、ヴアンセンヌ、ビセトルセと牢獄生活をなし脱獄で有名なラチユド老はこれとは別人である。

かうして、落城の日のバスチイユには七百名、否、七千名ではなしに、たつた七名しかの囚人がゐなかつたといふことは、たしかに驚異であらねばならなかつた。だが、これとて別段不思議ではない。バスチイユにはどれだけの收容力があつたかといふことを見ればうなづかれる。即ち、獨房向にはやつと四十二人分の獄室しかなかつたのだ。從つて、バスチイユ詰にされる（embastiller といふのがそれだ）の光榮を有するには、たゞの鼠位では寄りつけなかつた。この「特權」を有するためには、「貴族」であるとか、重罪の國事犯でなければならなかつたのである。

註 い要塞だつたバスチイユが國事犯の獄舍になつたのはルイ十四世の頃からである。一六六〇年から陷落當日の一七八九年七月十四日まで、[illegible]は五、〇八人[illegible]だつた。これを時代別にすれば左の如し。

時代	年代	收容數	年平均
ルイ十四世	（一六六〇―一七一五年）	二、三二八人	四〇人
ルイ十五世	（一七一五―一七七四年）	二、五六七人	四三人
ルイ十六世	（一七七四年より一七八九年七月十四日まで）	二八九人	一九人

ことに、大革命が勃發する六年前、すなはち、一七八三年頃からバスチイユはがら空きの狀態だつた。そして、同牢獄が陷落した年の一七八九年には、（同年の一月元旦から落城の日の七月十四日までには）前後を通じてたつた一名の入監者しかなかつた。しかも、それが自發的に、保護收監を申出たといふのだ。バスチイユ陷落の導火線とも見られるレヴエイヨン事件の立役者レヴエイヨンその人だつたのである。

レヴエイヨン事件が多くの革命史にあるやうに、あれだけの役割を演じたか、どうか、何んとも云はれない。だが、階級的對立とはいはれないまでも、、、、、、、、、、、、、、、であつた點で忘れられない。

註 レヴエイヨン事件の眞相はまちまちだ。甚だ以つて明かでない。某博士の「フランス大革命史」にはこんな風に書かれてゐる。[illegible]レヴエイヨン[illegible]、[illegible]職工八百

人を使用し、パリの選擧人の一人にして、財產ある中等社會の代表者たり。彼は工場主としては使用人に對し頗る寛厚にして、慈愛の心深き人物なりしなり。しかるに何人か流言したりけん、（或はアベ・ロアなる僧侶の作り設けし浮說なりともいへど）レヴエイヨン或時人に語りて、「人民は未だ饑餓に瀕せず、彼等は一日三スー（六錢）の錢あらば、裕かに生活し得るにあらずや」といへりとの風說が、端なくセン・タントイーヌの貧民窟に傳はるや、夥しく彼等の敵愾心を激發せしめたり。』とある。次ぎに、クロパトキンの『フランス大革命史』によると、『レヴエイヨンなる男は、彼の辯舌に依りて彼自身を特に有名にした。その毒言は爾來幾度も繰り返さるることになつた。「勞働者は黑パンと扁豆で生活が出きる。小麥は彼等の嗜好に適せぬ。」等々』と。猶、、クロパトキンによると、一七八九年の四月廿七日に選擧人大會（三部會への代表者選出のための大會、筆者）がパリに會合したが、サン・タントアヌに於ける陳情書の準備中に中等階級と勞働者たちとの間に不一致があつたと思はれる旨書きつらねられてゐる。だが、果してそれ程の對立があつたらうか？

ジョレスの見方は若干これらとはちがつてゐるやうだ。彼はレヴエイヨン事件の眞相は『永久の謎だらう』との前提のもとに、こんな風に考へるのである。レヴエイヨンは率先して三部會の招集を叫んだ急進ブルジョアだつた。當時のブルジョアは進んだ頭の經世家だつたことからして、彼も亦十八世紀の產業家の一人としてパンの値段の勞銀に及ぼす影響位研究してあつたらう。さすればこそ、彼の腹では勞働者が日當十五スウで生活が出來るためには先づ以てパンの値段を引き下げねばならぬと考へたらしい。だが、それを曲解した勞働者にして見れば、あの當時のパンの値で十五スウではとうてい生きて行かれるものでないので、さては、レヴエイヨン日頃の博愛主義も喰せものだつたかと、一途に激昂したものらしいといふのだ。ともあれ、フォーブール・サン・タントアヌなるレヴエイヨンの壁紙工場はいきりたつた群集に目茶目茶にされた許りか、彼を取逃がしたその腹癒せに彼の人形をつくり、口々に死刑を叫びながら市中を練り歩いた。そこで、身邊の危險を感じた彼は、保護願ひをし、這々の態でバスチイユに收監してもらつたのだ。それが、この牢獄が落ちる二ケ月半前の五月一日のことだつた。なほ、これもレヴエイヨン事件のとばちりをうけた硝石製造人のドミニツク・アンリヨも亦生命からがらの浮目に遭つたとは哀れの限りだつた。これが世にバスチイユ陥落の序曲として傳へられてゐるところのレヴエイヨン事件なのである。

この事件は軍隊の出動により、多數の死傷者を見てともかく鎭定された。或る者はかうした沙汰は兼ねてレヴエイヨンに怨恨をもつアベ・ロアなる僧侶の浮說なりといひ、又、同業者の使嗾によるものだともいひ、更にまた、ミシユレによれば、宮廷の陰謀だともいはれる。即ち、軍隊のデモンストレーションによつてパリの選擧を威嚇せんとしたのだと云ふのである。ともあれ、負傷者の訊問の結果、暴徒はレヴ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

エイヨンの職人でないのみか、フォーブール・サン・タントアヌ街の住人でなかつたとは更に意外であらねばならなかつた。

フォーブール・サン・タントアヌはパレ・ロワヤルとともにバスチイユ占領の揺籃地である。しかも、前者の後者と著しく異るところは、パレ・ロワヤルの社交人と、知識階級の巷であるのに反して、ここは、産業家と、職人の巷だつた。

フォーブール・サン・タントアヌはフォーブール・サン・マルセルとともに、當時パリ切つての産業の中心地だつたのである。

そこから革命が起る、誰も考へられることである。だが、このことを見て貧民が一時に蜂起したと早合點してはならない。

そこで、先づ、我われの吟味しなければならぬのはサン・タントアヌといふ場末町である。ここはバスチイユに隣接する郭外の下町である。メルシエは彼の『巴里圖繪』の中に言つてゐる。『私にはどうしてこの城下が存在してゐるのか、見當がつかない。何故なら、町の片端から家具屋が軒を並べてゐるのに、そのくせ、そこらに住んでゐる貧しい連中は家具を持つどころの話ではないからなのだ。』

かのフロンドの内亂以來、この町がざわめきの巷だつたことが容易に想像される。だからといつて、それが貧民窟だと速断することが出來やうか？　[illegible]ここの住民が下層民であるために、[illegible]一致の

が、ことにブルジョア革命のそれに於て、貧困が直接パリ革命の原動力となつたらうか？　ここで我々ははつきりと否といひたい。パリはボルドウやマルセイユのやうに船舶業の中心地、又はリヨンのやうな大工業地ではなかつたけれど、パリは消費の大都市として經濟的發展の目覺しいものがあつた。こんなわけで、革命直前廿五ヶ年間の建築熱はすさまじい勢だつた。かの成金階級が競つて家を建てることは一世紀半以前の流行だつた。當年の新興ブルジョア階級は豪壯な大邸宅を構へることによつて貴族に拮抗した。それぱかりでない、建築の流行は家主階級の確立ともなつたのである。建築家ヴエルニゲは一七八五年から一七八九年にかけて、とても大げさなパリの地圖を作製してゐるが、その中にパリの人家一軒一軒の持主と正確な見取圖とを附してゐる。それがためには六十名の技師が時には夜、松火を點じ、彼の手足となつて働いたさうである。ジョレスはそれを丹念に當時の『巴里人名錄』と照し合してゐるが、そのうち著名な館三四百戸を除いては（當時パリの人口七十萬、戸數二萬五千戸と稱せらる）殆ど全部の家作持はブルジョアの氏名だつたと云つてゐる。しかも、彼によれば、『同じ町内に於ける家屋の所有者と居住者の氏名の一致してゐるのは殆んど見當らないところを見ると、ブルジョアジイはパリの大部分の家屋から家賃を取立ててゐたことは疑ひない事實であるのみか、[illegible]

はねばならぬ。されば、この時代の火災保險會社も亦異常な發展振りを示した。メルシエルによれば、當時、火災保險章 MACL のマルクをつけぬ建物は先づなかつたといひ、彼はその MACL のイニシアルをもじつて甚だつまらぬ惡じやれをしてゐる。いはく、Marie-Antoinette cocuffe Louis（知らぬは國王ばかり也）とは、人を喰つてゐる。

建築熱の勃起はひいて家具、壁紙製造業に及ぼす影響の決して尠くなかつたことが分るであらう。そして主として、それを供給する町はかのフオーブール・サン・タントアヌだつたことを思へば、この界隈の如何に經濟的發展の恩惠に浴してゐたことが想像出來やう。

フオーブール・サンマルセルはパリのいはゆる特種部落であつた。尤も、ここでは徳川時代のやうに、あんな人非人の待遇をうけたものとも思はれないが、搾取といふ點では、あらゆる産業のうちで最も苛酷な制度の下にあつた。

パリは、ロンドンやアムステルダムのやうに海に出口を擁してゐないために、世界の産物の集散地ではなかつたが、さすればとて有力な商業の皆無だつたといふわけでもなかつた。わけて、パリのビエーブル川邊りに位するフオーブール・サン・マルセル街は皮鞣製造の本場だつた。ことに、ここの工場主たちは間々職人と一緒に働いてゐる種類の雇主たちだつたので、貴族階級とその制度に對する敵愾心は雇主も、職人も區別のない程度だつた。だから、革命の日、長槍を手にして阿修羅王の振舞をなしたのは當然この場末町の住人たちだつた。

かうしてプロレタリアはブルジョア革命に參加することによつて、（十一字削除）するのだつた。大工業がやつとイギリスから這入つて來かけた當時として、勞働者、といふよりもむしろ職人が雇主を天與の保護者と頼んでゐたのも無理のないことだつた。從つて、ここでは、社會問題などといつても今日のやうに勞働者や農民の問題ではなくて、單にブルジョアの問題にすぎなかつたのだ。さういふわけで、三部會の選擧といつても、立派な制限選擧で、賃銀勞働者は殆んど顧みもされず、といつて、この除外例に對して正式に抗議を申込むのでもなかつた。

普選によるパリの選擧人は約十二萬であるべきのに、そのうちの三分の二は除外され、殘り三分の一の内から約一萬一千人しかこれに參加しなかつた。だが、ブルジョアのみで革命を起せるものではなかつた。しかも、パリの當選者は主として法律家、學者、醫師といふ顏觸れだつたので、パリの工場主たちは、彼らの三部會の選出にもれたのに憤慨し、勞働階級の代表者の無いことを抗議してゐる。つまり、勞働者と職人の天與の代理人である彼等の選出を見ないことは、取りも直さず勞働階級の不參加を意味するといふ論理なのだ。

事實、また、プロレタリアにしても、ブルジョアジイによつて充分

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の仕事と餘裕を與へられる彼らにして見れば、今更、それ以上アンシアン・レジイムの下積みになる必要もなかつた。それよりか利害をともにした彼らは必然的にブルジョア革命の道を採るより他はなかつた。そこで、彼らは『彼らを使用し、彼らに仕事を與へてくれるところの』ブルジョアジイとともに進んだ。そして、その革命の先登を切つたものは、經濟力に最も豊かに、革命戰術にかけて更らに老練なブルジョアジイと、それの『指導のもとに、』そして、それと最も交渉の多く、且つ比較的有富だつたところのフォーブル・サン・タントアヌ並びにフォーブル・サン・マルセル街の勞働大衆だつたことが容易に判るだらう。

すでに財政的に脅かされてゐたバスチイユは文化的施設にも肉薄されてゐた。即ち、パリの著しい建築發達はひた押しに怪物バスチイユを包圍して行つた。いみじくも彼女は封建的遺物の醜骸を天空の一方に曝らしてゐるに過ぎなかつた。そして、それに最後の一撃を與へたものは自覺した、、、、だつた。

フェルナン・ブルーン氏は彼の『巴里全史』の中に言つてゐる。『陥落當日のバスチイユは、十四世紀の築城家がものしたとほぼ同じ書證の名殘を示してゐた。』と。

過去四百年の間『バスチイユ』の名稱のもとに世を震撼したバスチイユ』がパリの町人頭ユグ・オブリオの手により最初の礎を置かれたのは一三七〇年四月廿二日のことだつた。バスチイユといふ言葉の起源は中世紀の頃、移動城堡と呼ばれた城寨を意味した。ローマ人はこれを攻圍法に用ひた。さすれば、當初のバスチイユは牢獄ではなかつた。主として、イギリス軍の侵入に備へるためのパリの防備だつた。かうしてバスチイユは約二世紀の間、要塞の役割を演じて來た。そして、時には、パリ通過の際の國王、領主の館に充てられたこともあつた。ルイ十一世並にフランソア一世はここに盛大な饗宴を張つたことなどもあつた。

バスチイユが國事犯の監獄になるやうになつたのは大宰相リシュリユー時代からとされる。バスチイユは又高貴の人々のための特別監獄でもあつた。されば、バスチイユの管理もルイ十三世頃までは大公、元帥といつた主要の人物がこれにあづかつた。バスチイユは永い間要塞として、抗命罪に問はれた士官、捕虜、外國密偵等を收監した。

しかるに、ルイ十四世時代になると、ここには主として、文人、記者といふ種類の人物を監禁、投獄されるやうになつた。ルイ十四世は言論の自由には大反對だつたが、さりとて、これらの人物を浮浪人同様ビセットルとか、サン・ラザール牢獄とかに普通犯と一緒にたたき込むやうなことはしなかつた。何しろ古典文學の黄金時代を築きあげた國王だけに、そこは偉かつた。

この時代には、又、バスチイユは國事犯、毒殺事件や贋札事件で大分繁昌した。有名な鐵假面事件もこの時代の出來ことである。丁度そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の頃のことである。『バスチイユ史』(アムステルダム版、一七一五年—一七一九年)の著者コンスタンタン・ド・レヌヴイルは一七〇二年から約十年間バスチイユに收監されたのだが、こんなことが書かれてゐる。レヌヴイルは獄中の待遇の頗るいいのに内心不安になつた。そこで、『余(彼)は訊ねて見た。食費は自辨でせうか、それとも國王の負擔でせうか? と。すると、その男の答へるのに、遠慮なく御命じ下さい、出來るだけ御滿足にお取計ひませう。陛下が萬事お拂ひになるのですから。』と。

獄中のマルモンテルがある日、間違つて從者の(獄中に從者を勝手に連れ込めたのだ!)食事をとつたが、それがとても素晴しい御馳走だつた。

これはルイ十五世末葉の時代の話だが、獄中のデユムリユが鷄肉を要求した。すると、獄卒はその日の金曜の精進日だと答へた。そこで彼は怒鳴つた。『君はわしの監視をするだけでいい。他人の良心まで干渉する必要がないぢやないか。わしは病人だ。そして、バスチイユも疾病なのだ! とにかく、鷄肉をもつてくるといい。』かうして一時間後に彼の希望が完全に達せられたといふ。

萬事かうした調子だつたので、いざ出獄といふ段になつてバスチイユを急に名殘惜しく思つたものは一人二人ではなかつた。マダム・ド・スタールがまだローネ孃と呼ばれ、頗る順境でない娘時代の頃、セラマールといふ陰謀事件に引かかつてバスチイユに投獄されたのだつたが、一七二〇年六月五日こんな感想を抱いて釋放されたのだつた。『余は自由となれることを心から望んでゐなかつた』と。もつとも、獄中でメニルと呼ぶ騎士との間に、極めてロマンチツクな濡れごとがあつたといふのだが……

ヴオルテールとの間に、(彼も亦二度收監されたが、)例の『ルイ十四世年代記』のごたごた事件で有名なラ・ボーメルはバスチイユに六百冊からの書籍をせつせ運ばせたが、書棚は全部官費で作つてもらつたのださうである。そんなことならまだいい。人によつては家族の肖像畫を飾ることも、小鳥を飼ふことも、猫を飼ふことも許可されたし、ラチユドは笛を吹くことさへ許されてゐた。ルフオールとなん呼ぶ優さ男が、彼の誘惑したイギリスの美人と同棲してゐると、ある夕方、一台の馬車が門前に停つた。そして、極めて慇懃に彼等を案内するので、何處かへ訪問でもする氣で悠然と乘車すると、それがバスチイユだつたので仰天した。そして『どうせ來たついでだ遠慮にも及ぶまい、君も主人のお供するが好からう』といふので、從者も一緒に收容されたとは、羨ましい別莊だつた。

バスチイユは純然たるアリストクラシイの監獄だつた。從つて、そこに收監されるものは不名譽どころか、『かかる立派な獄舍に收容されることは偏に國王の思召によるもの』だつたのである。

こんな具合だつたので、經費のかかつたのも凄かつた。表面の計算

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だけで、バスチイユ要塞官の年俸六萬リーブル、それに官房主事、士官、獄卒、醫師等の手當があり、その上、收監者の賄料といふのが、一七七四年の調べで六萬七千リーブルだつた。食費手當は囚人によつてちがつてゐた。普通人一日三リーブル、ブルジョア、五リーブル、金融業者、文人、法官、十リーブル、最高法官、十五リーブル、元帥、卅五リーブルといふ風だつた。コンスタタン・レヌヴイルによると、要塞官は年俸の他に賄料、調度費、何のかんののコムミションでたつぷり年三十萬リーブルは懐にねぢ込んだろうとのことである。だから、この職を五六年も勤めると、懐手で二百萬リーブル位はわけもなく寢ころんだと言はれる。羨ましい御役目だつた。されば、例の鐵假面のお目附役をして一生送つたサン・マール典獄が、サント・マルグリツト要塞からバスチイユに榮轉を仰せつかつてこれを拜命しやうか、どうしやうか、五六ケ月程考へたといふのだ。その筈、彼はその時七十二といふ老齢だつたが、その頃では金も溜つてゐたし、おいそれとお勤めをするといふ程のことでもなかつた。つまり、何處もの要塞官すなはち、典獄の懐工合がいいのに比例して、國庫の勝手もひどかつたのである。そこで、バスチイユといふ怪物は年々國財政にとつても困つた代物になつて行つた。

このもてあましのバスチイユが大昔のそれと大差のなかつたことは前に一寸述べた通りだが、そこのからくりが著述家ランゲによつて白日の下に曝されるに至つて一躍[illegible]ランゲの『バスチイユ回想記』が世に出でたのは一七八三年のことだつた。

『バスチイユの入口はサン・タントアヌ街尖端の右手にあつた。第一の入口の樓上には各種の武器並に甲冑が藏され、その入口の側に番兵の詰所があり、そこに毎夜二名の哨兵が張番をしてゐた。この入口は第一の外丸に通じてゐたが、そこには老兵の營舍、要塞官の厩舍、物置等があつた。ここは又隣接の兵器廠へも通じてゐた。この外庭は入口を隔てて第二の外庭に通じてゐたが、そこには衞護の兵舍と、空濠と吊橋かかかつてゐた。この外庭の右手に要塞官舍が聳てゐたのである。』

バスチイユは八つの塔樓から成立つてゐたがその高さは廿三米、壁の厚さ一米六〇から二米三〇、各塔とも四階乃至五階建で天井裏をカロツトと呼び夏暑く冬寒かつた。土牢はこれをカショと呼び、常に濕つぽく、陽の目があたらずじめじめしてゐた。ここは主として囚徒の處罰に充てられてゐたが、一七七二年以後土牢の使用が廢止になつた。

八つの塔樓をそれぞれ、隅の塔、禮拜堂の塔、井戸の塔と呼んだ。次にベルトーデイエール又はブルトーデイエールの塔(ここの三階に鐵假面が監禁された)及びバジニエールの塔(この二つは囚徒の名をちなんだもの)六番目が國庫の塔、七番目が鎖獄の塔(コンテ・ド・バリにちなんだもの)、そして、最後の八番目を自由の塔!と呼んだ。晒う、[illegible]の出來る囚徒のための塔なのだ。ここで、バ

スチイユの囚人は同じ囚人でも『自由の囚人』と『幽閉の囚人』の二種類に分かれてゐたのである。何處までも變つた世界だつた。

バスチイユは人間のみを幽閉しなかつた。危險なものは書籍といはず、印刷物といはず、國王の命により、人間並に有名な逮捕狀の形式で之を收監した。そして、危險がなくなると自由の身になれた。かくして、エンサイクロペディアが數年間入獄の上釋放されたのだつた。これらの禁斷の書は國庫の塔と伯領の塔の中間の片隅に監禁されたのである。

一七三七年、時の奉行が、バスチイユ要塞官に對し、『サン・ヴクトール僧院の一室にて押收せし印刷機一切を同監獄に保管すること』を命じたとある。かくして、印刷機も又監禁されたのである。バスチイユ占領の日、發見されたともいふ、かのえたいの知れぬ攻道具とは、一七八六年フランソワ・ルノルマンなる者より押收した祕密の印刷機だつたとは一興である。ルイ十六世即位後にはすでに鐵鎖も廢されてゐた。廿世紀の今日、文明國の獄舍に諸種の、、が、、、によつて公然はびこつてゐるとは沙汰の限といはねばならない。

バスチイユが民衆の手に落るや、物好があつて、(後には公に)鐵假面の眞相を掘らうとした。ところが、記錄簿の肝腎要めの、部分すなはち、謎の鐵假面が入監した當時の記錄の分が故意に引き裂かれてあつたとは有名な話である。バスチイユの書類の略奪は占領の當日から二日に亘つて盛につづけられたのだつた。そこで、憲法議會は七月十六日四名の委員を派遣してそれが處置に與からした。さて、委員は現場に乘込んで見ると、要塞の中の一室に、一六五九年からの資料が整理されてゐたことがわかつたが、肝腎のカルトンは空つぽになつてゐた。これからの略奪された書類はすでにフランス全土はもとより、ヨーロッパの隅々に逸散しかけてゐたのだつた。當時、ロシア大使館の官補をしてゐたピエール・リュブロウスキイはそれを可なりの分量買取つた。そして數年後、一八〇五年に皇帝アレキサンダー帝にお讓りした。

そこで、例のランゲの友人であるシャルパンチエは國民の愛國心に訴へ、散亂してゐるこの貴重な文獻を蒐集し、之を彼の指導のもとに一纏にした。そして分册として刊行されたのが『曝露されたバスチイユ』だつた。(一七八九年——一七九〇年)その翌年、即ち、一七九一年十一月二日パリのコムミユンは、正式に市廳の圖書館内にバスチイユの關係書類一切を整理することにした。たまたま同圖書館長アメオンは一七九七年四月廿二日兵器廠圖書館長に任命されたのだつた。そこで、彼は一七九八年二月廿七日彼の身柄とともにバスチイユの關係書類は之を一切合切兵器廠圖書館に贈與することを公表してもらつた。實に、無慮六十萬からの書類があつまつたのだつた。これでバスチイユの書類も、やや散逸を防がれたのだつた。

その後、五十年許りはこの話はやや立消えになつた。しかるに、一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

八四〇年のことである。革命はフランソア・ラヴエソンなる人物をして同兵器廠の紙所の工事を請負はしたのだつた。ところがその工事に偶然張瓦が押上げられると、その穴からぼつたり出て來たのがぼろぼろの古い紙片だつた。そして、それこそよく吟味して見るとそれが王朝時代に盛に濫發したところの有名な逮捕狀だつた。爾來、刻苦精勵五十年、遂にフランソア・ラヴエソンはかの有名な『バスチイユ誌錄』を刊行したのだつた。時に一八九二年のことである。バスチイユの幾多の秘錄が紙所で發見されたとは、奇しき因緣といはねばならない。

バスチイユの崩壞は實質上、時の問題になつてゐた。レヴエイヨン事件は一時ブルジョアジイと勞働者との最初の對立の如き觀あらしめたけれど、ともに特權階級を打破せんとする情熱はそれ以上龜裂を深刻にしなかつた。第三階級が打つてまるめて一丸となり、アンシアン・レジムを打倒せんとする矢先の抗爭は、少くも當時の狀勢からいつて、反革命に等しいものでもあつた。ブルジョアジイはこの機を摑むことを決して見逃さなかつた。そして、ひたすら事態の成行きを覗ひ、それをリードすることを怠らなかつた。

パリの選擧の終つたのが、五月十日だつた。これよりさき、五月五日三部會はすでにヴエルサイユに於て開會されてゐた。パリの選擧をことさらに延ばしたことも偶然の所業許りでもなかつた。ここにも宮廷側の欺瞞があつた。四〇七人の第二選擧人は引つゞきヴエルサイユの代表者と交渉を保つことにした。それに僧侶と貴族の一部が參加した。刻々とヴエルサイユの事態が險惡になつて行つた。選擧人たちは、一面それを監視する事情もあつた。かうして、選擧人たちは六月四日の親臨會議のその翌日からドオフイネ街なるパリ博物館に集合し、やがて、同月廿八日から市廳の講堂に集會することにした。

六月卅日、すなはち、選擧人が罷々として市廳に會合し初めてからの二日目、アベイ事件が勃發した。、、の蜂起である。數名のフランス、、が、、に、、した廉でアベイに收容されてあつたのが、それが無賴漢と、狂人と、前科者の牢獄であるビセツトルへ護送されるといふことが傳はつたので、パリの市民は蹶起してアベイに闖入し、囚はれの、、を奪還した。そして、勝に乘じた彼等はこれらの受動者を、パレ・ロワヤルに引連れて之を護衛した。宮廷と國民議會の(三部會は六月十七日以後名實ともにこの名稱に改まつた)抗爭が漸く熾烈になるや、パリの市民は、、との提携の極めて重大な意義を感じ、銳意それに腐心したのだつた。さればこの行爲はたださへ不平滿々たる、、、間に(ここにも階級別のあつたことは無論だ。)異常なセンセイションを起したことは言ふまでもなかつた。

だが、宮廷側にとつてはこの騷擾こそもつけの倖ひだつた。即ち、この事件を口實に軍隊をパリに集中し、一氣にそこの險惡な機運を鎭壓することは取も直さず、國民議會を搦手から攻め落すてくだてもあつたからだ。そこで、ヴエルサイユ國民議會は一方、パリ市民の自重

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を求め、他方、國王に件の兵士等の特赦を請願した。ルイ十六世は遂に國民議會の希望に應ぜざるを得なかつた。かくて事件は表面上、一時解決せるものの如くに思はれた。

かかる間にあつて、國民議會は七月八日新法令を制定するため憲法委員會の組織を見、翌九日憲法議會と改稱した。ここに專制君主政治は事實上終局を告げたのだつた。

かかる狀勢にあつて、如何な柔弱なルイ十六世と雖も、マリ・アントワネット、並に諸親王に動かされた國王は、最早安閑としてはゐられなかつた。そこで最も安心な外國雇兵二萬五千の兵をもつて先づヴエルサイユを固めた。

七月八日ミラボーはラフアイエツト、シエエスの支持のもとに宮廷の軍隊集中に抗議し、併せてパリの自由を拘束せぬ範圍に於てブルジヨア衞兵を組織する件の動議をなしたが、右は破れた。だが、國民議會とパリを壓迫せんとする軍隊集中の抗議に關する建白書は殆んど滿場一致を以て可決した。この建白書に對して、さすが、貴族も僧侶も公然と反對が出來なかつたらしい。

國王もこれに對し、七月十一日逆襲的な回答をなしてゐる。即ち、パリ及びヴエルサイユの現狀に於て軍隊の駐屯は治安維持上止むを得ない理由を述べ、『されど、議會の希望に副ふため、パリの軍隊は之をノワヨン若くはソワソンに移動せん』との妥協を示めした。だが、この讓步こそは恐るべき陷穽であらねばならなかつた。事實、かくすることによつて、パリは地勢的にヴエルサイユとノワヨン、もしくはソワソンに挾擊されること必然だつたからである。

それ許りではなかつた。同日、國王は秘かにネケールを免官し、反革命派のブルトウユが之に代つた。新らたに陸軍卿として『最も頑迷にして、しかも奴隷的なる手先の一人』ブローリ元帥の親任を見たのである。かくして、クーデタは着々と準備される。

ネケールの免職がパリに傳つたのは七月十一日土曜の夕方であつた。銀行家テリユソンの手代あがりだつた彼は、たいした自由主義者ではなかつたが、兎に角、このことが一般にエモーションを與へたことは非常なものだつた。ネケールとオルレアン公の肖像がお祭騷ぎをしてかつがれた。その後、劇場は弔意を表して休演するといふ騷ぎだつた。革命家のランヂ・ヴウだつたパレ・ロワヤルには群集がわいわいしてゐた。カミーユ・デムランが有名なアジをしたのが、その時だつた。『市民諸君、一刻も失つてはならぬ。余はヴエルサイユから今歸つたところだ。ネケールは罷免になつた。これこそ愛國主義者の聖バルテルミを意味する(一五七二年八月廿四日、聖バルテルミの日、シヤルル九世はフランス全土の新教徒を虐殺した)スキスとドイツの雇兵共は今夜シヤン・ド・マルスから我らを虐殺するために出動するであらう。覺悟はいいか! 武器を執れ!』

明けて十二日の日曜、遂にこの延長が暴動化したのである。激昂し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た群集が、たまたまルイ十五世廣場にゐたドイツ雇兵の聯隊に投石したのをきつかけに、ドイツ兵の發砲となり、ランベスク大佐の率ゆる騎兵隊のチユイルリ宮園への突進となつて遂に、無辜の一老人が即死するやうな慘事を起した。全市に警鐘が鳴り渡つた。

この時にあたり、ブルジョアジイは二つの難關に立たせられてゐた。一方、宮廷の反動軍に抗するとともに、ややもすれば、附和雷同の飢民にも備へねばならなかつた。だが、、、、、、に立つた革命的ブルジョアジイは自個の實力を意識した。そして、その階級性の確立のため絶對的信頼をもつた。パリの革命的ブルジョアジイは選擧人によつて指命された十四名の委員と市廳の役員八名によつて成立つ常任委員會を組織した。事實上の假政府だつた。そして、その目的とするところは國王の雇兵ドイツ兵の反革命的侵害に抗爭するにあつた。

、、、、と自個の實力とに認識をもつた新興ブルジョアジイは武器を供給することを怖れなかつた。その用途を監視するために充分の自信をもつたからでもあつた。かくて、ブルジョア、財閥、一部貴族及僧侶より成立つパリの義勇兵はまたたく間に一萬二千人と算せられた。これが、國民軍の前身である。プロレタリア的分子の見えないのは爭はれない事實だつた。革命的ブルジョアジイは、綿密な注意を拂ふことを忘れなかつた。ただに所有權を有せざる者に武器を與へざるのみか、その保證なき者は之を除外したのだつた。ブルジョアジイには油斷がない。バスチイユ占領とともに、群民の武裝を解除することも忘れなかつた。オーストリヤ大使がその政府になした報告によれば、『パリのブルジョアジイは革命を遂行させることも、ブルジョアジイの秩序を維持することもたつた二日間に成し得た』のであつた。かくて、ブルジョアジイは革命の風雲の中にあつて、組織なき民衆を完全に自個の藥用籠中のものにすることに成功した。自覺なきプロレタリアはブルジョアジイに不平を並べぬのみか、彼らは反革命軍に對しては、矢彈が無かつた場合、投石を敢てなしたやうに、それのみか、プロレタリアは、ブルジョア階級確立のため、喜んで明日、革命の先陣を承るであらうことを、『彼らブルジョアジイは心得てゐたのだ』と、ジョレスはいつてゐる。

一七八九年七月十四日は晴天だつた。

ブルジョア、職人、無産者、全パリは前夜からまんじりともせずに一夜を明かしたのだつた。折からのことである。騎兵の一隊がフオーブール・サン・タントアヌを通過してバスチイユの方面へ疾驅したのだつた。市民は極度に緊張した。城廓の防備はパリに取つて致命だつた。この際の無爲は躊躇を意味した。武器が先決問題だつた。

ここに武器が藏されてゐた。雲霞のやうな民衆は老兵院へ殺到した。ここで押問答があつた。民衆は小銃二萬八千、砲門若干を分捕ることに奏功した。群集は怒號した『バスチイユへ！』

シヤンド・マルスに集中してゐたブサンブルの率ゆる聯隊は出動の命令を待ちわびながらおづおづしてゐた。宮廷は見な振をした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

バスチイユ陥落については幾通りものエピソードが傳はつてゐる。常任委員會は事を荒立てやうとはしなかつた。數度にわたつてバスチイユに交渉委員を送つた。そして、砲門の撤退と、武器の引渡しを要求した。ところが、最後の委員はいきなり銃火を浴びせられた。攻撃が開始された。四時間後には脆くも落城せざるを得なかつたといふより、あつけなくバスチイユが降伏したといふのが至當である。

荒狂つた民衆の報復は慘かつた。守將ド・ローネは發砲を命じたといふので、又、町人頭（市長）フレッセルはバスチイユに武器のあつたのを故意に委員たちに隱蔽したといふので、斬殺された。そして、彼らの首級は槍先に突き刺れて市中をまわされた。

その後、パリ駐屯軍の糧食の管理をしてゐたフーロンとその女婿のベルチエも同じ運命を見た。

『私は見た、この舅父子の首級が、千人からなる武裝された人々の後につゞくのを私は見た。そして、それが道中二十萬の見物人の曝し物になつたのである。これ等の群集は太鼓の響きの中に護衛の軍隊と共に罵詈し打ち興ずるのであつた。この歡喜はすつかり私を厭な氣にした。それは私にとつて小氣味よくもあつたし、不快でもあつた。ざまあ見ろとも、困つたものだとも言ひたい氣分だつた。私には人民が制裁を加へる氣持も、その張本人をたたきのめしたあとの氣分もわかる。だが、これが慘酷でないとはいはれぬだらうか？　ところで、いつたい誰がさうさせたといふのだ？　到るところに行はれた、ありとあらゆる極刑、四裂の刑、車刑、首吊り刑、焚刑等の慘忍性が我われをこんな風に成下げてしまつたのだ！　我われを善導すべき人々が、我々を野獸にしてしまつたのだ。といふ彼ら自身も野獸だつたまでなのだから。種子を蒔いた者はやがて收穫する、せざるを得ないだらう。だが、これはほんの序の口にすぎない。』

このあまりにも人間的な、悲痛な心の持主こそは、誰あらう、コムミユニズムの先驅者バブーフだつた。忘れることなかれだ、プロレタリア！　バブーフが一九七八年七月二十五日彼の妻に送つた手紙の一節なのである。

パリ革命の勝鬨はプロレタリアのためにあげられなかつた。『だが、と、――悲壯にもジヨレスは叫ぶ、――だが、プロレタリアの血の流れる時が來てゐた。』

かつて、（以下二十七字削除）

『バスチイユの勝利者の大多數は、勞働者だつた。そして、その殉死者約百名のうち、數週間姓名すらの判明しない貧しいものが、數名、妻子を明日から路頭に迷はせるやうな境遇にあつたのは卅人以上もゐた。』

と、ジヨゼフ・デユリユウがいつてゐる。

されば、バスチイユが陷落して數日後、フオーブール・サン・タントアヌの雄辯家ベサンは同界隈の勞働者救濟のために、憲法議會に於て

叫んだ。

『諸君、諸君は祖國の救世者である。だが、更に諸君の背後には更らに諸君の救世者のあるを忘るる勿れ。』

一年半後である。パリの大工等はマラに建白書を送り、企業家の横暴を鳴らした。『危險な時に逃回した彼等は、今や革命の利得を獨占せんとしてゐるのである』と。

だが、プロレタリアが第四階級としての存在を意識するためには、なほ幾多の試煉と、屈辱と、ブルジョアジイの裏切を重ねなければならなかつた。プロレタリアは貴族と、僧侶と彼らの制度を敵視した。それ故に、彼らはブルジョアジイを信頼した。プロレタリアは正直である。その中には國王を信頼する者すらあつた。國王の罪ではなかつたのだ！

國王萬歲！

かくて、彼らはバスチイユを陥落した。貴族を倒し、封建の遺物を轉覆した。

自由萬歲！

かくて、ブルジョアジイはバスチイユを陥落した。（入字削除）することによつて、彼らの自由を確立したのだ。彼の自由を！

本質的に階級的革命であるブルジョアジイの革命はバスチイユ占領後、直ちにブルジョア分子による國民議會を確定した。憲法會議に選擧法から數百萬の下層民と賃銀勞働者をさつさと除外した。そして、革命の眞の先達、『七月十四日の勝利者』に與へたところのものは？彼らを表彰するための最も壯重な言辭であつた。それは同時に、最も厳かな空言でもあつた。

そして、國王は？

パリと民衆を捨てた國王はやがて王位を捨てねばならなかつた。ヴエルサイユは國王が王國を食ひつぶすところの台所だつた……

國王の日課は狩獵だつた。

七月十四日、その日、ルイ十六世はいつものやうに、出獵から御歸館になると、ロシュフコー・リアンクール公は色を變へて注進に及んだ。『すは、謀反なりや』と仰せになられた。

『否、陛下、革命にて候――』と、言上した。

二年經つた。

一七九〇年七月十四日である。その日、バスチイユの取毀が完成した。その遺蹟でパリ市民は踊り狂つた。『フランス人の父にして、自由の王なるルイ十六世』の死の舞踏だつた。

パスチイユが陥落してから、この七月十四日で、百四十年になる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



蒲田風景

北村小松

何も書く事がないので、自分の住んでゐる街の自慢話をしようなどと云ふ氣は毛頭ない。むしろ私は面喰つてゐる所である。なぜと云ふのに昔から燈臺元暗しとか云つて、自分の住んでゐる所だとか、自分のすぐ手元の出來事だとか云ふものは存外、はたの人の方がよく知つてゐる樣なもので、當人には、仲々よく見えないものである。その證據には、どんな美人を妻君にしてゐても、街を歩いてゐて、街角でふとすれちがつた見知らない娘に氣をとられたり、或は又夫婦喧嘩をおつぱぢめるとはたの人が垂涎おくあたはざる妻君に向つて「やい！この横着ばばあめ!!」などゝなぐりたふしたりするものである。

編輯者が私に「蒲田風景」と云ふ題を課したのは、私が蒲田の住人だと云ふだけではなく蒲田の松竹キネマ撮影所で働いてゐる人間だと云ふ事を知つての事にちがひない。して見ると、「蒲田風景」と云ふのは、蒲田村が、いかにしていつから町になつたのであるか、或は又、蒲田の近所はいかにドブが多くて、街並みは樺太の奧の樣に殺風景であるか、新潟鐵工場の屋根は、どんな色をしてゐるかと云ふ樣な、蒲田町案內ではなくて、「蒲田」と云ふ言葉でにほはされる撮影所、キネマ……女優……そんな風なものを中心とするスケッチの事をさすのにちがひないのである。

所で……所でである。前にも云ふ通り、燈臺元暗しで私はK氏——とThey say である——が時々、私の家のすぐ近所まで來てゐたと云ふ事さへ知らなかつたのである。昔——と云つた所で「最近」でないだけの話であるが、蒲田の驛前に喫茶店を出してゐる映畫脚本家の伏見晁が、

「君！　君はK氏が蒲田で下りて、俥へのつて君の家の方向へかけ出すのを知つてるかい？」と云ひ出したものである。

「K氏が？……冗談云つちやいけないよ。撮影所へでも用がなけりやK氏なんか、蒲田へよりつくもんか！　君の目の間違ひさ」——私は初めはさう云つてフフンと鼻であしらつてゐたものだ。もつとも、私はブラリブラリと蒲田の街や外を散歩してゐて、ある家で——どうも荷馬車や馬がその家にゐた所を見ると小說家の家らしくもないが——

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

立派に「K」と×も×でなく小説家のK氏と同じ表札を出してゐるのを見つけて驚いた事があるが、まさか、それがK氏の別邸で、小説を書く傍、馬をかつたり、荷馬車の親方をやつてゐるわけでもあるまい。おまけにそれは驛の東口の方向で、伏見晃が云ふ樣に、私の住んでゐる西の方向とは反對なのであるから、どうもがてんが行かなかつたのである。

所が又、しばらくすると伏見晃は私をつかまえて、「どうだい、やつぱりK氏だぜ！　どう見たつてK氏だぜ！　やつぱり、車にのつて、幌をかけて、君の家の方向に向つてかけ出すんだから、どんなもんだい」――とかうなのだ。

「どんなもんだいつたつて仕方がないぢやないか。K氏が、俺んとこへ××××の原稿料でももつてかけつけて來るなんて事になつたら、それこそ「どんなもんだい」だが、俥にのつてかけ出さうが、はだしでかけ出さうが俺達の知つた事ぢやないぢやないか」

「そ、云や、さうさ。だけどオコンナよ。俺達の知つたことぢやないけど氣がもめるぢやないか。」

「うん、まあ、それもさうだ！」

「それ見ろ！」――伏見晃はK氏が幌をかけた俥で、私の住んでゐる方向に向つてかけ出した事に對して私も一所に氣をもんだと確信して、そり返つたものだ。

が、私は、そんな話はいつの間にかキレイに忘れてゐた。所がある時思ひがけなくも、近所のある人から思ひがけない事を聞かされたものだ。

「…………そりや美しい丸まげの似合ふ方でしてね……えゝ、まだ若いんですよ。いつも俥でお客樣があると、お母さんらしい方が子供さんをつれて遊びに出かけちまふんです…………その俥がね、又面白いの、幌がかけてあつてね。……お玄關をあけると、俥のかぢ棒をそのお玄關のたゝきの中まで入れちまふんですよ。………俥を半分お玄關の中にひき入れちまふんですよ、………ほほほ………どなたゞとお思ひになつて……小說家のKよ！」

「本當ですか？」……私はむきになつてとひ返さずにゐられなかつた。

「さうですつて、Kですつて…」

答へはつひに、「ですつて」であつた。だから、私は御本人に伺はない限り、伏見晃が、氣をもみ、近所の人が私に話したのは本當のK氏であつたか、又は非常によく似たお金持ちの商人だつたかは保證の限りではない。

それにしてもすぐ近所、――そこには撮影監督の牛原虛彥氏の家もあるし、脚本家の野田高梧氏の家もあり、私も始終步き廻つてゐたつひ近所に、さう云ふ興味深い一軒の家があつた事も知らなかつたほど、それほど私は「燈臺元暗し」なのだから困るのである。

もつとも私の近所には「グー・アベニユー」と云ふのがある。これ

も撮影所の連中がつけた名であるが、つまり「寫通り」と云ふわけである。

先だつても私の家のつひ近所の文化住宅にロケーションにやつて來た若い監督が「君！　この近所はシャンな奥さんが五萬とゐるんだね……」と見物に來てゐる丸まげや洋髮の美人連を眺めながら云つたものだ。

「……所がこの邊は「グー子」が多いんだぜ……奥さんなんて早がてんして貰つちや大變迷惑するぜ！」——誰かゞすぐまぜつかへしてしまふのである。

「寫子」にしろ「寫通り」にしろ、皆、表札の「××寫」から出てゐるのは御承知の通り。なるほど考へて見ると近所に「寫」が多い。したがつて女中位おいた一人住ひの美人も多いと云ふ事になるのであるらしい。

面白い話があるんだ。一人の「グー子」が、この蒲田の町はづれを通る電車をとめた話があるんだ。——何でも夏の盛り而も最つぴる間……「グー、アベニュー」のある一軒に、一人のいい年の男が表からはいると、裏から女のゆかたを一枚ひつかけて、上着を手にもつたまま一人の西洋人がはだしのまんまでとび出したものだ。西洋人は近所の家のいけがきやうゑ木をふみたふして電車線を横切つて私の家の横町まで來てつゝ立つてハアハア息を切らしてゐる。とび出して來た家では、大變な物音と女の泣き聲と男の罵聲でドンチヤンバタン——人の黒山。電車が來て警笛をならした所で動かばこそ。——電車は立往生。女のゆかたを着て上衣だけもつた西洋人は角の家で水を貰つてのみながら、「ワタシ、ワルイコトアリマセン、ワタシ、、、、、、、マシタ……、、、、、マシタ……」をくり返してゐたといふ騷動もあるのである。

が、これはまあ、辛うじて、私の眼のとゞく距離にはなれてゐるからよいが、「……蒲田の女優さんは……なんだつてね……大森へ現はれるんだつてぢやないか！」……などゝ云はれると、さあ、私はまるで分らないのである。撮影所は燈台の眞下なんだから……

「そりや大森は蒲田のとなりだから……女優さんも現はれませう…………」

「一つ、世話しないかね！」

「御冗談でせう。——かつて栗島すみ子が淺草に現はれると云ふので栗島すみ子女史の御主人である池田監督が探見に出かけて行つた事があるが、栗島すみ子はつひに現はれなかつた「今日はあひにくとロケーションでございます……」と斷はられたさうである。當の監督がちやんと仕事がないのでこの家に來てゐるのに……。こんなあんばいなんだらう。

まづ、これはよいとする。所が蒲田の女優さん達が、あつと驚いた事がある。と云ふのは外でもない。御當人等は夢にも覺えのない事が、まざまざと寫眞になつて、當の御本人に送つて來るのだからなん

ぼ海山千年――例へばである。彼女等が海に千年、山に千年ゐたと云ふのでなく、例へば彼女等が海山千年の女丈夫だつた所で驚かずにゐられないわけである。それもなみたいていの寫眞なら驚きもしない。見るも無惨な、或は見るも……何とも、どうもはやお話にならない様な姿態の首だけが立派に、御當人達大スターの顔なのだから驚かずにゐられない。それを、又「記事掲載」で、御當人の原稿がのりましたからと云つて送つて來る雜誌の様に首がさうだからつて御當人に送つてよこすのだから世の中にはどんな人間がゐて金もうけをしようともくろんでゐるのだか分つたものでない。女優達こそいい面の皮である。――どうも話が「風景」でなく「女優稼業」の話になつてしまつた。これでは仕方がない。「風景」にたちもどらう。

さて、ハリウツドには「運命の十字路」と云ふのがあるさうである……『世界の各地からハリウツドへ、ハリウツドへと押しかけて來る色んな氣もちの人々が、一度はこの交叉點に立つて足をどちらかへむけるのださうである。スタアの名聲をかち得た女性のハリウツドの追憶に、或はソオダフワウンテンの女給に落ちついた哀れな女優志願者の追憶に、或は十年一日の如くデイワアクをつゞけてゐる老優の追憶に、同じ様に浮び上るのはこの運命の十字路の第一歩ださうである……云々……云々……』と、牛原氏のアメリカ土産『映畫蒐集鏡』の中にしるされてゐるこ[illegible]

諸君がもし、ここで第一歩をまちがふと、撮影所どころか、それこそ、「運命」の様にとんでもない方向へ行つてしまふから云ふのである。この十字路に氣がつかずに、まつすぐに行かうものなら諸君はつひに藝者屋町へ行きつかなければならないのである。牛原氏の言葉ではないが、日本中の各地から色んな氣もちで出て來て、今や映畫界の名士となつた人々――例へば蒲田の牛原氏や鈴木傳明氏、岡田宗太郎氏、或は日活の澤村春子女史、マキノの南光明氏、そ云つた人達の大正九年頃の追憶に同じ様に浮ぶのもこの蒲田の「運命の十字路」である。と云ふのは、その頃そろひもそろつてみすぼらしい陋屋の並んでゐたこの十字街の一角の小い店こそ、べんとうさへろくにない蒲田村の有難い「まんぢう屋」だつたからである。

そこには若いお竹さんがゐた。お竹さんがまんぢうを賣つてゐた。お中のすいた、今の諸名士――當時の貧書生は皆、この「お竹まんじう」を食つて偉くなつたからである。

お竹さんは養子を迎へ、子供が生れ、家を改築し、この十字路は、せまいながら堂々たる街になつてしまつたのである。あの頃誰かお竹さんと戀をしてゐればその人は今は名士でなくて「お竹まんぢう」の主人でをさまつてゐたらう。……運命の十字路さ――

で、その横町を右へ曲ると「おしどり横丁」である。誰がそんな名をつけたのか知らない。これは「ダー、アベニユー」の名をつけた者[illegible]

か、この横丁の射的屋のかみさんがさう数へて呉れたのだ。——とにかくこの横丁は暗い。夏になると、そのせいか男女の二人づれがおしどりの様に後から後からと通つて行く。それで「おしどり横丁」なのだと射的屋のかみさんが云ふのである——この射的屋で、ポンポンコルクの玉をうつ事で元の撮影所長城戸四郎氏や脚本部の村上徳三郎君等は、数十圓の金をおつぼり出してしまつた。そのかはり、村上君など綺麗さつぱりと神經衰弱をなほしてしまつて健康をとりかへしたなどは有名な話である。——勿論ここでポンポンやつたのは城戸氏や村上君ばかりではない。撮影所の連中が、勝負好きとひまにまかせてポンポンやつたのでかみさんも初めの中はボロかつたらしいが、日がたつにつれて撮影所の連中は、揃ひも揃つて皆射的の名人になつてしまつたのだから恐ろしい。

　月末になる。煙草錢もなくなる。するとからだ。

「ちよつと待つた。鐵砲を打つて來るから——」

　一走り射的屋へ行く。ポンポン……とやる……たちまちにして棚の上の煙草は皆射落してしまふ。——かみさんは面喰つてあやまつてしまふ。——「今日は、これでかんべんして下さいな……」——でバットなり敷島なりが手にはひると云ふ事になるのである。

　が近頃は誰も名人になりすぎてポンポンやりに行かない。射的屋は大さびれにさびれてゐる。——この小路のつきあたりが、とりもなほさず（こんな所でとりもなほさずは可笑しいかな……まあいゝや）松竹キネマ蒲田撮影所だ、と云ふ事になるのである。

　撮影所の門衛さんは怖い。おまけに請願巡査までゐる。

　一人の男がノコノコ撮影所の中にはひらうとする。

「いけません！　お待ちなさい」門衛がたちまち呼びとめる。

「大谷だよ！」

「誰だつて許しなしに中へはひつてはいけません！」

「大谷竹次郎だよ！」

「誰だつて……」

「社長だよ！」

「えッ？　へえ!!」——とあやまつて、かへつておほめにあづかつたと云ふ門衛美談さへある。

　一人、ひどく柔和な顔の小父さんの門衛さんがゐる。言葉も柔和で目など、象の様にやさしい。この門衛さんがある時、所内を巡視してゐた。所が、この時丁度食堂で、ある外部から來た人が大暴れに暴れて威ばりちらして皆を弱らせてゐた。

　門衛さんはしばらく默つてそれを見てゐたがづかづかと食堂へはひつて來て非常におとなしく一言「ちよつと……」と云つて暴れてゐた男を外へさそひ出した。男はいたけ高になつて外へ出ると、いきなり拳が宙に浮いたと思ふや地べたの上に長まつてしまつた。門衛の小父さんはあひ變らず柔和な顔で長まつた男のえり首をもつてつまみ上げると、默つて猫でもブル下げる様に門の外へもつて行つてしまつた事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

もある。門衛さんは怖い。

が、いつでも、ことにお天氣のいい日などは、門の所へ色んな人が來て、根氣にまかせて撮影所の中をのぞき込んでゐる。勿論、映畫好きがこつた上句のはてに、本物の役者の顔を一目でも見たいと云ふ氣もちでやつて來て眺めてゐるのもある。中にはスターの夢を見て、無分別にも家をとび出して來た連中も―（この頃は巡査がゐるのでない様だが、もとは）家出したそんな娘等を誘拐しようといふのさへゐた事がある。とんでもない話だ。役者になりたいばかりに撮影所にしのび込んで猫入らずをのんだ男もゐた。

だが、それほど狂的でない人達を撮影所の中に入れて見せると最初に云ふ言葉はかうだ。

「やあ！　汚ねんだなあ……」

或は

「思つたより、どうも綺麗なもんぢやございませんですね……」

どちらにしろ同じ事である。私の知つてゐる娘さんでリア・ド・プテイとロイス・モーランとを一所にした様なモダンガールがゐる―柏美枝嬢を失つてから「モダンガール」女優がゐないのでこの娘さんにそれとなく誘ひをかけて見たら「あたし十八頃はそりやとても女優になりたかつたわ。でも撮影所を見たらいやになつちやつた。」と云ふ。

「どうして？」と問ふと、

「あんまり穢いんですもの……」

よろしい。その通り、撮影所は、或はセルロイド加工工場は大變汚い。ダーク・ステーヂの中、グラスステーヂの中はいつでもこまかいほこりで一杯である。夏は日中百二十度にのぼるし、冬は寒風が思ふ存分に通りぬけて行く。健康に暮せるのが不思議である。

「あたし方針をまちがへたのぢやないかと思ふわ。あたし、女優なんかよしちまはうかと思ふけど今更ら、いくらまじめにして來たつて、誰も堅氣だとは思つて吳れないわね。」……健康をそこねた若い女優さんが、かうつぶやくのである。

夜になる。ダークステーヂの中だけ、紫色に明るく輝いて、その中からヂャヅのレコードの音がひゞいて來る。美しく着かざつた若い女や青年達の姿が見える。然し皆、華かに遊んでゐるのではない。夜つぴて大道具のにかわ臭い匂ひをかいで、強いライトで目をやられながらホコリを吸つて働いてゐるのである。色けなんか、どう致しまして。一本のフイルムの試寫がすむまで、監督も役者も、技師も助手も、「眠い。眠い。眠い。」である。

「てえつ！　好きでなくつちやオカシクッテ……そんな商賣なんか出來るかつてんだ！」――私は夕方助手が誰もゐない原の廣つぱで空に向つてかうどなり散らしてゐるのを見た事がある。

――どうも私のは「風景」でなくつて「人物」になりたがる。よし[illegible]

來た。風景だ。

所には一寸した沼の様なものがある。この沼は、いつだつたか、私の家で皆でお酒をのんだ時、すつかり愉快になつた大久保忠素氏が、五月と云ふのに、ドブドブと胸まで水につかりながら向う岸へ渡つてしまつた他には何のとりえもないのだが、それでもこんなのがあるためと見えて蚊だけは蒲田の名物である。——なにしろ四月から十月までなら蚊がゐるのだから普通の期節はづれに蚊を見たい人は蒲田にやつて來れば見られると云ふものだ。五月ともなれば木かげには蚊柱が立つ。六月ともなれば人にかみつく。蚊柱は風流なものださうであるが、我々の様に夜物を書いたりなどする人間には困つたものである。

たゞ街をはづれると原つばのあるのは有難い。シナリオが出來なくてクサクサした夕方などワイフや子供を連れて模型飛行機を飛ばしに行く。すると、誰か飛行機をとばしに來る。近所の中學生か、でなければ、やはりシナリオを書けなくて胸くそをわるくした蒲田のシナリオライターだ。

「とぶかい？」

「とぶよ！」

「シナリオは？」

「飛行機ほどはうまく行かない……」

で、夕方の空に小型の飛行機がとぶ。飛行機は巧に空中滑走をして着陸する。とりに駈け出す。

子供は手をたゝいて喜ぶ。我々も運動不足になりやすい體を原つば中かけめぐらせる。

風がないで、日が暮れる。原つばの向ふの牛原氏の家の庭に、春夏秋冬たつてゐる日の丸の旗（——『私の家ですか、すぐ分りますよ、日の丸のたつた家と云へば……』と云ふ目じるしだ）がその翼をやすめる。遠い向ふに、ちよつと頭だけ見えてゐる撮影所のグラストップに、紫色のライトがともる。——今日も夜間撮影があるのだ。

「さよなら！」

「小父さん！　あしたも飛行機とばさうよ」

「あいよ！」

『——皆が歸つた後からは、圓い大きなお月様——』——月があれば、子供の歌の通りにうまく行く。だが『小鳥が夢を見る頃は』我々はたいてい藝術品でない食料品を、原稿紙の上からこさえるためにペンを動かしてゐるだらう……etc……etc……

（終り）

無代進呈
無努力簡易禁煙法
煙草さへ癈めれば胃腸は强健、體重が二三貫目も增し不眠症神經衰弱等はケロリと治るが、仲々煙草は癈め難いものである。然るに今回東京市京橋區常盤町三、グランド社では無努力簡易の禁煙法を發見して無料で敎へるから希望者は雜誌名記入同社宛て申込むがよい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

水の旨味

衣笠豊

一

水は古代の人々に取つて最も神聖なものゝ一つであつた。

キリストはジヨルダン河に浴して神の力を得た。釋迦は叢葉に煌く露の光を眺めてこれある哉と微笑した。それと云ふのは釋迦がこの一滴の露に不老不死の力を認めたからであつた。世に云ふ梵語の阿伽陀がそれである。佛陀となつた後の彼の魂は彼に捧げる水、阿伽の影に存してゐるとは佛徒の深い信仰の中にある。我國の古事記の傳説には水に關する物語りが極めて多い。神式にて禊の語源は身滌の義であつて水に浴して身の汚穢を洗ひ清めるに由來するものであることは、如何に水を神聖視したものであるかゞ窺はれる。

古今東西を問はず、清らかな水は民族の尊い聖水となり、乾いた魂の潤となり、渇し飢ゑた身の甘露となつて幾千年來人間の生命を保つて來た。佛蘭西ルード市ラパカ町から程遠からぬマツサビイユの洞穴の奇蹟は、泉の力に依つて現はれてゐる。それは有名なローマカトリツク教で、今から凡そ百年前ベルナデツタと云ふ少女がこの洞穴に聖母マリヤを拜したことから、盡きぬ泉が流れるやうになつた。ルードの聖水はそれからはカトリツク教信者の憧れのものとなり、今尚ルードの町は聖水の神味に魂の法悦を感ずる巡禮者の群によつて充されてゐるのである。

吾が國古來の傳説として有名な養老瀧は、美濃の國養老山中にある養老の瀧の醴水であつた。

是等の水は何れも一種の傳説の水であり、迷信の水であるとは云へ、水が其地勢環境に依つて極めて神秘な力を示すことを物語るものである。古代人の生活には滾々として湧出する水邊こそ唯一の生の慰安所であり、數百千の生靈相倚つて命を繋ぐ彼等の文化の、源泉、生活の本據であらねばならなかつたのである。

二

水は有機體の生存上瞬時も缺くべからざるものであつて、齒牙琺瑯質の樣な堅い物質と雖、尚百分中二分の水を含み、更に人體の約七〇%は水分より成るものである。吾人の日常生活にとつて水は命の糧であつて、或る場合には藥用品となり、嗜好品となり又は回蘇藥となり得るのである。一般に水は其生因によつて雨水、泉水、井水、河水、湖水、海水、氷雪、鑛泉等に區別せられる。

文明は自然を征服すると云ふ點では、隠れ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

近く名所や舊蹟に止らず、地上の總ての美はしきものを亡ぼし、遂に吾人の味覺から水の旨味さを奪はふとしてゐる。

古代人が淙々として流るゝ清水を掬して、一日の勞苦の汗を忘れた斯樣な自然の水の旨味さは、現時の都會生活に於ては容易に味ひ得られなくなつた。人口が増加し地上の汚染の程度が増大されるに從つて、實に水は起病の根源と考へられ、上水設備の完成と云ふことが近代都市衛生上最も重要な事項として數へられるに到つた。

上水即ち水道水は、湖水とか河水とかを導いて種々の濾過裝置や沈澱劑を用ひて清澄ならしめ、導管を經て供給されるものであるから、到底自然の湧出水の樣な水の旨味さを保てない。又都會に住む兒童の齒牙は田園の夫れに比して一般に脆弱なのは、他の種々なる複雜した原因にも因るべきも、水道水は地下水に比して石灰等の無機鹽の含量が少いことも大いに關係するのであるとは、或齒科專門家の言であるが、誠に興味ある事であると思ふ。

三

地下水の汚染と云ふことは、人口集注の度合に從つて其排泄物の滲透によつて、種々の傳染病の媒介を營むものであつて、それには地面からの深さとか汚水溜や便所との距離、或は其地質、井戸の構造等に依つて影響せられるものであつて、近時に於ては其位置に對し適當な取締法が講ぜられ、衛生的考慮を拂つた所謂閉鎖式井戸と云ふ樣なものが、警視廳や各府縣衛生課あたりで盛んに指導奬勵してゐるのは、誠に悅ぶべきことである。往時にあつては水の良否を知るには單に本能的に之を判定したものである。徳川時代の釀造家は、其釀水の判斷に現今の樣な水質試驗に依つて行ふことが能きなかつたので、何れも釀造期に入ると經驗を積んだ老大家が集まつて、其年の水の味を檢べるのであるが、この時口に入れる前に必ず指で水溫を見て後、口に入れ直に吐出して後に殘つた水の癖を味はつて、其良否を檢查したと云ふやうな事が記錄に殘つてゐる。この樣な方法が外國でも行はれてゐた。

日本茶道の祖千利休は、この水の良否を知ることに一番苦心したと云ふことである。將軍に茶の湯の水を捧げたと云ふ御茶の水や、礒の清水、甘露水、神仙水、星谷の井等東京近傍には水に關する舊蹟が極めて多いのは、徳川中世紀に於ける茶道の隆盛を物語るものである。

茶道と水とは誠に深い關係がある。かの茶の湯の茶釜は外觀や體裁からばかりでなく、煮沸せしめた湯の味の點から土瓶では代用出來ない理由があり、そこにこそ一塊の釜に數萬金の價値を認められるのである。硝子製や銀製の器物は最も水の味を良くし、陶器は水の固有の味を低下せしめる。ラムネやサイダー類を茶碗で飲むと、硝子製コップで飲用するとでは、單に感じばかりでなく實質的に味に相違を來すものであると云はれてゐる。又茶道に於ては茶碗の種類に依つて、其風味に影響するものであると云ふことは古來傳へら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

るるところである。

傳說の水として有名なもの、假令ば弘法大師發見の靈水とか、或は神泉として神秘的偉効を傳へらるゝものが、偶然にも今日の原理に依つてラヂウムエマナチオンを含んでゐると云ふ事が明にされたものが少くない。我國の內地では岐阜縣高山の惠那郡鑛泉の如きは、其適例であつて滾々として湧出する淸水が、古來神靈水として神効を讚えられて居つたものが、約三百マツヘと云ふ多量のエマナチオンを含んでゐるものであると云ふことが明にされてゐる。又朝鮮でも靈水とか神泉とか、又は仙水等と稱してゐるものに斯樣な例が乏しくない。私が嘗て滿鮮地方を旅行し、李王宮殿內の祕園を拜觀し、其中に湧き出る淸麗玉の如き眞淸水を神泉と稱し李王妃兩殿下が御散策の折掬はせられたと云ふ、朝鮮特有の雅趣深い井桁を鍛め奇麗に取り圍んだ泉水がある。早速飲用して見ると、誠に美味しい水であつたがこの水にも多量のエマナチオンを含んでゐる[illegible]

た。

四

往昔にあつては專ら水の新陳、淸濁、臭味、水傷等の經驗から、其良否を判定したものである。而し乍ら今日では澄明、無味、無臭、必しも良水たるの標準とはならなくなつた。佳味、淡淸、無臭一目純良の如き水も、化學的或は細菌學的に良水たるを得ないことがある。汚水の浸入と云ふことは其產出物の特徵として、水中にアムモニア、硝酸、亞硝酸の如き含窒素物や、硫酸鹽及人畜の老廢物に伴ふ食鹽等が檢出されるのである。此等の成分は直接健康に害があると云ふよりは、寧ろ細菌的汚染の惡兆として排斥すべきものである。

良水の條件としては淸澄、無色、無臭及快味でなければならない。而し乍ら化學的に最も純粹とせらるゝ蒸溜水や、鹽類や、瓦斯類に乏しい煮水の如きは飲料水としての味を全く有してゐない。誠に炭酸や酸素及び二三の[illegible]であつ

て、水を鮮活にし水に快味を賦與するものである。吾人の味覺や嗅覺は稍化學的銳敏度を與へることがある。舌はよく八千分の一の硫酸鐵を明かに鐵氣として之を覺えしめ、鼻はよく五十萬分の一の硫化水素を識別することが能きる。又水の溫度は其旨味さに大きな影響を與へる、夫は勿論周圍の條件に依つて異るもので、水道水の如きは四季の外界の溫度に依つて支配せられるが、地下水は氣溫によつて左右せらるゝこと少く、地下十九―二十四米の深さに於ては、四季同一に保つものであるから、夏は冷凉に冬は溫暖に感ぜしめるものである。

五

渇しては一掬の水も千金の價がある。殊に激しき勞働の後、或は炎天下に味ふ水には筆舌に盡し難い旨味があるものである。實に無量の甘露の味とも云ふべきものであらふ。之は飲料水としての誠水であるが、之に炭酸瓦斯が多く含まれると益々淸凉の快味を賦與する。い[illegible]

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

匂ひ汗と垢に染り、疲勞しきつた體を一浴の後に、味ふ一杯の冷炭酸水の爽快味は又格別で、之によつて終日の苦勞を忘れ翌日の活動の源泉を促す樣にさへ思はれるのである。天然に地中より湧出する水の中には、この炭酸を多量に含んでゐるものがある。之を炭酸泉と稱する。此天然の炭酸泉や又は人工的に炭酸瓦斯を水に詰め込んで瓶詰としたものが、所謂炭酸水であつて、歐米では食卓水として賞用せらる。我國では砂糖水に適當な香料を配合して炭酸瓦斯を吸收せしめたサイダーやシトロンの類が愛飲せらるゝが、之は各國によつて食物の異なるが爲め、其嗜好を異にするものである。即ち印度や南洋等の熱帶地方では汗の蒸散が劇しいので、皮膚から鹽分の排泄せらるゝ量が多い、從つて食鹽等の鹽分を含んだ炭酸水が非常に旨味いとして賞讚せられる。斯の如く普通の飲料水の外の特種の水の旨味さは、夫々地理國情の異るに從つて一樣ではない。

地中より湧出する水には炭酸の外に、種々の無機鑛類や特種の瓦斯鑛や、稀有の成分を含有する所謂鑛泉がある。冷、溫によりて冷泉、溫泉の二つに區別せられる。此等の鑛泉は夫々特有の味を有して居り、或は飲用により浴用により、各々治療の效果を發揮して居る。この鑛泉の豐富なることでは日本は世界中屈指の天惠を受けた國である。秀麗玉の如き富士の靈峰や、峨々として聳ゆる白馬や鎗のアルプス連峰の千古不滅の氷雪は、夏の登山者の隨一の誘惑であり憧憬であらふ。そして、金明水や銀明水の靈味や、氷雪の快味は登山者のみが味ひ得る貴い體驗であらねばならぬ。

六

近世紀に於ける自然科學の發達は、あらゆる宇宙間の神秘境を開拓して行くことに努めて居る。かの白山の天然氷を早飛脚で將軍家に獻上することが、年々加州家の重大なる行事の一つであつたと云ふ樣な物語は、現に過去の笑草として葬られて仕舞つた。蒸熱の夏が來ればアムモニアと動力とによつて盛の

んに氷が製造せられて、我等に無限の涼味を供給するのである。

斯の如く水は造物主が人類に下した最も偉大な神秘的なものゝ一つである。發散しては蒸氣となり、雲霧となり、凝結しては雨、雪、霰、雹となりて地上に降り、地下水となり、泉となり、河川として流れ、湖沼として湛え、大海としては無限の偉大さを示し、千變萬化極りなく以て天地生物の永遠の生命を保育してゐる。

偉なる哉水、そして之を征服しようとする人類の野心と、努力と爭鬪とは、永遠に熄まないであらふ。

改造社編
大正大震火災誌
（四六倍判の大冊）
定價　拾五圓
送料　四十五錢

藝術の社會的地位について

（游歐雜記の序）

阿部次郎

平民文化がいい一般的社會的潮流として智識階級の魂にも亦浸潤して行つたことは、この時代の文献の隨所に發見することが出來る。柳澤淇園は云ふまでもなく、龜田鵬齋、中島棕隱、賴山陽等の通人に端唄の作とこれに相應する生活があつたことは周知の事實である。德川後期に於けるインテリゲンチアの藝術の二大立物なる池野大雅や田能村竹田にも亦この痕跡を認めることが出來る。大雅堂が「間居鼓二三絃一歌二古曲一、其妻玉瀾、彈レ箏和レ之」（續近世叢話）と傳へられるとき、この古曲は決して雅樂や催馬樂の類ではなかつたであらう。さうして田能村竹田にも亦「星火链」の端唄があり、而もこの端唄にかけて祇園のひさに贈へた手紙には、「今一度すいからの顔でおかほも見たし、御しるさみせんのいとを、ちよとはづして御もらひ申上度、あたらしきはどこにもあり、手なれたがほしし」（文政七年）といふやうな風流な、ものさへある。又伊藤喜市郎に與へた手紙のうちには「弟經二山陽一道一而入京、其間閱二女子一者數百人、豔レ才者數二于色一、飽色者飢二于才一、果有二才色双絕者一、不下啻視二萬黃金一如中一沙路上、捨二性命一而相從、亦所レ不レ辭也」と、心中さへしかねまじき勢を見せてゐるのである。（「田能村竹田全集」、書簡抄）併し此等の點にかいて彼等は受身である。社會に充つる一般的雰圍氣がおのづから彼等の心に薰染してその生活にこの一側面を作り出したのである。この受動的な關係を乘り越して、彼等が創造的に平民文藝に影響した點は如何なる方面に發見すべきであるか。

我はこの點に於いては、[illegible]

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

趣を涵養するに與つて力があつたことは元祿文學の三高峯西鶴芭蕉近松を通じて既に著しい現象であるが、それは德川時代の國學者の直接な功績ではなくて、國文學の傳統そのものの力である。季吟と芭蕉との關係と雖もこの例を洩れず、芭蕉の俳諧に季吟の創造的な力の參加を認めることは甚だむづかしい。後期に至つて國學の講說が平民文學の作者の文章に影響し、又一般に國學の教養によつて箔をつけんとする渇望乃至餓鬼病を作り出したことは、三馬や春水のやうな無學者の作物によつても察することが出來るが、それは一般に學問の普及に隨伴する現象であつて、新しき國學の勃興が平民文學に新しい出發點を與へるほど內部に沁み込んだ感化を持つことは出來なかつた。さうして一般の好學熱が俗文學者の文章や虛榮心に影響した點に於いても、國學の力は漢學のそれに劣るであらう。固より其處には石川雅望の「北里十二時」や萩原廣道の「あしの葉わけ」（藤井乙男氏「江戸文學研究」所載）のやうに雅馴な古ぶりによつて時様を穿つ文章もあるが、この古ぶりは內容そのものと必然的な繋がりを持たず、擬古は好奇者流の假裝であつて、此處から新しい潮流が生れ出る見込は全然ないものであつた。この方面で最も注目すべきは固より上田秋成の「雨月物語」であるが、これもその價値の骨髓は著者の把握の獨創性そのものであつて、當時の國學の創造的な影響から生れたものと見ることは出來ないであらう。私の見るところによれば、當時の國學者の事業のうち最も深刻に俗文學に影響し得る筈のものが一つあつた。それは本居宣長が「石上私淑言」や「源氏物語玉の小櫛」に說いたものゝあはれの文學論である。宣長の物のあはれの說は、田能村竹田の「山中人饒舌」、「葉のうらの記」、「瓶花論」などに於ける繪畫その他の風流の本質論と並んで、恐らく德川時代に於ける藝術論（藝術的自覺）の冠冕である。――「物語は、儒佛などの、したたかなる道のやうに、まよひをはなれて、さとりに入べきのりにもあらず、又國をも家をも、をさむべきをしへにもあらず、たゞよの中のものがたりなるがゆゑに、さるすぢの善惡の論は、しばらくさしおきて、さしもかゝはらず、たゞ物のあはれをしれるかたのよきを、とりたてゝよしとはしたる也、此こゝろばへを、物にたとへていはゞ、蓮をうゑてめでむとする人の、濁りてきたなくはあれども、泥水をたくはふるがごとし、物語に不義なる戀を書るも、そのにごれる泥を、めでゝにはあらず、物のあはれの花をさかせん料ぞかし」。「さて人は、何事にまれ、感ずべき事にあたりて、感ずべきこゝろをしりて、感ずるを、ものゝあはれを知るとはいふを、かならず感ずべき事にふれても、心うごかず感ずるとなきを、物のあはれしらずといひ、心なき人とはいふ也」。「ものゝあはれを見せむと作れる物語を、教誡にとりなすは、たとへば花を見んとて、植おふしたる櫻の木を、伐りくだきて、薪にしたらむがごとし、薪は一日もなくてはえあらず、せちなる物なれば、それわろきにはあらねど、薪には、よき木どもの、ほかにあまたあンなるに、あたら櫻をきりとらむは、中々に心なきしわざとぞいふべき」。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「……好色を書きたるを、たはふれと〻せるは、たがへり、上にかへすがへすいへるごとく、物のあはれをむねと書るものにて、そのあはれのふかきと、戀にまさるはなきが故に、そのすぢを、殊に多くむねとは書るもの也、されば戀する人の有さま情を書るさま、さらにたはふれにはあらざるほどあらはなる物を……」――この文學論のうちには、單に源氏物語を解すべき正しき立場を創設するのみならず、又彼と同時代の俗文學に自信と規矩とを同時に與ふべき原則的な力が籠つてゐる。確然としてこの立場を維持しつゝ、一方に俗文學の蔑視を排し、一方に俗文學の墮落を警告するところに、漸く邪路に深入りしつつある此等の文學を大道に引もどすべき、恐らくは唯一の活路があつた。併し「古ぶり」に心醉せる國學者の同情は不幸にして此處まで延びなかつた。同時に當時の俗文學は、西鶴や近松にもまだ豐かに漲へてゐた物のあはれから離れて、花よりは泥水そのものを愛し、戀を單にたはむれときめてしまふほどに汚れてしまつてゐた。さうして櫻を伐りて薪とする「儒者ごゝろ」の浸潤が更に二つのものの間を遠ける。かくてこの牽牛と織女とは、一點の雨に水嵩を增す天の河の流れに押し隔てられて、遂にそれ〲の異れる道を辿るのである。

これに對して漢學はもつと能動的に民衆の心に働きかけて行つた。それは一方に、專制時代に於いては極めて有力な官憲の力に支持さるるとともに、一方では濟世利民の信條が彼等の敎化活動にガソリンを提供したからである。是よりそれは文藝に對しても素讀を主として一謀動機として作用する、文藝の內部に浸潤する限りに於いては主として狹隘な倫理主義として作用する。併しその反面に文藝の墮落と共鳴すべき要素をもかくしてゐたことは、前に儒學と戀愛文化との關係を考察するに當つて、吾々が既に見て來たところである。この共鳴は平民文化が智識階級に浸潤する程度を增すと共に次第に表面にあらはれて來た。徂徠一派の古文辭學派がこの潮流に促されて起つて來た――といふやうな暴論を私はしようとするのではないが、漢學と文藝との接近が徂徠派の精神によつて促進されたことは認めてもよいであらう。作詩其他の風流が學者の重視するところとなつた、經世の見識が修身齊家以上に置かるるところに、時代の淫蕩がこれに乘じて侵入すべき罅隙が開かれた。さうして善惡兩樣の意味に於ける兩者の歩み寄りが、漢學者をして平民文藝の歷史に一つの積極的な役目を演ぜしむべき素地を作つた。私が玆で云はうとするのは、讀本と洒落本との發生である。

讀本のことは次の節で云はう。洒落本の濫觴が漢學書生の手で作られたらしいことは、寶曆七年東西年を等しくして出版された「異素六帖」と「聖遊廓」とを一讀すれば明かであると云つてよからう。洒落本の起源はこの二者よりもつと遡らなければならぬやうであるが（藤井乙男氏、「江戸文學研究」江戸後期の京阪小說家參照）それ等のものも皆漢學書生の手になつてゐるらしいから、題目の便宜に從つて此處に「異素六帖」と「聖遊廓」とから出發しても、大體に於いて

雰氣を生ずるやうなことはあるまい。――前者は未だ洒落本の體をなすとも云へぬ穿ちの集のやうなものであるが、それが遊廓の穴と簡單な唐詩と百人一首の下句との鼎立に數行の短註を加へた體裁になつてゐるのは、如何にも放蕩書生のすさびらしく思はれる。一例を擧げれば――

いやな客にうけられし女郎
只有二此山中一
雲深不レ知レ處
むかしはものを思はざりけり

雲深してとは、いはゆる有頂天之下、暗雲覆といふがごとく也、

といふやうなものである。これに對して大阪の「聖遊郞」はもつと複雜な筋立を持ち、その會話本位の筆の運びも既に立派に洒落本の體をなしてゐる。新町揚屋の亭主は李白、女房は瀧、其處に孔子大盡、合方大道太夫、老子大盡、合方大空太夫、釋迦大盡、合方假世太夫が落合つて、最後に釋迦と假世太夫との「道行昧背の送火」となるのである。それが相應に學德ある者の筆になつたことは、鬪人物に、韓退子と彭子孟東野、東坡と合方舞臺子李節推などが出て來ることでもわかるであらう。その問答の一例を示せば次のやうなものである――

▲孔子、玄子これへ〳〵、なんとしてうら口からおいでぞ、▲老子、イヤ藏の間の切戸があいてあつた故、是はさいわいの道があると、裏から仕かけたれば、こゝの久助めが、くらがりから牛の出たやうなと、おれを牛にしおつた、人我を牛といふ時は、我に牛の性ある事を知ると、腹をたてぬぞ一德なり、

さうしてこれを天明四年に歿した井上金峨の「病間長語」の一節と照合すれは、漢學者の中からこの種の文學に先鞭をつける者が生れることは決して不思議ではないのである――「今時一種の講說の聽むべきあるは、唐詩明文など講ずるに、玄宗は梅幸、貴妃は路考、敬美は五郞などとて、泣く所は泣聲、恨む所は恨む態にて、黃色な聲に成りて、辰巳あがりにさはぎ立て、聞くものを笑はせ、頤を解くと覺へて居るものあり、甚しきは經を講ずるに、聖人の言を侮り、顏子は孔子の龍陽にてもあるらんなどゝ、出でまかせに出來口に云ふ斯の道の賊あるなり」。孔子が既に顏回といふ若衆を持つ以上、更に李白の揚屋に大道太夫と馴染んで、女若兩道に名を馳することは、何の不思議もないと云はなければならぬ。さうして一方に「今の古文辭家は、太く達に過て、幇間にひとし」と慷慨した金峨其人が「その士たるとを全くせんには各その能くし得たる所を人に施して、一日の資給するとを得んより外はなし、その業は傭書賣藥賣文賣講も皆なすべきのとなり、士の失意は何の恥るとかあらん」といふ自信によつて、自ら賣講の先驅とならなければならなかつたことを思へば、漢學者の社會的位置も亦變じたりといふべきである。さうして此間から洒落本の作られて來たのである。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

洒落本は浮世草子の世界を更に遙かに縮小する。浮世草子の卷を刻んで章となし、その章の中に疊まれた一つの戀の本末の中から一日を截り放し、その一日のうちを更に又數刻に限つて其處に描寫の腰をすゑることを原則とするのである。この世界に登場する者は大抵幾組かの遊女と遊客である。その組の編成は男女二人づゝ平行にならべられるのもあるが、遊女一人に二人以上の客を落合はせる所謂「差合」の動機が、興味ある組合せとして屢々愛用される。組合せに際して作者の構想を支配する原理は、遊客の粹と不粹と、通と半可と、もてる者とふられる者と、遊女の手管と手なしなどの對照である。多くの作者はこの組合せを通して自己の通を見せ、遊客と遊女との穴を穿ち、直接には自己の優越を味ひ、間接には讀者に通と半可通との區別を示して遊び方の指南を與へむと試みる。此處で主眼に置かれるものは、最早戀の陶醉を準備することではない——從つて最早西鶴や八文字屋物の意味した粹ではない。それは寧ろ通である、事情に通じて對手に對する活殺の機を握る者の優越感である。遊客と遊女との應酬は時としてまるで熊公八公の喧嘩の如く、無慘に對手を蹂躙することを通人の役目と心得てゐるかの如くである。固よりかういふ手合ひは作者の笞刑を受け、口かず少きおとなしさが遊女の歡迎を受けるものとして推奬されるが、作者自身の立場が決してこのやうなおとなしさや粹にあるのではない。彼等の主なる興味は寧ろこの半可通の醜態を暴露するとこうにあつて、[illegible]ゐたのではないかと思はれるふのさへ頗る多いのである。半可通の嗤たれる所以は、彼が未だ通として徹してゐない點にあつて、戀愛の滋味を深解する粹のいたりを知らぬところにあるとは云ひ難い。今や遊里に於ける男女の關係は純粹な戀愛以外の立場から、鋭き機智若くはおのづからなる滑稽を以て照し出される。好色は物の哀れの深さをあらはすものとしてではなく、原則的に云へば完全にたはむれとして取扱はれるやうになつたのである。

此處には寶曆明和頃から以後にかけての新時代の戀の一面がある。私が敢て一面といふのは、それが時を同じくして行はれた豐後節や新内節の、狹く深く跂つて行く戀愛の姿によつて補足されなければならぬからである。兩者相俟つて元祿以前の豐かな大盡の戀が既に過去のものとなつたことを示すものであるが、それが新しい時代の新しい戀の樣相を見せるものとして徵候的價値を持つてゐることは、洒落本の方が浮世草子に優つてゐるであらう。それは一つには戀の新樣相が決然として此處にあらはれるやうになつたためであるが、洒落本に於ける取扱ひの方法も亦この價値を增加する一つの理由となつてゐると云はなければならぬ。描寫の範圍が狹く限定されると共に、選び出されたる斷面の描寫は却て精緻を加へる。當時の遊里に於ける言語風俗から遊女遊客の心理にいたるまで、此處には浮世草子よりももつと緻密な歷史的材料が提供されてゐるのである。

[illegible]

して闡明せむとする動機が會話を主として地の文を副とする劇的構成をとらせたのは、少くとも小說の範圍に於いては新しい形態である。それが演劇の臺本や後期の寫實的淨瑠璃の中に先蹤を持つてゐることは云ふまでもないが、脚色の山や局面の緊張を賦はずにたゞその場面の精到な寫實に踏とゞまつてゐるところは、純粹に小說の範圍に於ける一つの事業と見なければならぬ。洒落本のこの形態が、三馬の「浮世風呂」、「浮世床」のやうな寫實文學や、地の文の間に多くの會話を挿入する人情本のやうな文學的形態を可能にした。洒落本の先蹤がなければかういふ文學の出現は不可能であつたであらう。さうしてそれは、西洋文學の形態の影響と並んで、恐らく明治前期の小說の形態を決定する一つの原因となつてゐるのである。

併し洒落本の創造的意義は單に形態の問題にのみとゞまらない。それは、善にせよ惡にせよ、兎に角一つの精神を表現する。その精神とは戀愛を突放して滑稽的觀照の下に置くことである。其處には氣障な、通人ぶつた態度の鼻持のならぬものもあるが、その底に滑稽的觀照の獨立が準備されてゐることは、爭ひ難いであらう。この點に於いても、西鶴の作品や前期の笑話などといふ先蹤があることは云ふまでもないが、戀を笑ふことが獨立の文學となる趣は、漸く此處に熟して來たのである。この點に於いて、洒落本は、德川後期に於ける最も注目に價する短詩川柳の精神と連繫する。「毋が名は父のかひなにしなびてゐ」——かういふ觀照の態度も亦新しい創造にちがひないのである。固よりこの觀照の態度は、洒落本に於いては多くの不純なものを含んでゐる——自惚とかさ氣とが其處に稍多分の「甘味」を見せてゐることは確かに事實である。この態度の垢ぬけしてゐる點に於いて、それは遠く川柳の優れたものに及ばないであらう。併し洒落本も亦この精神を分有してゐる以上、この意味に於ける創造性は此處にも當然に許されなければならぬ。

私は更に他の點に於いても洒落本と川柳との精神の連繫を見る。「腰帶をしめると腰が生きて來る」——これは滑稽を離れて川柳が描いた女繪である。この句が清長の川柳畫の主題に採用されたことは當然であるが、少しく注意して川柳を讀むものは、人間の姿態の微動が獨立の興味を以て取扱はれてゐる意外に多數の句を發見するであらう。このことは又洒落本についても云ふことが出來る。この寫實的精神あればこそ、それは單に形態のみならずその精神に於いても、三馬等の浮世文學の先驅をなすことが出來たのである。さうしてもう一つ、「死にきつて嬉しさうなる顏二つ」——川柳は又かういふ溫かな同情を戀に寄せる方面をも持つてゐた、それは「頂いてゐても飽きのない、大事の〱男の名でも、いれぼくろには樣つけず、腕にしみこむ藍あがり」の美しさを老いの澁苦茶の中に葬り去る皮肉屋だけではなかつた。さうして洒落本の上乘なるものも亦人間的な溫かさをこの點に見せてゐるのである。私はこの意味の長處を特に、吉原や深川以外の遊里を取扱つたもののうちに發見する。吉原は「どの通人も癖があ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つて、大方アりきみがあるよ」（梨白散人、「喜夜來大根」）の世界、深川は又「いろ男にかえても金にかへても、子どもどうしのたてひきを、おもにするところさ」（京傳、「玄契三娼」）の國、もつとおちぶれた、もつとたてひきもりきみもない下等の遊里が、可憐な滑稽を遊ばすべきもつとふさはしい場處であつたのであらう。山手馬鹿人（太田南畝）の「世話新語茶」のうち、上野山下、谷中いろは、及び音羽の賣女を描ける部分、奈蒔野馬鹿人（志水燕十）の山下のケコロを描ける「山下珍作」などに、忘れ難きあはれな滑稽を見る者は、恐らく私ばかりではないであらう。

人は山東京傳を洒落本の天才と呼ぶ。さうして私自身も亦これに同意したいと思ふ。それは洒落本の三つの創造的意義が彼の中に温藉な綜合を見出してゐるからである。穿ちも寫實も同情も彼の作品のうちには適度に配合されてゐるからである。これを疑ふ人は「傾城買四十八手」について、しつぽりとした手の發端から、やすい手、見ぬかれた手、そはそはした手の間奏とスケルツオを通つて、最後の眞の手の、野暮に歸つた戀と遊里の悲劇のあはれとを聞いて見るがよい。彼が他の作者のやうに通がらないのは、遊里が彼の呼吸する雰圍氣になつてゐるからである。廓内に戀人を持つてゐて、十年の年期のあくのを待つてこれを家妻とした彼は、彼が「眞の手」の中に書き込んだやうな醜態を自分でもしたことがあるのであらう。彼女を引とつてからその名に因んで家を[illegible]亭と名づけ、その扁額の下に三角紙をはりつけたやうな鼻恰好の自分の姿を、自著の黄表紙（「世上洒落見圖」）の中に描き込んだ彼である。しつぽりしたところ、野暮に歸つたところに自分の立場をすゑて、安らかな寫實の筆を進めて行く彼の作品は、恐らく洒落本の中で最もしんみりしたものであらう。

併し如何にその中に創造的意義があることを許しても、洒落本の洒落は固より人生の大道ではない。それは一般社會の中を動いて行く大きな機運と孤立して、通人同士の狭い殼の中に、榮螺のやうにくるり〳〵と卷き込んで行くか、若くは――一般社會がこの洒落の風潮の中に無反省に漂つて行く場合には――社會を狭い螺道に誘惑する魔物である。この點に於いて洒落本のもう一つの盟友となつたものは「金々先生榮華夢」（戀川春町畫作、安永四年刊）以後の黄表紙であるが、寛政二年好色本が一般に官禁に逢つた翌年、同じ京傳の「世上洒落見圖」に洒落に對する反省のやうなものが總括的にあらはされてゐるのは興味ある現象である。萬事にねり過ぎ洒落過ぎた世を材料に黄表紙の案をたてゝ中卷まで筆を運んだところに、天帝が作者の京傳をおとづれる。天帝は彼を導いて洒落の化石した者の間に案内する。「太郎どんのいろと、太郎どんのいろと、みんな洒落て仕舞つた」。「中でもいつちよく洒落て居るのが、通人と女郎の洒落たのぢや、何とそれとは見えまい、からでもない、あゝでもないと段々洒落々々して遂にはこんな分らぬものになる」。「たとへば海にある貝殼の洒落るやうなもので、はじめはさゞえや鰒の貝なれども、からでもない、あゝでもな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いといふ潮にもまれ、浪に打たれて、遂には何だか分らぬ形になつて、がら〳〵一文にほかならぬ、人の事ばかりでもない、草雙紙などもあまり洒落ると本意を失ふ、汝はしやれぬと思へど、それ見ろと天帝の天眼の鏡にて見せ給へば、京傳がからだも段々洒落て來て、遂に朽木のやうになる」。「天帝つらつら思ひ給ふは、これはつまらぬものぢや、何でもこのしやれた手合を元の通りの人間にせずばなるまいと、造化の神を集めて御相談のところへ、大千世界の切幕から暫く暫くと聲を掛けて搖ぎ出でしは……」「當時繁昌北郭青樓意氣八荒天地てんつんの音播に浮れ出でたる大通佛」、その彌勒菩薩の力によつて遂に洒落のない世に歸つたといふのである。

　これは固より全體として一つの洒落である。併し少くとも惡洒落に飽きたといふ點に於いてそれは眞面目な意味を持つてゐる。其處にはもつと大きい、幅の廣いものに對する要求が隱されてゐるのである。

阿部次郎著
學藝論鈔　定價貳圓廿錢　送料廿錢
○若きゴーホ　○ゴーホの藝術　○フーゴー・ヲルフの傳　○晩年のロダン　○美の問題について等
北郊雜記　定價壹圓九十錢　送料拾八錢
○北郊雜記（十三項）○思潮雜記（廿五項）○雜纂十一項）

高野辰之著
日本演劇の研究　定價四圓　送料卅錢
日本演劇の研究、第二集）　定價五圓　送料卅錢
（內容）前編歌舞伎以前。後編歌舞伎以後

發行所　改造社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

無産黨と濱口内閣

現下の政局と我等の態度

鈴木文治

未曾有の國民的不人氣と、天下の指彈の的であつた田中反動内閣は遂に内部的崩壞の突發に依つて敢へなき最後を遂げた。満身の創痍にも拘はらず、飽くまで政權に囓り付かんとした田中内閣が、その成立の當初から大重要政策として標榜し來たつた所謂對支積極政策の間に發生した某重大事件のために遂に没落したことは、また當然の因果應報と云ふべきであらう。

田中内閣の頓死に對して天下一掬の涙を濺がんとするものもないのは、その二ヶ年の執政が勤勞國民の生活利益を蹂躙する反動政治に終始し、一部特權階級の專恣横暴を限りなく増長せしめたからである。之に代つて成立した民政黨内閣は、自由主義を標榜する政黨であるが故に、政友會内閣に比して進歩的な印象を國民に與へてゐる。如何にも民政黨内閣は政友會内閣の如き露骨なる利權政治は行はないであらうか、しかし實質的にどれだけの相違があるかは甚だ疑問である。民政黨も政友會と同樣に有産階級の支持に依つて立つ政黨に外ならないからである。

最近の民政黨を見る時に、二十世紀初頭以來の英國自由黨の歴史を想起せざるを得ない。かのロイド・ジョージは勞働黨の擡頭を抑壓せんとして進歩的政策を採用し、幾多の社會立法に依つて勞働階級の歡心を買はんとした。殊に歐洲大戰に際して勞働階級の協力に依つて赫赫たる戰勝を收めながら、平和恢復後に於ては勞働階級に對する公約を蹂躪して資本家の代辯者たる本色を暴露し、一擧に國民の信望を失墜して今日の悲境に陷つたのである。わが民政黨もまた自由主義を標榜して社會政策の實現を公約して居る。我々は民政黨内閣が果してこの公約に忠實であるか否かを嚴重に監視せんとするものである。先づ第一にあらゆる社會立法の基礎的要件であるところの、勞働組合法及び小作法に對する民政黨内閣の態度は、その眞價の試金石となるものである。勞働者の自由なる團結を公認し、農民の耕作權を保護することはいやしくも民衆政治を標榜するものが、その完全なる實現を遲延することは如何なる遁辭を以てするも斷じて許されないのである。民

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政黨內閣が果してその公約に忠實であるか、或はまたロイド・ジョージの如く欺瞞的口吻を弄して遂に有産階級の代辯者である事を暴露するか否かを我々は直ちに天下に明らかにしたいと考へる。

この意味に於て濱口內閣は宜しく臨時議會を直ちに召集してその政綱を國民の前に明らかにし、總選擧に依つて國民の信任を問ふべきであると信ずる。今朝發表せられた濱口內閣の十大政綱聲明書なるものは言辭概ね抽象的であつて、何等具體的計畫と見るべきものは無い。我々はかゝる一片の聲明書に依つて到底滿足することは出來ないのであつて、宜しく民政黨內閣はその標榜する立憲的行動を實際に且つ遲滯なく履行すべきである。

政局不安定

淺原健三

田中政友會內閣が霖雨に腐つたツヽジの花の如く醜く自滅するを待つて、濱口民政黨內閣が仕掛花火の如く急速に、賑々しく出現した。田中內閣の崩壞が脆きに過ぎ、反動的に、異常な好評裡に濱口內閣を迎へさせた。田中の敗退は愉快でないこともないが、同時に、我等には濱口の出馬を歡迎すべき所緣もない。

濱口が田中に代つても、我等の鬪爭機畧に變改はあり得ない。彼も是も帝國主義ブルジョアジーのヽヽたる本質に變りがないといふ規定は、餘りに簡單な書生論だと謂つても、兩者の差異は僅かばかりの形の相違で、質の相違でないことは餘りに明瞭だ。規定は主觀からでないが故にどう改めやうもない。

論者は政友會を英國の保守黨と觀、民政黨を自由黨と見て彼此對照する。保守と云ひ自由と謂ふも現時の政治では本質の差異を現はさない。外容の差異だ。政友會——田中、小川、久原、鈴木等々の一聯の人々の率いる政友會はボルドウイン、チエンバレン、チヤーチル等の保守黨でなく、ファシストだ。彼はファッショの軌道に乘つた、微力なるムッソリーニだ。

民政黨は「議會中心主義」であり、「對支內爭不干渉主義」等であるが故に自由黨と見るは當らぬ。ボルドウインは彼等の先驅だ。民政黨の脚地は反動化せる金融資本家。濱口、安達、江木等々の此の內閣は自由黨內閣でなくて生粹の保守黨內閣だ。濱口は所詮ロイド・ジョージではない。

ファシストから保守黨へとは云へ、反動資本家から反動資本家へだ。日本に自由黨はない。自由主義が双葉のうちに萎びた日本に自由黨は有り得ないと云ふ規定は古いが眞實だ。僅少其の要素を持つた實業同志會も革新黨も滅却した。だから、我等の對策は對自由黨のそれでなくて對保守黨のそれである。反動化せる金融資本家獨裁への抗爭だ。

「打倒資本家地主の內閣」は田中、濱口何れにも同義的に妥當である。

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

濱口内閣の第一使命は「財界の救濟」だと謂ふ。田中は「財界安定」の題目で昭和金融恐慌の後始末、其他に於て、勇敢に金融資本家に奉仕したが、傳統的の、然し時代錯誤の積極的財政・經濟政策――繁榮政策と金解禁策との矛盾衝突とのために竦みあがり、資本階級に愛相をつかされて野垂れ死んだ。

濱口は金解禁、緊縮政策を實行して金融資本家に奉仕することに依て其の存在を意義づけやうとして居るが、「緊縮」は譫言だ。軍事費と恩給と利權的土木費の半減は逆立してもできない。、、、も中小商工業者の衰頽と無産民衆の生活苦、失業難の對症療法でさへあり得ない。濱口の財政・經濟策にも矛盾が胎まれて居る。それは發展する。この矛盾が濱口内閣倒壞の機緣となる。

英國の保守黨内閣は既得權益保護のための出兵政策を中途で放棄して英支親善策に轉換した。加藤・若槻内閣も其轍を蹈み、所謂幣原外交――内爭不干渉、日支親善を標榜したが、英國よりもより熱心に既得權益――軍事帝國主義の成果を擁護せざるを得ない日本の支配階級――金融資本家、紡績資本家、樞密院、、、等々はジンゴイズム――當然の武力外交に未練を持つが故に若槻を追放して田中大將を起用した。

だが、二十一個條問題、山東・膠州灣の占領、シベリヤ出兵等の、近年日本の蹉跌と失敗と幻滅との連續劇たる對支武力外交は田中の強硬政策の失敗が恐らく最後の實驗となつた。田中は滿洲事件といふ最も露骨なジンゴイズムの破綻を機因として對支外交失敗の故に放逐せられ、濱口内閣は幣原外交の再建を以て第二の使命として生れた。

然し、「日支兩國は相互平等を原則とし、日本は主義として關稅自主權を認め治外法權の撤廢を承認する」といふ立前の對支外交の途上には幾多の難關が横たわつてゐる、金融資本家の御機嫌も損せず、支那の要求をも相當に容れて行かうとする幣原外交には幾多の技術的難題が伴ふ。此所に濱口内閣の暗礁がある。

資本家階級の自己救濟――政治的搾取と對支帝國主義外交の破局で田中が倒れたは必然だ、濱口も亦是等帝國主義の孕む矛盾のために苦惱し、足掻き、遂に田中よりも短命で倒れる。彼等は口を開けば「政局の安定」を叫ぶが帝國主義の矛盾が深まり行く政局に安定は有り得ない。政局不安定が常態だ。其所に亦ファッシスト田中の躍動する脚地が生成する。

田中の倒壞は政策の行詰でなく、手續上の些々たる過誤のために躓いたのだと謂ふ。さうだ。帝國主義ブルジョアジーの政策に變更はない。濱口は田中に代り、手續を多少改めて帝國主義の遂行、その破綻の防止に努力する。が、その脚地は同一だ。如何なる彼等の手續もこの帝國主義の内藏する矛盾を克服することはできない。そのうち、濱口も末期肺結核で恐ろしく氣短かになつた帝國主義ブルジョアジーの猜疑で倒れる。

社會運動――プロレタリアートの解放運動に對する彈壓だ、田中と

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

濱口とで緩急を異にすると思惟すべき何の根據もない。政友會より進歩的で、野蠻でないと受取るべき理由はない。社會立法、社會施設で無産民衆を僞妄し籠絡し去る危險に警戒せよと云ふは當らない。よし濱口が如何に「社會政策的」であらうとも、日本のブルジョアジーは自己の安定――自己救濟に餘りに多忙だ。無産民衆の脅迫、從つて、、の緩和策を講ずるには餘りに反動化してゐる。百パーセントの攻勢だ。

　政局の安定はブルジョアジーの安定だ。不安定、混沌、紛亂、そこに我等の進出する間隙がある。故に我等は或者の主張と反對の立場から即時の衆議院の解散を需める。政友會は臨時議會を開いて解散しろと云ふが、召集も解散もしないと見越しての臆病犬の遠吠へに過ぎない。臨時議會はいらぬ。通常議會を待つは無用、即時解散を要求する。

　然し民政黨は極力解散を廻避する。政友會亦然り、彼等は表面を糊塗しつゝ、巧妙に、卑怯に此の共通の難波を乘りきるべく策謀する。我等は極力政友會を煽動して民政黨に吠えつかせねばならぬ。臆病犬も段々吠えてゐるうちに嚙みつかねばならなくなる。卑怯者もセッパ詰れば刀を拔く。二つのブル政黨の正面衝突――解散への途を促進すること、此の他に我等の直近の仕事はない。（七、八）

濱口內閣出現の意義

龜井貫一郎

田中內閣との比較的の意味に於て濱口內閣の出現は歡迎されぬでもない。だが孰れにしても其の本質は有産階級に依據するものである事には間違はない。一番困るのは民政黨內閣が多分に持ち合せて居る處の舊式財政學の觀念であつて、社會政策が「國家が國家の爲めに行ふ處の經濟政策であり」、夫れは一方に於て勞働力を高め他方に於て日本の全社會的購買力を高むる處のものであるとの理解にだに到達し得るか甚だ疑問であり、緊縮の名の下に社會政策すら之を延期するのではあるまいかと見られる。眞に民衆本位に考へられた兩稅委讓の方が未だましだと云ふことになつては甚だ更迭の意味なしと云はねばならない。金解禁の如きも舊平價解禁では、勤勞階級の蒙る打擊は、夫れが成功的に行はれても又緊縮が思ふ樣に行かないで不成功的に行はれる場合は尙更、大なりと信ぜられる。豫ねて公約の消費稅整理も行はれまいとなつては、有産階級課稅、例へば綜合課稅の完成、所得稅相續稅の稅率改正、其の他の財産稅の創設の如きは希望する丈無駄であらう。

　勞働立法も施設に費用を要すと云ふ點で期待しない方がいゝのであ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らう。只多少考へ得らるゝのは宇垣陸相の國軍軍制の整理と幣原外相の對支外交である。軍制整理こそ多くの期待はかけられないが多少なりとも行ひ得られれば夫れ丈けの進歩である。對支關税改訂は幣原外相も前回佐分利關税會議で成案を得て置きながら大阪對支投資通商資本家の反對に會して之を斷行しなかつた様なことは、近頃の情勢上許さる可きことでないから、比較的多くを期待し得るものである。支那國民の國家建設の事業を助け支那全土購買力の發展に日本の對支經濟關係の基礎を置かんとする限りに於て正しい。只對支企業殊に利權企業の利潤が一方一部資本家に落ちずして、我國國民の個人所得の増加に振向けられ、又は其の負擔の輕減となる様な條件の下に、他方利權許與國たる支那民衆にも其の利潤が分配さるゝ様な條件の下に、對支企業――主として鐵道、電車、鑛山、採木、土木、電燈、瓦斯、水道――を整理しなければ其の經濟關係の永遠性が確保されないことは豫め警告しなければならない。又日本が支那に對して讓り得る限度を豫め公表することは、交渉上後日の紛糾を避け公明な外交の端緒を開くものであることを附加し度い。乍併之等のことは政策論的立場の上から論ずるもので、概觀して好望を有しないのみならず、民政黨の有產階級的本質上、期待する方に無理があるのであるが、何よりも濱口内閣に期待して理論上は差支ないことは、財政的失費なくして行ひ得るブルジョワ・デモクラシイ確立に向つての方途である。言論集會結社の自由、選擧法の改正、知事公選、司法權又檢察行政の獨立の爲め不取敢檢事總長と司法大臣との關係の改正等々である。

だが、其の本質的任務は憲政の常道の確立に關する措置であつて、私は少く共、之を以て濱口内閣の根本批判をし度いと考へて居る。衆議院の民衆的質量を擴充すること其の一であり、かくして得られる衆議院を政治運用上尊重する慣習不變法を確立すること第二である。

田中内閣崩壞の意義は取りも直さず民政黨内閣出現の意義であると云はねばならない。然らば田中内閣は何故に倒れたか？其の急激なる崩壞は何を意味するか？、、？、、、、、、、、、。、、、、、、、、、、、、。國家正義を確立せよと云ふ西園寺公に促がされて滿洲某重大事件の内奏をしながら後に於て同事件に關し又内容の違つた内容を爲し、警備上の責任は軍部に負はして自ら政治的責任を免れんとした様な首相は居なかつたか？

機微の情報に接して居た岡田海軍大臣は翌日の閣議で總辭職の話があるものと思つて列席したが改造の話許りで誰れかの呑氣さに驚ろいたとも傳へられる。内閣の決定による某重大事件の處置奏上に白川陸相が參内した。閣員は退散した。白川陸相が蒼白な顔をして田中を訪ふた。田中は侍從長に招かれて往訪したが、其の足で西園寺公を尋ね

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て總辭職の決意の報告だけをしたと云ふ。西園寺邸から電話をかけ臨時閣議を召集したと傳へられる。其の閣議で田中が既定の事實として總辭職を發表して閣員は只茫然としたとのことである。之等は何を意味するか？、、、、、、、、、、、、、政治思想を有するものは反つて自らが、、、、になつて專恣を行ふ傾向があると言ふ事實である。之は我國體に於て又立憲政治の下に於て致す可からざることである。政友會は自らの思想の故に自らを縊したに過ぎない。政友會がこの政變を以て毒殺なりと云はば夫れは斷じて許し得可きことでない。かゝるが故に民政黨が今日の政構の意義を明にせんとするならば、臣民が斷じて專制政治思想を抱くことを許さざるにある。大權事項は、陛下御親らの勅令に依らずんば、斷じて臣僚の專恣の代行することを許されない。即ち憲法上責任政治とせられざる事項に關しても、一種の公明なる責任制度を部分的に運用する慣行を作らねばならない。一切の封建的絕對的專制的殘存的に對する立憲的鬪爭である。之を最上限度に於てだも爲し得ぬならば、國民は民政黨よ左樣ならを我等と共に高く更めて叫ぶであらう。

また打倒すべし

水谷長三郎

勞農無產大衆に對する苛借なき搾取と、狂暴極りなき彈壓に終始し來りし田中反動內閣は、全勞農無產大衆の嵐の如き反抗と憤激との裡に、遂にその醜き殘骸を橫へた。

之れに代りし濱口××內閣は、田中內閣に對する憤激の反動として一般には好感を以て迎へられつゝある如くではあるが、我等無產階級にとつては、濱口民政內閣も亦、田中政友內閣と共に、大資本家地主の政府たる點に於ては、本質的に寸毫も變りはない。

見よ。無產階級彈壓最惡法、治安維持を制定し、その最初の適用を强制したるは何人であつたか。又暴力行爲處罰法を制定し、無產階級に大鐵槌を加へんとしたのも、民政黨內閣の前身ではなかつたか。さらに見よ。我國無產政黨の元祖なる農民勞働黨を僅か三時間にて絞殺したのは何人であつたか。——此等一連の過去の事實を聯想すると き、其處に、田中反動內閣と濱口民政內閣との間に、無產階級運動に對するところの、立法政策に就いて、果た又警察行政に於いて、何等の差別をも見出し得ない。

又、豫算の方面を見よ。口に積極、消極と爭つてはゐるが、その差は僅々一、二千萬圓を出ず、共に總豫算額は、十七、八億圓に及んでゐる。しかし其の半數に近き巨額は×××に充當され、やがて×××××××××××××××××、××××××、兩者ともく共の軌を一にする。若し其れ無產階級生活向上の點に至つては、かつて濱口總裁が大藏大臣のとき、社會政策的!? 稅制整理を斷行して、反つ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て無產階級の負擔を增加したる點は、田中反動內閣が、社會政策を呼號しつゝ、その額、全豫算の僅かに八百八十分の一を計上し、社會政策には、精神的社會政策ありと、望月人情大臣をして、叫ばしめたるところと、不思議にも、而して又當然にも、相一致してゐる。

さらにまた、われ〳〵は、對支外交方面に於いて、兩內閣の間に何等かの差別を見出し得るだらうか。なる程、幣原外交は、田中サーベル外交に比して軟弱外交と呼ばれてゐる。だが、われ〳〵の忘れてならない點は、幣原外交の働き場所は、我國帝國主義の利害關係が、イギリス帝國主義の利害關係に比して、あまりにも稀薄なる揚子江沿岸に限られてゐたことである、若しそれ幣原外交にしても、その働き場所を我國帝國主義の對象地たる××の地に於いて見出さんか、必ずや田中サーベル外交の如き態度に出づるであらうことは、去年八月、民政黨が對支外交に關して發せし聲明書を見ても明かである。資本主義經濟の最後の段階たる帝國主義時代に於ける、列强國の外交方針が、其の植民地に對する態度は、內閣の異なるにつれて異なると云ふことは斷じてあり得ない。我等は幣原外交に於いて、例へ滿洲の某重大事件の如きものに遭遇しないにしても、かつての幣原外交と異りて、その態樣を、田中サーベル外交に接近せしめるであらうことは、火を見るよりも明かである。

斯く觀じ來るとき、我等は濱口內閣に對して何らの期待をも持たない。昨日までは、田中反動內閣打倒の一助として、自己の階級的立場を嚴守しつゝ、民政黨と提携し來りし我々は、今は斷乎として彼等と戰ふ熱意に燃えてゐる。

我等が要求するところの、

暴壓政治絕對反對
言論集會出版結社の完全なる自由
勞働者に食と仕事を與へよ
働く農民に土地を保證せよ
全民衆に生活の安定を與へよ
、、、、、、、、、、

等々の要求は、田中反動政府のサーベルと泥靴の下に徹底的に蹂躪し去られしやうに、新しき民政黨內閣に於いても、同じ血みどろの暴壓を以て報いられるであらう。

斯くて我等の要求するところは、我等の政府に依つてのみ、はじめて實現し得ることを知るが故に、我等は、勞農無產大衆の利害を忠實に代表する、我等の政府樹立の日まで、我等は一切の大資本家地主の政府と徹底的に戰はんとするものである。

直ちに臨時議會を招集して、議會を即時解散せよ。さうして勞農無產大衆の意思を問へ。──一九二九、七、七──

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ブル番頭の民政黨內閣

西尾末廣

組閣以來、約二ヶ年の長きにわたつて、全勤勞階級を生活不安のどん底に押し込め、尙一切の無產階級解放運動を極端に彈壓し來つた、田中反動內閣が、遂に民衆の凱歌の中にみじめなる崩潰を遂げたことは、理窟拔きに梅雨晴れの如く淸々しい氣持ちがする。殊に中間內閣組織の陰謀策動の妖雲を吹き飛ばして、立憲的に政權の移動が行はれたことは、時代の力として當然の事ではあるが一層明るいスガ〳〵しい氣持ちを一般に與へて呉れた。この『理窟拔きの氣持』は兎も角、漫然と民政黨內閣を好感を持つて迎へしめてゐる。

だが然し、言ふまでもなく、民政黨內閣は有產階級に依つて支持されてゐる、有產階級のための政府であつて、國民の九割五步を占むる勤勞無產階級の利益幸福とは明かに對立してゐるのである。此の點に就ては政友會內閣と何等變るところがないのである。

見よ、民政黨の田中內閣打倒の標語を、曰く優諚問題、曰く不戰條約問題、曰く某重大事件等と、悉く政治技術の拙劣さを攻擊するのみであつて、何等國民生活の安定策、――例へば失業救濟、減稅、社會施設等――に就て言及してゐないではないか。

更らに組閣後の聲明に見よ。

金解禁の準備。之れはブルジョアの熱烈なる要求であつて勤勞階級の要求ではない。

徹底的緊縮政策。これまたブルジョアの痛切なる要求であつて。勤勞階級は一般的消極的緊縮政策では無くて、政費の節約、軍備縮少、ブル保護の廢止、富豪增稅等によつて捻出せる財源によつて、勤勞階級の負擔の輕減及び勤勞階級生活安定の爲の諸政策の積極的實行である。一切の新規事項を來年度豫算に計上しないと云ふが如き消極政策は生活苦に惱んでゐる勤勞階級の政治的要求を蹂躪し以つてブルジョアの負擔を輕減せんとするものである。

更らに、無產階級の第一の政治的要求たる政治的、經濟的解放運動の自由に就ては何等聲明するところがないではないか。

斯くて民政黨內閣はその第一步に於てブルジョア內閣の正體を暴露したのである。言ふまでもなく、私は新內閣に何等の誠意を期待するものではない。さればとて、直ちに倒閣運動を起し、又は議會で直ちに不信認案を提出すべしとする、單純素朴な左翼張りにも贊成し難いのである。

民政黨は長く政權に離れ野黨として政友會の反對黨として戰つて來た關係上、自らブルジョア番頭としての意識の徹底と訓練と統一とを欠いでゐる。この事は、反動期に於ける現時に於ても政友會の如く徹底的彈壓を爲し得ないであらふ。また一方には、ブル番頭としての正

體を韜晦せんと力めるであらふ。

吾々無產政黨は、先づ此の虛を衝かねばならぬ。卽ち、在野黨時代に、人氣取り策のために聲明せる政策の實行を强要することによつて何程かの勤勞階級の政治的利益を獲得しなくてはならぬ。更らに勤勞階級の政治的要求を强要することに依つて、最も効果的に彼れのベールを剝ぎ取り田中內閣と變る事なきブルジョア內閣の正體を曝露する事が出來るであらふ。

それ故に、此の際無產政黨のとるべき態度は、直ちに倒閣運動又は不信認案提出等の行動に出ずることなく、民政黨內閣も田中反動內閣と同樣にブルジョアの走狗であることを警告宣傳しつゝ、一方には無產階級要求を强要することによつて、具體的に實際的にその正體を曝露し、然る後、倒閣運動に移るべきであると思ふのである。（七月八日）

政變と無產階級運動

大山郁夫

一

田中反動內閣は不圖した行きがゝり——少くとも表面上は——から倒れた。倒閣運動に乘出しかけてゐた民政黨は、そのまゝ內閣成立の設[illegible]

ブルジョア政治の舞臺の上に彗星の如く出現したこの局面の急轉換は、無產階級戰線上に活躍する人々の神經にどう響いたか？

ブルジョア新聞紙上に反映された『世間』の評判を聞けば、新內閣は可なりの人氣を背負つて立つてゐるやうである。よしその人氣は決して新來の內閣への積極的歡迎の表白ではなく、寧ろ退却した內閣への『愛想づかし』の變形以外の何物でもないにせよ、——否、それだけではない、よしまたその『世間』の人氣といふものは、畢竟全くブルジョア新聞紙の示唆によつて人爲的に煽り立てられた一種の社會心理的現象にすぎないものであるにせよ——しかもその波動が中央からすべての方向へ傳達されて、すでに全國的規模のものとなつて來てゐることは、掩ふべからざる事實である。かくて年來ブルジョア新聞紙の世界觀を自己の世界觀とするやうに習慣づけられて來た世間は、一般にこの政變に對して、陰鬱なる梅雨空が霽れて久し振りにカラリとして天日を仰いだやうな氣持に浸つてゐるのである。

それればかりではない。無產階級の地盤へのブルジョアジーの觸手であるところの社會民主主義者の陣營に於てもまた、濱口內閣の出現は表面上はともかく、內實は衷心から歡迎されてゐる證跡が見える。そして、それには相當の理由もある。殊に、かつて第五十五議會に於ては不信任問題に關聯して進んで民政黨に合流し、次いで第五十六議會に於ても同じく民政黨と愉快さうに協調的行動を取り、更らに議會閉會[illegible]

なかつた社會民衆黨が、この內閣にどういふ期待を懷いてゐるかは、容易に窺ひ知ることが出來る。

だが、戰鬪的左翼はどうか？

戰鬪的左翼が、新內閣に對する『世間』の見方や、社會民主主義者の陣營の態度やによつて寸毫も動かされるものではないことは、いふまでもないことだ。さうだ！戰鬪的左翼は、『世間』も社會民主主義者もが、その點については何等の疑ひを挾んでゐないであらう通りに、彼等とは全然異つた視角から今次の內閣の更迭を眺めてゐるのだ。

で私は、以下戰鬪的左翼の立場から見て今次の政變が何を意味するかの問題について、少しく私一個の見解を語つてみよう。

二

まづ大局論としていへば、田中內閣の退場──濱口內閣の登場は、本質的には單純に資本家地主の政府の構成員の入れ替えが多少花々しく演じられたことを意味するだけのものであつて、それ以上の何物をも意味するものではない。殊に、當面の社會的政治的一般狀勢の下に於て、資本家地主の政府の反動的性質がそれで幾分でも緩和されやうなどとは、戰鬪的左翼の陣營內の何人もの念頭にも上り得ないことだ。從つて、ブル新聞がよく言ふやうに、民政黨內閣は政友會よりも幾らかは自由主義的であるだらうといふやうなことは、戰鬪的左翼の立場からは、全然無意味なことであり、まさしく一場の夢物語にすぎないことなのだ。

だが、かういつただけで、問題が片附けられるものではない。否、實をいへば、問題がそこから始まるのである。

といふのは、かうだ。いかにも今度の內閣の更迭は、資本家地主の政府の構成員の入れ替えを意味するものにすぎないことは事實だがしかし、（一）何故にさうした入れ替えがこの際──それより前にでもなく、またそれより後にでもなく恰度この際──行はれなければならなかつたか？（二）また、一旦さうした入れ替えが行はれなければならなかつたとき、何故に、たとへば或る種の人物の組み合はせから、成る中間內閣とか、或ひは床次の新黨クラブを中心として政友會をその支持力とする一種の聯立的勢力の上に立つ內閣とかが作られたのでなくて、何故に白羽の箭が民政黨の上に立てられなければならなかつたか？かうした問題を一應解決することは、我々が當面の狀勢に働き掛けるための方針を確立する際に當つて、何よりも先きに取り掛らなければならない當面喫緊の最必要事だと考へられるのである。

三

政變出現の前後に當つて、ブルジョア政治の舞臺の上には、種々雜多の問題が次から次へと繰り出された。今試みにその數例を手當り次第に取り上げてみると、曰く金解禁問題、曰く不戰條約問題、曰く滿洲某重大事件問題、曰く對支通商條約問題、曰く何、曰く何。田中內閣は成立の當初から可なり多くの政治問題──たとへば選擧干渉問題優諚問題、鈴木內相問題、水野文相問題、久原遞相問題、等々──

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

提供した、がしかしその退却間際に於てこそ、同内閣はその問題製造力に於て、從前の如何なる内閣にも遙かに立ち勝つた能率を發揮したレコードを作つた。

立つ鳥は跡を濁さないといふが、田中内閣の立ち際は、ブルジョア政治の標準に照らしてみても、醜態の極を示したものであつた。それは寧ろ、あたり一面をかき濁して姿を消す泥鰌の逃げ方に類したものであつた。そして右に例示したやうな諸問題が、逃げ路を晦ますための泥として用ひられたのであつた。

そこへ持つて來て、田中内閣の逃げ路を一層分らないものにした諸原因が、田中内閣の外からも簇出した。卽ち、不戰條約問題に關聯して樞密院の相當に手痛き干渉があつた。滿洲某重大事件問題に關聯して内閣と軍部との間に可なり深刻に見えた葛藤があつた。最後に後繼内閣問題に關聯して又々例の『憲政常道』のお題目が飛び出して、恰かも二個年前に憲政の常道で起つた田中反動内閣が、二個年後に同じ憲政の常道で倒れたかの如き錯覺を世間一般人の間に起さしめた。

我々は、これらの複雜極まる諸事象の縺れを解きつゝ、その間から政變を惹き起した究極の最根本原因が果して何であつたかを見究める端緒を摑み出さなければならない。

我々がこの一見取りつく島がないやうに見える仕事を取り上げるとき、一筋の赤い線のやうに我々の眼と手を導くものは、先年の三黨首發覺事件、およびそれに直ぐ引き續いて現はれた若槻内閣と田中内閣との交替時代以來、最近の政變に至るまで、あらゆる内政上および外政上の諸問題の出發點となり、また歸着點となつたところの、最も中心的な一傾向──それ實に最近の日本の一切の内政上および外政上の諸政策の樞軸となつたやうに見えて來た最も中心的な一大傾向──でなければならぬ。

それは外でもない。國家資本主義トラスト完成への過程にある金融資本のヘゲモニーの確立のためになされる財界の整理および統制、─從つてそれにつれて對内的には廣汎なる範圍に亘る産業合理化政策の實行、對外的には强硬なる帝國主義政策の確立。──我々は最近數年間に起つた政變毎に、かゝる仕事が金融ブルジョアジーの指揮杖の下に、一歩一歩ぐんぐんと押し進められて來たのを見て來たのだ。

四

金融恐慌の起つたゞ中に當つて、田中内閣は樞密院の仲介によつて『憲政常道』の觸れ込みの下に出現した。だが、ありやうは、あの非常時に當つて、一方に於て特別融資法案や臺灣金融機關救濟案を、大衆の──特に無産階級の──犧牲に於て押し通すと同時に、將棋倒しに倒れて行つた中小銀行や中小商工業的經營の上に手廣く整理を加へることによつて産業合理化を强行し、かゝる狀態の下に失業反對、賃銀値下反對、勞働時間延長反對、等々を絶叫して蹶起した勞働者大衆の運動、立案反對の旗じるしの下に、、の烽火をあげた農民大衆の運動を始めとして、一切の無産階級運動に對して徹底的に彈壓を加へる

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

といつたやうな、金融ブルジョアジーの焦眉の急を救ふために、田中軍事內閣は最適任と認められて、產婆役の樞密院の介添へによつてこの世の光を仰がしめられたのであつた。

田中內閣は、金融ブルジョアジーの頤使の下に、かうした任務を有効に行つた。殊に無產階級彈壓の方面に於ては、、、、の檢擧、治安維持法の兇惡化、等々を始めとして、苟くも無產階級的と正當に呼ばれ得る運動の上には、片ッ端からしたゝかに鐵鎚を加へることよつて一種の恐慌時代をさへ出現せしめたまでに、やれるだけのことをやつた。また支那に向つても、數千萬圓を惜しげもなく支出して濟南出兵を斷行したり、滿洲某重大事件を惹き起したりなどした。

要するに、田中內閣は、かうした種類の粗大な荒療治にかけては、特にその軍事內閣の軍事內閣たる所以の特色を極度に發揮した。だがさうした荒療治の必要も一應過ぎ去つて、愈々これからが、より緻密な技巧を要する金融統制の仕上げへの差し掛りといふ段になつてから田中內閣は、少くとも金融ブルジョアジーから絕對的信賴を取り下げられ始めたのである。

それは必ずしも、田中內閣が粗枝大葉式プラス無軌道式內閣だといふところから來たばかりのものではない。それは田中內閣が現在の政權を持ち續けたまゝでは、例の政友會の放漫政策乃至積極政策から脫出することが出來ないといふことからも來てゐるのである。

所謂政友會の放漫政策積極政策は、その根本に於ては、政友會がまだ產業ブルジョアジーと大地主とを兩天秤にかけて、戰々兢々としてその鼻息を覗ふ必要を持つてゐた時代からの遺產であつた。鐵道の敷設とか、港灣河川の修築とかを筆頭とするあらゆる土木事業や、地租委讓、自作農創定の如きは、爾來あくまで執念深く田中內閣につき纏つて、同內閣が金融ブルジョアジーのために大鉈を揮つてゐた瞬間にも遂にそれを振り切ることができなかつた。

さうした積極政策は終極に於て、殊に田中內閣が金融ブルジョアジーから課せられた金解禁の適當なる時期に於ける果敢なる斷行に對する——直接にはその準備としての財政緊縮および整理の斷行に對する——大邪魔物となるに至つた。金解禁の問題は、その實施後に必然に來るべき物價低落、不景氣或ひは再度の、、、深刻なる失業問題、等々の豫想の下に、表面上義理のやうにその必要を唱へてゐる產業ブルジョアジーの間には、內心必ずしもそれに——少くとも近き將來に於てそれが實現されることに——全幅の贊意を寄せてゐるとは限らないものが相當にある。それは、現に彼等の間に、その時機および方法に關して種々の異說を主張してゐるものが頻出した事實に徵しても、大體は察しられる。殊に、解禁の方法に關しては、戰前の爲替相場に於て行ふことを可とするものがあつたり、平價切下の基礎の上に於て行ふことを可とするものがあつたりするといふ狀態である。序にいふが、社會民衆黨の幹部たちは、平價切下の基礎に於て金解禁を行ふべきことを主張して、この討議の仲間入りをしてゐる。彼等はかくすること

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

によつて、金融ブルジョアジーが必要とする産業合理化の實現に參加しようとする意志を間接に表明してゐるのだ。

かうした形勢に直面した、田中内閣は一方に於て金解禁實行の意志を仄かし乍ら、他方に於ては成るべく財界に變動を與へないやうな時期及び方法に於てそれを實行する積りだといふやうな口實の下に、問題の解決を、無限の――少くとも不定の――彼方へ押しやつて來た。

金融大ブルジョアジーは、近來になるに從つて益〻明瞭に、可なりの財界の變動を賭しても金解禁を相當の期間內に斷行しようといふ決意を示して來かけた。それには爲替相場の安定とか、貿易の振興とか と様々の理由が附けられてゐるが、しかし最も直接的には、現在日本の諸銀行が國內事業不振のために擁してゐる**巨億の遊資の、金利の比較的高き海外諸國**――現在アメリカの金利が日本のそれより二三分高の七分五厘を示してゐると新聞紙は報じてゐる――への流出を可能にしようとする意圖から來てゐるものであらねばならぬ。

金解禁問題のかうした局面に絡んで、更に對支貿易の行き詰り――其影響は廻り廻つて濟南撤兵の斷行とさへなつた――は金融ブルジョアジーをして、この際、局面打開の已むを得ざることに想到せしめた。

かうなつて來ると、田中內閣の命數は、早晚窮まらない譯には行かなかつた。そして、不戰條約問題および滿洲某重大事件問題によつて與へられたその滿身の創痍は、遂に不死身といはれてゐた田中內閣をさへも、その斷末魔に追ひやつた。

五

內閣の存亡が國際問題もしくは國際的意義のある問題を契機として決せられるやうになつて來たことは、さすがに金融資本時代、帝國主義時代である。

今次の政變に於て直接に田中內閣に引導を渡したものは、二個年前に田中內閣を取り上げた產婆の役割を演じた樞密院であつた。そしてその樞密院が最後の瞬間に田中內閣に突擊したのは、不戰條約の成文中にある例の『人民の名に於て』を言ひがかりにしてであつた。樞密院はそれによつて、**一見中世紀的絕對主義の表現である封建的イデオロギーの優越性を保全したやうに見える。ただが實は、樞密院はさうすることによつて、**究極に於て金融ブルジョアジーの意圖を遂行したにすぎなかつたのだ。かうした關係の下に於て、我々は金融資本の經濟的の――從つて政治的の――ヘゲモニーの下に於て封建的遺制が占めてゐる新地位、およびそれが帶びてゐる新任務の本質を如何なるものであるかを、明かに認知することが出來るのだ。

更らにまた、滿洲某重大事件――この問題は田中內閣の總辭職によつても、またいはゆる責任者たちへの一片の形式的のものにしか見えない處罰によつても、更らにまたそれには『日本人は關係してゐなかつた』といふ公的聲明によつても、決して大衆の前に清算されてゐるとはいへないのだ――を中心として、田中軍事內閣と軍部との間に、新聞紙に報ぜられたやうな反目が生じたことこそ、次に注意すべきことだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

濟南出兵によると支那の國民政府への彈壓、それは軍部を利用することによつてなされた。だが、舞臺が一轉したとき、田中軍事內閣はその軍部によつて咽喉笛を喰ひ破られた。この事實の解釋のために、我々は現在の蔣介石とアメリカ・ブルジョアジーとの關係、廣西派とイギリス・ブルジョアジーとの關係、その間に於ける日本のブルジョアジーの地位などを究明しなければならないと同時に、所謂田中外交と日貨排斥問題との關係、それと關聯する對支貿易の不況、および以上の一切に交渉のある、、、、、、、、、、、、、の壓力、等々の一切の諸問題を考察しなければならないのは無論である。

更らにまた、例の不戰條約問題は、、、、、、、、、、、、、、壓殺の目的の下に於ける帝國主義列强の協調を具す視る諸現象の一つであらねばならぬ。

それらの諸問題に對して金黨ブルジョアが欲する解決は、最近に近づくほど、次第に民政黨の多年掲げて來て、幾分かは既に實行しかけてゐた政策に一致する傾向を取つて來た。それに民政黨は、金解禁問題の解決に關しては、日頃から政友會よりも遙かにより斷乎たる決意を表明して來た。

かうした諸關係に即して考へるとき我々は、(一)內閣更迭が何故にこの際行はれなければならなかつたか?(二)何故に民政黨內閣が後繼內閣でなければならなかつたか?の二つの問題が、我々には最早何等の謎でないことを知るのだ。明日は明日のこととして、現下のあらゆる情勢の下に於て、少くとも、民政黨內閣は金融ブルジョアジーの立場から、最も望ましきものと考へられたものとしなければならぬ。

だとすると、民政黨內閣は、根本に於て政友會內閣が金融資本のヘゲモニーの確立のために成功的に行つて來たことを引續き行ふばかりでなく、それを一層有効に行ふであらうことが考へられる。金融統制產業合理化、、、、への準備、等々。かういふことが民政黨內閣の實行政策のリストの中に載せられてゐる重要項目であることを、誰れが疑ひ得よう。從つて、民政黨內閣が政友會內閣以上に、本質的に自由主義的だなどといふことは、我々には毛頭考へられない。戰鬪的左翼は、その點を充分に考慮に入れてゐる。民政黨內閣は、合法的社會運動には寬大な對策を取ると聲明してゐるが、しかしそれは社會民主主義者に適用されるばかりのものである。それに、治安維持法の制定およびその兇惡化が證明してゐる通りに、支配階級は、、に、今日合法的と見られてゐるものを、明日は非合法なものとすることも出來る。から考へるとき、戰鬪的左翼は、當面の客觀的狀勢と主體的條件とに應じて、よし如何なる新戰術を取るべき必要に迫られるやうなことがあらうとも、從來戰ひつづけて來た政治的自由獲得鬪爭を、今後益々決然たる態度に於て益々勇敢に戰ひ抜くべきことを、無產階級の前途の必然の、、への行進のために、依然として、否益々切實に絶對的に必要不可缺の條件となさなければならないのだ。(一九二九・七・一一)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Onoto the Pen

光りはオノトより

オノトを使へば事務が先から先へと進捗する
成功の目標が何時も前途に輝いてゐる

使へば使ふ程書きよくなる

オノト萬年筆　七、五〇以上
アテナ萬年筆　三、五〇以上
萬年筆用アテナインキ　、三五

送料各、一八（カタログ進呈）



¥1.50

"VALET" AutoStrop Safety Razor

街頭の新感覚

流行のバレーを使つてから人々の顔がヨリ明るくなつた。街上に公園にホールにクラブに爽快な新感覚はバレーが支配してゐる。

剃刀で研器を兼ね一枚の刃が半年使へる

バレー自働研安全剃刀

他に二、〇〇　三、三〇　四、八〇
一三、五〇以上各種

替刃利用ナイフ　刃一枚付　、九〇

送料各、一八（カタログ進呈）



東京日本橋通二丁目

丸善株式會社

大阪　神戸　京都　名古屋
横濱　福岡　仙臺　札幌

東京＝神田・三田・早稲田・丸ビル

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

日本地理大系（豫告）

傳統の美、鬱勃新興の生命、此二つを併せ把握して『新興の日本』は何れへか行く。人は云ふ世界の樂園は東に日本あり、西に瑞西ありと。彼はしかし國家としての權威、者の智識に寄與する一方、藝術的情操教育の最高資料である。

見

髓を

廣島高師教授 下村彦一
學習院教授 遠藤金英
東京帝大教授 理學博士 草野俊助
東京帝大教授 工學博士 關野貞
海軍少將 關田駒吉

▽航空寫眞班の活躍

今日以後の地理學に於て最も價値あり興味あるも

全

明治大帝の『萬葉集』と
昭憲皇太后御歌集

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

綜合せる大陣容!!!

編輯委員

京都大學教授 文學博士 石橋五郎
東京文理大助教授 田中啓爾
東京女高師教授 飯本信之
奈良女高師教授 雜子二郎
廣島高師教授 下村彦一
學習院教授 遠藤金英
東北大學教授 理學博士 高橋純一

寫眞解説總論執筆者

全國官公立大學、專門學校教授
六十餘氏(姓名省略)

寫眞班代表者

寫眞編輯主任 橋本基
航空寫眞班長 御國飛行學校長 伊藤西夫
撮影擔當 深川[illegible]。山田聽水。大塚稔。鈴木萬七。

我社は大英斷を以て改造社航空寫眞班を特設し御國飛行學校長伊藤西夫氏を主任とし特に撮影用飛行機三臺を新造し同校の教官數氏操縱して本土及び植民地を殘らず高空より撮影する、此の壯擧は獨り我社のみのなし得る所で本大系の最も誇りとするところである。

……のは航空寫眞である。本全集には陸海軍及び東西大新聞社の航空寫眞を乞ひ得て掲載せるのみならず、

▽誇るべき參考地圖

各卷には**地形大地圖**を始めとし**地質圖**、**模型圖**、その他特殊圖十數頁を挿入する。右は我國の標準地圖と稱せられる陸地測量部の實測圖に劣らざる用意を以て專門委員が一々實測せる最近最新の最も信頼すべきもので讀者以外には決して手に入らない貴重品である。

第一卷 總論・大東京	第二卷 關東地方	第三卷 奥羽地方
第四卷 中部地方	第五卷 近畿地方	第六卷 中國・四國地方
第七卷 九州地方	第八卷 北海道・樺太	第九卷 臺灣・南洋
第十卷 朝鮮	別卷一 滿洲	別卷二 山嶽

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

深夜業禁止に際して

——資本家の僞瞞を排せ——

加藤勘十

一

『日歩はかゝるが夜歩はかゝらない』貪慾飽くを知らない資本家が、か弱い婦人並に幼少年勞働者に過酷なる超勞働時間を强制する一つの合言葉であつた。

日本の纖維工業の發達史は同時に日本の勞働者××史でもあつた。我が紡績事業は國内產業部門に確固たる地位を占めるのみならず世界の紡績事業界に實に第三位の優位を占めてゐるのである。其の今日の優位を占めるに至つた半面には、筆紙に盡しがたき婦人並に幼少年勞働者の犧牲が支拂はれてゐるのである。……英國の紡績事業發達の裏面に英國の婦人並に幼少年勞働者の血涙史が秘められてゐると同様に……婦人は慘酷極まりなき搾取に憤りつゝも、餘りにも强き封建的遺習の制縛の故に、鬪爭の自由をさへ奪はれて、憤恨の血涙を秘めつゝ資本の壓制の笞に服して來たのである。然しながら、時代進化の激流は勞働者をして資本主義制下に於ける自己の地位を自覺せしめずにはおかなかつた。彼の女等も當然にこの激流の洗禮をうけた。日本の勞働運動發達史並に資本家側の勞働立法制定の沿革史は明かにこれを物語つてゐる。しかして、絶え間なき鬪爭の展開は、遂に資本家をして工場法を制定せしめ更に工場法を改訂せしめて、玆に法律的に婦人並に幼少年勞働者の工場に於ける深夜業を禁止せざるを得ざらしめたのである。

深夜業が勞働者の健康に及ぼす影響に就ては、石原博士を初め數多の專門的な研究が發表されてゐて、勞働者保健の上からは夙に解決されてゐなければならない問題であつたのであるが、勞資對立の社會的情勢は常に資本家側の强力なる支配力が優地を占めて、勞働者側はこれに屈服を餘儀なくされて、保健上みすみす有害を證明されても、これを獲得することが出來ないで、遂に今日に至つたのである。斯くして法定的猶豫期間が充ちて愈々七月一日から改正工場法の現實的實施となつて——紡績聯合會所屬の有力なる紡織工場のあるものは已に今年一月以降深夜業を禁止してゐる——久しい間の工場に於ける深夜業問題は一應解決を見るに至つた。

二

工場に於ける婦人並に幼少年勞働者の深夜業問題は一應解決されたとは云へ、深夜業禁止に伴ふ諸多の問題は未解決の儘で殘されてゐる。問題は寧ろこの點にある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

資本家は深夜業禁止を自己に有利に導くべく『勞働者は深夜業禁止によつて現實に勞働時間が短縮されたのであるから、從つて出來高拂による賃銀は當然に減少せねばならぬ。又資本家は勞働時間短縮による能率の減退を他の資本的補充——機械其他の設備の改革——によつて補はねばならぬから、勞働者の賃銀の減少を補充する譯には行かぬ』と云ふ態度をもつて、問題を平面的な常識的な取扱ひによつて、深夜業禁止に伴ふ經濟的負擔を勞働者にのみ負擔せしめやうとしてゐる。深夜業禁止問題を誘因としての紡織工場に於ての爭議の頻發は明かにこの資本家側の奸手段を證明するものである。

資本家側は大正十五年の改正工場法の實施（深夜業禁止の猶豫附）に當つて、當然に來るべき今日の深夜業禁止の對策としての一手段——產業合理化の一手段でもある——として能率增進の方法を具體化すべく努力して來た——其の半面に勞働者の犧牲が拂はれてゐることは當然である——從つて深夜業禁止の實行によつて能率維持の上に特に著しい變化を見ないのである。左の二表を比較考察するとき其處に明かに勞働者の犧牲によつて、能率增進の方法が講じられてゐるかを知ることが出來るのである。

イ、紡錘增加表（紡績聯合會所屬五九社）

年次	据付錘數	織機臺數
大正十五年六月末	五、五八六、〇二七	七四、一九五
昭和元年十二月末	五、六七九、八五三	七七、〇四三
同 二年六月末	五、九二九、六一四	七六、一六三
同 上十二月末	六、一一六、二六六	七八、三五二
同 三年六月末	六、二七二、一八六	七九、七七七
同 四年五月末	六、三六九、七八二	

ロ、紡織勞働者增減表

年次	男工	女工	合計
大正十五年平均	四〇、七三四	一四一、七八七	一八二、五二一
昭和二年平均	三八、七六三	一三一、三四三	一七〇、一〇六
昭和三年平均	三七、一八八	一一七、六九七	一五四、八八五

即ち錘數に於て七八三、七五五錘（一割四分）の增加を見てゐるに反し、勞働者數に於ては男女合計二七、六三六人（一割七分）の減少を見てゐる。私はこれによつて產業合理化が勞働者の失業を前提するものであると云ふことを知ると同時に、深夜業禁止によつて能率を減退すると稱する資本家の主張の僞瞞を發見せざるを得ないのである。更に資本家の營利採算上の一方便として勞働者の失業と消費者の迷惑とを犧牲として行はれてゐる紡績聯合會の協定による操業短縮を除却すれば、作業能率に殆んど何等の變化を見ないのではないかと思はれる。（この斷私は正確なる資料を有たないから斷言は出來ないが）

資本家が產業合理化による勞働者の作業上の苦痛を顧ることなく、單に時間——賃銀と常識的に主張することは、彼等の貪慾を立證する以外の何ものでもない。殊に紡織勞働者の賃銀は他の勞働者の賃銀に比較して餘りにも低額である。

ハ、產業別賃銀平均

（昭和三年度勞働統計要覽）

產業種別	總平均	男工平均	女工平均
總平均	一円、四四	二円、一〇	〇円、八八

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

機械器具製造	二、四五	二、五三	一、一五
瓦斯、電氣、天然力利用ニ關スル業	二、四一	二、四三	一、〇六
金屬工業	二、三四	二、四八	一、〇六
製版、印刷、製本業	二、一三	二、三七	一、二六
窯業	二、七三	一、八九	〇、九〇
化學工業	一、五九	一、九九	〇、八七
製紙業	一、四五	一、七二	〇、八五
食料品嗜好品、製造	一、四四	一、八九	一、〇三
纖維工業	〇、九七	一、四七	〇、八六
人造絹絲	一、三三	一、九二	〇、八二
麻絲維絲返業	一、三二	一、七〇	〇、九六
其他紡績業	一、二〇	一、六九	一、〇二
絹毛麻綿紡績業	一、一一	一、五二	〇、九九
綿製造	一、〇七	一、五九	〇、八三
織物業	一、〇三	一、五五	〇、九〇
撚絲製造	〇、八八	一、二四	〇、八〇
其他織物業	〇、八八	一、五〇	〇、六八
生絲製造	〇、七三	〇、九〇	〇、七一

本表に明かなる如く、纖維工業勞働者の平均賃銀は僅かに九十七錢に過ぎない。婦人勞働者を一番多く使役する生絲製造（深夜業が無いから）は暫く別として、其の次に婦人を多數に使役せる絹、毛、麻、綿紡績業の男女平均賃銀は僅かに一圓十一錢である。何處に今日より以上に賃銀低下の餘地があらう。如何に勞働者を牛馬同樣に心得てゐる資本家と雖も、この低額の賃銀中から引下げの餘地のないことを知るであらう。從つて賃銀問題に關する限りに於ては、勞働者は一切の資本家側の奸策を排して生存權維持のために死力を盡して戰はねばならぬ。斯く觀來つて結論を求めるならば、深夜業禁止の時期は寧ろ遲れたること、深夜業禁止の結果としての能率問題は資本家の誇稱するが如き影響は無からうと思はれること、時間短縮に伴ふ賃銀低下の餘地は全く存しないこと、今日までに比しての時間的餘裕の利用に關しては勞働者の自主的利用に一任すること、更に確實なる八時間勞働制に向つての鬪爭の展開に合理的根據を與へたること等々を擧げることが出來る。

更に私は工場に於ける深夜業禁止の實現を喜ぶと共に、より以上の悲慘な苛酷な狀態にある坑内婦人勞働者の解放のために全無産大衆の强力なる協力を切望して已まないものである。（六、二九）

改造社發行書

渡邊一郎著 勞働問題原理 定價貳圓 送料廿二錢

末弘嚴太郎著 勞働法研究 定價參圓 送料廿四錢

松岡駒吉著 野田大勞働爭議 定價壹圓 送料十八錢

末川博著 ソヴィエトロシヤの民法と勞働法 定價貳圓五十錢 送料廿二錢

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

左翼勞働組合の再建に就いて

大道憲二

一

最近に於ける我が勞働組合運動の上には異常なる變化が來て居る。

（一）左翼勢力の急速なる衰退

（二）社會民主々義勢力の比較的増大

（三）未組織勞働者並に右翼團體內の左翼勢力の擡頭

二

（九字削除）産業合理化を强行して居る反動支配は、三・一五事件に依て左翼勢力の根絶を企圖し、それ以來一年半の間に左翼的精鋭の殆んど全部を拔き去つてしまつた。

左翼勞働組合舊評議會は、その間にあつて、遂に再建の實をあげて居ない。否、その勢力は益々衰弱となり離散し、指導勢力を失つてしまつた。

舊評議會第三回大會に於て、政治鬪爭のための組合運動の極左的傾向から脫出して、新方向轉換の上に立つた舊評議會も、いまだ根强かつた福本主義的見解と動搖にわざはいされて、一應の理論的淸算は行動そのものを生んでは居なかつた。それに三・一五事件は、組合事業を非合法に追ひ込み、再建事業の凡ては殘め（二十三字削除）粉碎された。誠に左翼勞働組合の再建は至難なる事業とはなつた。そこで新らしい衣をまとふた福本主義的傾向の中へ――「大工場へ！」の正しきスローガンにも拘らず少數フラクションの連絡を過重評價し、非合法活動に自慰的態度を以てし、一時的鬪爭同盟の組織を置いたりして、具體的題目の中へ入り込まずに、そのための具體的組織と鬪爭形態とを究ることなくして、第三回大會に現れたる、勞働組合事業の性質と任務とを放棄して居るが如くである。

勞働組合運動に於ける左翼勢力のこの急速なる衰退と反動支配の彈壓、産業合理化强行とは必然に右翼的協調的組合の增大を來す。右翼的協調的組合は勞働大衆の進出を押へて、（五字削除）協力し取引し、それに依て組織を擴大し大工場へ入り込まふとして來た。

官僚支配を打ち樹て樣として來た。だがそれと同時に、組合內の自然成長的な左翼勢力は新らしい指導と鬪爭とを欲してそれらの官僚に鋭く對立を見せて居る。

第三に、未組織勞働者の中には相應に廣大なる一度は組織の目をくゞつたものがある。新たらしい形勢の生んで來た（五字削除）がある。そしてそれらは强力な指導と鬪爭とを欲しながら賴るべきものを持たずに居る。それらがたまたま組織する鬪爭も持つて行きどころがない。――左翼とされる舊評議會に持つ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

[illegible]も持つては行けぬ。闘爭と組織とは宙に迷つて居る。自然成長的闘爭も舊評議會の分留のストライキもそれらはあたかも獨立組合の闘爭をやつて居る如くだ。

更らに一方に生活の窮乏から闘爭をまち焦れて居る部分があり、闘爭の回避を希つてる部分もあるが全體として、勞働組合のやつて居る闘爭に對する理解は勞働大衆の中へ浸透し、闘爭の經驗を經て來て居る。そして、強大なる戰闘的左翼勞働組合の確乎たる指導に依つて集中され統一されることは勞働大衆全體の熱望となつて居る。

そして、最近に於ける我が勞働組合運動は主導的な左翼勞働組合の缺除にも拘らず、一般的な上向線の方向を辿つて居る。

三

この時にあたつて、公然たる闘爭を内包する左翼勞働組合の再建は可能であらふか。然り!!吾々は白色テロルの嵐の如く吹きまくつた三月三日に關東地方に於ける合同勞働組合後最多の闘爭を重ねて來た事に依つて明白である。關東全産業勞働組合の提唱にかゝる、全國的左翼組合の結成は、全國到るところの勞働組合並に同志を激しく打つて、新らしい全國的規模の指導と闘爭との可能と成果とを確信せしめて居る。全國到るところの、闘爭にまちあぐんだ未組織をして闘爭のための全國組織への合流を馳り立てゝゐる。右翼指導の下にある凡ての先進分子の異常なる期待と助力との中にある。

それに依て、吾々の全國的左翼勞働組合の建設の可能と充實とは急速に増大して居る。

吾々は確信することが出來る。左翼勢力の伸長のための基礎であり貯水池である吾が左翼勞働組合は我がプロレタリア戰線に於いて新らしき地位を確立するであらふ。

四

我が全國組合たる全産業勞働組合全國會議はそれ故に、急據可能の範圍に於て組織準備は整えられ、その基礎は据られなければならない。

吾々は、舊評議會第三回大會に於て強く批判されたる福本主義の清算の上に立たなければならない。勞働組合の基本的組織と任務との上に立つて、勞働組合運動の全プロレタリア運動に於ける地位と任務の限界の認識の上にたゝなければならぬ。

吾々は勞働大衆の最も切實なる具體的な日常要求をとらえて、これが闘爭を組織しなければならない。しかもそれは一時的闘爭に止まるのではなくて、常に未組織を吾が左翼勞働組合に組織することに依つて、闘爭を正常なる計劃的なる方向に向け統一して行かなければならない。

吾々はだから、戰爭反對！左右社會民主々義の排撃！白色テロルとの闘爭！等を勞働大衆に押着けるのではなくて、具體的現實の闘爭からそれらを意識させ、それらの闘爭へと馳り立てる爲の組織と闘爭とを組織するのである。また大工場へ！の正當なスローガンに關聯して、工場フラクションの機能の限度を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

過大評價し、非合法活動に滿足し自負したりするとに反對し、飽くまで、自己の勢力を過重評價せず、正確なる階級關係の認識の上にあつて、變通自在の戰術を持ち、大工場へのフラクションとその周りに組合の組織を打ち立てるために鬪爭し、尨大なる未組織を一時的同盟に組織すると同時に、それを吾々の組合の組織に組み換へ、非合法を押着けるかの奸策と彈壓にも抗爭して、吾々の鬪爭力を高揚する爲に努力しなければならない。

吾々は未組織組織の事業の特異なる重要性とそのために新たなる具體的戰術をあみ出さなくてはならない。だが勿論それは、産業合理化政策强行から來る、産業部門勢力の强弱や工場勞働者の移動や、青少年婦人、未熟練工への移變等から、極めて精密に立てられなければならない。

殘酷なる大衆的解雇に對する鬪爭に於て吾々は特異なる注意を喚起し、それの鬪爭をあみ出さなければならない。操業變更によるもの、操業短縮によるもの、事業不振によるもの、大小工場を通じて、失業者大軍を街頭に投げ出す。が、投げ出されて、より惡條件に屈服して行くもの、それをあさつて且つ失業苦に脅えてるものがあると同時に、封建的なレンタイに依つてつながれて居る親戚へ農村へと消えて失せるかに見える失業者大軍がある。吾々は時々刻々の狀勢と共にこれが組織と鬪爭を計劃しなければならぬ。

吾々は組合民主々義の鬪爭を全勞働團體の中に組織して、それを指導し、勞働大衆全體の左翼化のために奮鬪しなければならぬ。この組織と戰術とを打ち立てなければならぬ。組合戰線の統一、産業別組合への整理統合亦吾々に荷せられたる未踏の險路である。

五

全國の勞働組合並に同志諸君に敢えて訴える！吾々は、今、可能なる範圍の全國に散在する勞働組合並に有志團の如き準備會とを以つて、一應全國的結成をやらふとして居る。それに依て、一應の組合戰線に於る左翼勢力の公然たる一勢力を形造らふとして居る。そしてそれは必ずや來る二十一日（日）の創立大會に於て實現しえられるであらふ。――全國の熱烈なる勞働大衆の期待と確信のうちに。

吾々は舊評議會の再建を企てゝ居る。それの再組織を企てゝ居る。だが事情は變化して居る。今日吾々の鬪爭に燃えて居る部分は必ずしも舊評議會の組織のみではない。寧ろ新しき勢力は他の部分に見ることが出來る。そしてこの尨大なる未組織の中へ吾々の果敢にして執拗なる組織の手が延ばされねばならぬ。

我がプロレタリアは今、凄慘なる暴壓の一線を乘りこえて、自然成長的に成熟しつゝある上向線に向つて驀進しやうとして居る。そして、その最大の基礎は吾等が新らしき左翼勞働組合でこそある！

凡ての左翼勞働組合並に同志諸君!!我がプロレタリア現下に於ける最重要の事業のために！より具體的な提案と討議のために！匠實に輝かしき左翼組合のスタートのために！躊躇するところなく參加し協力して、公然たる左翼勞働組合の旗を掲げよ!!工場に鑛山に牧場に戰場に!!（七・五）



問題の國債整理

六笠武生

銀行家の態度

國債が六十億に近く（本年五月末調によると、五十八億九千萬圓）國債費だけでも二億八千萬圓、となると、誰だつて國債の整理減少の緊要なることを口にするやうになる。勿論、國債整理は必要でなくはない。が、其れも、その動機、その方法によりけりである。

最近頓に擡頭してきたところの國債整理論の如きは、何等一般無産大衆のそれではなく、所謂少數金融資本家、主として銀行家だけの國債整理論に外ならないのである。もとより今日の社會組織にあつては、巨額の公債を取扱ふのは（五大銀行は何れも一億圓以上の公債を所有してゐる）銀行家に他ならないのであるが、何も恐慌後の遊資横溢の際、先を爭つて國債を背負ひ込んだからと云つて、今又金解禁を控へ、公債市價の墜落を見るや、目の色變へて政府當局に迫り、宜しく確乎たる國際政策を樹立し國債增發を禁止すべし、となすのは、余りにも得手勝手な沙汰と云ふべきである。又、前年三月に於ける震災善後公債發行の際の四千萬圓の公募公債、臺灣補償公債二億圓の長期債と預金部所有の短期債との交換など想合せたならば、利廻りが六分がらみに成つたとは云へ、今更非募債主義（從來の如く公募主義を採れと云ふのではない）を唱へるのも蟲のいゝ話である。

が、實際に於て公債の値下りが、どの位銀行家に響くか大體の數字を擧げてみると、昭和三年末、國債未償還額中、廿八億圓が、銀行、大藏省預金部、保險會社、信託會社に集中して居り、その中銀行は、國債十三億圓、地方債三億圓を所有して居り、その上、擔保物件として公債を持つてゐるから、直接公債の値下りに關係のあるのは、額面約十九億圓はあると見られる。だから額面に對して一割の波瀾があれば、一億九千萬圓の所有財產評價損益が生ずることになる。これに依つて簡單ながら、政府當局對銀行家の切つても切れない因緣が諒解出來ることゝ思ふ。銀行家からガミ〳〵言はれゝば、如何に無爲無策の當局と雖も何とか銀行家の御機嫌を取つて置かねばならぬ。そこで政府（田中内閣）は、その諮問機關たる經濟審議會をして、國債整理に關する方策を立案せしめる段取となつたのである。

無産大衆の負擔

ところで、所謂一般無産大衆（分明にする爲め、免税點以下の所得者とする）の手中にある公債は極めて少額であると見ることが出來るが、一方この階級の負擔になる租税が、主に間接税（主として消費税であるが、消費税の中には直接税に入るものもある）であつて、我國のやうに國庫收入の大部分が間接税によつて占められてゐるのでは、國債の利拂ひのため租税負擔を重課せられるのも、この階級なのである。だから國債の募集は、如何なる事業をなすにしても、窮局のところ、永い間には、無産階級の負擔過大と成らざるを得ない。試みに昭和二年度に於ける七大租税に就いて見るに、直接税二億三千萬圓、間接税六億三千萬圓、とすると極めて概算ではあるが（國民所得額から割出してみて）この間接税の中、約三億圓は優に免税點以下の所得者の負擔とみることが出來る。無産大衆の租税負擔は此くの如く意想外に大きい。そしてこのことは如實に應能課税の原則に反してゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一方、國債は逐年異常な激增振りを示し、その利拂ひだけでも每年三億圓に近いのであつて、國債負擔の一部を國債利子として拂戾しさへ受けてゐない無產大衆にしても、今後唯默々として、その負擔過重に甘じ、徒らに少數金融資本家の利害の犧牲たる必要は毛頭ないのである。

現行法の缺陷

次に問題となるのは、現行減債制度の缺陷であつて、大正四年改正の特別會計法には、元金償還に充つべき金額は、他の特別會計より繰入るゝものを合せて、前年度首に於ける國債總額の萬分の百十六以上とし三千萬圓を下ることを得ず。となつて居り、昭和三年度に於ける國債總額が五十八億圓だから、四年度の減債基金は六千七百萬圓、それに前々年度の國庫剩余金の四分の一が、減債基金に繰入れられるとしても、合せて七千七百萬圓餘であつて、一方、每年、（昭和九年度まで）電話事業公債、鐵道公債、植民地特別會計の公債で、一億九千萬圓の國債が募集せられるからして、差引どうしたつて一億圓以上の增加になり、事實國債は累積してゆくのである●これでは折角の減債基金制度も至つて影が薄い。我國の國債發行狀態が償還額を凌駕してゐることを知るものには、今更大童になつて、從來の定率繰入を定額繰入にしようとする心底も解せない。何故もつと事此處に至るまでに適宜の確乎たる方策を樹てなかつたのであるか。減債基金繰入額の問題だけではないのである。十七日の經濟審議會總會に於ける答申案に見るやうな、來年度より每年一億二千萬圓以上を減債基金に繰入れようとするが如き泥縄的不當なる減債基金繰入方法（英國の例をとつてみると、英國に於ける減債基金制度は一七一六年の古きより幾回も改正されたが、昨年又戰前に於ける舊減債基金制度が採用され、三億五千萬磅以上の巨額の國債費が每年普通歲出から支出されることになつたのであるが、元來英國は我國の租税制度と異り、間接税より直接税の重い國であるから、この制度の下でも一概に無產階級の負擔過重といふことにはならない）は少數銀行家には實行可能の案として喜ばれるかも知れぬが、若しこの案が採用されるならば、一般無產大衆の負擔は彌が上にも重くなるとしか考へられない。

それから剩余金であるが、これは三土藏相の「剩余金を使はずに殘して置くのは死藏するに何しい」主義で、最近殆ど食ひ盡してゐるので、よしんば英國の如く剩余金の全部を公債償還に充當したところで（經濟審議會の答申案には從來の四分の一を二分の一に改めてゐる）これ又何程にもならない。

以上述べ來つたところにより、現行法には幾多の改正を加ふべき余地があるのではあるが、減債基金繰入額增加は、財源のない今日もつと愼重に考へねばならぬと思ふ。

生產公債、不生產公債

公債を生產的、不生產的の二種に區別し、不生產公債のみ一定年限内に償還すべし、となすが如きは斷然不可なり、と銀行家は言ふのである。又、生產的、不生產的と、さう劃然と區別出來得べきものでもないし、投資市場の消化力を考へたならば、新規の計畫など立つべき時期でない、などとも云つてはゐるが、その腹は一圖に公債市價維持にあることは勿論である。が此くの如く只管新規發行を沮止するが如き態度は、結局不當に國債發行を抑壓することになる。勿論余りにだらしない增發は生產公債と雖も困るが、さうでなく、起債の目的なり使途なりが生產的なものでありさへすれば（軍務擴張と見做されるやうな鐵道敷設の如きも無いとは云へぬが）その國債費は當然負擔すべきであつて償還の途の立

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ち得る生產公債なら必ずしも之を抑止すべきでない。この意味に於て、公債財源とする事業を全然起すまいとするのは謬見であつて、若し然りとする時は、減債基金繰入額を著しく增加せざるを得ざる可く、從つて財政上の破綻を來さゞるを得ない。

經濟審議會も當初、既發公債を生產的と不生產的とに區別してゐたのであるが、十七日の總會では唯、國債總額を目途として居るところをみると、結局、銀行家の意見のみを重視したものと推察される。反面には無產大衆の負擔關係などはとんと考慮に容れられなかつたかとも思はれる。

元金均等償還方法

國債整理案の答申なるものは、曩にも述べた通り銀行家に對する極めてお座なりのものであつて、政府がこの儘採用するか如何か甚だ疑問ではあるが、大體銀行家の意を迎へるやうに立案されてゐる。卽ち、前述の昭和四年度末國債總額（約六十億千萬圓の豫定）を五十ケ年以內に償還するを目途とし、每年度一億二千萬圓以上を減債基金に繰入るゝこと。の一項の如きはそれである。これは銀行家の言を藉れば、整理當初より著しく償還額が增加する故、整理の效果が早速に現れ、金解禁前としては最も適宜の方法であると云ふのである。而して每年一億二千萬圓の償還を現在の七千萬圓に比べれば、五千萬圓の增額で、それだけ整理が早く進涉するといふのであるが、果して然らば銀行家は、現政府が五千萬圓もの巨額の節約を容易に成し得るとでも思つてゐるのであらうか。

財源難

畢竟、國債整理の實行に當つては、巨額の財源が必要であるが（新たに恒久的財源を要するのであるが、經濟審議會はこの點には殆ど觸れてゐない）この財源捻出が最も困難な問題であつて、結局、經費節約か增稅かの二途しかないのである。而して減債基金繰入額の增加は、つまりは無產大衆の負擔になるのであるから、減債基金の特定財源としては、直接稅中の相續稅の增徵なども考へられるのであるが、これ又實行難とすると、先づ當面の問題としては、財政の緊縮を圖り、國債整理基金特別會計法を改正し、既發不生產公債を相當年限內に償還する根本方針を樹てなければならぬといふことになる。

要するに根本に於て、無產大衆の立場を十分顧慮した方法によれる國債整理が金解禁に關連してゞなく唱道されて欲しいのである。

濱口內閣と公債政策

ところで田中內閣に代つて民政黨が、財政を引締め、公債の償還額を多からしめんとする主張は、かねて在野黨時代からであるが、今度はいよ〳〵それを實現して欲しいものだと、目下銀行家筋では切望してゐる。卽ち、簡單に言へば、前述の經審案に近い公債整理を銀行家は希望してゐる。ところで、特別會計に屬する起債を適度に抑制してゆくならば、行政整理に努力する限り、公債の新規發行額をして、その償還額より多からしめざることが出來る。と言つた濱口總裁が、經審案の、新規國債の發行額は每年度國債償還額を超過せざることの一項を認めることは勿論であらうし、國債總額は昭和四年度末現在額より之を增加せざるものとすること、卽ち、國債總額を約六十億圓に限定することも可能だと思ふであらう。とすると、濱口內閣も（三土前藏相はこの經審案は實行不可能な案だと評したのではあるが）依然銀行家の意見のみを重視する點に於ては、前內閣と大差ないのである。だから、謂ふところの財政緊縮、寔に結構ではあるが、根本に於て無產大衆と相容れない方法によれる國債整理ならば畢竟前內閣のそれと五十步百步だと評するより他ない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

政友會の細胞組織

永川俊美

一

細胞組織といふ言葉を聞いて、先づ想ひ出されることが二つある。一つはレニンが露西亞革命に採んだ手段であり、他の一つはムツソリニーが伊太利の一黨專制を實現せんが爲めに採んだ手段である。革命具現の爲めに、其の主義を宣傳し、之が信奉者を統制するに當つて漫然運動を初めるよりは、市部においてまた郡部において細胞單位をこしらへ、革命の種をこゝに播き、一つの細胞から他の細胞に順次布衍し擴張することのいかに有功適切であつたかは既に實驗せられたところである。

またムツソリニーが人民投票によつて單細胞の代表者を出させ各代表者を更にムツソリニー幕下の幹部に選擇させてその政るものは之を拒否するの權能をも占め、兎も角もフアツシズムの完成に奏功して居ることも人みな知るところである。田中政友會總裁が、細胞組織のもとに黨勢を擴張しやうぢやないかと言ひ出したのは無論、ムツソリニーの一黨專制を夢みて、往年の大政友會に君臨しやうといふ考へからであつたらう。

二

否、もつと端的に言へば彼は我が在郷軍人會の會長をして居たことがあり、根が軍人だけに其の組織と機能とを直ちに政黨にあて嵌めやうとの發意かも知れない。在郷軍人會は東京に本部を置いてある。その下に各地方聯隊區司令部に聯合分會があり、その聯合分會長は聯隊區司令官が兼ねて居る。聯隊區司令部の下には各郡に支部があり各町村に分會がある。田中首相はこの方法によつて黨勢に系統と組織とを與へやうとして居るやうである。即ち之を逆に見ると、各地方の小さい村や會社、工場等に三人乃至五人の黨員を掻き集めて一つの細胞をこしらへる。無論之にはその長を置く。之を集めて町村に分會を置き分會長を設くる。この分會を集めて市郡に支部を置き支部長を任命する。支部を集めて府縣に聯合支部を置き之に地方の相當なる有力者を拔いてその長とする。地方支部長は東京本部の黨務部總務部等の統制に入り之等の黨幹部は黨總裁の指揮を受けることにするといふのだ。この方法は何も珍らしいことでなく、政友會でも民政黨でもやつて居る。たゞ現在の政黨でやつて居るのはせいぜい地方支部位のところで、その下の組織が出來て居ない。田中總裁は深く之を遺憾とし、農村や工場乃至會社の中にも黨員を結束して、しかも黨員たるの意識をはつきりさせるが爲めに年額五拾錢位の黨費を徴收しやうといふのである。この黨費徴收の件については反對があるといふので、強制的にせず任意にやらせるといふことで、具體的の立案を熊谷黨務委員長に一任して居る。そのうちに七月初旬の政變となり、田中内閣は七月二日辭表を捧呈し同時に民政黨内閣が出來たから黨勢擴張どころでは

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

などが傳へられて何時この方法が實現するか疑問になつてしまつた。次の議會は多分に解散を豫期されて居るが到底政友會はこの新細胞組織によつて選擧に臨むことは出來まい。

三

そこで田中總裁が企圖したやうな在郷軍人會まがいの細胞組織はオジヤンになり、來るべき總選擧には地方資産家に何々長といふ名前を與へて抱き込んだり、選擧に備へるため青年團長を自分の黨派に掻き集めたりする位が關の山で、田中總裁が夢想する一黨專制の野望は絶望に終つたものと言へやう。

それは政黨と在郷軍人會といふものが本質的に異るからである。在郷軍人會は、イザ鎌倉といふ時に現役軍人と一緒に護國の大任につかうといふのである。命令一下直ちに出動しなければならぬので、その組織を完成し命令服從の關係がもつともうまく行はれなければ用を爲さない。然るに政治といふものは本來固定したものではない。政黨の政策は時と共に更新されねばならぬものであるが、その政策が何等かの理由により、時の政治家によつ

して之を支援するわけに行かない。國民の最後の一員にまでも之を徹底させることは必要である。併し各個人は獨立の人格あるものとして批判者の位置に立たなければならぬ。昨日までは政友會に居ても、自分の是とする政策が行はなければ他の政黨即ち民政黨に去るべきものである。尾崎行雄君は年來議會において黨籍離脱を簡明容易にせよと主張した。これは節操を賣れといふことではなく、利權や情實によつて舊來の黨人氣質を固守することなかれといふ意味において贊成すべきである。保守黨が相當に長い間にわたつて國民的信任を受けても一度び解散して見ると勞働黨の信任投票が多かつたのである。これは勿論フラッパーなどの新有權者の去就があづかつて力あつたとはいふものの一面英國の有權者が、その去就を極めて自由にして居ることが立證せられる。日本においても一黨專制で立派に國民の利福を增進して見せるといふやうな立派な實力ある政治家が生れて來ることは面白いことであるが、それは我々の生きて居る間には六ヶ敷いことであらう。今日までの

て地方の黨員を束縛しやうといふのは、甚だ好ましくないことであり、結局各細胞の長となるべき人は選擧の時のボースになる位のものである。我々は黨員を結成するといふよりも之を開放し其の好むところ信ずるところによつて去就を明かにさせた方がよいと思つて居る。無理に細胞を作つても、內閣が代れば支部長以下何百名何千名が束になつて反對黨の軍門に鞍換へするかも分らない。六月末まで政友會全盛の天下が今度は民政黨の天下となるのである。最後に一言して置きたいことは黨費徵收の件である。無産黨中でも勞働組合を有する黨脈では年額五十錢位の徵收をすることになつて居るが、これは紙の上の規定だけで無産黨でさへも實現されて居ない。本來ならば黨費は黨員が負擔すべきものであるが、今日の政黨では黨員が金を寄附するといふやうな殊勝な考へがなくても、消極的に政黨の走狗となつて利權運動をやつたり惡錢を取らうといふやうなことがなければそれだけでも澤山だ。僕は政友會の所謂新細胞組織による黨勢擴張案を實行案としては差したる効能なきものと認める。(七月二日)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

新閣僚人物評

小泉、渡邊、井上、松田その他

山浦貫一

頑強に押切るを以て得意とする駕籠かきが、箱根峠の嶮を汗だくで押し上る。も一息で小田原へ出やうといふ所、神さびた杉並木の間からバラ〳〵つと走り出た二三人の薩摩浪人が、其の駕籠よこせといふ間もあらせず、九寸五分が閃めいた。雲の上から手裏剣が飛んだ。駕籠は手もなく往生した。――長州生れのお六尺であつた。

京都の公卿が立現はれていふ事に、今時人殺をして駕籠を奪ふなどは時代が許さぬによつて、まかりならぬ。コレ〳〵土佐のライオン、お前に預けるから、サツサと小田原へ擔いで參れ、と來た。加害者はアブ蜂取らず、もうけた奴は箱根山の憲政常道で駕籠を拾つたライオンであつた。此の男は、チョン髷姿である。

チョン髷も、お六尺も昭和時代に重用する代物ではない。後者が[illegible]

[illegible]入れた大分生れの算盤方がケチで、宿場々々へチップの出し惜しみをするので甚だ評判が悪い。もと〳〵、其の約束で雇つたのだからライオンもチップをはづめとはいへぬ。道は案外けはしい。

小泉又次郎

私は彼が好きだ。官僚嫌ひ、貴族嫌ひの自分の趣味からいへば、殊に、民政黨の中に求めて小泉型の男は極めて稀である。彼が一枚閣僚に加はつたことによつて、貴族官僚内閣の政黨的カモフラージュがどんなに成功して居たかを考へる。それから何ほ、民政黨に同情を以て見る時に、彼一枚加はることによつて、閣僚に漏れた連中の反官僚熱を緩和する誑の役目をなし、又政府と、與黨とのよき緩衝地帯を設[illegible]

[illegible]



小泉又次郎氏

民政黨が野黨時代でも、所謂大幹部安達、江木の徒は濱口總裁を裝飾品と心得て專横を極むる官僚系であつて、彼等に取り入る者でなければ用ひられないといふ不平は隨分聽かされてゐる。彼等は事實有能の士で仕事をすればする程、仕事の出來ない人々は不平である。官僚は由來仕事にかけては山縣以來定評があり、官僚内閣が有數の貢獻を殘してゐることは日本歴史が證明するが、然し、政黨内閣時代では、政黨が基礎で、政黨とはまあ手つ取り早くいへば多くの雲助的人物の集團であること日本に於て典型的である。で民政黨は桂太郎の流れを汲む官僚黨であるとはいへ、政黨である以上、惡くいへば雲助、上品にいつて野人が澤山、中に棲んでゐる。これが不平を起こす。

今は、事實上の總裁である安達内務でさへ、しかも重用な選擧守をつとめ乍ら加藤高明時代には純官僚であるが故に重用されず、政務次官になれといはれて、歯を食ひしめて斷はつた事がある位だ。小泉や、いまはおん出た田中義一や、富田幸次郎やの野人系が輕視され、不平の裡に日を送つた事などは當然であつた。若槻時代から、濱口時代となつて兎も角、時代の流れを知り、政黨の本質を苦笑の裡にも判まへ小泉を閣僚にする樣になつたのだから、高明時代と變りは變つたものの矢張り主流は官僚、及び之に阿附する者等で、この反對者流は概して不過だ。中から小泉又次郎が重用されたのだから、民政黨内閣では特記する必要を生ずるわけである。

小泉の入閣は、黨内は勿論、反對黨政友會の中でも好評を博してゐる。といふのが、何も小泉が大臣になつて抱負經綸を實行するとか憲政を立派にするとかいふ意味では決してない。民政黨内でいへば、官僚に對する不平のやり場、及び黨の爲めに眞劍に働いて來た不遇の人への論功行賞に氣をよくしてゐることであり、政友會の方でいへば、小泉といふ人格が、別に光りもしないけれど、玉の樣で、人間に嫌味や臭味がなく、單純で、男らしくて政黨人のよき典型だから、と及び彼は、反對黨の邪魔になる男でないからだ。

小泉が、政友會の粕谷義三の議長の下に副議長をやつてゐる時分に、騷動が起り、議長不信任といふ樣な破目になり、粕谷は辭職した。時に、反對黨選出である小泉も亦行動を共にして辭職してしまつた。

さういふ事に感じ易い田中政友會總裁は、『あんな男らしい男はない』と、使者を以て贈物をつかはしねんごろに見舞つたことがある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

其の使者が藤田包助といつて、久原の秘書官をつとめてゐた長州の男である。

其の藤田が、浪人になつて、早速官舍を引き上げればならず、自動車を返上しなければならぬ。それを見た、新遞信大臣がいふことに、いゝよ、緣の見つかる迄ゆつくり住んでおいでよ、自動車も當分使つておいでよ、こつちの人が當分使用を差しひかへれば濟むのだから…………と。何でもない樣で闘犬的黨人には一寸言へない。ここに小泉がある。

◇

小泉は横須賀の親分だ。其の父親が請負師で、人入れ業といふ、つまり土方人夫の差配だつた。それを小泉が引きついだわけで、政治家としての出發點もここに在る。

最初は、彼の兄が家業をつぎ、彼は海軍々人になる積りで攻玉社に學び、相當な秀才であつた。英語も數學もよく出來て、立派な軍人の卵だつた。それで、いま彼の其の時分同級生には海軍中將がゐるといふから、其の儘進んだら小泉も豫備海軍中將位になつてたかも知れないが、但し誤つても大臣にはなれなかつたらう。

で、攻玉社時代に兄に死なれた爲め、横須賀に歸つて人入れ業を繼いで、親分になつた。

この年代に、横須賀は[illegible]

對自由黨の立場から自然進步黨の人になつた。壯士を征服した。勝つた町民は親分に感謝した。それから町會に出る、市會に出る、縣會に出る、議長になる、代議士に出る、といふ調子に中央の舞臺へせり上げられて來たのである。ポーツマス事件の時は、大竹貫一、小川平吉等の尻馬にのつて縛られ『神奈川縣の小泉を知らねえか』と腕を捲つたといふから、日本の小泉といふ自信は當時まだなかつたのであらう。

彼は幕末の俠客を昭和時代に殘しておいた樣な男である。俠客は喧嘩をすると定めれば背水の陣を布くが、なか〳〵やらない。血氣にはやる若物が、彼に叱られてゐる圖を見る。親分に借金の尻ぬぐひをさせて、迷惑をかけ續ける男もゐる。彼は別に不平も洩らさなければ叱りもしない。叱りつければ、後で自分の方から氣嫌を取つてやりさへする。

圓熟期に入つた俠客は、佛像を愛し、茶道を習得し、毎に珠子を手首にかけてゐる。精神を靜寂の境に置く爲めだといふ。半島と號して書もかく、却々上手である。と一面持つて生れた性質の闘爭的で、猛犬を飼つて喜んでゐる。四十圓の家賃が滯つて訴訟を起こされても猛犬に牛肉の上等をやる金だけは工面すると見える。

小泉の憲政改進黨に於ける位置は安部磯雄の社會民衆黨に於けるこれ

[illegible]

在し得る政治家といふのも品切れであらう。政治家はもつと、知識的で、細かくなりつゝある。さういふ意味で。安部さんや小泉君は充分珍重されて然るべき値打がある。古いからといつて捨てるのは、國寶保存上輕卒至極である。

渡邊千冬



渡邊千冬氏

憲政の常道に建策された民政黨内閣を論ずる者に取つて傍系研究會からの入閣者は重點をなす。常道に穴があいたといふ闕だ。彼は五十四才で閣僚中の最年少、さりながら研究會革政派の頭目である。革政派は倒閣に奏効した。かるが故に濱口内閣は彼に椅子を與へた。革正派といふのは、青木信光や、故水野直の舊派利權派に對してつけられた名で、リーダーは渡邊である。一昨年のこと、青木一派の横暴が餘りにも劇しいので、研究會内に革正の旗を掲げて反感をやる者が起つた。渡邊が旗をふつて、遂々、青木をして常務をやめさせ（自分もやめたが）てしまつたことがある。之を轉機に飛ぶ鳥を落す青木、水野一味の勢力は水の低きにつくが如く平均されかゝつたので、もし青木が常務に復活しなかつたら、もつと好都合に平均されたかも知れないが、其處に、智者渡邊失策の卷といふのが展開される。

御大典の京都で、研究會子爵團の最高幹部會ともいふべき子爵十人會が開かれた。青木信光、牧野忠篤、前田利定、井上匡四郎、渡邊千冬、八條隆正、伊東裕光、水野直、大河内正敏等が集まつて、次の常務委員選任の下相談をした時に、八條隆正が、渡邊をうまく一本引つかけた。

『渡邊君、君には是非出て貰はなければ……』

根が青木と抱合心中をした迄で、復活したいは山々である。が抱合の相手を其の儘にしてをいて自分だけ出るのは義理が惡くもあり傍々、一寸世辭をいふ必要も感じられたので、

『さあ、青木君も出られるなら僕も出てもいゝ』

といつてしまつた。そこへ、青木信光は喰ひ下つて、常務に復活し來り、そろり〱。と昔の利權的本性を發揮し出した。もし渡邊の失言（？）さへなく、單に『御推擧とあらば』位に石を置いときさへしたら、抱合の相手と二人で浮び上ることはなかつたのである。で兎に角青木、渡邊は舊派と革正派を代表して再び表面に相見ゆる段取りにな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つてしまつた。しかし研派の三分の二に對する三分の一の勢力しかない渡邊一派の積極的行動は、灰色議員を、無記名投票の雲間に誘つて假定問題決議案、即田中內閣倒閣運動には十何票で勝利を獲得した。

それに酬いる司法大臣の椅子一個。相當値段の高い椅子である。千冬、實父は元宮內大臣伯爵渡邊千秋、養父は叔父、元大藏大臣子爵渡邊國武何れも信州高遠の藩士である。千冬、赤門の佛法を出で、日佛銀行の支配人、東京每日電報の社長をつとめたることあり、明治四十二年、鄕里から政友會代議士に當選一同。貴族院に入つては、約十年の時間を經たるに過ぎず、役人になるは一躍大臣が最初であつて、——まあ幸運兒の見本である。

人物はといふと、信州人の特性たる議論家で、圭角がある代りに統率力や抱擁力はない。學識と、頭腦と、辯論にかけては、研究會、いや互選、勅選を算へて第一流たるを失はない。押しが強くて、頑強に力鬪をするから、因循で、卑怯な舊華族共を壓迫してしまふ。それが、三分の一の勢力で三分の二の研派を壓迫する所以である。

もし彼に、子爵といふ冠やまた親讓り七千坪の邸がなくとも四十一年來代議士で政友會に籍をおいてゐたら、政務次官位にはなつてゐたであらう。そして、今日は在野黨として、民政黨內閣の官僚貴族臭味に攻撃の鋒鋩を向けかけてゐたであらうことを思へば、矢張り子爵

間違ひがない。

信州人の議論癖をカモフラージする爲め、といふかどうかは知らぬけど、養父國武の無邊居士を眞似、無劍居士と稱して禪道に精進することを心得、謠曲をうなりヘボ將棋をさし、酒をたしなむ。勿論女をたしなむ事は、酒をたしなむ者にとつて普通だらう。紅街の妓等の評判によれば渡邊の御前は、ぢきに議論を超越して實際運動に移るから危險だ相である。一劍天によつて寒し、まさか禪の妙諦と心得てゐるわけでもあるまい。

も一つ、彼は糖尿病の學理、實際兩方面の研究にかけては、本職の醫者以上で、仲間に患者があると、押しかけて食餌療法を教授するくせがある。不思議に、彼のいふ事をきいてみれば全快する相だ。死んだ水野直などは、いふ事を肯かなかつたから早く死んだので、肯いたり肯かなかつたりする船越光之丞は、なほつたり惡くなつたりして生きてゐる。——この學識經驗は、彼が倒閣運動の學識經驗よりも遙かに尊敬されていゝといふことである。

序でにいふ。彼の入閣を喜んだ者は、女房子供や子分等よりも寧ろ反對派の青木信光一派だといふ。といふのは、入閣すれば、渡邊の研究會に於ける押しが利かなくなるからだと。否か、われ知らず。識者に於て之を見ん。

井上雅之助



井上準之助氏

正金銀行頭取の時代、時は寺内内閣對支西原借款事件といふのがある。時の藏相、前文相勝田主計が、井上に正金からも金を出す樣持ちかけたが、明敏な彼は、其の失敗を先見して應といはぬ。いふ事を肯かぬなら馘ると脅せば、『政府の役人とちがつて、こちらには株主總會で決めた任期がありますからネ』と空うそぶいて頑張つてゐる。おかげで、臺銀や、鮮銀や興銀の樣な、不良貸出しのボロを出さなくて濟んだ。これ、彼をホメる者の第一に擧げる話。

所が彼日銀總裁時代に正金の梶原を強要して今はロンドンに亡命して社會學を研究し、相當以上に赤くなつてゐる茂木惣兵衛に一千萬圓といふ大金を貸出させ味噌をつけたのも彼の經歴である。之が惡口屋の擧げる第一の例である。彼を評する場合、ほめる者と、ケナす者と七三位の割合にいつて居やうか。

常に、自分は政治には赤の他人である。政黨は嫌ひだとふれまわつてゐる男が、政黨内閣の心臟部にすわるのもすわる者だが、据ゑる者も据ゑる者だといふ論は常識的である。私にいはせれば、頼まれれば越後から米つきにさへ來る。名譽ある大藏大臣になるのは當り前の話しである。ケチをつけるならば、大藏大臣候補者がウヨ〳〵してゐる、と稱するくせに、山本達雄出でず、若槻に勇なく、前科者の片岡再用に危險あり、ノンキナトウサン町田忠治では危なつかしくて安心が出來ない、といふ、民政黨の基幹に對して中すべし。井上は人間だ。人間には名譽心もあれば、彈力性もある。常平常の持論を裏切る位の事が出來なくて教師牧師以外の何の仕事が出來るか。大いに食言すべし、これでこそ政治家としての價値があるといふもの。

とまれ、かくまれ、濱口内閣は、唯一の使命を財界の整理緊縮にをく。金解禁即行の主張の手形が振り出されてゐる。等々々、この役目を果すべく、井上準之助を雇入れたのは、憲政常道にはちと反するかも知れないが、常道を屁とも思はぬ人には蚤程にも感じない。由來、憲政の常道なんかは子供欺しの大僞者樣だから構はない。

組閣三日にして政府の發表した井上案を基準とする財政大緊縮の具體案は何といつても勇敢だ。金解禁への第一準備としては誠に尤もな處置で、政黨屋の黨勢擴張の實際運動にそはない新規事業見合せ等を勇敢に主張するなどは、矢張り雇兵でなくては出來ない。濱口もよく容れたと感心する。

黨人は然し決して消極緊縮政策を喜ばぬ。鐵道の繰延をやられては

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

困る。港灣修築をやめては選擧に困る。新規事業一切中止と來ては、選擧區への說明に困る。個々の代議士は、國家よりも地方が生命である。井上頑張るか、代議士彼を征服するか。兎も角井上は民政黨員でないから問題だ。

それは、先きの問題。井上の人間を語らう。二十九年大學卒業。時の日銀總裁今民政黨顧問山本達雄と同郷關係で日銀に入る。月給三十五圓。一年にして四十五圓。現總裁土方久徵と同期の行員。……やがてロンドンに派せらる。桂太郎、研究會操縱の必要上、其のリーダア三島彌太郎を正金銀行の頭取となす。三島素人なるを以て女房役を必要とす。井上乃ち副頭取となる、三島日銀總裁に轉じ、井上正金頭取となり、次で三島の後をうけ日銀總裁となる。年俸一萬圓。半期賞與三十萬圓。山本地震內閣に藏相となり三ケ月。日本に初めてモラトリウムを施行した人。田中內閣成る。先輩高橋是清前首相の肩書を顧みるなく、藏相として入閣、臺銀救濟其他財界救濟に大童なるの時、市來乙彥の盆倉を日銀より追ひ懇請して井上を再び日銀に入れる。若槻內閣が、二億圓の臺銀救濟案で、樞密院と喧嘩別れして野たれ死にしたる後、井上案の五億圓が天下に通用す。井上のケチヅケられる所以。

彼は立廻りが早い。ソツがない。西原借款にたてをついたといへば[illegible]の敵だが、若槻內閣で藏相片岡失言博士の最高顧問格であり皆ら、[illegible]片腕の片腕にもなつてくれなかつた。かくの如くして彼は封建時代の馬鹿らしい單純さを有たない。所謂臨機應變する彈力性をもつ。濱口は、男性的で、單一玉碎主義で行くと稱して居る。尤も田中內閣も組閣當初そんな宣言をした。井上が果して最後迄、濱口と協同戰線に立ち得るか？　果して濱口は、爆彈として井上を迎いれた結果にならぬであらうか？　こゝが濱口內閣への疑問である。

井上は英國流の紳士を以て自任する。品行は勿論いゝ。先づゴルフをやる。本をよむ。大日本靑年會の團長である。人間がガッチリしてゐる。隙がない。正金、日銀に勢力をのばすべく、嫁の世話もすれば、貧乏の始末もつけてやる。それを擴大して、和田豐治のなき後は、澁澤第二世を以て自他共に許し、財界の世話人をやる。何でも六かしい事は井上にもちこんで始末して貰ふ。ボロ銀行の合併、東洋汽船の郵船への併合、會社の創立、等々々。

政黨內閣の心臟部たる大藏大臣となり、やめたら又『僕は政治の門外漢でね』とばかりに財界世話業に逆もどりする積りであるとすれば、餘りに兩股をかけすぎやう。尤も、桂太郎が正金へ入れ、原敬が日銀に入れ、政治的敵同志の山本達雄、高橋是清の兩方に可愛がられた兩方へ義理がある人だから、その邊の所はうまく片づけるであらう。ボロ銀行のボロかくしに賴まれた時の手腕で自分のボロ隱しをさせ[illegible]。

松田源治



松田源治氏

放浪兒

床次が、憲政會に合併して民政黨を作つた時の紀念像松田源治、松田が、床次と同樣の放浪性を持つて、再び民政黨から旅立ちをしてゐたら、大臣にはなれなかつた。床次が脫黨して、後から舊本黨系の糾合を策した時に敢然として大義名文の旗をふり理論闘爭を開始したのは松田である。殘留して、矢張り大臣に有りついた小橋一太の如きは、理論よりも便宜主義、大臣慾打算であつたが、松田は、あの厚い唇に、蟹の樣な泡をふいて、脫黨の非論理的なる所以を說いた。此の男には、小橋の樣な智慧も策もないかわりに、言ふ事に裏も表もない。そこが値打で、濱口御大に信用され、德とされ、利權者といはれる拓務へも、小橋より松田の方が安全とされた原因だと、消息通はいふ。

松田なら利權はやるまい。根が政友會育ちで、利權屋の交際は多いが、未だに私用自動車一臺も有せず、折角建てた青山の文化住宅を興銀か勸銀かへ擔保にぶちこむ位だから、利權に見はなされた樣な男であらう。此點小泉と同樣、買つてやつてよからう。それとも一つ、所謂野人である點が、小泉とたつた二人此政黨内閣の異彩として、官僚色稀薄劑になつてゐる。古い日本大學の出身、判檢事辯護士の試驗をとり、一時裁判所の小役人をしたことはあるが、それも官僚の色つく程でなく、辯護士、代議士としての生活が本筋であつた。原内閣の時、原が松田を內務省の勅任參事官にしやうといふと、蟹の樣に泡をふいて政黨人の本分を論じ、黨人が小役人になるのは墮落である、と結論して頭を縱にふらなかつた。それを、原が逆手でなだめ『君達は役人の經驗がないから大臣になつた時に下僚の事務が分らなくて困るぞ、吾輩などは役人の經驗があるから少しも困らない』とやると、彼、ポンと膝を叩いて『大臣學修業とあらば小役人でも何でも勤めます』と欣然內務省へのりこんで勉强をはじめた。稚氣、無邪氣、單純、理論闘爭、そして自稱西園寺の親友、かるが故に、彼れは人から可愛がられる、られぬ迄も決して惡まれない。かるが故に、たとへ官舍一つない貧乏省伴食といへども、新役拓務大臣となつたわけである。沒理論の放浪兒先輩床次が七年も冷飯を食ひつゞけ、遂に道樂息子、故鄕に歸るの時、彼は、舊本黨系を代表して、小橋一太と二人大臣になつたのである、單純は勝つ。世の中はせゝこましくなつたが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でも小利巧な奴より單純で押して行く方が勝つ。其の見本が松田君である。



小橋一太氏

新内閣の中で、小橋一太は、同じく舊本黨系を代表してゐるが、政治家としての輪廓は松田よりも大きく廣い。原内閣の時分、床次内相の下に小橋が次官、松田が勅參であつた。二人は、今にして、當時の反對黨の下に並んで大臣になつた。小橋は、安達謙藏と共に熊本である。憲本合同以前は、しのぎを削る政敵、それが手を握つて行ける所に政治家の彈力性がある。しかし、熊本では、小橋の方が家柄もよく、市内の出であり、安達の方は市外の庄屋の伜であり勢力も並立してゐたのに、今の位置は、軍配上安達隊で小橋には文部の伴食、[illegible]



俵孫一

俵孫一の大臣は、同郷島根縣先輩若槻禮次郎の推挽あり、一方濱口とは二十八年東大卒業の同級生である關係から、同郷、同窓、同情の三條件揃つての結果である。たゞ夫れだけのこと、取り立てゝ記述する程の特異性も面白味も持つてゐない。無難な醇吏。濱口内閣は、玉碎主義で行くだらう。それは嚙りつき田中内閣よりも日本人の趣味に合ふだらう。濱口は、根は官僚でも、男性的な線の太さを持つ。兎にも角にも輕母しさうな面構へをしてゐる。大丈夫だらうといふ印象を與へる。鎌倉への週末旅行にマルクスを讀まうといふ勉強心が、時代を解釋する上に、よき點となるならば、[illegible]

狂院センスの一瞥

齋藤玉男

「當直明けに一歩陰慘なコンクリート塀の外の世界へ出ると、慥かに明るくて空氣の比重が輕く感ずるネ」と、精神病院の宿直醫である友は言ふ。「併し外の世界へ出ると同時に或る警戒本能が活らき出して、院内で味ふ安心さが失はれることも慥かだネ」とも付加へる。

心の武裝。さうした現代生活を特色づける緊張味は院内にはありやうがない。そこは生き馬の眼を拔かれ了つた連中のクラブであるから。そこでは又階級意識と言つたやうなものも完全に輕蔑されて、張りのない灰色の無差別だけが支配する。併し狂院には狂院相當のセンスは活らく。それは外の世界に思の外にナンセンスが多く轉がつて居る割合程には及はないとしても。

愚直が惡と同義でないならば、狂院の住民は慥かに善人である。勿論彼等の或者は惡人として扱はれたい野望に燃えても居るが、彼等が惡人らしく振舞へば振舞ふ程、そこからもこゝからも善人らしい破綻が覗き出すのは可愛らしい。彼等の惡戲には相手の微笑を誘ふ小間さがあり、彼等の兇暴は言はゞ豫告された兇暴である。精神病者として彼等に不足を感ずる點がありとすれば、それは機智とユーモアの完全な缺乏である。併しこの三つはこの民族には恐らく狂院以外にも缺けて居ると言へるには言へる。特に彼等のみを責むべきではなからう。

ところで此狂院センスは徹頭徹尾外の世界から指導され啓發される。就中外の世界のナンセンスから誘導される。其筋道を見守ることは彼等の爲よりも寧ろナンセンシアルな所謂非狂人の爲に或る教訓にならぬでもない。

× × × ×

議會の亂闘劇が始まる。政友席も民政席も一齊に殺氣立つて、守衛が右往左往に馳せ違ふ。見渡すところ泰然たるのは我安部先生位のものである。イヤ其安部先生すらが恐らくは内面的の興奮に捉はれずには濟まぬらしい。尤もらしい理由はどうあるにしても一寸した議場の空氣の動搖がかうしたナンセンスに導いて、それが議會政治否認の材料となつたりする一面には、首相官邸への面會強制となつたり直訴狀の調製に切ッかけを與へたりする。世の選良諸君はどうか諸君の一擧一動が狂院の中の妄想の發育にまで影響のあることを考慮して頂きたい。

實際世相の進轉なしには狂院の精神生活は萎縮して仕舞ふ外はない通りに、外の世界の囑目事は片端から狂者のセンスに何等かのイ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ムペータスを與へずには置かぬ。彼等は自分の秘術が現に淺草で映寫されて居ると訴へたり、自分への逮捕命令がラヂオで放送されたから天涯地角に隱れ場がなくなつたと悲んだりする。是等は勿論二十年前にはなかつた症狀である。いづれ自分と來朝途中の某國皇子との愛の場面がトーキーになつたなぞの最新式の妄想もはぐくまれることであらう。其癖本人は五十近い寡婦であつたりする。

狂院センスが外の世界へ働らき掛ける例は、古くは相馬事件なぞがある。多くの場合彼等の感情が餘りに一圖で、表現がかなりにもどかしい事情が、外部の人の同情を集中させて一肌脫がせる迄に燃燒させもするが、當の本人は案外差のべられた救の手に無關心であり勝ちである。併し一面には誇大妄想者の妄想の展開が、一九一六年十一月十一日午前十一時まで全世界を被征服の恐怖におののかせた事態も現前にないではない。

一概に狂院センスが外界の事態に[illegible]

之を人間生活の特殊相として眺め入るまでの洞察が到つて居ないことは餘儀ない次第である。藝術に於ても同じ事が言はれる。

× × × ×

謠曲の「隅田川」や所作事の「保名狂亂」や「お夏狂亂」の取廻はしには或程度便りないたど〳〵しさのリズムが織込まれて居るが、詞の運びや正氣と狂態との轉換なぞには不自然で態とらしい箇所が目立つ。勿論狂亂物は本來狂者を如實に描寫する意圖ではなく、狂者を假りてそこに一つの藝術境を展開させる筋道ではあるが、それにしても同じくは自然に依存した至境の展開されるのが技巧の上乘なものであらう。一體に一頓に狂氣になる仕草やフッと正氣に戻る取廻しに今一息と思はれる所があるやうに見える。「屋上の狂人」は早發性癡呆者の行動を相當如實に描寫してある。「句樂の死」には輕快した狂者の心許なさが出ては居るものの、時々[illegible]

も危な氣がない點は一等である。「罪と罰」のラスコルニコフの酒場での出來事を一々我身に當て付けられるやうに感ずる工合や、後から後からと自責が湧く筋道やは、作者自身の癲癇病と思合せると凄い程眞に迫るものがある。

ウフア製作の「カリガリ博士」は表現派式のセットが先づ效果を擧げて居る。夢中遊行者が乙女の美に迷つて殺意を飜すあたりは矢張映畫だナと微笑させる。結局カリガリが現實の院長に融け込んで仕舞ふ大切りも夢幻的でよい。其他の狂亂映畫は多くは狂院センスに「甘へものだ」と一概に片付けられる口である。

× × × ×

いや卒直に白狀すれば精神科の專門家が誰よりも狂院センスに輕蔑されてよい資格があるのかも知れぬ。長いこと專門の飯を食ふ中には、婦人や其家族から聽きあつてお[illegible]

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

言つた豫感を抱いたことは殆どない。狂つて仕舞つてから「さう言へば」と思當る節はあるにしても、それは素人でも思當る程の思當り方に外ならない。さう言へば今のところ所謂専門智識は、狂つた者に云々の行動があつて云々の結果になるとまでは見當が付くが、云々の行動がどうして現はれるか、之を現はれさせずに濟ます方法はないかの大事な點になると、大分タヂタヂの姿である。

此點内に省みて少からず心細くもあり外に對して大いに面伏せな次第でもあるか、併し假りに銀行家に貸付先きの破産狀態が一々豫知出來たら、此上もなく便利ながらに扨て心の安靜は一寸も得られない結果になるであらう。この邊の兼合は聰明な狂院センスに反問して見たい點でもある。

× × × ×

白狀序でに、「狂人は心境の大凡三分五厘が狂つて殘りが健康同然であり、非狂人は心境の約三分三厘が錯亂同樣であり得て殘りが健康である」と言つたら言過ぎであらうか。場合によつては狂と非狂との相違は之よりも些細であるとも言へる。たゞ非狂人にあつては健康な部分が略々完全に錯亂同樣な部分を支配するが、狂人になると其三分五厘が殘りの健康同然に適用出來る部分を支配するだけの相違はある。

この「だけの相違」の「だけ」は併し大きな影を社會に投げる。非狂人では此「だけ」あるが爲に彼が有つあらゆる弱點惡徳に拘らず兎に角環境に適應して、際どい瀨戸をするりするりと潛ぎ抜ける。社會善に適應する通り社會惡にも適應する。狂人に至つては「だけ」を缺く悲しさに到底善人以外ではあり得ない事情から、何よりも先に社會惡に適應し了せない所に最初の破綻を曝したがる。

かくして彼等は適應能を缺くが故に、從つて社會惡を摺り抜け得ないが故に、殺傷放火其他の反社會的行動に出でもする。彼等が反社會的であることは偶々彼等が相當まで社會に關心を有つ證でもある。狂人個々は想像以上に社會に依屬し指導されるか、さて彼等同志の間には殆ど何等の交渉がないのを常とする。此意味で狂人社會と呼ぶことは畢竟無意義である。

數が物を言ふ現代にあつて非社會的孤立の存在を保つと言ふことは狂者にとつて宿命的な弱味であると言へる。彼等の存在は譬へば夏場の安氷店のガラス暖簾のやうなものである。縦には社會に依屬するが横に同志の間には連絡がない。そしてしかく安價で脆い存在でもある。假りに彼等に横の連絡があるとしたら、淨化市會に少くとも二名の代表者を送つて、狂權確立の提議に花を咲かせる位は朝飯前であつたらうに——。併し箇々獨自の世外界に立籠りつゝ外界のナンセンスに呼應して互に聊かも相干さない所に狂院センスの誇があるとすれば、是又飄逸な存在でないこともない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

穗積、宮崎兩博士遺著の新刊

福田徳三

前號掲載の新刊讀餘錄樣のものを時々寄稿せよとの改造編者の需に任せ、以下二三回續筆して見ようと思ふ。しかし編者の都合もあることゆへ、必ずしも連月掲載を乞ふわけには行くまい。よつて此處は近く刊行せられた穗積、宮崎兩博士の遺著だけに限り、而して少し仔細に卑見を開陳して見ることにした。私の坐右には未だ數十册の新刊書が、或は全く或は半ば讀まれたまゝに置かれてある。其内私がついて卑見を述べて見たいと思ふものは、十數種に上るのであるが、果して其全部を掲出し得るか否か、私は其れを知らない。しかし、私の興味にして失せ去らず、改造の誌面これを許す限りは、寄稿しようと思ふ。讀者の諒察を乞ひ置く次第である。

（一）法律進化論　第三冊
神權說と民約說
祭祀及禮と法律
慣習と法律
（以上　岩波書店發行）
穗積陳重遺著
穗積重遠編

（二）宮崎先生法制史論集
（同上發行）
宮崎直三郎遺著
中田薫編

富井博士の民法原論を迎へて後幾干ならず、我々は又た我法學界の二大長老の遺著の新刊に接するの幸を有つ。穗積博士の遺稿を編纂續刊する法律進化論叢第三冊の『慣習と法律』と、宮崎博士生前の諸論文を編成した『宮崎先生法制論集』の二書これである。私はこれら三書を手にして、日本法學界の多幸を衷心から慶祝せざるを得ぬ。これらは、ひとり日本法學のモヌメンテたるに止らない、世界の學問の立場から見ても、貴重なる貢獻である。之れに反し、私は我經濟學の如何にも薄倖なることを恨まざるを得ない。若しも、法學三長老中の一人たりとも節を屈して我經濟學に降り來りてありしならば、我學の面目は今日とは著しく異つたものであつたに相違ない。私は天の配劑に對して不平なきを得ない。

さて穗積博士の『慣習と法律』は、『法律進化論』の大系中、第一部『法原論』の『原質論』中『習俗規範篇』を構成すべきもので其れは『德義規範篇』所屬の『禮と法律』につゞくべきものだらうと思ふとは、遺稿の編者重遠博士の記すところである。依つて、私は、此機會に於いて、著者の死後其遺稿中から今日までに出版せられた『法律進化論第三册』を中心とし、兼て『神權說と民約說』『祭祀及禮と法律』の二書と併せ考へて、若干の卑見を開陳して見たいと思ふ。其は、單純な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る禮讃推賞文は別として內容について商量した紹介又は批評を今日まで見たことのないは、著者の敬畏す可き刻苦勵精に對して酬ゆる所以でないことを兼てから痛感しつゝあつた爲でもある。元より私如き專門以外の者の言ふところは一顧の値だもあるまい。唯私の此文が數千を以て算する博士門下の專門學者を刺戟して、更らに眞に學問的な批評の業を試みる人出るに至らんことを希ふの微意に外ならない。

「法律進化論」は、著者畢生の研究を集大成して、其の所謂法律動學に關する抱負を披瀝せんとする規模宏汎の大著述である。其結構は、第一卷總論中に記すところによれば、實に左の如くあるべきものであつた。

第一部　法原論

法現象發生の狀態を論究す。これを更らに三部に分つ。

(一)原形論。法律は如何なる形態を以て發生するかを論究す。其目的は、法なる統制力は、如何なる形態に於て、始めて吾人の認識に入るかを明かにするにある。

(二)原質論。如何なる種類の統制力が法律の元質となるかを論究す。其目的は如何なる統制力が法規として現れるかを明かにするにある。

(三)原力論。法律なる統制力は如何にして發生するかを論究す。其目的は、法の元質たる統制力が如何なる過程によつて公權化するかを明かにするにある。

第二部　法勢論

法現象變遷の理法を論究す。これを更らに三部に分つ。

(一)發達論。法の內因的進化、卽ち人種、民性、地勢、政體、宗敎、德敎、輿論等の如き其法境中に自發內在する原因に基く法の進化を論ず。

(二)繼受論。法の外因的進化、卽ち外民との觸接に起因する外法の模倣、採擇、及外國學說の立法裁判等に及す影響を論ず

(三)統一論。法の世界的進化、卽ち法は、文化の上進に隨て常に世界化せらるゝ傾向を有し、各國民は竟に自國特有法と世界共通法とに依つて支配せらるゝに至ることを論ず。

(以上法律進化論第一册總論八頁及び第三册緖言一—二頁による)

而して、著者は、生前第一、第二兩册を刊行した。其れは、原形論前篇と後篇とを含むものであつて、前篇は、第一編無形法(これを四章に分つ)後篇は第二編成形法(これを七章に分つ)をのせてある。著者はもと全六卷十二册を以て法律進化論の全部を論述する計畫であつた由であるが、右二册を刊行したときすでに、此計畫を完全に實現するの困難なるべきを豫想し、「今や齡既に古稀に達し老將に至らんとするに及んで全部六卷の計畫中、僅かに第一部の上卷二册公刊し得たる如き遲緩なる功程にては、生前に於て計畫の半ばを成すことは不可能かと思はれて」「故に已むを得ず剩餘の部分に付ては、其順序に拘はらず、案の成るに隨うて之を別册とし、各其體系中の所屬部を示して之を刊行し其一卷を成すを萬一に僥倖せんとするもの

である』（第一册序文三―四頁）といつて居る。されば、今私が茲に紹介せんとする諸篇は、著者若し世に在らば、更らに具さに推敲を加へられ、補訂せられた上で公刊せられたではあらうが、此のまゝでも、大體に於いては、著者の意圖を遺憾なく實現したるものなるを推察することが出來る。

即ち法律進化論第三册は、第一部の（其二）原質論の前篇をのせてゐるものであつて、信仰規範、德義規範、習俗規範の三分類中其一分類に屬し、續いて『法律進化論叢』第一册として刊行せられた『神權說と民約說』は、（其三）の原力論の一部に屬するもの（編者序文六頁による）であり、『論叢』第二册の『祭祀及禮と法律』は、（其一）原質論中の一は第一分類「信仰規範篇」へ、他は、第一分類『德義規範篇』に屬するものである。更らに最新刊の『論叢』第三册は、同じ原質論の第三分類「習俗規範篇」に屬すべきものである。今便宜の爲めにこれを表示すれば、

法律進化論

第一部　法原論

（一）原形論。＝生前刊行の『法律進化論』

第一、第二册

（二）原質論

（一）信仰規範篇

＝遺著『法律進化論』第三册並に『祭祀及禮と法律』中「祭祀と法律」

（二）德義規範篇

＝右同中『禮と法律』

（三）習俗規範篇

＝『慣習と法律』

（三）原力論

＝『神權說と民約說』

右の如くになるわけで、一部分づゝではあるが、第一部法原論に於いて著者が遺し置いたものは、重遠博士の執勞による一法律進化論』第三册と『法律進化論叢』の第一、二、三の三册とを以て、少くとも其輪廓だけは、我々の前に提示せられ得るに至つたものである。第二部の法勢論については、未だ何ものも刊行せられておらぬが、『祭祀及禮と法律』の巻頭に収められた『法律進化の話』は若干『發達論』に進入して居るのである。即ち以上既刊のものだけについても、著者は唯計畫を立てただけに止まらず、生前其各部に亘つて、述作の事に着手しつゝあつたものであることが、明瞭に看取せられ得るのであつて、殆んど尋常人の企て及ばざる大規模の『法律進化論』六卷十二册は未完成ではあるが、單なる企てたるに止まらず、著者に於いては、其全體に亘つて商量し、推敲し、著述の底稿が出來上つてゐたものと言つて大過ないことと思ふ。此一事すでに驚嘆に値する。他の學問の領域については姑く問はず、法政經濟社會諸學の範圍に於いて、此くも廣汎にして遠大な規模を立てゝ研究を始め其結果を筆に托して著作し置いた例は、我邦に於いては、多く其例を見ざることである。著者の最も私淑すると考へられるサー、ヘンリー、サムナー、メーンと雖も、此點に於いては、一籌を輸する。唯だ同じく著者が屢々引用するフレーザーの『黄金の枝』のみが、此

れに匹敵する。我邦の學界中近接の範圍から、これに類するものを求むれば、恐らく村上專精博士の『佛教統一論』の一書が我々の知る限りに於いて存するのみである。又た其れとは著述の趣を著しく異にするものではあるが、德富猪一郎氏の『日本國民史』は、或は、此れと對立するものと目するを得るかも知れない。其以外には、精神科學の領域に於いては、私は同一程度の大規模のものあるを知らないのである。重遠博士が、亡大人のこの大なる業績を周到なる編纂の勞を積みて續々世に出すことは、孝道の極致を發露するものであるは勿論のこととして、其の學界に寄與することの大なるは、感謝に堪へざるところである。

『法律進化論』第三册は、信仰規範の三種(一)タブー(二)祖祭(三)トーテムの中、其一のタブーを取扱つたものであつて、附錄として別に『タブーと法律』なる一論文を收めてある。(其の前半部は本文の「レジユーメ」として、讀者を助ける、其の後半部四三三頁第六行以下は、本文の未だ及ばさるところに係るが故に、必ず併讀を要する。)本文は、總論に續いて前論として第一章「タブー」の語義、第二章其本質、第三章其種類、第四章其成立第五章其分化の五章から成り、本論として、第一章「タブー」と法律、第二章タブーと主權、(觸接、近接、觀視、稱呼の四タブーに分つ)、第三章タブーと婚姻、第四章タブーと財産權、第五章タブーと刑法の五章から成つて居る。

右編次を見て感ずることは、此くの如き排列は、叙述の順序を定める必要の上からは、當を得て居るところたるには相違ないが、乍併タブーとの關係を法律、婚姻、財産權、刑法などと初めから分割したことは、分つ可からざるものを分つ所以であつて、其の爲めに、一方タブーの本質種類、成立分化を論じた前論は本論とは全く切離されたものとなつて仕舞ひ、彼處に說くところは此處に論ずるところによつて或は著しく修正せられ或は全く覆さるるに至つて居りはせぬか。と云ふことこれである。タブーの本質は、單に漠然たるタブーとしてこれを見る可きでなく、法律婚姻、財産權、刑法等と其當初から本質的に密接に關係して居り、而してまた、其の關係現象其ものも、法律婚姻財産權刑法など〻初めから分割し得られるものでなく、原始社會に於ける人類の生存の必要と條件とは一の渾一體を爲して、タブーを成立せしめ、其れが現はれて法律となり婚姻制度、財産制度、刑法現象となるに至つたものであらうと思はれる。『法律進化論』の全篇を通じて、私は著者の『オルドヌングス・リーベ』の著しく强大なるに敬服すると共に、其の餘りに順序よく排列し餘りに細密に分割するによつて、却つて本體と其發達との眞相を曖昧ならしめる嫌の尠からざるを痛感せざるを得ぬ。此事は嘗て『隱居論』を論じたときにも認め置いたことであるが、著者の學風の長所茲にあると共に其短所も亦茲に存するのではないか。剪裁陶冶の至れり盡せることは、其論述をして極めて斐然たる姿を呈せしめる。其

れと同時に、研究對象の有機的脈絡を絶ち、前後の關係を沒却する虞なきにしもあらずと思はれるのである。

以下各章について簡單に述べて見よう。總論中、私が最も注意に値すると思つた點は、著者が、化成法は原始的現象であり、創定法は文化的現象でありとし、國家の原始期に於いては、立法なる觀念未だ存せざりしのみならず社會の變動極めて少く人生萬事循慣に據り累世因襲して渝らざるを常としたから、法規は概ね化成法で、創定法に屬するものは、極めて稀であつたことを力說し、而して『獨り民族の移住は其生活の環象の變化の爲めに全然新たなる生活の需要を生じ、隨つて其文化の程級に比して新規範の創定を見ることが多い……イスラエル民族の出埃及及移住の如きは其最も顯著なる事例であつて、……畢竟此大豫言者（モーゼ）をして大立法者たらしめたものは、イスラエル民族の大移住である』（一四―一六頁）と主張することこれである。私は嘗て『日本經濟史論』に於いて、次ぎの如く主張したことがある。『私の見るところを以てすれば今日世界に於ける總ての植民人と同じく大和民族も亦今日住する所の土地を初めから領有したのでなく、故國を捨て、故國よりもより良き生存條件を得やうとして、活動の新天地を開拓しなければならない樣になつたのではないか。斯う云ふ事實は殊にブレンタノ及其他の學者（例へばアイガイル卿）の說くところで、外國に移住し來れる者を觀察すれば、其故國を去り全然異なれる條件の下に生活を營む已むなきに至れる事實が人の全張力の喚起に與て大に力あることを證明して居る。而して此見解は、また大和民族が其勢力範圍を擴張するに至つた所以を斷ずるに當つて重きを爲す所である。』（經濟學全集第三集五八―五九頁）

著者は或はマルクスの唯物史觀論を考慮の中に於いてゐなかつたものであらうと思はれるが、移住による生意――從つて流通――諸事情の根本的變革が多くの新しい法律を作り出すことを力說する點に於いて、唯物史觀中の――私の見るところによれば――正しき部分を十分に認承してゐたものと云ひ得るかと思ふ。『民族大移動』（フェルナル・ヴァンデルグ）の事實を度外視しては今日の歐羅巴の經濟的――而して法律的――文明はこれを理解することの出來ないことは、「エキソダス」を度外して、イスラエル文明を談じ能はざると同樣であり、又た更らに、歐洲よりの移住てふ事を無視しては、今日のアメリカ文明を知り能はざると同樣である。更らに著者は『昔は神でさへ慣習に縛られてゐた』とのポロックの言をあげて英主暴君の大改革と稱するものも國法の全體に影響を及ぼす如き場合は極めて稀である事實を指摘し、要するに、原始的立法は既存社會規範の公權化に依つて漸成し、文化的立法は、新生素因の規範化に依つて速成するもので、其差の起る所以は、原始社會は靜止若に衝動狀態にあり、文化期に於ける社會生

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

活は常に變動狀態に在るが爲めであるは勿論であるからと論じてゐる。然らば、此の靜止對變動狀態の起る所以が何に存するか、著者は其處に於いては說いておらぬが、生活需要の變化を以て明かに一の大なる要因と認めて居るのであるから、經濟事情の差異に少くとも一部の說明を求めようとするものであることは、これを察知し得るのである。經濟學者ならぬ著者が、更らに其の經濟事情を精査して、其處に生產事情の變化生產力の變化——而して、並びに流通事情の變化——を現出せしめなかつたのは無理ならぬことと言はねばなるまい。しかし、原始時代ののみならず凡て一切の時代を通じて生產事情の大變化を將來す一の大出來事たる民族的大移住の重要性を明かに看取したことは、廣い意味、正しい意味にての唯物史觀の長所と默契するところありと言つても差支ないと思ふ。

著者は法の原質たる社會的規範を（一）民衆の超自然的信仰によつて形成せられる信仰規範（二）德義觀念によつて形成せられる德義規範（三）社會生活狀態より生じたる慣行によつて漸成せられる習俗規範の三つに分つ可きものとしてゐる。これは一應尤なる見解である。しかし、私を以て見れば、其れは、餘りに形式的な見方ではないかと思はれる。信仰、德義、習俗と分けて見ても、社會生活の規範の抑も因つて出づるところ、並びに其相互間の推移變遷を支配するところの大なる力は、此くの如き形式的分劃の爲めに、其眞相を沒却しはしないか。著者は西洋の學者の多くが、タブー發生の原因を外物に對する不安狀態より生じたる恐怖（四四頁）に歸するの謬見を非難し、これ文明人の心理を以て原人を觀察するの誤に陷れるものなりとし、『泰西の學者が多くは、ポリネシア、オーストラリア、アフリカ、アメリカ等の土蠻の現狀を視て、恐怖をタブーの原因と爲すは、現時の野蠻人を原人なりとし、其社會は人類の原始狀態を示すものなりとする誤謬より生じたものである』（五二頁）と斷言してゐる。私は此斷案に全く服從する。其れと同時に、著者が、タブーを以つて、人類の『保全本能』より生じたもので、就中保全作用中最も重要なるものゝ一である『離隔』の作用を爲すことを其本質とすると主張するも、亦私の全く贊同するところである。乍去此說明は、問題の解決を半途にして止めたものと見るべきではあるまいか。何となれば、離隔による保全作用が、何故原始社會に於いて、左樣に重要なる觀察の對象であつたかの問題は、これによつて說かれてゐないのであるから。何故、保全と云ふことが左樣に必要であり、而して、今日の社會に於けると異り殊に『離隔』てふ保全作用が左樣に重大な役目を演せねばならなかつたか。著者はこれを說いてゐないのである。

著者は『神』、『靈魂』、『惡靈』等の超自然力の存在に關する觀念は、人類の智能が稍々發達した後に生ずるもの（四一頁）となし、現時南洋を初め多くの土蠻が凶災を恐れてタブーを

嚴守するに此保全本能より生じたる忌避の習俗が第二期に入り、物に存する精靈又は物外に存する靈魂の祟を恐れて意識的に之を守るに至つたものとしてゐる。私も亦左樣に思ふ。しかし、其『第一期』を單に生物に普遍的な保全作用に歸し、其を以て、『人類間に此習俗の發生した第一原因を究（四七頁）めたものとしてゐるは、說いて未だ盡さゞるものではあるまいか。言を換へて云へば、其れには『タブーの上流に溯つたものではあるが、未だ其源泉を究めたものでは無い』（四七頁）のではあるまいか。

私は決してマルクスの唯物史觀を其儘に奉ずるものではない。乍去、タブーの起源、其の本質の唯一つの問題だけについても、著者が今少しく、唯物史觀の含み居るところの眞理について商量することとなかりしを、甚だ遺憾に思はざるを得ざるものである。著者は第四章タブーの成立の條に於いて、タブーは恰も法に慣習法、成文法あるが如く、或は慣習に因りて存し、或は設定に依りて生ずるもの（六三頁）なるを說き、君主、酋長、豫言者、僧侶、巫祝等が特種の事物に對して禁諱を創立することあるを論じ、これについて詳しく、宣言、標示、觸接の三種あることを敍述してゐるが、慣習に因るタブー、については、其條下に於いて、些も成立の體樣を論じてゐない。即ちこれだけについて判斷すると、著者は設立に因るタブーの方に重きを置いてゐるのである。而していふ『タブーを創立することを得る者は通常人民より或は半神なりとして崇敬せられ、或は神通力を有する者として信仰せられ又或は智勇超凡にして衆民より畏敬せらるる者等であつて……此くの如き精神的權威を有する者は、何人と雖も、タブーを設立し得べく、殊に高僧、豫言者の如きは、最も普通にタブーを設定して之を宗教上の戒律と爲すものである』（六三—四頁）又『通常人はタブーを創立する能力を有せざるを常とするも、時としては慣習に從ひて之を設定し、又は他人の創立したるタブーを或る事物に付て設定することを得……例へば慣習に因つて生じ又は國王の創立したる方法に從ひ自己所有の椰子林へ、注連繩を張るときは何人と雖も其林中に入ることを得ずとするが如きものである（六四頁）と。此一條は『共產宣言』を一度たりとも讀みたることある人には、恰かも彼の條の說明たるが如くに響くであらう。マルクス・及エンゲルスは、原始民及び野蠻民については、モルガンの研究以外餘り接する機會を有たなかつたし、また『共產宣言』の組み立ての上から其れに觸れる必要を多く感しなかつたものと見へて、其れに論及すること甚少いが、穗積博士のタブー成立論こそ彼等が殘し置いた遺漏をいとも有力に例證するものなのである。クノーの經濟史にまで趁り行く必要は茲には全く有しないと言ふも過言ではあるまい。

半神、神通力者、智勇超凡者、君主、酋長高僧、豫言者は、其の『アウスボイトング』を『保全』す可くタブーを設定する。其以外の所謂普通人は、其儕に對抗してタブーを設

定するによりて『アウスボイター』となり得るのである。『保全』は人民一般の爲めにも行はれるが、『アウスボイター』の爲めにも亦有力有効に支持せられるのである。人民一般の保全とは、其の經濟上の必要、其生存上の必要――其れは單なる生物に普遍的なものも含むに相違ないが、すでにタブーとなるときは、何れも社會的なものである――より來るもの、恐らく大部分、否、殆んど全部を占めて居るのではあるまいか。認められたるタブー設定者の爲めの保全も亦自然物生產物の獨占とアウスボイトングの便利の爲めにするものが、大なる部分を占めて居たのではあるまいか。タブーとは『之を諱め』『之は禁ぜられたるものなり、之れに遠かれ』とのアウスボイトング又は獨占意思を社會的に保全する謂であらう。恐怖は其保全を確保する一の方便であつて、決して發生原因でないことは、著者の力說するところの確說と見る可きであらう。

　トーテムについては、既刊分には未だ所見はないが、私は其れが食料確保――食料濫用の防止、食料資源の擁護並に涵養――てふ經濟的必要が、主たる原因であり而して支持者であることを、拙著『流通經濟講話』第四、五の兩卷に於いて詳論して置いた。其れは主としてスペンサー及ギレン兩氏並にホウヰット氏のオーストリア土人についての記事について立論したのであるが、私はこれら三氏の研究は少くとも著者の用ゐたフレザー以下諸學者の研究と同樣に敬聽せらるべきものと信ずる。而して私は今著者のタブー研究に接して此の見解をタブーの成立と其支持に擴張するの可能性の大なることを認めざるを得ざるものである。

　又た私は、我邦に於ける貨幣の起源は、祓除の習俗と密接な關係を有つものではないかとの說を久しい以前に公けにしたことがある。我邦上古の『ツミ』『ケガレ』は、一面に於いて債務を意味する。『ツミ』『ケガレ』を祓ふ『ハラヒ』は、債務を償却する『ハラヒ』と同じものと見られたのではないか。『ツミ』を祓ふ『ハラヘツモノ』は、卽ち借金を拂ふ『ハラヘツモノ』で、御幣は卽ち貨幣であつたのではないか――『汝穢れたり』と云ふは、『我は汝をアウスボイテンする後』と云ふと同一事であつて、此の『穢れたり』を多く言ひ得る人は、亦た多くアウスボイテンし得る人である。『穢を祓へ』とは、『汝快くアウスボイテンされよ』と云ふと同一事である。卽ち穢を祓ふ可く財物を引渡す、其用具は、一方に祓具祓柱であり、他方に貨幣であつた――と云ふのが、私の見解であつて、未だ一の反對論をも構成論をも見出さないが、私は此說必ずしも一の獨斷論として斥けらるべきものとは思はないのである。(著者の詳論する『忌』を以て姓とする忌部氏は、我邦最初の徵稅總監大藏大臣であつた樣に考へられる。『イム』ことは、同時に『ハタル』ことであつたを推知し得ると思ふ。)タブーと貨幣タブーと經濟的流通(殊に貢獻、徵發的流通)との關係については、先人に研究のあるを未だ聞いて居らぬが、私は其れは他日有爲の學者によつて必ず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

取上げられる問題となるであらうと考へて居る。

之を要するに、著者が其『前論』に於いて、タブーの本質、種類、成立、分化について論ずるところは、何れも本論に於ける法律、主權、婚姻、財産權、刑法とタブーとの相關關係について論ずるところによつて、或は少しく或は著しく修正せられ、補訂せられ又或は翻さるゝを免れないのであつて、著者の『オルドヌングス・リーベ』は玆に著しく其論述に累するものと見ざるを得ないのである。法律、主權、婚姻、財産、刑法等から捨象し去つた抽象的なタブーなるものは、決して存在しては居らぬのである。然るに著者の前論は、此れらの具體相を捨象し去つて、唯だ全體的にタブー其ものを論じて居る。從つて其描出するタブーは現實のものとは著く遠ざかつたものであることになりはせぬかを恐れる。

此くて、著者は本論に入りて、右等各項に分けて、夫れ〴〵タブーとの關係を考察して居るのであるが、此の分劃其れ自身多少無理なものゝ樣に思はれる。元より論述の便宜上分劃することは差支ないこと、否爲さねばならぬところであるが、其れに先つて、法律、主權、婚姻、財産、刑法の一切を通じて、其處に具象的なタブーの全面目を捕捉することが、第一に爲されねばならぬ仕事であつたと思ふ。著者が左樣せざりしことは、論ず可きことを論ず可きところに論ぜず、而して論じて甚だ力弱きところに却つて詳細の論究を下して居るが如き觀を呈することとなつたと思ふ。以下此一事を念頭に置いて、各章を吟味して見よう。

本論第一章は『タブーと法律』と題する。著者は其章の始めに於て、原始的宗教の戒律であつたタブーが如何なる過程に依つて原始的國家の法規に爲るものであるかとの問を起し（八六頁）其れに答へて、「主として政治上の原始的首長は同時に原始的宗教上の首長であつたことに因る」となし仔細にこれを說いて居る。成程これは一應首肯し得られる說明である。しかし乍ら、然らば、何故原始的政治首長は同時に原始的宗教首長であつたかのより根本的問題は釋かれて居らぬのである。玆にも、唯物史觀には、より深き洞察を與へるものではあるまいか。政治首長と云ひ宗教首長と云ひ、其樣な區別は必ずしも判然して居たものではない。其時其事情に應じ或は政治的に、或は宗教的により多く發動するであらうところの首長は、畢竟するに首長であると云ふ一事に、其一切が總られて居る。而して首長であると云ふことは、其社會に於いて公認せられた社會的獨占者、社會的排他者、社會的アウスボイターたると云ふことに其の本體を有つて居たのではあるまいか。然るに著者は第一章を結んでいふ『相互不侵は共同生活の第一要件である。相互扶助は共同生活の基本要件である……交互表裏を爲すもので此二者互に相待つて始めて總ての社會生活を完ふするを得るものであるが扨て其發達の先後を云はば相互不

侵は相互扶助の前提とも稱すべきものである』（九〇頁）と。私を以て見れば、此の斷案は余りに形式的であるのではないかと思はれる。相互不侵と相互扶助との存在は成程著者の云ふが如くであらうが、其れより一段前に、一方は大いに侵し、他方は大いに侵される二つの民種が先づ相集るにあらざれば、社會なるものは成立しないのではないか。相互に侵さずと云ふが如きことは、今日の發達した社會に於いても、決して十分に實現せられた原則と云ふことは出來ない。むしろ相互に侵し合はんと欲する人々が、一の侵略上の分業社會を形づくり、侵すことを專とする者、侵さるゝを常態とする者と、少くとも經濟上に於いて、生產條件の原始的配分關係——マルクスの成語——が成立するところ、其處に社會は稍ゝ堅固なる而して稍ゝ安全なるものとして成立するのではあるまいか。而して、此分業が自ら相互扶助の用を爲すのであつて、其れは同時的に成立つので、著者の主張する樣に、其間先後の順席は認められないのではあるまいかと思ふ。（これは必ずしもクロポトキンの相互扶助論を待つ必要のないところと思ふ）。相互扶助は決して不等的扶助ではない、上下的、差等的扶助である。否其れでなければ、社會的扶助は發生し得ないのではあるまいか。

かくて、私は著者が『タブーは法律前の公的規範である』（九〇頁）との言に若干の疑を抱かざるを得ぬ。何となれば、大いに侵す一方と大いに侵される他方との相集つて作る相互扶助社會は、私を以つて見ればたしかに嚴かに統制せられた社會であり、其社會の秩序は、これを明かに一の法的秩序と見るべきが如くであるから。即ちタブー社會の規範は法律其ものであつて、法律前期のものではないのではあるまいかと思はれるのである。タブーは原始社會に法律を與へ、又た其の經濟秩序を與へる。生產——アウスボイトングの成立——は其規範の下に行はれ、流通——アウスボイトングの固定體樣たる——は其規範に從つて行はれ、而して、貨幣——其は、公認せられた『アウスボイトングス・ミッテル』として發生する。貨幣論の本に書いてある發生論は、多く全く正鵠を失してゐる——も亦此秩序の中に成立すると見る方が、實際の進化の跡により近い見解ではあるまいか。

次に、第二章タブーと主權の章については今省略して置き、第三章タブーと婚姻について一言するを許されたい。此章に於ける著者は、最近研究の最高階段に立つて居ると斷言するを得る。著者はダーウイン、ウエスターマーク、ホッブハウス、等の新說について十二分に商量して、バフオーフエン、マクレナン、又たモルガン等の舊說に盲從することを明かに否定して居る。此點に於いては、今日の唯物史觀論者は、著者によりて大いに其蒙を啓かれねばならぬ。唯だ同トーテム同姓の相婚を禁じた根本的原因の一として、嫁出による婦人又は男子の勞働力の配分、嫁資の移轉に伴ふ財物の配分が重要なる關係を有つものでないかの問題について何等の考慮を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

拂はなかつたのは、法學者としては無理ならぬことではあるが、著者の如き社會學に精通する學者の研究としては、甚だ物足らぬ感を與へる。著者は唯だ從兄弟姉妹の婚姻を權利又は義務とする習俗について婚價が他人の女を娶るよりも低廉であるてふ經濟上の一事情をあげるに止るが、何故他の場合について婚價の考慮が、タブーの創定又は支持に關係を有つのではないかとの疑問を發せなかつたのであらうか。私はこれをむしろ不思議と思ふ。しかし、著者が性交の排他性をあげて、其れがタブーと重大なる關係を有つことを論じた一條は、私の悉く服するところである。更らに性交の公認性を說く亦然り。排他的にして公認的關係たる婚姻の支持の爲めにタブーは不可缺ものであつた。其れは恰も、物財について――若くは土地其他について――而してまた勞働關係について、其の排他的にして公認的なる關係の支持に、タブーが最もよく役立つたのと同じ道理に基くものである。恐らくは、婚姻について、かく深き洞察を下した著者は再び前章に立戻つて、此の同じ道理のタブーと法律との關係について存するにあらざるかを吟味することなくして已んだ。性慾の充足と衣食住慾の充足とを全く別個の觀察の下に置くは、當を得て居らぬ。兩者には各獨自性は勿論ある。其れと共に遙かに大なる割合に於いて、兩者の間には、共通性――又は普遍性――が存する。而して、排他的、公認的關係たりてふことは、其の共通性中の最大なるものであらう。玆にも、法律と婚姻、主權と財産權など縱割的の分割を下して、斷つ可からざる連絡の糸を切り離したことの遺憾が痛切に感ぜられるのである。

（十月號續出完結）

新刊紹介

◆**加賀の千代女の生涯**（吉松祐一著。俳人千代女の百五十年忌記念として著したもの、傳記及句評の二章より成る。東京市神田西小川町二ノ三大同館發行・定價壹圓貳拾錢）

◆**綜合倫理學**（杉森孝次郎著。「敢て綜合と稱した理由の一は、純全にして單一なる、當然さうである倫理學的見地からして個人基準の倫理學と、社會基準の倫理學とを兼備することが、私がこの新著に從事した主要動機であつた」……と。卷末に三論文が附錄されてゐる。東京牛込區早稻田・早稻田大學出版部發行・定價貳圓五十錢）

◆**田園・工場・仕事場**（クロポトキン著・室伏高信譯・原著はクロポトキンの思想を知る代表的のもの・東京京橋區山下町一・田舍社發行・定價壹圓六十錢）

◆**藝術としての神樂の研究**（小寺融吉著・東京神田南神保町一四・地平社書房・價壹圓）

◆**明治初年の一向一揆**（細川龜一著・兵庫縣印南郡大塩町・和同社發行。定價壹圓）

◆**野面の風**（松崎武雄詩集・東京市外野方町上沼袋七三・詩集社發行。定價壹圓五十錢）

◆**古美術史蹟京都行脚**（川勝政太郎著・古美

術の鑑賞研究を兼ねた京都の案内記として上乘のもの參考圖寫眞等豐富・京都市東洞院二號北入・スズカケ出版部發行。定價貳圓）

◆**大地讚頌**（薄田泣菫著・草木蟲魚の別册で詩趣横溢の小品隨筆集、銷閑靜讀の好著・東京芝二本榎西町二創元社發行・定價貳圓）

◆**土の藝術と土の生活**（犬田卯著・著者年來の主張評論を集めた農民文藝論集・東京府杉並町成宗一一三農民文學社發行・定價壹圓）

◆**靜夜曲**（吉田絃二郎著・運命的な戀は信濃の山、日本アルプスの登山小屋に芽生えた。かくして哀戀純情と悲劇的運命、それがいつも山へと繋がれて展開し行く長篇力作・東京牛込區矢來町新潮社發行。定價壹圓八十錢）

◆**山水大觀**（評論隨筆家協會編・露伴藤村花袋氏を初め文人俳人畫家評論家等三十一氏の山水旅行記、夏日の好讀物・同上新潮社發行定價壹圓八十錢）

◆**國法及び國法史の研究**（中野登美雄著・收むる所、緊急命令の史的淵源、憲法と國民外交の保證、行政權に關する理想型態と實證型態、佛國憲法の變化、帝國憲法の史的淵源に關する一假說、我が軍政に於ける獨法と佛法等七章、一般國法の基本的理論の研究に傾倒せる篤學の著者の力の籠つた論文集、法科學生法學研究者の爲の好書・東京牛込區早稻田敬文堂發行・價參圓五十錢）

◆**藝術と精神分析**（フロイド著・安田德太郎譯・本鄕湯島切通坂一九・ロゴス書院發行・價壹圓八十錢）

◆**重農派經濟學の人々**（山口正太郎著・重農學派の學說發生地なる佛蘭西重農學派の史的研究で、著者がソルボンヌ大學二年間の收穫の一端として生れしもの・同上ロゴス書院發行・定價壹圓八十錢）

◆**日本思想論**（永井亨著・東京牛込早稻田大學出版部・價壹圓卄錢）

◆**蒼馬を見たり**（林芙美子詩集・拾年間の作品中から好きなのだけ集めたといふ處女詩集「何だか始めて嫁入りするやうで恥かしい」といつてゐるが、底强い熱情と强い明るさをもつて歩み出た成熟振りは立派な母を想望させる・東京牛込區通寺町南宋書院・價六十錢）

◆**處世新道**（脇田義一著・新處世道を說いた青年修養書・東京京橋南紺屋町實業之日本社發行・定價壹圓五十錢）

◆**人間の本質**（木村德藏著・昨年物故した異色のあつた自然科學者の論集で科學者としての人生觀を窺ふに足る遺著・東京神田區北神保町二・新生堂發行・定價貳圓五十錢）

◆**死を前にして**（平方龍雄著・熱ある教育論と隨筆集・東京市外松澤村赤堤二五・曉星社發行・定價壹圓五十錢）

◆**民謠の今と昔**（柳田國男著・民族藝術叢書中の一篇・東京神田區南神保町一四・地平社書房發行・定價壹圓）

◆**光**（井上康文著・最近愛妻を亡くされた氏の近業を收めた詩集・東京市外野方町上沼袋七三・詩集社發行・定價壹圓）

◆**赤彥遺言**（藤澤古實著・「島木赤彥臨終記」と晩年の藝術の二項よりなり十年間師として仕へた著者がその思慕熱情を傾けた精品、大歌人赤彥氏の人と藝術を味ふによき書・東京神田一つ橋通九・鐵塔書院發行・定價貳圓）

◆**ラスプーチン**（ロシヤ大革命の裏面史譚選輯の第三輯、妖僧の評傳と暗殺記・東京麴町内幸町一・ロシア問題研究所發行・定價參圓）

◆**日本金融資本論**（小島精一著・日本の大金融業を始め諸重要工業方面に亘り多年の蒐集資料に依り金融資本發展相を究明した好著、世界大戰以來日本の經濟界は急速度をもつて獨占資本主義の段階に深く突入し少數金融資本團による全面的獨占を實現しつゝある時必讀さるべき書・東京京橋第二相互館内千倉書房發行・定價貳圓五十錢）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

數珠茅

北原白秋

新潟の夏

夏すでに砂丘の光おぎろなし弘法麥の銹の穂のいろ

砂山の茱萸の藪原夏たけて花了りけりあはれなる花

ぼうぼうと砂丘のうねり大きなり[illegible]が見ゆ赤き[illegible]

港には装しろき船いくつ夏はさやかに雲流れ見ゆ

數珠茅に夕づく日ざし柔らなりうらがなしかも青き數珠茅（青山の松原）

田植

彌彦の夏山殷ただならず國上は低し遙けくし見ゆ

おほかたは田を植ゑ並めぬ道の手にたもの若葉の照り交ふ見れば

小山田のたもののはさ木の日の光若葉さわたる風ゆららなり

こぞり出て苗ひき植うる田植笠はやおもしろしらなかぶし見ゆ

國上行

良寛の遺跡五合庵を訪ふ

心ぐく山片附けばいちじるし蛙のこゑの田に起りつつ

松山の椎若葉の日の明り郭公ならむ聲とほり搖る

あしびきの國上の山の桐のはな咲きにけるかも楓が中

國上の片山蔭の桐のはな遠く蛙の鳴くがしづけさ

ありやとも今はた思ふ道の端に君が忘れし愛し鉢の子

風そよぐ板屋楓の二葉もとこのいほりも夏いたりけり

よき人の草のいほりの跡どころ楓あかりて山蛙鳴く

おのづから雨けぶるらし假木山のこの見おろしに田を植ゑそめぬ

童馬山房雜歌

齋藤茂吉

この日ごろ　三首

六月のすゑになりつつ部屋に來て砂たまりをる紙魚をはづす

いつころか机に置きし耳搔に埃ふける見ればあはれかなしき

いとまなく明暮れしかば一冬をここにこもりしは幾日もあらず

發妄念　一首

みなかみの激ちの音もうたがはずひとつの山に老ゆるしづかさ

昭和四年一月某日　三首

あたたかき飯くふことをたのしみて今しばらくは生きざらめやも

この通に足をとどめて古本を値切ることさへさびしくぞおもふ

自殺せしものぐるひらの幾人をおもひいだして惡みつつ居り

昭和三年八月三山參拜　三首

いつしかも月の光はさし居りてこの谷間より
立つ雲もなし

みちのくの湯殿の山に八月のこほれる雪をわ
たりつつゆく

かくのごとく常にあらぬか月山のうへにけむ
りをあげて雪とくる見ゆ

五月一日　二首

日比谷より左にをれて忽ちにいきほひづける
行列を見つ

ととのへる街路の上を一萬人の勞働者ははし
やぎて行けり

をりにふれて　六首

うしろなる立木をこめて淺草の觀音堂は板が
こひせり

この世をし愛しみけれどやうやくに老いづく
吾もけむりのごとし

不思議なることもあるものと吾おもふ目のま
へを行く女に見おぼえあり

もろもろに立ちまじはりて居る我は時のまに
していきどほりを斷つ

章魚の足を煮てひさぎをる店ありて玉の井町
にこころは和ぎぬ

氣ぐるひてここに起臥しし老人の癒りて去る
を見おくらむとす

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雪まつり

釋迢空

山峽の殘雪の道を蹈み來つる あゆみ久しと思ふ しづけさ

ひたぶるに 磧の路をあゆみ行く ひくきこだまは、われの跫音

せど山も 向つ峰も 見えわかれ居り。殘雪の明り 色しづみつゝ

見えわたる山々は みなひそまれり。こだまがへしのなき夜なりけり

○

人おとの遠きに居むと 山深く 屋敷覓ぎけむひとりさびしさ

坐ながらに こだまこたふる屋敷標めて、山の深きに、おどろきにけむ

遠き世の山家の夜居や、をとめ子は、息づき若く まじり居にけむ

祭りの夜

さ夜ふかく 大き鬼出でゝ、斧ふりあそぶ。心荒らかに、我は生きざりき

いやはてに、鬼はたけびぬ。怒るとき かくこそ、いにしへびとは ありけれ

遠き世ゆ　山に傳へ來し　神怒り。この聲を　我　聞くことなかりき

昭和職人歌　番外　その二

自由勞働者

今日は　よくはたらきにけり。かにかくに　からだ疲れて、滿ふ我なり

大橋の夕やけ鴉。寢に歸る心をもちて、我は越え來る

富家の女のよさや。戯れ寄る心うごきは、憎むにあらず

うち和む目に見ゆるもの　砂あげて行く自動車も、眠はしきかも

今日三日。郭ひた降りの晝あがり。凪つぶして臥るが　すべなさ

怠業工人

もろともに　喰まざるべからず。飢ゑ怒る妻子を　なだめて居る心はも

我が心知らざるにあらず。ひた背向き、鏡に髮をうつしゐる妻

客間の氈　柔に乘りゐる我が足の　この幅にすら當る錢なき

よろしさは、朝のたばこの薬まきの香。つく〴〵に、われを　さもしと思ふ

仇の家に、あげつらひに來しひた心。崩ゆるに似たる居ごゝちのよさ

よき人に、口吃り言ふ我や　世の階級を無視すと　揚言げて來し

詩（懸賞佳作）

創造詩

柿山陶造

その世界のほかの世界、現實の外の現實、自然の外の自然へ、人間の外の人間へ、肉體の外の肉體へ。——（創造現實）

序詩

1. 森
2. 海岸
3. 草場
4. 海

僕等の「創造自然」

「空」と、「海」と、「野」と、「森」と、「山」と。

ぼくらの空は赤い色をしてゐる。
ぼくらの海の潮は赤い色をしてゐる。
ぼくらの原つぱの草は赤い色をしてゐる。
ぼくらの森の木は見てゐるうちに大きくなる。
動くのは風のためではない。
その幹はやはらかい。そして眞赤な色をしてゐる。
その幹のなかは燃えるやうに熱い。
ぼくらの山の樹には一枚の葉もない。
赤い幹ばかりの樹が生へてゐる山々。

この白と赤の世界

「森」で

——ぼくらの森の木の幹は眞赤な色をしてゐる。その

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やはらかい幹のなかは燃えるやうに熱い。

或る日、僕は森の中へ女を連れ込んだ。
大きい木の前へ來ると
　女は指で幹を押した。
眞赤な幹へは入つて行く白い指。
幹の中から熱い液が流れ出た。
木がうれしそうに動く。
すると女は笑ひながら兩腕で幹に抱きついた。
白い腕と眞赤な幹。
やはらかい幹へ女の腕の跡が凹んだままのこつた。
木がずん〳〵大きくなる。

『濱』で
　――ぼくらの鷗は赤い色をしてゐる。

朝、岩に鷗が落ちてゐた。
「オーイ
出て來い」
船から女が裸で走つて來た。
ぼくらは岩の上で笑ひ合つた。
白い裸へ眞赤な鷗の羽が飛び散つた。

『草場』で
　――ぼくらの草は赤い色をしてゐる。

日がのぼつた。
草場で
女はもう馬を遊ばしてゐる。
僕は坂の上に馳け上つた。
白い馬だ。
赤い草。
六匹の馬のまはりを
女は走り廻つてゐる。

『海』で

——ぼくらの潮は赤い色をしてゐる。

草場から
女が馬を連れて來た。
潮の濱で
僕は海に向つて歌つてゐる。
波が踊つた。
女が海に馬を入れた。
僕は海から顔を上げた。
赤い波のなかに
女の裸と白い馬の腹が見えた。

秋草圖詩集抄

長江道太郎

きさらぎ

嚴島神社にて

はるあさき　朱の廻廊
翳りなき
さむきひざしや
しはぶけば
わがこゑ　かなし
なか庭にひびきとほりぬ

かぜ

ある日あるとき

あるかなしかに
微風のそよげり
微風吹けりと　おもひしは
うつつごころの虚なるか

眞晝あかるき森さきや
ただ　しづかなり
ひのひかり

桃鳩圖

徽宗皇帝の古畫をみて

山蔭の春あさけれど
ほのかにも　たつよ
地の息(いき)

山鳩は　上枝(ほつえ)にありて
身じろかず
瞳　しづかにみまもるは
ながれゆく
ながれゆく虛(そら)の山氣(かぜ)なれ

四方清朗

つゆばれの晝のあかるさ
山やまのすがたの
昃(かげ)りなくみゆるあかるさ
草原の草にうちふし
おほきなるしづけさのうち
うつしみのおもひぞきゆる
ほがらかにきえてゆきけり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

牧水の追憶斷片

若山喜志子

ゐまひつつ君は涯なき暗がりにかくれ給ひきただ不思議なり

現にはおはさぬ事のたしかなれど折々現を不思議と思ふ

この歌は私の最近の述懷であるが、人はその死後直ちに文字どほり幽明處を異にしてしまふ人と、その反對に死別の意識をますます混淆させるほど明らかに生きてゐる人とある。牧水の死が私に與へる意識は正に後者であるらしい。

私には牧水と云ふ人は夫ではあつたが、また一面他人でもあつた。他人と云つては語弊があるかも知れないが夫婦といふあまりに現實的な生活が時にお互に重荷でならない場合があつた。と云へばほぼ他人と云ふ事の說明がつくであらう。

お互がお互の長所を常に認め合つて同棲してゐた。私は或場合には彼の母となり姉となり、彼はまた私のために父となり兄となり、戀人同志でもあつた。彼が私の父でもあり兄となつた時は寂しかつたであらう、また私が彼の母となり姉であつた場合は倘一層救ひ難い寂しさの底をさまよつた時であつた。

そうした風の生活であつたからお互に怠屈といふ事を知らずに二十年近い家庭生活を送る事が出來たのだと思ふ。

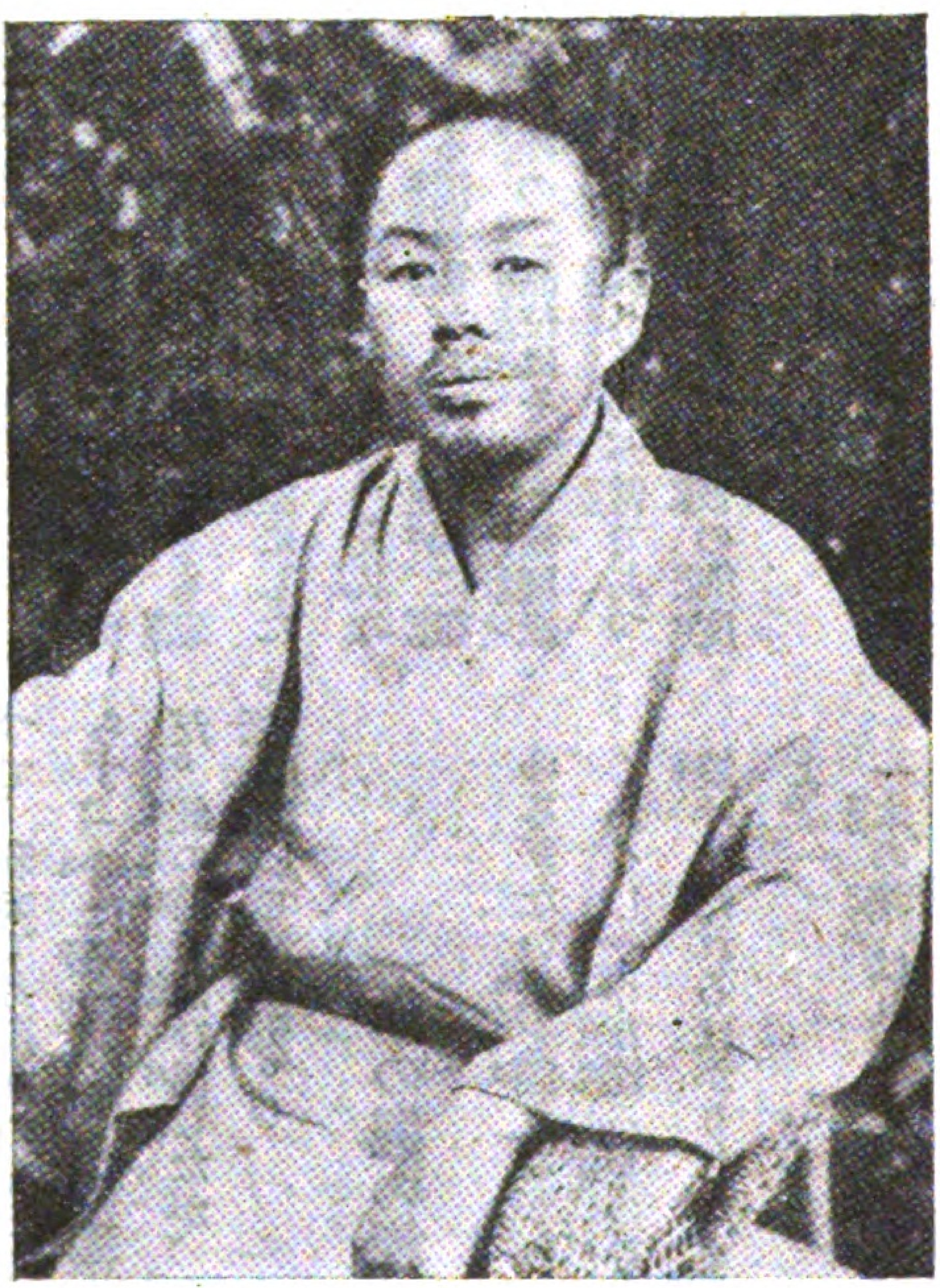
近來私の生活意識の中に、空しき追憶といふ魔物が座を占めて一種の霧のやうに執拗に掩ひかゝり、さまぐの亂舞をして見せる。その上季節の誘惑といふ意地わるをも連れて來てさまぐの姿態をもつて挑みかゝり、つひに救ひ難い憂鬱の森に誘ひ込む。私の生活は冷たく重く、また息苦しくてさうした奇怪な物に敗けてはゐられないのだが、時として蒼白く病める女の便りなきみじめさに浸らなければゐられない現在の狀態である。

未來に光明なき者は過去の追憶に親しむ、とは古人の言であつたと思ふが、私は前途に失望してはゐないつもりだし、過去の追憶を樂んでゐるものでもない、私は夫に死別したと同時に生きる上の責任は倍加され堪へがたい苦惱をも甘受して未知の世界へ勇敢に足を踏み入れつつあるのだ、それは普通周圍に惠まれた女性の一生知らずに終るべき寂しく冷たい氷の路、また惱ましい炎の路である。

いつくしみ深かかりし夫ぞ朝夕のくらしの事にも我をかばひて

牧水と云へばすぐ酒と旅泊とを聯想し、現實ばなれのした人で家庭など顧みなかつたらしく想像する人が多いやうであるが、彼は一面非常に責任觀念の强い人で時にはそれが餘りにいぢらしくさへ感じられた程であつた。で私も貧乏の味は相當嘗めたが、まだお米の一升買ひと質屋の暖簾をくぐつた事がなかつた。それだけ私たちの貧乏ぶりにはどこか暢氣な餘裕があつたらしい。

毎晩の晩酌を樂しみに机の前を立つて來る彼のために、私は一日のうちの何時間かを眞心こめて臺所に立つのであつた。あらはにそれと口に出さずとも、彼の魂の照り曇りは見てとる私であつた故に、時としては盃の色や形にまで心を砕いて來たのであつた。夏に入ればいささか味がおちると言ひながらも、鰹が淡紫にかゞやき、まだ鰓の動いてゐさうな眞鰹にをし氣もなく庖丁を入れさせてお國自慢の「たたき汁」を作らせたり、見るから淸々しい烏賊のサシミに舌皷を打つたり、さうした時の彼の面影はまざまざとして季節のまどはしか知らぬが折々茶の間の緣側近くに見える。



病歿直前の牧水氏

少しぜいたくだと思はれるほどの廣い庭には種々雜多の樹木が今は茂るがまゝに委せてあるが、之等の一本一本にも彼の執念が宿つてゐる事であらう。若葉のかをる五月、雨にぬれながらも咲き匂つてゐた柚子がいつか小指の先ほどの實をつけてゐる。昨年の九月、病床の彼のために私は――それは數日の後には恐ろしい死の宣告を受ける人とも知らず――明るい心で野菜スープを作り、それの香味に入れたいから貴郎の木の柚子が一つ欲しい、と云つた時珍しくも採る事を許してくれた、それは矢張り少し以前子供達の爲に七夕の竹を手づから伐つて與へた其時の意外な思ひと同じく、日頃庭の樹木に對してのみ吝嗇であつた彼がどうした事かと不思議な思ひをした事の一つであつたなど思ひ出しても佗しい事である。

思ふに彼程現實そのまゝを素直に享受し得た人も珍しからう、全く素手で何物にも直面し得る人であつた。憂欝でありながら一面闊達で、ありのまゝをありのまゝに處理する事が好きであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

また季節の推移と云ふものに對して至つて敏感であつた事も特記すべきであらう。其點彼は何か特異な體質ででもあるかとさへ思はれる程で彼の生涯の過半が旅の人であつた事でもうなづける事だと思ふ。また季節其物を味はふ意味でもあつた彼の食物の好みと云ふ風なものも、非常にデリケートで所謂しゆんの物を噛みしめて味はふ容子は、全く口で味はふでなしに全身で食べてゐた。

食物に對してさうした感情をもつてゐただけに、他家での御馳走をばおろそかには戴かなかつた。たとへば一二泊の旅先の宿などでも私が一緒にお膳に向ふ場合は、必ず箸をつけない自分の皿と、空にした私のとを取り代へておく――彼は大食が出來なかつたため――そんな事にまで心を配つた。また少し滯在でもする溫泉宿などで、板場に敬意を拂ひ得る場合だと尙更のこと、夕食の際の二品位はそつと新聞紙に包んで隱しておき、翌朝の散步の折そつと犬に與へるのが常であつた。かうした仕種はともすると甚だ嫌味に見え易いものだが彼の態度にはさうした不自然さが微塵もなかつた。

彼は一面、淡々として水のやうな人であつた、すくなくとも私にはさうした事が云へる、それは實に物足りなくあまりにあつさりしすぎてゐた。共に十數年を暮して來てゐたのであつたが、冗々とした歌の話を爲合つたといふ記憶は一つもない、ましてや一首一首の批評とか添削とかいふことを爲て貰つたためしがなかつた。誠にとり付く島もないやうな情ない振ひをする事がしばしばであつた。

それでゐて時々に途方もない所に歌の道の行方を暗示して呉れた。それは勿論彼自身も意識してでなしに極めて自然に現してくれたのである。彼はよく「行かんが爲めにゆくものこそまことの旅人なれ、心は氣球の如く輕く身は惡運の手より逃れ得ず……」といふ詩を好んで歌つた。ともすると石のやうに沈默し底暗い憂鬱に捉はれる時があつて、私まで身動きのならない思ひをさせられたが、そんな時私は必らず、「身は惡運の手より逃れ得ず――」の詩を思ひ出して心が痛んだ。此の詩で思ひ出したが、私が先年夫に捧げるつもりで作つた詩を玆に記しておかう。

一本の欅の樹

ゆるぎない根を張りながら
くわくしやくと照る夏のひかりに
燒けただれるばかりしなえ疲れる木の葉のやうなこのごろの我良人よ。
わたしは
一本の培はれてゐる草花ならば
日傘をさしかけて居ようものを
涼しい打水もしようものを
あなたは實に、夏の日の空を掩ふてゐる唯一本の欅の木。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

おのづからなる靜けさをもつて
この私には對ひたまふ。
なれど――わたしはただ
ただ立ちよつて仰ぐばかり……。
ああ、
さかんなれども
おごそかなれども
くわくしやくと照る夏の光に輝いてゐる、
淋しいただ一本の欅の樹を思はするわが良人よ。

かがやく世界を

あなたは此頃ほんとに寂しさうです、
はたの見る目もいたましいほどに。
（いいえそれは唯一人の親しい妻の私が見る目のことですよ）
何と云つてもほかは他所目です、
あなたがどんな悲しい時でも、また寂しい時でも他の人にはそれは
判らないことです。が、私だけには
いくらおかくしになつてもすぐに解ります。
あなたは眞實に寂しくて喪心する程にその寂しさに今浸つてゐます
私は何としていいのか、
あなたを慰める術が今見當りません。
お酒をもつとおいしく沸しませうか、
お金をどうかして借りて來ませうか、
私は久しぶりであなたの寂しさと闘かふ苦惱の姿を目のまへに見ます。
旅行をなさいますか。
ああ、
私の、あなたの事を心配して瞑ぢふさいでゐる眼にうつるものは
旅行でもない――
お金でもない――
また甘い酒でもない――
俺にはいま、
旅行よりも金よりも、
もつと欲しいものが出來たのだ………。
やはり眼をとぢたまゝ、かぶりを振つてさう仰有るあなたが映るば
かりです。
私は何としよう、
私も、

さうして可愛いゝ子供も、
鐘のやうにただ胸苦しいのではないのかしら。
弱くてただ嶮しいばかりの意氣地なしの私には、
言葉や行爲では慰めて上げる術がつきはてた心持がする。

もとめても求めつくせない
この世の果にかがやく樂しい世界を、
欲しい！ と仰有るならば、
私も欲しい！ その世界。

げに、あらゆる人生の苦惱、
たとへば裸身に荊の鞭をあてらるるとも忍びます、
忍んで子供たちときげんよくついてゆきます。
私の、ただ一人の戀人、
または、ただ一人の友達である私の良人よ、安心して、
そして健やかにその苦惱にうち勝つて生きて下さい。

私は淋しかつた、しかし彼のためにエデンの イヴであつてはならないと常に深く戒めて來てゐた。
「さなり、おもては冷やかにいとつれなくも見ゆるより、深き心はあだし世の人に知られぬ寂寥よ」

北海道の僻地、北見の山中でこの詩を朗吟しつゝ嗚咽した二人の姿は誰も知らない。・・・・・

彼は毎年春、梅の咲き初める頃になると一種の取り退け難い哀愁に襲はれてゐた事を私はよく知つてゐる。それは、人の一生に二度と再び來ることのない、青春の日の或日、または或時に奏でられた神秘の音樂の追想――現身のしいんのうづく――それであることをよく知つてゐた。私は女心の鋭さで彼の肺腑の奥をまでよく視得てゐたから。落葉の頃、再びさうした彼を見るのであつたが、その時には何となく明るさがあつた。一種の諦めとも云ふべきものが明るさの中にあつた。亡びゆく物に對して持つあの明るさでさうした時の彼に對しては妬みよりむしろ同情が私にはあつた。

昨年恰度落葉の美しかつた頃、私ははからずも彼の諦めの哀愁に浸つた淺間高原に足を止めたことがあつた。

ありし日の夫はいのちにま向ひてこの枯草を踏みしと思ふに
淺間嶺の秋の姿は知らざりき知らざりしその悔を今知る

簞笥の底深く入れてある彼の衣類は觸れて出すことはしないが、さうして目に入る山峽の姿には衣類のそれよりも尚一層切實に私に迫るものが深い。

山深く分け入つた時の旅信にはいつも、「お前は女に生れて損をしたと思ふよ、かうした所へ來るといつもそれが思はれる」と云ふことが大抵の時のには書いてある。旅信と云へば彼は旅先のその場その場か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らなかなか面白い便りを私に與れてある。古い部によいものがあるが茲には彼の一人旅としての旅らしい最後の旅信を二ッ三つ記しておかう。

昭和二年の二月、東海道を西へ歩いて見ると云つて出かけた時のハガキ便りである。もちろん得意の草鞋の旅だ。

静岡を離るゝ頃天氣よくなる。鞠子の宿のとろろ意外にうまし、一本が二本。宇津谷の宿場は思ひがけない深い峽間にあつた。わざわざ來たなれば一度泊つて見たしと探したれど宿屋なし。宇津谷の峠もよかつた、峠そのものも、登り下りの坂道も、道ばたに立つ老木の松と山櫻も。岡部の宿――東海道に斯ういふ宿場があるには驚いた。宿唯一の宿屋の名、小手平屋。その裏二階に今鎭座ましましてゐるところだ。

まだ草鞋のぬぎかけてゐる所へ宿泊帳記名の請求あり。上つて座につけば酒を飲むかと訊く、飲むと答ふ、いくら飲むかと問ふ、さてはと感じたり、取りに行くのだなと。たびたびこりたる事有りければ、一升と答へむとして、おんいましめをなむ思ひ浮べ、ハチゴウ――と答ふ。いくらのを飲むか、いくらのが一番いゝのだ。十五錢なら上等だらう。頓首して二十錢のに願ひ上げ、いま漸くありついてゐるところだ。

いやまだ前かある、二十錢のを八合飲むなら二八の一圓六十錢也。よこし給へといふ。讀んで不呈、やれやれと腰をさすりぬ。さて飲みの場となる、貧乏徳利と小さき藥罐とを持ち來る、これにてチビチビ沸し飲めとなり。畏みて命の如くす。ひと藥罐つきなんとす頃鐵の何處かにくつついてゐさうな鍋を持ち來る。つらつら凝視するにこれ肉鍋なり。而かもその肉鍋たる徒らに青葱の山を以つて色彩し、頂上にはのかに赤きものと白きものとを點じたり。赤きは肉、白きはこれ一つまみの砂糖なり。棒持して火にかくれば忽ちぺちやんことなる。おろしてまだ一品位ゐ來るだらうと待つ。いま來た。一皿の菜漬と飯びつなり。つらつらおもんみらく、これではどうしても先刻おろしおきたる所の鐵鍋をもう一度火にかけ、以つて飯のさいとせざるべからず。べからざれども砂糖あらず（これは最初より無かりしに似たり）醬油あらず、手を鳴らすべく氣が變なり、つらつら考ふる所の策をとつてこの鍋に酒をそそぎ、煮沸し、飯にかけかなぐりこまむにはと。

これ今日只今に到る所の報告なり。幸ひに先づ以つてとりよせおきたるところの夜具、わりにパサパサしてをり、これなら素裸にならずとも眠れます、御遷座のことまづ無しと思ふ。報告終り……。

この「御遷座のこと」は註を必要とするかも知れないが、それは讀む人の想像にまかせておく事にする。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あるがまゝをあるがまゝにし歌はむと猛けくありしを死に給ひたり

或時は墓所の土をかきのけておん白骨にすがろと思ふ

彼の死と前後して日本の歌壇といふものも異狀な混亂狀態に陷入つた。そして晩年の牧水を既にすでに過去の歌人として葬り去るべく冷酷な言を吐いた人達さへあつた。彼は筆の上の論議は不得手であつた、しかし彼の藝術的に匂ひ高い人格をあのまゝもう一息、もう一歩押し進めるべく生きてゐて欲しかつたのに……、その點で彼自身も死ぬことは如何にも殘念であつたらうと思ふと堪へられない氣がする。

以上私は斷片的に、筆の進むに委せて追憶——或ひはそれに似たもの——を書いて見た。過去十數年を共に生活して來た人の事を書き立てるのは容易に似て私には容易な業ではない。今のこの私の淺薄皮相な眼には彼の深かつた生命のすがたはただ茫漠として不思議な存在としか見得ない點が多分にあるから……私の一生をかけても或ひは彼の眞の姿を遺憾なく述べ得ないかもしれない寂しさを強く味はつてゐる私であるから。

（四、六、三〇）

北原白秋著 —新刊—

緑の觸角 四六版極美本 恩地孝四郎裝幀

定價貳圓五十錢（送料廿二錢）

童謠について、自由詩について、また藝術教育について、著者が多年の熱意と誠實をこめて成つた論文・提唱・解註の集大成。童謠、自由詩に關心を持つ人は勿論、詩の愛好者、若き教育家諸氏の必讀を俟つ。

室生犀星著 —新刊—

天馬の脚

定價貳圓五十錢（送料廿二錢）

氏最近の隨筆感想論集で、天上の梯子、月光的文獻、井泉雜稿、詩について、文藝時評、映畫時評、人物と印象、澄江堂雜記、讀書と批評、映畫雜感、自畫像等、味讀飽くことを知らぬ名篇のみ。

改造社

「敗北」の文學（文藝評論一等當選）

——芥川龍之介氏の文學について——

宮本顯治

一

「文人」といふ古典的な文字の相應はしいとされてゐた芥川氏の住んだ世界は、永い間、私にとつて、可成縁遠いものに思へてゐた。この作家の「透徹した理智の世界」に、私は漠然、纖細な神經と人生に對する冷眼を感じるだけであつた。成程、それ等の色調は、私の歩んで來た過去世——小ブルジョア的な故鄕に閃めいてゐるものであつたけれども、その神經的な苦悶すら、根本的に私を揺り動かすものでなく、遠い世界に咲いた造花に近いものに思へてゐた。私は「餘りにも人工的な、文人的な」といふ漠然とした印象より外のものを多く持つてゐなかつた。

それは、一つは、氏の文學に對する私の味到力が足らなかつたことに因ると同時に、氏が常用してゐた都會人的なチョッキが、氏の全貌を幾重にも包んでゐたためでもあつたらう。

所が、一九二七年度に著しかつたこの「文人」の切迫した羽搏きと、その結論としての自殺は、氏をみる私の態度に强い變化をひき起さずにゐなかつた。意外にも、私は、我々に近く立つてゐる氏を發見したのである。私はこの時、氏の自殺が私を感傷的にしたのではないかと一應考へてみた。そこで、私は、新しく、嚴肅に氏を見直さずには居られなかつた。……だが、感傷のためではない。氏は、一生脱ぐことの出來なかつた重い鎧を力一杯支へながら、不安に閉された必死の鬪ひを見せてゐるのであつた。その數種の遺稿と共に、最後に、我々に肉薄して來てゐるのである。疲勞し切つた自己の上に投げられた過渡時代の影を痛々しく語りつゝ、氏を襲つて來る必然的な結論に慟哭してゐるのである。そして、そのことは氏にとつて、一つの異常な轉身と言ふより、氏の文學的出發點において、既に内在的に規定され

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た決勝線への必然的な到着であつたことも、再批判の後には知ることが出來るのである。

こゝで、序論的に、氏の生活の型を新らしく振りかへつてみることは、不必要でないであらう。

氏の生活圏が小ブルジョアのそれを出なかつたことは明らかである。

私は今、氏に似通つた社會的範疇の人として、有島武郎氏を、聯關的に想起することが出來る。過渡期の苦悶を生活した點において、二人は、最も典型的インテリゲンチャの型を代表してゐると云へるだらう。しかも、私は、芥川氏の中より我々に近いものを感ずるのである。該博なブルジョア的教養と態度のために、有島氏は、今日尚、全集の刊行や評傳によつて、「大陸的風貌」「階級的苦悶」等をたゝへられてゐる。けれど、有島氏の持つた苦悶は、未だ苦悶の中にも殉教者的な稚氣を帶びてゐる。故片上伸氏が批判してゐるやうに、啓蒙主義者――自得的なイゴイストにある――「理づめで自分の氣持を片づけてゐる點が氏の言ふところを淺くし、平たくし、乾いたものにし、尤ものやうでゐて、眞に心から受け入れさせる力のないものとしてゐる」のである。のみならず、智識階級の役割に關するその理論付けすら、認識のブルジョア性に起因する誤謬に立つて居ることも、今日においては明らかにされてゐることだ。痛み多い苦悶を末年にみられるニヒリズムの萌芽にもかゝはらず、ともあれ、有島氏の歩みには最後まで「愛」と「人道」についての確信らしいものが匂つてゐた。遺書にある「私達は自由に歡喜して死を迎へる」といふ言葉は偶然に書かれたものではない。

しかし、芥川氏の場合、我々の受け取るものは、より切迫した陰鬱な空氣である。後に於て評論するけれども、そこにあるのは、困憊した神經の觸手を通して、次第に意識されて行く「人生に對する敗北」の痛みである。愴然、氏は自分の辿つてゐる路が「敗慘」に通じてゐることを自覺せずには居られなかつたのである。

やがて、「實踐的自己否定」に到達せずには居られない後悔に滿ちた自己批判が、末期の氏の中に滂薄してゐる。その批判の中にもインテリゲンチャに課せられた重荷である懷疑や、自尊心から脫することが出來なく、それを決裂に至るまで神經の先に凍らしてゐる。氏こそ、ブルジョア文藝史に類稀な內面的苦悶の紅血を滲ませた悲劇的な高峯であると言へるだらう。それこそ、市民的社會の開化期から凋落期に及び文化的環境に育まれた記念碑的な存在の一つであらう。こうした芥川氏の文學を批判の對象とすることは、單に私の個人的なインテレストのみでなく客觀的にも無意義でないことを信じてゐる。

二

「プロレタリアートの眼からは、本質的に相敵對する所のイデオローグと、文學者の世界を正しい光明を以て照らすこそ、緊急事である」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し得よう。曾つて、私は、自己の持場で闘つてゐるインテリゲンチャ出の一人の闘士が、一夜腹立たしさうに語つたことをおぼえてゐる。

「駄目だ！　芥川の『遺書』が、――『西方の人』が、妙に今晩は、美しく、愼しく感じられるのだ」

彼のみではない。青野季吉氏も「芥川氏の生涯とその死とは、私の心をとらへて離さないものがある……私達は芥川氏を批判することは出來る。だが、芥川氏を捨てゝ顧みないことは出來ない。自分の中にも芥川氏があり、芥川氏の死があるからである」と云つてゐる。そして又、林房雄氏が芥川氏の死によつて、虛無的な氣持を掻き立てられ、中野重治氏が芥川氏を「大層可哀さう」に思ふのは、氏の中に感じる我々自身の殘骸のためであらう。瞬間的な弱い殘像にしろ、それが氏を近くに運んで來るのである。それ等がインテリゲンチャの肩におかれた致し方のない十字架であるにしろ、我々は芥川氏との間に、おかれた距離を明かにしなければならない。この作家の中をかけめぐつた末期の嵐の中に、自分の古傷の呻きを聞く故に、それ故にこそ一層、氏を再批判する必要があるだらう。いつの間にか、日本のパルナッスの山頂で、世紀末的な偶像に化しつゝある氏の文學に向つて、ツルバシを打ちおろさなければならない。

三

日本のプロレタリア文學も、やうやく「內容の革命」から「形式の革命」にまで自己をたかめて來た。それは新しい困難な建設のために、可能な限りの文學的遺產を整理する必要のある段階に達してゐる。ブルジョア文學は、未だ決定的には崩壞し去つてはゐない。政治的、經濟的の諸條件と共に、文壇は未だ支配的イデオロギーとしてのブルジョア的思惟と感覺の末期的繁榮を物語つてゐる。この歷史的な轉向期にあたつて、「さまよへる」過渡期のインテリゲンチャが、凡そ如何なる文學に自己の表現を見出すかと云ふことは容易に考へ得ることである。傷き易い神經を持つた彼等は、芥川氏の住んだ「孤獨地獄」に「求められぬ平和」を求めて、自己の呻きを聞いてゐるのではあるまいか。芥川氏に對する關心は、必ずしも、小ブルジョアジイの層にのみあるものではないであらう。プロレタリアートは時代の先端を壯烈な情熱をもつて進んでゐる。しかも、我々の前には、過渡時代の影が尙巨體を橫へてゐる。長い過去を通じて我々に情緒上の感化を與へて來た「昨日」の文學も。

「わがコムソモールの机の上には共產主義者のＡＢＣの下にエセーニンの小さい詩の本が橫つてゐる」暗示するところのものを多く持つてゐるこのブハーリンの言葉は、單にソヴエート・ロシアにおいてのみ考へられることであらうか。プロレタリアートの隊列に伍して、プロレタリアートの路を步まうとしてゐるインテリゲンチャの營構に、黨

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一九一五年——芥川龍之介氏の文學的生涯の初まつた時、氏の文學的傾向は、理智派、新技巧派等の名を以て呼ばれてゐた。

「芥川君の作品の基調をなすものは、澄み切つた理智と洗練されたユーモアである。そして作者はいつも生活の外側に立つて、靜かに渦巻きを眺めてゐる」と當時の文藝批評家、江口渙氏は「芥川論」において述べてゐる。思ふに「理智的」「諧謔的」と云ふ評語は、十年に及ぶ氏の作家生活を通じて絶える事なく冠せられた非難であり、又讃辭であつた。だが、これを以て氏の本質を示し得たとなすならば、それは批評的不具であらう。理智的であり、諧謔的であることも、確かに氏の半面をなしてゐる。だが、氏の全貌を語る上に、それは、一つのモメントを提供するに過ぎない。いや、或場合には、それは、氏の用ひた都會人的な假面でさへあつたのである。我々はさうした「定冠詞」に對する芥川氏自身の抗議をすら見出す。

人物記「佐藤春夫氏」で芥川氏は「僕のテンペラメントは嚴肅である。全精神を振ひ起さなければ滅多に常談も云ふことは出來ない」と云つて、「喜劇ならば君にはすぐ書けるだらう」との佐藤氏の言葉を誤解だとしてゐる。又「侏儒の言葉」の中で次のやうに云つてゐる。「偉大なる厭世主義者は必ずしも澁面ばかり作つてはゐない。不治の病を負つたレオパルディさへ、時には蒼ざめた薔薇の花に寂しい頰笑みを浮べてゐる……」ユーモラスな閃きを持つた「鼻」「芋粥」「往生繪卷」等の作品を讀んだのち、作者の微笑の底に憂鬱な澁面を我々はさぐりあてるであらう。「阿彌陀佛よや、おおい、おおい」五位の入道は、どのやうな破戒の罪人でも「阿彌陀佛に知遇し奉れば」淨土へ行かれると聞いて、かう呼ばはりながら、西の方を目指して進んで行く。そして道行く人から氣違ひ扱ひにされながら、遂に、餓ゑ死んで了ふ。だが、屍骸の口からは、いつかまつ白な蓮華が咲いてゐた。この「往生繪卷」はユーモラスな形式の下に、笑ひ切れない求道者の姿を書いてゐる。正宗白鳥氏は、この作品の結末のまつ白な蓮華の咲く非現實的な描寫を捉へて、芥川氏がリアルに徹することの出來なかつた人だといふことの例證としてゐる。勿論、我々は別の意味で氏が現實を深く認識しなかつたことを批判する。けれど、かうした偏狹な自然主義的批判は、永久に、作品の本質を理解し得るものではない。作者は「五位の入道」を愛してゐる。諧謔を越えて、まじめに愛してゐるのだ。蓮華の花を咲かす事は、氏の「あそび」ではない。枯木の梢に死んだ求道者に、心から詩的な頌辭を最後に手向けてゐるのである。

ユーモラスな一面は多くの場合、氏の嚴肅な精神の悲しい戲れであつたのであらう。さうしたヴェールをかゝげ見る時、我々は、氏がその文學的出發點において、既に、「いたましき人」であり、理智と情熱の相剋に苛まれた人であることを知るのである。「頭には喜劇、心臓には悲劇」を持つたチエスタートンの賢人は或は氏自身ではなかつたのか。氏の双眼のいろは、既に、晴々しいものに遙に遠いものであつたのだ。

君看雙眼色

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

處女作「羅生門」の扉に寫されたこの文字は鬱悶を切歯して身構へた氏の、微かに洩した憂愁の聲であらう。

「人生は二十九歳の彼には、もう少しも明るくはなかつた……」これは末期の氏が描いた初期の自畫像である。

かく、氏の文學的生涯の初めに、既に、氏の人生は薄暗く煙つてゐた。氏は人工的に微笑もし、反語をも投げたけれども、それは本質的に氏を救ふものではなかつた。氏を捉へたこの不幸な手は、一體何物であらうか。二つの「大導寺信輔の半生」は可成り、瞭然と、氏の辿つた半生を盡してこの疑問に答へてゐる。「或阿呆の一生」と並んで珍らしく告白的な情熱にとんだこの作品には、「ある精神的風景畫」と云ふ傍題がそへられてある。單に自傳的な要素を多く含んでゐるのみでなく、これ等の作品は凛々とした氣魄をたゝんでゐる點において、私の好むものである。この作品も無論、幾分かの「詩」を現實の中に溶かしてゐるだらう。と同時に「侏儒の言葉」の逆說的表現をかりるならば、譃を通してでなければ語られない眞實もあるであらう。

彼はごみごみした往來に駄菓子を食つて育つた少年であつた。彼の家庭は貧しかつた。彼等の貧困は體裁を繕ふためにより苦痛を受けねばならぬ中流下層階級の貧困だつた。彼はこの貧困を憎んだ。同時に豪奢をも憎まずにはゐられなかつた。彼は何よりも先に、退職官吏の下層階級の人間だつた。

學校も彼には薄暗い記憶のみ殘すものだつた。まことに學校は彼にとつて貧困を脫出する救命袋に過ぎなかつた。

彼は本を愛した。智的貪欲を知らない青年は、彼には路傍の人であつた。實際、彼の友情はいつも幾分かの愛の中に憎惡を孕んだ情熱だつた。けれど友情の標準は智的才能のみではなかつた。上層階級に育つた青年と握手する時、いつも針のやうに彼を刺す階級的差別を感じてゐた。

學生時代の彼は「ファウストの中の學生」のやうに何でも精神的にえらいものにならうとした。しかし、彼の發見したのは畢竟彼の大望の全部は夢に了るより外はないことだつた。かう云ふ道程を經たのち、彼は自身の如何に無力かを發見した。この空虛を感ずることは彼には恐ろしかつた。彼はある春の晩、息もつまるほどの空虛を感じて自殺を考へた。かうした間にも貧困と不健康は彼を襲つてゐた。彼は時々目に見るように彼に英語や數學を敎へた敎師達の一生を髣髴した。彼等の一生は見渡す限り佗しい勞勞や、病苦の影に沈んでゐた。彼の一生もことによれば、彼等の一生よりも見すぼらしいものかも知れない。だが、彼はどう云ふ目にあつても兎に角、生きて行かねばならない。何の爲に？　何の爲に？　この疑問はいつか信輔に厭世主義を敎へてゐた。

芥川氏の辿つた半生の陰影の多い道程は、斷片的にではあるが、以上の引用的説明の中に窺ふことが出來るであらう。

かうして、俊英な理智と、脆く、强靱な自我を持つた一人のインテリゲントは、成長するにつれて、次第に後の日の悲劇を孕みつつ、小ブルジョアジイの烙印を彼の世界觀に燒きつけた。氏は「總てのものを本から學んだ」と書いてゐる。しかも、皮肉にも「彼は厭世主義の哲學を一頁も讀まぬ前に既に厭世主義者だつた」のだ。

その頃、氏が友人恒藤氏に宛てた手紙の中に次の一節がある。

「僕はイゴイズムを離れた愛のあることを疑ふ（僕自身にも）。僕は時々、やり切れないと思ふことがある。何故こんなにして迄も生存をつづける必要があるのだらうと思ふことがある。そして最後に神に對する復讐は、自己の生存を失ふことだと思ふことがある。僕はどうすればいゝのか分らない……」

この表現の中においても、我々は小ブルジョアジイの諸屬性の中で、「自我に關するの思索」こそが、基本的な一線であることを知るのである。芥川龍之介氏の文學的生長に關して、漱石、鷗外の影響を特筆することは、常識的な眞理とされてゐる。しかし、それが主として創作上の手法にあつたことを忘れてはならない。複雜なこの藝術的インテリゲントの人生觀に、根本的な色彩を塗つたものは、云ふまでもなく、第一に「中流下層階級の陰影」であつた。「大導寺信輔の半生」は、一面、この小ブルジョア的自我の發展史であつた。

「彼」は此の社會において、何等、傳統的な生活手段を持つてゐない。從つて、生存を保證されず、絶えざる生活的窮乏の日蔭（ひかげ）を自分の周圍に見出さなければならない。「彼」は、どうしても自分一個の頭腦に賴らなくてはならない。かうして、「彼」の唯一の縋り得る生活手段は、智的才能だけである。智識に對する彼の貪慾とも云ひ得る强烈な慾望は、「彼」の個人的特性であると同時に、こゝにその社會的母胎を持つてゐる。智識は第一に「彼」の生活上の武器であつた。精神的格鬪は何よりも殺戮の歡喜のために行はれたものに違ひなかつた」ウオロフスキイーの評論した「バザロフ」におけると同じく「彼」の場合にも智識は、個人的に最高の享樂を附與したのだ。後に「彼」の夢みたやうに何册かの本の著者となり、博學、俊髦の名を與へられた。だが、「彼」の「豐富な智識」が著しく小ブルジョア的狹隘性を含んで居たことを鋭く指摘しなければいけない。

かうして「彼」の、行爲、思索は常に自我を中心として廻轉してゐる。「彼」の問題にするのは、本質的には自己である。「彼」はそれに沒頭し、現實はともすれば自我のみであるやうに思つて來る。最後に、そして、「彼」は自我を愛する。しかも、外界は激しい刺戟と動搖を「彼」に浴せかける機會にみちてゐる。「彼」は自己を防衞しつゝも、ともすれば、異國感や、空虛感に苛（さいな）まれるのである。「彼」は「哲學」に失敗した後、藝術の内に入つて行つた。だが、一匹の犬も滿足に畫けなか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つた。自己の顧り得る唯一のものが無力であり、[illegible]ことを發見した時、「彼」の世界はもう門るいものではなかつた。けれど、「彼」は未だ絶望はしなかつた。「彼」は自分で參つた時にも、容易に弱音を吐かなつかた。矜誇は惡德であると同時に、當時の彼を鞭つ生活のスプリングであつた。

文壇の聲望を負うて處女作集を出した日の芥川龍之介氏に、何故に、又、如何なる精神的陰影がかげつてゐたかを、私は大體しらべて來た。若し、彼が何物かに安んじてゐたとするならば、それは落寞とした孤獨であつたであらう。

四

「人生は一行のボオドレエルにも若かない」

二十歳の芥川氏は、から云つて書店の二階からみすぼらしい人生を眺めてゐた。この言葉程、氏の人生に對する輕侮と藝術に對する信仰を表現してゐるものはない。薄暗く黄昏れた人生の中に、藝術の灯だけが僅かに、一切の懷疑的精神の外にあつて、氏を照らしてゐた。「凡てのものは信仰とならずんば戯目なり。獨り、宗教、藝術に於てのみならず」――(書簡集)――ともすれば、空虚を感じ易い自己の生活に、芥川氏は執拗にかけ聲を投げた。だが、白日の下に曝された現實社會は、いつも、不調和の絶望に誘はれ勝ちだつた。こうした中に、氏は

藝術[illegible]麗な孤峯のやうに、彼を力づけ、彼を動かした。まことに「藝道に精進せむとする彼の氣魄は、りんりんと鳴りを立てるかの如く思はれた」と云ふ恒藤氏の言は、芥川氏の藝術に對する態度をよく傳へてゐると云へるだらう。

藝術家の生活に材を採つた芥川氏の作品は、鬱屈とした熱情のために力強い表現を受けてゐる。「戯作三昧」「地獄變」「沼地」――これらの作品の主人公達を、共通に貫いてゐる事實は、現世的に彼等が決して幸福ではないことだ。「戯作三昧」の境地に落ちついてゐるやうに見える馬琴すら、安住の人ではない。彼を理解しない俗衆に對する侮蔑、藝術と道德との二元的相剋、愚昧な檢閲官に對する痛罵、我々は馬琴の中に作者の姿を汲みとることが出來る。だが、「戯作三昧」の氏には未だ深い絶望はなかつた。人生は塵勞と倦怠にみちてゐるにしろ、時に、「あらゆる殘滓を洗つて、新しい鑛脈のやうに輝く時があつた」から。民衆に對する孤高な態度は苦惱といふよりも、寧ろ矜持をもつた張りを與へるものだつた。「沼地」は短い作であるけれど、狂人になつた藝術家の不幸な一生に對して、作者は痛々しい敬虔な面持で立つてゐる。「地獄變」は藝術家の狂氣に近い魂が切實に描かれてゐる作として、最も壯烈な色彩にとんでゐる。藝術への精進の前には、いかなる野蠻な精進をも投げ出すことを厭はない藝術家の勝利――不幸な勝利がある。だが、繪師良秀はいつ迄も、野蠻な藝術的法悦に恍惚とた。

てゐることが出來なかつた。このことは重要な暗示を持つてゐる。道德的な芥川氏の一面は、やつぱり、良秀に縊れ死の結末を與へずには居られなかつたのだ。その前には、一切を蹂躪して悔いない藝術的氣魄を示しながら、氏のヒューマンな半面は、その蹂躪を妨げるのだつた。藝術は氏にとつては最上の城砦ではあつても、氏の全部とは成り得なかつたことを、いみじくもこゝに知らされるのである。氏は藝術上の至上主義者とは成り得なかつた。畢竟、氏は、藝術的な——甚しく藝術的な氣質(かたぎ)に住んでゐながら、それに安住することが出來なかつた。

「僕達の書いてゐる小說も何時か、此の野呂松人形のやうになりはしないか。僕達は時代と場所との制限をうけない美があると信じたがつてゐる。……しかし、果してさうありたいばかりでなく、さうあることであらうか」「野呂松人形」の中のこの言葉と次の氏の言葉とを比較してみよう。

「僕は詩の前には未だ曾つて懷疑主義者たる能はざりしことを自白す。同時に又詩の前に常に懷疑主義者たらんとつとめしことを自白す」——(遺稿、小說作法十則)——

兩者は明らかに食ひ違つてゐる。それは同一の確信に立つたものではない。が、恐らくこれが氏の眞實の心であつたのであらう。むしろ、この二つの言葉は、氏が藝術至上主義者たらんとしつゝも、藝術至上主義者たり得なかつた矛盾を現はしてゐる。「野呂松人形」の中に於ては、この相剋的要素はまだ不靜な懷疑に止つてゐたが、晩年に及ぶにつれて、次第にそれは激しいものとなつて行つた。社會學的な文學槪論の闡明を待つ迄もなく、聰明な氏は、凡庸な作家達に踵を合はして、恬然と「玉は碎けず」と云ふことは出來なかつた。と云つて、氏の中に深く根をおろした藝術家的な魂は、それに苦痛と不安を感じて、ひそかに、「だが、玉は再び生れてくる」と安心せずには居られなかつた。藝術と社會についての二元的な動搖を、統一的な均整におかうとした努力を——捨鉢的な努力を、我々は晩年のエッセイの處々に發見することが出來る。

「文藝の作品はいつかは滅びるに違ひない。ボオドレエルの詩の響きも自ら明日は異るであらう。しかし、一行の詩の生命は僕等の生命よりも永いのである」——(文藝的な餘りに文藝的な)——

「シエクスピイアも、ゲエテも、李太白も、近松門左衞門も亡びるであらう。しかし、藝術は民衆の中に必ず種子を殘してゐる」——(侏儒の言葉)——

我々はこゝに二十歲の芥川氏にみられなかつた「藝術」に對する動搖をみるではないか。「いつかは滅びるであらう」いつか、蕭颯な社會的現實は、氏の藝術觀に、深刻な認識を與へずにはおかなかつた。しかも、芥川氏は、「落莫たる百代の後に」、氏の作品を愛する誰かに美しい夢を見せることを信じやうとしてゐる。氏の輕蔑してゐた民衆こそ、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

偉大なる創造力をもつて、ゲエテを——そして、氏をも乘り越して突進するものであることを認めた時、芥川氏は、小ブルジョアジイのイデオローグに過ぎない氏の文學も、いつかは沒落しなければならないといふ告知を、新興する階級の中に聽いたであらう。

「藝術は民衆の中に發つてゐる」。さうだ。

民衆が新しい明日の藝術を創造する。これは、事實上氏自身が自らに向けた否定の刄ではないか。あらゆる天才も時代を越えることは出來ないとは、氏の度々繰り返したヒステリツクな凱歌であつた。こうした渴望そのものが、「自我」を社會に對立さす小ブルジョア的な魂の苦悶でなければならない。

五

資本主義社會の凡俗性と醜惡な雰圍氣は、藝術家芥川氏に嫌惡と退避を呼び起すものだつた。「僕は醜いものを愛する。僕はあまりのまゝ强くなりたい、大きくなりたい」——(書簡集)——こう云ひつゝも、氏は安住し易い東洋的な咏嘆に休息をした。現實に求めることの出來ないロマンチシズムの焔を、氏は歷史的な素材や、エキゾチツクな世界、神秘的な奇蹟に求めた。これが芥川氏の一面に過ぎないことを、我々は注意しなければならない。これを擴大することによつて、いかに芥川氏が「瀕死の文人」として誤り解されてゐることか。

「六の宮の姬君」は「運命」と名づけられたものゝ中にある蒼ざめた古典趣味である。鷗外の歷史ものにみられるやうな巧緻な形式的完成を透して、それはいかにも美しい。鹿鳴館の「舞踏會」の中でも、作者はピエル・ロテイと共に、「我々の生のやうな花火」をみつめてゐる。「南京の基督」も、氏のロマンチシズムに濡れてゐる。私窩子の抱いてゐるクリストの夢に——儚ない夢に、氏は憐憫と愛憐をそゝいでゐる。

が、私は「奉教人の死」の情熱を愛する。「なべて人の世の尊さは、何ものにも換へがたい刹那の感動に極まるものぢや」こゝには、氏の前期の作品に多いシニシズムの鎧がない。たとひ、南蠻的な情調に彩られてゐても、殉教の火を芥川氏は愛してゐる。その他、「妖婆」「妙な話」等は現實に背を向けようとする氏のミステリアスな物語である。

現實は、だが、いつまでも氏にかうした情緒的な安住を許さない。そして又、人生觀上のリアリズムは絕えず嚴しく氏の神秘的な一面と衝突せずにはゐない。同じく古典的な素材の中にも芥川氏は容赦なく人間の生の姿を描き出さうとする。封建的な權威から、人間的な惡と愚を摘出して、それに冷笑を浴びせてゐる。「袈裟と盛遠」「或日の大石内藏之助」「將軍」「俊寬」「報恩記」「枯野抄」——これらの中に我々は、芥川氏によつて近代的に、正當に云ふならば小ブルジョアの心理的形態に飜譯された一系列を見るのである。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「袈裟と盛遠」は坊間に傳へられてゐる「烈婦袈裟」を戀の恨みに生死する一介の人妻に描きなほしてゐる。氏の作品の中では、大石内藏之助も忠臣らしくなく、夕霧や浮橋の艶かしい姿を思ひ出したり、どこから來るともない憂鬱に佇んだりしてゐる。

「枯野抄」も亦單に渺茫の趣きを覘つてゐる作ではない。この作品に充分な渺茫や枯寂が現はされてゐないと云ふ室生犀星氏は、結局氏自身の好みを語つてゐるに過ぎないであらう。一般的に云つて、氏の作品にいつもさうしたものを發見したがるのは、芥川氏を除りに東洋的な文人としようとする鑑賞家的惡癖である。「悲嘆かぎりなき」門弟たちは、必ずしも嘆きの中の悅び――芭蕉の人格的壓力の桎梏からの解放の悅びを持たぬわけではなかつた。彼等は「枯野に窮死した先達を嘆かずに、薄暮に先達を失つた自分達自身を嘆いてゐる」我々はこゝに、近代的個性の痛々しい自己省察を見せられるのである。

「將軍」は？　この將軍は、慘めにも手痛く嘲笑され諷刺されてゐる。この「長者らしい」將軍の軍服を剝ぎ取りながら、作者は無智で殘忍で打算的な將軍の裸體に冷笑的な嫌惡を示してゐる。軍神の封建的な非人間性に鑿壁してゐる。それはいかにも巧みな抉出的な手法に終始してゐる。そして私は、作者のこの手際に喝采を與へようとしたが、やつぱり次の瞬間、それを思ひ止まらねばならなかつた。何故か。私はこの作品の全體的な構圖に根本的な缺陷を發見させられたからだ。將軍と對蹠的に描かれた軍參謀に、スタンダールの箴言やユーゴーの歌を想起させてゐる內に、作者は彼も亦軍人であることを忘れてゐる。そしてそれはモティーフに小ブルジョア的な限界性を持つてゐるからだ、我々は氏の嘲笑が封建的なものに向けられてゐる場合にすら、ブルジョア的な節度を脫することが出來ないのである。氏は結局爆彈を手にした實踐的な嘲笑者とは遙に遠いものであつた。

これら――「袈裟と盛遠」から「將軍」に至る諸作品を通じて、私は芥川氏の認識の對象が人間におかれた場合、生理學的な自我を中心として把握されてゐることを知るのである。これは自然主義に共調を持つ心理暴露の型である。芥川氏はさうした歷史的人物叢を描きながら、多くの場合つとめて作者の愛惜と憎惡を靜觀的な理智の中に包んでゐる。憂鬱な工人のやうに憐愍し、アイロニイを織りまぜて、「致し方のない人間性の眞實」を寥々と彫りつづけてゐるのである。

人間性に對するアイロニイ、冷笑的剔抉の一面と共に芥川氏は「人間らしさ」に對する愛情を不用意に洩してゐる。「僕はどんな良心も持つてゐない。……僕にあるのは神經だけだ」――（侏儒の言葉）――「我々の愛するものはこの豪勇の持ち主である。常に善惡の觀念を足下に蹂躙する豪傑の士である」「我々はかう云ふ旺盛なる『我』に我々の生命を暖める焰を感ずる。或は我々の到達せんとする超人の面輪を感ずる」。――（岩見重太郞）――

芥川龍之介氏も亦あらゆる孤獨な小ブルジョア的インテリゲントの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が自分にとりて、同じ誘惑力を有する也。善を愛せばこそ惡も愛し得るやうな氣がする」「自分は醜いものを祝福する」——(書簡集)——善惡と同一的範疇にみようとする心理的根據を我々は、現在社會に對する小ブルジョアジイの絶望的な不調和の中に見る。果して超人たることは、小ブルジョアジイにとつて可能であらうか。又、我々はプレハーノフと共に次のやうに答へるだらう。

「善惡の彼岸に立つとは何を意味するのであらうか。これは一定の社會秩序の地盤の上に發生した善惡に關する一定の觀念の領域において判斷することが出來ないやうな偉大なる歴史的事業を遂行することを意味するのである」

かくて、氏の善惡を越えようとする努力が如何に不可抗的な矛盾に立つてゐたものであるかゞ理解出來るであらう。氏は藝術の前には、冷然と、道德をも踏み躙らうとした。人間として失敗すると共に、藝術家として成功した泥棒詩人フランソア・ヴィヨンを、氏はいかに懐しんでゐたことか。けれど氏の教養と稟性は、容易には氏の超道德的な勇氣を與へなかつた。多くの人々の氏に關する追憶は、氏が一面古風な人情家であつたことを、ことごとく傳へてゐる。

「蜜柑」「おぎん」「偸盗」等の作品において、私は作者が不可解な下等な退屈な人生を忘れて朗らかに涙ぐんでゐるのを見る。「猿」の中で「猿は懲罰は許されても人間は許されませんから……」といふ反語の奥

いかに氏が一時代の一階級の道德律を越えることの出來なかつたモラリストであつたかの證左となるであらう。

六

これまでに明かにして來た芥川氏の多元的な傾向は、どう云ふ相關關係をもつて、後期の氏の文學を形成して行つたであらうか。

「僕は」と云ふ小品の中で氏は次のやうに書いてゐる、「僕はいつも僕一人ではない。息子、亭主、牡、人生觀上の現實主義者、氣質上のロマン主義者、哲學上の懷疑主義者等々……その何人かの僕自身が、喧嘩をするには苦しんでゐる」又、別のところで、氏はこれに政治上の共產主義者といふ一因子を加へてゐる。更に「澄江堂雜記」の中で「一かどの英靈をもつた人の中には二人の自己が住むことがある。一つは常に活動的な情熱のある自己であり、他の一つは冷酷な觀察的な自己である」と云ひ、氏自身も冷酷的な自己を感じてゐるが、どうすることも出來ぬと嘆いてゐる。

前期の芥川氏はかうした自分の姿に積極的な肯定を與へようとした。同じ「澄江堂雜記」の中で、氏は「我等が內にある一切のものはいやが上にも伸ばさねばならぬ。それが我等に與へられた唯一成佛の路である」とした。そしてこの言葉を精進の信條として、藝術の道を切り拓いて進んだ。それは可なり苦しい努力ではあつたらうか、かうした內

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

闘爭もまだ致命的な痛手ではなかつた。氏は多才なスペクタルを交錯させながら、憂鬱な微笑の中に煙草を吹かしてゐた。薄曇つた人生の風景に顔を曇らせながら、何氣ない諧謔を弄することを忘れなかつた。反撥的諸因子は氏の深い節度と矜持の中で爆發を制せられてゐた。そして氏はさうした矛盾そのものを愛してゐることすらあつた。

かうした氏が、取り上げて生活の楯としたのは「理智的なもの」であつた。氏は兎もすれば破れ易い均衡の支點を「理智」においた。「或阿呆の一生」の一節「人工の翼」にあるやうに「彼」は情熱に驅られ易い一面を恐れて、冷やゝかな理智にとんだ一面に近いヴォルテールに近づいて行つた。そこで「彼」はヴォルテールから「人工の翼」を借りた。「彼はその人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歡びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すぼらしい町町の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまつ直に太陽へ登つて行つた。丁度から云ふ人工の翼を太陽の光に燒かれた爲にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……」

けれど我々は、齒と齒を血に滲ませてゐる自身の中の兩棲類をいつまでも同居させておくことは出來ない。矛盾はより高次的な統一によつて救はれない限り、いつ迄も解決される得るものではない。氣質上のロマチストは人生觀上のリアリストと嚙み合つた。哲學上のスケプチストは、むろん、政治上のコムニストと狂つた齒車のやうに永遠に反逆し合つた。それのみではない。この夫々を單位とした組合せ（コンビネーション）は理智の支柱によつて人工的に保たれてゐた氏の姿勢に、不安と苦痛を與へずにはおかなかつた。

氏の矛盾の進化をより客觀的に考察する爲に、我々は更に社會的條件をも考へてみる必要があるであらう。一九二五年——氏の文學的生涯の終り頃——は日本プロレタリアートの全線的展開の時代である。「資本と勞働の生み出す一般的混沌」は寄生的な小ブルジョアジイの中に強い動搖を與へる。それ自身の階級的地盤を持たないインテリゲンチヤの自己辯證が、斷然史的な現象として著しくなつて來る。

これらの現實から芥川氏が具體的に何を反映したか、我々は云ふを要しない。我々は必要以上に現象の社會的原因を追窮することの徒勞であると同時に、滑稽であることを知つてゐるから。だが、かうした荒々しい現實の中で、氏が所謂「人工の翼」で飛揚することのいかに困難であるかを、痛切に感じたであらうことは考へてもいゝであらう。冷靜な理智に住家を求めて來たことの後悔が、氏の中で激しくなつて行つた。曾つての冷笑的な風流的な生活態度に對する自己批判がかくして起つて來た。

「理性の私に教へたものは畢竟理性の無力であつた」こゝに先づ芥川氏の一切の理智的外貌を脱ぎ捨てゝ、立ち直らうとする決意を我々は聞く。「若し理性に終始するとすれば、我々は當然我々自身の存在を否

定しなければならぬ」――(河童)――かくて一切の小さい都會人的な修飾を捨てゝ語らうとした「信輔の半生」が珍しく積極的な告白を展開してゐるのは、理性的な一面に對する氏自身の反逆に外ならぬ。これは氏にとつて重用な變化でなければならない。「僕は物見高い諸君に僕の暮らしの奥底をお目にかけるのは不快である。ストリンドベリイも金さへあれば「痴人の告白」は出さなかつたのである。「誰が恥ぢ入りたいことを小說などに作るものか」この傲岸な前期の氏に想起する時、我々は氏の新しい情熱的な氣配に眼をそそがずには居られない。氏は堪えがたい迄に分裂し疲勞した自己を勇敢に整理しようと思つた。氏はその爲にも野蠻な情熱を求めずには居られなかつたのだ。いはんや、理性は氏に餘りにも無力な結論を與へたではないか。

「今昔物語について」「續芭蕉雜記」等はこの野蠻さを求めやうとした氏の所産に外ならない。氏は云つてゐる。「僕はやつと今昔物語の本來の面目を發見した。それは brutality（野性）の美しさである。或は優美とかに最も遠い美しさである」芥川氏は夢を遠い昔に求めた曾つての自己を嘲笑してゐる。

あの芭蕉ですら、氏の眼にはもう到底、世捨人芭蕉ではなかつた。奥の細道に立つた芭蕉の姿は、破れかぶれの勇にとんだ、「したたか者」だつた。新しく見直された芭蕉は、不退轉の一本道を歩んだ、感傷的なものから遠い、「日本の生んだ三百年昔の大山師」だつた。この俳人の不敵な面魂こそ、芥川氏が決死によぢ登らうとした城壁であつた。そして私は知る。この時の芥川氏も亦「當代に滅多に理解されなかつた、恐ろしくやけくそ」になつた――或はならうとした詩人であつたことを。室生犀星氏の傳へるところによると鵠沼へ行く頃から、芥川氏は餘り書畫骨董に興味を持たなかつたとのことである。實際、氏はそんなものを振り向く氣はしなかつたに違ひない。又その頃出席した新潮合評會で、「藪の中」を賞めて後期の作を好まない或人の言葉に、芥川氏は昂然と答へてゐる。「あゝ云ふ作品は近頃の僕は書きたくないのだ」氏は全力を盡して現實的なものゝ中に肉薄して行かうとした。しかも、氏を堅く包んだ古い衣は容易には氏に突進の自由を與へなかつた。「我々は自由に突進したい欲望を、その欲望を持つところに自ら自由を失つてゐる」現實社會が續けさまに投げかける刺戟を戰ひ拔き得ない自分を振りかへつた時、氏はかう呟かずには居られなかつた。

「蜃氣樓」「點鬼簿」「河童」「彼」等の諸作は、末期に向ふ崩れ方を歩いてゐる氏の樣々な呼吸である。

「蜃氣樓」「點鬼簿」の「僕」は死んだ人の話ばかりしてゐる。それは水底にある死骸の香ひに滿ちてゐる。作品「彼」の主人公達はみんな恐ろしく憂欝である。作者をして註釋を加へしめるならば、「第一の『彼』は何をしても寂しい。第二の『彼』は何處へ行つても寂しい。」更に「玄鶴山房」においても、作者は息をひそめて「婆娑苦」に滿ちた暗い家庭を見つめてゐる。馬車の中でリープクネヒトを讀みつゞけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る大學生も、作者の意圖したやうに作品に新時代の光を投げると云ふより、寧ろ一層玄鶴山房の中の暗さを對照的に浮き上らせてゐると云ひ得るくらゐだ。

「河童」においても、作者の苦惱は依然暗いものだつた。作者の言葉によると「河童はあらゆるものに對する——就中僕自身に對するデグウから生まれました」しかし、我々は嫌惡によつて、混亂した自己を完全に整理し得る筈がない。「最も賢い生活は一時代の習慣を輕蔑しながら、しかもその又習慣を少しも破らないやうに暮らすことである」この言葉が如何に中途半端な自己の生活に對する自己嫌惡を示してゐるか。變革の意志を缺いた社會批判は——結局、疲勞ののち、最初の出發點にかへるより外はないのである。所詮、「河童」は氏の「ライネッケ狐」にすぎないだらう。

七

遺稿「或阿呆の一生」は「西方の人」と並んで、芥川氏の文學的一生の焦點であり、結論である。それは過渡的インテリゲンチヤ文學の歴史的な高塔となるだらう。

「或阿呆の一生」は「言はゞ刄のこぼれて了つた細い劍を杖にしながら」辿つた必死的の記錄である。病苦と塵務に疲れ果てながらも、最後に自己をえぐり出して、刄向つて來る運命に叩きつけようとした記錄である。「齒車」も時濟とした作である點において、これに劣らないかも知れない。事實、私は「齒車」に書かれた、狂氣の一歩手前にくすぼつてゐる神經の息苦しさに暗然とせずには居られない。何人もかうした人生が「地獄よりも地獄的」であることを疑はないだらう。

「西方の人」の芥川氏にとつては、十字架にかゝつたクリストの祈りは、もう單に三千餘年前に生きた聖靈の子の慟哭ではなかつた。「わが神、わが神、どうして私をお棄てなさる」氏はクリストと共に氏を襲つて來る「敗慘」と格鬪しつゝ、ゴルゴタの祈りを祈つてゐる。氏は「人間的」なクリストの中に悲劇的な情熱を燃え上らしてゐる。それはアプトン・シンクレエアの書いた「人類の生んだ最初の革命家の姿」ではない。芥川氏を動かしてゐるクリストの一生は「天上から地上へ登るために、無殘にもおれた梯子である」

「或阿呆の一生」はこれにもまして、痛ましい歷史に違ひない。これは形式においても、芥川氏の他の作にみられない激しさを持つてゐる。詩人的なハイパーボリとともに、作者は傷いた主觀を、むしろ狂暴にちりばめてゐる。

作者はこの中で狂人であつた母を書いてゐる。甑を想はす家族制度の下で、道化人形のやうに生きた苦しみを書いてゐる。「彼」は狂人の娘と憎惡に近い戀をした。一本の高い唐黍（たうきび）に傷き易い「彼」の自畫像をみて「もうおそい、しかしいざとなつた時には……」と思ふのだつた。「彼」は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。が、雨に濡れた架空線から發する淡しい空中の火花だけは、命を取り換へ

てもつかまへたかつた。ヴオルテエルの家――理性の家から「彼」は英雄レニンを見た。彼は才力の上でも格鬪出來る女に邂逅した。そして處世術にたけた「彼」は、抒情詩を作つてこの危機を脱出した。「彼」は窓格子に帶をかけて縊死しようとした。もう敗北は脱れることの出來ないものだつた。

「彼は不眠症に襲はれ出した。のみならず體力も衰へはじめた。何人かの醫者は彼の病にそれぞれ二三の診斷を下した。――胃酸過多、胃アトニイ、乾性肋膜炎、神經衰弱、慢性結膜炎、腦疲勞、……

しかし彼は彼自身彼の病源を承知してゐた。それは彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もちだつた。彼等を、――彼の輕蔑してゐた社會を!」

芥川氏の病苦の中に、我々は「この社會に對する恐れ」が、强く影を落してゐた告白をこゝに聽くのだ。氏の「或舊友に送る手記」の中に書かれた「漠然とした不安」の意義について雜多の人が夫々の解釋を下してゐる。或る詩人は「芥川氏は人生に敗れて死んだのではない。それはむしろ勝利の死だ」と叫んだ。そして、又或る作家は氏が「西方の人」を書いたことを例證として末年の氏が宗教的色彩を持つてゐたと云つた。彼等はあくまでも氏の自裁に社會的條件を除かうと努めてゐる。私はそれを一々反駁することをしない。只、彼等はそのことで彼等の「白い手」を見せてゐるだけだ。「痛く憂へて死ぬ許りだつた」芥川氏は彼等に「橄欖の下に眠つて居たクリストの弟子」に似たものを感じては居なかつたらうか。

この「社會」に對する恐れは、具體的に二つのものに分析出來るのである。一つは、いやおうなしに氏を「清朗の人」に祭り上げて、氏に鎖をかけた古い道德的雰圍氣であり、一つは、資本主義の惡をみとめてゐてその中に安住する自身を恥ぢる心であらう。(「問答」の章參照)これ等は氏の小ぢんまりした生活型から生れた必然的な破綻である。「芥川龍之介! 芥川龍之介! お前の根をしつかりおろせ。お前は風に吹かれてゐる葦だ。……これからお前はやり直すのだ」――(闇中問答)――しかも、こうして「生活」を新しく建て直すことは、肉體的にももはや不可能であつた。後悔が自嘲がそして絶望か、餘りにもひしひしと氏をとりまいてゐた。氏は「しみじみと生活的宦官に生れた彼自身を輕蔑せずには居られなかつた」。最後の力を盡して、自敍傳を書いに見ようとして、それが自尊心や懷疑主義や利害の打算のために容易に出來ないことを知つた時も、「彼は彼自身を輕蔑せずにはゐられなかつた」こう云ふ自己破綻からどうして明るい再起を期待することが出來ようか。「あらゆる機關車は彼等の軌道により必然にどこかに突進しなければならぬ。もつとも速く……それより外に彼等のすることはない」――(機關車をみながら)――。芥川氏の軌道がどこに向けられてゐるかはもはや明らかである。

「敗るゝ者をして敗れしめよ……」(文藝的な餘りに文藝的な――。絞罪を待つてゐる泥棒詩人ヴイヨンの姿に、氏はかうした「敗殘主義」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的な歡呼を與へてやつた。そして社會的な慣習に背いた罪は、當然に背負はなければならないと言つてゐる。だが、彼等が敗北するのは習慣にそむいたためではない。徹底的に習慣にそむき得なかつたからだ。――かくて、世紀末的な苦悲にひしがれた芥川氏の自畫像は「或阿呆」の一生の次の一節である。

「彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯發狂か自殺かだけだつた。彼は日の暮の往來をたつた一人歩きながら徐（おもむろ）に彼を滅しに來る運命を待つことに決心した」

私は出來るだけ忠實な引證を試みて、「或阿呆の一生」の內容を約說して來た。それは徐々に、隱然と結成されて行つた痛ましき人の歷史であつた。この作品は單に芥川氏の全文學の總決算的表現であるばかりでなく、明日の日を望みつゝも、傷き易い自我と社會的な重壓に堪えずして、苦しまなければならないあらゆる小ブルジョア・インテリゲンチャの痛哭をそこに漲らせてゐる。それは氏の辿つた「敗北」の道程と「敗北」の苦悶を殘酷に綴つた作品である。それは冷然とした清澄の中に、自己の「敗北」を意識して進んだ意味において、文學における「敗戰主義」だと云へるであらう。

八

私はもう決論してもいゝだらう。

芥川龍之介氏の文學の「最後の言葉」は、社會生活における人間の幸福への絕望感であつた。あらゆる厭世主義者のやうに、氏は「人間に負はされた永遠の世界苦」に結論を發見せずには居られなかつた。それは決して新しい思想ではない。新しい感情ではない。それは「自己」への絕望をもつて、社會全般への絕望におきかへる小ブルジョアジーの致命的論理に發してゐる。かくて芥川氏は氏の生理的、階級的規定から生れる苦惱を人類永遠の苦惱におきかへる。

娑婆苦を娑婆苦だけにしたいものは
コムミユニストの棍棒をふりまはせ
娑婆苦をすつかり失ひたいものは
ピストルで頭をうち拔いて了へ
――侏儒――

この詩は明らかに次のことを意味する。史的な必然として到來する新社會が、今日の社會より幸福ではあるがそこにもまだ不幸が殘つてゐる。

かう云ふ世界觀が到達する一定點こそ、芥川氏自身が身をもつて示した悲劇であつた。氏の「娑婆苦」は現代社會におけるあらゆる闘ひの拋棄に氏をおもむかしめるものであつた。氏の文學はこの自己否定の漸次的上昇を具體的に表現してゐるものだ。虛無的精神も階級社會の過渡期においては、ある程度の進歩的意義を持つものであるが、今の我々はさうした役割を氏の文學に尋ねることは出來ない。さう云ふ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

意味で、我々は氏の文學に捺された階級的烙印を明確に認識しなければならぬ。

なるほど我々は最後の凄まじい情熱をたゝえた氏の遺稿等に無關心になり得ない。だが、それは芥川氏の文學が、我々を內容的には退嬰的なニヒルへ誘ひ、形式的には瑰麗な肌ざはりを持つてゐると云ふことより、次の事實によるものでなくてはたらぬ。ブルジョア藝術家の多くが無爲で怠惰な一切のものへの無關心主義の泥沼に沈んでゐる時、とまれ芥川氏は自己の苦悶をギリギリに嚙みしめた。又他の遁世的な作家達に、風流的安住が無力であるのみならず、結局において自己を滅すものであることを、氏自身の必死的な羽搏きによつて警告した。又氏は多大のブルジョア的狹隘性を內包しつゝも、尙他のブルジョア・イデオローグに比して、廣汎な社會的關心を持つてゐた――凡そ、これ等の事實においてでなくてはならぬ。「後世の士は我々の誤りを咎めるよりも、むしろ我々の情熱を諒としてくれるであらう」から云ふ言葉に息苦しい鬪ひの楯を求めた芥川氏の姿は、なにか惻々として我々を打つではないか。

だが、我々はいかなる時も、芥川氏の文學を批判し切る野蠻な情熱を持たねばならない。我々は我々を逞くする爲に、氏の文學の「敗北」的行程を究明して來たのではなかつたか。

「敗北」の文學を――そしてその階級的土壤を我々は踏み越えて往かなければならない。

――了――

懸賞文藝評論
當選發表

嚢に募集した懸賞文藝評論は締切までに約三百餘篇に達した。あらゆる範圍に亘つて文藝の諸問題が論議されてゐたが、中でもプロレタリヤ文學論、形式文學論、科學的文學論等が多數を占めてゐた。數回の詮衡の後このうちより約十五篇を選び、更に嚴重な審議の結果左の如く當選を決定した。

一等當選　「敗北」の文學　　宮本顯治

二等當選　樣々なる意匠　　小林秀雄

蘇峰自叙傳（追憶記）

蘇峰 徳富猪一郎

第十七 東京に於ける半年の生活

予は明治十三年五月京都から東京に赴き、同じく十一月東京から熊本に歸つた。予が在京の時間は五ケ月に過ぎず。その中にても旅行抔を差引けば、在京の時間は正味三ケ月乃至四ケ月であつたらうか。然も此の半ケ年に滿たざる予の漂泊生活は、予の一生にとつて尠からざる經驗ともなり、教育ともなつた。これを悉く書けば、數限りもないが、今想ひ出すに從ひ、その若干を物語るであらう。

扨三條大橋にて新島公義氏に別れた吾等同行三人―即ち河邊久治、湯淺吉郎―は相伴うて大津に到り、それより船にて琵琶湖を渉り、同夜は草津驛に一宿した。それから膳所驛に五十三驛を足駄を履いて歩いて行つたが、その中に一寸記し置くべき事が一二ある。

五月の末ではあるし、暑さは暑し、渇くに任せて水を飲んだから、赤坂驛の鯉屋と云ふ所に泊つた夜、一寸したる霍亂を起し、その爲に思はず布團に小間物屋をぶちまけた。予はそれを宿家に斷るべきであつたが、何だか氣恥しくて斷わり兼ね、宿の女中が知らぬ間に吐き出したる儘、布團をくる〱疊んで、素知らぬ顏して出發した。これ丈は今でも氣にかゝつてゐるから、殊更に此に斷つて置く。

又たその時分同志社では『日曜には遠足するものではない』といふ事を教へられてゐたから、『日曜に旅行抔をするは如何であらうか』といふ議論をなし、恰度二三里位は差控へたから

といふ事に相談を決め、掛川に投宿したのは、午前十時頃であつた。これには宿屋も面喰つてゐた様だが、お客とあれば朝にせよ、晩にせよ、拒むべきではなかつたから、泊めては呉れたが、吾等も午前十時に宿屋に泊り、可成り手持ち無沙汰であつた事を覺えて居る。

當時は二十錢は先づ上等の部に屬する宿料であつたから、茶代は十錢か十五錢のものであつたらう。吾等は二三日茶代を儉約し、大磯に泊つた時に五十錢の茶代を奮發したが、その時には大なる鉢に鮨を山程出し、三人ではとても喰ひ盡せなかつた。

斯の如く三人の彌次、喜多は東京に着し、先づ下谷練塀町なる友人家永豐吉氏の下宿に赴いた。

斯くて湯淺氏はその郷里安中に歸つたが、ゆくほどもなく又た練塀町の下宿を訪れ來つたから、

『これから何處の學校に行く乎』

と訊いたら、湯淺は濟まない顏をして、

『實は安中に歸つたが、兄貴から散々叱かられた。「お前は德富君に煽まされて同志社を飛び出す抔とは、怪しからぬ話である。一刻も速に謝罪して早々復校せよ。」との事で、これから又た同志社に歸る積りである』

と云つた。河邊は初から學費を持たず、實は予が何とか世話を燒く積りであつたが、兎に角これは予の從兄藤島正健の英語の教師として、其處に落着く事となつた。

扨予は如何になすべき乎。初から目指す場所は日々新聞發行所の日報社であり、人はその社長吾曹子福地源一郎氏である。予は取敢へず唯だ貧乏らしき名刺を懐にして、日報社に赴き面會を求めた。當時の日報社は銀座第一の呉服店『ゑびす屋』の跡を引受けたる、堂々たる建築であつて、その入口には、『太政官記事印行御用』の看板を掛け、田舍者ではその敷居を踰るさへ氣遅れする程であつた。

固より薄汚き青年が面會を求めたとて、取次がるへきでもなく、留守とか、不在とか一向相手にして呉れず。然らば自宅にと考へ、不忍池ノ端なる茅町に、福地氏の邸を訪問したが、これも何時も不在で、双方の間を足駄をカラ〳〵踏み鳴し、幾度往復した乎、今は數へ切れぬ程であつた。

當時家永は島田重禮先生の双桂學舍に通學し、漢籍を學んで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐたが、彼は當時に於て、英學では最早一人立ちが出來る程の力も出來たれば、漢籍の力は予が家永に敎へ、英學の力は家永が予に敎へるといふ樣に、互に交換してゐた。予は百計盡きて、新島先生の友人であり、且つ又た予が父の知人である津田仙氏を、麻布三ノ橋なる學農社に訪うた。

　仙氏は顏に痘痕があり、擧動も如何にも眞率と云はん乎、輕易と云はん乎、演說などをして、面白き所に至れば、聽衆よりも眞つ先に當人が笑ひ出すと云ふ程の人にて、極めて邪氣の少き人の樣であつた。予が訪問した時に、氏は先づ予に向つて、

『歩いて來た乎、車で來た乎』

と問うたから、予は、

『固より歩行である』と答へた。下谷練塀町から麻布三ノ橋迄炎天の歩行は可成りこたへたけれ共、同志社足掛け五年の生活は、遠足、山登り等を、半ば課程の如く心得てゐたから、別段困りもしなかつた。それから津田氏は予が着てゐた夏羽織を指し、

『それは君の物乎』

と訊いたから、

『いや、これは友人から借受けたものである』と答へた。

　これは正直の處、家永のを借受けたのであつて、固より生れて初めて夏羽織を着けたのであるから、津田氏の眼から見れば不恰好に見えたのは當然であつた。實は餘り粗服して福地氏を訪ひ、その爲に面會も出來なかつたのであらうと考へたから、その日に限つて借着したものであつた。それから予は志を述べ、

『何とか福地氏に面會の事を取計らひ下され度し』と賴んだ。

處が津田氏は、

『それは出來ぬ事もないが、面會したとて君が新聞記者となるに、君を弟子に取るとか、君が弟子入りするとか云ふ樣の事のあるべき樣もない。されば何れにしても貴君の目的を遂ずる事は出來まい』

との事であつたから、此上賴み込むといふ事も面白からず、その儘引下つた。予はせめて福地氏の顏でも見度きものと思うたが、その時分は福地氏も東京府會議員の一人であつたから、當時は山下町なる東京府廳に赴き、府會を傍聽して初めて遠目ではあるが、福地氏を見た。併し乍ら老翁と云ふ程でもないが、

講釋師か何かの樣に見受けられ、これが爲に輕蔑を感じたと云ふ程ではないが、予の熱心を唆るわけには參らなかつた。

當時吾等の仲間の先達とも云ふべき大久保眞次郎は、東京大阪の間を往來し、貿易一新論とか、何とかを唱へ、頻りに航海運輸の必要を論じ、何やら自ら汽船會社にても起さんと目論んでゐた。尤も大久保の子分とも云ふべき醫科大學の退學生外一二名は、大阪に於て既に船乘りとなり、瀬戸内海航海の小蒸汽の船長となつてゐた程であるから、大久保は海運業などは、手に唾して出來るものと思つたのであらう。

予は初より實業などといふ事は何等興味を持たず、固より自身が左樣なる事に關係を持つと云ふ樣の事は、露程も考へてゐなかつたが、併し大久保がやると云ふ事は別に留めもしなかつた。そは留めたとて留る樣な漢でない事を知つてゐたからである。



明治十三年頃　右大久保眞次郎
中央家永豐吉　左德富猪一郎

但だ彼が此の問題で奔走する時に、予も彼と共にと云はんよりも、彼の後からくつついて種々の人を訪問した。その中でも覺えてゐるのは、沼間守一と井上侯爵である。當時沼間は民間に於て政論家としての大立物であつた。彼は維新の際には幕府方であつて、よく鬪ひ、それが爲に板垣伯の識認する所となつて、維新後土佐に聘せられたが、やがて元老院書記官となり酒田縣に於る三島通庸の暴政を檢審し、大いに直名を得た。斯くて官を辭して嚶鳴社の領袖の一人となり、柳橋萬八樓邊に於て盛んに演説をなして居た。而して横濱毎日新聞を東京に持出し、此れを東京横濱毎日新聞と改題し、彼がその社長となつて、日報社の福地氏と對抗した。予は大久保と共に彼を今川小路の家に訪ねたが、大久保が諄々として航海會社を設くるの必要を說いた時に、彼は事も無げに、『そは三菱にでも行つて相談したらばよからう』と撥ねつけ

『海』で

——ぼくらの潮は赤い色をしてゐる。

草場から
女が馬を連れて來た。
潮の濱で
僕は海に向つて歌つてゐる。
波が踊つた。
女が海に馬を入れた。
僕は海から顔を上げた。
赤い波のなかに
女の裸と白い馬の腹が見えた。

秋草園詩集抄

長江道太郎

きさらぎ

嚴島神社にて

はるあさき　朱(あけ)の廻廊
翳(かげ)りなき
さむきひざしや

しはぶけば
わがこゑ　かなし
なか庭にひびきとほりぬ

かぜ

ある日あるとき

あるかなしかに
微風(かぜ)のそよげり
微風(かぜ)ふけりと　おもひしは
うつつごころの虚(そら)なるか

眞晝あかるき薇さきや
ただ　しづかなり
ひのひかり

桃鳩圖

徽宗皇帝の古畫をみて

山蔭の春あさけれど
ほのかにも　たつよ
地の息(いき)
山鳩は　上枝(ほつえ)にありて
身じろがず
瞳　しづかにみまもるは
ながれゆく
ながれゆく虚(そら)の山氣(かぜ)なれ

四方清朗

つゆばれの晝のあかるさ
山やまのすがたの
翳(かげ)りなくみゆるあかるさ
草原の草にうちふし
おほきなるしづけさのうち
うつしみのおもひぞきゆる
ほがらかにきえてゆきけり

牧水の追憶斷片

若山喜志子

ゐまひつつ君は涯なき暗がりにかくれ給ひきまた不思議なり

　現にはおはさぬ事のたしかなれど折々現を不思議と思ふ

この歌は私の最近の述懐であるが、人はその死後直ちに文字どほり幽明處を異にしてしまふ人と、その反對に死別の意識をますます混淆させるほど明らかに生きてゐる人とある。牧水の死が私に與へる意識は正に後者であるらしい。

私には牧水と云ふ人は夫ではあつたが、また一面他人でもあつた。他人と云つては語弊があるかも知れないが夫婦といふあまりに現實的な生活が時にお互に重荷でならない場合があつた。と云へばほぼ他人と云ふ事の說明がつくであらう。

お互がお互の長所を常に認め合つて同棲してゐた。私は或場合には彼の母となり姉となり、彼はまた私のために父となり兄となり、戀人同志でもあつた。彼が私の父でもあり兄となつた時は寂しかつたであらう、また私が彼の母となり姉であつた場合は個一層救ひ難い寂しさの底をさまよつた時であつた。

そうした風の生活であつたからお互に怠屈といふ事を知らずに二十年近い家庭生活を送る事が出來たのだと思ふ。

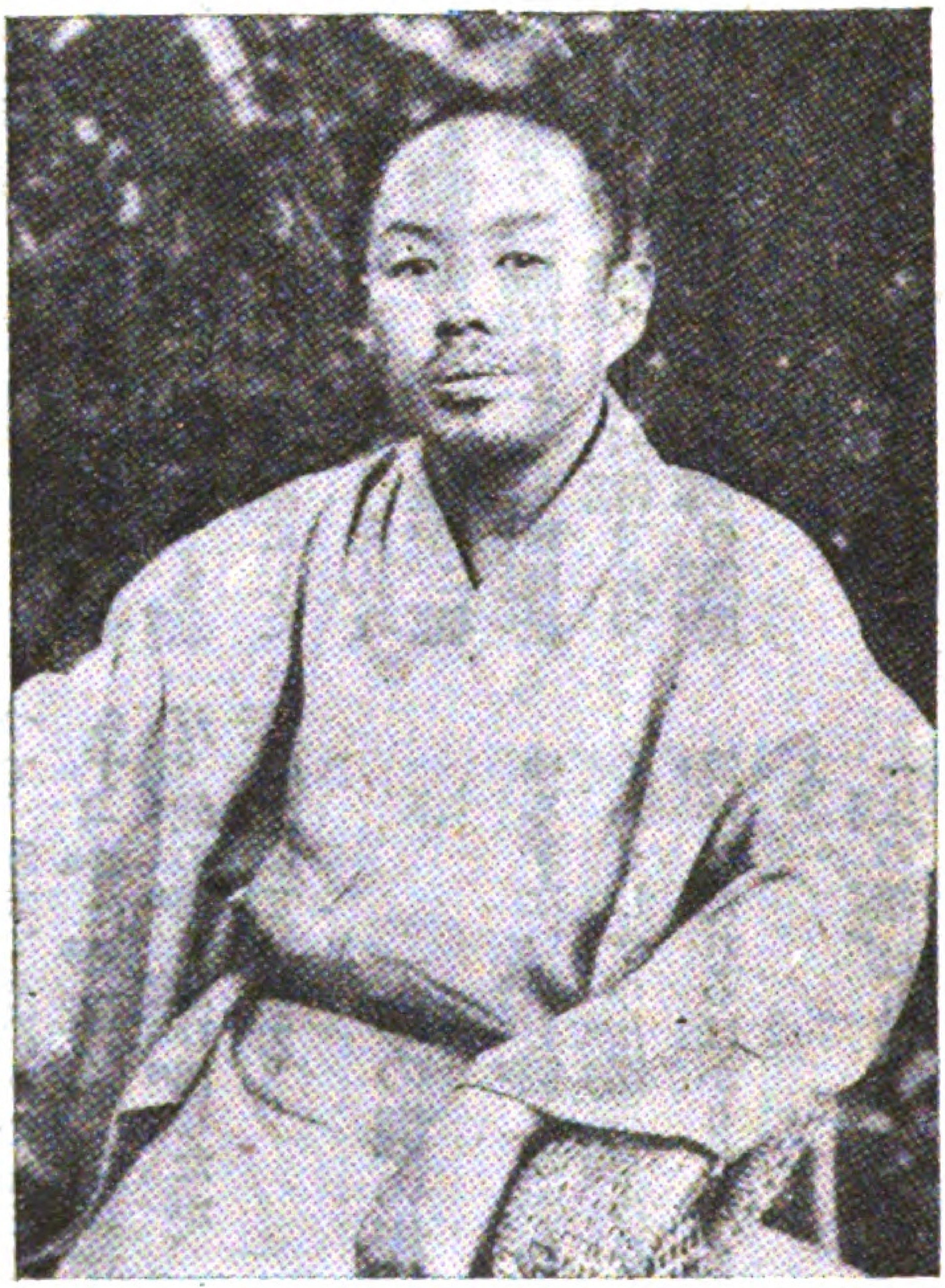
近來私の生活意識の中に、空しき追憶といふ魔物が座を占めて一種の靈務のやうに執拗に掩ひかゝり、さまぐの亂舞をして見せる。その上季節の誘惑といふ意地わるをも連れて來てさまぐの姿態をもつて挑みかゝり、つひに救ひ難い憂鬱の森に誘ひ込む。私の生活は冷たく重く、また息苦しくてさうした奇怪な物に敗けてはゐられないのだが、時として蒼白く病める女の便りなきみじめさに浸らなければゐられない現在の狀態である。

未來に光明なき者は過去の追憶に親しむ、とは古人の言であつたと思ふが、私は前途に失望してはゐないつもりだし、過去の追憶を樂んでゐるものでもない、私は夫に死別したと同時に生きる上の責任は倍加され堪へがたい苦惱をも甘受して未知の世界へ勇敢に足を踏み入れつつあるのだ、それは普通顧境に惠まれた女性の一生知らずに終るべき寂しく冷たい氷の路、また淋しい茨の路である。

いつくしみ深かかりし夫ぞ朝夕のくらしの事にも我をかばひて

牧水と云へばすぐ酒と旅泊とを聯想し、現實ばなれのした人で家庭など顧みなかつたらしく想像する人が多いやうであるが、彼は一面非常に責任觀念の強い人で時にはそれが餘りにいぢらしくさへ感じられた程であつた。で私も貧乏の味は相當嘗めたが、まだお米の一升買ひと質屋の暖簾をくぐつた事がなかつた。それだけ私たちの貧乏ぶりにはどこか暢氣な餘裕があつたらしい。

毎晩の晩酌を樂しみに机の前を立つて來る彼のために、私は一日のうちの何時間かを眞心こめて臺所に立つのであつた。あらはにそれと口に出さずとも、彼の魂の照り曇りは見てとる私であつた故に、時としては盃の色や形にまで心を碎いて來たのであつた。夏に入ればいささか味がおちると言ひながらも、鱗が淡紫にかゞやき、まだ鰓の動いてゐさうな眞鰹にをし氣もなく庖丁を入れさせてお國自慢の「たたき汁」を作らせたり、見るから淸々しい烏賊のサシミに舌皷を打つたり、さうした時の彼の面影はまざまざとして季節のまどはしか知らぬが折々茶の間の緣側近くに見える。



病沒直前の牧水氏

少しぜいたくだと思はれるほどの廣い庭には種々雜多の樹木が今は茂るがまゝに委せてあるが、之等の一本一本にも彼の執念が宿つてゐる事であらう。若葉のかをる五月、雨にぬれながらも咲き匂つてゐた柚子がいつか小指の先ほどの實をつけてゐる。昨年の九月、病床の彼のために私は――それは數日の後には恐ろしい死の宣告を受ける人とも知らず――明るい心で野菜スープを作り、それの香味に入れたいから貴郎の木の柚子が一つ欲しい、と云つた時珍しくも採る事を許してくれた、それは矢張り少し以前子供達の爲に七夕の竹を手づから伐つて與へた其時の意外な思ひと同じく、日頃庭の樹木に對してのみ吝嗇であつた彼がどうした事かと不思議な思ひをした事の一つであつたなど思ひ出しても佗しい事である。

思ふに彼程現實そのまゝを素直に享受し得た人も珍しからう、全く素手で何物にも直面し得る人であつた。憂鬱でありながら一面濶達で、ありのまゝをありのまゝに處理する事が好きであつた。

また季節の推移と云ふものに對して至つて敏感であつた事も特記すべきであらう。其點彼は何か特異な體質でもあるかとさへ思はれる程で彼の生涯の過半が旅の人であつた事でもうなづける事だと思ふ。

また季節其物を味はふ意味でもあつた彼の食物の好みと云ふ風なものも、非常にデリケートで所謂しゆんの物を噛みしめて味はふ容子は、全く口で味はふでなしに全身で食べてゐた。

食物に對してさうした感情をもつてゐただけに、他家での御馳走をばおろそかには致さなかつた。たとへば二三泊の旅先の宿などでも私が一緒にお膳に向ふ場合は、必ず箸をつけない自分の皿と、空にした私のとを取り代へておく――彼は大食が出來なかつたため――そんな事にまで心を配つた。また少し滯在でもする溫泉宿などで、板場に敬意を拂ひ得る場合だと尙更のこと、夕食の際の二品位はそつと新聞紙に包んで隱しておき、翌朝の散歩の折そつと犬に與へるのが常であつた。かうした仕種はともすると甚だ嫌味に見え易いものだが彼の態度にはさうした不自然さが微塵もなかつた。

彼は一面、淡々として水のやうな人であつた、すくなくとも私にはさうした事が云へる、それは實に物足りなくあまりにあつさりしすぎてゐた。共に十數年を暮して來てゐたのであつたが、沁々とした歌の話を爲合つたといふ記憶は一つもない、ましてや一首一首の批評とか添削とかいふことを爲て貰つたためしがなかつた。誠にとり付く島もないやうな儚ない思ひをする事がしばしばであつた。

それでゐて時々に途方もない所に歌の道の行方を暗示して吳れた。それは勿論彼自身も意識してでなしに極めて自然に現してくれたのである。彼はよく「行かんが爲めにゆくものこそまことの旅人なれ、心は氣球の如く輕く身は惡運の手より逃れ得ず……」といふ詩を好んで歌つた。ともすると石のやうに沈默し底暗い憂鬱に捉はれる時があつて、私まで身動きのならない思ひをさせられたが、そんな時私は必らず「身は惡運の手より逃れ得ず――」の詩を思ひ出して心が痛んだ。此の詩で思ひ出したが、私が先年夫に捧げるつもりで作つた詩を玆に記しておかう。

一本の槻の樹

ゆるぎない根を張りながら
くわくしやくと照る夏のひかりに
燒けただれるばかりしなえ疲れる木の葉のやうなこのごろの我良人よ。
わたしは
一本の培はれてゐる草花ならば
日傘をさしかけて居ようものを
凉しい打水もしようものを
あなたは實に、夏の日の空を掩ふてゐる唯一本の槻の木。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

蒼暗くして深林の憂鬱をおもふ——こまかなその枝葉のしげり
おのづからなる靜けさをもつて
この私には對ひたまふ。
なれど——わたしはただ
ただ立ちよつて仰ぐばかり………。
ああ、
さかんなれども
おごそかなれども
くわくしやくと照る夏の光に輝いてゐる、
淋しいただ一本の槻の樹を思はするわが良人よ。

かがやく世界を

あなたは此頃ほんとに寂しさうです、
はたの見る目もいたましいほどに。
（いいえそれは唯一人の親しい妻の私が見る目のことですよ）
何と云つてもほかは他所目です、
あなたがどんな悲しい時でも、また寂しい時でも他の人にはそれは
判らないことです。が、私だけには
いくらおかくしになつてもすぐに解ります。
あなたは眞實に寂しくて喪心する程にその寂しさに今浸つてゐます

れ、
私は何としていいのか、
あなたを慰める術が今見當りません。
お酒をもつとおいしく沸しませうか、
お金をどうかして借りて來ませうか、
私は久しぶりであなたの寂しさと鬪かふ苦惱の姿を目のまへに見ま
す。
旅行をなさいますか。
ああ、
私の、あなたの事を心配して瞑ちふさいでゐる眼にうつるものは
旅行でもない——
お金でもない——
また甘い酒でもない——
俺にはいま、
旅行よりも金よりも、
もつと欲しいものが出來たのだ………。
やはり眼をとぢたまゝ、かぶりを振つてさう仰有るあなたが映るば
かりです。

私は何としよう、
私も、

さうして可愛い子供ら、
鍾のやうにただ重苦しいのではないのかしら。
弱くてただ優しいばかりの意氣地なしの私には、
言葉や行爲では慰めて上げる術がつきはてた心持がする。

もとめても求めつくせない
この世の果にかがやく美しい世界を、
欲しい！　と仰有るならば、
私も欲しい！　その世界。

げに、あらゆる人生の苦惱、
たとへば裸身に荊の鞭をあてらるるとも忍びます、
忍んで子供たちとけげんよくついてゆきます。
私の、ただ一人の戀人、
または、ただ一人の友達である私の良人よ、安心して、
そして健やかにその苦惱にうち勝つて生きて下さい。

私は淋しかつた、しかし彼のためにエデンのイヴであつてはならないと常に深く戒めて來てゐた。
「さなり、おもては冷やかにいとつれなくも見ゆるより、深き心はあだし世の人に知られぬ寂寥よ」

北海道の僻地、北見の山中でこの詩を朗吟しつゝ嗚咽した二人の姿は誰も知らない。……
彼は毎年春、梅の咲き初める頃になると一種の取り退け難い哀愁に襲はれてゐた事を私はよく知つてゐる。それは、人の一生に二度と再び來ることのない、青春の日の或日、または或時に奏でられた神秘の音樂の追想——現身のいのちのうづく——それであることをよく知つてゐた。私は女心の鋭さで彼の肺腑の裏をまでよく視得てゐたから。
落葉の頃、再びさうした彼を見るのであつたが、その時には何となく明るさがあつた。一種の諦めとも云ふべきものが明るさの中にあつた。亡びゆく物に對して持つあの明るさでさうした時の彼に對しては妬みよりむしろ同情が私にはあつた。
昨年恰度落葉の美しかつた頃、私ははからずも彼の諦めの哀愁に浸つた淺間高原に足を止めたことがあつた。
ありし日の夫はいのちにま向ひてこの枯草を踏みしと思ふに
淺間嶺の秋の姿は知らざりき知らざりしその悔を今知る
箪笥の底深く入れてある彼の衣類は忘れて出すことはしないが、さうして目に入る山川の姿には衣類のそれよりも尚一層切實に私に迫るものが深い。
山深く分け入つた時の旅宿にはいつも、「お前は女に生れて損をした」と歌ふよ、かうした所へ來るといつもそれが思はれる」と云ふことが
[illegible]

らなかなか面白い便りを私に呉れてある。古い部によいものがあるが茲には彼の一人旅としての旅らしい最後の旅信を二ッ三つ記しておかう。

昭和二年の二月、東海道を西へ歩いて見ると云つて出かけた時のハガキ便りである。もちろん得意の草鞋の旅だ。

静岡を離るゝ頃天氣よくなる。鞠子の宿のとろゝ意外にうまし、一本が二本。宇津谷の宿場は思ひがけない深い峽間にあつた。わざわざ來たなれば一度泊つて見たしと探したれど宿屋なし。宇津谷の峠もよかつた、峠そのものも、登り下りの坂道も、道ばたに立つ老木の松と山櫻も。岡部の宿――東海道に斯うい宿場があるには驚いた。宿唯一の宿屋の名、小手平屋。その裏二階に今鎭座ましましてゐるところだ。

まだ草鞋のぬぎかけてゐる所へ宿泊帳記名の請求あり。上つて座につけば酒を飲むかと訊く、飲むと答ふ、いくら飲むかと問ふ、さてはと感じたり、取りに行くのだなと。たび〳〵こりたる事有りければ、一升と答へむとして、おんいましめをなむ思ひ浮べ、ハチゴウ――と答ふ。いくらのを飲むか、いくらのが一番いゝのだ。十五錢なら上等だらう。頓首して二十錢のに願ひ上げ、いま漸くありついてゐるところだ。

いやまだ前がある、二十錢のを八合飲むなら二八の一圓六十錢也よこし給へといふに言ふに不拘、やれ〳〵と膝をさすりぬ、さて飲みの場となる、貧乏徳利と小さき藥罐とを持ち來る、これにてチビチビ沸し飲めとなり。畏みて命の如くす。ひと藥罐つきなんとする頃女の何處かにくつついてゐさうな鍋を持ち來る。つらつら凝視するにこれ肉鍋なり。而かもその肉鍋たる徒らに青葱の山を以つて色彩し、頂上にはのかに赤きものと白きものとを點じたり。赤きは肉、白きはこれ一つまみの砂糖なり。棒持して火にかくれば忽ちぺちやんこととなる。おろしてまだ一品位ゐ來るだらうと待つ。いま來た。一皿の菜漬と飯びつなり。つらつらおもんみらく、これではどうしても先刻おろしおきたる所の鋤鍋をもう一度火にかけ、以つて飯のさいとせざるべからず。べからざれども砂糖あらず（これは最初より無かりしに似たり）醬油あらず、手を鳴らすべく氣が變なり、つらつら考ふる所の策をとつてこの鍋に酒をそそぎ、煮沸し、飯にかけかなぐりこまむにはと。

これ今日只今に到る所の報告なり。幸ひに先づ以つてとりよせおきたるところの夜具、わりにパサパサしてをり、これなら素裸になららずとも眠れます、御遷座のことまづ無しと思ふ。報告終り…。

この「御遷座のこと」は註を必要とするかも知れないが、それは讀む人の想像にまかせておく事にする。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あるがまゝをあるがまゝにし歌はむと豐けくありしを死に給ひたり

或時は墓所の土をかきのけておん白骨にすがろと思ふ

彼の死と前後して日本の歌壇といふものも異狀な混亂狀態に陷入つた。そして晩年の牧水を既にすでに過去の歌人として葬り去るべく冷酷な言を吐いた人達さへあつた。彼は筆の上の論議は不得手であつた、しかし彼の藝術的に匂ひ高い人格をあのまゝもう一息、もう一歩押し進めるべく生きてゐて欲しかつたのに……、その點で彼自身も死ぬことは如何にも殘念であつたらうと思ふと堪へられない氣がする。

以上私は斷片的に、筆の進むに委せて追憶――或ひはそれに似たもの――を書いて見た。過去十數年を共に生活して來た人の事を書き立てるのは容易に似て私には容易な業ではない。今のこの私の淺薄皮相な眼には彼の深かつた生命のすがたはただ莊嚴として不思議な存在としか見得ない點が多分にあるから……私の一生をかけても或ひは彼の眞の姿を遺憾なく述べ得ないかもしれない寂しさを强く味はつてゐる私であるから。

(四、六、三〇)

北原白秋著 ―新刊―

緣の觸角 四六版極美本 恩地孝四郎裝幀

定價貳圓五十錢(送料廿二錢)

童謠について、自由詩について、また藝術教育について、著者が多年の熱意と誠實をこめて成つた論文・提唱・解註の集大成。童謠、自由詩に關心を持つ人は勿論、詩の愛好者、若き教育家諸氏の必讀を俟つ。

室生犀星著 ―新刊―

天馬の脚

定價貳圓五十錢(送料廿二錢)

氏最近の隨筆感想論集で、天上の梯子、月光的文獻、井泉雜稿、詩について、文藝時評、映畫時評、人物と印象、澄江堂雜記、書籍と批評、宴歷雜筆、自畫像等、味讀飽くことを知らぬ名篇のみ。

改造社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「敗北」の文學（文藝評論一等當選）

――芥川龍之介氏の文學について――

宮本顯治

一

「文人」といふ古典的な文字の相應はしいとされてゐた芥川氏の住んだ世界は、永い間、私にとつて、可成縁遠いものに思へてゐた。この作家の「透徹した理智の世界」に、私は漠然、纖細な神經と人生に對する冷眼を感じるだけであつた。成程、それ等の色調は、私の步んで來た過去世――小ブルジョア的な故鄕に閃めいてゐるものであつたけれども、その神經的な苦悶すら、根本的に私を搖り動かすものでなく、遠い世界に咲いた造花に近いものに思へてゐた。私は「餘りにも人工的な、文人的な」といふ漠然とした印象より外のものを多く持つてゐなかつた。

それは、一つは、氏の文學に對する私の味到力が足らなかつたことに因ると同時に、氏が常用してゐた都會人的なチョッキが、氏の全貌を幾重にも包んでゐたためでもあつたらう。

所が、一九二七年度に著しかつたこの「文人」の切迫した羽搏きと、その結論としての自殺は、氏をみる私の態度に强い變化をひき起さずにゐなかつた。意外にも、私は、我々に近く立つてゐる氏を發見したのである。私はこの時、氏の自殺が私を感傷的にしたのではないかと一應考へてみた。そこで、私は、新しく、嚴肅に氏を見直さずには居られなかつた。……だが、感傷のためではない。氏は、一生脫くことの出來なかつた重い鎧を力一杯支へながら、不安に閉された必死の鬪ひを見せてゐるのであつた。その數種の遺稿と共に、最後に、我々に肉薄して來てゐるのである。疲勞し切つた自己の上に投げられた過渡時代の影を痛々しく語りつゝ、氏を襲つて來る必然的な結論に慟哭してゐるのである。そして、そのことは氏にとつて、一つの異常な轉身と言ふより、氏の文學的出發點において、既に內在的に規定され

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た決勝線への必然的な到着であつたことも、再批判の後には知ることが出來るのである。

こゝで、序論的に、氏の生活の型を新らしく振りかへつてみることは、不必要でないであらう。

氏の生活圏が小ブルジョアのそれを出なかつたことは明らかである。

私は今、氏に似通つた社會的範疇の人として、有島武郎氏を、聯關的に想起することが出來る。過渡期の苦悶を生活した點において、二人は、最も典型的インテリゲンチヤの型を代表してゐると云へるだらう。しかも、私は、芥川氏の中より我々に近いものを感ずるのである。該博なブルジョア的教養と態度のために、有島氏は、今日尚、全集の刊行や評傳によつて、「大陸的風貌」「階級的苦悶」等をたゝへられてゐる。けれど、有島氏の持つた苦悶は、未だ苦悶の中にも殉教者的な稚氣を帶びてゐる。故片上伸氏が批判してゐるやうに、啓蒙主義者――自得的なイゴイストにある――「理づめで自分の氣持を片づけてゐる點が氏の言ふところを淺くし、平たくし、乾いたものにし、尤ものやうでゐて、眞に心から受け入れさせる力のないものとしてゐる」のである。のみならず、智識階級の役割に關するその理論付けすら、認識のブルジョア性に起因する誤謬に立つて居ることも、今日においては明らかにされてゐることだ。痛み多い苦悶を末年にみられることリズムの萌芽にもかゝはらず、とまれ、有島氏の歩みには最後まで「愛」と「人道」についての確信らしいものが包つてゐた。遺書にある「私達は自由に歡喜して死を迎へる」といふ言葉は偶然に書かれたものではない。

しかし、芥川氏の場合、我々の受け取るものは、より切迫した陰欝な空氣である。後に於て評論するけれども、そこにあるのは、困憊した神經の觸手を通して、次第に意識されて行く「人生に對する敗北」の痛みである。愴然、氏は自分の辿つてゐる路が「敗惨」に通じてゐることを自覺せずには居られなかつたのである。

やがて、「實踐的自己否定」に到達せずには居られない後悔に滿ちた自己批判が、末期の氏の中に湧薄してゐる。その批判の中にもインテリゲンチヤに課せられた重荷である懷疑や、自尊心から脱することが出來なく、それを決裂に至るまで神經の先に凍らしてゐる。氏こそ、ブルジョア文藝史に類稀な内面的苦悶の紅血を滲ませた悲劇的な高峯であると言へるだらう。それこそ、市民的社會の開化期から凋落期に及び文化的環境に育まれた記念碑的な存在の一つであらう。こうした芥川氏の文學を批判の對象とすることは、單に私の個人的なインテレストのみでなく客觀的にも無意義でないことを信じてゐる。

二

「プロレタリアートの眼からは、本質的に相敵對する所のイデオローグと、文學者の世界を正しい光を以て照らすこそ、緊要事である」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

——フリイチェのこの言葉が、今私の前にある。

日本のプロレタリア文學が、やうやく「内容の革命」から「形式の革命」にまで自己をたかめて來た。それは新しい困難な建設のために、可能な限りの文學的遺産を整理する必要のある段階に達してゐる。ブルジョア文學は、未だ決定的には崩壞し去つてはゐない。政治的、經濟的の諸條件と共に、文壇は未だ支配的イデオロギーとしてのブルジョア的思惟と感覺の末期的繁榮を物語つてゐる。この歷史的な轉向期にあたつて、「さまよへる」過渡期のインテリゲンチャが、凡そ如何なる文學に自己の表現を見出すかと云ふことは容易に考へ得ることである。傷き易い神經を持つた彼等は、芥川氏の住んだ「孤獨地獄」に「求められぬ平和」を求めて、自己の呻きを聞いてゐるのではあるまいか。芥川氏に對する關心は、必ずしも、小ブルジョアジイの層にのみあるものではないであらう。プロレタリアートは時代の先端を壯烈な情熱をもつて進んでゐる。しかも、我々の前には、過渡時代の影が尚巨體を横へてゐる。長い過去を通じて我々に情緒上の感化を與へて來た「昨日」の文學も。

「わがコムソモールの机の上には共產主義者のABCの下にエセーニンの小さい詩の本が横つてゐる」暗示するところのものを多く持つてゐるこのブハーリンの言葉は、單にソヴエート・ロシアにおいてのみ考へられることであらうか。プロレタリアートの戰列に伍して、プロレタリアートの路を歩まうとしてゐるインテリゲンチャの書棚に、黨の新聞と共に、芥川氏の「侏儒の言葉」が置かれてゐないと誰が斷言し得よう。曾つて、私は、自己の持場で鬪つてゐるインテリゲンチャ出の一人の鬪士が、一夜腹立たしさうに語つたことをおぼえてゐる。

「駄目だ！　芥川の『遺書』が、——『西方の人』が、妙に今晩は、美しく、懷しく感じられるのだ」

彼のみではない。青野季吉氏も「芥川氏の生涯とその死とは、私の心をとらへて離さないものがある……私達は芥川氏を批判することは出來る。だが、芥川氏を捨てゝ顧みないことは出來ない。自分の中にも芥川氏があり、芥川氏の死があるからである」と云つてゐる。そして又、林房雄氏が芥川氏の死によつて、虛無的な氣持を掻き立てられ、中野重治氏が芥川氏を「大層可哀さう」に思ふのは、氏の中に感じる我々自身の殘骸のためであらう。瞬間的な弱い殘像にしろ、それが氏を近くに運んで來るのである。それ等がインテリゲンチャの肩におかれた致し方のない十字架であるにしろ、我々は芥川氏との間に、おかれた距離を明かにしなければならない。この作家の中をかけめぐつた末期の嵐の中に、自分の古傷の呻きを聞く故に、それ故にこそ一層、氏を再批判する必要があるだらう。いつの間にか、日本のパルナッスの山頂で、世紀末的な偶像に化しつゝある氏の文學に向つて、ツルパシを打ちおろさなければならない。

三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一九一五年――芥川龍之介氏の文學的生涯の初まつた時、氏の文學的傾向は、理智派、新技巧派等の名を以て呼ばれてゐた。「芥川君の作品の基調をなすものは、澄み切つた理智と洗練されたユーモアである。そして作者はいつも生活の外側に立つて、靜かに渦卷きを眺めてゐる」と當時の文藝批評家、江口渙氏は「芥川論」において述べてゐる。思ふに「理智的」「諧謔的」と云ふ評語は、十年に及ぶ氏の作家生活を通じて絶える事なく冠せられた非難であり、又讃辭であつた。だが、これを以て氏の本質を示し得たとなすならば、それは批評的不具であらう。理智的であり、諧謔的であることも、確かに氏の半面をなしてゐる。だが、氏の全貌を語る上に、それは、一つのモメントを提供するに過ぎない。いや、或場合には、それは、氏の用ひた都會人的な假面でさへあつたのである。我々はさうした「定冠詞」に對する芥川氏自身の抗議をすら見出す。

人物記「佐藤春夫氏」で芥川氏は「僕のテンペラメントは嚴肅である。全精神を振ひ起さなければ滅多に常談も云ふことは出來ない」と云つて、「喜劇ならば君にはすぐ書けるだらう」との佐藤氏の言葉を誤解だとしてゐる。又「侏儒の言葉」の中で次のやうに云つてゐる。「偉大なる厭世主義者は必ずしも澁面ばかり作つてはゐない。不治の病を負つたレオパルディさへ、時には蒼ざめた薔薇の花に寂しい頬笑みを浮べてゐる……」ユーモラスな趣きを持つた「鼻」「芋粥」「往生繪卷」等の作品を讀んだのち、作者の微笑の底に憂鬱な澁面を我々はさぐりあてるであらう。「阿彌陀佛よや、おおい、おおい」五位の入道は、どのやうな破戒の罪人でも「阿彌陀佛に知遇し奉れば」淨土へ行かれると聞いて、かう呼ばはりながら、西の方を目指して進んで行く。そして道行く人から氣違ひ扱ひにされながら、遂に、餓ゑ死んで了ふ。だが、屍骸の口からは、いつかまつ白な蓮華が咲いてゐた。この「往生繪卷」はユーモラスな形式の下に、笑ひ切れない求道者の姿を書いてゐる。正宗白鳥氏は、この作品の結末のまつ白な蓮華の咲く非現實的な描寫を捉へて、芥川氏がリアルに徹することの出來なかつた人だといふことの例證としてゐる。勿論、我々は別の意味で氏が現實を深く認識しなかつたことを批判する。けれど、かうした偏狹な自然主義的批判は、永久に、作品の本質を理解し得るものではない。作者は「五位の入道」を愛してゐる。誘惑を越えて、まじめに愛してゐるのだ。蓮華の花を咲かす事は、氏の「あそび」ではない。枯木の梢に死んだ求道者に、心から詩的な頌辭を最後に手向けてゐるのである。

ユーモラスな一面は多くの場合、氏の嚴肅な精神の悲しい戯れであつたのであらう。さうしたヴエールをかゝげ見る時、我々は、氏がその文學的出發點において、既に、「いたましき人」であり、理智と情熱の相剋に苛まれた人であることを知るのである。「頭には喜劇、心臟には悲劇」を持つたチエスタートンの賢人は或は氏自身ではなかつたのか。

君看雙眼色

氏の双眼のいろは、既に、晴々しいものに遙に遠いものであつたのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

不語似無愁

處女作「羅生門」の扉に寫されたこの文字は鬱悶を切齒して身構へた氏の、微かに洩した憂愁の辭であらう。

「人生は二十九歲の彼には、もう少しも明るくはなかつた……」これは末期の氏が描いた初期の自畫像である。

かく、氏の文學的生涯の初めに、旣に、氏の人生は薄暗く煙つてゐた。氏は人工的に微笑もし、反語をも投げたけれども、それは本質的に氏を救ふものではなかつた。氏を捉へたこの不幸な手は、一體何物であらうか。二つの「大導寺信輔の半生」は可成り、瞭然と、氏の辿つた半生を盡してこの疑問に答へてゐる。「或阿呆の一生」と並んで珍らしく告白的な情熱にとんだこの作品には、「ある精神的風景畫」と云ふ傍題がそへられてある。單に自傳的な要素を多く含んでゐるのみでなく、これ等の作品は凛々とした氣魄をたゝんでゐる點において、私の好むものである。この作品も無論、幾分かの「詩」を現實の中に溶かしてゐるだらう。と同時に「侏儒の言葉」の逆說的表現をかりるならば、謊を通してでなければ語られない眞實もあるであらう。

彼はごみごみした往來に駄菓子を食つて育つた少年であつた。彼の家庭は貧しかつた。彼等の貧困は體裁を繕ふためにより苦痛を受けねばならぬ中流下層階級の貧困だつた。彼はこの貧困を憎んだ。同時に吝嗇を憎まずにはゐられなかつた。彼は何よりも先に、退職官吏の息子だつた。下層階級の貧困よりも虛僞に甘んじなければならぬ中流下層階級の人間だつた。

學校も彼には薄暗い記憶のみ殘すものだつた。まことに學校は彼にとつて貧困を脫出する求命袋に過ぎなかつた。

彼は本を愛した。智的貪欲を知らない青年は、彼には路傍の人であつた。實際、彼の友情はいつも幾分かの愛の中に憎惡を孕んだ情熱だつた。けれど友情の標準は智的才能のみではなかつた。上層階級に育つた青年と握手する時、いつも針のやうに彼を刺す階級的差別を感じてゐた。

學生時代の彼は「ファウストの中の學生」のやうに何でも精神的にえらいものにならうとした。しかし、彼の發見したのは畢竟彼の大望の全部は夢に了るより外はないことだつた。かう云ふ道程を經たのち、彼は自身の如何に無力かを發見した。この空虛を感ずることは彼には恐ろしかつた。彼はある春の晩、息もつまるほどの空虛を感じて自殺を考へた。かうした間にも貧困と不健康は彼を襲つてゐた。彼は時々目に見るやうに彼に英語や數學を教へた教師達の一生を髣髴した。彼等の一生は見渡す限り佗しい廢務や、病苦の影に沈んでゐた。彼の一生もことによれば、彼等の一生よりも見すぼらしいものかも知れない。だが、彼はどう云ふ目にあつても兎に角、生きて行かねばならない。何の爲に？　何の爲に？　この疑問はいつか信輔に厭世主義を敎へてゐた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

芥川氏の辿つた半生の陰影の多い道程は、斷片的にではあるが、以上の引用的說明の中に窺ふことが出來るであらう。

かうして、俊英な理智と、脆く、强靱な自我を持つた一人のインテリゲントは、成長するにつれて、次第に後の日の悲劇を孕みつつ、小ブルジョアジイの烙印を彼の世界觀に燒きつけた。氏は「總てのものを本から學んだ」と書いてゐる。しかも、皮肉にも「彼は厭世主義の哲學を一頁も讀まぬ前に既に厭世主義者だつた」のだ。

その頃、氏が友人恒藤氏に宛てた手紙の中に次の一節がある。

「僕はイゴイズムを離れた愛のあることを疑ふ（僕自身にも）。僕は時々、やり切れないと思ふことがある。何故こんなにして迄も生存をつづける必要があるのだらうと思ふことがある。そして最後に神に對する復讐は、自己の生存を失ふことだと思ふことがある。僕はどうすればいゝのか分らない……」

この表現の中においても、我々は小ブルジョアジイの諸屬性の中で、「自我に關するの思索」こそが、基本的な一線であることを知るのである。芥川龍之介氏の文學的生長に關して、漱石、鷗外の影響を特筆することは、常識的な眞理とされてゐる。しかし、それが主として創作上の手法にあつたことを忘れてはならない。複雜なこの藝術的インテリゲントの人生觀に、根本的な色彩を塗つたものは、云ふまでもなく、第一に「中流下層階級の陰影」であつた。「大導寺信輔の半生」は、一面、この小ブルジョア的自我の發展史であつた。

「彼」は此の社會において、何等、傳統的な生活手段を持つてゐない。從つて、生存を保證されず、絕えざる生活的窮乏の日陰（ひかげ）を自分の周圍に見出さなければならない。「彼」は、どうしても自分一個の頭腦に賴らなくてはならない。かうして、「彼」の唯一の縋り得る生活手段は、智的才能だけである。智識に對する彼の貪慾とも云ひ得る强烈な慾望は、「彼」の個人的特性であると同時に、こゝにその社會的母胎を持つてゐる。智識は第一に「彼」の生活上の武器であつた。精神的格鬪は何よりも殺戮の歡喜のために行はれたものに違ひなかつた」ウォロフスキイーの評論した「バザロフ」におけると同じく「彼」の場合にも智識は、個人的に最高の享樂を附與したのだ。後に「彼」の夢みたやうに何册かの本の著者となり、博學、俊髦の名を與へられた。だが、「彼」の「豐富な智識」が著しく小ブルジョア的狹隘性を含んで居たことを銳く指摘しなければいけない。

かうして「彼」の、行爲、思索は常に自我を中心として廻轉してゐる。「彼」の問題にするのは、本質的には自己である。「彼」はそれに沒頭し、現實はともすれば自我のみであるやうに思つて來る。最後に、そして、「彼」は自我を愛する。しかも、外界は激しい刺戟と動搖を「彼」に浴せかける機會にみちてゐる。「彼」は自己を防衞しつゝも、ともすれば、興奮感や、倦怠感に苛（さいな）まれるのである。「彼」は「哲學」に失敗した後、藝術の內に入つて行つた。だが、一匹の犬も滿足に書けなか

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つた。自己の頼り得る唯一のものが無力であり、傷き易いものであることを發見した時、「彼」の世界はもう明るいものではなかつた。けれど、「彼」は未だ絶望はしなかつた。「彼」は自分で躓つた時にも、容易に弱音を吐かなつかた。矜持は悪德であると同時に、當時の彼を鞭つ生活のスプリングであつた。

文壇の聲望を負うて處女作集を出した日の芥川龍之介氏に、何故に、又、如何なる精神的陰影がかげつてゐたかを、私は大膽しらべて來た。若し、彼が何物かに安んじてゐたとするならば、それは落寞とした孤獨であつたであらう。

四

「人生は一行のボオドレエルにも若かない」

二十歳の芥川氏は、かう云つて書店の二階からみすぼらしい人生を眺めてゐた。この言葉程、氏の人生に對する輕侮と藝術に對する信仰を表現してゐるものはない。薄暗く黄昏れた人生の中に、藝術の灯だけが僅かに、一切の懷疑的精神の外にあつて、氏を照らしてゐた。「凡てのものは信仰とならずんば數目なり。獨り、宗教、藝術に於てのみならず」――(書簡集)――ともすれば、空虚を感じ易い自己の生活に、芥川氏は執拗にかけ聲を投げた。だが、白日の下に曝された現實社會は、いつも、不調和の絶望に誘けれ勝ちだつた。こうした中に、氏は藝術を一本の杖として、愛したことは當然のことであらう。藝術は秀麗な孤峯のやうに、彼を力づけ、彼を動かした。まことに「藝道に精進せむとする彼の氣魄は、りんりんと鳴りを立てるかの如く思はれた」と云ふ恒藤氏の言は、芥川氏の藝術に對する態度をよく傳へてゐると云へるだらう。

藝術家の生活に材を採つた芥川氏の作品は、鬱屈とした熱情のために力強い表現を受けてゐる。「戯作三昧」「地獄變」「沼地」――これらの作品の主人公達を、共通に貫いてゐる事實は、現世的に彼等が決して幸福ではないことだ。「戯作三昧」の境地に落ちついてゐるやうに見える馬琴すら、安住の人ではない。彼を理解しない俗衆に對する侮蔑、藝術と道德との二元的相剋、愚昧な檢閲官に對する痛罵、我々は馬琴の中に作者の姿を汲みとることが出來る。だが、「戯作三昧」の氏には未だ深い絶望はなかつた。人生は醜劣と倦怠にみちてゐるにしろ、時に、「あらゆる殘滓を洗つて、新しい鑛脈のやうに輝く時があつた」から。民衆に對する孤高な態度は苦惱といふよりも、寧ろ矜持をもつた張りを與へるものだつた。「沼地」は短い作であるけれど、狂人になつた藝術家の不幸な一生に對して、作者は痛々しい敬虔な面持で立つてゐる。「地獄變」は藝術家の狂氣に近い魂が切實に描かれてゐる作として、最も壯烈な色彩にとんでゐる。藝術への精進の前には、いかなる野蠻な精進をも投げ出すことを厭はない藝術家の勝利――不幸な勝利がある。だが、繪師良秀はいつ迄も、野蠻な藝術的法悅に恍惚となつ

てゐることが出來なかつた。このことは重要な暗示を持つてゐる。道徳的な芥川氏の一面は、やつぱり、良秀に經れ死の結末を與へずには居られなかつたのだ。その前には、一切を蹂躙して悔いない藝術的氣魄を示しながら、氏のヒューマンな半面は、その蹂躙を妨げるのだつた。藝術は氏にとつては最上の城砦ではあつても、氏の全部とは成り得なかつたことを、いみじくもこゝに知らされるのである。氏は藝術上の至上主義者とは成り得なかつた。畢竟、氏は、藝術的な——甚しく藝術的な氣質に住んでゐながら、それに安住することが出來なかつた。

「僕達の書いてゐる小説も何時か、此の野呂松人形のやうになりはしないか。僕達は時代と場所との制限をうけない美があると信じたがつてゐる。……しかし、果してさうありたいばかりでなく、さうあることであらうか」「野呂松人形」の中のこの言葉と次の氏の言葉とを比較してみよう。

「僕は詩の前には未だ曾つて懐疑主義者たる能はざりしことを自白す。同時に又詩の前に常に懐疑主義者たらんとつとめしことを自白す」——（追補、小說作法十則）——

兩者は明らかに食ひ違つてゐる。それは同一の確信に立つたものではない。が、恐らくこれが氏の眞實の心であつたのであらう。むしろ、この二つの言葉は、氏が藝術至上主義者たらんとしつゝも、藝術至上主義者たり得なかつた矛盾を現はしてゐる。「野呂松人形」の中に於ては、この相剋的要素はまだ不滯な懐疑に止つてゐたが、晩年に及ぶにつれて、次第にそれは激しいものとなつて行つた。社會學的な文學概論の闡明を待つ迄もなく、聰明な氏は、凡庸な作家達に隙を合はして、恬然と「玉は砕けず」と云ふことは出來なかつた。と云つて、氏の中に深く根をおろした藝術家的な魂は、それに苦痛と不安を感じて、ひそかに、「だが、玉は再び生れてくる」と安心せずには居られなかつた。藝術と社會についての二元的な動揺を、統一的な均整におかうとした努力を——捨鉢的な努力を、我々は晩年のエッセイの處々に發見することが出來る。

「文藝の作品はいつかは滅びるに違ひない。ボオドレエルの詩の響きも自ら明日は異るであらう。しかし、一行の詩の生命は僕等の生命よりも永いのである」——（文藝的な餘りに文藝的な）——

「シエクスピイアも、ゲエテも、李太白も、近松門左衞門も亡びるであらう。しかし、藝術は民衆の中に必ず種子を殘してゐる」——（侏儒の言葉）——

我々はこゝに二十歳の芥川氏にみられなかつた「藝術」に對する動搖をみるではないか。「いつかは滅びるであらう」いつか、廣汎な社會的現實は、氏の藝術觀に、嚴正な鐵槌を與へずにはおかなかつた。しかも、芥川氏は、「冥莫たる百代の後」、氏の作品を愛する誰かに美しい夢を見させることを信じやうとしてゐる。氏の輕蔑してゐた民衆こそ、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

偉大なる創造力をもつて、ゲエテを——そして、氏をも乘り越して突進するものであることを認めた時、芥川氏は、小ブルジョアジイのイデオローグに過ぎない氏の文學も、いつかは沒落しなければならないといふ告知を、新興する階級の中に聽いたであらう。

「藝術は民衆の中に發つてゐる」。さうだ。

民衆が新しい明日の藝術を創造する。これは、事實上氏自身が自らに向けた否定の刃ではないか。あらゆる天才も時代を越えることは出來ないとは、氏の度々繰り返したヒステリツクな讚歌であつた。こうした絶望そのものが、「自我」を社會に對立さす小ブルジョア的な魂の苦悶でなければならない。

五

資本主義社會の凡俗性と醜惡な雰圍氣は、藝術家芥川氏に嫌惡と退窟を呼び起すものだつた。「僕は醜いものを愛する。僕はあまりのまゝ弱くなりたい、大きくなりたい」——(書簡集)——こう云ひつゝも、氏は安住し易い東洋的な詠嘆に休息をした。現實に求めることの出來ないロマンチシズムの焔を、氏は歴史的な素材や、エキゾチツクな世界、神秘的な奇蹟に求めた。これが芥川氏の一面に過ぎないことを、我々は注意しなければならない。これを擴大することによつて、いかに芥川氏が「游茫の文人」として誤り解されてゐることか。

「六の宮の姫君」は「運命」と名づけられたもの〻中にある蒼ざめた古典詩である。鷗外の歴史ものにみられるやうな巧緻な形式的完成を透して、それはいかにも美しい。鹿鳴館の「舞踏會」の中でも、作者はピエル・ロテイと共に、「我々の生のやうな花火」をみつめてゐる。「南京の基督」も、氏のロマンチシズムに濡れてゐる。私窩子の抱いてゐるタリストの夢に——儚ない夢に、氏は憐憫と愛撫をそゝいでゐる。

が、私は「奉教人の死」の情熱を愛する。「なべて人の世の尊さは、何ものにも換へがたい刹那の感動に極まるものぢや」こゝには、氏の前期の作品に多いシニシズムの鎖がない。たとひ、南蠻的な情調に彩られてゐても、殉教の火を芥川氏は愛してゐる。その他、「妖婆」「妙な話」等は現實に背を向けようとする氏のミステリアスな物語である。

現實は、だが、いつまでも氏にかうした情緒的な安住を許さない。そして又、人生觀上のリアリズムは絶えず嚴しく氏の神秘的な一面と衝突せずにはゐない。同じく古典的な素材の中にも芥川氏は容赦なく人間の生の姿を描き出さうとする。封建的な權威から、人間的な惡と愚を摘出して、それに冷笑を浴びせてゐる。「袈裟と盛遠」「或日の大石内藏之助」「將軍」「俊寛」「報恩記」「枯野抄」——これらの中に我々は、芥川氏によつて近代的に、正當に云ふならば小ブルジョアの心理的形態に翻譯された一系列を見るのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「袈裟と盛遠」は坊間に傳へられてゐる「烈婦袈裟」を戀の恨みに生死する一介の人妻に描きなほしてゐる。氏の作品の中では、大石內藏之助も忠臣らしくなく、夕霧や浮橋の艶かしい姿を思ひ出したり、どこから來るともない憂鬱に佇んだりしてゐる。

「枯野抄」も亦單に渺茫の趣きを覘つてゐる作ではない。この作品に充分な渺茫や枯寂が現はされてゐないと云ふ室生犀星氏は、結局氏自身の好みを語つてゐるに過ぎないであらう。一般的に云つて、氏の作品にいつもさうしたものを發見したがるのは、芥川氏を餘りに東洋的な文人としようとする鑑賞家的惡癖である。「悲嘆かぎりなき」門弟たちは、必ずしも嘆きの中の悅び——芭蕉の人格的壓力の桎梏からの解放の悅びを持たぬわけではなかつた。彼等は「枯野に窮死した先達を嘆かずに、薄暮に先達を失つた自分達自身を嘆いてゐる」我々はこゝに、近代的個性の痛々しい自己省察を見せられるのである。

「將軍」は? この將軍は、慘めにも手痛く嘲笑され諷刺されてゐる。この「長者らしい」將軍の軍服を剝ぎ取りながら、作者は無智で殘忍で打算的な將軍の裸體に冷笑的な嫌惡を示してゐる。軍神の封建的な非人間性に鎭壓してゐる。それはいかにも巧みな抉出的な手法に終始してゐる。そして私は、作者のこの手際に喝采を與へようとしたが、やつぱり次の瞬間、それを思ひ止まらねばならなかつた。何故か。私はこの作品の全體的な構圖に根本的な缺陷を發見させられたからだ。將軍と對蹠的に描かれた寂參謀に、スタンダールの箴言やユーゴーの歌を想起さしてゐる內に、作者は彼も亦軍人であることを忘れてゐる。そしてそれはモティーフに小ブルジョア的な限界性を持つてゐるからだ、我々は氏の嘲笑が封建的なものに向けられてゐる場合にすら、ブルジョア的な節度を脫することが出來ないのである。氏は結局爆彈を手にした實踐的な嘲笑者とは遙に遠いものであつた。

これら——「袈裟と盛遠」から「將軍」に至る諸作品を通じて、私は芥川氏の認識の對象が人間におかれた場合、生理學的な自我を中心として把握されてゐることを知るのである。これは自然主義に基調を持つ心理曝露の型である。芥川氏はさうした歷史的人物畫を描きながら、多くの場合つとめて作者の愛情と憎惡を靜觀的な理智の中に包んでゐる。憂鬱な工人のやうに憐憫し、アイロニイを織りまぜて、「致し方のない人間性の眞實」を寒々と彫りつづけてゐるのである。

人間性に對するアイロニイ、冷笑的剔抉の一面と共に芥川氏は「人間らしさ」に對する愛情を不用意に洩してゐる。「僕はどんな良心も持つてゐない。……僕にあるのは神經だけだ」——(侏儒の言葉)——「我々の愛するものはこの豪勇の持ち主である。常に善惡の觀念を足下に蹂躪する豪傑の士である」「我々はかう云ふ旺盛なる『我』に我々の生命を暖める焰を感ずる。或は我々の到達せんとする超人の面輪を感ずる」。——(岩見重太郎)——

芥川龍之介氏も亦あらゆる脆弱な小ブルジョア的インテリゲントの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

やうに「善惡の彼岸」に立つことを愛してゐた。「矛盾せる二つのものが自分にとりて、同じ誘惑力を有する也。善を愛せばこそ惡も愛し得るやうな氣がする」「自分は醜いものを祝福する」――(警句集)――善惡と同一的範疇にみようとする心理的根據を我々は、現在社會に對する小ブルジョアの絶望的な不調和の中に見る。果して超人たることは、小ブルジョアジイにとつて可能であらうか。又、我々はプレハーノフと共に次のやうに答へるだらう。

「善惡の彼岸に立つとは何を意味するのであらうか。これは一定の社會秩序の地盤の上に發生した善惡に關する一定の觀念の領域において判斷することが出來ないやうな偉大なる歷史的事業を遂行することを意味するのである」

かくて、氏の善惡を越えようとする努力が如何に不可抗的な矛盾に立つてゐたものであるかゞ理解出來るであらう。氏は藝術の前には、冷然と、道德をも蹂み躙らうとした。人間として失敗すると共に、藝術家として成功した泥棒詩人フランソア・ヴィヨンを、氏はいかに讃しんでゐたことか。けれど氏の教養と稟性は、容易には氏の超道德的な勇氣を與へなかつた。多くの人々の氏に關する追憶は、氏が一面古風な人情家であつたことを、ことごとく傳へてゐる。

「蜜柑」「おぎん」「偸盗」等の作品において、私は作者が不可解な下等な退屈な人生を忘れて朗らかに涙ぐんでゐるのを見る。「猿」の中で「猿は飜譯は許されても人間は許されませんから……」といふ反語の奥に、ヒューマンな作者をみよ。「杜子春」「蜘蛛の糸」「白」等の童話は、いかに氏が一時代の一階級の道德律を越えることの出來なかつたモラリストであつたかの證左となるであらう。

六

これまでに明かにして來た芥川氏の多元的な傾向は、どう云ふ相關關係をもつて、後期の氏の文學を形成して行つたであらうか。

「僕は」と云ふ小品の中で氏は次のやうに書いてゐる。「僕はいつも僕一人ではない。息子、亭主、牡、人生觀上の現實主義者、氣質上のロマン主義者、哲學上の懷疑主義者等々……その何人かの僕自身が、喧嘩をするには苦しんでゐる」又、別のところで、氏はこれに政治上の共產主義者といふ一因子を加へてゐる。更に「澄江堂雜記」の中で「一かどの英靈をもつた人の中には二人の自己が住むことがある。一つは當に活動的な情熱のある自己であり、他の一つは冷酷な觀察的な自己である」と云ひ、氏自身も冷酷的な自己を感じてゐるが、どうすることも出來ぬと嘆いてゐる。

前期の芥川氏はかうした自分の姿に積極的な肯定を與へようとした。同じ「澄江堂雜記」の中で、氏は「我等が內にある一切のものはいやが上にも伸ばさねばならぬ。それが我等に與へられた唯一成佛の路である」とした。そしてこの言葉を精進の信條として、藝術の道を切り拓いて進んだ。それは可なり苦しい努力ではあつたらうか、かうした內

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

闘爭もまだ致命的な痛手ではなかつた。氏は多才なスペクタルを交錯させながら、憂鬱な微笑の中に煙草を吹かしてゐた。薄曇つた人生の風景に顔を曇らせながら、何氣ない諧謔を弄することを忘れなかつた。反撥的諸因子は氏の深い節度と矜持の中で爆發を制せられてゐた。そして氏はさうした矛盾そのものを愛してゐることすらあつた。

かうした氏が、取り上げて生活の楯としたのは「理智的なもの」であつた。氏は兎もすれば破れ易い均衡の支點を「理智」においた。「或阿呆の一生」の一節「人工の翼」にあるやうに「彼」は情熱に驅られ易い一面を恐れて、冷やゝかな理智にとんだ一面に近いヴォルテールに近づいて行つた。そこで「彼」はヴォルテールから「人工の翼」を借りた。「彼はその人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歡びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すぼらしい町町の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまつ直に太陽へ登つて行つた。丁度かう云ふ人工の翼を太陽の光に焼かれた爲にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……」

けれど我々は、齒と齒を血に滲ませてゐる自身の中の兩棲類をいつまでも同居させておくことは出來ない。矛盾はより高次的な統一によつて救はれない限り、いつ迄も解決される得るものではない。氣質上のロマチストは人生觀上のリアリストと嚙み合つた。哲學上のスケプチストは、むろん、政治上のコムニストと狂つた齒車のやうに永遠に反逆し合つた。それのみではない。この夫々を單位とした組合せ(コンビネーション)は理智の支柱によつて人工的に保たれてゐた氏の姿勢に、不安と苦痛を與へずにはおかなかつた。

氏の矛盾の進化をより客觀的に考察する爲に、我々は更に社會的條件をも考へてみる必要があるであらう。一九二五年——氏の文學的生涯の終り頃——は日本プロレタリアートの全線的展開の時代である。「資本と勞働の生み出す一般的混沌」は寄生的な小ブルジョアジイの中に強い動搖を與へる。それ自身の階級的地盤を持たないインテリゲンチャの自己解體が、斷然史的な現象として著しくなつて來る。

これらの現實から芥川氏が具體的に何を反映したか、我々は云ふを要しない。我々は必要以上に現象の社會的原因を追窮することの徒勞であると同時に、滑稽であることを知つてゐるから。だが、かうした荒々しい現實の中で、氏が所謂「人工の翼」で飛揚することのいかに困難であるかを、痛切に感じたであらうことは考へてもいゝであらう。冷靜な理智に住家を求めて來たことの後悔が、氏の中で激しくなつて行つた。曾つての冷笑的な風流的な生活態度に對する自己批判がかくして起つて來た。

「理性の私に教へたものは畢竟理性の無力であつた」こゝに先づ芥川氏の一切の理智的外観を脱ぎ捨てゝ、立ち直らうとする決意を我々は聞く。「若し理性に終始するとすれば、我々は當然我々自身の存在を否

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

定しなければならぬ」――(河童)――かくて一切の小さい都會人的な修飾を捨てゝ語らうとした「信輔の半生」が珍しく積極的な告白を展開してゐるのは、理性的な一面に對する氏自身の反逆に外ならぬ。これは氏にとつて重用な變化でなければならない。「僕は物見高い諸君に僕の暮らしの奥底をお目にかけるのは不快である。ストリンドベリイも金さへあれば「痴人の告白」は出さなかつたのである。「誰が恥ぢ入りたいことを小說などに作るものか」この傲岸な前期の氏に想起する時、我々は氏の新しい情熱的な氣配に眼をそそがずには居られない。氏は堪えがたい迄に分裂し疲勞した自己を勇敢に整理しようと思つた。氏はその爲にも野蠻な情熱を求めずには居られなかつたのだ。いはんや、理性は氏に餘りにも無力な結論を與へたではないか。

「今昔物語について」「續芭蕉雜記」等はこの野蠻さを求めやうとした氏の所產に外ならない。氏は云つてゐる。「僕はやつと今昔物語の本來の面目を發見した。それは brutality（野性）の美しさである。或は優美とかに最も遠い美しさである」芥川氏は夢を遠い昔に求めた曾つての自己を嘲笑してゐる。

あの芭蕉ですら、氏の眼にはもう到底、世捨人芭蕉ではなかつた。奥の細道に立つた芭蕉の姿は、破れかぶれの勇にとんだ、「したたか者」だつた。新しく見直された芭蕉は、不退轉の一本道を歩んだ、感傷的なものから遠い、「日本の生んだ三百年昔の大山師」だつた。この俳人の不敵な面魂こそ、芥川氏が決死によぢ登らうとした城壁であつた。そして私は知る。この時の芥川氏も亦「當代に滅多に理解されなかつた、恐ろしくやけくそ」になつた――或はならうとした詩人であつたことを。室生犀星氏の傳へるところによると鵠沼へ行く頃から、芥川氏は餘り書畫骨董に興味を持たなかつたとのことである。實際、氏はそんなものを振り向く氣はしなかつたに違ひない。又その頃出席した新潮合評會で、「藪の中」を賞めて後期の作を好まない或人の言葉に、芥川氏は昂然と答へてゐる。「あゝ云ふ作品は近頃の僕は書きたくないのだ」氏は全力を盡して現實的なものゝ中に肉薄して行かうとした。しかも、氏を堅く包んだ古い衣は容易には氏に突進の自由を與へなかつた。「我々は自由に突進したい欲望を、その欲望を持つところに自ら自由を失つてゐる」現實社會が續けさまに投げかける刺戟を戰ひ拔き得ない自分を振りかへつた時、氏はかう呟かずには居られなかつた。

「蜃氣樓」「點鬼簿」「河童」「彼」等の諸作は、末期に向ふ崩れ方を歩いてゐる氏の樣々な呼吸である。

「蜃氣樓」「點鬼簿」の「僕」は死んだ人の話ばかりしてゐる。それは水底にある死骸の香ひに滿ちてゐる。作品「彼」の主人公達はみんな恐ろしく憂欝である。作者をして註釋を加へしめるならば、「第一の『彼』は何をしても寂しい。第二の『彼』は何處へ行つても寂しい。」更に「玄鶴山房」においても、作者は息をひそめて「婆娑苦」に滿ちた暗い家庭を見つめてゐる。馬車の中でリープクネヒトを讀みつゞけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る大學生も、作者の意圖したやうに作品に新時代の光を投げると云ふより、寧ろ一層玄鶴山房の中の暗さを對照的に浮き上らせてゐると云ひ得るくらゐだ。

「河童」においても、作者の苦惱は依然暗いものだつた。作者の言葉によると「河童はあらゆるものに對する――就中僕自身に對するデグウから生まれました」しかし、我々は嫌惡によつて、混亂した自己を完全に整理し得る筈がない。「最も賢い生活は一時代の習慣を輕蔑しながら、しかもその又習慣を少しも破らないやうに暮らすことである」この言葉が如何に中途半端な自己の生活に對する自己嫌惡を示してゐるか。變革の意志を缺いた社會批判は――結局、疲勞ののち、最初の出發點にかへるより外はないのである。所詮、「河童」は氏の「ライネツケ狐」にすぎないだらう。

七

遺稿「或阿呆の一生」は「西方の人」と並んで、芥川氏の文學的一生の焦點であり、結論である。それは過渡的インテリゲンチヤ文學の歷史的な高塔となるだらう。

「或阿呆の一生」け「言はゞ刄のこぼれて了つた細い劍を杖にしながら」辿つた必死的の記錄である。病苦と塵勞に疲れ果てながらも、最後に自己をえぐり出して、刄向つて來る運命に叩きつけようとした記錄である。「齒車」も暗澹とした作である點において、これに劣らないかも知れない。事實、私は「齒車」に書かれた、狂氣の一歩手前にくすぼつてゐる神經の息苦しさに暗然とせずには居られない。何人もかうした人生が「地獄よりも地獄的」であることを疑はないだらう。

「西方の人」の芥川氏にとつては、十字架にかゝつたクリストの祈りは、もう單に三千餘年前に生きた聖靈の子の慟哭ではなかつた。「わが神、わが神、どうして私をお棄てなさる」氏はクリストと共に氏を襲つて來る「敗慘」と格鬪しつゝ、ゴルゴタの祈りを祈つてゐる。氏は「人間的」なクリストの中に悲劇的な情熱を燃え上らしてゐる。それはアプトン・シンクレエアの書いた「人類の生んだ最初の革命家の姿」ではない。芥川氏を動かしてゐるクリストの一生は「天上から地上へ登るために、無殘にもおれた梯子である」

「或阿呆の一生」はこれにもまして、痛ましい歷史に違ひない。これは形式においても、芥川氏の他の作にみられない激しさを持つてゐる。詩人的なハイパーボリとともに、作者は傷いた主觀を、むしろ狂暴にちりばめてゐる。

作者はこの中で狂人であつた母を書いてゐる。軛を想はす家族制度の下で、道化人形のやうに生きた苦しみを書いてゐる。「彼」は狂人の娘と憎惡に近い戀をした。一本の高い鷹萎に傷き易い「彼」の自畫像をみて「もうおそい、しかしいざとなつた時には……」と思ふのだつた。「彼」は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。が、雨に濡れた架空線から發する凄しい空中の火花だけは、命を取り換へ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

てもつかまへたかつた。ヴォルテエルの家――理性の家から「彼」は英雄レニンを見た。彼は才力の上でも格鬪出來る女に遁逃した。そして處世術にたけた「彼」は、抒情詩を作つてこの危機を脱出した。「彼」は窓格子に帶をかけて縊死しようとした。もう敗北は脱れることの出來ないものだつた。

「彼は不眠症に襲はれ出した。のみならず體力も衰へはじめた。何人かの醫者は彼の病にそれぞれ二三の診斷を下した。――胃酸過多、胃アトニイ、乾性肋膜炎、神經衰弱、慢性結膜炎、腦疲勞、……

しかし彼は彼自身彼の病源を承知してゐた。それは彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もちだつた。彼等を、――彼の輕蔑してゐた社會を！」

芥川氏の病苦の中に、我々は「この社會に對する恐れ」が、強く影を落してゐた告白をこゝに聽くのだ。氏の「或舊友に送る手記」の中に書かれた「漠然とした不安」の意義について雜多の人が夫々の解釋を下してゐる。或る詩人は「芥川氏は人生に敗れて死んだのではない。それはむしろ勝利の死だ」と叫んだ。そして、又或る作家は氏が「西方の人」を書いたことを例證として末年の氏が宗教的色彩を持つてゐたと云つた。彼等はあくまでも氏の自殺に社會的條件を除かうと努めてゐる。私はそれを一々反駁することをしない。只、彼等はそのことで彼等の「白い手」を見せてゐるだけだ。「痛く憂へて死ぬ許りだつた」芥川氏は彼等に「橄欖の下に眠つて居たクリストの弟子」に似たものを感じては居なかつたらうか。

この「社會」に對する恐れは、具體的に二つのものに分析出來るのである。一つは、いやおうなしに氏を「清朗の人」に祭り上げて、氏に鎖をかけた古い道德的雰圍氣であり、一つは、資本主義の惡をみとめてゐてその中に安住する自身を恥ぢる心であらう。（「問答」の章參照）これ等は氏の小ぢんまりした生活型から生れた必然的な破綻である。「芥川龍之介！芥川龍之介！お前の根をしつかりおろせ。お前は風に吹かれてゐる葦だ。……これからお前はやり直すのだ」――（闇中問答）――しかも、こうして「生活」を新しく建て直すことは、肉體的にももはや不可能であつた。後悔が自嘲がそして絶望が、餘りにもひしひしと氏をとりまいてゐた。氏は「しみじみと生活的宦官に生れた彼自身を輕蔑せずには居られなかつた」。最後の力を盡して、自敍傳を書いに見ようとして、それが自尊心や懷疑主義や利害の打算のために容易に出來ないことを知つた時も、「彼は彼自身を輕蔑せずには居られなかつた」こう云ふ自己破綻からどうして明るい再起を期待することが出來ようか。「あらゆる機關車は彼等の軌道により必然にどこかに突進しなければならぬ。もつとも速く……それより外に彼等のすることはない」――（機關車をみながら）――。芥川氏の軌道がどこに向けられてゐるかはもはや明らかである。

「敗るゝ者をして敗れしめよ……」（文藝的な餘りに文藝的な――。絞架を待つてゐる泥棒詩人ヴィヨンの姿に、氏はかうした「敗殘主義」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

的な歓呼を與へてやつた。そして社會的な慣習に背いた罪は、當然に背負はなければならないと言つてゐる。だが、彼等が敗北するのは習慣にそむいたためではない。徹底的に習慣にそむき得なかつたからだ。——かくて、世紀末的な苦惱にひしがれた芥川氏の自畫像は「或阿呆」の一生の次の一節である。

「彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯發狂か自殺かだけだつた。彼は日の暮の往來をたつた一人歩きながら徐(おもむろ)に彼を滅しに來る運命を待つことに決心した」

私は出來るだけ忠實な引證を試みて、「或阿呆の一生」の内容を約説して來た。それは除々に、隠然と結成されて行つた痛ましき人の歴史であつた。この作品は單に芥川氏の全文學の總決算的表現であるばかりでなく、明日の日を望みつゝも、傷き易い自我と社會的な重壓に堪えずして、苦しまなければならないあらゆる小ブルジョア・インテリゲンチャの痛哭をそこに漲らせてゐる。それは氏の辿つた「敗北」の道程と「敗北」の苦悶を殘酷に綴つた作品である。それは冷然とした情熱の中に、自己の「敗北」を意識して進んだ意味において、文學における「敗戰主義」だと云へるであらう。

八

私はもう決論してもいゝだらう。

芥川龍之介氏の文學の「最後の言葉」は、社會生活における人間の幸福への絶望感であつた。あらゆる厭世主義者のやうに、氏は「人間に負はされた永遠の世界苦」に結論を發見せずには居られなかつた。それは決して新しい思想ではない。新しい感情ではない。それは「自己」への絶望をもつて、社會全般への絶望におきかへる小ブルジョアジーの致命的論理に發してゐる。かくて芥川氏は氏の生理的、階級的規定から生れる苦惱を人類永遠の苦惱におきかへる。

娑婆苦を娑婆苦だけにしたいものは
コムミュニストの棍棒をふりまはせ
娑婆苦をすつかり失ひたいものは
ピストルで頭をうち抜いて了へ
——侏儒——

この詩は明らかに次のことを意味する。史的な必然として到來する新社會が、今日の社會より幸福ではあるがそこにもまだ不幸が殘つてゐる。

かう云ふ世界觀が到達する一定點こそ、芥川氏自身が身をもつて示した悲劇であつた。氏の「娑婆苦」は現代社會におけるあらゆる闘ひの現實に氏をおもむかしめるものであつた。氏の文學はこの自己否定の痛哭的上昇を具體的に表現してゐるものだ。虚無的精神も階級社會の發展期においては、ある程度の進歩的意義を持つものであるが、今の吾々はさうした役割を氏の文學に尋ねることは出來ない。さう云ふ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

意味で、我々は氏の文學に捺された階級的烙印を明確に意識しなければならぬ。

なるほど我々は最後の凄まじい情熱をたゝえた氏の道徳等に無關心になり得ない。だが、それは芥川氏の文學が、我々を內容的には退嬰的なニヒルへ誘ひ、形式的には瑰麗な肌ざはりを持つてゐると云ふことより、その事實によるものでなくてはたらぬ。ブルジョア藝術家の多くが無爲で怠惰な一切のものへの無關心主義の泥沼に沈んでゐる時、とまれ芥川氏は自己の苦悶をギリギリに嚙みしめた。又他の遁世的な作家達に、風流的安住が無力であるのみならず、究局において自己を滅すものであることを、氏自身の必死的な羽搏きによつて警告した。又氏は多大のブルジョア的狹隘性を內包しつゝも、尙他のブルジョア・イデオローグに比して、廣汎な社會的關心を持つてゐた——凡そ、これ等の事實においてでなくてはならぬ。「後世の士は我々の謬りを咎めるよりも、むしろ我々の情熱を諒としてくれるであらう」から云ふ言葉に息苦しい鬪ひの栖を求めた芥川氏の姿は、なにか惻々として我々を打つではないか。

だが、我々はいかなる時も、芥川氏の文學を批判しいかいかる野蠻な情熱を持たねばならない。我々は我々を逞くする爲に、氏の文學の「敗北」的行程を究明して來たのではなかつたか。

「敗北」の文學を——そしてその階級的土壤を我々は踏み越えて往かなければならない。

——了——

懸賞文藝評論
當選發表

曩に募集した懸賞文藝評論は締切までに約三百餘篇に達した。あらゆる範圍に亘つて文藝の諸問題が論議されてゐたが、中でもプロレタリヤ文學論、形式文學論、科學的文學論等が多數を占めてゐた。數回の詮衡の後このうちより約十五篇を選び、更に嚴重な審議の結果左の如く當選を決定した。

一等當選　「敗北」の文學　宮本顯治

二等當選　樣々なる意匠　小林秀雄

蘇峰自叙傳（追憶記）

蘇峰　德富猪一郎

第十七　東京に於ける半年の生活

予は明治十三年五月京都から東京に赴き、同じく十一月東京から熊本に歸つた。予が在京の時間は五ケ月に過ぎず。その中にても旅行杯を差引けば、在京の時間は正味三ケ月乃至四ケ月であつたらうか。然も此の半ケ年に滿たざる予の漂泊生活は、予の一生にとつて尠からざる經驗ともなり、教育ともなつた。これを悉く書けば、數限りもないが、今想ひ出すに從ひ、その若干を物語るであらう。

扨三條大橋にて新島公義氏に別れた吾等同行三人—即ち河邊久治、湯淺吉郎—は相伴うて大津に至り、それより船にて琵琶湖を渡り、同夜は草津驛に一宿した。それから月並的に五十三驛を足駄を履いて歩いて行つたが、その中に一寸記し置くべき事が一二ある。

五月の末ではあるし、暑さは暑し、渇くに任せて水を飲んだから、赤坂驛の鯉屋と云ふ所に泊つた夜、一寸したる霍亂を起し、その爲に思はず布團に小間物屋をぶちまけた。予はそれを宿家に斷るべきであつたが、何だか氣恥しくて斷わり兼ね、宿の女中が知らぬ間に吐き出したる儘、布團をくる〳〵疊んで、素知らぬ顏して出發した。これ丈は今でも氣にかゝつてゐるから、殊更に此に斷つて置く。

又たその時分同志社では『日曜には遠足するものではない』といふ事を教へられてゐたから、『日曜に旅行杯をするは如何であらうか』といふ評議をなし、先づ二三里位は差支へなからう

といふ事に相談を決め、掛川に投宿したのは、午前十時頃であつた。これには宿屋も面喰つてゐた樣だが、お客とあれば朝にせよ、晩にせよ、拒むべきではなかつたから、泊めては呉れたが、吾等も午前十時に宿屋に泊り、可成り手持ち無沙汰であつた事を覺えて居る。

當時は二十錢は先づ上等の部に屬する宿料であつたから、茶代は十錢か十五錢のものであつたらう。吾等は二三日茶代を儉約し、大磯に泊つた時に五十錢の茶代を奮發したが、その時には大なる鉢に鮨を山程出し、三人ではとても喰ひ盡せなかつた。

斯の如く三人の彌次、喜多は東京に着し、先づ下谷練塀町なる友人家永豐吉氏の下宿に赴いた。

斯くて湯淺氏はその郷里安中に歸つたが、ゆくほどもなく又た練塀町の下宿を訪れ來つたから、

『これから何處の學校に行く乎』

と訊いたら、湯淺は濟まない顏をして、

『實は安中に歸つたが、兄貴から散々叱かられた。「お前は德富君に欺まされて同志社を飛び出す抔とは、怪しからぬ話である。一刻も速かに謝罪して早々復校せよ。」との事で、これから又た同志社に歸る積りである』

と云つた。河邊は初から學費を持たず、實は予が何とか世話を燒く積りであつたが、兎に角これは予の從兄藤島正健の英語の教師として、其處に落着く事となつた。

扨予は如何になすべき乎。初から目指す場所は日々新聞發行所の日報社であり、人はその社長吾曹子福地源一郎氏である。予は取敢へず唯だ貧乏らしき名刺を懷にして、日報社に赴き面會を求めた。當時の日報社は銀座第一の呉服店『ゑびす屋』の跡を引受けたる、堂々たる建築であつて、その入口には『太政官記事印行御用』の看板を掛け、田舍者ではその敷居を跨るさへ氣遲れする程であつた。

固より薄汚き青年が面會を求めたとて、取次がるべきでもなく、留守とか、不在とか一向相手にして呉れず。然らば自宅にと考へ、不忍池ノ端なる茅町に、福地氏の邸を訪問したが、これも何時も不在で、双方の間を足駄をカラ〳〵踏み鳴し、幾度往復した乎、今は數へ切れぬ程であつた。

當時家永は島田重禮先生の双桂學舍に通學し、漢籍を學んで

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ゐたが、彼は當時に於て、英學では最早一人立ちが出來る程の力も出來たれば、漢籍の力は予が家永に敎へ、英學の力は家永が予に敎へるといふ樣に、互に交換してゐた。予は百計盡きて、新島先生の友人であり、且つ又た予が父の知人である津田仙氏を、麻布三ノ橋なる學農社に訪うた。

仙氏は顏に痘痕があり、擧動も如何にも眞率と云はん乎、輕易と云はん乎、演說などをして、面白き所に至れば、聽衆よりも眞つ先に當人が笑ひ出すと云ふ程の人にて、極めて俗の少き人の樣であつた。予が訪問した時に、氏は先づ予に向つて、

『歩いて來た乎、車で來た乎』

と問うたから、予は、

『固より步行である』と答へた。下谷練塀町から麻布三ノ橋迄炎天の步行は可成りこたへたけれ共、同志社足掛け五年の生活は、遠足、山登り等を、半ば課程の如く心得てゐたから、別段困りもしなかつた。それから津田氏は予が着てゐた夏羽織を指し、

『それは君の物乎』

と訊いたから、

『いや、これは友人から借受けたものである』と答へた。

これは正直の處、家永のを借受けたのであつて、固より生れて初めて夏羽織を着けたのであるから、津田氏の眼から見れば不恰好に見えたのは當然であつた。實は餘り粗服して福地氏を訪ひ、その爲に面會も出來なかつたのであらうと考へたから、その日に限つて借着したものであつた。それから予は志を述べ、

『何とか福地氏に面會の事を取計らひ下され度し』と賴んだ。

處が津田氏は、

『それは出來ぬ事もないが、面會したとて君が新聞記者となるに、君を弟子に取るとか、君が弟子入りするとか云ふ樣の事のあるべき樣もない。されば何れにしても貴君の目的を達する事は出來まい』

との事であつたから、此上賴み込むといふ事も面白からず、その儘引下つた。予はせめて福地氏の顏でも見度きものと思うたが、その時分は福地氏も東京府會議員の一人であつたから、當時は山下町なる東京府廳に赴き、府會を傍聽して初めて遠目ではあるが、福地氏を見た。併し何やら役者と云ふ程でもないが、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

講釋師か何かの樣に見受けられ、これが爲に輕蔑を感じたと云ふ程ではないが、予の熱心を唆るわけには參らなかつた。

當時吾等の仲間の先達とも云ふべき大久保眞次郎は、東京大阪の間を往來し、貿易一新論とか、何とかを唱へ、頻りに航海運輸の必要を論じ、何やら自ら汽船會社にても起さんと目論んでゐた。尤も大久保の子分とも云ふべき醫科大學の退學生外一二名は、大阪に於て既に船乘りとなり、瀨戸內海航海の小蒸汽の船長となつてゐた程であるから、大久保は海運業などは、手に唾して出來るものと思つたのであらう。

予は初より實業などといふ事は何等興味を持たず、固より自身が左樣なる事に關係を持つと云ふ樣の事は、露程も考へてゐなかつたが、併し大久保がやると云ふ事は別に留めもしなかつた。それは留めたとて留る樣な漢でない事を知つてゐたからである。



明治十三年頃　右大久保眞次郎　中央家永豐吉　左德富猪一郎

但だ彼が此の問題で奔走する時に、予も彼と共にと云はんよりも、彼の後からくつついて種々の人を訪問した。その中でも覺えてゐるのは、沼間守一と井上侯爵である。當時沼間は民間に於て政論家としての大立物であつた。彼は維新の際には幕府方であつて、よく鬪ひ、それが爲に板垣伯の識認する所となつて、維新後土佐に聘せられたが、やがて元老院書記官となり酒田縣に於る三島通庸の暴政を檢審し、大いに直名を得た。斯くて官を辭して嚶鳴社の領袖の一人となり、柳橋萬八樓邊に於て盛んに演說をなして居た。而して横濱每日新聞を東京に持出し、此れを東京横濱每日新聞と改題し、彼がその社長となつて、日報社の福地氏と對抗した。予は大久保と共に彼を今川小路の家に訪ねたが、大久保が諄々として航海會社を設くるの必要を說いた時に、彼は事も無げに、『それは三菱にでも行つて相談したらばよからう』と撥ねつけ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

た。一見した所精悍の氣溢れて居た樣に覺えてゐる。

井上侯は工部卿として、赤坂靈南坂の上に居た。初はもちと立派な人であらうと思つたが、逢つて見れば、如何にも英雄豪傑らしからぬ容貌であつた。顏は痛やら、皺やら、疱瘡やらわからず。殊は鹽辛聲にて、一向引立たなかつたが、併し話を聽いてゐる中に、何んとなく引きつけるものがあつた樣だ。予は一見して、『此人は何やら偉いものを持つてゐる』と云ふ樣に感じたが、此の感は遂に侯の世を終る迄持ち續け、今も猶ほ持續けてゐる。侯は大久保の話よりも、寧ろその同行したる二人の青年にインテレストを見出した樣である。その中で最も見出されたのは家永であつた。若し家永が今少しく怜巧に立廻つたならば、彼は少くとも或る期間だけは井上侯の寵兒となつたかも知れない。

右の樣な次第で、初から予は學校に入る目的でもなく、さりとて目的としたる福地氏の下に記者となる事は行はれず、唯だ其處に一日、彼處に一日と云ふ樣に送つてゐたが、夏は家永と共に武州金澤・鎌倉・江ノ島等に赴き、江ノ島には數日滯留して旅費に窮し、家永が東京に旅費調達に赴きその歸る迄、予は人質同樣、江ノ島岩本樓に滯在してゐた。處が大久保が大阪から頻りに『一寸來い』と云ふから『それでは』と家永と伴ひ、又た東海道を今度は草鞋がけにて大阪に下つた。何の爲に大久保が吾等兩人を呼寄せたか知らぬが、矢張り航海會社一件の事であつたらうと思ふ。

斯くて再び今度は三人連れ立つて、東海道を上り、恰度岩淵に來た時に、恰も八月十九日で、登山の季節であつたから、此の都合に富士登りもよからうと云ふ事で、東海道を岩淵から折れて大宮に至り登山し、須走りに下り足柄を越えて小田原を經、東京に入つたのは八月廿三日であつた。その時に予は何物も持たず、手にしたる破傘一個を携へてゐたが、これもつまらぬとて、新橋停車場に降り浪華橋の欄干からそれを投げ捨てた事を覺えてゐる。

大久保が航海會社に熱中すると共に、予のそれに對する不熱心は愈々明白となり、確實となり、やがては『君は君、僕は僕』と云ふ事にて、大久保は家永と提携し、予は寧ろ獨立して勉強をしてゐた。

予は京都を去る時に、新島先生より、

『貴君は敎會には出らるゝであらう』と念を押されたから、『勿論出ます』と答へた。予はその約束に從ひ、着京早々下谷に敎會か講義所を持つてゐる植村正久氏を訪うた。然るに植村氏は如何にもぶつきら棒の漢にて、新島先生と相對したる氣持などは、露程も出で來らず、とても斯る漢の話などを聽いたとて、役にも立たず、面白くもあるまいと思ひ、その儘斷念してしまつた。植村氏は一種の人物にて、予が斯く思つたのは、後から考へて見れば、皮相の見であつたかも知れない。それは兎も角も、爾來予が敎會に行かぬとて、新島先生は予を『噓つき』などと云つて、正面から攻撃してゐた。

予は同志社には未練がなかつたが、先生にはあつたから、富士山に登つた時などにも、その事を先生に報道してやつた。それで予と先生との關係は、不卽不離、謂はばうやむやの間に在つた。

當時予は神田神保町に下宿してゐたが、外務省に出勤しつゝあり、殊に井上侯から寵せられてゐた水上珍亮なる同縣の年長者は、予より英學を習ふべく、自ら居を予の下宿に移して來た。予の英學の力なるものは、頗る怪しかつたが、併し水上氏の爲にフリーマンの『歐洲近世略史』を講じてゐた。

而してその時分から熊本縣人の在京親睦會にも出席し、その幹事の役目を勤めつゝあつた、今日の阿部無佛翁、卽ち當時の神山充家氏等とも相知るに至つた。

その中に予の叔父江口高廉は、その子高寛、高達、高邦等、及びその子の友人等と相謀り、『內外交際新誌』と云ふ雜誌を發行しつゝあつたから、予も暇々にはそれに手傳ふことゝした。予の仕事は、橫濱外字新聞に出てゐる外國電報を飜譯するやら、それに就いての短評を書くやらであつたが、叔父はよく予の書いたものを添削し、餘りに添削し過ぎて、予は內々その眞意を沒却された如く感じ、不平であつた事も尠くなかつた。

斯る際に予が同鄕の友人共の中には、只今衆議院の場所である內幸町、當時三條公の屋敷跡に、岡松甕谷先生が紹成書院を建て、その中に寄宿し、又た有名なる佛蘭西學者中江篤介氏等も、自ら一方では佛學塾の主でありながら、その門に學びつゝあつた事を聞き知つたから、予も神田邊に下宿をするよりも、總ての事が都合がいゝから、先づ下宿を變へるといふ積りで、岡松先生の外塾へ入る事となつた。例に依つて先生の講義にもろ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くろく出席しなかつた。先生は帆足萬里の高足門人にて、漢學にては當時その敵少しと云ふ大家であつた。又た帆足萬里同樣外國の事も研究し、外國語も若干は心得、帆足先生の大著、『窮理通』なども岡松先生に依つて完成した事を聞いてゐる。叙事文が最も得意で、山陽の日本外史などは、初から終迄添削し、日本外史の講義の時には、よくその自家の訂正本を持出して講釋せられてゐた樣だ。

先生の十八番は常山紀談を漢文に譯する事であつて、それを中江氏初め門人共が皆全力を盡してなし、それを岡松先生が更に滿足する樣に、自ら書直し、此に漢譯の常山紀談が出來上つた。その原稿は中江篤介氏に傳へ、篤介氏の死後は、その門人幸徳秋水に傳へ、秋水が愈々最後に近かんとする場合に於て、それを予に托したから、予は大切にこれを保存し、その後先生の長子岡松參太郎博士の需に應じてこれを送附し、やがてそれが刊行せられたのである。

話元に戻る、該塾では、予は相變らず騒いで居た。岡松先生は如何にも寛大なる人にて、予も荘子の講義などには數回出た事もある。併し予は初から漢文を作る事を好まなかつたから、復文――假名文を漢文に譯すること――などはてんで相手にしなかつた。併し餘り仲間と夜中に騒ぎ廻るなどといふ爲に、塾監である合志林藏と云ふ漢から屡々誡められ、揚句には保證人を呼出して、說諭をするなどと云ふ事迄に立至つた樣であるが、仕合には退塾せらるゝ迄には至らなかつた。

予は幾ケ月を岡松先生の塾に過した乎を知らず、又た先生に依つて何を得た乎知らないが、併し先生は最後迄予を門人の一人に數へ、後年先生の七十の賀筵を、上野に開いた時にも、予が門人總代として認めたる祝文を、同窓の一人上遠野富之助君が朗讀した事を覺えてゐる。

當時予は又た駿河臺袋町に重野成齋先生を訪うた。重野先生は、予が父と維新前からの交際があり、予を親しく引見し、予が差出したる詩稿を即座に添削し、思ひ掛けなき稱評を記して下された。併し予は詩作も初から眞面目に心掛けたのでなく、唯だ吾志を言ふに止つてゐたから、別段眞面目に修行するといふ事もしなかつた。

此の村塾には、同志社に於ける予が先輩であつた、小崎弘道氏と[illegible]に[illegible]した事を記憶する。それはこの時の[illegible]

づてゐるからである。

當時予は又た地方から出掛けた有志等にも面會した。他日陸軍大將となつた、男爵立花小一郎君の如きも、地方から有志家總代の一人となつて上京してゐたが、予は神田淡路町の旅店で、君等と面會した事を覺えてゐる。

兎も角も東京一杯を歩く丈歩き、又た予の力の屆く丈の人にも面會をして見たが、何時も予の意に叶ふ者もなく、彼是考へて見れば、此の儘東京に居た時に何の益する事も無いから、寧ろ家に歸つて、新奇蒔直しに、勉強せん乎と考へてゐた。折しも予の父の親友山田武甫氏が、縣下の有志の用向きを持つて上京をしたから、取敢へず旅館に訪問し、予が志を述べた處、山田氏は欣然之を賛成し、予の父に宛て、予の是迄の行動及び今後に於ける予の志望を釋明したる一書を認めて與れ、且つ旅費さへ借して與れたから、予はそれを受取り愈々歸國する事となつた。それは明治十三年の十月の末乎、十一月の初め頃であつた歟と思ふ。

第十八　熊本歸鄕後の生活

予が歸鄕する以前、偶然にも東京に於て高田露、宗像政、有馬源內等云ふ人々と出會した。この人々は西南の役に熊本協同隊を組織し、薩軍に加擔をなし、その爲入獄し、今や漸く出獄して熊本に歸へらんとする際であつた。その時宗像氏は、

『鄕里に歸るならば、定めて意中の美人が待つてゐるであらう』

抔と話し掛けたが、予はこれを聞いて頗る不快に感じ、

『左樣な事は決して御座らぬ』

と氣色ばんで返事をした。後から考へて見れば、宗像氏は冗談の積りで話したのを、予は眞面目にそれを受取つたのであつた。

是程左樣に予は東京には居たが、その方面には頗る疎かつた事がわかる。

唯だ福地氏とは前にも記したる通り面會も出來なかつたが、その時分『近事評論』の持主である林正明、又たその記者である矢野駿男等といふ人々とは相知る機會があつて、新聞雜誌などといふものも世間に出れば、大層なもの丶樣であるが、その裏面を窺へば何んでもない事である事がわかつた。

予は京都に立寄り、新島先生を訪ねたが、先生は恰も九州に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

赴き不在であつて、面會を得ず。それから博多に至り、柳河にて家永の留守宅を訪ひ、又た三池にて立花小一郎氏の留守宅を訪ひ、熊本近郊の大江村なる吾家に歸つた時には、麥が少しく青き芽を出し、桑の葉が既に萎んだ時であつた。予は足掛け三年振りにて吾家に歸つた。當時家に到著した時の氣持は、今尚ほ新なるが如く記憶してゐる。

予は此間に於て著しく吾が兩親の老衰したるを認め、それよりも吾家の經濟狀態の甚だ危險であるに氣付かざるを得なかつた。吾家は縣下の水平から云へば、先づ中地主と云ふべきものであつたらう。左程の財産家ではなかつたが、自活するばかりでなく、多少の餘裕があつたのは勿論だ。併し吾父が維新前後諸方に奔走し、殊に吾家は横井小楠及びその眷族の臺所方をつとめ、小楠の二姪の洋行の際などは、可成り奮發して旅費調達の任に當つたと云ふ事にて、財政狀態は當時に於ても、必ずしも健全ではなかつた。

唯だ吾父が明治初年から奉職し、明治五六年頃に至つた間は、聊より不自由のあるべき筈はなく、その俸給の幾分かが熊本に於ける邸宅並その邸宅を繞る若干の土地となつたものであらう。或はそれも葦北郡にある土地山林を賣却して、それにて購ひ得たのかも知れない。

予の祖父は一時父が熊本に於て奉職したるが爲に熊本に來たが、『故郷忘れ難し』とて引上げ、水俣に歸り、築出しの隠宅に住居した。此に於て吾家にて纔に餘し得たる小作米その他の收入は、擧げて之を予が祖父の奉養料となり、熊本に於ける予の一家は、全く自給自活をせねばならぬ狀態であつた。

然るにそれにも關らず、此の數年間予の姉二人は東京若くは上州邊に赴き、予及び健次郎は又た京都に赴き、謂はゞ四人の留學生を出した事となつてゐた。固より規定の收入はなく、收入と云へば予の母が姉達と協力して養蠶をなす事。若くは桑畑より苗木を取つて、桑苗をその希望者に頒つ事位のものにて、その他は唯だ一方では葦北郡にある土地を賣り、又た家にある祖先傳來の什物などを賣つて、その日を過してゐた。時としては家の一部を他に貸してゐた事もあつた樣だ。

予は全く吾家の經濟狀態を知らなかつたと云ふ程ではなかつたが、習慣性となつて、左程困難であるとも思はず。されば學費の如きも豪奢に取り、敢てそれを自ら制すると云ふではないが、

これを友人共に頒ちなどして氣持よく暮してゐた。

然るに歸つて見れば予が家の經濟狀態は、殆んど危急に迫つて居る。唯だ大膽にして物事に屈託せぬ吾母が、やりくりして暮してゐるに過ぎなかつたのを見て、又た予が父が正直にして且つ小心の質とて、胸中その事を苦にし、その爲に兼ねて多かつた白髮が、猶更ら多くなつたのではあるまい乎抔と考へ、予は今更ら實に兩親に對して相濟まない心持ちになり、何は兎もあれ、是非共この經濟狀態を立直さねばならぬと決心した。

當時熊本には十年戰爭の餘を受けて、その善後策として二箇の學校が出で來つた。一は同心學舍と云ひ、これは十年の役に熊本隊として薩軍に加はりたる池邊吉十郎、その他の面々の仲間で、所謂學校黨と稱する者の團體から成つたものであつた。一を共立學舍と云ひ、それは山田武甫か宮川房之及予が父等の發起したるものにて、予が父は殆んど予の歸鄕する頃までは全力を此の學校に注いでゐた。その外に相愛社なるものがあつた。これは宮崎八郎などの仲間にて、十年の役には協同隊を組織し、或は討死し、或は入獄したるが、その入獄せざる者、若くは獄中から歸り來る者共の團體にて、池松豐記、松山守善及び前に掲げたる有馬、高田、宗像、田中賢道等が、その主なるものであつた。

斯の如く學校は共立學舍、同心學舍の二つあり、猶ほ又た實學黨の中にて嘉悅氏房氏の邸内に廣取校なるものを設けて、英學を專ら授けてゐたが、有力なる學校としては、前記の通り二つであつた。

斯くて同心學舍は、木村弦雄、佐々友房の指導の下に大に振ひ、濟々黌と改名した。斯の如く熊本には、事實三黨が分立した。同心學舍を基礎としたる所謂學校黨、共立學舍及び廣取學校を基礎としたる實學黨。及び相愛社である。學校黨が保守黨であり、實學黨が漸進黨であり、相愛社が急進黨であつた。しかも十年の亂に關係しなかつたものは、只實學黨のみであつたと云つても可なりだ。

斯く分立しては居ても、戰後の復興として、協力一致を主唱し、縣外の熊本出身者及び縣の當局者等も、內外呼應して骨折り、これが爲に『忘吾會』なるものが出で來つた。即ち吾を忘るゝの會にて、孰れも自我を忘れて互に協力一致する事である。前に記したる山田武甫等が上京したのも、この『忘吾會』の用

務の爲であつた。

斯る勢であれば、予も又た『忘吾會』會員の一人となり、傳統的に實學派であらねばならぬ予は、父と共に共立學舍に赴き、或は講習、或は討論等に從事した。當時共立學舍には、予が父の外に主なる教師としては、行德文卿、津田靜一氏等があつた。行德翁に就いては別に記する事があるが、今此に記するは、津田靜一氏の事だ。津田氏は津田信弘の長子である。津田信弘は津田山三郎と稱し、坪井實學の領袖株の一人にて、藩の家老米田是容に引立てられ、水戶人士と交友し、藤田東湖等にも知られ、維新の際には參與にまで拔擢せられたる漢である。靜一氏はその長男として夙に米國に赴き、一通りの學問をすましたのであるが、米國に在つても米國風に染まないのみならず、寧ろそれに反動し、一種の強硬なる日本主義者であつた。彼は門地もあり、緣故もあり、東京にて官職につかんとすれば、何等苦勞は無かつたが、先輩の止むるを顧みず、一袂を拂つて故山に歸り、讀書を事とし、その傍ら共立學舍に敎へてゐた。その弟關谷直亮は予と同年であつたが、氏は予よりも少く共十歲内外の年長者であつたと思ふ。學識はそれよりも多かつたかも知れぬ。予は當初から津田氏と意見が衝突し、何かにつけて議論を鬪はした。固より鄕黨にては齡を尊ぶ習ひであれば、予が津田氏に向つて抗論するは、何となく失禮にも見受けられ、正直なる予の父などははら〳〵したであらうが、予はそれ等には一向頓着なく、盛んに議論を鬪はしてゐた。今何事を論じたるや、その事さへ想起せぬ程であれば、別にたいした重大なる問題ではなかつたらうが、予は當時最も急進論者の一人であつたから、予の言ふ事が、津田氏の氣に喰ふ筈がなかつた。

斯る際に予と相愛社との交際は自ら開けて來た。相愛社は全くルウソーの『民約論』を金科玉條としてゐた。予は必ずしもそれを信仰したと云ふではなかつたが、若干それに感染してゐた事は間違ひなかつた。今此に想ひ起すが、予が明治十三年の秋の初、岡松先生の塾にある頃、當時渡邊洪基氏が『集會條例』の製造者であるといふ評判が高くなり、予は友人兩三と共に、氏を南佐久間町の邸宅に訪うた事を記憶して居る。その時吾等の擧動が餘りに壯士らしかつたとて、家の人々はおど〳〵して取次がなかつたが、餘りに騷がしきものから、主人公自ら玄關に立ち現はれ、『さらば君も餘り上られ』とて應接間に通され、

それから議論に及んだが、洪基氏は吾等の云ふ事を聞きながら、

「それはルソーのコントラ・ソーシャルの受け賣りではない乎」

と云はれた事がある。當時渡邊氏の立場から見れば、左もある可きであつたらう。

予は別に定りたる職業もなく、家に在つては讀書をなし、若くは家事の手傳をなし、父と共に共立學舍に赴き議論をするのが、その日の仕事のやうであつたから、相愛社の連中の誘ふに任せ、演説の爲に田舍廻りをなし始めた。時としては月田道春、時としては松山守善、時としては田中賢道氏等が、予の同行者であつた。松山氏は今も八十を越えて矍鑠としてゐるが、氏は本來神風黨であつたのが、急進黨となり、相愛社の大先輩の一人となつた。氏は十年の戰爭には加入せず、官吏を罷めて、辯護士となり、時にはその會長となり、恒産もあり、議論は頗る過激であつたが、生活は極めて穩當、中正であつた。月田氏は月田蒙齋先生の子にて、その刑期が輕かつた爲に、最も早く獄中から放還せられたる一人であつたらしい。田中賢道氏は花岡山事件頃から――洋學校には關係がなかつたが――基督教に關係あり、十年の戰爭には協同隊の中隊長まで昇め上げたる一人で、最も雄辯家であつた。

予は如何なる事を演説した乎記憶しないが、これが爲に予自身にとつては、尠からざる演説の練習をなし、又た地方の事情等も察し、元來予及び予の家に緣故の多くなかつた熊本城北の方面に、多くの知己朋友を得る端緒となつた。予は元來口不調法の者であつた。子供の時からしやべる事は嫌ひではなかつたが、全く下手であつた。ものを順序立てゝ人に話す事を、如何にも面倒くさく考へ、何でも結論から先に話し、或は三段論法を二段論法として話し、その爲に自分の思ふ事を正しく云ひ表はす事の出來ないのみか、往々他を誤解せしめた事があつた。演説は猶更であつて、多くの人の前に立つてしやべるなどといふ事は、予の神經に過大の刺戟を與へ、予にとつて堪へ難き重荷であつた。加之、聲量は少く、聲音は清朗を缺き、演説家の資格としては何一つ取柄がなかつた。

併し時としては、他人から促されぬ迄も、自ら進んで云ひ度いと思ふ事があり、その爲に到底巧妙なる辯士とならざる迄も、自分の云はんと欲する所だけは、兎も角も云ひ得る丈になりた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いと云ふのが予の望であつて、それには可成り苦心もした。この相愛社の人々と田舍廻りの演説をした事は、予に取つては、決して無駄骨折りではなかつたと思ふ。

當時熊本には又た中學校、師範學校などの教師として、他地方より入込んだる者、若くは新聞記者として入込みたる者、その他に依つて、相親社といふ學術研究の團體があつた。予も又たそれに加入すると云ふわけでもなかつたが、屢々その會に臨み、互に討論、演説などした事を覺えてゐる。

當時は役人と云はず、教育家と云はず、政論大繁昌の世の中であつて、寄るとさはると政治を論ぜざる者はなかつた。斯る折しも相愛社の連中は、愈新聞を起す事となつた。それは多分明治十四年の中頃であつた乎と思ふ。別に資本があるでなく、唯だ或る活版所と共同して、隔日四號文字四頁の新聞を發行する事となつた。當時熊本新聞には、村上定なる人が來つて、福澤流の議論を頻りにやつてゐたが、相愛社の連中はそれが氣に入らず。尚ほ一層過激なると云はんよりも、無遠慮なる議論がして見度いといふわけにて創刊した。

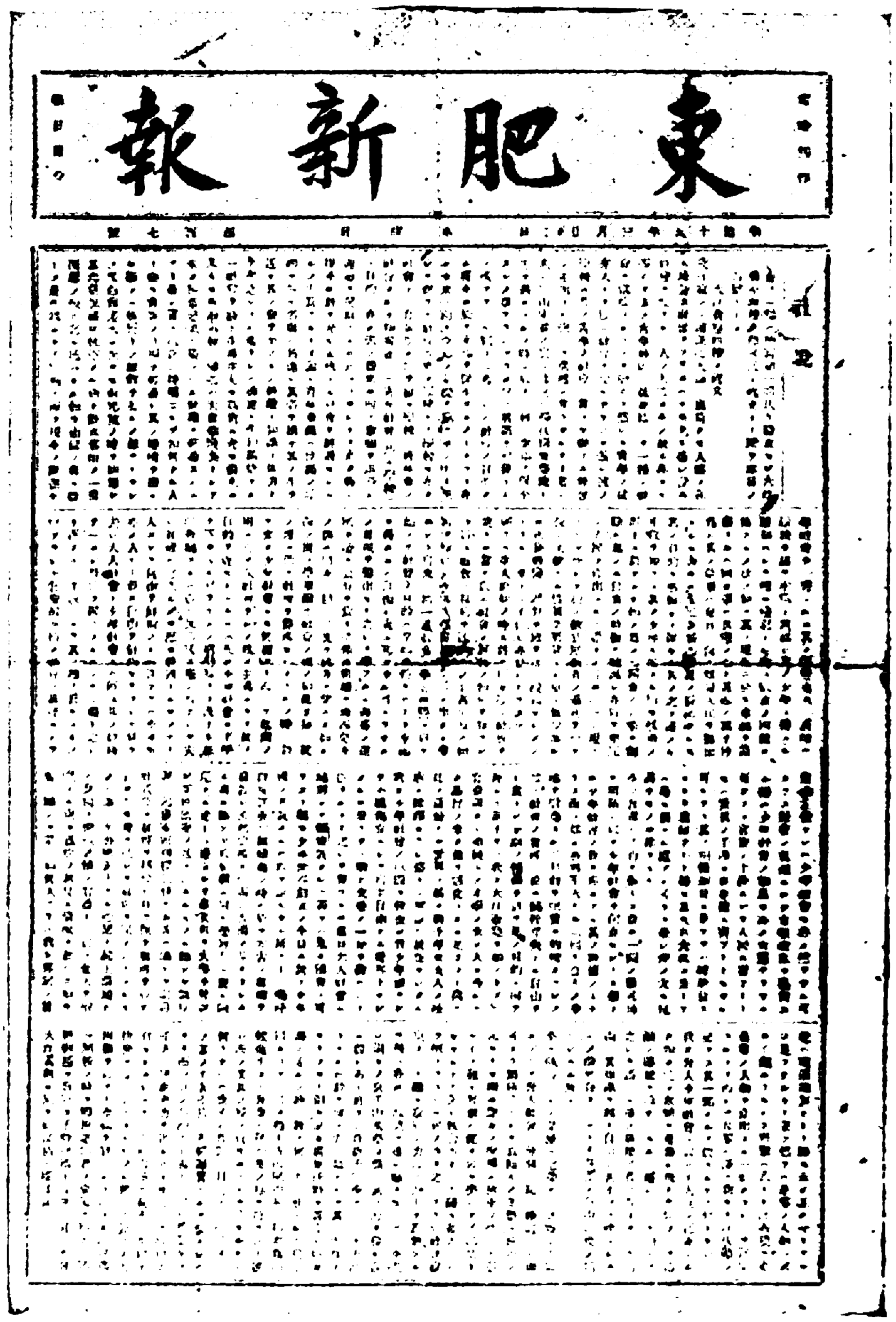
社説は池松豊記、編輯は宗像政などと云ふ人が關係してゐた。予は謂はゞ傭に當初より無報酬にて、その編輯に手傳ふ事となつた。予は社説も書いた。論説も書いた。雜記として種々の飜譯ものをも出した。又た雜報さへも手傳つた。論説には種々の號を用ひ、若くは變名を用ひた。その中でも最も多く用ひたのが、最初は大江逸郎と書き、それから後には郎を削つて大江逸とした。大江と云ふは、予の住所が大江村であつたからだ。予の飜譯したのは、マコレーのエッセー若くはクロムウェルの傳などであつた。

それからその新聞ばかりでなく、後には『開化の手引』と題する、極めて平易なる雜誌をも發行した。それにも種々の飜譯物を掲げた。當時予の英語の力は頗る怪しきものであつたが、しかも予は大膽に無遠慮にやつてのけた。今から考ふれば汗顔の至りであつた。盲目蛇とは此の事であらう。

予は明治十三年の秋、東京を去る以前に、或る古洋書屋の店頭から、一冊のマコレーのエッセーを發見し、それからそれを耽讀し初めた。山陽は東坡の文を讀み、初めて『天地間に斯の如き文章ある乎』と驚嘆したと云ふ事であるが、予も又たマコレーのエッセーに就いてはしか云はねばなるまい。[illegible]

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

したるものを、恥し氣もなく飜譯したのだ。新聞の名は『東肥新報』と稱し、熊本新聞とも種々の問題に就いて、論戰を試みたが、予は初から論戰なるものを好まなかつた。予は人は人、吾は吾。吾は唯だ吾が云はんと欲する所を云ふだけにて、人が賛成しようが、反對しようが、それには初から頓着しなかつた。時には餘りに氣に喰はない說を見れば、其人には喰つて掛らぬまでも、其說をば駁擊した。但し予の一生を通じて概して云へば、正面から人と議論を闘はした事は殆んどない。それは闘はしたとて何等功能がないと考へてゐたからである。即ち吾は吾が云はんと欲する事を云ひ、彼は彼の云はんと欲する事を云ひ、その得失は第三者が隨意に取捨すべきものであつて、第三者に向て『是非彼を捨てゝ吾を取れ』とまで立入つて云ふ必要はないと思つたからだ。これは予の一生を通じて、新聞記者としての立場であつた。されば予は殊更に他を攻擊もしないが、又た他の攻擊に對して答辯もしなかつた。


東肥新報

大江義塾開校祝文掲載の東肥新報

或時予の留守中に裁判所から召喚狀が來て、予の父母を驚かした。それは『開化の手引』なる雜誌發行に就いての何か手續

いと云ふのが予の望であつて、それには可成り苦心もした。この相愛社の人々と田舍廻りの演說をした事は、予に取つては、決して無駄骨折りではなかつたと思ふ。

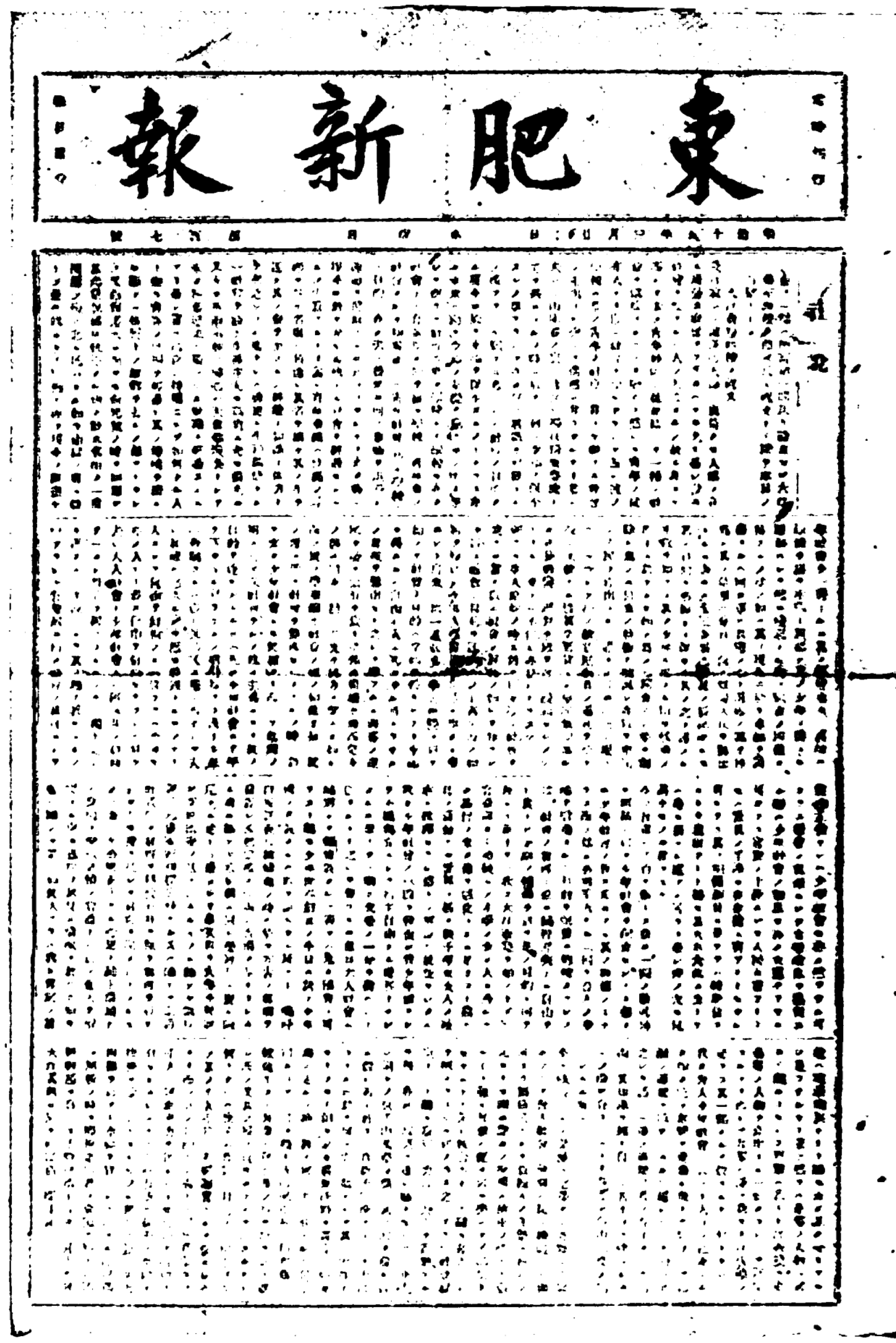
當時熊本には又た中學校、師範學校などの教師として、他地方より入込んだる者、若くは新聞記者として入込みたる者、その他に依つて、相親社といふ學術研究の團體があつた。予も又たそれに加入すると云ふわけでもなかつたが、屢々その會に臨み、互に討論、演說などした事を覺えてゐる。

當時は役人と云はず、教育家と云はず、政論大繁昌の世の中であつて、寄るとさはると政治を論ぜざる者はなかつた。斯る折しも相愛社の連中は、愈新聞を起す事となつた。それは多分明治十四年の中頃であつた乎と思ふ。別に資本があるでなく、唯だ或る活版所と共同して、隔日四號文字四頁の新聞を發行する事となつた。當時熊本新聞には、村上定なる人が來つて、福澤流の議論を頻りにやつてゐたが、相愛社の連中はそれが氣に入らず。尙ほ一層過激なると云はんよりも、無遠慮なる議論がして見度いといふわけにて創刊した。

社說は池松豐記、編輯は宗像政などと云ふ人が關係してゐた。予は誘はるゝ儘に當初より無報酬にて、その編輯に手傳ふ事となつた。予は社說も書いた。論說も書いた。雜記として種々の飜譯ものをも出した。又た雜報さへも手傳つた。論說には種々の號を用ひ、若くは變名を用ひた。その中でも最も多く用ひたのが、最初は大江逸郎と書き、それから後には郎を削つて大江逸とした。大江と云ふは、予の住所が大江村であつたからだ。予の飜譯したのは、マコレーのエッセー若くはクロムウェルの傳などであつた。

それからその新聞ばかりでなく、後には『開化の手引』と題する、極めて平易なる雜誌をも發行した。それにも種々の飜譯物を揭げた。當時予の英語の力は頗る怪しきものであつたが、しかも予は大膽に無遠慮にやつてのけた。今から考ふれば汗顏の至りであつた。盲目蛇とは此の事であらう。

予は明治十三年の秋、東京を去る以前に、或る古洋書屋の店頭から、一冊のマコレーのエッセーを發見し、それからそれを耽讀し初めた。山陽は東坡の文を讀み、初めて『天地間に斯の如き文章ある乎』と驚歎したと云ふ事であるが、予も又たマコレーのエッセーに就いてはしか云はねばなるまい。[illegible]


東肥新報

大江義塾開校祝文掲載の東肥新報

したるものを、恥し氣もなく飜譯したのだ。新聞の名は『東肥新報』と稱し、熊本新聞とも種々の問題に就いて、論戰を試みたが、予は初から論戰なるものを好まなかつた。予は人は人、吾は吾。吾は唯だ吾が云はんと欲する所を云ふだけにて、人が賛成しようが、反對しようが、それには初から頓着しなかつた。時には偏りに氣に喰はない說を見れば、其人には喰つて掛らぬまでも、其說をば駁擊した。但し予の一生を通じて概して云へば、正面から人と議論を闘はした事は殆んどない。それは闘はしたとて何等功能がないと考へてゐたからである。即ち吾は吾が云はんと欲する事を云ひ、彼は彼の云はんと欲する事を云ひ、その得失は第三者が随意に取捨すべきものであつて、第三者に向て『是非彼を捨てゝ吾を取れ』とまで立入つて云ふ必要はないと思つたからだ。これは予の一生を通じて、新聞記者としての立場であつた。されば予は殊更に他を攻擊もしないが、又た他の攻擊に對して答辯もしなかつた。

或時予の留守中に裁判所から召喚狀が來て、予の父母を驚かした。それは『開化の手引』なる雜誌發行に就いての何か手續

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きの事であつたらうと思ふ。予は長き筆硯の生活に於て、未だ曾て所謂る筆禍なるものに罹つた事はなかつた。これは予が言論に就いて、謹愼した爲であつた乎、或は他の理由であつた乎知らないが、予は言論に就いては、常に責任觀念が深かつたから、未だ曾て人に對して申譯の出來ない樣な言論を、逞しくした事はなかつた。

第十九　大江義塾の設立

此に又た予の生涯に於て、一の記念すべき事が出來た。それは大江義塾創立の事だ。今此の事に就いて、少しく語るであらう。予は同志社に足掛け五年間居る中に、教育に就いて多大の興味を感じ、自分が教育者となる日には、此の事は斯くせねばならぬ。彼の事は斯くせねばならぬと、種々自ら註文をつけてゐた。

又た共立學舍に屢々出席して、その模樣を見ても、何となく歯がゆい樣な感がした。それで予は何とか自ら學校を起して見度いと云ふ樣な感が、歸郷匆々湧いて來た。それには又たそれを必至とする一の理由がある。それは何とかして予が家の財政を立直さんまでも、切拔けだけはせねばならぬ。これに就いては、予は是迄兩親から搾取したる報償として、今後は自分の心と身を働かして、兩親に貢獻せねばならぬと云ふ感を起し、それに就いては他に藝能もなきから、極めて貧しき學問ではあるが、それを提供する外はないと考へたからである。

予の家は殊に予の母の時代となつてからは、緣家親類の倶樂部同樣であり、のみならず父の友人若くは門生等も、常に予の家を中心として相集つた。されば予の家の僕の如きも、毎朝朝市場に出掛け、魚類を買出す事が、一の役目であつた。事程左樣に食事などの時刻になれば、別に用事もなき客が、食事の爲にやつて來るといふ程であつた。斯くする事が予の母にとつては、恐らくは一の習慣と云はんよりも、快樂であつたかも知れない。

兎に角德富家にさへ行けば、何等かの御馳走には有りつくものと云ふ事になつてゐた樣だ。予は吾家の病根が此にある事を見て、第一、人に御馳走する事をやめる事。第二、成可く客を引止めざる事と云ふ法度を定めた。其爲に十二疊の座敷を板間となし、その眞中に二疊の疊を敷いた。此れは主人一人、客一人と應接するには、それで澤山であるからと云ふ事であつた。斯る次第で一切家政を改革したから、予の緣家親類に於ける

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

不評判は、著るしきものであつた。或は親不孝者の名さへも、宣傳せらるゝに至つた。斯く方針を定めて見れば、吾家は寧ろ只だの住居としては廣きに過ぎた。そこで是迄の客間一切を擧げて塾舍とすべく考へた。

予が歸鄕より幾何もなく、縣立中學校の生徒の中には、予に英書の講讀を乞ひに來た者がある。予は彼等に向てマコレーのエッセー、ワルレン・ハステングや、クライブなどの評傳を講讀した。固より予にもよくは讀めなかつたが、兎も角も講讀した。

又た共立學舍の生徒等の中にも、予の講義を聽んとして來た者があつたから、彼等にはギゾーの文明史を講義して聽かした。斯の如くにして生徒は招かざるも追々集つて來た。その爲に吾父も又た興味を感じて、論語、孟子の講義抔もする事となつた。

當時學校黨の造りたる同心學舍は、木村弦雄、佐々友房などの指導の下に、且つ政府の擁護の下に盛んになつたが、共立學舍は既にその盛時を過ぎ來つた。その時恰も予が講義を初めたから、自然共立學舍の生徒の中にも、若くはこれから共立學舍に赴かんとする者の中にも、予の方に講義を聽きに來る者が増加して來た。

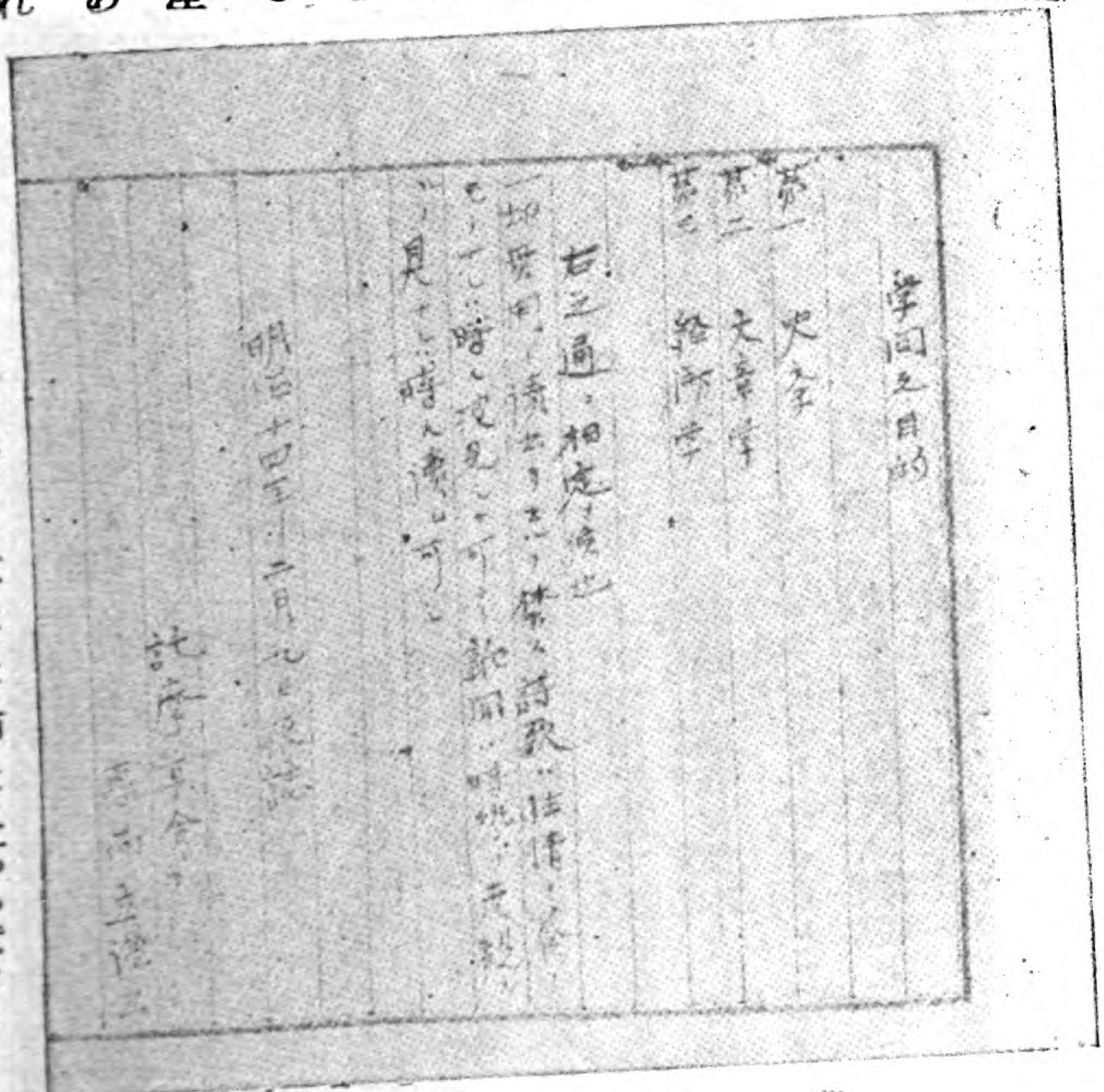
當時予は所謂日本人には日本學が必要であるといふ事を唱道した。或は英學と云ひ、或は漢學と云ひ、或は皇學と云ふ。皇學者は大和言葉で學問をなし、漢學者は漢字、漢文で學問をなし、洋學者は洋字、洋文で學問をなすと云ふ事で、孰れも普通日本人にとつては、道行きが甚だ面倒だ。それよりも現代の日本言葉にて、現代の學問をする事が一番近道である。それが即ち予の所謂日本學である。

即ち現代の言葉にて、政治、經濟、歷史、地理、何にても必要の學科は修められるから、それを強ひてむづかしき言葉の力を借りる必要はないと云ふのが、予の立前であつた。そこで予はその意味を以て講義をなし、經濟學なども同志社のラーネッド敎授の講義を種本として、それを予が日本語に寫し、その口授を筆記せしむる事とした。斯くて明治十五年三月に至つて開校式を擧げたが、學校と云つても、予の家の座敷、玄關、次の間等に過ぎず。學生とても十人乃至二十人内外であつたらう。これが大江義塾の創りである。

予は自ら大江義塾の長となり、一人にて塾長から、敎師から、幹部まで兼ねて居た。若干これにて家政の缺陷を補ふ積りであ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

つたが、得るところは幾何もなかつた。中には五十錢の月謝を拂ふ者もあつたが、中には月謝どころでなく、食費さへも予の力で手傳はねばならぬ者もあつた。予は又た數學を除けば、殆んぞ凡有る學課を教へた。予の所謂日本學にて、歴史、經濟などの講義は勿論、漢學も英學も何んでも手當り次第に教授した。英學なども授くる際には、教師である予自らが、時としては理解に苦しむ事もあつたが、さる場合には特に大きなる聲にて怒鳴るが如く講義をなし、當座を誤魔化し去つた樣な事もある。漢籍なども講釋をして見れば、自ら思ひの外學力の少かつた事に驚いたが、『教へるは學ぶが半』と云ふ事にて、自分が勉強する積りで教へた。又父の論語、孟子の會讀には予も出席して、時としては父の講義に向つて無遠慮なる横槍を入れ、今から考ふれば、親に對して可成り無遠慮なる言を吐いたものと思つて恐縮してゐる。



而立とは當時予の雅號なり三十にして而して立つの意なり（蘇峰老人）

蘇峰立志書

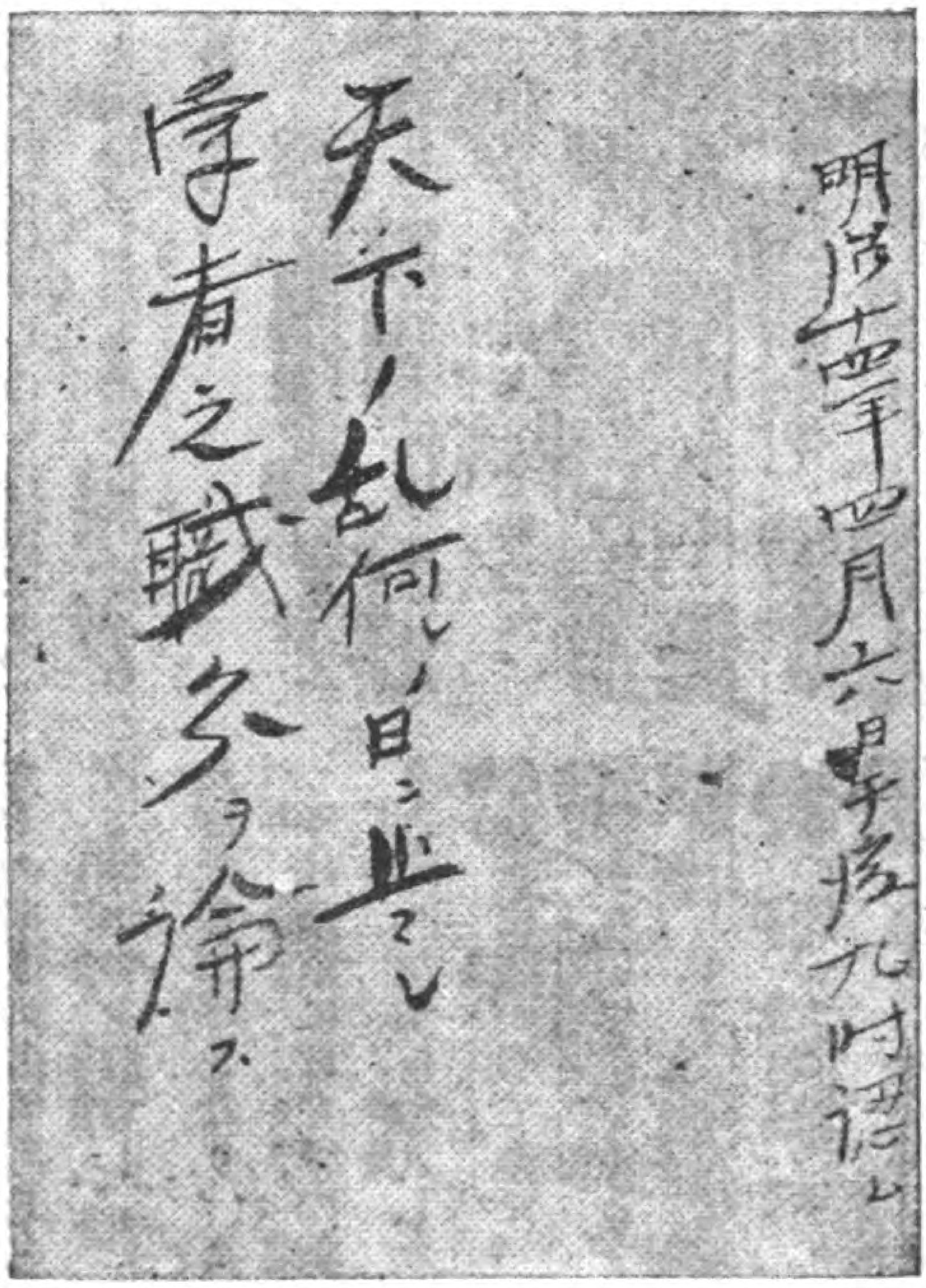
併しその間に於て、予は可成り勉強をした。予は種々文章を書いたが、自分自らその文章が物になる乎、ならぬ乎と云ふ事に就いて、屢々危惧の念を抱いた。然るに共立學舍の先生に、行德文卿と云ふ人があり、この人は眼科醫であつたが、徂徠學派の人にて、殊に詩文には達者であり、又た不思議に見識もあつた。予は曾て相知らなかつたが、共立學舍で對面し、その後予の作文や作詩を持參して、その斧正を乞うたが、行德翁は予を以て共に語るべき者となし、予を待つに普通の青年を以てせ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

す、謂はゞ器重したとでも評すべきであらう。又た予の父の友山田武甫氏は、その人物が公平にして、俗氣なく、如何にも大人たるの襟度があつた。この人が又た予を以て共に語るべき者となし、胸襟を披いて予の云ふ所を聞いた。

當時予は世間一般の民權自由論に感染れてゐたが、その中でも予は聊か他と趣を異にした。それは當時の民權自由論は、その名目が民權であつて、その實は國權であつた。即ち明治六年征韓論の餘波は、尙ほ當時の人心を支配し、民權論者の中でも半以上は朝鮮討つ可しなどと云ふ論が多かつた。謂はゞ民權論者の中に於て、その多數は寧ろ一種の變形なる帝國主義者、若くは武力主義者であつた。

予は民權論者ではあつたが、武力主義者には飽迄反對した。當時予は民權の敵は武力であると考へ、戰爭は武人跋扈の原因をなすものと考へたから、何處迄も戰爭には反對した。予の本旨は一言にして云へば、マンチェスター・スクールであり、所謂コブデン、ブライト、グラッドストンなどの論であつた。ルウソーの『民約論』を看板として、武斷主義を行はんとするが如き相愛社流とは、根本に於てその趣を異にした。併しそれは唯奥底を窺つての話であつて、民權論だけにては、何等反對の事はなかつたから相變らず交際もし、當時予も殆ど相愛社員の一人と見られて居た。併し相愛社の幹部の連中は、必ずしも予をその內部の評定迄は加へなかつた。否、予自らもそれに加はる事を欲しなかつた。



當時の作文（文明論之内）草稿の表紙

されば予は傳統的に於ては實學連であり、交際の上は相愛社連であつた。併し予本來の立場は寧ろ大江義塾の長たる德富猪一郎であると見るより外なかつたであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

天下を舉げて國會開設論が湧き、國會請願が盛んになり、廟堂多事の時に際して、熊本縣の先輩の一人、安場保和男は、岩倉公等と相談の上、熊本に於て、所謂紫溟會なるものを作るべく、その主意書を携へて下向した。その主意書は井上毅子の筆になつたるもので、冒頭には、よく國を興すものも政黨なり。國を滅ぼすものも亦た政黨なりと云ひ。しかもその目的は專らルウソーの民約説を攻擊するにあつた。

これは勿論熊本縣下を統一して、當時の民權論の狂瀾を支ふる積りであつたらう。前にも申す通り、當時熊本には『忘吾會』なるものがあり、各黨吾を忘れて相會すると云ふ事であつた。右の安場氏も忘吾會に重なる人々を集め、紫溟會組織の事を相談した。その時予は相愛社の首領株、有馬源內氏と共に、相愛社を代表して出席した。然るに最初に主意書を讀み、安場翁が一通り演説をなし、斯くて贊成、不贊成を表すべく、列席の人名を讀みあげたが、孰れも『贊成』『贊成』の聲にて、それが讀んで予の名に至つたから、予は『自分は仲間の代表者として來てゐるから、卽答は出來ぬ』と云つて保留し、有馬氏も亦た保留した。卽ち彼に依れば、最初から相愛社を除外して、その他の連中を統一せんとした事であつて、吾等が贊成を保留した事は、別に安場男等にとつては不思議もなかつた。

やがてその紫溟會なるものが、元の實學黨と、元の學校黨との間に意見が齟齬を來し、遂に紫溟會は舊學校黨及び津田靜一氏等の所謂坪井實學なるものに止り、横井派の實學派は殆ど擧げて紫溟會を脱會し、此に於て相愛社と實學黨とは、勢ひ提携せねばならぬ事となり、斯の如くして熊本の政黨は出で來つた。

予は政黨には左程の興味も持たず。飽迄も自分の勉強をしようと考へたから加入しなかつたが、依然予の立場は相愛社と實學黨とに跨がつてゐた。これを大局の上から云へば、相愛社は當初から板垣伯を主とする自由黨に連絡を持ち、實學黨は大隈侯を主とする改進黨に連絡を持つてゐた。尤も横井派の連中は維新の際、大隈侯の爲に致されたる歴史もあり、當初はあまり接近しなかつたが、改進黨なるものが、大隈侯及び河野敏鎌一派の嚶鳴社を合して、知識と財産を標榜し來つたからには、自然漸進黨の實學派は之に傾かざるを得なかつた。而して彼等は紫溟會なる共同の敵があつたから、勢ひ相愛社と提携せざるを得なかつたのである。(昭和四年四月八日民友社に於て)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小酒井不木全集（全八卷）

第三回配本（第五卷）

闘病術及學者氣質

結核患者は遂に醫師にも、藥劑にも見はなされた。しかしたつた一つ見はなさないものがある。それは神でも、自然でもない。自分の心だ。それこそ唯一の醫師であり、藥劑であり、神であるのだ。しかし、漫然と自分の心を凝視してゐたとて駄目だ。どういふ心が病氣を征服するか。見よ。本書には詳かにその心の持方が書いてある。

ニュートンは鷄卵と間違へて時計を煮た。「ドン・キホーテ」を書いたセルヴアンテスは屢食ふものがなかつた。畫家のミレーは眼を疾ひ、音樂家のベートーベンはつんぼだつた。いかに多くの天才が迫害と貧苦と病苦に悩んだか。さうして、いかにそれに耐へたか。好學の人々に學者氣質の一讀を薦む。

配本濟

第一回（第三卷）探偵小說短篇集

第二回（第一卷）殺人論及毒と毒殺

—以下續刊—

第二卷 犯罪文學研究及近代犯罪事實談

第四卷 探偵小說長篇集

第六卷 生命神秘論及不木軒隨筆

第七卷 醫談女談

第八卷 病間錄

發行所 改造社 東京芝區愛宕下町 振替東京八四〇二

豫約募集

牧水全集

偉大なる自然詩人
の風格を賞慕せ！

わが日本のみが生み得る、眞に日本的な文學の精華として先づ第一に擧ぐべきは若山牧水の作品である。その自然を歌ふやまつたくこれと融化して自然そのものの聲となり、人事を歌ふやまた人間性そのものの流露となり、常に自由にして清新、萬人に愛誦されつつある。まことに氏の短歌こそは人麿、西行、芭蕉等の作と共にわが純粹の民族詩の最高峯として讃仰さるべきものである。而してその飄々乎として旅に出づるや、常に比類なき紀行文を物し、脱俗の風格行文の妙、神品とさへ稱せられた。氏はまた傑れたる童謠作家であり、詩人であり、小說家としての手腕も侮るべからざるものがあつた。殊に氏の書簡の輕妙洒脫にして、しかも眞情溢るるところは天下一品、たれ人の追隨をも許さぬ。いま牧水の全作品を網羅して餘すところなき本全集を手にす＊＊る者は、必らずや日本語を語る國民の一人として生れたことを感謝するであらう。牧水はただ單に傑れたる藝術家であつたのみならず、稀に見る高風の人格者であつた。本全集には到るところにその風格の豐かさが漂い輝いてをる。騷然たる現代に本全集を送り得ることは本社の欣快とするところである。

編輯顧問
北原白秋
平賀春郊
福永渙
佐藤緑葉
土岐善麿

裝幀
森田恒友

編輯・校訂
若山喜志子
大悟法利雄

全十二卷・一冊一圓五十錢

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二一番

牧水全集全十二卷總内容

第一卷　歌集（一）

海の聲	四七五首
獨り歌へる	五五二首
別離	一三〇首
路上	四八三首
死か藝術か	三八六首
計	二〇二六首

第二卷　歌集（二）

水上	五五六首
秋風の歌	三七七首
砂丘	一九七首
朝の歌	二七三首
白梅集	二二二首
さびしき樹木	二〇〇首
溪谷集	三〇四首
計	二一二九首

第三卷　歌集（三）

くろ土	九九九頁
山櫻の歌	七四〇首
黒松	一〇〇〇首
計	二七三九首

第四卷　紀行文

火山の麓　裾野より　林中の溫泉より　山より妻へ　野州行　御牧が原　山湯日記　春日の湯　鹽釜行　津輕野　松島村　板留より　板留溫泉　その後　北國紀行　南信紀行　浴泉記　旅日記　比叡山　山寺　旅の或る日　熊野奈智山　利根の奥へ　みなかみへ　利根より吾妻へ　吾妻川　吾妻の溪より六里ヶ原へ　山上湖へ　水郷めぐり　落葉松林の中の湯　信濃の晩秋　伊豆紀行　雪の天城越　溪より溪へ　二晩どまり　溪ばたの溫泉　上州草津　草津より澁へ　山腹の友が家　木曾路　富士裾野の三日　箱根と富士　湯ヶ島より　或る島の半日　野なかの瀧　白骨溫泉　通蔓草の實　山路　或る旅と繪葉書　杜鵑を聽きに　追憶と眼前の風景　大野原の夏草　みなかみ紀行　金精峠より野州地へ

第五卷　紀行文・小說

（紀行文）鳳來寺紀行　旅信一束　木枯紀行　身延七面山紀行　こんどの旅　信濃の春　半折行脚記　九州めぐりの追憶　梅雨紀行　北海道行脚日記　北海道雜觀　朝鮮紀行葉書日記　朝鮮紀行　岬の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

若葉と雨
（小說）古い村　一家　蝙蝠傘　裾野　若き日　燈臺守　麥の秋　或る死んだ男　老人（其他）

第六卷　隨筆・小品

林間の燒肉　鹿　雪と淋しき人々　故鄕より　耳川と美々津　山の戀死人　空想者の手紙　曇り日の座談　椿　河豚　寄める岬　鷹　砂丘の薔薇　浪と蛸とヂンの酒　岬の端　秋風題　浦賀港　廻り網　白雪の話　旅から歸つて　物置の二階　屋根の草　立秋雜記　夏の花　夏の鳥　ダリヤの花　私と酒　お祖師様詣り　或る歌の友に寄する手紙　春の一日　線路のそば　元旦記　酒と小鳥　おもひ出の記　秋草の原　或る日曜の朝　櫻咲くころ　溪のながれ木　溪をおもふ　秋草の原　秋草の小包　子供の入學　香貫山　村住居の秋　土を愛する村　發動機船の音　雪のおもひで　入江の奧　春二三日　或る日の晝餐　桃の實　虻と蠅と蟬と　なまけ者と雨　溫泉宿の庭　秋風の音　若葉の頃と旅　旅と繪葉書　夏のよろこび　夏の言葉　四邊の山より富士を仰ぐ記　梅の花櫻の花　若葉の山に啼く鳥　自己を感ずる時　酒の讚と苦笑　歌と宗教　野蒜の花　貧乏首尾なし　雲の峰　廿三夜　海邊八月　地震日記　草鞋の話旅の話　東京の郊外を思ふ　靑年僧と叡山の老爺　伊豆西海岸の湯　故鄕の正月　火山をめぐる溫泉　自然の息自然の聲　駿河灣一帶の風光　其他。

第七卷　隨筆・長詩・童謠

（隨筆）姉への手紙　鳥三題　夏を愛する言葉　秋草と蟲の音　木の花　花二三　藤の花　秋立つころ　火を焚く　家のめぐり　信濃の高原　たべものの木　鵜と正覺坊　沼津千本松原　酒と歌　金比羅參り　夢　湯槽の朝　庭さきの森の春　旅と地圖　千本松原の春　河口　鮎釣に過した夏休み　流るる水　其他。
（長詩）有明の月もなし　我が椿の少女に與ふる歌　葉書に　雨三題　冷たさよわが身を包め　釣　空想と願望　夏の寂寥　枯野の旅　冬の朝　繪具　松の雫
（童謠）おやつ時　さアさア學校へいそぎませう　涙ぶくろ　雪よこんこ　親鳶子鳶　殘雪　春の濱べ　たろさんの足袋　魚のとぶ海　蛙の親子　ねむりの神様　向うの磯に　水菓子屋の秋　お〻寒小寒　栗のいが　赤ちやんの夢　落栗　野燒山燒　小舟　山の向う　雪よさら〱　ゐねむり　天の河　夏野とほれば　子守唄　寒鷄　春と鳥　お晝の汽車　夢になつたりや　お天氣　めだかときやうだい　蠶の口と手　蛙　かうもり　犬の尻尾　晴れた朝　道ばたの鷄　梅の木　親鳥子鳥　百姓とかがし　足のない鳥　ちんちくりん　ひとりあそび　果物　かくれんぼ　たんぽぽ　雲雀　櫻貝盛り　櫻散る散る　富士の笠　百舌鳥が一羽　冬の畑　雛雀　ひたきの鳥　富士の初雪　紋櫻つり　梅の花のお土產　まきこさんのお乳　浮坊主　山で拾うた胡桃の實　泣蟲毛蟲　おもだかの花と蛙　けらのねぼけ　蜂にさされて　八兵衞と兎　田舍に來ぬか　蟬とり　郭公　雁が來た　汽車　梅と椿　どの木にとまつた　左様なら海よ　大根車　秋のとんぼ　雪よ來い來い　ちひさな鶯　春の雨　春の日向　ダリヤ　夏のけしき　はだか　蟻　よちよち歩みの良雄さん　栗の皮むき　青い瓜　繪馬を見ながら　椿の花柘榴の花
（民謠）舟唄三題　宮崎高等農林學校々歌　其他。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第一回配本出來　第三巻歌集

◇堂々六百八十頁！

第八巻　歌論歌話

牧水歌話　和歌講話　批評と添削　短歌作法（以上單行書）　所謂スバル派の歌を評す　閑話　二月の歌　最近歌壇の印象　石川啄木君の歌　我が見たる最近歌壇　土岐哀果集の印象　自歌自釋　和歌合評　互評會記事より　いろいろの人の歌　選者の言葉　歌話一題　合評を讀む　批評と添削　質疑應答

第九巻　雜篇

初期の作品　短歌補遺　創作社便　歌集序文　石川啄木の臨終　外雜文數十篇。

第十巻　書簡（夫人喜志子宛）

第十一巻　書簡

第十二巻　書簡・日記（明治卅三年、卅六年、卅七年、四十三年、大正十一年、十四年、昭和二年、三年）年譜

締切8月31日限

豫約募集規定

□體裁　本文四六判歌集（五號）散文（九ポイント）書簡（八ポイント二段組）、一册紙數平均約六百頁、装幀高雅無比。

□頒布方法　全十二巻　豫約者にのみ頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ御申込下さい。

□刊行期日　昭和四年八月第一回を刊行し爾後毎月一册づゝを刊行し昭和五年七月を以て完結す。

□申込方法　先づ御申込みの際申込金として金壹圓五拾錢を御拂込み下さい。これは最後の月の會費にあてるのでありますから、最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。尙申込金は中途御解約の方へは御拂戻し致しません。（前金一時拂の方は申込金を要しません。）

□會費　（一）毎月拂壹册に付、壹圓五拾錢、（二）一時拂（全十二巻）十七圓。

□送本料　會費の外に送本料を申受けます。壹册に付十四錢。尙書留送付を希望せらるゝ向は別に書留料十錢を御増し下さい。東京市内六錢。書留六錢増。

□拂込方法　振替貯金又は爲替でその月の一日迄に着金するよう御拂込み下さい。但郵便切手代用は一割増に願ひます。

□御注意　特に遠隔の地に限り書店に申込まれたる方はその書店から運賃實費を御請求する事がありませうから宜しく願ひます。

◇全十八卷・一冊壹圓・一時拂拾七圓

子規全集

子規の全人格を仰げ

芭蕉以來の俳聖、萬葉以降の歌聖、明治文壇の先驅者正岡子規の偉業は、實に日本文學史上燦として不滅の光輝を放つ。然り子規の藝術は正しく明治文壇に於ける一大革命であり、燦然たる大正の文藝を育んだ搖籃であつた。文豪夏目漱石の藝術も亦子規の閫閾より生れ、現代の俳句及び短歌にしてその源泉を子規に發せざるはない。明治文壇の空に輝く星辰は其數固より少くないが、併し巨大にして强力なるもの、子規を措いて何人があらうか。子規は斯く明治文壇の宗師たると共に、その人品極めて清節高風、强烈なる魅力を有つた人格者であつた。されば子規の創作の何れにも些の塵影なく些の虛飾なく些の技巧なく赤裸の子規居士そのものの現はれてゐないのはない。『子規全集』十八卷は、日本文學不朽の光輝であると共に、一代の覺者が人格の標章である。今や大衆の熾烈なる要求によつて、我社に於て普及版の刊行を見るに當り、われ等は眞に無上の歡喜を覺ゆ。偏に大衆の支持に俟つ。

子規の藝術を仰げ

1 俳句全集（第一卷）
2 俳句全集（第二卷）
3 俳句全集（第三卷）
4 俳論及俳話（上卷）
5 俳論及俳話（下卷）
6 歌論歌話及評論
7 和歌、新體詩、漢詩
8 隨筆（上卷）
9 隨筆（下卷）
10 小說、紀行、小品
11 少年時代創作篇（上卷）
12 少年時代創作篇（下卷）
13 編著（上卷）
14 編著（下卷）
15 書簡（上卷）
16 書簡（中卷）
17 書簡（下卷）
18 未發表作品及年譜・藏書目錄

第二回配本（八月上旬）第九卷 隨筆篇（下卷）

第一回配本濟 第八卷 隨筆篇（上卷） 仰臥漫錄 病牀六尺 松蘿玉液 墨汁一滴

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

芭蕉・人麿・子規優劣論

いま茲に俳聖芭蕉、歌聖人麿及子規の優劣論に對し諸大家の意見を玆に掲げる。與謝野氏は讀賣紙上にて、その他の諸氏は「日本及日本人」にて論ぜられしものを抄掲す。はなはだ趣味深きものである。

與謝野寛氏　子規の業績は芭蕉人麿と對抗する。子規は歌聖にして俳聖である。

橋田東聲氏　明治文學に「眞」の生命を吹き込んだ貢献に於て子規の名は竟に不朽である。

永田青嵐氏（前東京市長）　子規の態度は恰かも芭蕉が其角嵐雪其他の面々に其特徴を發揮せしめて統率して行つたと同じ感じがする。

宮本醫學博士　子規は偉い人間には相違ない、しかし御母堂御令妹の彼に對する奉仕と愛も偉い。しかし彼子規の生活態度は却々見上げたものである。

吉村冬彥博士　子規は世の中をうまく渡つて行く藝術家や學者に對して反感を抱く……………。

下村爲山氏　病中の略畫を見てもその天分の豐かさに愕く。

赤木格堂氏　其玲瓏たる人格に魅せられ又先生の透徹せる社會觀に敬服し一時は學課を休んで先生の枕邊に行かぬと心に空虚を覺えた。

佐藤紅綠氏　漱石なぞも先生に劣らぬほど讀んだ人だ。だが漱石は狹かつた。先生は生れながらの度量である、洋々大海の如しといふべきものだ。

寒川鼠骨氏　俳句の三聖として世間では芭蕉、蕪村、子規と並べて來た、併し私として見れば蕪村は同列に置かるべきものでないと思ふ。芭蕉と子規と並べることは辛抱出來ないでもない、覺者たる上に於て二人は同一軌路を歩んだ人である。芭蕉は狹く深く、子規は廣く强くと言ふ可きであらう。

古島一雄氏　正岡の生命がけの熱心さと眞劍さに打たれた。

中村樂天氏　子規の逸話は我々は高僧のそれの如く聞いた。

子規の評論は嚴正無比であつた、友人でも先輩でも少しも遠慮せなかつた、公人として志を枉げるは女郎に等しいと言つた。彼は貫之、景樹、定家等の歌人を何等價値なきものだとこき下ろしていた。とにかく歌壇、文壇、俳壇に業績をのこしたことに於ては日本での第一人者である。

子規の四友　子規は自分の門弟とも見るべき漱石を畏友と稱していた。そして日本海役の秋山將軍を剛友と言ひ、菊池謙二郎を嚴友と言ひ、勝田主計を郷友といつていた。子規はフランクリン、日蓮が好きであり、實朝の人物とその短歌を推賞していた。次ぎに橘曙覽、田安宗武、平賀元義の和歌も推賞していた。子規は文壇の人格者として當時誰でも一目をおいていた。そして彼に蔭口をきく人はなかつたそうだ。

現代日本文學全集

紀行隨筆集

（附）春、嵐（島崎藤村）

（五百六十頁の大冊）

（紀行隨筆集內容）

大和田建樹 大和めぐり　千里の春
落合直文 七株松　恩愛刃　弦月旗
大町桂月 迎妻紀行　かた袖…須磨の一夜
鹽井雨江 ゆく水　笛の音…
武島羽衣 金明水　霧分衣　龍華寺の富士
日和つゞき　教へ子　歌御會參列記　その他
馬場孤蝶 閑時想　湖畔の秋　古き東京を思ひ出て　旅客より見たる大阪　煙霞になづみて　虛と實
平田禿木 薄命記　蟬羽子を弔ふ　三日風流　うすむらさき　スミルナの花　ル・サントオル
戸川秋骨 精進行　別れ　文鳥　ミネルヴアへ

遲塚麗水 不二の高根　成都道中記
志賀矧川 日本風景論緒論　日本には浸蝕激烈なる事　日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す
柳田國男 遊海島記　木曾より五箇山へ　勢至堂より白河へ　熊野路の記　丹波市記
小島烏水 不二山に登る記　峽谷の白百合　天龍川　ヨセミテ谷と上高地　その他
吉江孤雁 御獄山の兩面　霧の旅　北國の旅　海洋の旅
河東碧梧桐 雪線踏破七日記程
阪本四方太 夢の如し
寒川鼠骨 進水式　犬と余　美哉山林
篠原溫亭 波の音　其妻のピヤノ　彼女と其周圍

八月上旬配本

東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二
改造社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



井上準之助氏

正金銀行頭取の時代、時は寺内内閣對支西原借款事件といふのがある。時の藏相、前文相勝田主計が、井上に正金からも金を出す樣持ちかけたが、明敏な彼は、其の失敗を先見して應といはぬ。いふ事を肯かぬなら馘ると脅せば、『政府の役人とちがつて、こちらには株主總會で決めた任期がありますからネ』と空うそぶいて頑張つてゐる。おかげで、臺銀や、鮮銀や興銀の樣な、不良貸出しのボロを出さなくて濟んだ。これ、彼をホメる者の第一に擧げる話。

所か彼日銀總裁時代に正金の梶原を强要して今はロンドンに亡命して社會學を研究し、相當以上に赤くなつてゐる茂木惣兵衞に一千萬圓といふ大金を貸出させ味噌をつけたのも彼の經歷である。之が惡口屋の擧げる第一の例である。彼を評する場合、ほめる者と、ケナす者と七三位の割合にいつて居やうか。

常に、自分は政治には赤の他人である。政黨は嫌ひだとふれまわつてゐる男が、政黨内閣の心臟部にすわるのもすわる者だが、据ゑる者も据ゑる者だといふ論は常識的である。私にいはせれば、頼まれれば越後から米つきにさへ來る。名譽ある大藏大臣になるのは當り前の話しである。ケチをつけるならば、大藏大臣候補者がウヨ〳〵してゐる、と稱するくせに、山本達雄出でず、若槻に勇なく、前科者の片岡再用に危險あり、ノンキナトウサン町田忠治では危なつかしくて安心が出來ない、といふ、民政黨の其幹に對して中すべし。井上は人間だ。人間には名譽心もあれば、彈力性もある。常平常の持論を裏切る位の事が出來なくて教師牧師以外の何の仕事が出來るか。大いに食言すべし、これでこそ政治家としての價値があるといふもの。

とまれ、かくまれ、濱口内閣は、唯一の使命を財界の整理緊縮にをく。金解禁即行の主張の手形が振り出されてゐる。等々、この役目を果すべく、井上準之助を雇入れたのは、憲政常道にはちと反するかも知れないが、常道を屁とも思はぬ人には蚤程にも感じない。由來、憲政の常道なんかは子供欺しの大僞者樣だから構はない。

組閣三日にして政府の發表した井上案を基準とする財政大緊縮の具體案は何といつても勇敢だ。金解禁への第一準備としては誠に尤もな處置で、政黨屋の黨勢擴張の實際運動にそはない新規事業見合せ等を勇敢に主張するなどは、矢張り屁兵でなくては出來ない。濱口もよく容れたと感心する。

黨人は然し決して消極緊縮政策を喜ばぬ。鐵道の繰延をやられては

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

困る。港灣修築をやめては選擧に困る。新規事業一切中止と來ては、選擧區への説明に困る。個々の代議士は、國家よりも地方が生命である。井上頑張るか、代議士彼を征服するか。兎も角井上は民政黨員でないから問題だ。

それは、先きの問題。井上の人間を語らう。二十九年大學卒業。時の日銀總裁今民政黨顧問山本達雄と同鄕關係で日銀に入る。月給三十五圓。一年にして四十五圓。現總裁土方久徵と同期の行員。……やがてロンドンに派せらる。桂太郎、研究會操縦の必要上、其のリーダア三島彌太郎を正金銀行の頭取となす。三島素人なるを以て女房役を必要とす。井上乃ち副頭取となる、三島日銀總裁に轉じ、井上正金頭取となり、次で三島の後をうけ日銀總裁となる。年俸一萬圓。半期賞與三十萬圓。山本地震内閣に藏相となり三ヶ月。日本に初めてモラトリウムを施行した人。田中内閣成る。先輩高橋是清前首相の肩書を顧みるなく、藏相として入閣、臺銀救濟其他財界救濟に大童なるの時、市來乙彦の盆倉を日銀より追ひ懇請して井上を再び日銀に入れる。若槻内閣が、二億圓の臺銀救濟案で、樞密院と喧嘩別れして野たれ死にしたる後、井上案の五億圓が天下に通用す。井上のケチヅケられる所以。

彼は立廻りが早い。ソツがない。西原借款にたてをついたといへば勇敢果斷の樣だが、若槻内閣で藏相片岡失言博士の最高顧問格であり乍ら、彼が臺灣銀行の破綻をいうか〱と議會でしやべり、それからそれへと休業銀行續出するに及んで、井上は九[illegible]とにげを張り片岡の片腕にもなつてくれなかつた。かくの如くして彼は封建時代の馬鹿らしい單純さを有たない。隨所隨應變轉する彈力性をもつ。濱口は、男性的で、單一玉碎主義で行くと稱して居る。尤も田中内閣も組閣當初そんな宣言をした。井上が果して最後迄、濱口と協同戰線に立ち得るか？ 果して濱口は、爆彈として井上を飼いれた結果にならぬであらうか？ こゝが濱口内閣への疑問である。

井上は英國流の紳士を以て自任する。品行は勿論いゝ。先づゴルフをやる。本をよむ。大日本青年會の團長である。人間がガツチリしてゐる。隙がない。正金、日銀に勢力をのばすべく、嫁の世話もすれば、貧乏の始末もつけてやる。それを擴大して、和田豐治のなき後は、澁澤第二世を以て自他共に許し、財界の世話人をやる。何でも六かしい事は井上にもちこんで始末して貰ふ。ボロ銀行の合併、東洋汽船の郵船への併合、會社の創立、等々々。

政黨内閣の心臟部たる大藏大臣となり、やめたら又『僕は政治の門外漢でね』とばかりに財界世話業に逆もどりする積りであるとすれば、餘りに兩股をかけすぎやう。尤も、桂太郎が正金へ入れ、原敬が日銀に入れ、政治的敵同志の山本達雄、高橋是清の兩方に可愛がられた兩方へ義理がある人だから、その邊の所はうまく片づけるであらう。ボロ銀行のボロかくしに頼まれた時の手腕で自分のボロ位かくせぬわけはない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

松田源治



松田源治氏

放浪兒

床次が、憲政會に合併して民政黨を作つた時の紀念像松田源治、松田が、床次と同樣の放浪性を持つて、再び民政黨から旅立ちをしてゐたら、大臣にはなれなかつた。床次が脫黨して、後から舊本黨系の糾合を策した時に敢然として大義名文の旗をふり理論鬪爭を開始したのは松田である。殘留して、矢張り大臣に有りついた小橋一太の如きは、理論よりも便宜主義、大臣慾打算であつたが、松田は、あの厚い脣に、蟹の樣な泡をふいて、脫黨の非論理的なる所以を說いた。此の男には、小橋の樣な智慧も策もないかわりに、言ふ事に裏も表もない。そこが値打で、濱口御大に信用され、德とされ、利權者といはれる拓務へも、小橋より松田の方が安全とされた原因だと、消息通はいふ。

松田なら利權はやるまい。根が政友會育ちで、利權屋の交際は多いが、未だに私用自動車一臺も有せず、折角建てた青山の文化住宅を興銀か勸銀かへ擔保にぶちこむ位だから、利權に見はなされた樣な男であらう。此點小泉と同樣、買つてやつてよからう。それとも一つ、所謂野人である點が、小泉とたつた二人此政黨內閣の異彩として、官僚色稀薄劑になつてゐる。古い日本大學の出身、判檢事辯護士の試驗をとり、一時裁判所の小役人をしたことはあるが、それも官僚の色つく程でなく、辯護士、代議士としての生活が本筋であつた。原內閣の時、原が松田を內務省の勅任參事官にしやうといふと、蟹の樣に泡をふいて政黨人の本分を論じ、黨人が小役人になるのは墮落である、と結論して頭を縱にふらなかつた。それを、原が逆手でなだめ『君達は役人の經驗がないから大臣になつた時に下僚の事務が分らなくて困るぞ、吾輩などは役人の經驗があるから少しも困らない』とやると、彼、ポンと膝を叩いて『大臣學修業とあらば小役人でも何でも勤めます』と欣然內務省へのりこんで勉强をはじめた。稚氣、無邪氣、單純、理論鬪爭、そして自稱西園寺の親友、かるが故に、彼れは人から可愛がられる、られぬ迄も決して惡まれない。かるが故に、たとへ官舍一つない貧乏省伴食といへども、新役拓務大臣となつたわけである。沒理論の放浪兒先輩床次が七年も冷飯を食ひつゞけ、遂に道樂息子、故鄕に歸るの時、彼は、舊本黨系を代表して、小橋一太と二人大臣になつたのである、單純は勝つ。世の中はせゝこましくなつたが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でも小利巧な奴より單純で押して行く方が勝つ。其の見本が松田君である。



小橋一太氏

新内閣の中で、小橋一太は、同じく舊本黨系を代表してゐるが、政治家としての輪廓は松田よりも大きく廣い。原内閣の時分、床次内相の下に小橋が次官、松田が勅參であつた。二人は、今にして、當時の反對黨の下に並んで大臣になつた。小橋は、安達謙藏と共に熊本である。憲本合同以前は、しのぎを削る政敵、それが手を握つて行ける所に政治家の彈力性がある。しかし、熊本では、小橋の方が家柄もよく、市内の出であり、安達の方は市外の庄屋の伜であり勢力も並立してゐたのに、今の位置は、事實上安達内閣で小橋は文部の伴食、不平もあらう。



俵孫一

俵孫一の大臣は、同郷島根縣先輩若槻禮次郎の推挽あり、一方濱口とは二十八年東大卒業の同級生である關係から、同郷、同窓、同情の三條件揃つての結果である。たゞ夫れだけのこと、取り立てゝ記述する程の特異性も面白味も持つてゐない。無難な醇吏。濱口内閣は、玉砕主義で行くだらう。それは噛りつき田中内閣よりも日本人の趣味に合ふだらう。濱口は、根は官僚でも、男性的な線の太さを持つ。兎にも角にも頼母しさうな面構へをしてゐる。大丈夫だらうといふ印象を與へる。鎌倉への週末旅行にマルクスを讀まうといふ勉強心が、時代を解釋する上に、よき鹽となるならば、誰よりも先づ彼の爲めに幸だ。

（七月九日）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

狂院センスの一瞥

齋藤玉男

「當直明けに一歩陰慘なコンクリート塀の外の世界へ出ると、慥かに明るくて空氣の比重が輕く感ずるネ」と、精神病院の宿直醫である友は言ふ。「併し外の世界へ出ると同時に或る警戒本能が活らき出して、院内で味ふ安心さが失はれることも慥かだネ」とも付加へる。

心の武裝。さうした現代生活を特色づける緊張味は院内にはありやうがない。そこは生き馬の眼を拔かれ了つた連中のクラブであるから。そこでは又階級意識と言つたやうなものも完全に撤廢されて、張りのない灰色の無差別だけが支配する。併し狂院には狂院相當のセンスは活らく。それは外の世界に思の外にナンセンスが多く轉がつて居る割合程には及ばないとしても。

愚直が惡と同義でないならば、狂院の住民は慥かに善人である。勿論彼等の或者は惡人として扱はれたい野望に燃えても居るが、彼等が惡人らしく振舞へば振舞ふ程、そこからもこゝからも善人らしい破綻が覗き出すのは可愛らしい。彼等の惡態には相手の微笑を誘ふ半間さがあり、彼等の兇暴は言はゞ豫告された兇暴である。精神病醫として彼等に不足を感ずる點がありとすれば、それは機智とユーモアの完全な缺乏である。併しこの二つはこの民族には恐らく狂院以外にも缺けて居ると言へるには言へる。特に彼等のみを責むべきではなからう。

ところで此狂院センスは徹頭徹尾外の世界から指導され、啓發される。就中外の世界のナンセンスから誘導される。其筋道を見守ることは彼等の爲よりも寧ろナンセンシアルな所謂非狂人の爲に或る教訓にならぬでもない。

× × ×

議會の亂鬪劇が始まる。政友席も民政席も一齊に殺氣立つて、守衛が右往左往に馳せ違ふ。見渡すところ泰然たるのは我安部先生位のものである。イヤ其安部先生すらが恐らくは内面的の亂鬪に捉はれずには濟まぬらしい。尤もらしい理由はどうあるにしても一寸した議場の空氣の動搖がかうしたナンセンスに導いて、それが議會政治否認の材料となつたりする一面には、首相官邸への面會強制となつたり直訴の騒擾に切ッかけを與へたりする。世の識者諸君はどうか諸君の一擧一動が狂院の中の空想の發育にまで影響のあることを考慮して置きたい。

實際世相の進轉なしには狂院の精神生活は萎縮して仕舞ふ外はない通りに、外の世界の喊出事は片端から狂者のセンスに何等かのイ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ムペータスを與へずには置かぬ。彼等は自分の秘密が現に淺草で映寫されて居ると訴へたり、自分への逮捕命令がラヂオで放送されたから天涯地角に隱れ場がなくなつたと悲んだりする。是等は勿論二十年前にはなかつた症狀である。いづれ自分と來朝途中の某國皇子との愛の場面がトーキーになつたなぞの最新式の妄想もはぐくまれることであらう。其癖本人は五十近い寡婦であつたりする。

狂院センスが外の世界へ働らき掛ける例は、舊くは相馬事件などがある。多くの場合彼等の感情が餘りに一圖で、表現がかなりにもどかしい事情が、外部の人の同情を集中させて一肌脱がせる迄に燃焼させもするが、當の本人は案外差のべられた救の手に無關心であり勝ちである。併し一面には誇大妄想者の妄想の展開が、一九一六年十一月十一日午前十一時まで全世界を被征服の恐怖におののかせた事例も現前にないではない。

一般に狂院センスが外界の事象に相當敏感である割合に、外の世界は物狂ひの交錯には之を人間生活の特殊相として眺め入るまでの洞察が到つて居ないことは餘儀ない次第である。藝術に於ても同じ事が言はれる。

× × × ×

謠曲の「隅田川」や所作事の「保名狂亂」や「お夏狂亂」の取廻はしには或程度便りないたどたどしさのリズムが織込まれて居るが、詞の運びや正氣と狂態との轉換なぞには不自然で態とらしい箇所が目立つ。勿論狂亂物は本來狂者を如實に描寫する意圖ではなく、狂者を假りてそこに一つの藝術境を展開させる筋道ではあるが、それにしても同じくは自然に依存した至境の展開されるのが技巧の上乘なものであらう。一體に一頓に狂氣になる仕草やフッと正氣に戻る取廻しに今一息と思はれる所があるやうに見える。

「屋上の狂人」は早發性癡呆者の行動を相當如實に描寫してある。「句樂の死」には輕快した狂者の心許なさが出ては居るものの、時々正氣になり過ぎるのが目立つ。谷崎氏の作品は經驗に基いて居るだけに、突込んだ敍述にも危な氣がない點は一等である「罪と罰」のラスコルニコフの酒場での出來事を一々我身に當て付けられるやうに感ずる工合や、後から後からと自責が湧く筋道やは、作者自身の癲癇病と思合せると凄い程度に迫るものがある。

ウファ製作の「カリガリ博士」は表現派式のセットが先づ效果を擧げて居る。夢中遊行者が乙女の美に迷つて殺意を飜すあたりは矢張映畫だナと微笑させる。結局カリガリが現實の院長に融け込んで仕舞ふ大切りも夢幻的でよい。其他の狂亂映畫は多くは狂院センスに「甘へものだ」と一概に片付けられる口である。

× × × ×

いや卒直に白狀すれば精神科の專門家が誰よりも狂院センスに輕蔑されてよい資格があるのかも知れぬ。長いこと專門の飯を食ふ中には、友人や其家族から時あつてか狂者が出來上る場面に打付かる。こんな場合正直の所「この人は事によると狂ふのではないか」と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

言つた豫感を抱いたことは殆どない。狂つて仕舞つてから「さう言へば」と思當る節はあるにしても、それは素人でも思當る程の思當り方に外ならない。さう言へば今のところ所謂專門智識は、狂つた者に云々の行動があつて云々の結果になるとまでは見當が付くが、云々の行動がどうして現はれるか、之を現はれさせずに濟ます方法はないかの大事な點になると、大タヂタヂの姿である。

此點内に省みて少からず心細くもあり外に對して大いに面伏せな次第でもあるが、併し假りに銀行家に貸付先きの破產狀態が一々豫知出來たら、此上もなく便利ながらに扨て心の安靜は一寸も得られない結果になるであらう。この邊の兼合は聰明な狂院センスに反問して見たい點でもある。

× × ×

白狀序でに、「狂人は心境の大凡三分五厘が狂つて殘りが健康同然であり、非狂人は心境の約三分三厘が錯亂同樣であり得て殘りが健康である」と言つたら言過ぎであらうか。場合によつては狂と非狂との相違は之よりも些細であるとも言へる。たゞ非狂人にあつては健康な部分が略々完全に錯亂同樣な部分を支配するが、狂人になると其三分五厘が殘りの健康同然に通用出來る部分を支配するだけの相違はある。

この「だけの相違」の「だけ」は併し大きな影を社會に投げる。非狂人では此「だけ」あるが爲に彼が有つあらゆる弱點惡德に拘らず兎に角環境に適應して、際どい瀨戸をするりするりと潛ぎ抜ける。社會善に適應する通り社會惡にも適應する。狂人に至つては「だけ」を缺く悲しさに到底善人以外ではあり得ない事情から、何よりも先に社會惡に適應し了せない所に最初の破綻を曝したがる。

かくして彼等は適應能を缺くが故に、從つて社會惡を摺り抜け得ないが故に、殺傷放火其他の反社會的行動に出でもする。彼等が反社會的であることは個々彼等が相當まで社會に關心を有つ證でもある。狂人個々は想像以上に社會に依賴し指導されるか、さて彼等同志の間には殆ど何等の交渉がないのを常とする。此意味で狂人社會と呼ぶことは非常無意義である。

數が物を言ふ現代にあつて非社會的孤立の存在を保つと言ふことは狂者にとつて宿命的な弱味であると言へる。彼等の存在は譬へば夏場の安氷屋のガラス暖簾のやうなものである。縱には社會に依賴するが横に同志の間には連絡がない。そしてしかく安價で脆い存在でもある。假りに彼等に横の連絡があるとしたら、淨化市會に少くとも二名の代表者を送つて、狂權確立の提議に花を咲かせる位は朝飯前であつたらうに——。併し個々獨自の世外界に立籠りつゝ外界のナンセンスに呼應して互に聊かも相干さない所に狂院センスの誇があるとすれば、是又無邪氣な存在でないこともない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

穂積、宮崎兩博士遺著の新刊

福田徳三

前號掲載の新刊讀餘録様のものを時々寄稿せよとの改造編者の需に任せ、以下二三回續筆して見ようと思ふ。しかし編者の都合もあることゆへ、必ずしも逐月掲載を乞ふわけには行くまい。よつて此處は近く刊行せられた穂積、宮崎兩博士の遺著だけに限り、而して少し仔細に卑見を開陳して見ることにした。私の坐右には未だ數十册の新刊書が、或は全く或は半ば讀まれたまゝに擱かれてある。其内私がついて卑見を述べて見たいと思ふものは、十數種に上るのであるが、果して其全部を掲出し得るか否か、私は其れを知らない。しかし、私の興味にして失せ去らず、改造の誌面これを許す限りは、寄稿しようと思ふ。讀者の諒察を乞ひ置く次第である。

(一)法律進化論　第三册
神權説と民約説
祭祀及禮と法律
慣習と法律
穂積陳重遺著
穂積重遠編
(以上　岩波書店發行)

(二)宮崎先生法制史論集
宮崎道三郎遺著
中田薫編
(同上發行)

富井博士の民法原論を迎へて後幾干ならず、我々は又た我法學界の二大長老の遺著の新刊に接するの幸を有つ。穂積博士の遺稿を編輯續刊する法律進化論叢第三册の『慣習と法律』と、宮崎博士生前の諸論文を編成した『宮崎先生法制史論集』の二書これである。私はこれら三書を手にして、日本法學界の多幸を衷心から慶祝せざるを得ぬ。これらは、ひとり日本法學のモヌメンテたるに止らない、世界の學問の立場から見ても、貴重なる貢獻である。之れに反し、私は我經濟學の如何にも薄倖なることを恨まざるを得ない。若しも、法學三長老中の一人たりとも節を屈して我經濟學に降り來りてありしならば、我學の面目は今日とは著しく異つたものであつたに相違ない。私は天の配劑に對して不平なきを得ない。

さて穂積博士の『慣習と法律』は、『法律進化論』の大系中、第一部『法原論』の『原質論』中『習俗規範篇』を構成すべきもので其れは『德義規範篇』所屬の『禮と法律』につゞくべきものだらうと思ふとは、遺稿の編者重遠博士の記すところである。依つて、私は、此機會において、著者の死後其遺稿中から今日までに出版せられた『法律進化論第三册』を中心とし、兼て『神權説と民約説』『祭祀及禮と法律』の二書と併せ考へて、若干の卑見を開陳して見たいと思ふ。其は、單純な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る禮讃推賞文は別として內容について商量した紹介又は批評を今日まで見たことのないは、著者の敬畏す可き刻苦勵精に對して酬ゆる所以でないことを兼てから痛感しつゝあつた爲でもある。元より私如き專門以外の者の言ふところは一顧の値だもあるまい。唯私の此文が數千を以て算する博士門下の專門學者を刺戟して、更らに眞に學問的な批評の筆を試みる人出るに至らんことを希ふの微意に外ならない。

「法律進化論」は、著者畢生の研究を集大成して、其の所謂法律動學に關する抱負を披瀝せんとする規模廣汎の大著述である。其結構は、第一卷總論中に記すところによれば、實に左の如くあるべきものであつた。

第一部　法原論

法現象發生の狀態を論究す。これを更らに三部に分つ。

(一)原形論。法律は如何なる形態を以て發生するかを論究す。其目的は、法なる統制力は、如何なる形態に於て、始めて吾人の認識に入るかを明かにするにある。

(二)原質論。如何なる種類の統制力が法律の元質となるかを論究す。其目的は如何なる統制力が法規として現れるかを明かにするにある。

(三)原力論。法律なる統制力は如何にして發生するかを論究す。其目的は、法の元質たる統制力が如何なる過程によつて公權化するかを明かにするにある。

第二部　法勢論

法現象變遷の理法を論究す。これを更らに三部に分つ。

(一)發達論。法の內因的進化、即ち人種、民性、地勢、政體、宗教、德敎、輿論等の如き其法境中に自發內在する原因に基く法の進化を論ず。

(二)繼受論。法の外因的進化、即ち外民との觸接に起因する外法の模倣、採擇、及外國學說の立法裁判等に及す影響を論ず。

(三)統一論。法の世界的進化、即ち法は、文化の上進に隨て常に世界化せらるゝ傾向を有し、各國民は竟に自國特有法と世界共通法とに依つて支配せらるゝに至ることを論ず。

(以上法律進化論第一册總論八頁及び第三册緒言一―二頁による)

而して、著者は、生前第一、第二兩册を刊行した。其れは、原形論前篇と後篇とを含むものであつて、前篇は、第一編無形法（これを四章に分つ）後篇は第二編成形法（これを七章に分つ）をのせてある。著者はもと全六卷十二册を以て法律進化論の全部を論述する計畫であつた由であるが、右二册を刊行したときすでに、此計畫を完全に實現するの困難なるべきを豫想し、「今や齡既に古稀に達し老耄將に至らんとするに及んで全部六卷の計畫中、僅かに第一部の上卷二册公刊し得たる如き遲緩なる功程にては、生前に於て計畫の半ばを成すことは不可能かと思はれて」「故に已むを得ず爾餘の部分に付ては、其順序に拘はらず、案の成るに隨うて之を別册とし、各其體系中の所屬部を示して之を刊行し其一卷を成すを萬一に僥倖せんとするもの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である』（第一册序文三―四頁）といつて居る。されば、今私が玆に紹介せんとする諸篇は、著者若し世に在らば、更らに具さに推敲を加へられ、補訂せられた上で公刊せられたではあらうが、此のまゝでも、大體に於いては、著者の意圖を遺憾なく實現したるものなるを推察することが出來る。

卽ち法律進化論第三册は、第一部の（其二）原質論の前篇をのせてゐるものであつて、信仰規範、德義規範、習俗規範の三分類中其一分類に屬し、續いて『法律進化論叢』第一册として刊行せられた『神權説と民約説』は、（其三）の原力論の一部に屬するもの（編者序文六頁による）であり、『論叢』第二册の『祭祀及禮と法律』は、（其一）原質論中の一は第一分類「信仰規範篇」へ、他は、第一分類『德義規範篇』に屬するものである。更らに最新刊の『論叢』第三册は、同じ原質論の第三分類『習俗規範篇』に屬すべきものである。今便宜の爲めにこれを表示すれば、

法律進化論

第一部　法原論

（一）原形論。＝生前刊行の『法律進化論』
　第一、第二册

（二）原質論

（一）信仰規範篇
＝遺著『法律進化論』第三册並に『祭祀及禮と法律』中「祭祀と法律」

（二）德義規範篇
＝右同中『禮と法律』

（三）習俗規範篇
＝『慣習と法律』

（三）原力論
＝『神權説と民約説』

右の如くになるわけで、一部分づゝではあるが、第一部法原論に於いて著者が遺し置いたものは、重遠博士の執勞による『法律進化論』第三册と『法律進化論叢』の第一、二、三の三册とを以て、少くとも其輪廓だけは、我々の前に提示せられ得るに至つたものである。第二部の法勢論については、未だ何ものも刊行せられて　をらぬが、『祭祀及禮と法律』の卷頭に收められた『法律進化の話』は若干『發達論』に進入して居るのである。卽ち以上既刊のものだけについても、著者は唯計畫を立てただけに止まらず、生前其各部に亘つて、述作の事に着手しつゝあつたものであることが、明瞭に看取せられ得るのであつて、殆んど尋常人の企て及ばざる大規模の『法律進化論』六卷十二册は未完成ではあるが、單なる企てたるに止まらず、著者に於いては、其全體に亘つて商量し、推敲し、著述の底稿が出來上つてゐたものと言つて大過ないことと思ふ。此一事すでに驚歎に値する。他の學問の領域については姑く問はず、法政經濟社會諸學の範圍に於いて、此くも廣汎にして遠大な規模を立てゝ研究を始め其結果を筆に託して著作し置いた例は、我邦に於いては、多く其例を見ざることである。著者の最も私淑すると考へられるサー、ヘンリー、サムナー、メーンと雖も、此點に於いては、一籌を輸する。唯だ同じく著者が屢々引用するフレーザーの『黄金の枝』のみが、此

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れに匹敵する。我邦の學界中近接の範圍から、これに類するものを求むれば、恐らく村上專精博士の『佛教統一論』の一書が我々の知る限りに於いて存するのみである。又た其れとは著述の趣を著しく異にするものではあるが、德富猪一郎氏の『日本國民史』は、或は、此れと對立するものと目するを得るかも知れない。其以外には、精神科學の領域に於いては、私は同一程度の大規模のものあるを知らないのである。重遠博士が、亡大人のこの大なる業績を周到なる編纂の勞を積みて續々世に出すことは、孝道の極致を發露するものであるは勿論のこととして、其の學界に寄與することの大なるは、感謝に堪へざるところである。

『法律進化論』第三册は、信仰規範の三種(一)タブー(二)祖祭(三)トーテムの中、其一のタブーを取扱つたものであつて、附錄として別に『タブーと法律』なる一論文を收めてある。(其の前半部は本文の「レジユーメ」として、讀書を助ける、其の後半部四三三頁第六行以下は、本文の未だ及ばざるところに係るが故に、必ず併讀を要する。)本文は、緒論に續いて前論として第一章「タブー」の語義、第二章其本質、第三章其種類、第四章其成立第五章其分化の五章から成り、本論として、第一章「タブー」と法律、第二章タブーと主權、(觸接、近接、觀視、稱呼の四タブーに分つ)、第三章タブーと婚姻、第四章タブーと財産權、第五章タブーと刑法の五章から成つて居る。

右編次を見て感ずることは、此くの如き排列は、叙述の順序を定める必要の上からは、當を得て居るところたるには相違ないが、乍併タブーとの關係を法律、婚姻、財産權、刑法などと初めから分割したことは、分つ可からざるものを分つ所以であつて、其の爲めに、一方タブーの本質種類、成立分化を論じた前論は本論とは全く切離されたものとなつて仕舞ひ、彼處に說くところは此處に論ずるところによつて或は著しく修正せられ或は全く翻さるに至つて居りはせぬか。と云ふことこれである。タブーの本質は、單に漠然たるタブーとしてこれを見る可きでなく、法律婚姻、財産權、刑法等と其當初から本質的に密接に關係して居り、而してまた、其の關係現象其ものも、法律婚姻財産權刑法など〻初めから分割し得られるものでなく、原始社會に於ける人類の生存の必要と條件とは一の渾一體を爲して、タブーを成立せしめ、其れが現はれて法律となり婚姻制度、財産制度、刑法現象となるに至つたものであらうと思はれる。『法律進化論』の全篇を通じて、私は著者の『オルドヌングス・リーベ』の著しく強大なるに敬服すると共に、其の餘りに順序よく排列し餘りに細密に分割するによつて、却つて本體と其發達との眞相を曖昧ならしめる嫌の尠からざるを痛感せざるを得ぬ。此事は嘗て『隱居論』を論じたときにも認め置いたことであるが、著者の學風の長所茲にあると共に其短所も亦茲に存するのではないか。前裁陶治の至れり盡せることは、其論述をして極めて井然たる姿を呈せしめる。其

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れと同時に、研究對象の有機的脈絡を絶ち、前後の關係を沒却する虞なきにしもあらずと思はれるのである。

以下各章について簡單に述べて見よう。

總論中、私が最も注意に値すると思つた點は、著者が、化成法は原始的現象であり、創定法は文化的現象でありとし、國家の原始期に於いては、立法なる觀念未だ存せざりしのみならず社會の變動極めて少く人生萬事舊慣に據り歷世周襲して渝らざるを常としたから、法規は概ね化成法で、創定法に屬するものは、極めて稀であつたことを力說し、而して『獨り民族の移住は其生活の環象の變化の爲めに全然新たなる生活の需要を生じ、隨つて其文化の程級に比して新規範の創定を見ることが多い……イスラエル民族の出埃及及移住の如きは其最も顯著なる事例であつて、……畢竟此大豫言者(モーゼ)をして大立法者たらしめたものは、イスラエル民族の大移住である』(一四―一六頁)と主張することこれである。私は嘗て『日本經濟史論』に於いて、次ぎの如く主張したことがある。『私の見るところを以てすれば今日世界に於ける總ての植民人と同じく大和民族も亦今日住する所の土地を初めから領有したのでなく、故國を捨てゝ故國よりもより良き生存條件を得やうとして、活動の新天地を開拓しなければならない樣になつたのではないか。斯う云ふ事實は殊にブレンタノ及其他の學者(例へばアイガイル卿)の說くところで、外國に移住し來れる者を觀察すれば、其故國を去り全然異なれる條件の下に生活を營むの已むなきに至れる事實が人の全張力の喚起に與て大に力あることを證明して居る。而して此見解は、また大和民族が其勢力範圍を擴張するに至つた所以を斷するに當つて重きを爲す所である。』(經濟學全集第三集五八―五九頁)

著者は或はマルクスの唯物史觀論を考慮の中に於いてゐなかつたものであらうと思はれるが、移住による生產――從つて流通――諸事情の根本的變革が多くの新しい法律を作り出すことを力說する點に於いて、唯物史觀中の――私の見るところによれば――正しき部分を十分に認承してゐたものとも云ひ得るかと思ふ。『民族大移動』(フエルケル・ヴアンデルング)の事實を度外視しては、今日の歐羅巴の經濟的――而して法律的――文明はこれを理解することの出來ないことは、「エキソダス」を度外して、イスラエル文明を談じ能はざると同樣であり、又た更らに、歐洲よりの移住てふ事を無視しては、今日のアメリカ文明を知り能はざると同樣である。更らに著者は『昔は神でさへ慣習に縛られてゐた』とのポロックの言をあげて、英主暴君の大改革と稱するものも國法の全體に影響を及ぼす如き場合は極めて稀である事實を指摘し、要するに、原始的立法は旣存社會規範の公權化に依つて漸成し、文化的立法は、新生素因の規範化に依つて速成するもので、其差の起る所以は、原始社會は靜止若は漸動狀態にあり、文化期に於ける社會生

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

活は常に變動狀態に在るが爲めであるは勿論であるからと論じてゐる。然らば、此の靜止對變動狀態の起る所以が何に存するか、著者は其處に於いては說いておらぬが、生活需要の變化を以て明かに一の大なる要因と認めて居るのであるから、經濟事情の差異に少くとも一部の說明を求めようとするものであることは、これを察知し得るのである。經濟學者ならぬ著者が、更らに其の經濟事情を精査して、其處に生產事情の變化生產力の變化――而して、並びに流通事情の變化――を現出せしめなかつたのは無理ならぬことと言はねばなるまい。しかし、原始時代のみならず凡て一切の時代を通じて生產事情の大變化を將來す一の大出來事たる民族的大移住の重要性を明かに看取したことは、廣い意味、正しい意味にての唯物史觀の長所と默契するところありと言つても差支ないと思ふ。

著者は法の原質たる社會的規範を（一）民衆の超自然的信仰によつて形成せられる信仰規範（二）德義觀念によつて形成せられる德義規範（三）社會生活狀態より生じたる慣行によつて漸成せられる習俗規範の三つに分つ可きものとしてゐる。これは一應尤なる見解である。しかし、私を以て見れば、其れは、餘りに形式的な見方ではないかと思はれる。信仰、德義、習俗と分けて見ても、社會生活の規範の抑も因つて出づるところ、並びに其相互間の推移變遷を支配するところの大なる力は、此くの如き形式的分割の爲めに、其眞相を沒却しはしないか。著者は西洋の學者の多くが、タブー發生の原因を外物に對する不安狀態より生じたる恐怖（四四頁）に歸するの謬見を非難し、これ文明人の心理を以て原人を觀察するの誤に陷れるものなりとし、『泰西の學者が多くは、ポリネシア、オーストラリア、アフリカ、アメリカ等の土蠻の現狀を視て、恐怖をタブーの原因と爲すは、現時の野蠻人を原人なりとし、其社會は人類の原始狀態を示すものなりとする誤謬より生じたものである』（五二頁）と斷言してゐる。私は此斷案に全く服從する。其れと同時に、著者が、タブーを以つて、人類の『保全本能』より生じたもので、就中保全作用中最も重要なるものゝ一である『離隔』の作用を爲すことを其本質とすると主張するも、亦私の全く贊同するところである。乍去此說明は、問題の解釋を半途にして止めたものと見るべきではあるまいか。何となれば、離隔による保全作用が何故原始社會に於いて、左樣に重要なる要求の對象であつたかの問題は、これによつて說かれてゐないのであるから。何故、保全と云ふことが左樣に必要であり、而して、今日の社會に於けると異り殊に『離隔』てふ保全作用が左樣に重大な役目を演せねばならなかつたか。著者はこれを說いてゐないのである。

著者は『神、靈魂、惡魔等の超自然力の存在に關する觀念は、人類の智能が稍々發達した後に生ずるもの』（五一頁）となし、現時南洋を初め多くの土蠻が呪を恐れてタブーを

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嚴守するは此保全本能より生じたる忌避の習俗が第二期に入り、物に存する精靈又は物外に存する靈魂の祟を恐れて意識的に之を守るに至つたものとしてゐる。私も亦左樣に思ふ。しかし、其『第一期』を單に生物に普遍的な保全作用に歸し、其を以て、『人類間に此習俗の發生した第一原因を究』(四七頁)めたものとしてゐるは、說いて未だ盡さゞるものではあるまいか。言を換へて云へば、其れは『タブーの上流に溯つたものではあるが、未だ其源泉を究めたものでは無い』(四七頁)のではあるまいか。

私は決してマルクスの唯物史觀を其儘に奉ずるものではない。乍去、タブーの起源、其の本質の唯一つの問題だけについても、著者が今少しく、唯物史觀の含み居るところの眞理について商量することなかりしを、甚だ遺憾に思はざるを得ざるものである。著者は第四章タブーの成立の條に於いて、タブーは恰も法に慣習法、成文法あるが如く、或は慣習に因りて存し、或は設定に依りて生ずるもの(六三頁)なるを說き、君主、酋長、豫言者、僧侶、巫祀等が特種の事物に對して禁諱を創立することあるを論じ、これについて詳しく、宣言・標示・觸接の三種あることを叙述してゐるが、慣習に因るタブーについては、其條下に於いて、些も成立の體樣を論じてゐない。即ちこれだけについて判斷すると、著者は設立に因るタブーの方に重きを置いてゐるのである。而していふ『タブーを創立することを得る者は通常人民より或は半神なりとして崇敬せられ、或は神通力を有する者として信仰せられ又或は智勇超凡にして衆民より畏敬せらるゝ者等であつて……此くの如き精神的權威を有する者は、何人と雖も、タブーを設立し得べく、殊に高僧、豫言者の如きは、最も普通にタブーを設定して之を宗教上の戒律と爲すものである』(六三—四頁)又『通常人はタブーを創立する能力を有せざるを常とするも、時としては慣習に從ひて之を設定し、又は他人の創立したるタブーを或る事物に付て設定することを得・・例へば慣習に因つて生じ又は國王の創立したる方法に從ひ自己所有の椰子林へ注連繩を張るときは何人と雖も其林中に入ることを得ずとするが如きものである(六四頁)と。此一條は『共產宣言』を一度たりとも讀みたることある人には、恰かも彼の條の說明たるが如くに響くであらう。マルクス・及エンゲルスは、原始民及は野蠻民については、モルガンの研究以外餘り接する機會を有たなかつたし、また『共產宣言』の組み立ての上から其れに觸れる必要を多く感じなかつたものと見へて、其れに論及すること甚少いが、穗積博士のタブー成立論こそ彼等が殘し置いた遺漏をいとも有力に例證するものなのである。クノーの經濟史にまで趁り行く必要は玆には全く有しないと言ふも過言ではあるまい。

半神、神通力者、智勇超凡者、君主、酋長高僧、豫言者は、其の『アウスボイトング』を『保全』す可くタブーを設定する。其以外の所謂普通人には、其例に均霑してタブーを設

定するによりて『アウスボイター』となり得るのである。『保全』は人民一般の爲めにも行はれるが、『アウスボイター』の爲めにも亦有力有効に支持せられるのである。人民一般の保全とは、其の經濟上の必要、其生存上の必要——其れは單なる生物に普遍的なもののも含むに相違ないが、すでにタブーとなるときは、何れも社會的なものである——より來るもの、恐らく大部分、否、殆んど全部を占めて居るのではあるまいか。認められたるタブー設定者の爲めの保全も亦自然物生産物の獨占とアウスボイトングの便利の爲めにするものが、大なる部分を占めて居たのではあるまいか。 タブーとは『之を諱め』『之は禁ぜられたるものなり、『之れに遠かれ』とのアウスボイトング又は獨占意思を社會的に保全する謂であらう。恐怖は其保全を確保する一の方便であつて、決して發生原因でないことは、著者の力說するところの確說と見る可きであらう。

トーテムについては、既刊分には未だ所見はないが、私は其れが食料確保——食料濫用の防止、食料資源の擁護並に涵養——てふ經濟的必要が、主たる原因であり而して支持者であることを、拙著『流通經濟講話』第四、五の兩卷に於いて詳論して置いた。其れは主としてスペンサー及ギレン兩氏並にホウヰット氏のオーストリア土人についての記事について立論したのであるが、私はこれら三氏の研究は少くとも著者の用ゐたフレザー以下諸學者の研究と同樣に敬聽せらるべきものと信ずる。而して私は今著者のタブー研究に接して此の見解をタブーの成立と其支持に擴張するの可能性の大なることを認めざるを得ざるものである。

又た私は、我邦に於ける貨幣の起源は、祓除の習俗と密接な關係を有つものではないかとの說を久しい以前に公けにしたことがある。 我邦上古の『ツミ』『ケガレ』は、一面に於いて債務を意味する。『ツミ』『ケガレ』を祓ふ『ハラヒ』は、債務を償却する『ハラヒ』と同じものと見られたのではないか。『ツミ』を祓ふ『ハラヘツモノ』は、即ち借金を拂ふ『ハラヘツモノ』で、御幣は即ち貨幣であつたのではないか——『汝穢れたり』と云ふは、『我は汝をアウスボイテンする後』と云ふと同一事であつて、此の『穢れたり』を多く言ひ得る人は、亦た多くアウスボイテンし得る人である。『穢を祓へ』とは、『汝快くアウスボイテンされよ』と云ふと同一事である。 即ち穢を祓ふ可く財物を引渡す、其用具は、一方に祓具祓柱であり、他方に貨幣であつた——と云ふのが、私の見解であつて、未だ一の反對論をも構成論をも見出さないが、私は此說必ずしも一の獨斷論として斥けらるべきものとは思はないのである。（著者の詳論する『忌』を以て姓とする忌部氏は、我邦最初の徵稅總監大藏大臣であつた樣に考へられる。『イム』ことは、同時に『ハタル』ことであつたを推知し得ると思ふ）タブーと貨幣タブーと經濟的流通（殊に貢献、徵發的流通）との關係については、先人に研究のあるを未だ聞いて居らぬが、私は其れは他日有爲の學者によつて必ず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

厳守するは此保全本能より生じたる忌避の習俗が第二期に入り、物に存する精靈又は物外に存する靈魂の祟を恐れて意識的に之を守るに至つたものとしてゐる。私も亦左様に思ふ。しかし、其『第一期』を單に生物に普遍的な保全作用に歸し、其を以て、『人類間に此習俗の發生した第一原因を究』（四七頁）めたものとしてゐるは、說いて未だ盡さゞるものではあるまいか。言を換へて云へば、其れは『タブーの上流に溯つたものではあるが、未だ其源泉を究めたものでは無い』（四七頁）のではあるまいか。

私は決してマルクスの唯物史觀を其儘に奉ずるものではない。乍去、タブーの起源、其の本質の唯一つの問題だけについても、著者が今少しく、唯物史觀の含み居るところの眞理について商量することなかりしを、甚だ遺憾に思はざるを得ざるものである。著者は第四章タブーの成立の條に於いて、タブーは恰も法に慣習法、成文法あるが如く、或は慣習に因りて存し、或は設定に依りて生ずるもの（六三頁）なるを說き、君主、酋長、豫言者、僧侶、巫祀等が特種の事物に對して禁諱を創立することあるを論じ、これについて詳しく、宣言、標示、觸接の三種あることを敍述してゐるが、慣習に因るタブーについては、其條下に於いて、些も成立の體様を論じてゐない。即ちこれだけについて判斷すると、著者は設立に因るタブーの方に重きを置いてゐるのである。而していふ『タブーを創立することを得る者は通常人民より或は半神なりとして崇敬せられ、或は神通力を有する者として信仰せられ又或は智勇超凡にして衆民より畏敬せらるる者等であつて：：此くの如き精神的權威を有する者は、何人と雖も、タブーを設立し得べく、殊に高僧、豫言者の如きは、最も普通にタブーを設定して之を宗教上の戒律と爲すものである』（六三―四頁）又『通常人はタブーを創立する能力を有せざるを常とするも、時としては慣習に從ひて之を設定し、又は他人の創立したるタブーを或る事物に付て設定することを得：例へば慣習に因つて生じ又は國王の創立したる方法に從ひ自己所有の椰子林へ注連繩を張るときは何人と雖も其林中に入ることを得ずとするが如きものである（六四頁）と。

此一條は『共產宣言』を一度たりとも讀みたることある人には、恰かも彼の條の說明たるが如くに響くであらう。マルクス・及エンゲルスは、原始民及は野蠻民については、モルガンの研究以外餘り接する機會を有たなかつたし、また『共產宣言』の組み立ての上から其れに觸れる必要を多く感じなかつたものと見へて、其れに論及すること甚少いが、穗積博士のタブー成立論こそ彼等が殘し置いた遺漏をいとも有力に例證するものなのである。クノーの經濟史にまで趁り行く必要は茲には全く有しないと言ふも過言ではあるまい。

半神、神通力者、智勇超凡者、君主、酋長高僧、豫言者は、其の『アウスポイトンゲ』を「保全」す可くタブーを設定する。其以外の所謂普通人には、其例に對治してタブーを設

定するによりて『アウスボイター』となり得るのである。『保全』は人民一般の爲めにも行はれるが、『アウスボイター』の爲めにも亦有力有効に支持せられるのである。人民一般の保全とは、其の經濟上の必要、其生存上の必要——其れは單なる生物に普遍的なもののも含むに相違ないが、すでにタブーとなるときは、何れも社會的なものである——より來るもの、恐らく大部分、否、殆んど全部を占めて居るのではあるまいか。認められたるタブー設定者の爲めの保全も亦自然物生產物の獨占とアウスボイトングの便利の爲めにするものが、大なる部分を占めて居たのではあるまいか。タブーとは『之を諱め』『之は禁ぜられたるものなり』『之れに遠かれ』とのアウスボイトング又は獨占意思を社會的に保全する謂であらう。恐怖は其保全を確保する一の方便であつて、決して發生原因でないことは、著者の力說するところの確說と見る可きであらう。

トーテムについては、既刊分には未だ所見はないが、私は其れが食料確保——食料濫用の防止、食料資源の擁護並に涵養——てふ經濟的必要が、主たる原因であり而して支持者であることを、拙著『流通經濟講話』第四、五の兩卷に於いて詳論して置いた。其れは主としてスペンサー及ギレン兩氏並にホウヰット氏のオーストリア土人についての記事について立論したのであるが、私はこれら三氏の研究は少くとも著者の用ゐたフレザー以下諸學者の研究と同樣に敬聽せらるべきものと信ずる。而して私は今著者のタブー研究に接して此の見解をタブーの成立と其支持に擴張するの可能性の大なることを認めざるを得ざるものである。

又た私は、我邦に於ける貨幣の起源は、祓除の習俗と密接な關係を有つものではないかとの說を久しい以前に公けにしたことがある。我邦上古の『ツミ』『ケガレ』は、一面に於いて債務を意味する。『ツミ』『ケガレ』を祓ふ『ハラヒ』は、債務を償却する『ハラヒ』と同じものと見られたのではないか。『ツミ』を祓ふ『ハラヘツモノ』は、即ち借金を拂ふ『ハラヘツモノ』で、御幣は即ち貨幣であつたのではないか——『汝穢れたり』と云ふは、『我は汝をアウスボイテンするぞ』と云ふと同一事であつて、此の『穢れたり』を多く言ひ得る人は、亦た多くアウスボイテンし得る人である。『穢を祓へ』とは、『汝快くアウスボイテンされよ』と云ふと同一事である。即ち穢を祓ふ可く財物を引渡す、其用具は、一方に祓具祓柱であり、他方に貨幣であつた——と云ふのが、私の見解であつて、未だ一の反對論をも構成論をも見出さないが、私は此說必ずしも一の獨斷論として斥けらるべきものとは思はないのである。（著者の詳論する『忌』を以て姓とする忌部氏は、我邦最初の徵稅總監大藏大臣であつた樣に考へられる。『イム』ことは、同時に『ハタル』ことであつたを推知し得ると思ふ）タブーと貨幣タブーと經濟的流通（殊に貢獻、徵發的流通）との關係については、先人に研究のあるを未だ聞いて居らぬが、私は其れに他日有爲の學者によつて必ず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

取上げられる問題となるであらうと考へて居る。

之を要するに、著者が其『前論』に於いて、タブーの本質、種類、成立、分化について論ずるところは、何れも本論に於ける法律、主權、婚姻、財產權、刑法とタブーとの相關關係について論ずるところによつて、或は少しく或は著しく修正せられ、補訂せられ又或は翻さるゝを免れないのであつて、著者の『オルドヌングス・リーベ』は玆に著しく其論述に累するものと見ざるを得ないのである。法律、主權、婚姻、財產、刑法等から捨象し去つた抽象的なタブーなるものは、決して存在しては居らぬのである。然るに著者の前論は、此れらの具體相を捨象し去つて、唯だ全體的にタブー其ものを論じて居る。從つて其描出するタブーは現實のものとは著く遠ざかつたものであることになりはせぬかを恐れる。

此くて、著者は本論に入りて、右等各項に分けて、夫れ〲タブーとの關係を考察して居るのであるが、此の分劃其れ自身多少無理なものゝ樣に思はれる。元より論述の便宜上分劃することは差支ないこと、否爲さねばならぬところであるが、其れに先つて、法律、主權、婚姻、財產、刑法の一切を通じて、其處に具象的なタブーの全面目を捕捉することが、第一に爲されねばならぬ仕事であつたと思ふ。著者が左樣せざりしことは、論ず可きことを論ず可きところに論ぜず、而して論じて甚だ力弱きところに却つて詳細の論究を下して居るが如き觀を呈することとなつたと思ふ。以下此一事を念頭に置いて、各章を吟味して見よう。

本論第一章は『タブーと法律』と題する。著者は其章の始めに於て、原始的宗教の戒律であつたタブーが如何なる過程に依つて原始的國家の法規に爲るものであるかとの問を起し(八六頁)其れに答へて、「主として政治上の原始的首長は同時に原始的宗教上の首長であつたことに因る」となし仔細にこれを說いて居る。成程これは一應首肯し得られる說明である。しかし乍ら、然らば、何故原始的政治首長は同時に原始的宗教首長であつたかのより根本的問題は釋かれて居らぬのである。玆にも、唯物史觀は、より深き洞察を與へるものではあるまいか。政治首長と云ひ宗教首長と云ひ、其樣な區別は必ずしも判然して居たものではない。其時其事情に應じ或は政治的に、或は宗教的により多く發動するであらうところの首長は、必竟するに首長であると云ふ一事に、其一切が盛られて居る。而して首長であると云ふことは、其社會に於いて公認せられた社會的獨占者、社會的排他者、社會的アウスボイターたると云ふことに其の本體を有つて居たのではあるまいか。然るに著者は第一章を結んでいふ『相互不侵は共同生活の第一要件である。相互扶助は共同生活の基本要件である……交互表裏を爲すもので此二者互に相待つて始めて總ての社會生活を完ふするを得るものであるが強て其發達の先後を云はば相互不

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

侵は相互扶助の前提とも稱すべきものである』(九〇頁)と。私を以て見れば、此の斷案は余りに形式的であるのではないかと思はれる。相互不侵と相互扶助との存在は成程著者の云ふが如くであらうが、其れより一段前に、一方は大いに侵し、他方は大いに侵される二つの民種が先づ相集るにあらざれば、社會なるものは成立しないのではないか。相互に侵さずと云ふが如きことは、今日の發達した社會に於いても、決して十分に實現せられた原則と云ふことは出來ない。むしろ相互に侵し合はんと欲する人々が、一の侵略上の分業社會を形づくり、侵すことを專とする者、侵さるゝを常態とする者と、少くとも經濟上に於いて、生產條件の原始的配分關係――マルクスの成語――が成立するところ、其處に社會は稍ゝ堅固なる而して稍ゝ安全なるものとして成立するのではあるまいか。而して、此分業が自ら相互扶助の用を爲すのであつて、其れは同時的に成立つので、著者の主張する樣に、其間先後の順席は認められないのではあるまいかと思ふ。(これは必ずしもクロポトキンの相互扶助論を待つ必要のないところと思ふ)。相互扶助は決して平等的扶助ではない、上下的、差等的扶助である。否其れでなければ、社會的扶助は發生し得ないのではあるまいか。

かくて、私は著者が『タブーは法律前の公的規範である』(九〇頁)との言に若干の疑を抱かざるを得ぬ。何となれば、大いに侵す一方と大いに侵される他方との相集つて作る相互扶助社會は、私を以つて見ればたしかに嚴かに統制せられた社會であり、其社會の秩序は、これを明かに一の法的秩序と見るべきが如くであるから。即ちタブー社會の規範は法律其ものであつて、法律前期のものではないのではあるまいかと思はれるのである。タブーは原始社會に法律を與へ、又た其の經濟秩序を與へる。生產――アウスボイトングの成立――は其規範の下に行はれ、流通――アウスボイトングの固定體樣たる――は其規範に從つて行はれ、而して、貨幣――其は、公認せられた『アウスボイトングス・ミッテル』として發生する。貨幣論の本に書いてある發生論は、多く全く正鵠を失してゐる――も亦此秩序の中に成立すると見る方が、實際の進化の跡により近い見解ではあるまいか。

次に、第二章タブーと主權の章については今省略して置き、第三章タブーと婚姻について一言するを許されたい。此章に於ける著者は、最近研究の最高階段に立つて居ると斷言するを得る。著者はダーウイン、ウエスターマーク、ホッブハウス、等の新說について十二分に商搉して、バフオーフエン、マクレナン、又たモルガン等の舊說に盲從することを明かに否定して居る。此點に於いては、今日の唯物史觀論者は、著者によりて大いに其蒙を啓かれねばならぬ。唯だ同トーテム同姓の相婚を禁じた根本的原因の一として、嫁出による婦人又は男子の勞働力の配分、嫁資の移轉に伴ふ財物の配分が重要なる關係を有つものでないかの問題について何等の考慮を

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

拂はなかつたのは、法學者としては無理ならぬことではあるが、著者の如き社會學に精通する學者の研究としては、甚だ物足らぬ感を與へる。著者は唯だ從兄弟姉妹の婚姻を權利又は義務とする習俗について婚償が他人の女を娶るよりも低廉であるてふ經濟上の一事情をあげるに止るが、何故他の場合について婚償の考慮が、タブーの創定又は支持に關係を有つのではないかとの疑問を發せなかつたのであらうか。私はこれをむしろ不思議と思ふ。しかし、著者が性交の排他性をあげて、其れがタブーと重大なる關係を有つことを論じた一條は、私の悉く服するところである。更らに性交の公認性を說く亦然り。排他的にして公認的關係たる婚姻の支持の爲めにタブーは不可缺ものであつた。其れは恰も、物財について──若くは土地其他について──而してまた勞働關係について、其の排他的にして公認的なる關係の支持に、タブーが最もよく役立つたのと同じ道理に基くものである。惜むらくは、婚姻について、かく深き洞察を下した著者は再び前章に立戻つて、此の同じ道理のタブーと法律との關係について存するにあらざるかを吟味することなくして已んだ。性慾の充足と衣食住慾の充足とを全く別個の觀察の下に置くは、當を得て居らぬ。兩者には各獨自性は勿論ある。其れと共に遙かに大なる割合に於いて、兩者の間には、共通性──又は普遍性──が存する。而して、排他的、公認的關係たりてふことは、其の共通性中の最大なるものであらう。玆にも、法律と婚姻、主權と財產權など縱割的の分割を下して、斷つ可からざる連絡の糸を切り離したことの遺憾が痛切に感ぜられるのである。

（十月號讀出完結）

新刊紹介

◆**加賀の千代女の生涯**（吉松祐一著。俳人千代女の百五十年忌記念として著したもの、傳記及句評の二章より成る。東京市神田西小川町二ノ三大同館發行・定價壹圓貳拾錢）

◆**綜合倫理學**（杉森孝次郎著＝敢て綜合と稱した理由の一は、純全にして單一なる、當然さうである倫理學的見地からして個人基準の倫理學と、社會基準の倫理學とを兼備することが、私がこの新著に從事した主要動機であつた一‥‥と。卷末に三論文が附錄されてゐる。東京牛込區早稻田・早稻田大學出版部發行・定價貳圓五十錢）

◆**田園・工場・仕事場**（クロポトキン著・室伏高信譯・原著はクロポトキンの思想を知る代表的のもの・東京京橋區山下町一・田舍社發行・定價壹圓六十錢）

◆**藝術としての神樂の研究**（小寺融吉著・東京神田南神保町一四・地平社書房・價壹圓）

◆**明治初年の一齣一景**（細川龜一著・兵庫縣印南郡大鹽町・和同社發行。定價壹圓）

◆**野面の風**（松崎武雄詩集・東京市外野方町上沼袋七三・詩集社發行。定價壹圓五十錢）

◆**古美術史蹟京都行脚**（川勝政太郎著・古美

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

術の鑑賞研究を兼ねた京都の案内記として上乘のもの參考圖寫眞等豐富・京都市東洞院二號北入・スズカケ出版部發行。定價貳圓）

◆**大地讃頌**（薄田泣菫著・草木蟲魚の別册で詩趣横溢の小品隨筆集、銷閑靜讀の好著・東京芝二本榎西町二創元社發行・定價貳圓）

◆**土の藝術と土の生活**（犬田卯著・著者年來の主張評論を集めた農民文藝論集・東京府杉並町成宗一一三農民文學社發行・定價壹圓）

◆**靜夜曲**（吉田絃二郎著・運命的な戀は信濃の山、日本アルプスの登山小屋に芽生えた。かくして哀戀純情と悲劇的運命、それがいつも山へと繋がれて展開し行く長篇力作・東京牛込區矢來町新潮社發行。定價壹圓八十錢）

◆**山水大觀**（評論隨筆家協會編・露伴藤村花袋氏を初め文人俳人畫家評論家等三十一氏の山水旅行記、夏日の好讀物・同上新潮社發行定價壹圓八十錢）

◆**國法及び國法史の研究**（中野登美雄著・收むる所、緊急命令の史的淵源、憲法と國民外交の保證、行政權に關する理想型態と實證型態、佛國憲法の變化、帝國憲法の史的淵源に關する一假說、我が軍政に於ける獨法と佛法等七章、一般國法の基本的理論の研究に傾倒せる篤學の著者の力の籠つた論文集、法科學生法學研究者の爲の好書・東京牛込區早稻田敬文堂發行・價參圓五十錢）

◆**藝術と精神分析**（フロイド著・安田德太郎譯・本郷湯島切通坂一九・ロゴス書院發行・價壹圓八十錢）

◆**重農派經濟學の人々**（山口正太郎著・重農學派の學說發生地なる佛蘭西重農學派の史的研究で、著者がソルボンヌ大學二年間の收穫の一端として生れしもの・同上ロゴス書院發行・定價壹圓八十錢）

◆**日本思想論**（永井亨著・東京牛込早稻田大學出版部・價壹圓廿錢）

◆**蒼馬を見たり**（林芙美子詩集・拾年間の作品中から好きなのだけ集めたといふ處女詩集「何だか始めて嫁入りするやうで恥かしい」といつてゐるが、底強い熱情と强い明るさをもつて歩み出た成熟振りは立派な母を想望させる・東京牛込區通寺町南宋書院・價六十錢）

◆**處世新道**（增田義一著・新處世道を說いた青年修養書・東京京橋南紺屋町實業之日本社發行・定價壹圓五十錢）

◆**人間の本質**（木村德藏著・昨年物故した異色のあつた自然科學者の論集で科學者としての人生觀を窺ふに足る遺著・東京神田區北神保町二・新生堂發行・定價貳圓五十錢）

◆**死を前にして**（平方達雄著・熱ある教育論と隨筆集・東京市外松澤村赤堤二五・曉靡社發行・定價壹圓五十錢）

◆**民謡の今と昔**（柳田國男著・民族藝術叢書中の一篇・東京神田區南神保町一四・地平社書房發行・定價壹圓）

◆**光**（井上康文著・最近愛妻を亡くされた氏の近業を收めた詩集・東京市外野方町上沼袋七三・詩集社發行・定價壹圓）

◆**赤彥遺言**（藤澤古實著・「島木赤彥臨終記」と晩年の藝術の二項よりなり十年間師として仕へた著者がその思慕熱情を傾けた結晶、大歌人赤彥氏の人と藝術を味ふによき書・東京神田一つ橋通九・鐵塔書院發行・定價貳圓）

◆**ラスプーチン**（ロシヤ大革命の裏面史譚選輯の第三輯、妖僧の詳傳と暗殺記・東京麴町內幸町一・ロシア問題研究所發行・定價參圓）

◆**日本金融資本論**（小島精一著・日本の大金融業を始め諸重要工業方面に亘り多年の蒐集資料に依り金融資本發展相を究明した好著、世界大戰以來日本の經濟界は急速度をもつて獨占資本主義の段階に深く突入し少數金融資本團による全面的獨占を實現しつゝある時必讀さるべき書・東京京橋第二相互館內千倉書房發行・定價貳圓五十錢）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

童馬山房雜歌

齋藤茂吉

この日ごろ　三首

六月のすゑになりつつ部屋に來て砂たまりをる紙帳をはづす

いつころか机に置きし耳搔に黴ふける見ればあはれかなしき

いとまなく明暮れしかば一冬をここにこもりしは幾日もあらず

發熱妄念　一首

みなかみの激ちの音もうたがはずひとつの山に老ゆるしづかさ

昭和四年一月某日　三首

あたたかき飯くふことをたのしみて今しばらくは生きざらめやも

この通に足をとどめて古本を値切ることさへさびしくぞおもふ

自殺せしものぐるひらの幾人をおもひいだして悲みつつ居り

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

昭和三年八月三山參拜　三首

いつしかも月の光はさし居りてこの谷間より
立つ雲もなし

みちのくの湯殿の山に八月のこほれる雪をわ
たりつつゆく

かくのごとく常にあらぬか月山のうへにけむ
りをあげて雲とくる見ゆ

五月一日　二首

日比谷より左にをれて忽ちにいきほひづける
行列を見つ

ととのへる街路の上を一萬人の勞働者ははし
やぎて行けり

をりにふれて　六首

うしろなる立木をこめて淺草の觀音堂は板が
こひせり

この世をし愛しみけれどやうやくに老いづく
吾もけむりのごとし

不思議なることもあるものと吾おもふ目のま
へを行く女に見おぼえあり

もろもろに立ちまじはりて居る我は時のまに
していきどほりを斷つ

章魚の足を煮てひさぎをる店ありて玉の井町
にこころは和ぎぬ

氣ぐるひてここに起臥しし老人の移りて去る
を見おくらむとす

赴き不在であつて、面會を得ず。それから博多に至り、柳河にて家永の留守宅を訪ひ、又た三池にて立花小一郎氏の留守宅を訪ひ、熊本近郊の大江村なる吾家に歸つた時には、麥が少しく青き芽を出し、桑の葉が既に萎んだ時であつた。予は足掛け三年振りにて吾家に歸つた。當時家に到著した時の氣持は、今尚ほ新なるが如く記憶してゐる。

予は此間に於て著しく吾が兩親の老衰したるを認め、それよりも吾家の經濟狀態の甚だ危險であるに氣付かざるを得なかつた。吾家は縣下の水平から云へば、先づ中地主と云ふべきものであつたらう。左程の財産家ではなかつたが、自活するばかりでなく、多少の餘裕があつたのは勿論だ。併し吾父が維新前後諸方に奔走し、殊に吾家は横井小楠及びその眷族の臺所方をつとめ、小楠の二姪の洋行の際などは、可成り奮發して旅費調達の任に當つたと云ふ事にて、財政狀態は當時に於ても、必ずしも健全ではなかつた。

唯だ吾父が明治初年から奉職し、明治五六年頃に至つた間は、固より不自由のあるべき筈はなく、その俸給の幾分かが熊本に於ける邸宅及びその邸宅を繞る若干の土地となつたものであらう。或はそれも葦北郡にある土地山林を賣却して、それにて購ひ得たのかも知れない。

予の祖父は一時父が熊本に於て奉職したるが爲に熊本に來たが、『故郷忘れ難し』とて引上げ、水俣に歸り、築出しの隱宅に仕居した。此に於て吾家にて纔に餘し得たる小作米その他の收入は、擧げて之を予が祖父の奉養料となり、熊本に於ける予の一家は、全く自給自活をせねばならぬ狀態であつた。

然るにそれにも關らず、此の數年間予の姉二人は東京若くは上州邊に赴き、予及び健次郎は又た京都に赴き、謂はゞ四人の留學生を出した事となつてゐた。固より規定の收入はなく、收入と云へば予の母が姉達と協力して養蠶をなす事。若くは桑畑より苗木を取つて、桑苗をその希望者に頒つ事位のものにて、その他は唯だ一方では葦北郡にある土地を賣り、又た家にある祖先傳來の什物などを賣つて、その日を過してゐた。時としては家の一部を他に貸してゐた事もあつた樣だ。

予は全く吾家の經濟狀態を知らなかつたと云ふ程ではなかつたが、習慣性となつて、左程困難であるとも思はず。されば學費の如きも潤澤に取り、敢てそれを自ら奉ずると云ふではないが、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

これを友人共に頒ちなどして氣持よく暮してゐた。
然るに歸つて見れば予が家の經濟狀態は、殆んど危急に迫つて居る。唯だ大膽にして物事に屈託せぬ吾母が、やりくりして暮してゐるに過ぎなかつたのを見て、又た予が父が正直にして且つ小心の質とて、胸中その事を苦にし、その爲に兼ねて多かつた白髮が、猶更ら多くなつたのではあるまい乎抔と考へ、予は今更ら實に兩親に對して相濟まない心持ちになり、何は兎もあれ、是非共この經濟狀態を立直さねばならぬと決心した。
當時熊本には十年戰爭の餘を受けて、その善後策として二箇の學校が出で來つた。一は同心學舍と云ひ、これは十年の役に熊本隊として薩軍に加はりたる池邊吉十郎、その他の面々の仲間で、所謂學校黨と稱する者の團體から成つたものであつた。一を共立學舍と云ひ、それは山田武甫か宮川房之及予が父等の發起したるものにて、予が父は殆んど予の歸鄕する頃までは全力を此の學校に注いでゐた。その外に相愛社なるものがあつた。これは宮崎八郎などの仲間にて、十年の役には協同隊を組織し、或は討死し、或は入獄したるが、その入獄せざる者、若くは獄中から歸り來る者共の團體にて、池松豐記、松山守善及び前に掲げたる有馬、高田、宗像、田中賢道等が、その主なるものであつた。
斯の如く學校は共立學舍、同心學舍の二つあり、猶ほ又た實學黨の中にて嘉悅氏房氏の邸内に廣取校なるものを設けて、英學を專ら授けてゐたが、有力なる學校としては、前記の通り二つであつた。
斯くて同心學舍は、木村弦雄、佐々友房の指導の下に大に振ひ、濟々黌と改名した。斯の如く熊本には、事實三黨が分立した。同心學舍を基礎としたる舊學校黨、共立學舍及び廣取學校を基礎としたる實學黨。及び相愛社である。學校黨が保守黨であり、實學黨が漸進黨であり、相愛社が急進黨であつた。しかも十年の亂に關係しなかつたものは、只實學黨のみであつたと云つても可なりだ。
斯く分立しては居ても、戰後の復興として、協力一致を主唱し、縣外の熊本出身者及び縣の當局者等も、内外呼應して骨折り、これが爲に『忘吾會』なるものが出で來つた。即ち吾を忘るゝの會にて、孰れも自我を忘れて互に協力一致する事である。前に記したる山田武甫翁等が上京したのも、この『忘吾會』の用

務の爲であつた。

斯る勢であれば、予も又た『忘吾會』會員の一人となり、傳統的に實學派であらねばならぬ予は、父と共に共立學舍に赴き、或は講習、或は討論等に從事した。當時共立學舍には、予が父の外に主なる敎師としては、行德文卿、津田靜一氏等があつた。行德翁に就いては別に記する事があるが、今此に記するは、津田靜一氏の事だ。津田氏は津田信弘の長子である。津田信弘は津田山三郎と稱し、坪井實學の領袖株の一人にて、藩の家老米田是容に引立てられ、水戶人士と交友し、藤田東湖等にも知られ、維新の際には參與にまで拔擢せられたる漢である。靜一氏はその長男として夙に米國に赴き、一通りの學問をすましたのであるが、米國に在つても米國風に染まないのみならず、寧ろそれに反動し、一種の强硬なる日本主義者であつた。彼は門地もあり、緣故もあり、東京にて官職につかんとすれば、何等苦勞は無かつたが、先輩の止むるを顧みず、袂を拂つて故山に歸り、讀書を事とし、その傍ら共立學舍に敎へてゐた。その弟熊谷直光は予と同年であつたが、氏は予よりも少く共十歲內外の年長者であつたと思ふ。或はそれよりも多かつたかも知れぬ。予は當初から津田氏と意見が衝突し、何かにつけて議論を鬪はした。固より鄕黨にては齡を尊ぶ習ひであれば、予が津田氏に向つて抗論するは、何となく失禮にも見受けられ、正直なる予の父などははら／＼したであらうが、予はそれ等には一向頓着なく、盛んに議論を鬪はしてゐた。今何事を論じたるや、その事さへ想起せぬ程であれば、別にたいした重大なる問題ではなかつたらうが、予は當時最も急進論者の一人であつたから、予の言ふ事が、津田氏の氣に喰ふ筈がなかつた。

斯る際に予と相愛社との交際は自ら開けて來た。相愛社は全くルウソーの『民約論』を金科玉條としてゐた。予は必ずしもそれを信仰したと云ふではなかつたが、若干それに感染してゐた事は間違ひなかつた。今此に想ひ起すが、予が明治十三年の秋の初、岡松先生の塾にある頃、當時渡邊洪基氏が『集會條例』の製造者であるといふ評判が高くなり、予は友人兩三と共に、氏を南佐久間町の邸宅に訪うた事を記憶して居る。その時吾等の擧動が餘りに壯士らしかつたとて、家の人々はおど／＼して取次がなかつたが、餘りに騷がしきものから、主人公自ら玄關に立現はれ、『さらば兎も角も上れ』とて應接間に通され、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それから議論に及んだが、洪基氏は吾等の云ふ事を聞きながら、
「それはルウソーのコントラ・ソーシャルの受け賣りではない乎」
と云はれた事がある。當時渡邊氏の立場から見れば、左もある可きであつたらう。

予は別に定りたる職業もなく、家に在つては讀書をなし、若しくは家事の手傳をなし、父と共に共立學舍に赴き議論をするのが、その日の仕事のやうであつたから、相愛社の連中の誘ふに任せ、演說の爲に田舍廻りをなし始めた。時としては月田道春、時としては松山守善、時としては田中賢道氏等が、予の同行者であつた。松山氏は今も八十を越えて矍鑠としてゐるが、氏は本來神風黨であつたのが、急進黨となり、相愛社の大先輩の一人となつた。氏は十年の戰爭には加入せず、官吏を罷めて、辯護士となり、時にはその會長となり、恒產もあり、議論は頗る過激であつたが、生活は極めて穩當、中正であつた。月田氏は月田蒙齋先生の子にて、その刑期が輕かつた爲に、最も早く獄中から放還せられたる一人であつたらしい。田中賢道氏は花岡山事件頃から—洋學校には關係がなかつたが—基督教に關係あり、十年の戰爭には協同隊の中隊長まで勤め上げたる一人で、最も雄辯家であつた。

予は如何なる事を演說した乎記憶しないが、これが爲に予自身にとつては、尠からざる演說の練習をなし、又た地方の事情等も察し、元來予及び予の家に緣故の多くなかつた熊本城北の方面に、多くの知己朋友を得る端緒となつた。予は元來口不調法の者であつた。子供の時からしやべる事は嫌ひではなかつたが、全く下手であつた。ものを順序立てゝ人に話す事を、如何にも面倒くさく考へ、何でも結論から先に話し、或は三段論法を二段論法として話し、その爲に自分の思ふ事を正しく云ひ表はす事の出來ないのみか、往々他を誤解せしめた事があつた。演說は猶更であつて、多くの人の前に立つてしやべるなどといふ事は、予の神經に過大の刺戟を與へ、予にとつて堪へ難き重荷であつた。加之、聲量は少く、聲音は清朗を缺き、演說家の資格としては何一つ取柄がなかつた。

併し時としては、他人から促されぬ迄も、自ら進んで云ひ度いと思ふ事があり、その爲に到底巧妙なる辯士とならざる迄も、自分の云はんと欲する所だけは、兎も角も云ひ得る丈になりた

いと云ふのが予の望であつて、それには可成り苦心もした。この相愛社の人々と田舍廻りの演說をした事は、予に取つては、決して無駄骨折りではなかつたと思ふ。

當時熊本には又た中學校、師範學校などの教師として、他地方より入込んだる者、若くは新聞記者として入込みたる者、その他に依つて、相親社といふ學術研究の團體があつた。予も又たそれに加入すると云ふわけでもなかつたが、屢々その會に臨み、互に討論、演說などした事を覺えてゐる。

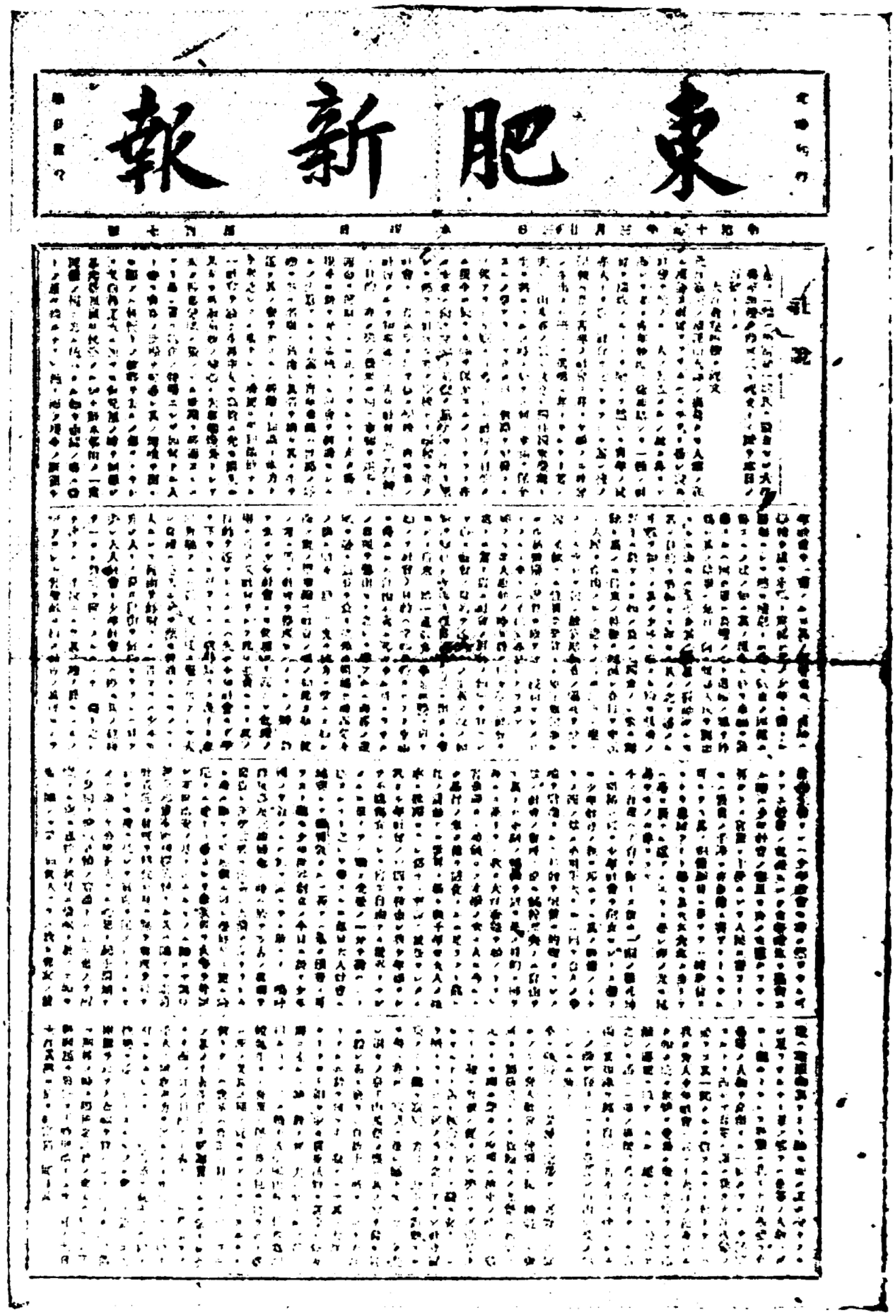
當時は役人と云はず、教育家と云はず、政論大繁昌の世の中であつて、寄るとさはると政治を論ぜざる者はなかつた。斯る折しも相愛社の連中は、愈新聞を起す事となつた。それは多分明治十四年の中頃であつた乎と思ふ。別に資本があるでなく、唯だ或る活版所と共同して、隔日四號文字四頁の新聞を發行する事となつた。當時熊本新聞には、村上定なる人が來つて、福澤流の議論を頼りにやつてゐたが、相愛社の連中はそれが氣に入らず。尙ほ一層過激なると云はんよりも、無遠慮なる議論がして見度いといふわけにて創刊した。
社說は池松豐記、編輯は宗像政などと云ふ人が關係してゐた。

予は誘はるゝ儘に當初より無報酬にて、その編輯に手傳ふ事となつた。予は社說も書いた。論說も書いた。雜記として種々の飜譯ものをも出した。又た雜報さへも手傳つた。論說には種々の號を用ひ、若くは變名を用ひた。その中でも最も多く用ひたのが、最初は大江逸郞と書き、それから後には郞を削つて大江逸とした。大江と云ふは、予の住所が大江村であつたからだ。予の飜譯したのは、マコレーのエッセー若くはクロムウェルの傳などであつた。

それからその新聞ばかりでなく、後には『開化の手引』と題する、極めて平易なる雜誌をも發行した。それにも種々の飜譯物を掲げた。當時予の英語の力は頗る怪しきものであつたが、しかも予は大膽に無遠慮にやつてのけた。今から考ふれば汗顔の至りであつた。盲目蛇とは此の事であらう。

予は明治十三年の秋、東京を去る以前に、或る古洋書屋の店頭から、一冊のマコレーのエッセーを發見し、それからそれを耽讀し初めた。山陽は東坡の文を讀み、初めて『天地間に斯の如き文章ある乎』と歎賞したと云ふ事であるが、予も又たマコレーのエッセーに就いてはしか云はねばなるまい。[illegible]

したるものを、恥し氣もなく飜譯したのだ。新聞の名は『東肥新報』と稱し、熊本新聞とも種々の問題に就いて、論戰を試みたが、予は初から論戰なるものを好まなかつた。予は人は人、吾は吾。吾は唯だ吾が云はんと欲する所を云ふだけにて、人が贊成しようが、反對しようが、それには初から頓着しなかつた。時には餘りに氣に喰はない說を見れば、其人には喰つて掛らぬまでも、其說をば駁擊した。但し予の一生を通じて概して云へば、正面から人と議論を闘はした事は殆んどない。それは闘はしたとて何等功能がないと考へてゐたからである。即ち吾は吾が云はんと欲する事を云ひ、彼は彼の云はんと欲する事を云ひ、その得失は第三者が隨意に取捨すべきものであつて、第三者に向て『是非彼を捨てゝ吾を取れ』とまで立入つて云ふ必要はないと思つたからだ。


東肥新報
社說

大江義塾開校祝文掲載の東肥新報

これは予の一生を通じて、新聞記者としての立場であつた。されば予は殊更に他を攻擊もしないが、又た他の攻擊に對して答辯もしなかつた。

或時予の留守中に裁判所から召喚狀が來て、予の父母を驚かした。それは『開化の手引』なる雜誌發行に就いての何か手續

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

きの事であつたらうと思ふ。予は長き筆硯の生活に於て、未だ曾て所謂る筆禍なるものに罹つた事はなかつた。これは予が言論に就いて、謹慎した結果であつた乎、或は他の理由であつた乎知らないが、予は言論に就いては、常に責任觀念が深かつたから、未だ曾て人に對して申譯の出來ない樣な言論を、逞しくした事はなかつた。

第十九　大江義塾の設立

此に又た予の生涯に於て、一の記念すべき事が出來た。それは大江義塾創立の事だ。今此の事に就いて、少しく語るであらう。予は同志社に足掛け五年間居る中に、教育に就いて多大の興味を感じ、自分が教育者となる日には、此の事は斯くせねばならぬ。彼の事は斯くせねばならぬと、種々自ら註文をつけてゐた。

又た共立學舍に屢々出席して、その模樣を見ても、何となく歯がゆい樣な感がした。それで予は何とか自ら學校を起して見度いと云ふ樣な感が、躍然勃々湧いて來た。それには又たそれを[illegible]とする一の理由がある。それは何とかして予が家の[illegible]を[illegible]予は是迄兩親から搾取したる報償として、今後は自分の心と身を働かして、兩親に貢獻せねばならぬと云ふ感を起し、それに就いては他に藝能もなきから、極めて貧しき學問ではあるが、それを提供する外はないと考へたからである。

予の家は殊に予の母の時代となつてからは、緣家親類の倶樂部同樣であり、のみならず父の友人若くは門生等も、常に予の家を中心として相集つた。されば予の家の僕の如きも、每朝朝市場に出掛け、魚類を買出す事が、一の役目であつた。事程左樣に食事などの時刻になれば、別に用事もなき客が、食事の時にやつて來るといふ程であつた。斯くする事が予の母にとつては、恐らくは一の習慣と云はんよりも、快樂であつたかも知れない。兎に角德富家にさへ行けば、何等かの御馳走には有りつくものと云ふ事になつてゐた樣だ。予は吾家の病根が此にある事を見て、第一、人に御馳走する事をやめる事。第二、成可く客を引止めさる事と云ふ法度を定めた。其結果に十二疊の座敷を板間となし、その眞中に一疊の疊を敷いた。此れは主人一人、客一人と應對するには、それで充分であるからと云ふ事であつた。[illegible]予の[illegible]に於ける

不評判は、著るしきものであつた。或は親不孝者の名さへも、宣傳せらるゝに至つた。斯く方針を定めて見れば、吾家は挙ろ只だの住居としては廣きに過ぎた。そこで是迄の客間一切を擧げて塾舍とすべく整へた。

予が歸鄉より幾何もなく、縣立中學校の生徒の中には、予に英書の講讀を乞ひに來た者がある。予は彼等に向てマコレーのエッセー、ワルレン・ヘステングや、クライブなどの評傳を講讀した。固より予にもよくは讀めなかつたが、兎も角も講讀した。

又た共立學舍の生徒等の中にも、予の講義を聽んとして來た者があつたから、彼等にはギゾーの文明史を講義して聽かした。斯の如くにして生徒は招かざるも追々集つて來た。その爲に吾父も又た興味を感じて、論語、孟子の講義抔もする事となつた。

當時學校黨の造りたる同心學舍は、木村弦雄、佐々友房などの指導の下に、且つ政府の擁護の下に盛んになつたが、共立學舍は既にその盛時を過ぎ來つた。その時恰も予が講義を初めたから、自然共立學舍の生徒の中にも、若くはこれから共立學舍に赴かんとする者の中にも、予の方に講義を聽きに來る者が増加して來た。

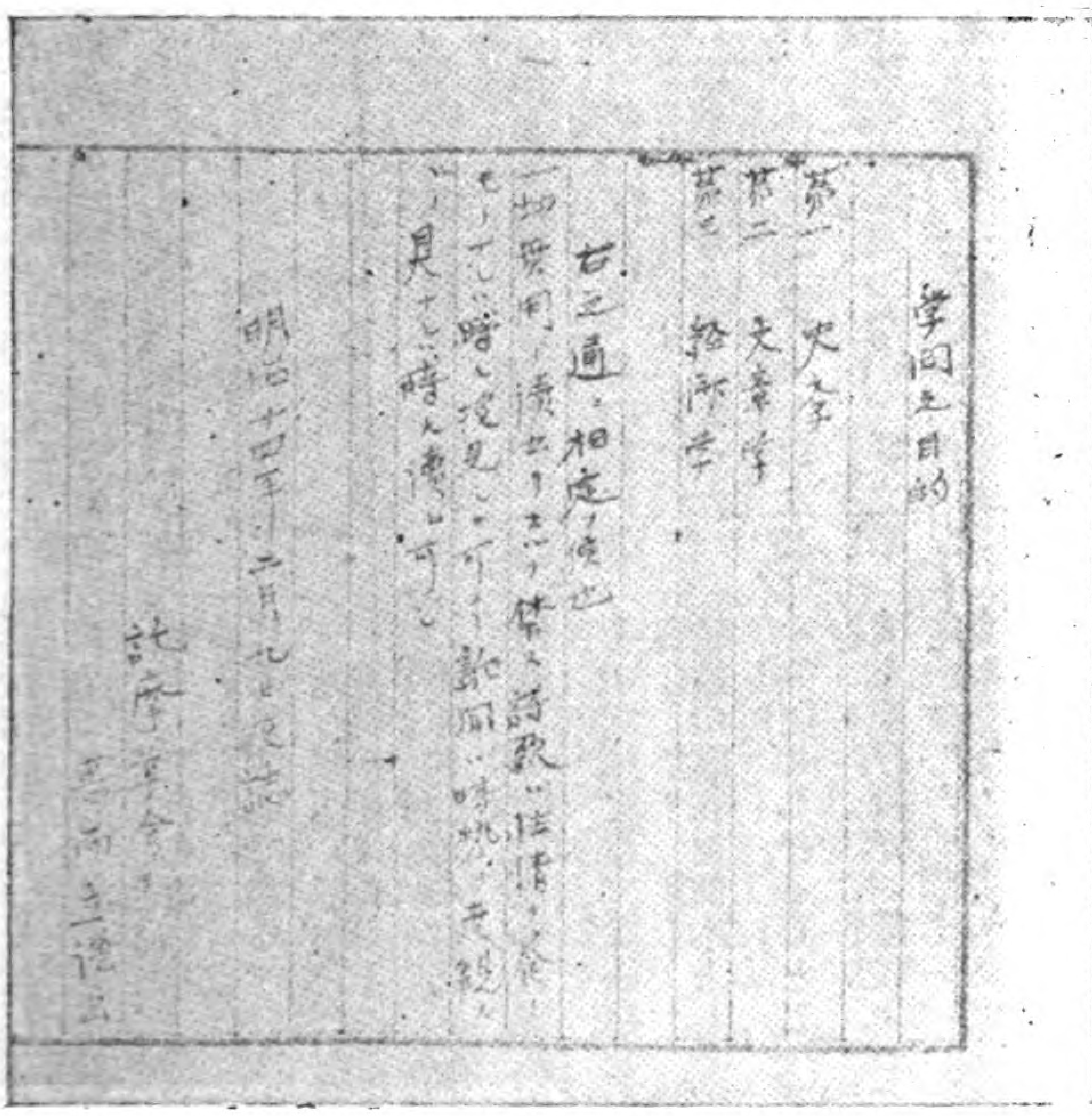
當時予は所謂日本人には日本學が必要であるといふ事を唱道した。或は英學と云ひ、或は漢學と云ひ、或は皇學と云ふ。皇學者は大和言葉で學問をなし、漢學者は漢字、漢文で學問をなし、洋學者は洋字、洋文で學問をなすと云ふ事で、孰れも普通日本人にとつては、道行きが甚だ面倒だ。それよりも現代の日本言葉にて、現代の學問をする事が一番近道である。それが即ち予の所謂日本學である。

即ち現代の言葉にて、政治、經濟、歷史、地理、何にても必要の學科は修められるから、それを強ひてむづかしき言葉の力を借りる必要はないと云ふのが、予の立前であつた。そこで予はその意味を以て講義をなし、經濟學なども同志社のラーネッド教授の講義を種本として、それを予が日本語に寫し、その口授を筆記せしむる事とした。斯くて明治十五年三月に至つて開校式を擧げたが、學校と云つても、予の家の座敷、玄關、次の間等に過ぎず。學生とても十人乃至二十人内外であつたらう。これが大江義塾の創りである。

予は自ら大江義塾の長となり、一人にて塾長から、教師から、幹部まで兼ねて居た。若予これにて家政の缺陷を補ふ積りであ

つたが、得るところは幾何もなかつた。中には五十錢の月謝を拂ふ者もあつたが、中には月謝どころでなく、食費さへも予の力で手傳はねばならぬ者もあつた。予は又た數學を除けば、殆んぞ凡有る學課を教へた。予の所謂日本學にて、歷史、經濟などの講義は勿論、漢學も英學も何んでも手當り次第に教授した。

英學なども授くる際には、教師である予自らが、時としては理解に苦しむ事もあつたが、さる場合には特に大きなる聲にて怒鳴るが如く講義をなし、當座を誤魔化し去つた樣な事もある。漢籍なども講釋をして見れば、自ら思ひの外學力の少かつた事に驚いたが、『教へるは學ぶが半』と云ふ事にて、自分が勉强する積りで教へた。又父の論語・孟子の會讀には予も出席し


學問之目的
第一　史学
第二　文章学
第三　経済学

而立とは當時予の雅號なり三十にして而して立つの意なり（蘇峰老人）

蘇峰立志書

て、時としては父の講義に向つて無遠慮なる横槍を入れ、今から考ふれば、親に對して可成り無遠慮なる言を吐いたものと思つて恐縮してゐる。

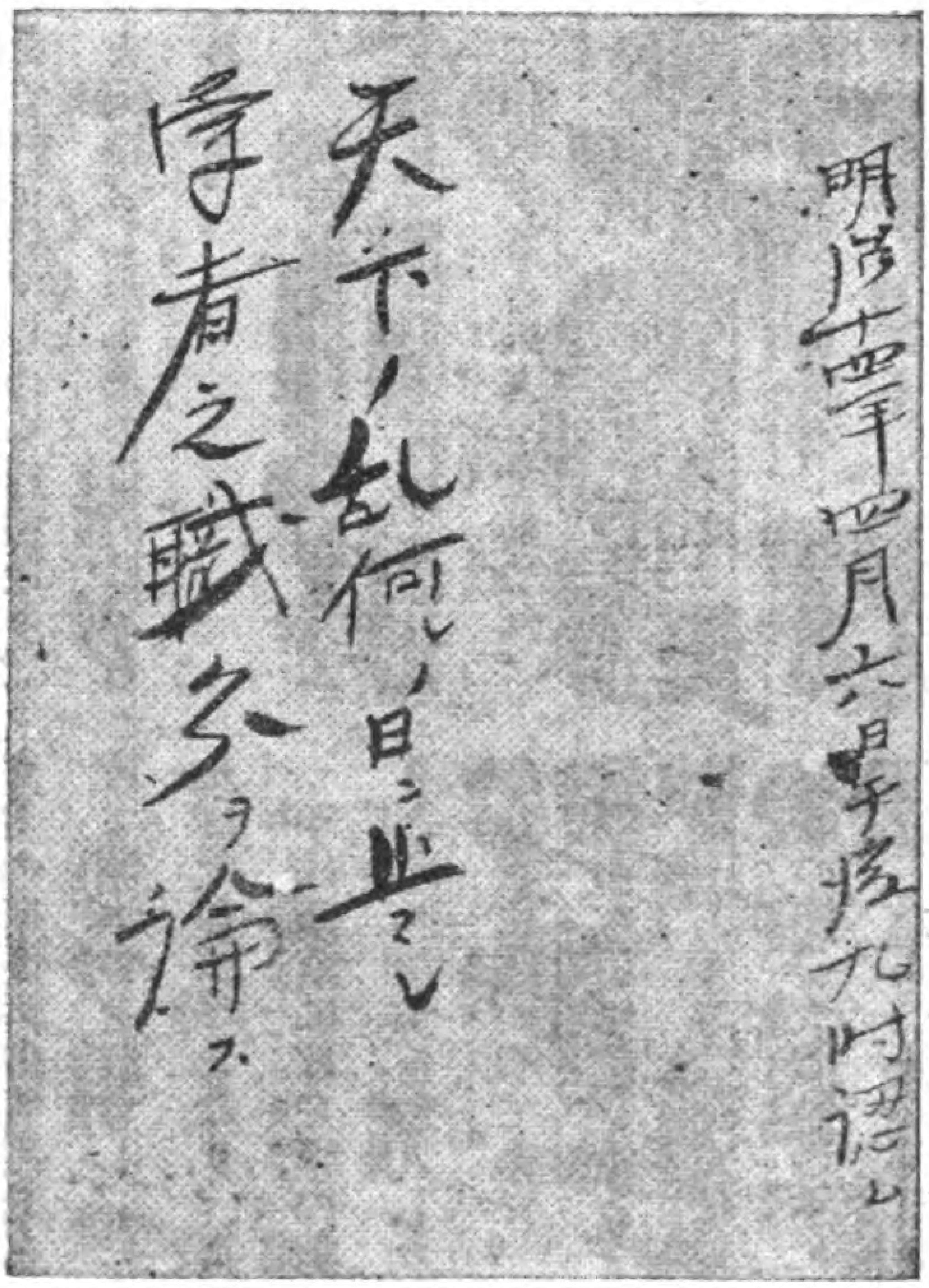
併しその間に於て、予は可成り勉强をした。予は種々文章を書いたが、自分自らその文章が物になる乎、ならぬ乎と云ふ事に就いて、屢々危惧の念を抱いた。然るに共立學舍の先生に、行德文卿と云ふ人があり、この人は眼科醫であつたが、徂徠學派の人にて、殊に詩文には達者であつた。人物も如何にも恬淡であり、又た不思議に見識もあつた。予は曾て相知らなかつたが、共立學舍で對面し、その後予の作文や作詩を持參して、その斧正を乞うたが、行德翁は予を以て共に語るべき者となし、予を待つに普通の青年を以てせ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

山田武甫氏は、その人物が公平にして、俗氣なく、如何にも大人たるの襟度があつた。この人が又た予を以て共に語るべき者となし、胸襟を披いて予の云ふ所を聞いた。

當時予は世間一般の民權自由論に感染れてゐたが、その中でも予は聊か他と趣を異にした。それは當時の民權自由論は、その名目が民權であつて、その實は國權であつた。即ち明治六年征韓論の餘波は、尙ほ當時の人心を支配し、民權論者の中でも半以上は朝鮮討つ可しなどと云ふ論が多かつた。謂はゞ民權論者の中に於て、その多數は寧ろ一種の變形なる帝國主義者、若くは武力主義者であつた。

予は民權論者ではあつたが、武力主義者には飽迄反對した。當時予は民權の敵は武力であると考へ、戰爭は武人跋扈の原因を



當時の作文(文明論之内)草稿の表紙

一言にして云へば、マンチェスター・スクールであり、所謂コブデン、ブライト、グラッドストンなどの論であつた。ルウソーの『民約論』を看板として、武斷主義を行はんとするが如き相愛社流とは、根本に於てその趣を異にした。併しそれは唯奧底を窺つての話であつて、民權論だけにては、何等反對の事はなかつたから相變らず交際もし、當時予も殆ど相愛社員の一人と見られて居た。併し相愛社の幹部の連中は、必ずしも予をその内部の評定迄は加へなかつた。否、予自らもそれに加はる事を欲しなかつた。

されば予は傳統的に於ては實學連であり、交際の上は相愛社連であつた。併し予本來の立場は寧ろ大江義塾の長たる德富猪一郎であると見るより外なかつたであらう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

天下を擧げて國會開設論が湧き、國會請願が盛んになり、廟堂多事の時に際して、熊本縣の先輩の一人、安場保和男は、岩倉公等と相談の上、熊本に於て、所謂紫溟會なるものを作るべく、その主意書を携へて下向した。その主意書は井上毅子の筆になつたるもので、冒頭には、よく國を興すものも政黨なり。國を滅ぼすものも亦た政黨なりと云ひ。しかもその目的は專らルウソーの民約說を攻擊するにあつた。

これは勿論熊本縣下を統一して、當時の民權論の狂瀾を支ふる積りであつたらう。前にも申す通り、當時熊本には『忘吾會』なるものがあり、各黨吾を忘れて相會すると云ふ事であつた。右の安場氏も忘吾會に重なる人々を集め、紫溟會組織の事を相談した。その時予は相愛社の首領株、有馬源內氏と共に、相愛社を代表して出席した。然るに最初に主意書を讀み、安場翁が一通り演說をなし、斯くて贊成、不贊成を表すべく、列席の人名を讀みあげたが、孰れも『贊成』『贊成』の聲にて、それが許んで予の名に至つたから、予は『自分は仲間の代表者として來てゐるから、卽答は出來ぬ』と云つて保留し、有馬氏も亦た保留した。以て隣に使んだ、初めから相愛社を除外して、その他の連中を統一せんとした事であつて、吾等が贊成を保留した事は、別に安場男等にとつては不思議もなかつた。

やがてその紫溟會なるものが、元の實學黨と、元の學校黨との間に意見が齟齬を來し、遂に紫溟會は元學校黨及び津田靜一氏等の所謂坪井實學なるものに止り、横井派の實學派は殆ど擧げて紫溟會を脫會し、此に於て相愛社と實學黨とは、勢ひ提携せねばならぬ事となり、斯の如くして熊本の政黨は出で來つた。

予は政黨には左程の興味も持たず。飽迄も自分の勉强をしようと考へたから加入しなかつたが、依然予の立場は相愛社と實學黨とに跨がつてゐた。これを大局の上から云へば、相愛社は當初から板垣伯を主とする自由黨に連絡を持ち、實學黨は大隈侯を主とする改進黨に連絡を持つてゐた。尤も横井派の連中は維新の際、大隈侯の爲に致されたる歷史もあり、當初はあまり接近しなかつたが、改進黨なるものが、大隈侯及び河野敏鎌一派の嚶鳴社を合して、知識と財産を標榜し來つたからには、自然漸進黨の實學派は之に傾かざるを得なかつた。而して彼等は紫溟會なる共同の敵があつたから、勢ひ相愛社と提携せざるを得なかつたのである。（昭和四年四月八日民友社に於て）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小酒井不木全集（全八卷）

（第三回配本）第五卷

闘病術及學者氣質

結核患者は遂に醫師にも、藥劑にも見はなされた。しかしたつた一つ見はなさないものがある。それは神でも、自然でもない。自分の心だ。それこそ唯一の醫師であり、藥劑であり、神であるのだ。しかし、漫然と自分の心を凝視してゐたとて駄目だ。どういふ心が病氣を征服するか。見よ。本書には詳かにその心の持方が書いてある。

ニュートンは鷄卵と間違へて時計を煮た。「ドン・キホーテ」を書いたセルヴァンテスは屢食ふものがなかつた。畫家のミレーは眼を疾ひ、音樂家のベートーベンはつんぼだつた。いかに多くの天才が迫害と貧苦と病苦に惱んだか。さうして、いかにそれに耐へたか。好學の人々に學者氣質の一讀を薦む。

配本濟

第一回（第三卷）探偵小説短篇集

第二回（第一卷）殺人論及毒と毒殺

―以下續刊―

第二卷　犯罪文學研究及近代犯罪事實談

第四卷　探偵小説長篇集

第六卷　生命神秘論及不木軒隨筆

第七卷　醫談女談

第八卷　病間錄

發行所　東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

豫約募集

牧水全集

偉大なる自然詩人の風格を賞慕せ！

わが日本のみが生み得る、眞に日本的な文學の精華として先づ第一に擧ぐべきは若山牧水の作品である。その自然を歌ふやまつたくこれと融化して自然そのものの聲となり、人事を歌ふやまた人間性そのものの流露となり、常に自由にして清新、萬人に愛誦されつつある。まことに氏の短歌こそは人麿、西行、芭蕉等の作と共にわが純粹の民族詩の最高峯として讃仰さるべきものである。而してその飄々乎として旅に出づるや、常に比類なき紀行文を物し、脱俗の風格行文の妙、神品とさへ稱せられた。氏はまた傑れたる童謠作家であり、詩人であり、小說家としての手腕も侮るべからざるものがあつた。殊に氏の書簡の輕妙洒脫にして、しかも眞情溢るるところは天下一品、たれ人の追隨をも許さぬ。いま牧水の全作品を網羅して餘すところなき本全集を手にす＊＊る者は、必らずや日本語を語る國民の一人として生れたことを感謝するであらう。牧水はただ單に傑れたる藝術家であつたのみならず、稀に見る高風の人格者であつた。本全集には到るところにその風格の豊かさが漂い輝いてをる。騷然たる現代に本全集を送り得ることは本社の欣快とするところである。

編輯顧問
北原白秋
平賀春郊
福永渙
佐藤緑葉
土岐善麿

裝幀
森田恒友

編輯・校訂
若山喜志子
大悟法利雄

全十二卷・一冊一圓五十錢

東京・芝・愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二番

牧水全集全十二巻總内容

第一巻 歌集（一）

第二巻 歌集（二）

第三巻 歌集（三）

第四巻 紀行文

第五巻 紀行文・小說

第六卷 隨筆・小品

第七卷 隨筆・長詩・童謠

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

第一回配本出來 第三卷歌集

◇堂々六百八十頁！

第八卷 歌論歌話

牧水歌話 和歌講話 批評と添削 短歌作法 (以上單行書) 所謂スバル派の歌を評す 閑話 二月の歌 最近歌壇の印象 石川啄木君の歌 我が見たる最近歌壇 土岐哀果集の印象 自歌自釋 和歌合評 互評會記事より いろいろの人の歌 選者の言葉 歌話一題 合評を讀む 批評と添削 質疑應答

第九卷 雜篇

初期の作品 短歌補遺 創作社便 歌集序文 石川啄木の臨終 外 雜文數十篇。

第十卷 書簡（夫人喜志子宛）

第十一卷 書簡

第十二卷 書簡・日記（明治卅五年、卅六年、卅七年、四十五年、大正十二年、十四年、昭和二年、三年） 年譜

締切8月31日限

豫約募集規定

□體裁 本文四六判歌集(五號)散文(九ポイント)書簡(八ポイント二段組)、一册紙數平均約六百頁、裝幀高雅無比。

□頒布方法 全十二卷 豫約者にのみ頒つ。締切期日迄に最寄り書店又は本社へ御申込下さい。

□刊行期日 昭和四年八月第一回を刊行し爾後毎月一册づゝを刊行し昭和五年七月を以て完結す。

□申込方法 先づ御申込みの際申込金として金壹圓五拾錢を御拂込み下さい。これは最後の月の會費にあてるのでありますから、最初の月の會費は別に御拂込みを願ひます。尚申込金は中途御解約の方へは御拂戾し致しません。(前金一時拂の方は申込金を要しません。)

□會費 (一)毎月拂壹册に付、壹圓五拾錢、(二)一時拂(全十二卷)十七圓。

□送本料 會費の外に送本料を申受けます。壹册に付十四錢。尚書留送付を希望せらるゝ向は別に書留料十錢を御增し下さい。東京市內六錢。書留六錢增。

□拂込方法 振替貯金又は爲替でその月の一日迄に着金するよう御拂込み下さい。但郵便切手代用は一割增に願ひます。

□御注意 特に遼隔の地に限り書店に申込まれたる方はその書店から運賃實費を御請求する事がありませうから宜しく願ひます。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◇全十八卷・一册壹圓・一時拂拾七圓

子規全集

子規の全人格を仰げ

芭蕉以來の俳聖、萬葉以降の歌聖、明治文壇の先驅者正岡子規の偉業は、實に日本文學史上燦として不滅の光輝を放つ。然り子規の藝術は正しく明治文壇に於ける一大革命であり、燦然たる大正の文藝を育んだ搖籃であつた。文豪夏目漱石の藝術も亦子規の閲開より生れ、現代の俳句及び短歌にしてその源泉を子規に發せざるはない。明治文壇の空に輝く星辰は其數固より少くないが、併し巨大にして强力なるもの、子規を措いて何人があらうか。子規は斯く明治文壇の宗師たると共に、その人品極めて清節高風、强烈なる魅力を有つた人格者であつた。されば子規の創作の何れにも些の塵影なく些の虛飾なく些の技巧なく赤裸の子規居士そのものの現はれてゐないのはない。『子規全集』十八卷は、日本文學不朽の光輝であると共に、一代の覺者が人格の標章である。今や大衆の熾烈なる要求によつて、我社に於て普及版の刊行を見るに當り、われ等は眞に無上の歡喜を覺ゆ。偏に大衆の支持に俟つ。

子規の藝術を仰げ

1	俳句全集（第一卷）
2	俳句全集（第二卷）
3	俳句全集（第三卷）
4	俳論及俳話（上卷）
5	俳論及俳話（下卷）
6	歌論歌話及評論
7	和歌、新體詩、漢詩
8	隨筆（上卷）
9	隨筆（下卷）
10	小說、紀行、小品
11	少年時代創作篇（上卷）
12	少年時代創作篇（下卷）
13	編著（上卷）
14	編著（下卷）
15	書簡（上卷）
16	書簡（中卷）
17	書簡（下卷）
18	未發表作品及年譜・書目録

第二回配本（八月上旬）第九卷 **隨筆篇**（下卷）

第一回配本濟 第八卷 **隨筆篇**（上卷） 仰臥漫錄 病牀六尺 松蘿玉液 墨汁一滴

東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二〇番

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

芭蕉・人麿・子規優劣論

いま玆に俳聖芭蕉、歌聖人麿及子規の優劣論に對し諸大家の意見を玆に掲げる。與謝野氏は讀賣紙上にて、その他の諸氏は「日本及日本人」にて論ぜられしものを抄掲す。はなはだ趣味深きものである。

與謝野寛氏　子規の業績は芭蕉人麿と對抗する。子規は歌聖にして俳聖である。

橋田東聲氏　明治文學に「眞」の生命を吹き込んだ貢献に於て子規の名は竟に不朽である。

永田青嵐氏（前東京市長）　子規の態度は恰かも芭蕉が其角嵐雪其他の面々に其特徴を發揮せしめて統率して行つたと同じ感じがする。

宮本醫學博士　子規は偉い人間には相違ない、しかし御母堂御令妹の彼に對する奉仕と愛も偉い。しかし彼子規の生活態度は却々見上げたものである。

吉村冬彦博士　子規は世の中をうまく渡つて行く藝術家や學者に對して反感を抱く……。

下村爲山氏　病中の略畫を見てもその天分の豊かさに愕く。

赤木格堂氏　其玲瓏たる人格に魅せられ又先生の透徹せる社會觀に敬服し一時は學課を休んで先生の枕邊に行かぬと心に空虚を覺えた。

佐藤紅綠氏　漱石なども先生に劣らぬほど讀んだ人だ。だが漱石は狹かつた。先生は生れながらの度量である、洋々大海の如しといふべきものだ。

寒川鼠骨氏　俳句の三聖として世間では芭蕉、蕪村、子規と並べて來た、併し私として見れば蕪村は同列に置かるべきものでないと思ふ。芭蕉と子規と並べることは辛抱出來ないでもない、覺者たる上に於て二人は同一軌路を歩んだ人である。芭蕉は狹く深く、子規は廣く強くと言ふ可きであらう。

古島一雄氏　正岡の生命がけの熱心さと眞劍さに打たれた。

中村樂天氏　子規の逸話は我々は高僧のそれの如く聞いた。

子規の評論は嚴正無比であつた、友人でも先輩でも少しも遠慮せなかつた、公人として志を抂げるは女郎に等しいと言つた。彼は貫之、景樹、定家等の歌人を何等價値なきものだとこき下ろしていた。とにかく歌壇、文壇、俳壇に業績をのこしたことに於ては日本での第一人者である。

子規の四友　子規は自分の門弟とも見るべき漱石を畏友と稱していた。そして日本海役の秋山將軍を剛友と言ひ、菊池謙二郎を嚴友と言ひ、勝田主計を郷友といつていた。子規はフランクリン、日蓮が好きであり、實朝の人物とその短歌を推賞していた。次ぎに橘曙覽、田安宗武、平賀元義の和歌も推賞していた。子規は文壇の人格者として當時誰でも一目をおいていた。そして彼に陰口をきく人はなかつたそうだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現代日本文學全集

紀行隨筆集

（附）春、嵐（島崎藤村）

（五百六十頁の大册）

八月上旬配本

（紀行隨筆集內容）

大和田建樹 大和めぐり 千里の春

落合直文 七株松 恩愛刃 弦月旗

大町桂月 迎妻紀行 かた袖 須磨の一夜

鹽井雨江 ゆく水 笛の音

武島羽衣 金明水 霧分衣 龍華寺の富士 日和つゞき 教へ子 歌御會參列記 その他

馬場孤蝶 閑時想 湖畔の秋 古き東京を思ひ出て 旅客より見たる大阪 煙霞になづみて 虛と實

平田禿木 薄命記 蟬羽子を弔ふ 三日風流 うすむらさき スミルナの花 ル・サントオル

戸川秋骨 精進行 別れ 文鳥 ミネルヴアへ

遲塚麗水 不二の高根 成都道中記

志賀矧川 日本風景論緒論 日本には浸蝕激烈なる事 日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す

柳田國男 遊海島記 木曾より五箇山へ 勢至堂より白河へ 熊野路の記 丹波市記

小島烏水 不二山に登る記 峽谷の白百合 天龍川 ヨセミテ谷と上高地 その他

吉江孤雁 御獄山の兩面 霧の旅 北國の旅 海洋の旅

河東碧梧桐 雪線踏破七日記程

阪本四方太 夢の如し

寒川鼠骨 進水式 犬と余 美哉山林

篠原溫亭 波の音 其妻のピヤノ 彼女と共周圍

東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇二

改造社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



井上準之助氏

正金銀行頭取の時代、時は寺内内閣對支西原借款事件といふのがある。時の藏相、前文相勝田主計が、井上に正金からも金を出す様持ちかけたが、明敏な彼は、其の失敗を先見して應といはぬ。いふ事を肯かぬなら馘ると脅せば、『政府の役人とちがつて、こちらには株主總會で決めた任期がありますからネ』と空うそぶいて頑張つてゐる。おかげで、臺銀や、鮮銀や興銀の様な、不良貸出しのボロを出さなくて濟んだ。これ、彼をホメる者の第一に擧げる話。

所が彼日銀總裁時代に正金の梶原を强要して今はロンドンに亡命して社會學を研究し、相當以上に赤くなつてゐる茂木惣兵衞に一千萬圓といふ大金を貸出させ味噌をつけたのも彼の經歴である。之が惡口屋の擧げる第一の例である。彼を評する場合、ほめる者と、ケナす者と七三位の割合にいつて居やうか。

常に、自分は政治には赤の他人である。政黨は嫌ひだとふれまわつてゐる男が、政黨内閣の心臓部にすわるのもすわる者だが、据ゑる者も据ゑる者だといふ論は常識的である。私にいはせれば、頼まれれば越後から米つきにさへ來る。名譽ある大藏大臣になるのは當り前の話しである。ケチをつけるならば、大藏大臣候補者がウヨ〳〵してゐる、と稱するくせに、山本達雄出でず、若槻に勇なく、前科者の片岡再用に危險あり、ノンキナトウサン町田忠治では危なつかしくて安心が出來ない、といふ、民政黨の基幹に對して申すべし。井上は人間だ。人間には名譽心もあれば、彈力性もある。常平常の持論を裏切る位の事が出來なくて教師牧師以外の何の仕事が出來るか。大いに食言すべし、これでこそ政治家としての價値があるといふもの。

とまれ、かくまれ、濱口内閣は、唯一の使命を財界の整理緊縮にをく。金解禁即行の主張の手形が振り出されてゐる。等々、この役目を果すべく、井上準之助を雇入れたのは、憲政常道にはちと反するかも知れないが、常道を屁とも思はぬ人には蚤程にも感じない。由來、憲政の常道なんかは子供欺しの大僞者様だから構はない。

組閣三日にして政府の發表した井上案を基準とする財政大緊縮の具體案は何といつても勇敢だ。金解禁への第一準備としては誠に尤もな處置で、政黨屋の黨勢擴張の實際運動にそはない新規事業見合せ等を勇敢に主張するなどは、矢張り雇兵でなくては出來ない。濱口もよく容れたと感心する。

黨人は然し決して消極緊縮政策を喜ばぬ。鐵道の繰延をやられては

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

現代日本文學全集

紀行隨筆集

（附）春、嵐

（島崎藤村）

〔五百六十頁の大册〕

八月上旬配本

（紀行隨筆集內容）

大和田建樹 大和めぐり　千里の春
落合直文 七株松　恩愛刃　弦月旗
大町桂月 迎妻紀行　かた袖　須磨の一夜
鹽井雨江 ゆく水　笛の音
武島羽衣 金明水　霧分衣　龍華寺の富士
日和つゞき　教へ子　歌御會參列記　その他
馬場孤蝶 閑時想　湖畔の秋　古き東京を
思ひ出て　旅客より見たる大阪　煙霞になづ
みて　虛と實
平田禿木 薄命記　蟬羽子を弔ふ　三日風
流　うすむらさき　スミルナの花　ル・サン
トオル
戶川秋骨 精進行　別れ　文鳥　ミネルヴ
アへ

遲塚麗水 不二の高根　成都道中記
志賀矧川 日本風景論緒論　日本には浸蝕
激烈なる事　日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、
風懐の高士に寄語す
柳田國男 遊海島記　木曾より五箇山へ
勢至堂より白河へ　熊野路の記　丹波市記
小島烏水 不二山に登る記　峽谷の白百合
天龍川　ヨセミテ谷と上高地　その他
吉江孤雁 御嶽山の兩面　霧の旅　北國の
旅　海洋の旅
河東碧梧桐 雪線踏破七日記程
阪本四方太 夢の如し
寒川鼠骨 進水式　犬と余　美哉山林
篠原溫亭 波の音　其妻のピヤノ　彼女と
共周圍

東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二
改造社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



井上準之助氏

正金銀行頭取の時代、時は寺内內閣對支西原借款事件といふのがある。時の藏相、前文相勝田主計が、井上に正金からも金を出す様持ちかけたが、明敏な彼は、其の失敗を先見して應といはぬ。いふ事を肯かぬなら馘ると脅せば、『政府の役人とちがつて、こちらには株主總會で決めた任期がありますからネ』と空うそぶいて頑張つてゐる。おかげで、臺銀や、鮮銀や興銀の様な、不良貸出しのボロを出さなくて濟んだ。これ、彼をホメる者の第一に擧げる話。

所が彼日銀總裁時代に正金の梶原を强要して今はロンドンに亡命して社會學を研究し、相當以上に赤くなつてゐる茂木惣兵衛に一千萬圓といふ大金を貸出させ味噌をつけたのも彼の經歴である。之が惡口屋の擧げる第一の例である。彼を評する場合、ほめる者と、ケナす者と七三位の割合にいつて居やうか。

常に、自分は政治には赤の他人である。政黨は嫌ひだとふれまわつてゐる男が、政黨內閣の心臓部にすわるのもすわる者だが、据ゑる者も据ゑる者だといふ論は常識的である。私にいはせれば、頼まれれば越後から米つきにさへ來る。名譽ある大藏大臣になるのは當り前の話しである。ケチをつけるならば、大藏大臣候補者がウヨ／＼してゐる、と稱するくせに、山本達雄出でず、若槻に勇なく、前科者の片岡再用に危險あり、ノンキナトウサン町田忠治では危なつかしくて安心が出來ない、といふ、民政黨の其幹に對して申すべし。井上は人間だ。人間には名譽心もあれば、彈力性もある。常平常の持論を裏切る位の事が出來なくて教師牧師以外の何の仕事が出來るか。大いに食言すべし、これでこそ政治家としての價値があるといふもの。

とまれ、かくまれ、濱口內閣は、唯一の使命を財界の整理緊縮にをく。金解禁即行の主張の手形が振り出されてゐる。等々、この役目を果すべく、井上準之助を雇入れたのは、憲政常道にはちと反するかも知れないが、常道を屁とも思はぬ人には蚤程にも感じない。由來、憲政の常道なんかは子供欺しの大僞者様だから構はない。

組閣三日にして政府の發表した井上案を基準とする財政大緊縮の具體案は何といつても勇敢だ。金解禁への第一準備としては誠に尤もな處置で、政黨屋の黨勢擴張の實際運動にそはない新規事業見合せ等を勇敢に主張するなどは、矢張り雇兵でなくては出來ない。濱口もよく容れたと感心する。

黨人は然し決して消極緊縮政策を喜ばぬ。鐵道の繰延をやられては

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

困る。港灣修築をやめては選擧に困る。新規事業一切中止と來ては、選擧區への說明に困る。個々の代議士は、國家よりも地方が生命である。井上頑張るか、代議士彼を征服するか。兎も角井上は民政黨員でないから問題だ。

それは、先きの問題。井上の人間を語らう。二十九年大學卒業。時の日銀總裁今民政黨顧問山本達雄と同鄕關係で日銀に入る。月給三十五圓。一年にして四十五圓。現總裁土方久徵と同期の行員。……やがてロンドンに派せらる。桂太郎、研究會操縱の必要上、其のリーダア三島彌太郎を正金銀行の頭取となす。三島素人なるを以て女房役を必要とす。井上乃ち副頭取となる、三島日銀總裁に轉じ、井上正金頭取となり、次で三島の後をうけ日銀總裁となる。年俸一萬圓。半期賞與三十萬圓。山本地震內閣に藏相となり三ヶ月。日本に初めてモラトリウムを施行した人。田中內閣成る。先輩高橋是淸前首相の肩書を顧みるなく、藏相として入閣、臺銀救濟其他財界救濟に大童なるの時、市來乙彥の盆倉を日銀より追ひ懇請して井上を再び日銀に入れる。若槻內閣か、二億圓の臺銀救濟案で、樞密院と喧嘩別れして野たれ死にしたる後、井上案の五億圓か天下に通用す。井上のケチヅケられる所以。

彼は立廻りが早い。ソツがない。西原借款にたてをついたといへば勇猛果斷の樣だが、若槻內閣で藏相片岡失言博士の最高顧問格であり乍ら、彼が臺灣銀行の破綻をついうか〳〵と議會でしやべり、それからそれへと休業銀行續出するに及んで、井上は九州旅行とにげを張り片岡の片腕にもなつてくれなかつた。かくの如くして彼は封建時代の馬鹿らしい單純さを有たない。隨所隨應變轉する彈力性をもつ。濱口は、男性的で、單一玉碎主義で行くと稱して居る。尤も田中內閣も組閣當初そんな宣言をした。井上が果して最後迄、濱口と協同戰線に立ち得るか？　果して濱口は、爆彈として井上を傭いれた結果にならぬであらうか？　こゝが濱口內閣への疑問である。

井上は英國流の紳士を以て自任する。品行は勿論いゝ。先づゴルフをやる。本をよむ。大日本青年會の團長である。人間がガッチリしてゐる。隙がない。正金、日銀に勢力をのばすべく、緣の世話もすれば、貧乏の始末もつけてやる。それを擴大して、和田豐治のなき後は、澁澤第二世を以て自他共に許し、財界の世話人をやる。何でも六かしい事は井上にもちこんで始末して貰ふ。ボロ銀行の合併、東洋汽船の郵船への併合、會社の創立、等々々。

政黨內閣の心臓部たる大藏大臣となり、やめたら又『僕は政治の門外漢でね』とばかりに財界世話業に逆もどりする積りであるとすれば、餘りに兩股をかけすぎやう。尤も、桂太郎が正金へ入れ、原敬が日銀に入れ、政治的敵同志の山本達雄、高橋是淸の兩方に可愛がられた兩方へ義理がある人だから、その邊の所はうまく片づけるであらう。ボロ銀行のボロかくしに賴まれた時の手腕で自分のボロ位かくせぬわけはない。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

松田源治



松田源治氏

放浪兒

床次が、憲政會に合併して民政黨を作つた時の紀念像松田源治、松田が、床次と同樣の放浪性を持つて、再び民政黨から旅立ちをしてゐたら、大臣にはなれなかつた。床次が脫黨して、後から舊本黨系の糾合を策した時に敢然として大義名文の旗をふり理論鬪爭を開始したのは松田である。殘留して、矢張り大臣に有りついた小橋一太の如きは、理論よりも便宜主義、大臣慾打算であつたが、松田は、あの厚い脣に、蟹の樣な泡をふいて、脫黨の非論理的なる所以を說いた。此の男には、小橋の樣な智慧も策もないかわりに、言ふ事に裏も表もない。そこが値打で、濱口御大に信用され、德とされ、利權者といはれる拓務へも、小橋より松田の方が安全とされた原因だと、消息通はいふ。

松田なら利權はやるまい。根が政友會育ちで、利權屋の交際は多いが、未だに私用自動車一臺も有せず、折角建てた青山の文化住宅を興銀か勸銀かへ擔保にぶちこむ位だから、利權に見はなされた樣な男であらう。此點小泉と同樣、買つてやつてよからう。それとも一つ、所謂野人である點が、小泉とたつた二人此政黨內閣の異彩として、官僚色稀薄劑になつてゐる。古い日本大學の出身、判檢事辯護士の試驗をとり、一時裁判所の小役人をしたことはあるが、それも官僚の色つく程でなく、辯護士、代議士としての生活が本筋であつた。原內閣の時、原が松田を內務省の勅任參事官にしやうといふと、蟹の樣に泡をふいて政黨人の本分を論じ、黨人が小役人になるのは墮落である、と結論して頭を縱にふらなかつた。それを、原が逆手でなだめ『君達は役人の經驗がないから大臣になつた時に下僚の事務が分らなくて困るぞ、吾輩などは役人の經驗があるから少しも困らない』とやると、彼、ポンと膝を叩いて『大臣學修業とあらば小役人でも何でも勤めます』と欣然內務省へのりこんで勉强をはじめた。稚氣、無邪氣、單純、理論鬪爭、そして自稱西園寺の親友、かるが故に、彼れは人から可愛がられる、られぬ迄も決して惡まれない。かるが故に、たとへ官舍一つない貧乏省伴食といへども、新役拓務大臣となつたわけである。沒理論の放浪兒先輩床次が七年も冷飯を食ひつゞけ、遂に道樂息子、故鄕に歸るの時、彼は、舊本黨系を代表して、小橋一太と二人大臣になつたのである、單純は勝つ。世の中はせゝこましくなつたが、

困る。港灣修築をやめては選擧に困る。新規事業一切中止と來ては、選擧區への説明に困る。個々の代議士は、國家よりも地方が生命である。井上頑張るか、代議士彼を征服するか。兎も角井上は民政黨員でないから問題だ。

それは、先きの問題。井上の人間を語らう。二十九年大學卒業。時の日銀總裁今民政黨顧問山本達雄と同鄕關係で日銀に入る。月給三十五圓。一年にして四十五圓。現總裁土方久徴と同期の行員。……やがてロンドンに派せらる。桂太郎、研究會操縦の必要上、其のリーダア三島彌太郎を正金銀行の頭取となす。三島素人なるを以て女房役を必要とす。井上乃ち副頭取となる、三島日銀總裁に轉じ、井上正金頭取となり、次で三島の後をうけ日銀總裁となる。年俸一萬圓。半期賞與三十萬圓。山本地震内閣に藏相となり三ケ月。日本に初めてモラトリウムを施行した人。田中内閣成る。先輩高橋是清前首相の肩書を顧みるなく、藏相として入閣、臺銀救濟其他財界救濟に大童なるの時、市來乙彦の金倉を日銀より追ひ懇請して井上を再び日銀に入れる。若槻内閣が、二億圓の臺銀救濟案で、樞密院と喧嘩別れして野たれ死にしたる後、井上案の五億圓が天下に通用す。井上のケチヅケられる所以。

彼は立廻りが早い。ソツがない。西原借款にたてをついたといへば野黨悲劇の戲だが、若槻内閣で藏相片岡失言事件の最高顧問格であり悟らう、然し[illegible]

片岡の片腕にもなつてくれなかつた。かくの如くして彼は封建時代の馬鹿らしい單純さを有たない。隨所隨應變轉する彈力性をもつ。濱口は、男性的で、單一玉碎主義で行くと稱して居る。尤も田中内閣も組閣當初そんな宣言をした。井上が果して最後迄、濱口と協同戰線に立ち得るか？ 果して濱口は、爆彈として井上を銜いれた結果にならぬであらうか？ こゝが濱口内閣への疑問である。

井上は英國流の紳士を以て自任する。品行は勿論いゝ。先づゴルフをやる。本をよむ。大日本靑年會の團長である。人間がガッチリしてゐる。隙がない。正金、日銀に勢力をのばすべく、嫁の世話もすれば、貧乏の始末もつけてやる。それを擴大して、和田豐治のなき後は、澁澤第二世を以て自他共に許し、財界の世話人をやる。何でも六かしい事は井上にもちこんで始末して貰ふ。ボロ銀行の合併、東洋汽船の郵船への併合、會社の創立、等々々。

政黨内閣の心臟部たる大藏大臣となり、やめたら又「僕は政治の門外漢でね」とばかりに財界世話業に逆もどりする積りであるとすれば、餘りに兩股をかけすぎやう。尤も、桂太郎が正金へ入れ、原敬が日銀に入れ、政治的敵同志の山本達雄、高橋是清の兩方に可愛がられた兩方へ義理がある人だから、その邊の所はうまく片づけるであらう。ボロ銀行のボロかくしに頼まれた時の手腕で自分のボロ隱かくせなれるはない。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

松田源治



松田源治氏

放浪兒

床次が、憲政會に合併して民政黨を作つた時の紀念像松田源治、松田が、床次と同様の放浪性を持つて、再び民政黨から旅立ちをしてゐたら、大臣にはなれなかつた。床次が脱黨して、後から舊本黨系の糾合を策した時に敢然として大義名文の旗をふり理論闘爭を開始したのは松田である。殘留して、矢張り大臣に有りついた小橋一太の如きは、理論よりも便宜主義、大臣慾打算であつたが、松田は、あの厚い唇に、蟹の様な泡をふいて、脱黨の非論理的なる所以を説いた。此の男には、小橋の様な智慧も策もないかわりに、言ふ事に裏も表もない。そこが値打で、濱口御大に信用され、德とされ、利權者といはれる拓務へも、小橋より松田の方が安全とされた原因だと、消息通はいふ。

が、未だに私用自動車一臺も有せず、折角建てた青山の文化住宅を興銀か勸銀かへ擔保にぶちこむ位だから、利權に見はなされた様な男であらう。此點小泉と同様、買つてやつてよからう。それとも一つ、所謂野人である點が、小泉とたつた二人此政黨内閣の異彩として、官僚色稀薄劑になつてゐる。古い日本大學の出身、判檢事辯護士の試驗をとり、一時裁判所の小役人をしたことはあるが、それも官僚の色つく程でなく、辯護士、代議士としての生活が本筋であつた。原内閣の時、原が松田を内務省の勅任參事官にしやうといふと、蟹の様に泡をふいて政黨人の本分を論じ、黨人が小役人になるのは墮落である、と結論して頭を縦にふらなかつた。それを、原が逆手でなだめ『君達は役人の經驗がないから大臣になつた時に下僚の事務が分らなくて困るぞ、吾輩などは役人の經驗があるから少しも困らない』とやると、彼、ポンと膝を叩いて『大臣學修業とあらば小役人でも何でも勤めます』と欣然内務省へのりこんで勉强をはじめた。稚氣、無邪氣、單純、理論闘爭、そして自稱西園寺の親友、かるが故に、彼れは人から可愛がられる、られぬ迄も決して惡まれない。かるが故に、たとへ官舍一つない貧乏省伴食といへども、新役拓務大臣となつたわけである。沒理論の放浪兒先輩床次が七年も冷飯を食ひつゞけ、遂に道樂息子、故郷に歸るの時、彼は、舊本黨系を代表して、小橋一太と二人大臣になつたのである、單純は勝つ。世の中はせゝこましくなつたが、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でも小利巧な奴より單純で押して行く方が勝つ。其の見本が松田君である。



小橋一太氏

新内閣の中で、小橋一太は、同じく舊本黨系を代表してゐるが、政治家としての輪廓は松田よりも大きく廣い。原内閣の時分、床次内相の下に小橋が次官、松田が勅參であつた。二人は、今にして、當時の反對黨の下に並んで大臣になつた。小橋は、安達謙藏と共に熊本である。憲本合同以前は、しのぎを削る政敵、それが手を握つて行ける所に政治家の彈力性がある。しかし、熊本では、小橋の方が家柄もよく、市内の出であり、安達の方は市外の庄屋の伜であり勢力も並立してゐたのに、今の位置は、事實上安達内閣で小橋は文部の伴食、不平もあらう。



俵孫一

俵孫一の大臣は、同郷島根縣先輩若槻禮次郎の推挽あり、一方濱口とは二十八年東大卒業の同級生である關係から、同郷、同窓、同情の三條件揃つての結果である。たゞ夫れだけのこと、取り立てゝ記述する程の特異性も面白味も持つてゐない。無難な醇吏。

濱口内閣は、玉砕主義で行くだらう。それは嚙りつき田中内閣よりも日本人の趣味に合ふだらう。濱口は、根は官僚でも、男性的な線の太さを持つ。兎にも角にも賴母しさうな面構へをしてゐる。大丈夫だらうといふ印象を與へる。鎌倉への週末旅行にマルクスを讀まうといふ勉強心が、時代を解釋する上に、よき學となるならば、誰よりも先づ彼の爲めに幸だ。

(七月九日)

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

狂院センスの一瞥

齋藤玉男

「宿直明けに一歩陰慘なコンクリート塀の外の世界へ出ると、慥かに明るくて空氣の比較が輕く感ずるネ」と、精神病院の宿直醫である友は言ふ。「併し外の世界へ出ると同時に或る警戒本能が活らき出して、院内で味ふ安心さが失はれることも慥かだネ」とも付加へる。

心の武裝。さうした現代生活を特色づける緊張味は院内にはありやうがない。そこは生き馬の眼を拔かれ了つた連中のクラブであるから。そこでは又階級意識と言つたやうなものも完全に轉廢されて、張りのない灰色の無差別だけが支配する。併し狂院には狂院相當のセンスは活らく。それは外の世界に思の外にナンセンスが多く轉がつて居る割合程には及ばないとしても。

愚直が惡と同義でないならば、狂院の住民は慥かに善人である。勿論彼等の或者は惡人として扱はれたい野望に燃えても居るが、彼等が惡人らしく振舞へば振舞ふ程、そこからもこゝからも善人らしい破綻が覗き出すのは可愛らしい。彼等の惡劇には相手の微笑を誘ふ小間さがあり、彼等の兇暴は言はゞ豫告された兇暴である。精神病醫として彼等に不足を感ずる點がありとすれば、それは機智とユーモアの完全な缺乏である。併しこの二つはこの民族には恐らく狂院以外にも缺けて居ると言へるには言へる。特に彼等のみを責むべきではなからう。

ところで此狂院センスは徹頭徹尾外の世界から指導され、啓發される。就中外の世界のナンセンスからも誘導される。其筋道を見守ることは彼等の爲よりも寧ろナンセンシアルな所謂非狂人の爲に或る教訓にならぬでもない。

×　×　×

議會の亂闘劇が始まる。政友席も民政席も一齊に殺氣立つて、守衛が右往左往に馳せ違ふ。見渡すところ泰然たるのは我安部先生位のものである。イヤ其安部先生すらが恐らくは内面的の亂脈に捉はれずには濟まぬらしい。尤もらしい理由はどうあるにしても一寸した議場の空氣の動揺がかうしたナンセンスに導いて、それが議會政治否認の材料となつたりする一面には、首相官邸への面會強制となつたり直訴の騒擾に切ッかけを與へたりする。世の選良諸君はどうか諸君の一擧一動が狂院の中の空想の發育にまで影響のあることを考慮して置きたい。

實際世相の逆轉なしには狂院の精神生活は萎縮して仕舞ふ外はない通りに、外の世界の賭け事は片端から狂者のセンスに何等かのイ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でも小利巧な奴より單純で押して行く方が勝つ。其の見本が松田君である。


小橋一太氏

新内閣の中で、小橋一太は、同じく舊本黨系を代表してゐるが、政治家としての輪廓は松田よりも大きく廣い。原内閣の時分、床次内相の下に小橋が次官、松田が勅參であつた。二人は、今にして、當時の反對黨の下に並んで大臣になつた。小橋は、安達謙藏と共に熊本である。憲本合同以前は、しのぎを削る政敵、それが手を握つて行ける所に政治家の彈力性がある。しかし、熊本では、小橋の方が家柄もよく、市内の出であり、安達の方は市外の庄屋の伜であり勢力も並立してゐたのに、今の位置は、事實上安達内閣で小橋は文部の伴食、不平もあらう。


俵孫一

俵孫一の大臣は、同郷島根縣先輩若槻禮次郎の推挽あり、一方濱口とは二十八年東大卒業の同級生である關係から、同郷、同窓、同情の三條件揃つての結果である。たゞ夫れだけのこと、取り立てゝ記述する程の特異性も面白味も持つてゐない。無難な醇吏。

濱口内閣は、玉碎主義で行くだらう。それは噛りつき田中内閣よりも日本人の趣味に合ふだらう。濱口は、根は官僚でも、男性的な線の太さを持つ。兎にも角にも頼母しさうな面構へをしてゐる。大丈夫だらうといふ印象を與へる。鎌倉への週末旅行にマルクスを讀まうといふ勉強心が、時代を解釋する上に、よき點となるならば、誰よりも先づ彼の爲めに幸だ。

（七月九日）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

狂院センスの一瞥

齋藤玉男

「當直明けに一歩陰慘なコンクリート塀の外の世界へ出ると、確かに明るくて空氣の比重が輕く感ずるネ」と、精神病院の宿直醫である友は言ふ。併し外の世界へ出ると同時に或る警戒本能が活らき出して、院内で味ふ安心さが失はれることも確かだネ」とも付加へる。

心の武裝。さうした現代生活を特色づける緊張味は院内にはありやうがない。そこは生き馬の眼を拔かれ了つた連中のクラブであるから。そこでは叉階級意識と言つたやうなものも完全に麻痺されて、張りのない灰色の無差別だけが支配する。併し狂院には狂院相當のセンスは活らく。それは外の世界に思の外にナンセンスが多く轉がつて居る割合程には及ばないとしても。

愚直が惡と同義でないならば、狂院の住民は確かに善人である。勿論彼等の或者は惡人として扱はれたい野望に燃えても居るが、彼等が惡人らしく振舞へば振舞ふ程、そこからもこゝからも善人らしい破綻が覗き出すのは可愛らしい。彼等の惡罵には相手の微笑を誘ふ鈍間さがあり、彼等の兇暴は言はゞ豫告された兇暴である。精神病者として彼等に不足を感ずる點がありとすれば、それは機智とユーモアの完全な缺乏である。併しこの二つはこの民族には恐らく狂院以外にも缺けて居ると言へるには言へる。特に彼等のみを責むべきではなからう。

ところで此狂院センスは徹頭徹尾外の世界から指導され啓發される。就中外の世界のナンセンスから誘導される。其筋道を見出すことは彼等の爲よりも寧ろナンセンシアルな所謂非狂人の爲に或る教訓にならぬでもない。

×　×　×

議會の亂闘劇が始まる。政友席も民政席も一齊に殺氣立つて、守衛が右往左往に馳せ違ふ。見渡すところ泰然たるのは我安部先生位のものである。イヤ其安部先生すらが恐らくは内面的の混亂に捉はれずには濟まぬらしい。尤もらしい理由はどうあるにしても一寸した議場の空氣の動搖がかうしたナンセンスに導いて、それが議會政治否認の材料となつたりする一面には、首相官邸への面會强請となつたり直訴狀の調製に切つかけを與へたりする。世の選良諸君はどうか諸君の一擧一動が狂院の中の妄想の發育にまで影響のあることを考慮して置きたい。

國際世相の逆轉なしには狂院の精神生活は萎縮して仕舞ふ外はない通りに、外の世界の囑目事は片端から狂者のセンスに何等かのイ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

でも小利巧な奴より單純で押して行く方が勝つ。其の見本が松田君である。



小橋一太氏

新内閣の中で、小橋一太は、同じく舊本黨系を代表してゐるが、政治家としての輪廓は松田よりも大きく廣い。原内閣の時分、床次内相の下に小橋が次官、松田が勅參であつた。二人は、今にして、當時の反對黨の下に並んで大臣になつた。小橋は、安達謙藏と共に熊本である。憲本合同以前は、しのぎを削る政敵、それが手を握つて行ける所に政治家の彈力性がある。しかし、熊本では、小橋の方が家柄もよく、市内の出であり、安達の方は市外の庄屋の伜であり勢力も並立してゐたのに、今の位置は、事實上安達内閣で小橋は文部の伴食、不平もあらう。



俵孫一

俵孫一の大臣は、同鄕島根縣先輩若槻禮次郎の推挽あり、一方濱口とは二十八年東大卒業の同級生である關係から、同鄕、同窓、同情の三條件揃つての結果である。たゞ夫れだけのこと、取り立てゝ記述する程の特異性も面白味も持つてゐない。無難な醇吏。

濱口内閣は、玉碎主義で行くだらう。それは噛りつき田中内閣よりも日本人の趣味に合ふだらう。濱口は、根は官僚でも、男性的な線の太さを持つ。兎にも角にも賴母しさうな面構へをしてゐる。大丈夫だらうといふ印象を與へる。鎌倉への週末旅行にマルクスを讀まうといふ勉强心が、時代を解釋する上に、よき點となるならば、誰よりも先づ彼の爲めに幸だ。

（七月九日）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

狂院センスの一瞥

齋藤玉男

「當直明けに一歩陰慘なコンクリート塀の外の世界へ出ると、慥かに明るくて空氣の比重が輕く感ずるネ」と、精神病院の宿直醫である友は言ふ。「併し外の世界へ出ると同時に或る警戒本能が活らき出して、院内で味ふ安心さが失はれることも慥かだネ」とも付加へる。

心の武裝。さうした現代生活を特色づける緊張味は院内にはありやうがない。そこは生き馬の眼を拔かれ了つた連中のクラブであるから。そこでは又階級意識と言つたやうなものも完全に輕蔑されて、張りのない灰色の無差別だけが支配する。併し狂院には狂院相當のセンスは活らく。それは外の世界に思の外にナンセンスが多く轉がつて居る割合程には及ばないとしても。

愚直が愚と同義でないならば、狂院の住民は慥かに善人である。勿論彼等の或者は惡人として扱はれたい野望に燃えても居るが、彼等が惡人らしく振舞へば振舞ふ程、そこからもこゝからも善人らしい破綻が覗き出すのは可愛らしい。彼等の惡戯には相手の微笑を誘ふ小間さがあり、彼等の兇暴は言はゞ豫告された兇暴である。精神病醫として彼等に不足を感ずる點がありとすれば、それは機智とユーモアの完全な缺乏である。併しこの二つはこの民族には恐らく狂院以外にも缺けて居ると言へるには言へる。特に彼等のみを責むべきではなからう。

ところで此狂院センスは徹頭徹尾外の世界から指導され啓發される。就中外の世界のナンセンスから誘導される。其筋道を見守ることは彼等の爲よりも寧ろナンセンシアルな所謂非狂人の爲に或る教訓にならぬでもない。

× × ×

議會の亂鬪劇が始まる。政友席も民政席も一齊に殺氣立つて、守衞が右往左往に馳せ違ふ。見渡すところ泰然たるのは我安部先生位のものである。イヤ其安部先生すらが恐らくは内面的の興奮に捉はれずには濟まぬらしい。尤もらしい理由はどうあるにしても一寸した議場の空氣の動搖がかうしたナンセンスに導いて、それが議會政治否認の材料となつたりする一面には、首相官邸への面會強制となつたり直訴狀の調製に切ツかけを與へたりする。世の選良諸君はどうか諸君の一擧一動が狂院の中の妄想の發育にまで影響のあることを考慮して置きたい。

實際世相の進轉なしには狂院の精神生活は萎縮して仕舞ふ外はない通りに、外の世界の嘘け事は片端から狂者のセンスに何等かの

ムペータスを與へずには置かぬ。彼等は自分の秘密が現に淺草で映寫されて居ると訴へたり、自分への逮捕命令がラヂオで放送されたから天涯地角に隱れ場がなくなつたと悲んだりする。是等は勿論二十年前にはなかつた症狀である。いづれ自分と來朝途中の某國皇子との愛の場面がトーキーになつたなぞの最新式の妄想もはぐくまれることであらう。其癖本人は五十近い寡婦であつたりする。

狂院センスが外の世界へ働らき掛ける例は、舊くは相馬事件なぞがある。多くの場合彼等の感情が餘りに一圖で、表現がかなりにもどかしい事情が、外部の人の同情を集中させて一肌脫がせる迄に燃燒させもするが、當の本人は案外差のべられた救の手に無關心であり勝ちである。併し一面には誇大妄想者のもう想の展開が、一九一六年十一月十一日午前十一時まで全世界を被征服の恐怖におののかせた事例も現前にないではない。

一般に狂院センスが外界の事象に相當敏感である割合に、外の世界は狂ひの交錯には之を人間生活の特殊相として眺め入るまでの洞察が到つて居ないことは餘儀ない次第である。藝術に於ても同じ事が言はれる。

× × × ×

謠曲の「隅田川」や所作事の「保名狂亂」や「お夏狂亂」の取廻はしには或程度便りないたど〱しさのリズムが織込まれて居るが、詞の運びや正氣と狂態との轉換なぞには不自然で態とらしい箇所が目立つ。勿論狂亂物は本來狂者を如實に描寫する意圖ではなく、狂者を假りてそこに一つの藝術境を展開させる筋道ではあるが、それにしても同じくは自然に依存した至境の展開されるのが技巧の上乘なものであらう。一體に一頓に狂氣になる仕草やフッと正氣に戻る取廻しに今一息と思はれる所があるやうに見える。

「屋上の狂人」は早發性癡呆者の行動を相當如實に描寫してある。「句樂の死」には輕快した狂者の心許なさが出ては居るものの、時々正氣になり過ぎるのが目立つ。谷崎氏の作品は性慾に執いて居るだけに、突込んだ敍述にも危な氣がない點は一等である「罪と罰」のラスコルニコフの酒場での出來事を一々我身に當て付けられるやうに感ずる工合や、後から後からと自責が湧く筋道やは、作者自身の癲癇病と思合せると凄い程度に迫るものがある。

ウファ製作の「カリガリ博士」は表現派式のセットが先づ效果を擧げて居る。夢中遊行者が乙女の美に迷つて殺意を翻すあたりは矢張映畫だナと微笑させる。結局カリガリが現實の院長に融け込んで仕舞ふ大切りも夢幻的でよい。其他の狂亂映畫は多くは狂院センスに「甘へものだ」と一概に片付けられる口である。

× × × ×

いや卒直に白狀すれば精神科の專門家が誰よりも狂院センスに輕蔑されてよい資格があるのかも知れぬ。長いこと專門の飯を食ふ中には、友人や其家族から時あつてか狂者が出來上る場面に打付かる。こんな場合正直の所「この人は事によると狂ふのではないか」と

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

言つた豫感を抱いたことは殆どない。狂つて仕舞つてから「さう言へば」と思當る節はあるにしても、それは素人でも思當る程の思當り方に外ならない。さう言へば今のところ所謂專門智識は、狂つた者に云々の行動があつて云々の結果になるとまでは見當が付くが、云々の行動がどうして現はれるか、之を現はれさせずに濟ます方法はないかの大事な點になると、大タヂタヂの姿である。

此點內に省みて少からず心細くもあり外に對して大いに面伏せな次第でもあるが、併し假りに銀行家に貸付先きの破産狀態が一々豫知出來たら、此上もなく便利ながらに扨て心の安靜は一寸も得られない結果になるであらう。この邊の兼合は聰明な狂院センスに反問して見たい點でもある。

× × × ×

白狀序でに、「狂人は心境の大凡三分五厘が狂つて殘りが健康同然であり、非狂人は心境の約三分三厘が錯亂同樣であり得て殘りが健康である」と言つたら言過ぎであらうか。場合によつては狂と非狂との相違は之よりも些細であるとも言へる。たゞ非狂人にあつては健康な部分が略々完全に錯亂同樣な部分を支配するが、狂人になると其三分五厘が殘りの健康同然に通用出來る部分を支配するだけの相違はある。

この「だけの相違」の「だけ」は併し大きな影を社會に投げる。非狂人では此「だけ」あるが爲に彼が有つあらゆる弱點惡德に拘らず兎に角環境に適應して、際どい瀬戸をするりするりと潛き拔ける。社會善に適應する通り社會惡にも適應する。狂人に至つては「だけ」を缺く淋しさに到底善人以外ではあり得ない事情から、何よりも先に社會惡に適應し了せない所に最初の破綻を曝したがる。

かくして彼等は適應能を缺くが故に、從つて社會惡を摺り拔け得ないが故に、殺傷放火其他の反社會的行動に出でもする。彼等が反社會的であることは偶々彼等が相當まで社會に關心を有つ證でもある。狂人個々は想像以上に社會に依屬し指導されるが、さて彼等同志の間には殆ど何等の交渉を持たないし、またする。此意味で狂人社會と呼ぶことは頗る無意義である。

數が物を言ふ現代にあつて非社會的孤立の存在を保つと言ふことは狂者にとつて宿命的な弱味であると言へる。彼等の存在は譬へば夏場の安氷店のガラス暖簾のやうなものである。縱には社會に依屬するが橫に同志の間には連絡がない。そしてしかく安價で脆い存在でもある。假りに彼等に橫の連絡があるとしたら、淨化市會に少くとも二名の代表者を送つて、狂權確立の提議に花を咲かせる位は朝飯前であつたらうに――。併し個々獨自の世界に立籠りつゝ外界のナンセンスに呼應して互に聊かも相干さない所に狂院センスの誇があるとすれば、是又[illegible]適な存在でないこともない。

穂積、宮崎兩博士遺著の新刊

福田徳三

前號掲載の新刊讀餘録様のものを時々寄稿せよとの改造編者の需に任せ、以下二三回續筆して見ようと思ふ。しかし編者の都合もあることゆへ、必ずしも逐月掲載を乞ふわけには行くまい。よつて此處は近く刊行せられた穂積、宮崎兩博士の遺著だけに限り、而して少し仔細に卑見を開陳して見ることにした。私の坐右には未だ數十冊の新刊書が、或は全く或は半ば讀まれたまゝに閣かれてある。其内私がついて卑見を述べて見たいと思ふものは、十數種に上るのであるが、果して其全部を掲出し得るか否か、私は其れを知らない。しかし、私の興味にして失せ去らず、改造の誌面これを許す限りは、寄稿しようと思ふ。讀者の諒察を乞ひ置く次第である。

(一)法律進化論　第三冊
神權説と民約説
祭祀及禮と法律
慣習と法律
(以上　岩波書店發行)
穂積陳重遺著
穂積重遠編

(二)宮崎先生法制史論集
(同上發行)
宮崎道三郎遺著
中田薫編

富井博士の民法原論を迎へて後幾干ならず、我々は又た我法學界の二大長老の遺著の新刊に接するの幸を有つ。穂積博士の遺稿を編纂續刊する法律進化論叢第三冊の『慣習と法律』と、宮崎博士生前の諸論文を編成した『宮崎先生法制論集』の二書これである。私はこれら三書を手にして、日本法學界の多幸を衷心から慶祝せざるを得ぬ。これらは、ひとり日本法學のモヌメンテたるに止らない、世界の學問の立場から見ても、貴重なる貢獻である。之れに反し、私は我經濟學の如何にも薄倖なることを恨まざるを得ない。若しも、法學三長老中の一人たりとも節を屈して我經濟學に降り來りてありしならば、我學の面目は今日とは著しく異つたものであつたに相違ない。私は天の配劑に對して不平なきを得ない。

さて穂積博士の『慣習と法律』は、『法律進化論』の大系中、第一部『法原論』の『原質論』中『習俗規範篇』を構成すべきもので其れは『德義規範篇』所屬の『禮と法律』につゞくべきものだらうと思ふとは、遺稿の編者重遠博士の記すところである。依つて、私は、此機會に於いて、著者の死後其遺稿中から今日までに出版せられた『法律進化論第三冊』を中心とし、兼て『神權説と民約説』『祭祀及禮と法律』の二書と併せ考へて、若干の卑見を開陳して見たいと思ふ。其に、單純な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る稱讃推賞文は別として內容について商量した紹介又は批評を今日まで見たことのないは、著者の敬畏す可き刻苦勵精に對して酬ゆる所以でないことを兼てから痛感しつゝあつた爲でもある。元より私如き專門以外の者の言ふところは一顧の値だもあるまい。唯私の此文が數千を以て算する博士門下の專門學者を刺戟して、更らに眞に學問的な批評の業を試みる人出るに至らんことを希ふの微意に外ならない。

「法律進化論」は、著者畢生の研究を集大成して、其の所謂法律動學に關する抱負を披瀝せんとする規模廣汎の大著述である。其結構は、第一卷總論中に記すところによれば、實に左の如くあるべきものであつた。

第一部　法原論

法現象發生の狀態を論究す。これを更らに三部に分つ。

(一)原形論。法律は如何なる形態を以て發生するかを論究す。其目的は、法なる統制力は、如何なる形態に於て、始めて吾人の認識に入るかを明かにするにある。

(二)原質論。如何なる種類の統制力が法律の元質となるかを論究す。其目的は如何なる統制力が法規として現れるかを明かにするにある。

(三)原力論。法律なる統制力は如何にして發生するかを論究す。其目的は、法の元質たる統制力が如何なる過程によつて公權化するかを明かにするにある。

第二部　法勢論

法現象變遷の理法を論究す。これを更らに三部に分つ。

(一)發達論。法の內因的進化、即ち人種、民性、地勢、政體、宗教、德教、輿論等の如き其法境中に自發內在する原因に基く法の進化を論ず。

(二)繼受論。法の外因的進化、即ち外民との觸接に起因する外法の模倣、採擇、及外國學說の立法裁判等に及す影響を論ず

(三)統一論。法の世界的進化、即ち法は、文化の上進に隨て常に世界化せらるゝ傾向を有し、各國民は竟に自國特有法と世界共通法とに依つて支配せらるゝに至ることを論ず。

(以上法律進化論第一册總論八頁及び第三册緒言一—二頁による)

而して、著者は、生前第一、第二兩册を刊行した。其れは、原形論前篇と後篇とを含むものであつて、前篇は、第一編無形法(これを四章に分つ)後篇は第二編成形法(これを七章に分つ)をのせてある。著者はもと全六卷十二册を以て法律進化論の全部を論述する計畫であつた由であるが、右二册を刊行したときすでに、此計畫を完全に實現するの困難なるべきを豫想し、「今や齡既に古稀に達し老將に至らんとするに及んで全部六卷の計畫中、僅かに第一部の上卷二册公刊し得たる如き遲緩なる功程にては、生前に於て計畫の半ばを成すことは不可能かと思はれて」「故に已むを得ず爾餘の部分に付ては、其順序に拘はらず、案の成るに隨うて之を別册とし、各其體系中の所屬部を示して之を刊行し其一卷を成すを萬一に僥倖せんとするもの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である』(第一册序文三―四頁)といつて居る。されば、今私が玆に紹介せんとする諸篇は、著者若し世に在らば、更らに具さに推敲を加へられ、補訂せられた上で公刊せられたではあらうが、此のまゝでも、大體に於いては、著者の意圖を遺憾なく實現したるものなるを推察することが出來る。

卽ち法律進化論第三册は、第一部の(其二)原質論の前篇をのせてゐるものであつて、信仰規範、德義規範、習俗規範の三分類中其一分類に屬し、續いて『法律進化論叢』第一册として刊行せられた『神權說と民約說』は、(其三)の原力論の一部に屬するもの(編者序文六頁による)であり、『論叢』第二册の『祭祀及禮と法律』は、(其一)原質論中の一は第一分類「信仰規範篇」へ、他は、第一分類『德義規範篇』に屬するものである。更らに最新刊の『論叢』第三册は、同じ原質論の第三分類『習俗規範篇』に屬すべきものである。今便宜の爲めにこれを表示すれば、

法律進化論

第一部　法原論

(一)原形論。＝生前刊行の『法律進化論』

　第一、第二册

(二)原質論

　(一)信仰規範篇

　＝遺著『法律進化論』第三册並に『祭祀及禮と法律』中「祭祀と法律」

　(二)德義規範篇

　＝右同中『禮と法律』

　(三)習俗規範篇

　＝『慣習と法律』

(三)原力論

　＝『神權說と民約說』

右の如くになるわけで、一部分づゝではあるが、第一部法原論に於いて著者が遺し置いたものは、重遠博士の執勞による『法律進化論』第三册と『法律進化論叢』の第一、二、三の三册とを以て、少くとも其輪廓だけは、我々の前に提示せられ得るに至つたものである。第二部の法勢論については、未だ何ものも刊行せられておらぬが、『祭祀及禮と法律』の卷頭に收められた『法律進化の話』は若干『發達論』に進入して居るのである。卽ち以上既刊のものだけについても、著者は唯計畫を立てただけに止まらず、生前其各部に亙つて、述作の事に着手しつゝあつたものであることが、明瞭に看取せられ得るのであつて、殆んど尋常人の企て及ばざる大規模の『法律進化論』六卷十二册は未完成ではあるが、單なる企てたるに止まらず、著者に於いては、其全體に亙つて商量し、推敲し、著述の底稿が出來上つてゐたものと言つて大過ないことと思ふ。此一事すでに驚嘆に値する。他の學問の領域については姑く問はず、法政經濟社會諸學の範圍に於いて、此くも廣汎にして遠大な規模を立てゝ研究を始め其結果を筆に托して著作し置いた例は、我邦に於いては、多く其例を見ざることである。著者の最も私淑すると考へられるサー、ヘンリー、サムナー、メーンと雖も、此點に於いては、一着を輸する。唯だ同じく著者が屢々引用するフレーザーの『黄金の枝』のみが、此

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れに匹敵する。我邦の學界中近接の範圍から、これに類するものを求むれば、恐らく村上專精博士の『佛教統一論』の一書が我々の知る限りに於いて存するのみである。又た其れとは著述の趣を著しく異にするものではあるが、徳富猪一郎氏の『日本國民史』は、或は、此れと對立するものと目するを得るかも知れない。其以外には、精神科學の領域に於いては、私は同一程度の大規模のものあるを知らないのである。重遠博士が、亡大人のこの大なる業績を周到なる編纂の勞を積みて續々世に出すことは、孝道の極致を發露するものであるは勿論のこととして、其の學界に寄與することの大なるは、感謝に堪へざるところである。

『法律進化論』第三册は、信仰規範の三種(一)タブー(二)祖祭(三)トーテムの中、其一のタブーを取扱つたものであつて、附錄として別に『タブーと法律』なる一論文を收めてある。(其の前半部は本文の「レジユーメ」として、讀書を助ける、其の後半部四三三頁第六行以下は、本文の未だ及ばざるところに係るが故に、必ず併讀を要する。)本文は、總論に續いて前論として第一章「タブー」の語義、第二章其本質、第三章其種類、第四章其成立第五章其分化の五章から成り、本論として、第一章「タブー」と法律、第二章タブーと主權、(觸接、近接、觀視、稱呼の四タブーに分つ)、第三章タブーと婚姻、第四章タブーと財産權、第五章タブーと刑法の五章から成つて居る。

右編次を見て感ずることは、此くの如き排列は、叙述の順序を定める必要の上からは、當を得て居るところたるには相違ないが、乍併タブーとの關係を法律、婚姻、財産權、刑法などと初めから分割したことは、分つ可からざるものを分つ所以であつて、其の爲めに、一方タブーの本質種類、成立分化を論じた前論は本論とは全く切離されたものとなつて仕舞ひ、彼處に說くところは此處に論ずるところによつて或は著しく修正せられ或は全く覆さるに至つて居りはせぬか。と云ふことこれである。タブーの本質は、單に漠然たるタブーとしてこれを見る可きでなく、法律婚姻、財産權、刑法等と其當初から本質的に密接に關係して居り、而してまた、其の關係現象其ものも、法律婚姻財産權刑法などゝ初めから分割し得られるものでなく、原始社會に於ける人類の生存の必要と條件とは一の渾一體を爲して、タブーを成立せしめ、其れが現はれて法律となり婚姻制度、財産制度、刑法現象となるに至つたものであらうと思はれる。『法律進化論』の全篇を通じて、私は著者の『オルドヌングス・リーベ』の著しく強大なるに敬服すると共に、其の餘りに順序よく排列し餘りに細密に分割するによつて、却つて本體と其發達との眞相を晦澁ならしめる嫌の勘からざるを痛感せざるを得ぬ。此事は嘗て『隱居論』を論じたときにも認め置いたことであるが、著者の學風の長所茲にあると共に其短所も亦茲に存するのではないか。剪裁陶冶の至れり盡せることは、其論述をして極めて井然たる姿を呈せしめる。其

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

れと同時に、研究對象の有機的脈絡を絶ち、前後の關係を沒却する虞なきにしもあらずと思はれるのである。

以下各章について簡單に述べて見よう。

總論中、私が最も注意に値すると思つた點は、著者が、化成法は原始的現象であり、創定法は文化的現象でありとし、國家の原始期に於いては、立法なる觀念未だ存せざりしのみならず社會の變動極めて少く人生萬事總慣に據り累世周襲して渝らざるを常としたから、法規は概ね化成法で。創定法に屬するものは、極めて稀であつたことを力說し、而して『獨り民族の移住は其生活の環象の變化の爲めに全然新たなる生活の需要を生じ、隨つて其文化の程級に比して新規範の創定を見ることが多い……イスラエル民族の出埃及及移住の如きは其最も顯著なる事例であつて……畢竟此大豫言者（モーゼ）をして大立法者たらしめたものは、イスラエル民族の大移住である』（一四—一六頁）と主張することこれである。私は嘗て『日本經濟史論』に於いて、次ぎの如く主張したことがある。『私の見るところを以てすれば今日世界に於ける總ての植民人と同じく大和民族も亦今日住する所の土地を初めから領有したのでなく、故國を捨てゝ故國よりもより良き生存條件を得やうとして、活動の新天地を開拓しなければならない樣になつたのではないか。斯う云ふ事實は殊にブレンタノ及其他の學者（例へばアイガイル等）の說くところで、外國に移住し來れる者を觀察すれば、其故國を去り全然異なれる條件の下に生活を營むの已むなきに至れる事實が人の全張力の喚起に與て大に力あることを證明して居る。而して此見解は、また大和民族が其勢力範圍を擴張するに至つた所以を斷ずるに當つて重きを爲す所である。』（經濟學全集第三集五八——五九頁）

著者は或はマルクスの唯物史觀論を考慮の中に於いてゐなかつたものであらうと思はれるが、移住による生產——從つて流通——諸事情の根本的變革が多くの新しい法律を作り出すことを力說する點に於いて、唯物史觀中の——私の見るところによれば——正しき部分を十分に認承してゐたものとも云ひ得るかと思ふ。『民族大移動』（フエルケル・ヴアンデルグ）の事實を度外視しては、今日の歐羅巴の經濟的——而して法律的——文明はこれを理解することの出來ないことは、「エキソダス」を度外して、イスラエル文明を談じ能はざると同樣であり、又た更らに、歐洲よりの移住てふ事を無視しては、今日のアメリカ文明を知り能はざると同樣である。更らに著者は『昔は神でさへ鎖に縛られてゐた』とのボロツクの言をあげて、英主暴君の大改革と稱するものも國法の全體に影響を及ぼす如き場合は極めて稀である事實を指摘し、要するに、原始的立法は既存社會規範の公認化に依つて漸成し、文化的立法は、新生業因の規範化に依つて達成するもので、其差の起る所以は、原始社會は靜止若は漸動狀態にあり、文化期に於ける社會生

活は常に變動狀態に在るが爲めであるは勿論であるからと論じてゐる。然らば、此の靜止對變動狀態の起る所以が何に存するか、著者は其處に於いては說いておらぬが、生活需要の變化を以て明かに一の大なる要因と認めて居るのであるから、經濟事情の差異に少くとも一部の說明を求めようとするものであることは、これを察知し得るのである。經濟學者ならぬ著者が、更らに其の經濟事情を精査して、其處に生產事情の變化生產力の變化――而して、並びに流通事情の變化――を現出せしめなかつたのは無理ならぬことと言はねばなるまい。しかし、原始時代のみならず凡て一切の時代を通じて生產事情の大變化を將來す一の大出來事たる民族的大移住の重要性を明かに看取したことは、著い意味、正しい意味にての唯物史觀の長所と默契するところあると言つても差支ないと思ふ。

著者は法の原質たる社會的規範を（一）民衆の超自然的信仰によつて形成せられる信仰規範（二）德義觀念によつて形成せられる德義規範（三）社會生活狀態より生じたる慣行によつて漸成せらるる習俗規範の三つに分つ可きものとしてゐる。これは一應尤なる見解である。しかし、私を以て見れば、其れは、餘りに形式的な見方ではないかと思はれる。信仰、德義、習俗と分けて見ても、社會生活の規範の抑も因つて出づるところ、並びに其相互間の推移變遷を支配するところの大なる力は、此くの如き形式的分割の爲めに、其眞相を沒却しはしないか。著者は西洋の學者の多くが、タブー發生の原因を外物に對する不安狀態より生じたる恐怖（四四頁）に歸するの謬見を非難し、これ文明人の心理を以て原人を觀察するの誤に陷れるものなりとし、『泰西の學者が多くは、ポリネシア、オーストラリア、アフリカ、アメリカ等の土蠻の現狀を視て、恐怖をタブーの原因と爲すは、現時の野蠻人を原人なりとし、其社會は人類の原始狀態を示すものなりとする誤謬より生じたものである』（五二頁）と斷言してゐる。私は此斷案に全く服從する。其れと同時に、著者が、タブーを以つて、人類の『保全本能』より生じたもので、就中保全作用中最も重要なるものゝ一である『離隔』の作用を爲すことを其本質とすると主張するも、亦私の全く贊同するところである。乍去此說明は、問題の解釋を半途にして止めたものと見るべきではあるまいか。何となれば、離隔による保全作用が何故原始社會に於いて、左樣に重要なる要求の對象であつたかの問題は、これによつて說かれてゐないのであるから。何故、保全と云ふことが左樣に必要であり、而して、今日の社會に於けると異り殊に『離隔』てふ保全作用が左樣に重大な役目を演ぜねばならなかつたか。著者はこれを說いてゐないのである。

著者は、『神、靈魂、惡魔等の超自然力の存在に關する觀念は、人類の智能が稍々發達した後に生ずるもの』（五一頁）となし、現時南洋を初め多くの土蠻が[illegible]を恐れてタブーを

嚴守するは此保全本能より生じたる忌避の習俗が第二期に入り、物に存する精靈又は物外に存する靈魂の祟を恐れて意識的に之を守るに至つたものとしてゐる。私も亦左樣に思ふ。しかし、其『第一期』を單に生物に普遍的な保全作用に歸し、其を以て、『人類間に此習俗の發生した第一原因を究』（四七頁）めたものとしてゐるは、說いて未だ盡さゞるものではあるまいか。言を換へて云へば、其れは『タブーの上流に溯つたものではあるが、未だ其源泉を究めたものでは無い』（四七頁）のではあるまいか。

私は決してマルクスの唯物史觀を其儘に卒ずるものではない。乍去、タブーの起源、其の本質の唯一つの問題だけについても、著者が今少しく、唯物史觀の含み居るところの眞理について商量することなかりしを、甚だ遺憾に思はざるを得ざるものである。著者は第四章タブーの成立の條に於いて、タブーは恰も法に慣習法、成文法あるが如く、或は慣習に因りて存し、或は設定に依りて生ずるものなるを說き（六三頁）、君主、酋長、豫言者、僧侶、巫祀等が特種の事物に對して禁諱を創立することあるを論じ、これについて詳しく、宣言、標示、觸接の三種あることを叙述してゐるが、慣習に因るタブーについては、其條下に於いて、些も成立の體樣を論じてゐない。即ちこれだけについて判斷すると、著者は設立に因るタブーの方に重きを置いてゐるのである。而していふ『タブーを創立することを得る者は通常人民より或は半神なりとして崇敬せられ、或は神通力を有する者として信仰せられ又或は智勇超凡にして衆民より畏敬せらるる者等であつて……此くの如き精神的權威を有する者は、何人と雖も、タブーを設立し得べく、殊に高僧、豫言者の如きは、最も普通にタブーを設定して之を宗教上の戒律と爲すものである』（六三—四頁）又『通常人はタブーを創立する能力を有せざるを常とするも、時としては慣習に從ひて之を設定し、又は他人の創立したるタブーを犯る事物に付て設定することを得‥例へば慣習に因つて生じ又は國王の創立したる方法に從ひ自己所有の椰子林へ注連繩を張るときは何人と雖も其林中に入ることを得ずとするが如きものである（六四頁）』と。此一條は『共產宣言』を一度たりとも讀みたることある人には、恰かも彼の條の說明たるが如くに響くであらう。マルクス・及エンゲルスは、原始民及は野蠻民については、モルガンの研究以外餘り接する機會を有たなかつたし、また『共產宣言』の組み立ての上から其れに觸れる必要を多く感じなかつたものと見へて、其れに論及すること甚少いが、穗積博士のタブー成立論こそ彼等が殘し置いた遺漏をいとも有力に例證するものなのである。クノーの經濟史にまで趨り行く必要は玆には全く有しないと言ふも過言ではあるまい。

半神、神通力者、智勇超凡者、君主、酋長、高僧、豫言者は、其の『アウスボイトング』を『保全』す可くタブーを設定する。其以外の所謂普通人には、其例に均霑してタブーを設

定するによりて『アウスボイター』となり得るのである。『保全』は人民一般の爲めにも行はれるが、『アウスボイター』の爲めにも亦有力有効に支持せられるのである。人民一般の保全とは、其の經濟上の必要、其生存上の必要――其れは單なる生物に普遍的なものも含むに相違ないが、すでにタブーとなるときは、何れも社會的なものである――より來るもの、恐らく大部分、否、殆んど全部を占めて居るのではあるまいか。認められたるタブー設定者の爲めの保全も亦自然物生産物の獨占とアウスボイトングの便利の爲めにするものが、大なる部分を占めて居たのではあるまいか。タブーとは『之を諱め』『之は禁ぜられたるものなり』『之れに遠かれ』とのアウスボイトング又は獨占意思を社會的に保全する謂であらう。恐怖は其保全を確保する一の方便であつて、決して發生原因でないことは、著者の力說するところの確說と見る可きであらう。

トーテムについては、既刊分には未だ所見はないが、私は其れが食料確保――食料濫用の防止、食料資源の擁護並に涵養――てふ經濟的必要が、主たる原因であり而して支持者であることを、拙著『流通經濟講話』第四、五の兩卷に於いて詳論して置いた。其れは主としてスペンサー及ギレン兩氏並にホウキット氏のオーストリア土人についての記事について立論したのであるが、私はこれら三氏の研究は少くとも著者の用ゐたフレザー以下諸學者の研究と同樣に敬聽せらるべきものと信ずる。而して私は今著者のタブー研究に接して此の見解をタブーの成立と其支持に擴張するの可能性の大なることを認めざるを得ざるものである。

又た私は、我邦に於ける貨幣の起源は、祓除の習俗と密接な關係を有つものではないかとの說を久しい以前に公けにしたことがある。我邦上古の『ツミ』『ケガレ』は、一面に於いて債務を意味する。『ツミ』『ケガレ』を祓ふ『ハラヒ』は、債務を償却する『ハラヒ』と同じものと見られたのではないか。『ツミ』を祓ふ『ハラヘツモノ』は、即ち借金を拂ふ『ハラヘツモノ』で、御幣は即ち貨幣であつたのではないか――『汝穢れたり』と云ふは、『我は汝をアウスボイテンする後』と云ふと同一事であつて、此の『穢れたり』を多く言ひ得る人は、亦た多くアウスボイテンし得る人である。『穢を祓へ』とは、『汝快くアウスボイテンされよ』と云ふと同一事である。即ち穢を祓ふ可く財物を引渡す、其用具は、一方に祓具祓柱であり、他方に貨幣であつた――と云ふのが、私の見解であつて、未だ一の反對論をも構成論をも見出さないが、私は此說必ずしも一の獨斷論として斥けらるべきものとは思はないのである。（著者の詳論する『忌』を以て姓とする忌部氏は、我邦最初の徵税總監大藏大臣であつた樣に考へられる。『イム』ことは、同時に『ハタル』ことであつたを推知し得ると思ふ）タブーと貨幣タブーと經濟的流通（殊に貢献、徵發的流通）との關係については、先人に研究のあるを未だ聞いて居らぬが、私は其れは他日有為の學者によつて必ず

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

取上げられる問題となるであらうと考へて居る。

之を要するに、著者が其『前論』に於いて、タブーの本質、種類、成立、分化について論ずるところは、何れも本論に於ける法律、主權、婚姻、財産權、刑法とタブーとの相關關係について論ずるところによつて、或は少しく或は著しく修正せられ、補訂せられ又或は翻さるゝを免れないのであつて、著者の『オルドヌングス・リーベ』は玆に著しく其論述に累するものと見ざるを得ないのである。法律、主權、婚姻、財産、刑法等から捨象し去つた抽象的なタブーなるものは、決して存在しては居らぬのである。然るに著者の前論は、此れらの具體相を捨象し去つて、唯だ全體的にタブー其ものを論じて居る。從つて其描出するタブーは現實のものとは著く遠ざかつたものであることになりはせぬかを恐れる。

此くて、著者は本論に入りて、右等各項に分けて、夫れ〲タブーとの關係を考察して居るのであるが、此の分劃其れ自身多少無理なものゝ様に思はれる。元より論述の便宜上分劃することは差支ないこと、否爲さねばならぬところであるが、其れに先つて、法律、主權、婚姻、財産、刑法の一切を通じて、其處に具象的なタブーの全面目を捕捉することが、第一に爲されねばならぬ仕事であつたと思ふ。著者が左様せざりしことは、論ず可きことを論ず可きところに論ぜず、而して論じて甚だ力弱きところに却つて詳細の論究を下して居るが如き觀を呈することとなつたと思ふ。以下此一事を念頭に置いて、各章を吟味して見よう。

本論第一章は『タブーと法律』と題する。著者は其章の始めに於て、原始的宗教の戒律であつたタブーが如何なる過程に依つて原始的國家の法規に爲るものであるかとの問を起し（八六頁）其れに答へて、「主として政治上の原始的首長は同時に原始的宗教上の首長であつたことに因る」となし仔細にこれを説いて居る。成程これは一應首肯し得られる説明である。しかし乍ら、然らば、何故原始的政治首長は同時に原始的宗教首長であつたかのより根本的問題は釋かれて居らぬのである。玆にも、唯物史觀は、より深き洞察を與へるものではあるまいか。政治首長と云ひ宗教首長と云ひ、其様な區別は必ずしも判然して居たものではない。其時其事情に應じ或は政治的に、或は宗教的により多く發動するであらうところの首長は、必竟するに首長であると云ふ一事に、其一切が盛られて居る。而して首長であると云ふことは、其社會に於いて公認せられた社會的獨占者、社會的排他者、社會的アウスボイターたると云ふことに其の本體を有つて居たのではあるまいか。然るに著者は第一章を結んでいふ『相互不侵は共同生活の第一要件である。相互扶助は共同生活の基本要件である……交互表裏を爲すもので此二者互に相待つて始めて總ての社會生活を完ふするを得るものであるが強て其發達の先後を云はゞ相互不

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

侵は相互扶助の前提とも稱すべきものである』(九〇頁)と。私を以て見れば、此の斷案は余りに形式的であるのではないかと思はれる。相互不侵と相互扶助との存在は成程著者の云ふが如くであらうが、其れより一段前に、一方は大いに侵し、他方は大いに侵される二つの民種が先づ相集るにあらざれば、社會なるものは成立しないのではないか。相互に侵さずと云ふが如きことは、今日の發達した社會に於いても、決して十分に實現せられた原則と云ふことは出來ない。むしろ相互に侵し合はんと欲する人々が、一の侵略上の分業社會を形づくり、侵すことを專とする者、侵さるゝを常態とする者と、少くとも經濟上に於いて、生產條件の原始的配分關係——マルクスの成語——が成立するところ、其處に社會は稍ゝ堅固なる而して稍ゝ安全なるものとして成立するのではあるまいか。而して、此分業が自ら相互扶助の用を爲すのであつて、其れは同時的に成立つので、著者の主張する樣に、其間先後の順席は認められないのではあるまいかと思ふ。(これは必ずしもクロポトキンの相互扶助論を待つ必要のないところと思ふ)。相互扶助は決して平等的扶助ではない、上下的、差等的扶助である。否其れでなければ、社會的扶助は發生し得ないのではあるまいか。

かくて、私は著者が『タブーは法律前の公的規範である』(九〇頁)との言に若干の疑を抱かざるを得ぬ。何となれば、大いに侵す一方と大いに侵される他方との相集つて作る相互扶助社會は、私を以つて見ればたしかに厳かに統制せられた社會であり、其社會の秩序は、これを明かに一の法的秩序と見るべきが如くであるから。即ちタブー社會の規範は法律其ものであつて、法律前期のものではないのではあるまいかと思はれるのである。タブーは原始社會に法律を與へ、又た其の經濟秩序を與へる。生產——アウスボイトングの成立——は其規範の下に行はれ、流通——アウスボイトングの固定體樣たる——は其規範に從つて行はれ、而して、貨幣——其は、公認せられた『アウスボイトングス・ミッテル』として發生する。貨幣論の本に書いてある發生論は、多く全く正鵠を失してゐる——も亦此秩序の中に成立すると見る方が、實際の進化の跡により近い見解ではあるまいか。

次に、第二章タブーと主權の章については今省略して置き、第三章タブーと婚姻について一言するを許されたい。此章に於ける著者は、最近研究の最高階段に立つて居ると斷言するを得る。著者はダーウイン、ウエスターマーク、ホッブハウス、等の新説について十二分に商量して、バフオーフエン、マクレナン、又たモルガン等の舊説に盲從することを明かに否定して居る。此點に於いては、今日の唯物史觀論者は、著者によりて大いに其蒙を啓かれねばならぬ。唯だ同トーテム同姓の相婚を禁じた根本的原因の一として、嫁出による婦人又は男子の勞働力の配分、嫁資の移轉に伴ふ財物の配分が重要なる關係を有つものでないかの問題について何等の考慮を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

排はなかつたのは、法學者としては無理ならぬことではあるが、著者の如き社會學に精通する學者の研究としては、甚だ物足らぬ感を與へる。著者は唯だ從兄弟姉妹の婚姻を權利又は義務とする習俗について婚價が他人の女を娶るよりも低廉であるてふ經濟上の一事情をあげるに止るが、何故他の場合について婚價の考慮が、タブーの創定又は支持に關係を有つのではないかとの疑問を發せなかつたのであらうか。私はこれをむしろ不思議と思ふ。しかし、著者が性交の排他性をあげて、其れがタブーと重大なる關係を有つことを論じた一條は、私の悉く服するところである。更らに性交の公認性を説く亦然り。排他的にして公認的關係たる婚姻の支持の爲めにタブーは不可缺ものであつた。其れは恰も、物財について──若くは土地其他について──而してまた勞働關係について、其の排他的にして公認的なる關係の支持に、タブーが最もよく役立つたのと同じ道理に基くものである。憾むらくは、婚姻について、かく深き洞察を下した著者は再び前章に立戻つて、此の同じ道理のタブーと法律との關係について存するにあらざるかを吟味することなくして已んだ。性慾の充足と衣食住慾の充足とを全く別個の觀察の下に置くは、當を得て居らぬ。兩者には各獨自性は勿論ある。其れと共に遙かに大なる割合に於いて、兩者の間には、共通性──又は普遍性──が存する。而して、排他的、公認的關係たりてふことは、其の共通性中の最大なるものであらう。玆にも、法律と婚姻、主權と財産權など縱割的の分割を下して、斷つ可からざる連絡の糸を切り離したことの遺憾が痛切に感ぜられるのである。

(十月號續出完結)

新刊紹介

◆**加賀の千代女の生涯**(吉松祐一著。俳人千代女の百五十年忌記念として著したもの、傳記及句評の二章より成る。東京市神田西小川町二ノ三大同館發行・定價壹圓貳拾錢)

◆**綜合倫理學**(杉森孝次郎著・敢て綜合と稱した理由の一は、純全にして單一なる、當然さうである倫理學的見地からして個人基準の倫理學と、社會基準の倫理學とを兼備することが、私がこの新著に從事した主要動機であつた」……と。卷末に三論文が附錄されてゐる。東京牛込區早稻田・早稻田大學出版部發行・定價貳圓五十錢)

◆**田園・工場・仕事場**(クロポトキン著・室伏高信譯・原著はクロポトキンの思想を知る代表的のもの・東京京橋區山下町一・田舍社發行・定價壹圓六十錢)

◆**藝術としての神樂の研究**(小寺融吉著・東京神田南神保町一四・地平社書房・價壹圓)

◆**明治初年の一向一揆**(細川龜一著・兵庫縣印南郡大鹽町・和同社發行。定價壹圓)

◆**野面の風**(松崎武雄詩集・東京市外野方町上沼袋七三・詩集社發行。定價壹圓五十錢)

◆**古美術史蹟京都行脚**(川勝政太郎著・古美

術の鑑賞研究を兼ねた京都の案内記として上乘のもの參考圖寫眞等豐富・京都市東洞院二號北入・スズカケ出版部發行。定價貳圓）

◆**大地讃頌**（薄田泣菫著・草木蟲魚の別册で詩趣横溢の小品隨筆集、銷閑靜讀の好著・東京芝二本榎西町二創元社發行・定價貳圓）

◆**土の藝術と土の生活**（犬田卯著・著者年來の主張評論を集めた農民文藝論集・東京府杉並町成宗一一三農民文學社發行・定價壹圓）

◆**靜夜曲**（吉田絃二郎著・運命的な戀は信濃の山、日本アルプスの登山小屋に芽生えた。かくして哀戀純情と悲劇的運命、それがいつも山へと繋がれて展開し行く長篇力作・東京牛込區矢來町新潮社發行。定價壹圓八十錢）

◆**山水大觀**（評論隨筆家協會編・露伴藤村花袋氏を初め文人俳人畫家評論家等三十一氏の山水旅行記、夏日の好讀物・同上新潮社發行定價壹圓八十錢）

◆**國法及び國法史の研究**（中野登美雄著・收むる所、緊急命令の史的淵源、憲法と國民外交の保證、行政權に關する理想型態と實證型態、佛國憲法の變化、帝國憲法の史的淵源に關する一假說、我が軍政に於ける獨法と佛法等七章、一般國法の基本的理論の研究に傾倒せる篤學の著者の力の籠つた論文集、法科學生法學研究者の爲の好書・東京牛込區早稻田敬文堂發行・價參圓五十錢）

◆**藝術と精神分析**（フロイド著・安田德太郎譯・本郷湯島切通坂一九・ロゴス書院發行・價壹圓八十錢）

◆**重農派經濟學の人々**（山口正太郎著・重農學派の學說發生地なる佛蘭西重農學派の史的研究で、著者がソルボンヌ大學二年間の收穫の一端として生れしもの・同上ロゴス書院發行・定價壹圓八十錢）

◆**日本思想論**（永井亨著・東京牛込早稻田大學出版部・價壹圓廿錢）

◆**蒼馬を見たり**（林芙美子詩集・拾年間の作品中から好きなのだけ集めたといふ處女詩集「何だか始めて嫁入りするやうで恥かしい」といつてゐるが、底強い熱情と强い明るさをもつて歩み出た成熟振りは立派な母を想望させる・東京牛込區通寺町南宋書院・價六十錢）

◆**處世新道**（増田義一著・新處世道を說いた靑年修養書・東京京橋南紺屋町實業之日本社發行・定價壹圓五十錢）

◆**人間の本質**（木村德藏著・昨年物故した異色のあつた自然科學者の論集で科學者としての人生觀を窺ふに足る遺著・東京神田區北神保町二・新生堂發行・定價貳圓五十錢）

◆**死を前にして**（平方達雄著・熱ある教育論と隨筆集・東京市外松澤村赤堤二五・曉際社發行・定價壹圓五十錢）

◆**民謠の今と昔**（柳田國男著・民族藝術叢書中の一篇・東京神田區南神保町一四・地平社書房發行・定價壹圓）

◆**光**（井上康文著・最近愛妻を亡くされた氏の近業を收めた詩集・東京市外野方町上沼袋七三・詩集社發行・定價壹圓）

◆**赤彦遺言**（藤澤古實著・「島木赤彦臨終記」と晩年の藝術の二項よりなり十年間師として仕へた著者がその思慕熱情を傾けた結晶、大歌人赤彦氏の人と藝術を味ふによき書・東京神田一つ橋通九・鐵塔書院發行・定價貳圓）

◆**ラスプーチン**（ロシヤ大革命の裏面史譚選輯の第三輯、妖僧の詳傳と暗殺記・東京麹町內幸町一・ロシア問題研究所發行・定價參圓）

◆**日本金融資本論**（小島精一著・日本の大金融業を始め諸重要工業方面に亘り多年の蒐集資料に依り金融資本發展相を究明した好著、世界大戰以來日本の經濟界は急速度をもつて獨占資本主義の段階に深く突入し少數金融資本團による全面的獨占を實現しつゝある時必讀さるべき書・東京京橋第二相互館內千倉書房發行・定價貳圓五十錢）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

數珠茅

北原白秋

新潟の夏

夏すでに砂丘の光おぎろなし弘法麥の茅の穗のいろ

砂山の茱萸の藪原夏たけて花了りけりあはれなる花

ぼうぼうと砂丘のうねり大きなり燈臺が見ゆ赤き燈臺

港には艀ましろき船いくつ夏はさやかに雲流れ見ゆ

數珠茅に夕づく日ざし柔らなりうらがなしかも青き數珠茅（青山の墓原）

田植

彌彦の夏山霞ただならず岡上は低し遙けくし見ゆ

おほかたは田を植ゑ並めぬ道の手にたもの若葉
の照り交ふ見れば

小山田のたものはさ木の日の光若葉さわたる風
ゆららなり

こぞり出て苗ひき植うる田植笠はやおもしろし
うなかぶし見ゆ

國上行

良寛の遺跡五合庵を訪ふ

心ぐく山片附けばいちじるし蛙のこゑの田に起
りつつ

松山の椎若葉の日の明り郭公ならむ聲とほり揺
る

あしびきの國上の山の桐のはな咲きにけるかも
楓が中

國上の片山蔭の桐のはな遠く蛙の鳴くがしづけ
さ

ありやとも今はた思ふ道の端に君が忘れし愛し
鉢の子

風そよぐ板屋楓の二三もとここのいほりも夏い
たりけり

よき人の草のいほりの跡どころ楓あかりて青蛙
鳴く

おのづから雨けぶるらし眞木山のこの見おろし
に田を植ゑそめぬ

童馬山房雜歌

齋藤茂吉

この日ごろ　三首

六月のすゑになりつつ部屋に來て砂たまりをる紙帳をはづす

いつころか机に置きし耳搔に埃ふける見ればあはれかなしき

いとまなく明暮れしかば一冬をここにこもりしは數日もあらず

發妄念　一首

みなかみの激ちの音もうたがはずひとつの山に老ゆるしづかさ

昭和四年一月某日　三首

あたたかき飯くふことをたのしみて今しばらくは生きざらめやも

この通に足をとどめて古本を値切ることさへさびしくぞおもふ

自殺せしものぐるひらの幾人をおもひいだして默みつつ居り

昭和三年八月三山參拜　三首

いつしかも月の光はさし居りてこの谷間より立つ雲もなし

みちのくの湯殿の山に八月のこほれる谿をわたりつつゆく

かくのごとく常にあらぬか月山のうへにけむりをあげて雪とくる見ゆ

五月一日　二首

日比谷より左にをれて忽ちにいきほひづける行列を見つ

ととのへる街路の上を一萬人の勞働者ははしやぎて行けり

をりにふれて　六首

うしろなる立木をこめて淺草の觀音堂は板がこひせり

この世をし愛しみけれどやうやくに老いづく吾もけむりのごとし

不思議なることもあるものと吾おもふ目のまへを行く女に見おぼえあり

もろもろに立ちまじはりて居る我は時のまにしていきどほりを斷つ

章魚の足を煮てひさぎをる店ありて玉の井町にこころは和ぎぬ

氣ぐるひてここに起臥しし老人の癒りて去るを見おくらむとす

雪まつり

釋迢空

山峽の殘雪の道を踏み來つる　あゆみ久し
と思ふ　しづけさ
ひたぶるに　磧の路をあゆみ行く　ひくき
こだまは、われの跫音
せど山も　向つ峰も　見えわかれ居り。殘
雪の明り　色しづみつゝ
見えわたる山々は　みなひそまれり。こだ
まがへしのなき夜なりけり

○

人おとの遠きに居むと　山深く　屋堋覓ぎ
けむひとの　さびしさ

坐ながらに　こだまこたふる屋敷標めて、
山の深きに、おどろきにけむ
遠き世の山家の夜居や、をとめ子は、息づ
き若く　まじり居にけむ

祭りの夜

さ夜ふかく　大き鬼出でゝ、斧ふりあそぶ。
心荒らかに、我は生きざりき
いやはてに、鬼はたけびぬ。怒るとき　か
くこそ、いにしへびとは　ありけれ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

遠き世ゆ　山に傳へ來し　神怒り。この聲を　我　聞くことなかりき

昭和職人歌　番外　その二

自由勞働者

今日は　よくはたらきにけり。かにかくにからだ疲れて、滿ふ我なり

大橋の夕やけ鴉　塒に歸る心をもちて、我は越え來る

富家の女のよさや。戲れ寄る心うごきは、憎むにあらず

うち和む目に見ゆるもの　砂あげて行く自動車も、眠はしきかも

今日三日。朝ひた降りの雪あがり。風つぶして臥るが　すべなさ

窯業工人

もろともに　喰まざるべからず。飢ゑ怒る妻子を　なだめて居る心はも

我が心知らざるにあらず。ひた背向き、鏡に髪をうつしゐる妻

客間の甃　柔に乘りゐる我が足の　この幅にすら當る錢なき

よろしさは、朝のたばこの葉まきの香。つくづくに、われを　さもしと思ふ

仇の家に、あげつらひに來しひた心。崩ゆるに似たる居ごゝちのよさ

よき人に、口吃り言ふ我や　世の階級を無視すと　揚言げて來し

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

詩（懸賞佳作）

創造詩

柿山陶造

その世界のほかの世界、現實の外の現實、自然の外の自然へ、人間の外の人間へ、肉體の外の肉體へ。――（創造現實）

1. 森
2. 海岸
3. 草場
4. 湖

序詩

僕等の「創造自然」.

「空」と、「海」と、「野」と、「森」と、「山」と。

ぼくらの空は赤い色をしてゐる。
ぼくらの海の潮は赤い色をしてゐる。
ぼくらの原つぱの草は赤い色をしてゐる。
ぼくらの森の木は見てゐるうちに大きくなる。
動くのは風のためではない。
その幹はやはらかい。そして眞赤な色をしてゐる。
その幹のなかは燃えるやうに熱い。
ぼくらの山の樹には一枚の葉もない。
赤い幹ばかりの樹が生へてゐる山々。

この白と赤の世界

「森」で

――ぼくらの森の木の幹は眞赤な色をしてゐる。その

やはらかい幹のなかは燃えるやうに熱い。

或る日、僕は森の中へ女を連れ込んだ。
大きい木の前へ來ると
　女は指で幹を押した。
眞赤な幹へは入つて行く白い指。
幹の中から熱い液が流れ出た。
木がうれしそうに動く。
すると女は笑ひながら兩腕で幹に抱きついた。
白い腕と眞赤な幹。
やはらかい幹へ女の腕の跡が凹んだままのこつた。
木がずん〱大きくなる。

『濱』で
　――ぼくらの鷗は赤い色をしてゐる。

朝、岩に鷗が落ちてゐた。
「オーイ
出て來い」
船から女が裸で走つて來た。
ぼくらは岩の上で笑ひ合つた。
白い裸へ眞赤な鷗の羽が飛び散つた。

『草場』で
　――ぼくらの草は赤い色をしてゐる。

日がのぼつた。
草場で
女はもう馬を遊ばしてゐる。
僕は坂の上に驅け上つた。
白い馬だ。
赤い草。
六匹の馬のまはりを
女は走り廻つてゐる。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『海』で

——ぼくらの潮は赤い色をしてゐる。

草場から
女が馬を連れて來た。
潮の濱で
僕は海に向つて歌つてゐる。
波が踊つた。
女が海に馬を入れた。
僕は海から顔を上げた。
赤い波のなかに
女の裸と白い馬の腹が見えた。

秋草圖詩集抄

長江道太郎

きさらぎ

嚴島神社にて

はるあさき　朱の廻廊
翳りなき
さむきひざしや

しほぶけば
わがこゑ　かなし
なか庭にひびきとほりぬ

かぜ

ある日あるとき

あるかなしかに
微風のそよげり
微風はふけりと　おもひしは
うつつごころの空なるか

眞晝あかるき森さきや
ただ　しづかなり
ひのひかり

桃鳩圖

徽宗皇帝の古畫をみて

山蔭の春あさけれど
ほのかにも　たつよ
地の息(いき)

山鳩は　上枝(ほつえ)にありて
身じろがず
瞳　しづかにみまもるは
ながれゆく
ながれゆく虚(そら)の山氣(かぜ)なれ

四方清朗

つゆばれの晝のあかるさ
山やまのすがたの
影(かげ)りなくみゆるあかるさ
草原の草にうちふし
おほきなるしづけさのうち
うつしみのおもひぞきゆる
ほがらかにきえてゆきけり

牧水の追憶斷片

若山喜志子

ゐまひつつ君は涯なき暗がりにかくれ給ひきまだ不思議なり
現にはおはさぬ事のたしかなれど折々現と不思議と思ふ

この歌は私の最近の述懷であるが、人はその死後直ちに文字どほり幽明處を異にしてしまふ人と、その反對に死別の意識をますます混淆させるほど明らかに生きてゐる人とある。牧水の死が私に與へる意識は正に後者であるらしい。

私には牧水と云ふ人は夫ではあつたが、また一面他人でもあつた。他人と云つては語弊があるかも知れないが夫婦といふあまりに現實的な生活が時にお互に重荷でならない場合があつた。と云へばほぼ他人と云ふ事の說明がつくであらう。

お互がお互の長所を常に認め合つて同棲してゐた。私は或場合には彼の母となり姉となり、彼はまた私のために父となり兄となり、戀人同志でもあつた。彼が私の父でもあり兄となつた時は寂しかつたであらう、また私が彼の母となり姉であつた場合は何一層救ひ難い寂しさの底をさまよつた時であつた。

そうした風の生活であつたからお互に怠慢といふ事を知らずに二十年近い家庭生活を送る事が出來たのだと思ふ。

近來私の生活意識の中に、空しき追憶といふ魔物が座を占めて一種の霧のやうに執拗に掩ひかゝり、さまぐの亂舞をして見せる。その上季節の誘惑といふ意地わるをも連れて來てさまぐの姿態をもつて挑みかゝり、つひに救ひ難い憂鬱の森に誘ひ込む。私の生活は冷たく重く、また息苦しくてさうした奇怪な物に敗けてはゐられないのだが、時として蒼白く病める女の便りなきみじめさに浸らなければゐられない現在の狀態である。

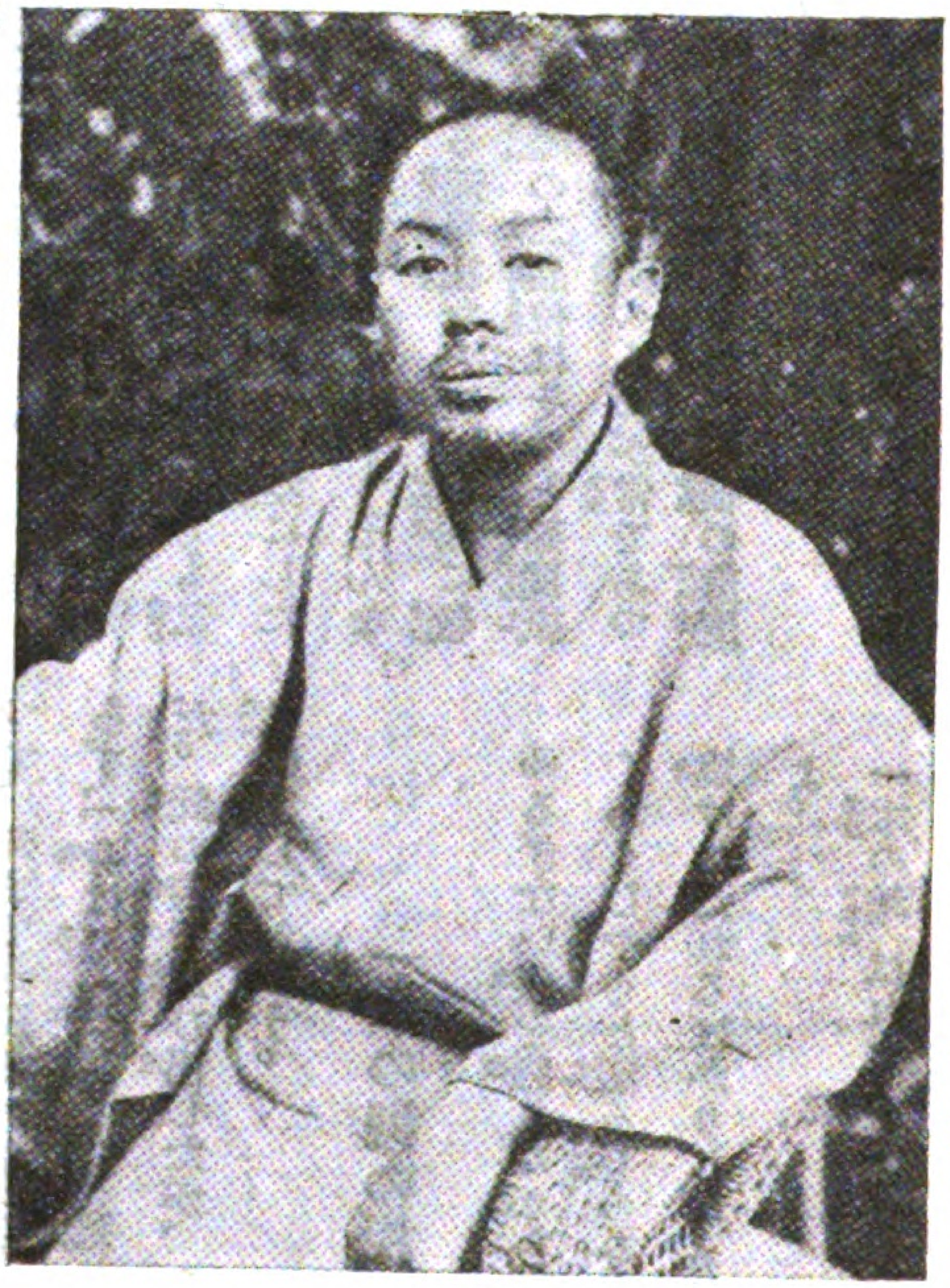
未來に光明なき者は過去の追憶に親しむ、とは古人の言であつたと思ふが、私は前途に失望してはゐないつもりだし、過去の追憶を樂んでゐるものでもない、私は夫に死別したと同時に生きる上の責任は倍加され堪へがたい苦惱をも甘受して未知の世界へ勇敢に足を踏み入れつつあるのだ、それは普通順境に惠まれた女性の一生知らずに終るべき寂しく冷たい氷の路、また痛ましい茨の路である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

いつくしみ深かかりし夫ぞ朝夕のくらしの事にも我をかばひてくに見ゆる。

牧水と云へばすぐ酒と旅泊とを聯想し、現實ばなれのした人で家庭など顧みなかつたらしく想像する人が多いやうであるが、彼は一面非常に責任觀念の強い人で時にはそれが餘りにいぢらしくさへ感じられた程であつた。で私も貧乏の味は相當嘗めたが、まだお米の一升買ひと質屋の暖簾をくゞつた事がなかつた。それだけ私たちの貧乏ぶりにはどこか暢氣な餘裕があつたらしい。

每晚の晩酌を樂しみに机の前を立つて來る彼のために、私は一日のうちの何時間かを眞心こめて臺所に立つのであつた。あらはにそれと口に出さずとも、彼の魂の照り曇りは見てとる私であつた故に、時としては盃の色や形にまで心を碎いて來たのであつた。夏に入ればいささか味がおちると言ひながらも、鰹が淡紫にかゞやき、まだ鰓の動いてゐさうな眞鰹にをし氣もなく庖丁を入れさせてお國自慢の「たたき汁」を作らせたり、見るから淸々しい烏賊のサシミに舌皷を打つたり、さうした時の彼の面影はまざまざとして季節のまどはしか知らぬが折々茶の間の緣側近くに見ゆる。



病沒直前の牧水氏

少しぜいたくだと思はれるほどの廣い庭には種々雜多の樹木が今は茂るがまゝに委せてあるが、之等の一本一本にも彼の執念が宿つてゐる事であらう。若葉のかをる五月、雨にぬれながらも咲き匂つてゐた柚子がいつか小指の先ほどの實をつけてゐる。昨年の九月、病床の彼のために私は——それは數日の後には恐ろしい死の宣告を受ける人とも知らず——明るい心で野菜スープを作り、それの香味に入れたいから貴郎の木の柚子が一つ欲しい、と云つた時珍しくも採る事を許してくれた、それは矢張り少し以前子供達の爲に七夕の竹を手づから伐つて與へた其時の意外な思ひと同じく、日頃庭の樹木に對してのみ吝嗇であつた彼がどうした事かと不思議な思ひをした事の一つであつたなど思ひ出しても佗しい事である。

思ふに彼程現實そのまゝを素直に享受し得た人も珍しからう、全く素手で何物にも直面し得る人であつた。憂愁でありながら一面濶達で、ありのまゝをありのまゝに處理する事が好きであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

また季節の推移と云ふものに對して至つて敏感であつた事も特記すべきであらう。其點彼は何か特異な體質ででもあるかとさへ思はれる程で彼の生涯の過半が旅の人であつた事でもうなづける事だと思ふ。また季節其物を味はふ意味でもあつた彼の食物の好みと云ふ風なものも、非常にデリケートで所謂しゆんの物を噛みしめて味はふ容子は、全く口で味はふでなしに全身で食べてゐた。

食物に對してさうした感情をもつてゐただけに、他家での御馳走をばおろそかには戴かなかつた。たとへば二三泊の旅先の宿などでも私が一緒にお膳に向ふ場合は、必ず箸をつけない自分の皿と、空にした私のとを取り代へておく——彼は大食が出來なかつたため——そんな事にまで心を配つた。また少し滯在でもする溫泉宿などで、板場に敬意を拂ひ得る場合だと倘更のこと、夕食の際の二品位はそつと新聞紙に包んで隱しておき、翌朝の散歩の折そつと犬に與へるのが常であつた。かうした仕種はともすると甚だ嫌味に見え易いものだが彼の態度にはさうした不自然さが微塵もなかつた。

彼は一面、淡々として水のやうな人であつた、すくなくとも私にはさうした事が云へる、それは實に物足りなくあまりにあつさりしすぎてゐた。共に十數年を暮して來てゐたのであつたが、沁々とした歌の話を語り合つたといふ記憶は一つもない、ましてや一首一首の批評とか添削とかいふことを曾て貰つたためしがなかつた。誠にとり付く島もないやうな情ない思ひをする事がしばしばであつた。

それでゐて時々に途方もない所に歌の道の行方を暗示して與れた。それは勿論彼自身も意識してでなしに極めて自然に現してくれたのである。彼はよく「行かんが爲めにゆくものこそまことの旅人なれ、心は氣球の如く輕く身は惡運の手より逃れ得ず……」といふ詩を好んで歌つた。ともすると石のやうに沈默し底暗い憂鬱に捉はれる時があつて、私まで身動きのならない思ひをさせられたが、そんな時私は必らず、「身は惡運の手より逃れ得ず——」の詩を思ひ出して心が痛んだ。此の詩で思ひ出したが、私が先年夫に捧げるつもりで作つた詩を茲に記しておかう。

一本の槻の樹

ゆるぎない根を張りながら
くわくしやくと照る夏のひかりに
燒けただれるばかりしなえ疲れる木の葉のやうなこのごろの我良人
よ。
一本の培はれてゐる草花ならば
わたしは
日傘をさしかけて居ようものを
涼しい打水もしようものを
あなたは實に、夏の日の空を掩ふてゐる唯一本の槻の木。



浮氣な文明

室生犀星

○チヤズの中

何から何まで明るく、人をそらすことの出來ない性分で、魅惑的である上に勿論不良で、情痴的には慾張りで、嘘も時々自然な形式で言うてしまふが、自身では嘘なんかは此世に存在しない程度の正直な眞實さで、寧、何時も玲瓏としてゐる氣持で、眼の下は暗い眉ずみの隈取りで巣鴨の池内ダンスホールまで通ひ、自分の家でも一週間に一度は夜會めいたものを催し、目白の目を持つお孃さん、鸚鵡の腰をもつ奥さん達、ペンゲインや庭鷄の脚をあつめた上、茄子やキヤベツの裳にあふられた、疊の埃と呼吸されて、頬が熱く、肩が凝る感傷主義で、夜會なかばに縁側に出て見れば、狹い庭の隅に今夜も耳を嚙み切られたボルゾエの雜種の飼犬が、闇の中に踊る男と女との光景を不思議さうに眺めてゐた。

「おれは時々決鬪をしたくなるんだ。」

「そこが古いんぢやない？」

疲勞の中にチヤズが快よく擽ぐり、亂雜と埃の見える電燈の明るい下で、彼は彼女を

見出し、彼女の浮いた愉快げなキラキラした眼付が、どういふ意味のものだか、それが決して純潔なものでないことは意識に浮び上つて來るのだ。さういふ考へを持つことは既に彼女のいふごとく古いのかも知れなかつた。

彼女は踊りながらチラチラと彼に笑ひかけ、その笑ひかけるなかに彼女の凡ゆる分子を意味深く表現した。彼はむつつりと對手の男の顏を見ると決闘を感じた。

そこで彼はその決闘といふ言葉を言ひ現はして見たが、女はその言葉を小氣味よい犧牲的な苛酷な感じで、親指の爪と爪との間で蚤のやうに緊し潰した。

「踊つてゐる間だけぢやない、わたしのことを氣になさるのは？」

「それはさうさ。」

「それならそれでいいぢやないの。あなたの目的はもう達せられてゐるぢやない？」

「さう言へばさうさ。」

彼は夜更けには白く光を變へる電燈の下で、今更に寂寞の情を感じた。何も言ふことはないのだ。彼はもつと正確な問題を解剖しようと試みてゐたのだが、此の問題のなかに這入ることに厭はしい煩雜さを感じた。

わたしは子供のやうな性分よ、人によくして上げたくて、人にいやがられることが嫌ひで、好きなら好きといふことに躊躇など出來なくて、厭になつたらそれきりもう何も彼も厭になるわ。男の方だつて皆さうぢやないこと、男は何時でも自分の考へてゐらつしやることが男だけなもののやうに考へてゐるわね。あれはそつくり女の方にも考へてゐることよ、だから何も彼も解らないことはないの。そんな男と女の考へることは別々だなんてことを考へるのは男の自惚れよ。女だつて好い男なら直ぐに好きになれるわ。一度逢へば好きだか嫌ひだか直ぐわかることよ。たつた一度でわかるのよ。

「そこでおれの決闘の意味が明らかになるのだ。」

「今時に決闘なんかしてゐたら、あなたの命が幾つあつたつて足りないわ。」

彼は彼女の所謂幾つあつても足りない命のことを考へる前に、さういふ彼女の高びしやな超越した、彼なぞを問題にしてゐない言葉が朦朧になつた彼は彼女に說き伏せられることが度度である習慣から、それらの習慣では單に面白くもなささうな顏付をするだけであつた。

「わたしは浮氣よ、それで間違ひがなかつたらいいぢやないの。」

「浮氣に間違ひに憑きものだ。」

「間違ひがあつたら責任を負ふわよ。」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

彼は彼女とカフェに或晩おそく、腹の足しになるものを食べに這入つて行つたが、その遅い時間はヂャズに合せた女達の唄ふ聲で一杯だつた。煙草や埃や皿の鳴る音、戯談や笑ひ聲や椅子の倒れる音のなかで、女を連れた客がはいつた時から少時森として、ひとびとは二人を夫々の解剖的な見方で査問した後、また元のヂャズのブリキ音樂が鳴り煙草が吐き出され、女達は少時續いた靜かさを取り返して喋り出した。しかしその女のなかの二三人は彼を見て親密さうに笑ひかけ、その中の一人は素早い手つきで彼のタバコに火を點けるのであつた。その鳥渡前に彼の連れた女は同じ瞬間に彼の喫むタバコに火を點けようと、卓上の燐寸に手を伸さうとしてゐるところであつた。そこで彼女のその夜の美學的な散歩の構圖は毀たれ、彼女はその圖面の上に今迄叮嚀に引いてゐたペン尖きで、その圖面の線を縱横に搔き亂すのであつた。

「アスパラカスにトマト。」

彼は柔和に言ひ付けた。

「おふたつ。」

皮肉に取れないこともなかつた。

彼と彼女はそれから十五分の間椅子の上にゐたが、彼は彼女の嫌惡さを沁々と輕蔑と冷笑とで、面白くなささうに見据ゑるだけだつた。

彼と彼女はカフェを出ると道路の上を無意味に見詰めたがら歩いたが、彼女はあのカフェに時々行くかと言ふのだ。

「あなたがあゝいふ女とあんなに親しくしてゐらしやるとは思はなかつたわ。」

「あゝいふところにゐる女は直ぐに親しくなれるんだよ、その親しさが特徴で、そいつは素的に新しい感情で禮儀や社交的な振舞さなしで、はいつて行けるんだ。」

「娼婦とかはらない女ぢやありませんか。」

彼はそこで正面に白いエプロン女を説明した。職業と戀愛、孤獨の料理人、音樂と男のなかで極端な感傷主義に陷らないやうに、お嬢さんでゐて娘さんの氣持で、女學生である上に出戻りのヒステリイを忘れないところの、白粉とお召チリメンを着て、背き黒子を施し、下宿には高等女學校三年の修業證書と一緒くたになつた身元證明書、西條八十の詩なんか生ぬるいと言ひながら、朝から晩まで戀のマルビルをうたひ、氣の滅入つた時は不機嫌に、燥いだ氣持では男の首ッ玉に噛り付き、氣質、化粧、表現、趣味では不思議なモダニズムで、嘘なんかも言はない新鮮な性格で、滅法面白くてお可笑しくて自由に見えるが、隙さへあれば東洋風な生活を築いて足を洗ひたがつてゐる可憐さがある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「カフエが無くなるなんて想像することさへ出來ない。」

「せいぜい入らしつたらいいでせう。わたしはあなたがあんな女にチヤホヤなさる方だと思はなかつた。」

カフエ論で彼と彼女は沈欝に散歩を終つた。のみならずそのカフエ論は翌日もその翌々日も彼女を不機嫌にした。

「ダンスに來る女だつて何もカフエの女と變つたところがないぢやないか。」

彼は彼女をカフエに連れ込んだことを後悔した。女を女のなかに異つた狀態でお互ひに會はせることは、犬歯と犬歯と衝き合はす狀態と同じであつた。業慾で、エゴイズムで、浮氣つぽいくせに取澄した狐で、なまぐさい口を何時も結んでゐる彼奴等の習癖で、綺麗の好い男が、大概莫迦であつても、そいつがゐなければ彼奴等の欲情が滅ることのないやうに、絶えず好い男を比較して見てゐる色餓鬼で、卑しい動物よりも最つと智性があるだけに動物的な、それで澄し返つて對手を糾詰することで遠慮のない、逆さナイフを呑んでゐる身構え。

「カフエの女を認めないなんて女のことになると君は古くなるんだ。あの女らは相當の文明を持つてゐる。」

「厭らしい文明よ。」

「君があの女等の教養と文明を攻撃する資格がないぢやないか。君は周圍にいろんな男を持つてゐて、あの女達を遣つつける純潔さがあるものか。」

「わたしは厭らしいことなんかしないわ。」

「君たちは狡猾だが、カフエの女には狡猾さはない、正直に職業的に生活してゐる。」

「あなたといふ人はカフエに中毒してゐるから、あの女達の汚ないところが解らないのよ、亂次がなくてお喋りで見てゐられはしないわ。」

彼は冷笑した。カフエの女達に劣る女がどれだけ取澄してゐることか、考へが淺くて狡るくて、缺點だけしか見ることのできない狹量さで、輕蔑することしか知らない女達だ。

「あの女達はお前たちとは遠慮深く生活してゐる。」

彼はもう言ふまいと考へた。

女と女のことを話することは天國を手捜ることよりも不可能なことだ。女は自分より生理的に弱い境遇に同情の出來る人間ではない、弱い境遇の女が今までに惡くなる一方だつたのは、彼等がくらやみのなかに同士打ちを遣り、苛め抜き打のめし合うたからだつた。何が爲に彼等は女同士をいぢめ合うたのか、他人の分までも嫉妬し合うたからだ。彼女等は同じい性の中で齒と齒とを嚙み合せながらズリ墜ちて行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

くのだ。

○何故晩食は遲くなるのか

彼は晩食をいそいでゐた。彼は同棲者である女に晩食を早くつくるやうに言ひ、その時間を待つために外を散歩することにした。空腹に映る綠の樹々の戰ぎは新しい、彼は自然に新綠を肺臟に入れて益々空腹を感じた。雜貨店、藥屋、經師屋、町、小路、空地を歩いて、最後に彼は疊屋の前を通つて二人の弟子が疊針を突き刺し合ふのを見、薄刄を研ぐ主人を見、愈々空腹のために惡寒的な身ブルヒを感じた。

彼は「家」に歸つた時に、カツと名づけた男が今日も來てゐることを緣側の長椅子の上に見出した。カツは彼より遙かに若く又美少年に近かつた。カツはフリウトを吹く彼の仲間の一人で、オーケストラを組み立てる時に彼は何時もカツをその一人に配樂した。何時頃からかカツは彼よりも女に訪問的な中心を集中させ、彼はそれを大して氣に留めなかつた。神經に障つても彼はさういふ神經を自身で感じないふうを裝うてゐた。

彼は空腹である時に激怒の情を感じるのが常であり、それが屢々彼を先刻から心理的に刺戟してゐることを感じた。カツの顏が彼の空腹の饑じい中を烈しい速力で通りぬけ、彼の激怒の度合がそれを中心にして働かうとした時だつた。

「まだ食事には間があるのよ。」

女のその言葉に先刻からの怒つた分子が一層増益するやうに感じた。女はカツと何か話を交はしカツは茶を喫んだ後らしく、彼はさういふ茶を午後からまだ喫んでないことにも氣がついた。カツは彼に叮寧に挨拶をした。彼もそれに會釋返をしながら、まだ夕食をたべてゐないのだと孤獨的な氣持で獨り言で云ひ足した。彼はさう言ふことに據つて微妙にサビシクなつて、そのサビシサが音樂的でさへある、イヂらしいものであることを感じた。

「ぢや最少し歩いて來よう。」

「ぢきにこさへるわ、もう少し歩いてゐらつしやい。」

彼は活動小屋のある裏空地に出て、堆積したゴミの山と漆喰の毀れたのとを見て、薄にごりが漂うたまゝで全く日が暮れたことを感じた。灯のはいつた町と小路とをぬけて家の前に來た時は、腹の減つたものの狂暴に近い先刻から持ち越しの激怒をまた新しく感じた。

カツはまだ緣側にあぐらを搔いてゐた。

「飯は?」

「いま、こさへてゐるところよ。」

彼は頭が變になり、變になる前に反對に鋭い優しい感情を感じ、…

が笑ひをしながら故意にいふのであつた。

「君、ゆつくりして行きたまへ。」

彼は本のある部屋に來て、かういふ自分を友人のワニに話して見たら笑はれるだらうと思ひ、ワニにも解らない氣持だとも思ふのであつた。ワニはセロを彈く男だつた。野性の持越しで、雄辯家で感傷主義である上に、何にでも口を出す彼の親友だつた。彼は氣持が弱るとワニを思ひ出して見るのだ。

彼はカツが來てゐて食事が遲れたことが頭に影響して來るのを、カツの上手でないフリユトとゝもに思ひ出した。彼は空腹よりもそれを意識する神經に負けて、グラグラと椅子が動いて感じられる激怒を次第に身に覺えた。彼は女を呼んだが急には來なかつた。やつと來た彼女は何時の間にか化粧を施してゐたが、食事はまだ出來てゐなかつた。

「何時飯を食はせるのだ。」

彼は彼女にさう言つた時に彼が机の方に向いてゐたせいであらう。實に近いところに女の顔があつた。眉墨を入れ頰べにをさした顔が下の方から見上げたゝめに、映畫をすぐ下から見上げた時のやうに變にほそ長く、滑稽にズルズルと伸びちぢみする感じであつた。

「でもお客様もあるぢやないの。そんなに早くできはしないわ。」

「おれは待てるだけ待つた。」

彼は機械的に突然に女の頰を打ち下ろした。最初は脅かして見る簡單な氣持だつた。その時はほそ長い首が普段の顏に見える位置に、彼は立ち上つてゐたのだ。「打つなら打つたつていいわ。」かういふ言葉と同時に全く機械的に二撃三撃を加へ、四撃五撃を加へたあとに彼は彼女の頰骨に應える、自身の手に痛みを感じた。

「女を打つなんてことがありますか。」

女は逃げ腰でゐて彼をなじり、貧血した顔を抱へて椅子の上に倒れたまゝ起き上らうとしなかつた。カツは彼を濟まない顔をして見てから、濡れたタオルを女の額に當てるのであつた。女には打撃が酷かつたのか、暫らく唸りながら顔色を失くして醫者を呼んでくれとカツに言ふのだ。カツは醫者を呼びに行くために彼の部屋を覗いて見たが、彼はうしろをも向かずに裏口から出て行つた。小路、町、經師屋、疊屋のある通りに出てゆくのだ。彼は同じ店の前を二度通り、三度目が最も著るしく氣持が荒廢してゐることを見出した。「これから斯ういふ狀態でゐる時はいつも毆ぐることに決めるのだ。」と彼は言ひ、「わたし意地になつてもカツを呼び込んでやるわ。」と女は意地强い、女の中で最も厭惡すべき消極的な見栄を切るのであつた。

彼の空腹は依然空腹のまま續けられ、何か食はなければならぬ狀態

にあつた。彼は停車場の四辻の角にあるカフエの中には入つて行つた。此のカフエは此間の晩に女を連れて來たカフエだつた。彼は酒と温かい食事とを摂り入れることができた。そこの女はナプキンでフオクを拭き清め、料理にソオスをかけ酒をつぎ、新しいレコードをかけることに依つて食事に音樂をあしらひ、その上彼の膝の上にこぼれた野菜のよごれを拭き取るのであつた。最後にテエブルを片づけると新しい果物を持つて來て、彼の傍に座つた儘、落着いて果物の皮と蔕とを取り除いて食べろと言ふのだ。彼は素直に果物を食べるのであつた。

彼はこれらの食事中に靜かさと料理のうまさとを感じた。彼はテエブルを離れた時に少しのチップを與へ、何か言ひたかつたが默つて外に出た。その何か言ひたかつた氣持はそのまゝ持續されて、彼の中に輝いてゐた。

彼はガードのところで偶然にワニに會ひ、今夜ワニに會ふのは嬉たい氣持をも感じた。ワニも酒を飲んだあとらしく、扨てこれから何處へ行かうかと途方に暮れてゐる退屈げな樣子だつた。

しかしワニは彼の顏色を讀むことが速かつた。

「女と喧嘩をしたのかい。」

「當てやがつた畜生。」

二人は半分巫山戲て見、半分眞面目をよそうて次第に停車場の方に歩き出した。何處かで花火の揚がる音がし、二人はそれを耳にした。

「神さまのお引き合せだよ、かういふ時にお前に會ふなんて、夜はいいし嬶なんぞ犬に食はれてしまへ。」

「おれも困つてゐたのだ。お前のこつたから大方このあたりをホッついてゐるだらうと……」

「そこで電車に乘らう。」

彼等は電車で新橋まで行き、尾張町まで乘合自動車に乘るのだ。此短かい素的に明るい、鏡のなかを走るやうな自動車は、どこか田舍から博覽會に行くのに似た、賑かな浮々したスピードを持つてゐた。「コイツは極樂行きだ。」二人は女車掌にきまりの惡い程笑ひ出した。

彼はワニとテエブルを隔てゝ二人で一筋の繩を引張り合ふやうに、酒の醉ひをしどろに感じた。音樂もよく女も素直さうであり、薄暗い濁りを帶びた內部も夜更けらしく爛熟し、就中、彼等は一樣に上機嫌だつた。

彼は彼によつて毆られた女の顏を思ひ出して見て、その歪んだ表情に痛快を感じた。口達者で、機先的に鋭くて、すぐ話の上に乘りかかつて對手の意表を衝く戰術をもつ女には、毆るより外に施す方法がなかつた。その口のうまさは先天的に彼女の言ひ逃れを速度のある、滑らかさで上達させてゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「そこでお前のやうな好人物が毆つたと言ふのか。」

「頭がサツパリするほど毆つて遣つた。女は毆ぐるより外に利くものがないやうだ。」

「男は考へ直して見る良心を持つが女は思ひ返すといふことがない、男は墮落しても這ひ上る時がある。女の墮落には行くところまで行き着いてきりがない。」

彼はワニの出駄羅目を笑うて聞いてゐるうち、女が腦貧血でも起してゐはしないかと、不安な氣持に刺戟された。カツが傍にゐて看護してゐるだらうと思うた。

「一體お前はカツの出入りを何故止めないのだ。」

「おれが來るなと言つても、女が自分で勝手に呼ぶのだ。おれは面倒臭くなつて打拋つて置いてある。」

「それでいいのかい。」

「不愉快さ。」

「では何故その不愉快を根こそぎ退治しないのだ、自分で自分の氣持に嘘をつくやうなことはいい加減に止めたがいいぜ。」

「でもカツの來る間は仕方がない。」

「來ないやうにしたらどうだ。」

「出來なくなつてゐるのだ。」

「お前は何といふハ、ロ間だ。けふ毆つたその元氣で遣つつけることが、何故出來ないのだ。」

「けふ毆つたのとは別の問題だ。」

「別の問題なものか、同じ問題を洗ひ立ててゐるのぢやないか。話をそらせることは止すがいい。」

「おれは何も逸らしてはゐない、おれはあいつらが、何をしようとおれだけが不愉快で濟むことなら文句はないのだ。」

ワニは彼と今まで眼と眼を合してゐたが、突然逸らしてしまひ、彼はさういふワニの眼付に友情的な感傷主義を感じた。さうでなくてさへ友人同志といふものは話の最中に危險な感激を經驗するものだが、ワニが一層手酷しく突つ込んで行かうとするところで、彼は兩手で止めるやうにさへした。ワニはもう言ふことがなくなり、彼の顏を時々に掠めるやうに睨んで、「おれはもう何も言はない。」と薄笑ひのなかで言つた。「お前はあの女の鎖から解けないのだよ、幾ら毆つたつて駄目だ。しかし自分だけが我慢をしてゐたら濟むといふ氣持は、鳥渡普通の人間には持てない氣持だ。」

ワニは彼の間だるい好人物めいたものに、胡麻化しと低迷主義のあることを感じた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

〇古くさい友情

彼はワニと別れて自家の前に來たが、家の中は靜かだつた。彼は女を毆つてからの時間を計算して見たが、最う五時間は經つてゐた。玄關にステッキと靴とが出掛けと同じ位置にあることで、未だカツがゐることを知り、カツの居ることで女の身體に異常があつても、手當が行きとどいてゐるだらうと思ふのであつた。彼は醉うてはゐたが、梯子段は靜かに登れることができ、二階で自分で床を敷いて寢るのであつた。

翌朝になつたが女は朝の床から起きなかつた。カツは遲くに歸つたらしかつたが、別に女は腦貧血も起さないらしく思はれた。勿論、食事の用意はないので、彼はそのまゝ出掛けようとしてゐると、ワニが訪ねて來たのを知つた。

彼は眼と手で靜かにせよとワニに注意したが、ワニは道路の方に出て、昨夜の酒で良くない血色を明るい日ざしのなかに見せてゐた。

彼はワニが女のことを心配してゐるのを知つたが、さういふことでワニが面白がつてゐるとは考へられなかつた。昨夜は默つて寢てしまつたが今朝はまだ女と顏を合さないのだと、彼はワニに告げた。彼は、何か顏を合したくない氣持だつた。

二人は赤土の崖を負うた蔭みに跼んで見たが、何も話をすることがなかつた。彼は女のことを話出す氣にはなれずに、ワニが何か言ひ出すことを何か恐怖するやうな氣持だつた。その變な恐怖は彼が今朝もまだ何も喰べてないことを感じさせた。二人は茶が喫みたくなつて近くにゐる友人のところに行つたが、留守で喉を濕すことができなかつた。喉の乾きと變な野性的な氣持とで、ワニは汚ない駄菓子屋で食パンとサイダーとを買ひ入れた。

「バタもつけてください。」

ワニはバタ付きの食パンを抱へて店を出ると、「お前も却々馬鹿だ。」と彼はついさう言つて見る氣になつた。ワニは斯ういふ飯事染みたことが好きな男であり、ワニでなければ出來ないことでもあつた。

「腹が空いてゐるだらうと持つて來て遣れば、何が馬鹿だ。」

「お前はさういふ下世話が好きな男なんだよ。」

「お前のやうな人間にはかうして遣らないと、朝飯も碌々食へないでゐるぢやないか。」

彼はワニと人家を隔れた赤土の丘の下にある、立木のかげに座り込んだ。この郊外は海岸に近く、展かれない立木や丘や草原が、至るところにあつた。彼等は拙さうに食パンを噛り、その食パンの拙さとは反對に氣持は愉快で水々しかつた。物質的に相當に生活してゐる彼等

はかういふ草原でパンを噛る經驗はなかつた。彼はワニと學生の時に濁つた氣持になり、女さへゐなければワニと二人で今でも道樂するだらうと思うた。ワニも妻を持つてゐたので情痴的に彼等は昔のやうに發展することはなかつた。

しかしパンは甘美くなかつた。彼はパンを投げ出すとワニも包を草むらのなかに沈めた。

「牛乳でもなければ食へはしない。」

彼は實感でさう言ひ、拙さうに顏を顰めて見せた。

ワニも喉が乾いたと言ひ、近くに喫茶店でもないかと物色して見たが、此の村落と田園を合せた郊外では、停車場に出ないと一軒の喫茶店すらなかつた。

「お互に女を持つと一層友情が切實になるぢやないか、感傷的なものさへ實際的になる、女ができると友情が稀薄になるといふ說は嘘だ。」

彼は頭に家に臥てゐる女のことが絡み、絡んで來るためにワニと一緖にゐることが退屈で苦しいやうな氣もした。けれどもワニと會つてゐない譯にはゆかなかつた。何も話はなかつたが默然と二人で居るだけの、意味のない、しかも離れられない變な友情を感じ出した。

女は彼とワニとの友情には交渉しなかつたが、何時も女はワニのことでは女らしい見解を持つてゐた。「ワニさんはわたしのことを嫉いてゐるのよ、わたしが男の人と交際してゐるのでスッカリ妬いてゐるのよ、あなたと暮してゐるのさへ或ひは妬いてゐるのかも知れないわ。あなたとは古いお友達なんでせう、それをわたしが皆奪つてしまつた感じよ。」或時女がワニの嫉妬めいたものを注意したことを思ひ出し、けふ態々逢つて來たことや食パンを買つて來たことを、彼は女の言葉と關聯して思ひ出した。「彼奴には多少さういふところもあるが、しかし彼奴は自分の考へ通りを友人にも生活させようとするところがあるよ、おれ達の生活も彼奴の意見通りのものになれば、彼奴は何にも言はないのだ。」

彼は女と諍つても今日のやうに朝食を外で食べるほどのことは、今迄に一度もなかつたのだ。彼はワニが自分の家があるのに態々拙い食パンを一緖に食べてゐることが、お可笑しくもあり感傷的にも見え、いかにもワニらしいおせツカイだと思ふた。

「そこで今日をどういふふうに暮らすつもりだ。」

ワニは突然さう言つて奈何にも一緖に「今日」を暮らしてもよいといふやうな顏をした。

「考へてゐないんだが、何處かへ行かう。」

彼は何處へ行つても興味が無いばかりか、ワニと一緖にゐても氣拙

の變化はなかつた。却つてワニが女のことを言ひ出すことで、氣分の重みが加はる感じであつた。彼はどうしてよいのか分らない、只、ワニと歩く方向へ歩いて行くだけだつた。

「おれは當分女には物を言はないつもりだ。そしたら少しは懲りるだらう。」

「ナカナカ。」

ワニは頭を振つて見せた。

「君が無言でせめて二日も暮らせたら大出來の方さ。」

「ばかを言へ。」

○フリユトを吹く男・その一

女は醫者が來て輕い腦貧血を起したと言ひ、その翌々日も起きなかつた。夕方、起きると直ぐカツが來てゐて、女は上機嫌だつた。カツも彼を訪ねるよりも女をたづねる氣持を明瞭にあらはし、その意識が度重なるごとに一層彼はカツを見るごとに脅迫めいた恐怖を感じた。その恐怖は極く稀薄な惡寒のやうなもので、厭だとか煩さいとかいふ感じ以上に大膽なカツを怖れる氣持だつた。もつと約めて言へば彼は彼自身の氣持にダルイ溜息をつくものに似た、輕い厭惡を感じてゐた。カツはさういふ弱つてゐる彼の氣持の上に乘しかかり、その際彼は呼吸苦しい思ひでカツを見るより外はなかつた。

カツは椅子の上に横坐りをしてフリユトを吹いてゐた。そのフリユトは女に聞かせる爲に吹いてゐるものに違ひなかつた。女は彼に諷刺がましい高聲で話し、笑ひ聲を立てゝゐたので、腦貧血も嘘だとしか思はれなかつた。「本統にお臥りになつたのなら醫者として少し御注意しなければなりません。」醫者がさう言つたと女は言ひ、「頭がズキズキするわ。」と憎體に彼に向うていふのであつた。女が醫者にさういふことを訴へたのも、彼は沈んだ氣持で心に女の本體的なものを感じた。彼には女を憫む氣持と輕蔑する氣持とがあり、憫れむ氣持は音樂的なデリケエトな感情から來るもので、輕蔑するものはカツの人物の輕薄さを認め乍ら交際してゐる女自身の粗惡な感情から來るものであつた。彼は彼等の發展を信じなかつたが、女の中に樣々な氣持の含んでゐることは試驗的に見ることができ、彼が何時かワニに話したモルモツト說は當つてゐると思ふた。

「我々はそのモルモツトを嚴格に縛して置く必要はないよ、モルモツトの生活が數寄なだけ實驗的な効果がある譯さ。」

「だが實驗範圍のなかにゐる間はいいが、モルモツトも野性を帶びて來れば却々捕まへられるものではない。成可くモルモツトはその檻の中に靜かに飼つて置くべきではないか。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ワニは笑ひ乍ら君はそのモルモットに手を嚙まれるだらうと言つたが、彼はそれ程の重大さを感じなかつた。

彼はかういふ種類の女が殖えることは考へてゐたが、今の時代は孰方に取つても影響なしに生活できないと思ふた。女は女で勝手な友人的な社交を持つことはよいが、同時に經濟的にも獨立した財産と收入を持たない限り、その生活發展を爲し得るものではない。

女はかういふ彼の持論からタイピストの口を彼に話し、そこに勤める可能を彼に告げたことがあつた。彼はその勤め口の發見さへも一つの彼へ對するオドカシの類だとしか思はれなかつた。

「兄さんに賴めば何時だつて獨立して見せるわ。」

「ではさうしたらいいだらう。」

彼女は本鄕の兄の家を訪ねて行き、何時でもさういふ職業のあることを彼に聞かせた。彼女は二三日の間タイピストのやうに明るい動作とそれらの教科書に打込んで讀んでゐたが、その亦二三日の後はタイピストのことは一切口にしなかつた。女の怠惰と年齡と生活垢とは身輕に女を自由にさせない、だが女はカツやカツの周圍の男などと交際することは依然平氣であつた。「わたしだつて自分の生活もあり友人もいるわ、男にだけ自由があるなんて其麼時代ぢやないのよ。」女の見當違ひの戯理であるやうに見える此の買ひ物は、決して彼の前でも遠慮されることはなかつた。「あゝいふのは雜誌病のやうな走り種で、所謂會の記事やモダンの穿きちがひのやうな奴で、かういふ病氣がいまの日本に流行つてゐる不潔分子なんだよ。思想的に消化するには面白すぎる問題だから、直ぐに生活や生活態度のなかに模倣されてゆくのだ、だがかういふ買ひ物を擔いで廻つてゐる女もすぐにヘタ張つてしまふよ、幾らアライ着物を着たつて年齡は匿しきれないやうに、その傳統は壞さうと幾ら焦つてもがいても、カラダが言ふことを聞かないのさ、カラダを獨立させる迄はあいつらは買ひ物とダンスをしてゐるより外に仕方がない、あいつらが我々の生活から分離して獨特な計營的な生活をはじめた時には、買ひ物が無くなり本物になる時なんだ。今のところは單に浮氣と輕薄さを時代的に利用しただけに過ぎない。」

ワニは彼らしい動物的な打つかり方でさう言つたが、彼はこの言葉のなかにも肯づくものが感じられた。しかし彼女らが獨立的な氣持を建てようとしてゐることは、彼にも否むことが出來なかつた。彼は女と彼の中にある時代や好尚や愛情や文明といふものの微妙さを、輕蔑な女のなかにも認めない譯にゆかなかつた。

彼は亦彼女の好きな男が、何時も卑俗な種類の男で、女は自分と同じい程度かそれ以下の男でなければ關係的にならないことも、彼に取つて女の持つ宿命的なものとしか思へなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「それで彼の男をお前はおもちやにでもする氣かい。」
「そんな氣はないわ。」
「では一體どういふ意味なんだ。」
「たゞ好きなだけよ、その外の何んでもないわ。好きなといふことが意味の凡てに當るわ。」
「それで。」
「それで皆わかるぢやないの。」
彼はこれ以上女に打込む氣も起らず、對手と彼との氣持の相違のかうも烈しい時は、何時も默るより外はなかつた。もう一つ「好きだから仕方がないわ。」といふことも殆ど眞理に近い言葉であり、それの奧もあとも前も無いものであつた。只、それだけに盡きてゐるものとしか思はれなかつた。
「そこでお前はお前の生活を展開することになるのか。おれが勉強してゐる間にお前は勝手に散歩やダンスをしようと言ふのか。」
「でもわたしはあなたと一緒に勉强は出來ないぢやありませんか。あなたの勉强してゐる間にわたしは茫乎してゐる譯にはゆかないんですもの。わたしだつて好きな生活をしたくなるのは當り前ぢやありませんか。」
「それなら別れるより外に方法はないぢやないか。」
「別れたつていいわ。」
女は簡單に良心的にコダワルこともなく、平氣でさう言ふのだ。女といふものが非常に重大な問題を實に簡契に解決してしまふもので、その上、さういふ心境上の問題になると冷然と客觀的な境地にさへ早變りするのだ。
「別れる時期といふものが人間にあるものよ、わたしは理屈なしに別れたつていいわ。あなたはどう？」
「おれもお前のことでは大して氣持が動かない、嫉妬や刺戟もあまり感じなくなつた。只不愉快なばかりさ。」
「でも決鬪なさらうと考へたことがあるぢやないの。」
女は快心の笑ひとも冷笑とも名づけがたいものを浮べ、それを彼女自身が飜弄しながら彼の顏を見た。彼は決鬪的に氣持に尖るものを、女からもう感じなかつた。
「あれはおれのまだ健全だつた時のお前へのやきもちさ、いまはあんなに健全な氣持なんか微塵もない、却つて此方が挑まれたつてお斷りだ。」
「でもあなたといふ人は誰かわたしに對手がゐないと、一層ボンヤリしてゐる人よ、わたしが誰かと交際つてゐるか、問題的に見える時だけあなたは反撥的に生き生きしてゐるのよ、わたしは左ういふあ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なたを見ることも是迄に隨分努力してゐたわ。」

「それはお前の不潔分子がさうさせたので、おれを引き立てる爲ではないよ。」

「でもそれはどういふ女だつて本能的に女は女の作用をもつてゐるものよ、あなたが何時も面白くなささうにしてゐらつしやれば、わたしまで詰らなく滅入つてしまふのよ、わたしはあなたと一緒に滅入つてしまふことは厭だし、それを引き立てるより外に方法はないわ。五年も十年も昔の女なら同棲者と一緒に氣持の上で行き詰つて斃れてしまふけれど、いまはそんな詰らない殉死者なんてゐないことよ、不潔分子だか何んだか知らないけれど、あなたにはさういふ作用が、同棲生活に必要だといふことをご存じないのよ。」

「必要以上の作用があるからいふのだ。」

「そんなに印刷したやうに何處から何處まで必要で、そのあとは不必要だなんて尺度で計りきれないわ。」

「それは辨解にはならないよ、尠くともモダンの穿き違ひをしてゐる上に、かういふ時代の餌食になつてゐる君は自分で何も解つてゐないのだ。元々さういふ浮氣な性質があつたのだ。」

「でもそれは今の文明自身のなかにある浮氣ぽいものが、偶々わたしにもある浮氣と一緒になつてこなれたに過ぎないわ。わたし自身の罪でもあるが斯ういふ時代にも罪があるのよ。」

「だから時代的な餌食だといふのだ、キリスタンが這入つて來た初期のやうに皆な教人は犠牲的に死刑を課せられたものだが、君達にもそれに近い運命が課せられてゐるのさ。」

「カフエの女だつて矢張り餌食になつてゐるぢやないの。」

「その意味であの人達はザムバといふ時代的な怪物の餌食になつてゐる。氣の毒だがあの女達は睡眠不足や疲勞で新聞や雜誌をあまり讀まない、青年の口から新しい時代や文明を直接口から耳に受取るだけで、それを支拂ふ時に食はれてしまふのだ。君のやうに少女時代に厳格な家庭に育つた女が、その厳格さから解放されると、そのやうに不良にも浮氣にもなるのも仕方がないが、おれには新しくもなければお可笑しくもない。」

「矢張り別れた方がいゝわね。」

「おれもさう思ふ。そつちさへ素直にその氣持になつてくれゝばね。」

「でもわたしは急には厭よ、別れるとしても別れることが段つと明瞭と頭に應えてくるまではだめよ、別れたつて何も變らないやうにならなければだめよ、少しでも何かゞあればわたしは此儘でゐるわ。」

「おれはそれまで耐えてゐなければならないといふこともない筈だ、おれをコレ以上いぢめるのは止してくれ。」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「いぢめはしないわ、唯あなたとわたしを結び合せたのは、わたしの中にあるものを吐き出させる機緣だつたかも知れないわ、あなた以外の人ではわたしは性格的な生活が出來なかつたかも知れないから、その點でもわたしは感謝してゐるのよ、こんなふうに言ふのは厭なんだけれど……」

「君は勝手な理屈で生活をしようとしてゐるが、おれこそいゝ迷惑さ。おれの方を少しも考へてゐはしないぢやないか。」

「でもわたしは自分の方を考へてかゝらなきや、あなたのことは考へられないんですもの。わたしはあなたのお望みとほりに別れるんですもの。」

○フリユトを吹く男　その二

カツのフリユトは却々止まなかつた。彼は可成永い間それを聞いてゐるうちに、この女に別れてもよいものを益々強く感じ出した。彼は次の間に行かうとしたがカツは慌てゝ彼に挨拶をし、その挨拶は親戚か何かの者のやうに親しみを含ませたものだつた。お前のやうな臆病な人間は全く今の時代には珍らしいと言つたワニの言葉を思ひ出した。

「君も却々うまくなつたね。」

彼がさう言ふと慌てゝ、カツはフリユトを吹くことをやめた。

「お散歩？」

「ちよつと歩いて來る。」

彼は何かシミジミと女を憫れむ氣持になつて、又外へ出ようといふ氣になるのだ。すくなくともカツのそばに居て、フリユトを聞いてゐる女には打擊を與へるよりも憐憫を感じるのだ。ワニはその奇特な卑怯だと言つてゐたが、彼は女の中にあるシホラシイ變態的なものを見ることは、寧ろ作曲的な微妙さを此の荒んだ女に見ると同じいのもであつた。此の女のなかにも未だ何か憎しみ以外に殘つてゐるものが、あると思ふと、冷笑よりも先に微のシミジミしたものが感じられるのだ。

○肉體の檻

ワニはその晩試寫の催しのあるビルヂングを出たのに、十時過ぎたつた。生温かいビールのあぶくのやうに膨脹した空氣の中から、ワニは突然にカツと女とが同じいビルヂングの反對の側から歩いて來るのに出會した。ワニは自分で聲をかけようとしてゐる間に、女の方から挨拶されたのだ。

「どちらへ……」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どちらへつてあなたこそ何處へゆくんです。」
「あてなしの散歩なんですわ。御一緒にゐらつしやらない？」
ワニは鋭い目付で時計を出して見て、女の眼の前に突き出して見せた。それだけで充分だつた。
「睡眠不足で今夜は早くからやすみましたの。わたくしも直ぐにかへるんですけれど。」
ワニは時計を袂の中にずり落した。女の聲に異常な自警的なものがあり、ワニは歩き出さうとした。
「こんどわたくしも試寫會につれて行つてくださらないこと、わたくし試寫室に這入つて見たことがないんですもの。」
キラキラとしたやつで、それが此の女の特質で見詰めてくるのだ。
ワニはその輪を一足飛びに飛び越えて言ふのであつた。
「そんな會があつたつてあなたなんか呼びに行きはしませんよ。」
「ご挨拶ね、あなたがそんな風にお仰るなら、わたしだつて無理に連れて行つて下さいなんて言ひはしませんよ。」
「お互樣ですよ、あなたなんかと一緒に歩いたつて何も變つたことがありさうもないんですからね。こんな街の中をお歩きになるより早くかへつた方があなたのお爲ですよ。」
「こんないい晩に家になんかゐられませんわ。わたしにどうぞお構ひなく。」
ワニは機械的にカツを見たが、カツはきまり悪げに、そして狡くワニに尋ねるのであつた。
「何時頃でせうか。」
彼は先刻見た時計のことを忘れてゐる、カツの狼狽を笑ふ氣持だつた。
「君もウロ〳〵してゐないで歸つた方がいいね。」
「いま歸りかけてゐるんです。」
ワニは女とカツに冷淡に別れ、ビルヂングの角をまがり、青寫眞の中のやうな建物と建物の間を映畫中の人物的憂鬱さで、ヒドク激情な氣持になつて歩いて行つた。彼は憤怒のやうなものを唾のなかに溜めては吐くのであつた。
ワニはかういふ事實を彼に逐一に話したけれど、彼は冷たく鬱し盡した顏付になつて言つた。
「さういふことが平氣で行はれる時代になつたのだよ、おれはお前に話さなかつたが、あの女とは別れることにした。」
「別れるのはよからう、しかしそんな簡單にはゆくまい。」
「話し合ひで事が運んだのだ。」

「ところがあの女は話をギリギリまで詰めて行つて、君を見てゐる側の女さ、實際は別れはしない、さういふ話を君の中にしみ込ませて置くだけで、あの女の投繩は却々とけないよ、女が自分で別れるといふ間はまだまだ別れはしない、本統に別れるとなれば非常な冷淡な速度でやつてくるよ、別れることにも女は男の作用を監視してゐるのだ。やつらの狡猾だか馬鹿だかは全く際限はない。」

彼はワニの理窟が初まるとガッカリした。此の男に何も話すまいと思ひ乍らつひ話してしまふ自分を、不愉快な意氣地のない氣がした。

「おれは女をにくむよりも憐愍の情を感じるやうになつた。かういふ氣持は愛情から離れた非常に客觀的なものぢやないか、只、哀れみを感じるだけだ。」

「お前はやはり音樂家だよ、お前にその音樂家的氣質のある間は女には抵抗できなくなるのだ。過去の音樂家は感傷主義ばかりの純粹さで立つてゐたし、今もさういふ傾向はあるが、元來音樂家自身はもつと數理的なものだよ、お前なんぞは勝手に女に啄かれるがいい、何を言つたつて不徹底でぐらぐらしてゐるからだ。それに突ッ込んで言へばお前はあの肉體から離別できないのは根本から低迷される所以だ。」

「それでお前は何かい、ざまあ見やがれとでも言ふのか。」

と自身で自分を粉碎する氣持で、彼は冷たい苦笑のなかからワニを見返した。ワニもそこまで言ひきることの出來ない切迫された、妙にそれを言ひきると感傷的になるので、寧、不機嫌な表情に變つてしまつた。彼等はいつも最後の問題を啄つき合ふと危ない友情的な感激を感じた。それだけで、それ以上毒づくことも罵ることもできなかつた。

「おれはお前にざまあ見やがれと言ふ位ならお前なんぞともう交際ふことなんかしないよ。」

彼はワニの言葉が聞えない風で歩き、ワニの顏を見ないやうに心がけてゐた。だが、彼も異體の知れない憤怒を感じた。

「おれだつてさうさ、コレ以上に弱つておれを追つける奴と交際はお斷りだ。お前のおしやべりにも倦きてしまつた。」

「おれもお前の鈍間さ加減にはサジを投げてゐるところだ。」

彼はワニと諍つてゐるうちに不圖ワニと女とを比較し、ワニと絶交してもよい氣持になり、さうなれば女とも別れられないやうで不安だつた。孰方かを棄てなければならない、彼はこの圖體の大きいワニを、自分と女との關係の微妙な缺點を知つてゐる友達を斷ち切ることも必要な氣がした。此の男を自分から切り落して遣らう、彼はかう思ふと痛快でもあり明るくもなり、煩さい退屈な友情から隔れる心安

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さへ感じるのであつた。彼は今迄に友情が永く續いてゆく惰勢のなかに堪へられないものを感じてゐたが、それを衝き破ることが出來なかつた。自分ばかりではない、友情のなかに妙な傳統的なイヤイヤで引ずるものを其儘に生活をすることは、全くの嘘だつた。

彼はワニの顔を見たが、此の男の自信だか何か解らないものを持つてゐる顔付が、何時もより馬鹿々々しいタワイないものに、間伸びして見えた。

「おれは先刻からお前のおシヤベリに飽きたと言つたが、こんな時勢に古くさい友情だけが、面白くもないのに殘つてゐるのは、全く遣りきれない、からいふ遺留品は何とかブチ壞したいものぢやないか。」

ワニは神經の筋ばかりになつた顔付を一層、引吊らせて彼の顔を顧り見た。彼は何か勝つた明るい氣持になつた。

「それでおれがお前達の生活の邪魔になるとでも言ふのか、おれはそこ迄お前が馬鹿な男だと思はなかつたが、さういふ友情なら今のうちに打切つた方がよいさ、或ひは多分、お前がおれにさういふふうに斬り込んで來るかも知れないと考へてゐたのだ。それ程お前はあの女にやはり惚れてゐるのだよ。何といふ度しがたい好人物！」

「何とでも言ふがいい、おれはおれのことを知らない人間と交際したくなつたのだ。お前とはクサレ縁だ、當分會はない方がおれには氣樂なんだ。」

「おれだつて別にお前を追つかける氣なんかしないよ、お邪魔なら當分會はなくともよい、だが、いい加減に孰方つかずの生活は止してしまつて、制裁すべきものはした方がいいぜ、お前の愛情といふ奴は當はおれには能く解らないんだ、お前にだつて解つてゐないだらう。」

「おれは愛情なんか考へたことはない、おれは今日と明日との考へが違つたつてどうしようがないのさ、今日はお前なんかのやうなおセツカイな友達はいらない氣がするんだが、明日はどう考へが狂ひ違つて來るか分らないのだ、おれはお前と會はないだけでも氣が樂になるのだ、此頃のおれにはお前だけでも重荷になる、暫らく會はないうちにおれは少し變るやうな氣がする。」

「それもよからう、では勝手に馬鹿を見るなり、手を燒くたり好きなやうにしたまへ。」

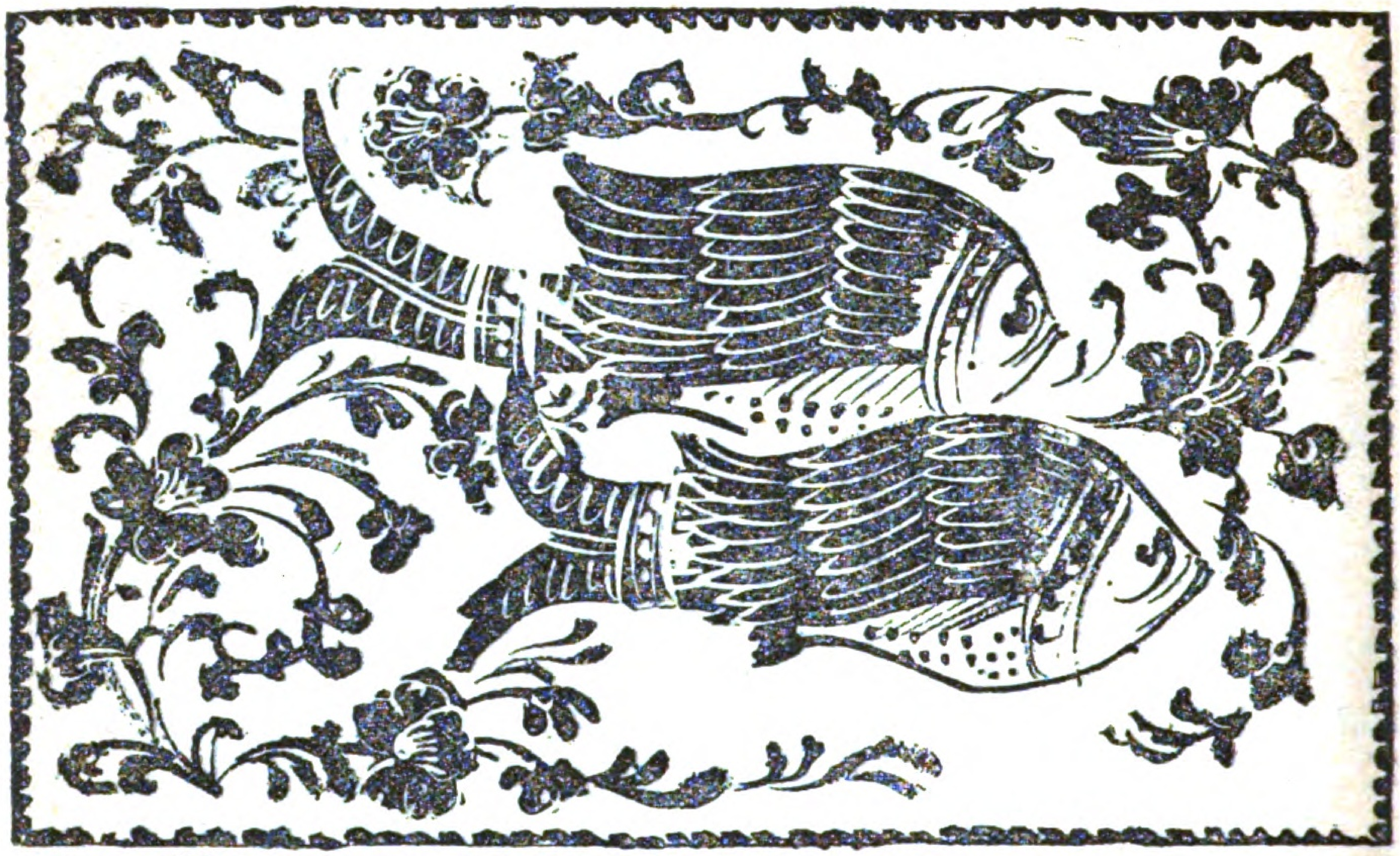
ワニは背後向きになつて歩き出したが、ふと立ち止つて、突然、哄然と笑ひ出しながら言つた。

「あの女ともう一度結婚を仕直したらどうだ。」

彼はワニらしい稜の立つた聲を耳にしたが、泰然と突ッ撥すやうな聲をワニのうしろから叩きつけた。

「おセツカイめ、いい加減にしろ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



大地

里見弴

三の一

どうやら燒けずにすんだ番町の邸の方へ、健吉と三平の二夫婦が戻つて行つたあとだつたので、手狹ながら母の家で、昌造一家、僕婢まで入れゝば八人の同勢も、當分の宿をかることが出來た。いくら金を出しても、だん〳〵獲難いものになつて來た蠟燭の貯置も殘り少く、さきが氣遣はれると云ふので、――一つはこれと纏つた用事もない手の痒さから、隼夫と二人、日陰のポーチで、それの製造をはじめたりした。そのために、五分ほどになつた燃えさしまで捨てずにあつたのや、燭臺に流れ固つた蠟涙をはがしたりしたのを、煙草の穴罐に擲り込んで溶し、眞中に木綿糸の捻り合せたのを垂して置いて、今度は水へつけて固め、すぽんとぬかうといふ工夫だつた。が、なか〳〵さう註文どほり、すぽんとはぬけてくれなかつた。もう一度遠火にかざして、周圍だけ溶かし、つる〳〵と滑り出させやうとしてみたり、いろ〳〵苦心慘憺の擧句、それでも、太短かいずん胴の、不格構なやつが五六本も出來あがつた。どこへ出かけるにも、當分

りものに不自由だと云つて、これも隼夫と二人で、お揃ひに自轉車を買つて來たり、そんなことで日を暮した。晩は、例の夜警といふやつで、初夜と後夜を交代に起し合つて出かけた。そんな中でも、貧乏德利のまゝ臺所から持ち出して來ては、皿に立てた太短い蠟燭の薄暗い火影で、冷酒を汲み交したりした。不自由も、もの珍しい間は、却つてそれによつて活氣づけられ、若々しく、樂しい氣持だつた。

大）一

三平が、ぶらりとやつて來て、使で番町のうちへ屆けられたといふ瑛龍の手紙を、小蔭でそつと昌造の手に握らせて行つたのも、さういふ間の出來事だつた。二日に別れて、すぐその翌日の日附にはなつてゐたが、使に賴まれた者の都合でか、番町のうちへ持つて來たのは、昌造が逗子へ發つて行つた四日の午頃のことだつたさうで、そのため、間三四日おいて、やつと手にはいつたわけだつた。改良半紙に、鉛筆の走書で、

一（咀

いろ／＼御心配をかけましたが、お影樣で、唯今は妾一人千駄ケ谷の萩原樣に、暫くお世話になることにきめました。當分お目にかゝれないといふやうな氣がいたし、心細く思ひますが、必ずおたよりはいたし、お目にもかゝり、お話もいたしたく、まだそちらにおいでになるかどうかをたしかめたく、四谷のナカヤが訪ねてくれましたのを幸、さつそく使を賴みました。

逗子の御樣子は如何か、心がゝりのことばかり聞きますので、心配いたして居ります。あなた樣お力落しのないやう祈つて居ります。あなた樣のお命が助つたこと、この上の喜びはございません。逗子の皆樣さへ御無事なら、妾はもうなにごとの望もございません。

妾の妹は、とても望はなささうです。とう／＼一人ツぽつちになつてしまひました。妾があなた樣のため助り、逗子の皆樣に大變がございましては、なんとも申譯がなく、どうぞあちらの御樣子が一時も早く伺ひたく存じます。御無事のやう、くれ／＼も祈つて居ります。おわかりになり次第、早速御樣子お聞かせくださいまし。

あまりとり急ぎまして、何を書いてよいのかわかりません。吉井樣、奥樣へもくれ／＼もよろしく、あなた樣から御禮申しあげてくださいまし。まづは取り急ぎ。

かういふ文面だつた。昌造は、隼夫の書齋で紙やペンを借り、家族一同、殆ど奇蹟的に無事だつたこと、便船があつて思ひがけなく早く歸つて來られたことなど、氣が急くまゝに簡單に書き、そのあとへ、當分落ちつくといふ萩原が、大河内の友達の一人ではあるが、あまり好いた人間でもないやうに普段瑛龍から聞いてゐただけに、[illegible]に氣

を騙されて、可厭ならうちにいつまでも辛抱してゐることはなからう、といふやうな言葉を附加へずにはゐられなかつた。この手紙も、ほかに頼みてがないので、ナカヤといふ、前から瑛龍のうちに出入りしてゐるやうに聞いてゐた四谷の唐物屋まで、自轉車を飛ばして行き、その主人にことづけてやつた。

折り返しての返事に、

決してうろたえたわけではありません。よく〱考へてこゝへ參りましたのです。

逗子の方々の御無事、この上の喜びはございません。

妹はいまだに知れません。

妾の命はあなた様に、九月一日におあづけいたしたつもりでございます。當分は妾の住所、田町のうちが燒けてしまひましたため、あちこちに變りませうけれど、心は落ちついて居ります。このやうな時、あなた様こそ妾を見失つてくださいますな。

田町の母たちも幸に無事ゆゑ、今日ひとまづ表町の本家の方へ歸ります。平さんを頼み、おたよりもいたしたく、あなた様からも頂きたく存じます。

たつた一人になつた心細さより、あなた様の心から消えてしまひさうな、妙な夢を昨夜みまして、なんとなく淋しい氣持で居ります。

たゞ御無事であれば妾は嬉しく、近いうちお目にかゝり、ゆつくりお話は出來ませんでも、この後のこと、妾の心の置きどころの間違はぬことを知つて頂きたく、妾もあなた様の心から消えてしまひたくないと、神様におたのみいたして居ります。先は右御返事まで。

千葉が歸つて來るまでの心配やら、逗子への往復などで、忘れるともなく取り紛れてゐた瑛龍への心の傾きが、かういふ慌たゞしい文通の間にも、めき〱とその度を盛り返して來た。

九日の午後、番町のうちへ行くと、ほんの少し前久保が尋ねて來たといふ話なので、三平が差し出す瑛龍の手紙も、そのまゝ衣嚢へ押し込んで、すぐまた自轉車に飛び乗り、およその勘で、四谷見附の方へとあとを追ひかけてみた。秋めいて、空は高く澄み透つてゐたが、有繁に荒日を控えて、きり〱と埃の渦が往來を走つて行つた。そのなかを、弟の着古しのシャツに半洋袴、ネクタイもなしで、生意氣盛りの小僧のやうに、達者にペタルを踏みつけ踏みつけ、四谷通りの兩側の人道に目を配つて行くうち、やゝ猫背に踞つた久保の後姿を見つけだした。

「久保君！」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すぐ振り向いて、

「あッ！　いま貴方ンとこイ……」

云ひながら自轉車を飛びおりたが、湧きこぼれるやうな喜びにてれて、二人とも、揃つて顔を赤くしてゐた。

「貴方も小林も無事だつたつてことだけは、……誰だつたつけかしら、……あゝ、さうだ、……佐久間君が來て知らせてくれましたけれど、何しろこつちで聞いてると、鎌倉あたりは、まるで全滅みたいな話なんで……。江ノ島なんぞ、見る間に海ン中に陥沒しちまつたなんて……」

「話半分としても、然し、實際なかなかえらいこざんしたよ」

「僕も行つて來たんですけど……」

「さうですつてね……」

「圓覺寺の前あたりまで來て、百姓屋の潰れ方を見た時にやア、全くこれアこれから先は特別なのかも知れない、と思ひましたね。どんなにひどくつたつて、大抵横ッ倒しになつてるのが、あすこらへ來て見ると、まるでお椀でもふせたやうに、パタンと藁葺屋根をかぶつたまんまで、潰れた柱なんぞひとッも見えてないやうなのがあるんですものね……」

「然し東京の火事も、一體これアどうしたつてんです。めちやくちやに焼けちやつたもんですね」

お互に、無事で結構だつた。といふ意味の言葉に代えて、まづ災害の大きさを話し合ふばかりだつた。自轉車を引きながら、昌造は、人道と車道との堺の石の上を、久保はまた街路樹に遮られて、離れたり寄つて來たりしながら、どこへといふあてもなく、まつすぐ新宿の方へ向いて歩きつゞけた。

「いま三平に聞いて來たんだけれど、貴方も、ずゐぶんあぶなかつたんですつてね」

「えゝ、まア寢坊のおかげで助かつたやうなもんですよ。あれが、起きたばかりで、風呂にでもはいつてるとか、顔を洗つてるとか、兎に角母屋の方の廊下にゐたら、どうなつてたかわかりませんよ。曲りなりにも立つてたのは、あの、千鳥つて、一番奥の、離れの二階だけだつたんですからね」

「そンななかから、懐中物はもとよりのこと、帯一つあまさず持つて出て來たんだからつて、三平が呆れ返つてましたよ」

「あいつはまた、ふりで飛び出しちまつて、うつかり尻もからげられないつて、臆病なんですからね」

「さうですつてね。山王やまで、貴方に猿股を貰つた話をしてましたつけ」

「そいでも、手提金庫を風呂敷包にして、かみさんが、きまり悪さうに抱え込んでたから……」

「さうですか。あいつ、着のみ着のまゝ、綺麗さつぱりと燃いちやつたやうなことを云つてたけれど……」

「尤も、金庫だつて、空ツぽ同然だつたかも知れないんですがね……」

「何しろ、あんな時、慌てるのが一番いけませんよ。落ちついて、うまく逃げさへすれア立派に助かつてる人間が、慌てたばかりに、ずゐぶんこれで無駄に死んでると思ひますね」

久保は、亢奮から、むしろ腹立しげに、「僕ア、そんなのは、それア無論、可哀想にやア違ひないけど、全く犬死だと思ひますね、――馬鹿げきつた自殺だと思ひますね」

「それアさうですね。この際あんまり大きな声ぢア云へないこつたけれど、その自殺説は、なか〳〵面白いな」

いかにも久保らしいもの丶考へ方だ、と思ふにつけて、二三日前に訪ねて来た佐久間の、「食ふ寝る意識」といふ、これもいかにもその人らしい新造語を取次いで聞かせたくなつた。

「話は別になるけど、佐久間君も面白いことを云つてましたよ。世の中がかういふことになつて来てみると、結局人間つてものは、食ふことゝ寝ることよりほか考へない、簡単至極な動物だつて……。じげむ、じげむ、ごこうのすーりきれ、……なんとかかんとか云ふ、馬鹿長い名をつける落語があるでせう？　あンなかに、くふねるところにすむところ、つて言葉があるんだが、それをすぐ思ひ出したつて云ふんですよ。実際、住むところなんざア、第二段の問題で、まづ第一着には、食ふ寝るところですね、つてから云ふんです。それを、すぐまた、『食ふ寝る意識』なんて言葉にして話すのが、いかにもあの人らしくつて、ずゐぶん笑つちやつた」

「『食ふ寝る意識』か。成程ね、うまいや、そいつア」

久保も、声をたてゝ笑ひながら、克明にきちんとたゝんだ手巾を、洋袴の衣嚢からとり出して、禿あがつた額の汗を拭いたが、ふと思ひついたやうに、「然し、貴方、これからどツかへ行くんぢアないんですか」

「いゝえ、別に……。貴方は？」

「僕も、これつて用はないんですけど……」

「ぢア、兎も角、どツかそこいらで、冷いもんでも飲まうぢやありませんか」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「ビールでもなんでもいゝ、お互に命拾ひをしたお祝に、一杯やりますかな」
少しは落ちついて話が出來るやうにと、故意と裏通りへ切れ込み、えり好みもしずに、一品洋食屋のやうな、小さな店へはいつて腰をおろした。
「まア、……お芽出度う」
「お芽出度う」
打ち合せるビールのコップの下で、やつとそんな言葉が出た。そこでは、主に、鎌倉の阪ノ下に一軒うちを借りて暑を避けてゐた久保の方の話を聞いた。庭へ飛び出すと同時に、つい目の前で、隣の文化住宅が無慘な潰れ方をするのを、はつきり見てゐたと云つて話して聞かせた。餘技として、器用に油繪も描くくらゐで、色彩感の鋭い作家といふ定評のある久保が、眞晝の蒼空の下で、傾斜の強い屋根の赤瓦が、瀧のやうに舞い落される有樣などを話るのだから、謂はゞうつてつけの話題で、聞く昌造の目の前にも、はつきりとそれが見えて來るやうだつた。すぐ驅けあがつた觀音の丘から、大波を搖する海、早くもあがつた長谷の火の手、さういふものを一望のうちに俯瞰した話にも、まざまざと色彩は動いた。それから、同じ土地に住んでゐた共通の友達、讃歎の消息をも傳へ、愛人一家の上にも恙なかつたことを附加へたりした。
「それで、貴方、歸つて來るのがおそかつたんですね？阿母さんが、ずゐぶん心配してゐるのに、久保君も呑氣だよ、なんて、誰だつたか來て云つてましたぜ」
「だつて、貴方、歸らうにも歸りやうがないぢアありませんか」
「海軍の輸送が始つて、……矢つ張り艦で歸つて來たんでせう？」
「えゝ、艦。……特務艦だつた」
「いくンち？」
「五日」
「あゝ、さう。ぢア僕と一日違ひだ。壬之助ンとこの細君や娘が、矢つ張りその日歸つて來たんだけれど、艦で一緒になりませんでしたか」
「氣がつきませんでしたね。何しろえらい人だつたから……。それに、艦も、一日に二艘か三艘づつ出してたやうだから、別のかも知れない…」
時はづれにライス・カレーなど食つてから、そこを出た。
「どうです、よかつたら、もう一度うちイよりませんか」
「さうですね……」
ちよつと躊躇つてから、「僕はね、おッこのやつが、赤坂郵便所のなか

大）——　——（地

とかに避難してゐるつて話ですからね、ちよつと見舞つてやらうかと思つて……」

　鎌倉にゐる愛人との經緯は、ついこの春ごろからのことで、矢張り妓籍にある人には違ひないのだけれど、徒な近づきよりも、正面からの、堂々たる結婚を望んでゐるほどの意氣込だつたから、自然、二年越しにはなる琴次との間は、だいぶ遠々しいものになつてゐた。それでも、東京へ歸つて來れば來るで、そつちの安否をも氣遣ひ、居所が知れゝば見舞つてもやらうといふのが、久保らしいいゝところだつた。

「それア、行つておやんなさいよ。なんなら、あたしも一緒につきあつてあげてもいゝ」

「あんまりはつきりした話でもないんですがね……」

「まア、無駄と思つて行つて見ませうよ。遠くもないんだから」

　濠沿ひに紀の國坂をおりて、東御門の前に出た。テント張りの受附など出來てゐて、普段はなか〳〵近よりも出來ないやうな、ひどい身なりの者でも、平氣で出這入りしてゐた。受附で訊くと、一々の人名はわからないが、ここをかう行くと、馬場があるから、そこで探してみろ、といふ返事だつた。

　小砂利の道を、奧の方へ進みながら、

「然し、いくら避難民だつて、馬場へ擲り込んどくのはひどいなア」

と、久保が、憤慨の色を見せて呟いた。

「馬場ッたつて、きつと、天井のある馬場ですよ」

「さうかしら……」

「そいでなきア、貴方……」

「一體、天井のある馬場なんて、そんなもんがあるんですか」

「中學時代、馬の稽古で、どういふ都合の時だつたか、二三度こゝまで馬場を貸して貰ひに來たことがあるんで知つてるんですがね、それア有繋になかなか立派なもんですよ。乘つてながら自分の姿勢を映して見て、惡いところを直すやうに、横巾二三間もありさうな、大きな鏡なんかゞ張つてあつたことを憶えてるな。そのくらゐで、無論青天井ぢアないんですよ」

　話しながら、その、天井のある馬場の入口に行つて立つた。廣い砂場は、中央に一筋の通路を殘して、兩側一面に茣蓙を敷きつめ、隔ても間もなく、澤山の家族がごちや〳〵に雜居してゐるらしかつたが、日中のことゝて、外出してゐる者の方が多いのだらう、あつちこつちに、女や子供の居たり立つたりしてゐる姿が、高い窓から落ちて來る薄い光の下に、ほんのパラ〳〵と散らばつてゐるばかりだつた。

「なんだか、ゐさうもないなア」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そんなことを呟きながら、久保は中へはいつて行つたが、昌造には、そこの光景がなんだかあんまり氣持よくなかつたので、殘つておもてで待ち合せることにした。それは一つは、先刻三平からうけ取つたまゝ衣嚢につつ込んで來た瑛龍の手紙も讀みたかつた。

「ちよつとお伺ひいたしますが……」

調子の高い久保の聲が、たゞッ廣い建物のなかに響いて、クワンというやうな、金屬性の反響をかへしてゐるのを、うしろに聞きながら、額と葉の落ちて來る櫻並木の木影にはいつて、立つたまゝで封を切つた。

昨日新町の沖津の控家に參り、おかみさんにもお民さんにも逢ひました。お民さんがそれは〳〵嬉しさうに、いろ〳〵話してくれて、妾も心強いやうな氣がして、表町と新町ゆゑ、毎日でも逢つてお民さんに逢ふ約束をいたしました。

あなた樣のおたよりを待つて居りますのに、昨日も參りませんでした。幸、今日でもそちらにおいでになりましたら、新町の沖津の控家（表札は稲倉と出て居ります）までおいでくださいまし、そしてお便をくだされば、參りまして、是非お目にかゝりたく思ひます。

まづはとり敢ず、ひとふで。

として、簡單な圖面に、沖津の控家の在り場所が說明してあつた。

二日の午後三時頃、番町のうちの裏門で呆氣ない別れの言葉を交すとたゞの一度でも振り向かうとはしずに、——今度はまたいつ逢へるとも、そんなことはてんで氣にもかけてゐない人のやうに、さつさと遠のいて行つて了つたのが、指を折つてみれば、僅まだ一週間前のことなのだけれど、昌造はこの手紙で、永い日月の後に、やうやくのことで相見る機會を與へられたやうに、思はず胸をときめかせて喜んで了つた。傍の櫻の幹によせかけて置いた自轉車のハンドルに手をかけ、もう一度馬場の方へ引き返して行くと、丁度そこに久保も出て來た。

「わかりましたか？」

「えゝ。ゐたことは確にゐたやうなんですけれど、どッかほかへ變つて行つたらしい話で、どうも、はつきりしたことはわからないんですがね……」

「なんかから、さういふ係りの人がゐて、知つてさうなもんぢやありませんか。いくらなんでも、來るのも出て行くのも、いゝ、てんでの勝手ッてわけでもないんでせうから」

「さうですね……」

「あすこに、なんか雇人でもゐさうな建物があるぢアありませんか」

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「それに、もう一箇所、避難民のはいつてる馬場だかなんだかあるんださうです」
「兎も角あすこへ行つて訊いてみたらどうです」
それから久保のあとに跟いて、二三箇所あちこちしたが、たうとうはつきりしたことはわからず仕舞だつた。
「どッかほかに立退く先がめつかりさへすれア、誰だつて、いつまでもこんなとこにゐたかアありませんからね。きつと、變つたんでせうよ」
「それにしても、誰かに訊いたら、その立退先がわかりさうなもんぢやアありませんか」
立木から立木へ渡した細引に、お襁褓や、子供の單衣など乾してある下をくゞつたりしながら、昌造はなほ、係りの人を探さうといふ氣持だつたけれど、久保の方が、遠慮からか、却つて諦めよく、
「もうよござんすよ。これだけ探してわからなきやア……。どうせさう、大して逢ひたいわけでもないんだから……」
これは、をんなを探すのに、友達を附合せたてれ隱しの意味よりも、むしろ新しい方の愛人に、輕く觸れるところの、惚氣と聞くべき音樂らしかつた。
「それアさうでせう。どうせそれアさうでせうとも」
「なアんです」
海水浴で、潮と日に染つた顏にも、忽ち血の色をのぼらせて、「さういふ意味で云つたんぢアありませんよ」
「然し、先刻の話ぢア、たゞ無事だつた、といふだけのことでしたけれど、もう少しなんか、いゝ話がありさうなもんですがね……」
「ありませんとも！　いまだに海のものとも山のものとも、まるツきり見當がつきアしません。とてもそれア、貴方んとこなんぞたアわけが違ふんだから」
「どうだかなア。今様地震加藤で、中門の閂めといふやつをやつたんぢやアないんですか」
そんなことを云ひながら、いつかまた紀ノ國坂の下に出てゐた。別れるとすれば、そこで右と左に道を異にするところなのだが、まだ日も高く、久振りではあり、もうちつと一緒にゐたかつた。
「どうです、今度はあたしに附合つて、沖津のうちへ行つてみませんか」
「沖津のうちつて……？」
「つまり、女將さんの自宅……。ひよつとすると、エイタツもそこに來てるかも知れないんです」
「へーえ。早速もうそんなとこで逢つてるんですか」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「冗談いつちアいけない。今日はじめて行くんですよ。新町だつて云ふからすぐだし、ちよつと寄つてみませうよ」
「さうですね」
誘はれて、めつたにいやと云はない久保だつた。「序に、そいぢア、焼野原になつてセキハン（赤坂）といふものを見ておくかな」
昌造も、あれツきり沖津の前を通つてみる機會がなかつたので、廻りになるのを承知で、電車通りを行つた。ちよつと、どこがどうやら見當をつけ兼ねる眺めのなかにも、纔に焼け殘つた隣の料理屋の土藏の位置から、凡こゝらといふことだけはわかつた。
「ふーん、さうですかねえ、かういふことになつちやつたんですかねえ」
久保も、感慨ふかげに眺め廻してゐたが、「もし萬一、貴方がたのゐた離れがぐしやツといつてたとすると、丁度あのへんのところから、お互に抱きつき合つてる黒焦の死體が掘り出されることになつたわけですね」
「まア、さういふわけですかね」
「ふうツ」
いきなり吹きつけて來た風に、煙のやうに舞ひあがる焼灰から、二人とも顔をそむけ、やり過ごすまでは目もあけなかつた。

圖面ではつきりあたまに入れて置いた沖津の控家は、探し廻るまでもなく、すぐ見つかつた。大溝に渡した木の橋を渡り、いつぱい下駄の散らかつた玄關前に立つて案内を乞ふと、「はい」と答へる聲がお民で、姉さん被りのまゝとんで出て來た。
「あら！」
手拭をとるのと、まくつた裾をおろすのと、そこへ膝を突くのとが一緒で、「いらつしやいまし……」
「こんちは」
「まア、久保さん！」
嬉しさに口も利けないといふ風で、「まア、どうぞ……。女將さん！加島さんと久保さんがお見えなさいました！」
「あら！　さうお」
これもすぐとんで出て、「まア、どうなさいまして……？」
「まア、どうぞ……」
そばからお民が、「女將さん、奥はあんまり散かつてますから、却つてこゝの方がよかアありません？」
「さうね、さうして頂戴。早くお前、そこの木戸をおあけよ」
左方の部屋へとび込んだと思ふと、下駄を引きづる音がして、内へ廻る木戸があいた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「さアどうぞ……。きたないところですけれど……」

小庭を控えた六疊間で、普段は、出入商人の持つて來た品物でも見る、といふやうな場合に使はれる部屋らしかつたが、はづした建物、木箱、風呂敷包などで、疊二枚はふさがつてゐた。濡椽に腰かけて、やゝ改つた挨拶をとり交した。鎌倉に避暑に行つてゐて留守だつた女將からいへば、女中一同を宰領して立退いてくれた昌造には、いくぶん厄介をかけてゐるわけだつたが、その禮のあとへ、けれども、すぐに續けて、

「でも、あたし、あんまりなんにも出なかつたんで、熱いちまひましたわ」

　その言葉の裏には、手を束ねて火の迫るにまかせてゐたことや、いよ〳〵燒け落ちるまで見屆けもしずに立退いて了つたことなどが、多少昌造の責任として、詰られてゐるのだらう、とは氣がついたが、然しその卒直さは、決してさう不愉快なものではなかつた。事實またその場に女將が居合せたとすれば、必ず取り出せるだけの物は取り出させてゐたに違ひないのだから、非難に値すると云へば、さうも云へないことはなかつた。同時にまた主人でもない昌造が、ひよつとすると生命にもかゝはるほどの危險を侵させてまで、崩潰した家のなかゝら、取り出せるだけのものは取り出して來い、と命令するわけにいかないことも知れきつた話で、自分としては、少しも無責任の疚さは感じなかつた。たゞ、女將が、あとから人の話に、火が廻りきるまでには、かれこれ小一時は間があつたらう、といふやうな話を聞いて、そんなら、少しくらゐなんか出せさうなものだつたのに、と愚痴になるのも無理はないと思ふので、この怨み言に對して、腹を立てる氣にはなれなかつた。

「然しまア、それも考へ方ですよ。使つてた人に、一人も怪我のなかつたのが、何よりの仕合だつた、と思つてもすむこつた。あの潰れ方なら、一人や二人死んでたつて、ちつとも不思議はないくらゐなもんですからね」

　座布團や、冷した麥湯など持つて出て、客に勸めてゐたお民も、そのとき口を出して、

「何しろ、あたしはもう、てつきり貴方がたは駄目だとばかり思ひ込んぢやつてたもんですから、お二人の顏を見ると、ほッとすると一緒に、がつかり氣のぬけた人みたいになつちまつて、道具を出すなんてこと、――さう云つちア、女將さんにはすみませんけれど、ほんとうに思ひもつきませんでしたわ」

「それア、實際そんなもんでしたらうよ。今になつてこそ、いろ〳〵思ふけれど、あの咄嗟の場合……」

久保も、取りなすやうにさう云つてから、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「女將さんは、いつこつちにお歸りでした？」
「一昨日、……一昨々日でしたらうか、六日です」
「矢つ張り、船でしたか」
「いゝえ、歩いて……」
「歩いて？」
「えゝ。途中二晩泊りましてね、ずゐぶん苦勞しましたわ。それでも、一番上が、十七になる男の子だもんですから、どうやらかうやら連れて歸つて貰へたんですけれど、……あたし、今度はじめて、つくづく男の子の有難味つてものを知りましたわ」
「どうしてまた歩いて歸つたりなんかしたんです。船なら、わきやアなかつたのに」
「あたし、船は、川蒸汽にさへ乘れませんの。すぐよつちまつて……」
その時、お民が、女將の耳のはたで、何か囁いて聞かせるのに、「ああさう」と頷き返してから、昌造の方へ笑ひかけて、
「表町へ使をやつたさうですから、今ぢきに見えますわよ」
「さう」
「さう、とかなんとか、凉しい顏をして……」
云ひながら久保は、ステッキの先で、ぽんと昌造の靴を叩いた。
「ほんとよ。あんな時分まで寢てたりして、起されちまはなかつたのが、よつぽど不思議なくらゐだわ」
「矢つ張り、お天道様は間違ひをなさらないんだね」
「今も貴方ンとこの燒跡を見て來たんだけれど、あすこから、二人、ころ／＼に焦けて出たらどうだらう、つて云つたんですよ」
「いもりの黒燒どころぢアないつてんで、あつちこつちから貰ひに來る、——おかげで神津が建ち直つたつてね」
「ま、どうでせう！　憎らしいのねえ」
「それアさうと、お愛さんどうしたらう」
「愛香さんですか」
「所、知れたかしら」
お民が、引き取つて、
「三四日前に、ひよッこり一ッ木の通りで逢ひましたわ。あの人はね、崖の方から這ひあがつて、三聯隊に逃げ込んだんですつて。……貴方がたのこと、ずゐぶん心配したつて云つてましたわ」
それから、以前よく久保と一緒に逢つた、小なみ、富子、鈴香、菊代といふやうな若い連中の安否やら、落ちつく先などを主な話題に、とりとめのない世間話が續いた。四人一座といふなかにも、いつか昌造は、自然お民とばかり口を利くやうになり、久保と女將とは、同じ鎌倉にゐた誼から、あつちの出來事について、共通の話題を見つけ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る、といふ風に傾いて行つた。

玄關の格子がガラリとあいて、いきなり「お民さん！」と呼ぶ聲が玲瓏だつた。

「はい」

大きな體を跳起すやうにとんで出て、「いらしてつてよ！　久保さんとお二人で」

「あら、さうお」

すぐはいつて來るのを、女將が、座つたまゝ見迎へて、

「いらつしやい。早かつたわね」

「早かつたでせう」

そのまゝずいと縁先へ、へたにお辭儀をすれば鉢合せをしさうな、つい鼻の前まで來て坐り、

「いらつしやい」

久保がまづ、

「御無事で……」

「貴方も……」

「加島君にすつかり聞いたけれど、有樂にどうもえらいもんですね」

「何が？」

「いゝえ、地震の時、……貴方、ずゐぶん落ちついてたつていふぢアありませんか」

「どういたしまして、落ちついてたどころか、いきなり頭から布團をかぶせられちやつて、何がなんだか、さつぱりわけがわからないうちにお仕舞ンなつちやつたんですからね。この頃ぢア、風がガタッといつても、すぐとんで出るくらゐで、とても落ちついてなんぞゐられやアしませんわ。……久保さんは、鎌倉でお會ひなすつたんですね？」

「僕なんざア、たつた一人で、……通ひの女中相手に自炊生活をやつてたんだから、たとへ潰されたところで、……どうせ家はやわだし、平氣なもんでさア」

「そイで、おうちは、潰れちやつたんですか？」

「亞鉛屋根の平屋ですからね、ぐしやッといくほどの重みもかゝつてないんだけれど、それでも、こんな具合に……」

と、あまり實狀を髣髴とさせもしない手眞似でみせて、「ひどくひん曲つちまひましたよ。無論僕は、はッと思ふ間に、庭にとんで出てたんだが……」

「あたしの場合はまた……」

と、呂造は、右の足頸に兩手を持ち添へて、片胡座に、ぐいと腿のつけ根まで引きよせながら、「あれが、半分寢惚たやうな、はつきりしない狀態にゐたんで、却つてよかつたんだと思ひますね。はッと思ふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と同時に、すぐなんとか處置のとれるやうな狀態だつたとすれば、いづれ階段でも駈け降りるくらゐのことなんだから、それこそ、ぎゆうッとひと息にいつてないまでも、いくらか怪我ぐらゐしてますね。だから、何が仕合になるか、實は、そこへ行くと、わけのわからないところもありますよ」

「然し、貴方なんざア、はつきりしてゐればゐるで、きつとなんとかもつとうまいことをやつてますよ。あんな時、へまな死に方をする人は、矢つ張り普段から、そんな風なところが出てますからね。だから僕は、さつき云つたやうな、自殺だ、つていふやうな、あゝいふ考へ方もするんで……」

「あれはまたあれで、あたしも大いに同感なんだけれど、でも、やつぱり運つてこともありますね」

「えゝ、それアありますわね」

と、女將が、至極簡單な意味で話を引きとり、自分の知人に起つた、今度の天災による悲運の數々を話して聞かせたが、それがやゝ退屈になつて來たので、昌造は、瑛龍の方へ顔をよせ、聲を低めて、

「妹さん……」

と云ひかけると、瑛龍は、忘れてゐたのではなく、先刻から話さうと思ひながら、ただその機會がなかつたのだ、といふ風な落ちつきのなかにも、急に目の色を輝かして、

「わかりましたわ。今朝、ひよこんと來てくれて……」

「あ、さう！」

「丁度番町へ使を出したのと一足違ひで……」

「さう！ それアよかつた！」

「えゝ。もうとても生きてやアしまいと思つてたんですけれど……」

お民もそばへ躙りよつて來て、

「どなた？」

「いゝえ、うちの妹……」

「あゝ、お蘭さん？」

その聲に、女將もしかけてゐた話をよして、瑛龍の方へ、

「なアに？ 妹さんどうかしなすつたの？」

「いゝえね……」

と、お民が引きとつて、「昨日までなんのたよりもないんで、とても、と思つてたら、今朝尋ねてみえたんですつて」

「あら、さう！ それアよかつたわね」

久保が、

「ほんとの妹さんですか？」

「えゝ。お嫁に行つて、藥研堀にゐたんですけれど……」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「へえ、ちつとも知らなかつた。……然し、一體、どこイ行つてなすつたんです？　今まで音沙汰がなかつたつていふのは、ちつと永すぎるぢアありませんか」

「それがね、……先刻のお話ぢアないんですけど、普段からへまをやりさうなとこのある人だもんですからね、どこでどう方角をとり違へちやつたのか、だん〳〵だん〳〵龜井戸のさきの方とかまで行つちまつたんですつて」

「それアまた、よりによつて惡い方角へ逃げたもんだなア。本所あたりでへたアまごついてようもんなら、それこそ被服廠だぜ、あぶない！」

「さうよ。あたしも、腹がたつちやつて、ほんとにあんたつて人、馬鹿ね！　つてさう言つてやつたわ」

「でもまア、それア、いくら行きたいと思つても、その行く先に火があれば、いやでも應でも道を變へなきアならないわけだから、馬鹿は可哀想だけれど……」

「それに、彼方に、ちよつと知つた人もあつたんですとさ。……そんなとこイ行つちやつたもんだから、さア今度は、こゝらまで出て來るツたら、乘りものはなし、女の足ぢア、それこそ一ン日がゝりでせう？」

「そイで、旦那様はうちにゐなすつたのかしら」

「それがね、丁度出かけてゐた留守で、御亭主さんにめぐり會ふまでにも、四日かゝつちやつたんですとさ」

「あらまア、ずゐぶんそれア心配しなすつたでせうねえ。……たしか、叔母さんが一緒にゐなすつたんぢアない？」

「えゝ、叔母さんは、逃げる時も一緒だつたんですつて。……そイでね、先方ぢアまた、あたしつてものは、てツきりもう死んぢやつたもんと思ひ込んでたんですとさ」

「どうして？」

「それがね、お店の、氣の利かない小僧さんかなんかよこしたんでせうね、榮ちやんのことを、そつくりあたしだと早合點して、歸つてさう云つたもんだから……」

「あゝ成程。……さう云へば、榮子さんつて人、……僕ア二三度しか逢つたことないけど、氣の毒なこつてしたねえ。……こゝの犧牲者では、あの人ひとりツきりなんですか？」

「いゝえ。六七人、もつとかも知れませんわね。でも、榮ちやんは、あんな風にうれてた人だし、ほかはね……」

「へーえ。そんなに死んでるんですか」

「えゝ、死んでますとも。それが、みんなうちの近所ばかりなんですのよ。榮ちやんなんぞ、うちはまん前だし、榮子なんていふと、なんだかあたしの本名みたいだから、妹ンとこの小僧さんばかりでな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

く、ずゐぶんあつちこつちに間違へてた人があつたやうですわ」

「でも、それア、大へんいゝんぎがいゝのよ」

「あんたも、うちイ來てたからこそ助かつたのよ」

女將が、意味をこめた横眼で見やりながら云つた。

「だいじよぶよ、あたしは」

「いゝえ、誰よりか一番あんたがあぶないわよ。何しろ、眼があやしいんだものね」

「さうなのよ、ひとつはそれで人が間違へるのよ。榮ちやんはあんなはしツこい人でせう？　だもんだから、死んだつてつても、人が本氣にしないで、榮龍なら、眼は近いし、まごくして逃げそくなつたかも知れないなんて、勝手にさう噂ふらしいのね。いくらいゝんぎがよくつたつて、ほんとにいやンなつちまふわ。……妹なんぞ、がんく云つて、頭から怒鳴りつけてやつた」

「まア然し、何しろよかつたよ」

昌造は、詳しいことも聞きたいのだけれど、久保にとつては、まるであかの他人の話が、さういつまでも續いては、と、そこらで結びをつけるやうに云つてから、家のなかを見廻して、「僅なこつても、こゝまで來ると、よツほど地震が違ふんだなア。ちつとも傷んでないぢアありませんか」

「いゝえ、さうでもありませんわ。うちぢうの隙が、……ちよいと見ただけぢアわからないんですけれど、さはると、どこもかもばくくで……」

「そイだつてまア、形だけでもついてれア結構ですよ」

「いゝえね、かうして皆さんにいらしつて頂いても、掃くそばから壁の土が落ちて、足の裏がざらくするやうな部屋ぢア、お通ししても、却つて氣味がお悪いだらうと思ひましてね、歸つて來ると早速、二階のお客間に職人を入れてますの。だもんですから、當分、上へもおあげ出來ないやうな始末で……。その內には、御飯でもあがつて頂くくらゐのことは出來るやうにいたしますから……」

もう一度また、意味深長な微笑を目もとにみせて、昌造の方へ、「どうぞ是非……」

「さう。もう職人がはいつてるんですか。手廻しがいゝなア」

この女將の慾張氣の強さには、――今に始つたことではないが、ちよつと氣持を白々しくさせられた。「でも、そつくり壁を塗り變へるとなるとなると、なかくこれで、一月やそこらぢアすみますまい？」

「えゝ、まア、せいく急がせてますけど……。出來ましたら、久保さんもどうど、琴夫さんをおつれなすつて……」

「あゝ、さう云へば、あの人、どこに行つてるか知らない？」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

昌造が、瑛龍の背後にへばりついたやうになつてゐるお民の方へ、伸びあがつて訊かうとするのを、久保が制めて、

「よござんすよ、よござんすよ」

その含羞が、却つて昌造の悪戯心を刺戟して、赤阪御所のなかまで探しに行つた顛末をすッぱぬかせた。お民がまた、真面目くさつてそれをうけて、わかり次第お宅の方へお知らせする、などと、無論實行する筈のないことを約束してゐた。

「それにしても、なんかかう、ちよつと差上げるものないのかねえ」

女将が、お民を顧て、「ビールでも取らしにおやりよ」

「どうぞもうほつといてくださいよ。腹もへつてないし、あたしは、ビールつてやつは苦手で……」

「ほんとに女将さん、およしなさいよ。ビールは嫌ひなんですから……」

「加島さんはさうでも、久保さんは……」

「いや、僕アもうお暇しますよ。これから、本郷までてく／＼歩いて歸れア夜になつちまふ」

「まアおよろしいぢアありませんか」

「だから、僕だけ。加島君は置いてきますから安心なさいよ」

「あゝ、さう」

と、急にお民が何か思ひついたやうに、「今あたし、なんか見て來ますわ。ちよつと待つていらしつてくださいね？」

そのまゝ小走りに出て行つて了つたのに、久保も一旦掛けかけた腰を、据ゑるともなく縁側に戻して、眼鏡ごしに瑛龍を見詰めながら

「あんた、肥りましたね」

「あら、さうですか？地震の焼け出されが肥つちアをかしござんすね」

「乗りものがないんで、よく歩くせいだらう。それに、夜だつて、寝ちまうよりほか、どうにもしようがあるまいからな」

「肥りも肥つたし、第一、焼けだされつていふ風ぢアありませんね。そんな装をして、うつかり焼跡なんぞ歩かうもんなら、泥をぶつけられたりするつて話ですぜ」

「だつて、これみんな貰ひもんばかりですよ」

普段の好みから云へば、だいぶじみだつたけれど、絽の、黒地に露芝の、自分だけにはひどく氣になるらしい長い袖を、膝の上で燥すやうにしながら、「やるとなると、普段着ぢアわるいやうな氣がするのかしら、誰でもみんな、着古しの他所行ばかりくれるのよ。それより、こつちぢア、洗ひざらしでいゝから、ふだん着てゐられるやうなゆかたでも貰つた方が、よつぽど嬉しいんですけどね……」

「それに結髪がよく似合ふ。いつものデコレーションより、その方が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

よつぽどよござんすよ」

「さうですか？　でも、これだと、うつかりしてゐると、お禿さんが顔を出すんでね……」

「貴方にも、そんなものがあるんですか」

「ありますとも！　醫者で、あたしたちくらゐになつて、お禿さんのない人なんて、一人もありやしませんわ。ねえ、女將さん……」

そんなことを云つてるところへ、お民が頭數だけの紅茶茶碗を、銀盆に載せて持つて來た。

「なアに？　お紅茶を淹れて來たのかい？」

「いゝえ」

下眼づかひに、盆の上を見詰めたまゝ坐つて、めい〳〵の前に差し出すのを見ると、あかッちやけた、どろりと重い液體だつた。女將が、把りあげて、覗き込むやうにしながら、

「なアに？　これ」

輕い笑ひ聲でうけて、

「罐詰なんですけど……」

「あゝ、トマト・スープか。自炊してると、忽ちからういふものは通になつちまふな」

「いやだねえ、なんかで、ひとロさしあげてくれるのかと思つたら……」

「いや、この際、お酒なんぞより、この方がよッぽど結構ですよ」

昌造がまづ取りあげて口をつけ、「うまいや、なか〳〵」

「おいしかアないんですけど、何しろこの際ですからね」

「それにしても、ずゐぶん變つたおやつだね。こんなもの、一體、どうしたのさ」

「こないだ、うちの弟が持つて來てくれたんです」

識した女將も、然し、結局あまさず啜つて了つた。

彼向側の、高い石垣の上に環した煉瓦塀に、夕日の色が赫々と照り榮えて來た。それに促されたやうに、久保が、いよ〳〵と立ちあがつたので、昌造も、一緒に歸ることにし、やがて、身をはすに、狹い庭木戸から出た。瑛龍たちは、玄關の方へ廻り、そこで別れの言葉を交した。

「あなた、自轉車なんぞに乘れるんですか」

門柱によせかけてあつたのを、引き出さうとする時、格子のなかから、瑛龍が聲をかけた。

「乘れるさ。當分小僧さんだよ」

溜池の通りに出て、自動車を拾ふまで久保に附合つてから、昌造は、夕日を正面にあびて、麻布の高臺の方へと車を急がせた。

三ノ一終り——つゞく

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

七面鳥

池谷信三郎



1

銀行と保險會社と信託會社の建物が、濡れたアスファルトの鋪道の上に、巨大な倒影を投げかけてゐた。自動車でその前を通り過ぎて行く者には、青葉の街路樹を透せて、この近代都市的な風景が、淸々しい初夏の印象をしか與へなかつた。だが、例へば彼が、月末の僅かばかりの金策に、もう薄汗の滲む額を拭き拭き、この前を通りかかつたとしたならば、そして、殊に横隔膜が上にひきつつてゐるやうな場合、重心の關係であらうか、これ等の建物が、ひどく醜く見える事があるのに違ひない。そして彼は、きつとかう云ふ疑問にぶつかる事であらう。

――何んだつてこんな馬鹿げた大きな建物が、必要なのであらうか。

だが、これは愚かな質問であつた。社會に散在してゐる微細な資金を吸ひ寄せる磁石は、大きくなければいけなかつた。人々の手にあつて全く無力な金が、一たんここの金庫に集中すると、忽然として絶大な暴力と化して了ふのだつた。このまるで蝗の大軍のやうな暴力に就いて、それから、十圓は一圓の百倍であると云ふ超數學的の計算に就い

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、ほんとの事を知つてゐる者は、極く少數の人々であつた。

小早川氏はその少數の人々の中の一人だつた。彼の關係してゐる製紙會社の、見本帳の紙を一枚づつ名刺に使つても、まだ足りない程多くの肩書を、彼は持つてゐた。

肥大した身體を鷹揚に、クッションの中に埋め乍ら、自家用の車を走らせてゐた。下町の或る一流の料亭で、彼が資金を貸してゐた製菓會社の重役と、今、會食して來たのだ。彼が資金を貸す目的は、まだ利子をとる爲ばかりではなかつた。さうやつて、段々と多くの小會社を強力な一つの會社に合併させて行く豫備行動だつた。朱塗りの食卓の上の、狸汁のお碗に浮んだ油の玉を、箸の先で一つ一つ潰して、段々大きな輪を拵え乍ら、彼は、自分の前に、哀願的の眼を向けてゐるその男の顔へ、全く憐憫に近い微笑を與へてゐた。

彼の頭には、紺足袋や印絆天が、忽ちのうちに眞白な紙となつて現れて來る、あの精巧な製紙工場の機械の過程のやうに、全く明らかな事實が、この男にはまるで解つてゐない、と思ふと、もうそれだけで食慾が失はれて了つた。それに、毎日の贅澤な食事が、彼の舌の上から一つ一つ美味を奪つて行つて了ふ事が、肚が立つた。

[illegible]銀行の前に[illegible]

[illegible]年が、身體を殘酷に曲げ乍ら、何やら曲藝をやつてゐた。人が多勢たかつてゐた。小早川氏はどきりと胸をつかれたやうな氣がした。彼は運轉手に金を渡して、それをやつてその支那人の曲藝師を追つ拂らはした。

原因の如何にかかはらず、銀行の前に人だかりがすると云ふ事は、これは非常に危險な事であつた。一人の少年の曲藝師に依つて、取付けを食はない自信のある銀行などは、數へる程しかないと云ふ事を、彼はよく知つてゐた。彼はぞつとしたのだ。それから振り返つて、階段に足をかけた。入口の花崗岩のコリント式の圓柱が、見上げるやうに聳えてゐた。すると彼の心はすうつと靜まつて行つた。彼にはいつもこの柱が自分を支えてくれる唯一の頼りのやうな氣持がしてゐた。

頭取室の革のソファに深々と身體を沈めると、今の今、あんな小つぽけな支那人の少年に、恐怖に近い感情を懷いた自分が、急に悲しくなり出した。どうもこの頃は少し變だぞ、と考へ出した。

彼は先天的に一つの病氣を持つてゐた。時々一種の被害妄想に襲はれる事があるのだ。子供の頃一度その徴候が、ひどく現れた事があつた。學校へ通ふ時、道に煙草の吸殼が落ちてゐると、もうそれが怖くて遁れない事があつた。しよつ中、[illegible]

それから、ずうつとそんな事はなかつた。それが最近、どうも又起りかけて來たやうな氣がした。この頃の彼は、ちよつとした事が、何か非常に重大な意味を持つてかぶさつて來るやうな氣がしてならなかつた。漠然とした不安がしよつ中彼を襲つた。眼に見えない黴菌が、街にも社にも工場にも、一杯に充ち滿ちてゐるやうな氣持がした。彼は葉巻に火をつけて、ゆつたりと氣を落ちつけるやうに、煙の輪を吹き眺めた。それから一通り、卓子の上の書類に目を通した。椰子の木の繁つてゐる南洋の絵葉書があつた。

いつだつたか、彼が社長をしてゐる製菓會社に、爭議のあつた事があつた。その時、一人の勞働者が煮たつた飴の釜を彼にひつかけやうとした。するといきなり一人の社員が身を挺してそれを防いだのだつた。その社員はそのお蔭で洋行させて貰つた。顔に赤い痣を拵えて、南洋の椰子の絵葉書を送つて寄越したのだつた。だが、小早川氏はその日からと云ふもの、煮立つた飴がいつ自分の顔にかかつて來はしないかと戰つて、いつもびくびくしなければならなかつた。彼が恐迫觀念に襲はれ出した近因の一つは、たしかにその事だつた。

扉を叩いて秘書が入つて來た。

――Mビルの問題はどうなつたかね？

――はあ、結末ついたさうでございます。

――さうか。

――所がそれがとても奇拔な結末でして。

――どうしたんだい？

Mビルの問題と云ふのは、まことにつまらない問題であつた。實はあの尨大な建物の各階にある無數のW・Cは、みんな水洗式になつてゐて、下水に流れ込むのだが、それがこの頃よくつまつて了つて、どうも、通りが悪いと云ふのであつた。そこで早速、あの建物を建てた建築會社に抗議を申込んだ。すると、今度はその建築會社が、そんな事はない、それはきつと使用してゐる紙が悪いせゐだと云ふので、お尻が小早川氏のやつてゐる製紙會社へ廻つて來た。

所が製紙會社の方でも、そんな事はない、納めてゐる紙は、契約の通りの紙で、ちやんとアルカリに溶解すると云つて承知しなかつた。そこで、各々の代表者立合ひの上、検査が行はれた。

――それでどうしたんだい、結果は？

――所が、それがまことに可笑しいのでして、結局責任は、建築會社にもなく、勿論うちの會社にもなく、全く豫想外の所にあつたのです。

――と云ふと？

――實は、あれがつまつた責任は、人間の性慾と、××會社にあつた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んです。

——……

——同時に、あの大きな建物の中に働いてゐる、多勢の女賣子達の間の秘密な組合が暴露されました。

——組合?

秘書の男は、頭取がただならぬ形相で、いきなりソファを飛上つたのを見て、呆氣にとられたやうにポカンと口を噤んで了つた。

——ハハ、ゝゝ。何、何んでもないんだよ。ここにピンが落ちとつたんぢや。ピンがな。給仕によくそ云つて氣をつけさせんきやいかんよ。ハハ、ゝゝ。さうか、組合か、女の組合か。成程、々々。

それから、彼は時計を取り出して見た。

——こりやいかん。今日は、保險の方で採用試驗がある日だつた。あいつばかりは人委せには出來ん。

小早川氏が、ソファを離れると、秘書の手はもう外套を彼の背中にかけてゐた。これが彼の職務の一番重要な一つだつた。

2

保險會社の壁には、角力の番附のやうに、男女勸誘員の名前が、ずらつと貼り出されてあつた。加入者勸誘高が一眼で解るやうになつてゐた。男達にとつては、それは生活を意味してゐた。女達にとつては、その表が、自分達の容貌を示す標準にも見えた。男達は各々の友人知己とあらゆる傳手を求めて無理な勸誘をする。そしてそれが丁度、一人の借り得る借金の範圍のやうに、段々範圍が狹くなつて行つて了ふと、會社は責任額未滿の名に於いて、彼等を、使ひ盡した齒磨の空チューブのやうに、何んの未練氣もなく、さつさと捨てて了つた。女達は見榮と競爭心に驅られて、人知れぬ無理な苦心をした。壁の表に數字の增えて行くのを眺め乍ら、昨日×けられた××を想ひ、無感覺な微笑をつめたく口邊に浮べて、又會社の門を、新しい日の數字を求めに出かけて行くのだつた。

小早川氏は先づその表にチラリと眼をやつて、それから、づかづかと社長室へ入つて行つた。

——もう志願者は集つとるかな?

——はあ。

——ぢや、ぼつぼつ呼んで貰はうか。

——は、かしこまりました。

彼はゆつたりと腰を下して、卓子の上の書類に眼を通し始めた。

扉を臆病げに叩く音がして、大學の卒業生が一人入つて來た。

——まあ、そこへ腰を下し給へ。

――はあ。

だが、彼は、その命令を奉じて、從順に腰を下した方が有利なのか、それとも遠慮して立つてゐた方がいいのか、いろいろと頭の中で計算し乍ら、もぢもぢとして立つてゐた。

――さ。

――はあ。

――君は今年出たのだね?

――はあ、左様です。

――君はどう云ふ意味で當會社を選んだのかね?

――この會社の事業が、その、ただ營利的であると申すばかりでなく、一種の社會的事業と申しますか、いろいろその社會の福祉の爲に有意義であると思ひまして、私も充分働き甲斐があると思ひまして、……………………

――君は大分社會問題に興味があるやうだね。

――いいえ、いいえ、…………

彼は、飛んだ事を云つて了つたと云ふやうに、あわてて、辯解をし初めた。

――いいえ、その、別にさう云ふ意味ぢやありません。私の申しましたのは、國家的と云ふやうな意味で、………

――國家と社會とを一緒にしてるやうぢや困るね。そこんとこをはつきり心得て置いて貰はんと、從つて、國家的正義觀、即ち資本家的正義觀と云ふものと、社會的正義感といふものがはつきりとして來ない。つまり君はリベラリストと云ふ事になるが。

――いいえ、そんな事はございません。私はもう充分、……

――いや、解つて居る。君方のやうな中間的インテリゲンチュアと云ふものは、右か左か、その一つを絶對的に主張する強い意志と必要がない。云はばどつちになつた所で大した損徳はない。そこでついついリベラルな考へを持ち易いもんだ。……所で、君は系累はあるかね?

――はあ、母と弟妹が多勢ゐます。皆んな僕の扶助を要するのです。

――さうか。それはこつちとして見れば好い條件だ。露骨に云つて了ふかね。

成程それはさうに違ひなかつた。この就職難の苦悩と、この日の屈辱的情狀を、出來るだけ鮮明に、これ等新人社員の印象に刻みつけて置く事は、小早川氏の策戰の一つであつた。それには、系累の多いと云ふ事は、確かに、有能な素因であつたに違ひない。

――ところでと、……君は女は知つとるか?

――知つとると申しますと?……

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

——童貞かね？

——はい、……はあ、つまり、……

——ハハ、、まあさうあわてんでもいい。君はT大の獨法科だね？

——はあ。

——すると、ここに願書が出てゐるS君とは同級だね？

——はあ。高等學校以來の親友です。殆んど毎日顏を合せてゐる間柄です。

——君も無論承知しとるだらうが、當會社で當期に採用する人員は二十四名ぢや。中で、T大からは七名採ることになつてゐる。そこへもつてつて、二百何名と云ふ應募者だ。君がまあ、幸ひにして採用されたとしても、この日のこの苦しい競爭は充分頭に入れといて貰はんにや困る。所で、今のこのS君、君の親友だつたS君だね、この人が若し、君が採用されたが爲に、落ちるやうな事があつても、君は構はんかね？

——……

——兎に角競爭が激しいんだから、さう云ふ結果にならんとも限らんが。

——……

——え？　何故返事をしないのかね、君は？

——はあ。僕はあなたの眞意を汲み兼ねて居りますんで。

——眞意と云ふと？

——あなたは一體、今、私の友情を試してゐらつしやるんですか、それとも私の正直さを試してゐらつしやるんですか、そこんとこがはつきり解らないんです。若しも、私の爲にS君が落ちても構はんと申したら、あなたはきつと、私の事を薄情な奴だとお思ひになるでせうし、若し又その反對に、自分の爲に親友Sが椅子を逸しなければならんとは、實に情において忍びない、と申し上げたら、あなたはきつと、私の事を不正直な奴だとお思ひになるでせうし、……

——ハハ、、成程ね。だがまあ構はんよ。君が、S君が落ちても構はんと云へば、わしは君の事を正直な人間だと思ふし、又、それが情において忍びんと云へば、却々友情の厚い男だと思ふかも知れんからね。ぢや兎に角、いづれ又、他の重役達とも相談して、採否は後から通知する事にしてあるから、君はもう行つてもいい。待合室にS君が來てゐる筈だ。ここへ呼んでくれ給へ。

——はあ。

彼は社長室を出た。そこに待つてゐる多勢の求職者の中に、Sの姿を見つけた。

——おい、S君！

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

——あゝ、君か。君もここへ申し込んでたのか。

——あゝ。

兩人共、お互ひに默つてゐた事が氣まづかつた。

——どんな事を訊く？

——どんな事つて、いろいろ訊くよ。今度は君を呼んでくれつて。

——さうかい。ぢや、行つてくるよ。

Sは扉の把手に手をかけた。ちらつと投げられたその瞳の中に、彼は今迄、まるで兄弟のやうに親しく、毎日話をしたり一緒に遊んだりしてゐたこの永い月日の間に、まだ一度も見た事のない、不思議な表情を感じた。

3

小早川氏は久し振りに自家でゆつたりとした夕食をとつた。廣い庭を見渡す食堂の長椅子に身を横たへてゐると、何んとも云へないのんびりとした氣持だつた。今日保險會社の採用試驗で出會つた、無數の、あのおどおどとした卑屈な眼が、彼の神經を久し振りに、不思議な恐迫觀念から救つてくれたのだつた。それは激しい齒痛が、何かの拍子に、けろりと引いた時の感じだつた。から云ふ事は前にも一遍あつた。それは、退職手當の問題だつた。彼の會社では、退職慰勞金給與標準と云ふ規定が設けてあつた。勤續年數に應じて、退職當時の本俸の幾月分かを給する事になつてゐた。その比例が永くなれば永い程大きくなるので、勤續卅年にもなると二百卅ヶ月分と云ふ程だつた。會社の年齡が大きくなるにつれ、社員の年齡も加はつて行つた。そこで、小早川氏はどうしてもこの規定を撤回する必要に迫られた。彼は重役會議にはかつて、幾分の現金を社員一同に渡す事に依つて、その規定の撤回を承認させた。所が殆んど一人も反對する社員がなかつた。寧ろ喜んで、現金を手に入れた。小早川氏はその時にも、丁度今日と同じやうな心の安らかさを覺えたのだつた。

彼は何かしら、おどけた氣持になつてゐた。伸びをした兩手を、そのまま前へ曲げて、厚い支那緞通の上にぐるりとでんぐら返しを打つて見た。その途中で、ちらつと倒さまにうつつた夫人の顏に、不思議な新鮮さを感じた。

だが、夫人は或る華族の家から來た女性だつた。そんな事に笑顏を見せたりする事は、實家の威嚴に係はると思つてゐた。それに、何んにも藝のない夫が、待合などで、醉ふとそんな藝當をやるのではないかと思つて、いささか自尊心を傷けてゐた。

——まあ、お止しなさい、そんな下品な事。

彼女の形容詞には、上品と下品と云ふ・このたつた二つの言葉が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あるだけであつた。彼女の育つて來た世界では、これがすべてを計る尺度だつた。

だが、小早川氏はさういつも上品でばかりはゐられなかつた。そこで彼は、明日する第二夫人との旅行の事を思ひ出してゐた。旅行をする時は、いつもこの第二夫人が行く事になつてゐた。彼女は云ふ迄もなく、且つては名妓と云ふものであつた。製菓會社の第三工場は彼女の名儀になつてゐた。これは小早川氏が彼女を受取人として保險をつけて置いてやらうと云つた時、彼女が、そんな縁起の惡い事は嫌やだと云つて斷つた、その代りであつた。そこは主にキアラメルを製造する工場であつた。この微細なお菓子が年額二千萬圓に達するのだ。所が、厄介な事に、地方へ行くと、この會社の包裝の箱をそのまま使つた、いろいろの粗惡な僞物があるのだつた。第二夫人は旅行する度に、必ず方々の町や、驛などで、自家のキアラメルを買つてはしやぶつて見た。彼女の舌はその眞僞を鑑別するのに、不思議な程鋭敏な感覺を持つてゐた。僞物を發見すると彼女はどしどしと告發した。だから、この第二夫人の舌は、全國の群小製菓會社の鬼門であつた。それに彼女はひどく勝氣だつた。工場の若い技師が、彼女の事を非合法的夫人と云つたと云ふ事を又聞きすると、すぐその男を馘にして了つた。

4

内務大臣が工業倶樂部に招ばれて、實業界の巨頭に、某事件の說明をした。それからいろいろと現代の思想に關する懇談があつた。

その日の小早川氏の興奮はいささか常軌を逸してゐた。秘書が何の氣なしに彼の萬年筆を使つたと云つて、彼は約一時間に亘つて、私有觀念の缺除を詰つた。

彼の所謂奇行が段々と人の眼に着き出したのは、それから間もなくであつた。

社員達の間には次のやうな會話が取り交された。

――どうも大將の樣子は、この頃少し可笑しいね。

――確かに變だ。

――何んでも、邸の内の庭の隅へ、目かくし塀をやつて、こつそり何んか工事をしてるつて云ふぢやないか。

――金貨を貯め込んでるつて噂も聞いたが、そいつでも埋めてるんぢやないか。

――いいや、何んでも秘密の拔道を掘つてるんだつて事だよ。

――モルガン銀行やイングランド銀行へ正金を通じて、大分外國の金を預けてるつて評判も聞くぜ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

――それに、南米ジョホールあたりに廣大な土地を買つたさうぢやないか。

――郵船の株を大分買ひ込んださうだね。いつでも直ぐ船室がとれる爲にださうだ。

これはたゞ社員達の常識的な憶測で、眞僞の程は解らなかつた。だが、當の小早川氏の行動はもつと愛嬌を帶びてゐた。

柔道四段の請願巡査を置いた。

各工場へはどしどしと在郷軍人を入れ初めた。製紙工場などは千五百人の勞働者の内六百名は在郷軍人であつた。ファッショ！

彼が金を出してゐる代議士を呼んで、政府に、鐵道煙草の國營廢止の議案を提出するやうに頼んだ。ああ云ふ事業が、個人の私有慾や、事業慾なしに、あんな効果を擧げてゐる事は、國民に危險な空想を懷かせると云ふのにあつた。

フオードの息子がハドソン―エセックスと姻戚關係を結んで、ジエネラル・モータースに對抗する大トラストへの道を辿つたと云ふ記事を讀むと、彼は早速、自分の十六になる娘を、F製紙會社々長の息子へ嫁るのだと主張して、忽ち夫人から、そんな下品な事！と怒られて了つた。

或る有名な左翼運動の鬪士を殺害した男があつた。すると彼は早速、家令に云ひ附けて、五つ紋の紋附羽織袴を刑務所へ屆けさせた。それからその男の洋行費迄も申し出た。彼にはもう昔のやうに、慈善とか寄附とか、溫情主義とか云ふものが、何んらの效目のない事が解つてゐた。

彼は『靈の光』と云ふ不動明王の事を書いた小冊子を、工場の勞働者全部に配つた。紐育の或る工場では、勞働者慰安の爲に、ハドソン河の船遊びを計畫した。一隻の大きな遊覽船を借切つていろいろ御馳走を積みこんで待つてゐたが、やつて來たのは四五人の事務員ばかりであつた。勞働者達はみんな自分達自身の金で、妻や戀人を連れて、勝手な所へピクニックに行つて了つた。だが、小早川氏の工場の勞働者は喜んで房總一周の旅行に加つた。彼はそれを『靈の光』と在郷軍人のお蔭だと思つてゐた。日本の勞働者よりアメリカの勞働者の方が自分の金を、少しばかり餘計持つてゐると云ふ事には氣がつかなかつた。彼はそれから、男女工の間の性慾を出來るだけ寛大にした。これは重大な意義を持つてゐた。

5

小早川氏はこの頃、今迄に決して見もしなければ聞きもしない光景を、突然頭に浮べる事があつた。月光に照らされたつめたい鐵路に、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

赤子と顔を並べて横たはつてゐる女の顔があつた。ベルトに片腕を捲きこまれ乍ら、必死の力でそれを捥ぎ取らうとしてゐる男の顔には、機械に新時代的の美などを認めたりする感傷を、美事に嘲笑ふ悲痛な笑ひが漂つてゐた。

人間の知識は視覺、聽覺、臭覺、觸覺、味覺の五つよりしか獲られないと思つてゐたのは間違ひであつた。音も電氣も光も、あらゆる運動はエーテルの振動に依つて人間の腦髓に作用した。所がその振動で分つてゐるのは、毎秒一回宛振る振子を標準にして、振動數五次から十五次迄の音と、三十次の電氣と四十八次から五十次迄の光と五十八次から六十一次迄のX光線だけであつた。

それ以外の振動は全く人間の知覺にとつて未知の世界であつた。だから、その中にはきつと人間の意志の波、感情の波、それから起るいろいろの事件が、無意識的に第三者の腦髓に作用してゐる事も考へられた。

小早川氏が全然經驗しない、いろいろの妄想に襲はれ始めたのは、決して非科學的の單なる妄想ではなかつた。未知の振動に依つて、人間の感覺の空隙に忍びこんだ現象が、彼の努めて眼を閉ぢやうとしてゐた情念と思想を搖すぶつた。無意識的に受けてゐたこれらの作用が、[illegible]

驗の事柄を浮び上らせたのだつた。そしてそれらの情景が彼の頭に殘して行く殘滓は、追はれるやうな恐怖と猜疑と自嘲であつた。

彼の家に時々集つて來る取りすました盛裝の夫人達を見ると、彼女達がみんな淫らな一箇の玩具に見え初めた。そして彼には、その玩具箱を覆して、その中で奔放な遊戯をしてゐる自分の姿が、まるで四面鏡に照らされたやうに、奇怪な光景を錯綜させた。

彼の妄想は限りなく進展した。上品な夫人に對してさへ頗る下品な妄想を感じた。こんな取りすましてゐる癖に、案外、麻雀で負けた金の才覺に、萬引をやりそくなつて、それを種に脅かされてゐるのではないか。だが、流石にそんな事は口に出せなかつた。

——お前、顔が蒼いよ。

——さようでございますか。

——わしに遠慮する事はないよ。

——別に、わたくし。

——わしは多勢の夫人達を知つてゐる。彼女達が、その夫を欺くいろいろの技巧をわしはよく知つとるよ。

——まあ！　あなたは何をお云ひ出しになるの、そんな事。

——どうせわし達の結婚生活なんかと云ふものは、世間の習慣の爲に[illegible]形式的なものなんだからな。

──まあ！　なんと云ふ下品な云ひがかりをおつしやるんでせう、あなたは。そんな事を云つて私を墮落させといて、それで御自分の不品行を、消極的に辯護なさらうと云ふおつもりなんでせう。

──いや、さうぢやないよ。わしは家庭に於いては申し分のない貞淑な夫人を澤山知つてゐる。そして彼女達の、夫にだけ知られない生活もよく知つてゐる。わしは例外と云ふものを認めない。どうせお人好しになる位なら、………

──まあ！

夫人は眞蒼な顏をして立上つた。

それからいきなり部屋を出て行つて了つた。彼女は夫にあられもない事を云ひ出されたのが口惜しいのではなかつた。どうして夫があの事を嗅ぎ出したのか、それが恐しかつたのだ。自分の部屋へ入ると、彼女は廊下の外に椅子や屛風を積み立てて、交通を遮斷して了つた。

6

銀行へ入つて行くと、行員が二三人、隅の机の所でこそこそと話をしてゐた。彼は恐ろしい顏付きでそれを睨みつけた。

頭取室には去年の帝展に出た一幅の繪がかかつてゐた。十本の矢を一把にして、子供を諭してゐるあの名高い古の武人の繪であつた。彼は秘書に云ひつけて、それを取り外さして了つた。彼にはその繪の寓意が、金の集積を象徴してゐるやうに思はれたので、丁度この銀行の頭取室にと思つて買入れたのだつた。それが今日の彼には危險な寓意を暗示してゐた。

卓子の上に蠅が集つてゐても氣になつた。

銀行を出て自動車に乘ると、塵除けの硝子の斜めになつた面に、コリント式の花崗岩の巨大な柱が、曲つてうつつてゐた。

彼の邸へ曲る坂の角に、奇妙な形をした家があつた。或る金持の家だつたのだが、銀行の破綻で無一文になつて了つた。借家代も拂へなくなつて、暫くの間、丸い硝子の窓から、カーテンをすかせて、蠟燭の火が淋しげにさしてゐた。それから間もなく、どこへ移つて了つたのか、空家になつてゐたのだつた。

小早川氏はふと通りかかりに、自動車の窓から、その家のカーテンの揺れてゐるのを見た。

彼は急に動悸が激しく鳴り出した。きつと、あの空家を利用して、何か陰謀を企んでゐる者があるのに違ひない。邸の中に車が吸はれるやうに入つて行くと、彼は正門の大扉を固く鎖させた。

書齋の椅子に身を沈めて、ぽかんとして煙草をふかしてゐた。夫人はあの日以來顏を見せなかつた。女中が食後の果物をお盆に乘せて運

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んで來た。差し出さうとした時、ナイフが高い音を立てて卓子の上へ落つこちた。小早川氏はびくつとして飛上つた。

——機關銃だ、機關銃だ！

彼は耳を押えてどんどんと、長い廊下を馳け出した。女中はこの主人が、戯けてゐるのか眞面目なのか解らないので、呆氣に取られてつつ立つてゐた。

長い廊下の外れ迄馳け出した彼は、急に馬鹿げた眞似をしたものだと云ふやうに、けろりとして庭を眺め出した。すると突然堪え難い孤獨感が、しみじみと心の底からこみ上げて來た。彼の耳に、かすかに子供の聲が聞えて來た。彼は庭下駄をつつかけて、聲のする方へ歩いて行つた。彼はただ子供と遊び度かつたのだ。

庭の隅に鳥小屋があつた。金網を張つた廣い小屋の中に、七面鳥が澤山入れられてあつた。最近多勢人を招ぶ事になつてゐたので、その用意に、數日前から入れてあつたのだ。六つになる料理番の女の兒が、赤いメリンスの布を振つてからかつてゐた。

七面鳥と云ふ鳥は不思議な習性を持つてゐた。それはすべての赤い色を極端に嫌ふ性質だつた。子供がその赤い布を振ると、七面鳥は、丁度人が[illegible]を吊り上げるやうな恰好に、兩方の翼を高くもち上げて、[illegible]行つた。

小早川氏は子供の方へ近寄つて行つた。

——何をしてるんだい？

——お鳥と遊んでるの。

その子供は振り返ると、さう無邪氣に答えた。

——このお鳥つたら、そりや可笑しいのよ。赤い色が大嫌ひなの。かうやつて、この布見せてやると、ほら、あんな夢中になつて飛びかかつて來るのよ。ほら、ほら、……

小早川氏は暫く、その赤い布を見てやたらに怒つてゐる七面鳥の姿を眺めてゐた。するとそれが段々辛辣な漫畫に見え初めた。

——もうお止し。

——だつて、面白いんだもん。

——お止しつたらお止し！

子供は彼の突然の權幕に驚いて、暫くぽかんとしてつつ立つてゐたが、いきなり舌を出して逃げ出した。その赤い布を彼の方に振り乍ら。

小早川氏はそこに落ちてゐた棒切れを拾ひ上げると夢中になつて追つかけた。子供は庭を横切つて、ちよこちよこと走つて行つた。するとそこに目かくしの板塀が[illegible]。子供はそこの少しばかりの板の隙に[illegible]

し擴げて、中へ飛びこんだ。地面が深く掘り下げてあつた。子供は板の橋をよちよちと渡つて行つた。丁度向うへ渡り切つた時、小早川氏が荒々しく棒を振り上げて飛びかかつた。だが、その板片は、彼の肥大な重量には堪えられなかつた。ミシリと云ふ音がして、いきなり彼の身體は一箇の砂嚢のやうに、暗い地の底に吸はれて行つて了つた。

そこは二丈程の高さだつた。だが、下を固くコンクリートで固めてあつたので、彼はひどく後頭部を打ちつけた。

そこの底から長い地下道が續いてゐた。彼がこつそりと工事を進めてゐた秘密の抜道だ。意識を失つて行く彼の腦膜に、その瞬間、遠いその地下道の向ふにほんのりとさしてゐる光がうつつた。そこに第二夫人の眞白の裸像が浮び上つてゐた。彼女は丁度、繪で見るレダのやうな恰好をして彼をさし招いてゐた。

穴の縁に顔をのめらして、女の子は暫くの間、眞暗な地の底を凝視めてゐた。段々慣れて來た目の中に、かすかに、人の倒れてゐる姿がうつり出すと、その子はいきなり赤い布を振り乍ら、大聲に叫び出した。

——七面鳥が！　七面鳥が！

（一九二九・七・九）

池谷信三郎著　——改造社發行——

橋・おらんだ人形

四六判上製　壹圓八十錢　送料十八錢

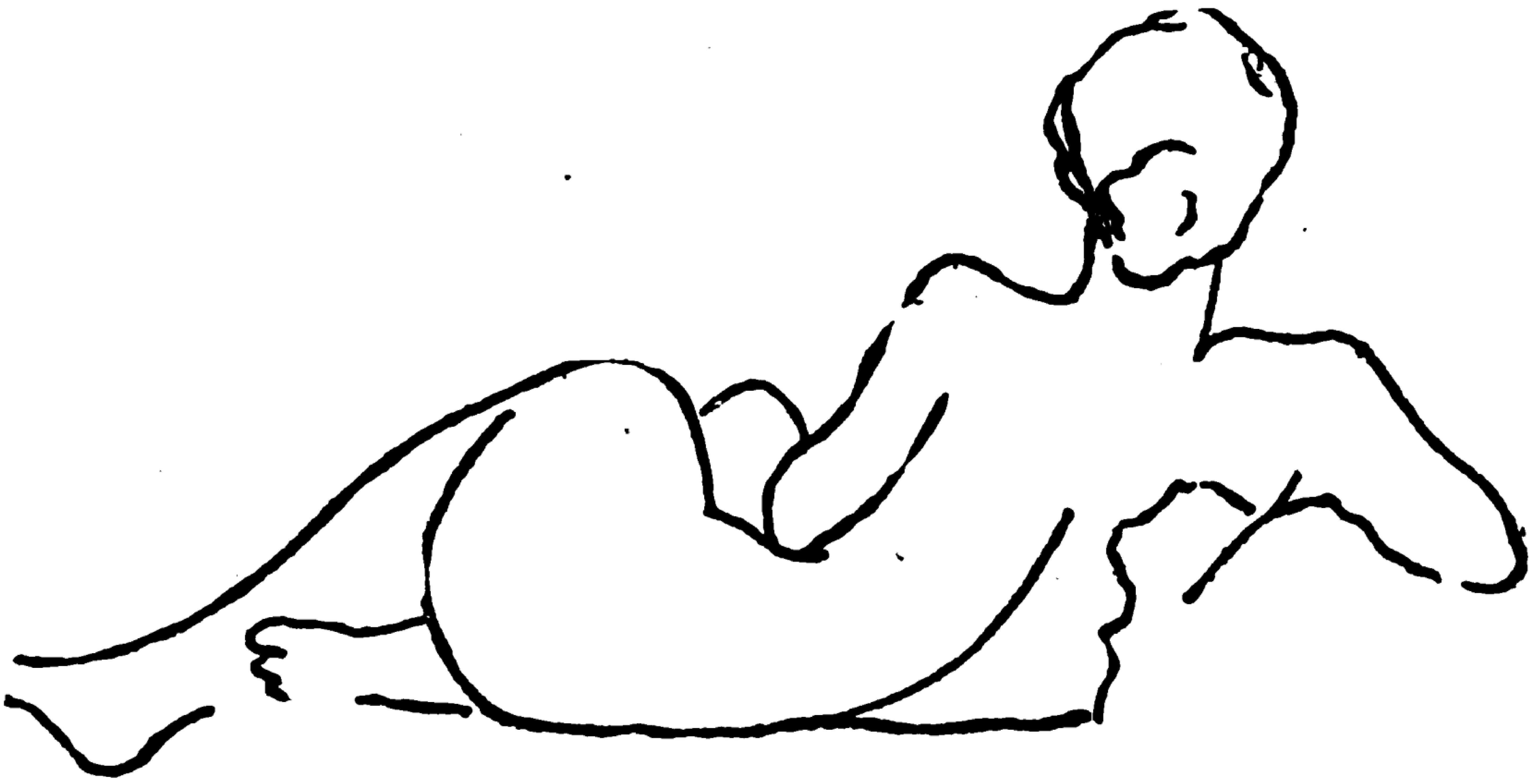
我等の生活に新時代の健康を賦與し、新鮮なる感覺を撒布するこの集の如きはない。收むるところ「橋」他五篇の小説と、「おらんだ人形」他五篇の戯曲、筆は巧緻にして輕快、想は艷鋭なる神經に彩られて國際化情緒を顯現し、何れも新時代の抒情小曲である。

内容

戯曲——三月卅二日（一幕）。獨り（一幕）。首（一幕）。歸りを待つ人々（一幕）。歸つて來た噂（一幕）。　おらんだ人形（一幕）。

小説——街に笑ふ。まいとん。黄昏の幸福。忠僕。この戀人。橋。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



卍（まんじ）

谷崎潤一郎

その十七

その晩わたしは夜の明けるのんが待ちどしいて、八時に夫が出かけてしもたら、飛び着くやうに電話口へ走つて行きましてん。「姉ちやん、えらい早いなあ、もう起きたん？」と、受話器を通して聞えて來るのんが、昨日も聞いた聲ですねんけど、眼の前で聞くのんとは違たなつかしさにわくわくしながら、「光ちやんまだ寢てなはつたんか？」「あて今電話で起されてんわ。」「あてもういつでも出られるわ、あんたも直き出てくれへんか？」「そんなんやつたら慌てて拵へするよつて、九時半に梅田の阪急へ來ててくれへんか？」「九時半に、きつとやなあ？」「きつとやとも。」「今日は光ちやん一日暇やねんわなあ？　歸りが遲なつてもかめへんやろ？」「かめへんとも。」「あてもそのつもりで行くさかい」云うて、ちよつきり約束の時間に行つてましたら、なかなか來なされしませんのんで、又いつもみたいに焦してなさるのんか思たり、欺されたのん違ふか思たり、自動電話かけてみよとして、その間に行んでしまひなさつたら難儀や思て止めてしもたり、ひとりでチリチリしてますと、やつと十時過ぎに、「姉ちやん大分待つたん？」云うて、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

改札口から息せき切つて走つて來なさいましてん。「何處行こ？」二光ちやん何處ぞええとこ知らん？——靜かな、誰もゐヱへんやうなとこで一日ゆつくりしてたいわ。」きつと光子さんは綿貫と一緒にいろんなとこへ行つてるのんで、ええ隱れ場所知つてはるやろ思て云うたのんですが、「そんなら奈良へ行こやないか」云はれたのんで、ああ、そやそや、二人が始めて仲好う遊びに行つたのんも奈良やつた、あの思ひ出多い三笠山のゆふがたの景色、……何で今迄あの記念の土地忘れててんやろ、「ほんまにええとこ思ひついたなあ、又三笠山へ登ろなあ」云うて、ほんとにその時のうれしさ云うたら、……感激した時の私の癖でもうちやんと淚ぐみながら、「早行こ、早行こ」と急き立てて、大タクの案內人に手ヱ取られてタクシーへ乘るまでは、足が土に着けしませんねん。「あてゆんべから何處にせう思ていろいろ考へて、奈良が一番ええ思てんわ。」「あてかてゆんべまんじりともせえへんねけど、いつたい何考へててんやろ。」「あれからハズさん直き歸つて來やはつたん？」「一時間ぐらゐしてからやつてん。」「ハズさんどない云うてはつたん？」「もうそんなこと聞かんといてヱな、今日は一日家のこと忘れてたいわ。」——奈良へ着いたら直きに大軌の終點から乘合ひに乘つて、三笠山の麓まで行つて、なんしろ此の前の時と違て薄曇つた暑い日でしてんけど、ひつしより汗搔きながら頂邊まで登りましてん。そいから山の上にある茶店で休んでるうちに、前の時蜜柑轉こばしたりしたのんを思ひ出して、ちやうど夏蜜柑賣つてるのんを買うて、二人でころころ轉こばしましたら、下にゐる鹿がビックリして逃げますねん。「光ちやん、お腹減つてヱへんか。」「減つてるけど、もうちよつと此處にゐてたいわ。」「あてかていつ迄も山の上にゐてたい、なんぞお菓子でもたべて辛抱しとかう」云うて、晝御飯の代りに煮拔きたべながら、大佛殿の屋根から生駒山の方を見てますと、「此の前蕨や土筆たんと採つたわなあ、姉ちやん」云うて、「もう後ろの山へ行つてもなんにも生えてヱへんやろか」云ひなさるのんです。「そら、今頃行たかてなんにもあれへん。」「そんでも此なひだ行たとこへ行てみたいわ」云ひなさつて、あれから後ろの山へつづく谷の方へ下りて行きましたら、春でもあの邊はあんまり人の行かんとこですよつて、夏はなほさら淋しいて、木や草ばつかり仰山繁つてて、なかなかそんなとこ、一人やつたら來られへんやうな物凄い氣がするのんですけど、二人は結局誰も見てる者ないのんをええことにして、草のぼうぼう伸びてる蔭に、それこそほんまに、大空の雲より外に知つてる者のない隱れ場所見つけましてん。「光ちやん、……」「姉ちやん、……」「もうもう一生仲好うせうなあ。」「あて姉ちやんと此處で死にたい。」——と、お互ひにそない云うたたり、それから後は聲も立てんと、どのぐらゐそこにゐたのんやら、時間も、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世の中も、何も彼も忘れて、私の世界にはただ永久にいとしい光子さん云ふ人があるばつかり。……

そのうちに空がすつかり曇つて、冷こいもんがポタリと顔に落ちましたのんで、「光ちやん、雨降つて來たな。」「憎い雨やなあ。」「そやけど、濡れたらしょうがない。本降りにならん間によ下りよ」云うて、慌てて山下りてしまひましたら、ほんのパラパラ落ちただけでもうちやんと止んでしもてますねんがな。「こんなぐらゐやつたらもつとゐてたらよかつたなあ。」「ほんまに、何ちふ意地悪い雨やろ」云ひましてんけど、下りてみたら俄かに二人ともお腹減つて來ましたのんで、「ちやうどお茶の時間やさかい、ホテルへでも行てサンドキッチたべよか」云ひますと、光子さんが「あてええとこ知つてる」云ひなさつて、大軌の直ぐ傍にある新温泉へ行きましてん。彼處は私初めてですねんけど、寶塚と同じやうな家族温泉や何やあつて、光子さんはちよいちよい行きなさると見えて、仲居さんの名やら、中の勝手やら、よう知つてなさるのんですが、御飯たべてしもたら、「姉ちやん、お風呂へ這入れへん?」云うて、又二人して家族温泉へ這入りましてん。そんでその日一日遊んで、大阪へ戻つて來ましたのんは八時頃でしてんけど、そいでもまだ別れるのんがイヤでイヤで、何處迄でも引つ附いて行きたうて、一緒に電車で蘆屋川まで送つて行きながら、「ああ、また奈良い行きたいなあ。光ちやん、明日出られへん?」「明日はもつと近いとこにせえへんか、久しぶりで寶塚はどやろ?」「そんならきつとやで」云うて別れて、歸つて來ましたら十時近くになつてるのんです。「あんまり遅いのんで、さつき病院へ電話かけたとこや」云はれて、私ははつとしながらも突嗟に巧いこと考へついて、「電話かけても分れへなんだやろ」云ひますと、「ふん、中川云ふ人入院してへん云ふので、何ぞ譯あつて隱してるのんか思たのんやけど。……」「それがなあ、行つてみたら中川の奥さんやあれへん、光子さん自身のことやねんわ。そない云ふと昨日來やはつた時も何や様子がけつたいな思ててんけど、自分のことや云うたらうちが會へへんやろ思て、中川さんの名前借つてん云ふねんわ。」「そんならあの兒が病院這入つてんのんか?」「病院へなんか這入つてはれへん。此方はそんな事とは知らんと、一緒に見舞ひに行く積りで誘ひに行つたら、『まあちよつと上つとくなはれ』云ふよつて、上つたことは上つたけど、いつ迄たつても出かけよとしやはれへんのんで、『はよ行かうな』云うたら、『實はあんたに頼むことあるねん』云ひ出して、『きんのもその話せう思て行つたんやけど、……』云うて、――『どうも此の頃體の工合が普通でない、―妊娠したのんかも分れへんよつて、そんな事にならんうちに、何ぞ智慧貸してくれへんか、あの本讀んでみたけど、何や英語で分れへん

し、やり損うたら恐い思ふし』云ふねん。」「ふうん、呆れた児やなあ、そんだけの事に昨日みたいなうそつくやなんて、失敬やないか。」「うちもさんざん心配さされて、人を馬鹿にしてる思てんけど、『何とも外に工夫つけへんのんで、あんなうそついてしもたんやさかい、どうぞ堪忍はんといて』云うて、お梅どんも出て來て詫まるよつて、…………」「それにしたかて外に何とかうそのつきやうもあるやないか、あんまりやり方がエゲツない。」「ふん、ふん、そらさうに違ひないねけど、昨日の電話も男の聲やつたし、きつとあの綿貫云ふ人なあ、あの人が蔭で指圖したのんにきまつてるわ。なんぼなんでも光子さんだけやつたら、とてもあんなやゝこしいうそつく筈あれへん。うちも腹立つて腹立つて、『そんな嫌み聽く耳持つてエしません、これで失禮します』云うて歸ろとしたら、『まあそない云はんと、どうぞ助けて頂戴』云うて右と左から袂をおさへて、『こんな事から秘密が親たちに知れてしもたら、どないぞして綿貫と一緒になりたい思てるのんがみんなあかんやうになつてしまふ。そしたらあて生きてられへん』云うて光子さんは泣きやはるし、『どうぞどうぞとうちやんの命助ける思て、どないぞ心配したげとくなはれ』云うてお梅どんは手ェ合はして拜むし、そないしてもうたらどないしてええか分れへんやうになつてしもて、もうもう往生したわ。」「そんでどうした？」「そんでもうちめつたなこと教せられへんよつて、『私なんにもそんな方法知れしません。あの本貸したげただけでも悪い事した思てますのんに、そんな恐い事なんで出來ますかいな。それこそほんまに、誰ぞ知つてるお醫者はん頼んだらよろしいがな』云うてんけど、そないしてる間に俄かに光子さん苦しみ出しやはつて、えらい騷ぎになつてん。……」そんな風に、しやべつてるうちに傍から傍からいろいろな作り事考へ出して、ここへ昨日の出來事をええ工合に織り交ぜて、――光子さんはあの本の處方で昨夜の間にそうつと藥飲んだらしい、それがちやうどその時利いて來てだんだん痛みやうが強なつて、――と、そこは昨日見た通り詳しいに話して、そないなつて來ると自分にも責任あるよつて歸るにも歸られへん、そんでとうとう今迄傍についたげてたんやと、うまいこと云ひ拔けしてしもたのんです。

その十八

「今日もちよつと見舞ひに行つてくるわ、放つといても氣がかりやし、乘りかけた船やよつてしようがない。………」云うて、そいから五六日のあひだと云ふもの毎日のやうに何處ぞで會うてましてんけど、そない實家ばつかり行つてられへんし、さうか云うて光子さんの家でも都合わるいことあるし、奈良はあんまり遠過ぎるし、『何處ぞ人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に見つけられへんとこで、毎日二三時間くらゐ會へるとこあつたらええのになあ」思てますと、「そんなんやつたら大阪の市中の方がええし。………靜かなとこより却つて町中のゴタゴタしたとこの方が人目に附けへんし」云ひなさつて、「………いつや姉ちゃんに着物持つて來てもうた家なあ？ 彼處やつたら氣心もよう分つてるし、どんなことあつても人に知れる氣づかひないし、そら安心やねんけど、………いつそ彼處にせえへんか？」云やはりますねん。あの笠屋町の宿屋云うたら、私に取つたら忘れられへん口惜しい口惜しい思ひ出あるとこですのんに、まるで此方の感情も何も蹈み付けにした話ですねんけど、そないに云はれても「ふん、そやなあ、なんや極まり惡いけど、行てもええなあ」云うて、腹立てることも出來んとをめをめ引つ着いて行つたぐらゐ、もうすつかり足元見られてしもてましたのんです。それに極まり惡い云うても初めの日だけで、馴れてみましたら女子衆やかいも事情をちやんと心得てて、歸りがおそなつた時やらは、家の方い電話かけて棲目合ふやうにしてくれますし、………そんな譯で、しまひには別別に出かけて行つて彼處から電話で呼び出したり、何ぞ急用出來た時にはお梅どんから知らしてもろたり、………ま、それもよろしいのんですけど、光子さんの家ではお梅どんだけやなうて、お母さんも姉さんも、外の女子衆も、みんなあそこの家の電話番號知つてるらしいて、ときどき私や光子さんにかかつて來ることありますのんで、何ぞ家の方ええやうに欺したあるに違ひない思てたのんですが、或る日一人で先行て待つてたあひだに、「へえ、さうだす、………へえ、いいえ、あのう、さつきから待つてはりますけど、まだ來やはれしまへん。………へえ、へえ、そない云うときます。………いいえ、どうしまして、………私の方こそいつも奧樣が出やはりましてえらいお世話になりまして、………」と、電話口でそない仲居さんが云うてるのんが何や知らんけつたいですのんで、「今の電話、徳光さんとこから遊ひますか？」云ひましたら、「さうだす」云うてクスクス笑てるのんです。「あんた今、『いつも奧樣が出やはりまして』云うてましたなあ？ 一體あれ誰のつもりで云うてなはつたん？」云ふと又クスクス笑て、「奧樣知りやはれしまへんのんか、奧樣とこの女子衆のつもりで云うてますねん」云ふやありませんか。そいからよう聞いてみましたら、そこの家が私ンとこの大阪の事務所や云ふことにしたあるのんださうですねん。「仲居さんが此れ此れ云うたけど、ほんまかいな？」云うて、光子さんに尋ンねましたら、「ふん、そやねん、姉ちゃんにまた云はなんでんけど」と、平氣な顏して、「姉ちゃんとこの事務所、今橋と南と二つある云うて、此處の番號教たあるのんや。姉ちゃんかつて何ぞ家の方いそない云うといたらどやのん？ 若舟の店の出店も云う

てもええし、あての家でいかなんだら、ええ加減な名云うといたらえやないかいな」云ひなさるのんです。

　そないして、だんだん私は抜き差しならん深みい陷まつて行きましてんけど、「此いではいかん」思たところで、もうさうなつたらどないすることも出來しません。私は自分が光子さんに利用されてることも、「姉ちゃん姉ちゃん」云はれながらその實馬鹿にされてることも、感づいてましてん。——はあ、そら、道具に使ふばつかりやなうて、面白半分も手傳てましたのんでせうが、——いつや光子さんが云うてなさつたのんに、「異性の人に崇拜されるより同性の人に崇拜される時が、自分は一番誇りを感じる。何でや云うたら、男の人が女の姿見て綺麗思ふのは當り前や、女で女を迷はすこと出來る思ふと、自分がそないまで綺麗のんかいなあ云ふ氣がして、嬉してたまらん」云ふのんで、たしかにさう云ふ虚榮心から、夫に對する私の愛を自分の方へ奪ひなさることに興味を持つてなさつたのんでせうが、それにしたかつて、光子さん自身の心は綿貫の方へ吸ひ取られてて、私を蔑してしもたあとでこつそり會うてたことは、よう分つてましてん。けれどもう私は、どんな事あつても二度と別れる云ふこと出來へん氣持ちになつてましたよつて、分つてながらわざと分らん風して、お腹の中ではなんぼ焼き餅焼いてたかて、「綿貫」の「わ」の字も口い出さんと、そ知らん顔してましたのんで、そんな工合に弱點見拔かれてしもたら、姉ちゃん云うても私の方が妹みたいに機嫌取るやうになつてしもて、或る日いつもの家で會うてますと、「姉ちゃん、あんた一ぺん綿貫に會うてくれる氣ないか」云ひなさるのんです。——あの人、姉ちゃんとどう思てるか知らんけど、いつやあんなりになつてしもてて何や氣持ちが濟まんよつて、是非姉ちゃんに會はしてほしい云うてんねん。ちよつとも悪い人違ふし、會うたらきつと姉ちゃんかて氣に入る思ふねんけど、……」「ほんまに、そやなあ、あんなり云ふのんもけつたいなし、向がそない云やはんねやつたら、あても會うときたいなあ。光ちゃんの好きな人やつたら、あてかつてきつと好きになれる。」「ふん、そらきつとそや。そしたら今日でも會うてくれるか？」「いつでもかめへんけど、あの人何處にいてんの？」「さつきから此處の家い來てんねん。」——私も多分そんなこツちやろ思てましたのんですが、「そんなら此處へ呼ぼなあ」云ひなさつて、「あの人に來てもうて頂戴」云ふと、直きに綿貫が這入つて來ましてん。「やあ、お姉さんですか」——と、此の前の時は「奥さん」云うたのに「お姉さん」云ふ言葉使て、私を見たら恐縮したみたいにヅボンの膝そろへて畏まつて、「あの時はまことにえらい失禮しまして、……」云うて、——なんせいつやらは夜おそうもありましたし、それにあんな譯で人の着物借り着してましたし、そ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の日は明るい眞ア晝間のことですのんで、紺の上衣に白セルのパンツ穿いてるのんが、違た人のやうな印象受けたんですけど、歳は二十七八ぐらゐで、此の前の時の感じよりもつと顔の色が白うて、やつぱり「美男子やなあ」とは思ひましたけど、正直のところ云うたら、表情が乏しいて、繪に畫いたやうに綺麗ばつかりで、ちよつとも近代的なとこあれしません。「此の人岡田時彦に似てるやろ？」と、そない光子さんは云ひなさるのんですが、時彦よりもつとずつと女性的で、眼が細うて眼瞼が脹れてて、眉の間を神經質らしいピクピクさす癖あつて、なんや知らん陰險らしいのんです。「榮ちやん、なんにもそない堅ならんかてええし、姉ちやんちよつとも氣にかけてはれへんさかい——」云うて、光子さんは一所懸命執り成しなさるのんですけど、私は私で、どうも虫の好かん奴ッちや思たらどないしても打ち解けられしませんし、綿貫の方もそれを感づいたのか、無愛想な顔をニッコリともささんと、いつ迄たつても膝崩さうともせえしませんのに、光子さんだけは何や獨りで面白さうに笑ひなさつて、「どないしたん？　榮ちやん。あんたけつたいな人やなあ」云ひながら、むづかしい顔してる綿貫の方を意味ありさうに上眼で睨んで、「そんな顔してたら姉ちやんに惡いやないか」云うて、指の先で頰ぺた突ついたりして、「あのなあ姉ちやん、ほんまに云うたら、此の人燒き餅燒いてんねんし、——云やはりますねん。「嘘です、嘘です、そんなことあれしません、そら誤解や。」「嘘やあれへん、そんならさつきのこと云をか？」「さつき僕がどう云うた？」「僕は男に生れたのんが口惜しい、姉ちやんみたいな女に生れたらよかつた云うたやないか。」「そら云うた、——そやけどそら焼き餅やあれへん。」そない云ひ合ひしてるのんが、私にお世辭使ふためにちやんと二人で相談しといて云うてるのんか分れしませんし、相手になるだけ阿呆くさい思て默つて見てますと、「まあ、まあ、姉ちやんの前でそないに僕に恥搔かさんでもええやないか。」「そんならもつと機嫌ようしたらどやねん？」云うて、ずるずるべつたりに焼き餅喧嘩止めてしもて、そいから歸りしなに三人で鶴屋食堂へ行つたり、松竹見たりしましたけど、そいでも何や知らん三人とも心からシツクリとはせえしませせなんだ。

その十九

さう、さう、そんで私、最前云ふのん忘れましてんけど、家の方いは光子さんのお父さんのてかけはんのとこや云うて、笠屋町の電話番號教せときましてん。これ云うたら、ほんまにをかしなことですねんけど、光子さんは「船場の支店や云うたらどやのん？」云ひなさるのんですが、そんなとこい行てなさる云ふのんけつたいなし、いつそ疑

院い入院しなさつた云うたらとも思たのんですが、病院やつたらいつ迄も退院せえへん云ふ譯に行かんし、それに夫が事務所の歸りにでも迎ひに來たら直き分るし、何處にせうなあ思て難儀してますと、「こないしたらどうだす」云うて、お梅どんが考へつきましてん。尤もそれには光子さん姙娠しやはつた云ふことにせんと工合わるいのんで、お藥飲んでも巧いこと行かんし、お醫者はんも手術してくれへん、そのうちにだんだんお腹大きなつて來るよつてとうとうお母ちやんに打ち明けてしもた、そいでお父さんのてかけはんの家い子供生れるまで引き取られてる。そのてかけはんの家云ふのんは笠屋町の××云ふ宿屋で、電話番號は何番でと、ちやんとほんまの名前數せといたら、電話帳見たかてその通りやし、迎ひに來られても棲目合ふし、「そしたらあて、姉ちやんとこい遊びに行く時懐ろい綿でも詰めて、お腹大きして行かんならんわなあ」云うて大笑ひになりましてんけど、それやつたら一番分る氣づかひない云ふのんでそないしましてん。「さうか、光子さん腹ぼてになつたんか」云うて、夫はすつかり眞に受けて、さすがに氣の毒さうな顏しますのんで、「そいでもあんた、そんな惡いこと手傳たらいかん云うたやろ。そやよつてうちどない賴まれても敎せたげへんなんでん。そいで子供出來るまでは一と足も外へ出たらいかん、じつとすつ込んでたはれ云はれて、押し込めみたいにされてるのんで、退屈で退屈でしようがないさかい、毎日でも遊びに來とくなはれ云やはるねんけど、どないせう知らん?──うちかてきつと恨まれてるか分れへんし、放つといたら寢ざめ惡いしなあ。」「それもそやけど、又係り合ひになつたら難儀するぜ。」「ふん、ふん、うちもそない思ふねんけど、今度ちふ今度はいろいろ苦勞したせゐか大分人間變つて來てはんねん。それにそないなつたら、もうどないしても綿貫と一緖になるより外ない云うて、わりに落ち着いてはるし、家の方でも結局そないさすやうになるらしいねんけど、何せ今のとこ誰一人訪ンねたげる人もないのんで、『賴りにするのん姉ちやんだけや』云はれると、なんぼ自業自得や思ても可哀さうになつて來るねん。『なあ姉ちやん、あてにややこ出來たら、まさか姉ちやんかて誤解される筈ないやろ? あてそのうちに綿貫と一緖に姉ちやんの旦那さんとこい詫まりに行くさかい、これからほんまのきやうだいみたいに附き合うてくれへん?』──こないだもそない云うてたし、──」夫はそれでもまだ心から納得せえへん樣子でしたが、「なるだけ氣イ附けた方がえゝで」云ひながらそんなり大目に見てしまひましたんで、そいから後は「奥樣ゐやはりますか」云うて笠屋町からおほびらに呼び出しかかつて來る、此方からも遠慮なうかけられる、晩御飯ごろまで遊んでると、「ええ加減に歸つてけえへんか」云うて夫からかかつて來ることもある、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

——云ふ工合で、ほんまにお梅どん巧いこと考へてくれた思てましてん。

—）卍（—

そいからさつきの綿貫のことですねんけど、そんな調子で、折角引き合はしてまうでも何やお互ひに探り合ひしててちよつとも氣イ許せしませんのんで、その日一ぺん會うたなり、今日も別の部屋に來てんな思ふことあつても、孰方からも「會を」云ひ出したことあれしませんし、光子さんも二人を仲好うさすことはあきらめてしもたらしいのんですが、なんでも三人で松竹い行た、——あれから半月ぐらゐ後でしたやろか、ゆふがた、五時半ごろまで遊んでましたら、「姉ちゃん先行んでくれへん？ あて、もうちよつと用あるよつて」と、追ひ立てるやうにしなさるのんで、ああ又綿貫が待つてるねんなあ思て、毎時のことですよつて腹も立てんと、「そんなら先行ぬわ」云うてその宿屋のろうか、お出ましたら、小聲で「お姉さん」と後ろから呼ぶもんあるので振り向いて見たら綿貫ですねん。「お姉さん、今お歸りがけですか」云ひますよつて、「へえ、さうです、光ちゃん待つてはるさかい早よ行つたげなはれ」と、わざと皮肉に云ひながら、私はタクシー摑まへるつもりであの通りを宗右衞門町の方い歩いて行きますと、「ちよつと、……ちよつと……」云うて引つ附いて來て、「僕、實はお姉さんに聞いて貰ひたいことあるのんですが、差し支へなかつたら、一時間ぐらゐ此の邊散歩してくれしませんか」云ふのんです。「そら、どんなお話か聞かしてまうてもよろしですが、さつきかあんた待つてなさるで。」「ナニ、それやつたら何處ぞから電話かけときます」云うて、二人で彼處の「梅園」へ這入つて、ぜんざいたべながら電話借つて、そいから太左衞門橋筋を北の方い歩き歩き話しましてん。「僕今電話で、急な用事が出來たのんでここ一時間ほどおそなるかも知れへん云うて置いたのんですが、お姉さんとお目に懸つたこと内證にしといて貰へまへんやろか？ それ約束してくれはらんと、お話すること出來んのですけど。」「私は人にしやべるな云はれたらどんなことあつてもしやべれしません。けど自分だけ正直に約束守つてると、ときどき人に欺められて馬鹿な目に遭ふことあるのんで、……」そない云うてやりましたら、「ああ、お姉さんは、なんでもかんでも光ちゃんのした事みんな僕の指し金や、僕が操つてるのんやとお思ひですやろ？ そら、さう思はれてもしやうがない譯ある云ふことは僕にもよう分つてます」云うて、下向いてためいきついて、「お話したい云ふのんも實はそのことなんですが、いつたいお姉さんは、僕とお姉さんと孰方が餘計愛されてる思ひます？ お姉さんとしたら何や僕等に馬鹿にされてる、利用されてるとお思ひですやろけど、僕かてやつぱりそんな氣かしてるのんです。僕はほんまに嫉妬を感じてるのんです。そら光ちやんに云

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はしたら、姉ちゃんゐてた方が家の方胡麻化すのに都合ええさかい、あの人道具に使うてるのんや云ひますけど、もう今になつて人を道具に使ふ必要ありますやろか？ そんなもんあつたら却つて邪魔になれしませんやろか？ ほんまに僕を愛してるのんなら、そないしてる間に結婚してくれたらええやありませんか。」――私はちよつとも油斷せんと聞いてましたけど、態度がえらい眞劍らしいて、云ふことも一と通り尤ものやうに思はれますねん。「そいでも結婚出來へん云ふのんは、何ぞ光ちやんの家の方に反對あるのん違ひますやろか？ いつも私には、自分は早結婚したい云うてますで。」「そら、口ではそない云うてます。家で反對する云ふこともほんまには違ひないのんです。けどそれにしたかて自分が眞面目にその氣になつたら、何とかして親たちを說き伏せる方法ないことないやろ思ひます。まして今ではただの體と違ふのんに何處へ行くこと出來ますか知らん？」――はあ、そない云ひますのんで、そしたらやつぱり光子さんはほんまに姙娠してるのんやろか、けつたいなこと云ふなあ思ひながら聞いてますと、「――內の娘は五十萬圓以上の資產家の所でないとやられん、一文なしのすかッ貧の男みたいなんにやる譯に行かん、子供生れたら何處いなとやつてしまふ云うて、お父さんかんかんになつて怒つてる云ふのんですが、そんな無茶な話ありますやろか。第一子供が可哀さうで、人道問題やありませんか。お姉さんどう思はれます？」云ひますさかい、「それより私、光ちやんに子供出來た云ふこと初耳ですけど、なんぞそんな氣ェでもあつたんですか」云ひますと、「へえ？ 初耳？――」云うて、疑がひ深さうに私の顏をモジモジと孔の開くほど視つめてますねん。「へえ、初耳です、そんなこと光ちやん私に云うたことあれしません。」「さうかて、――そしたらいつやお姉さんのとこい避姙の方法聞きに行つたことあれしませんか？」「そらありましたけど、姙娠したなんて云ふのん根も葉もないウソばつかりで、私に近寄るためにそんな口實こしらへて來たのん違ひますやろか。尤も私も家の方は、光子さん姙娠してはる、そいでちよいちよい見舞ひに行くのんや云うたあるのんですけど。」すると綿貫は、「ふうん、さうですか」云うたなり、いつの間にやら血走つた眼ェして、唇の色まで變へてるのんです。

その二十

「なあ、お姉さん、何でそないに姙娠した云ふこと隱すのんでせう？ 殊にお姉さんにまでウソつかいでもよろしいやありませんか？ ほんまにお姉さん知りやはれしませんのんか？」云うて、綿貫は何や疑うてる樣子で、何遍でも念を押すのんですけど、ほんまのとこ私は聞いたことあれしません。綿貫の話ではもうちやんと三月くらゐになつて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て、お醫者はんにも見てもろた云ふのんですが、それやつたら、いつや出血騷ぎの時にもそやつた筈ですねんけど、三月やそこらでは素人に分れしませんし、それにその後で「自分は子供出來る筈ない」云ふことを、たしかに光子さん自身の口から聞いてますし、あの時のことは芝居打つてたに違ひない思てましたのんに、綿貫の云ふ通りやとしたら、やつぱり私に氣がねしてはつたのんか知らん？「何で子供出來る筈ない云ひましたか、あの本の通りを實行してる云ふのんですか、そやなかつたらそんな體質や云ふんですか」と、綿貫はせえだい聞くのんですが、そら私かて、光子さんの前では出來るだけ綿貫のことに觸らんやうにしてましたよつて、そない詳しう聞うたことあれしませんし……そやけど、此なひだもてんごに「姉ちやんの家い行く時はお腹に綿でも詰めて行かんならん」云うてはつたぐらゐやし、妊娠してはるとは思へしませなんだ云ひますと、「僕には何で隱したがるのんか分つてます」と、綿貫は云ふのんです。何でや云うたら、光子さんは眞面目で結婚せう云ふ氣イないのんや、そいで若しも子供出來た云ふこと分つたらどないしても一緒にさされる、それがイヤやよつて隱されるだけ隱してる、「僕はさうに違ひない思ひます」云ひますねん。綿貫の考へでは、光子さんちふ人は異性の愛より同性の愛の方が好きで、つまるところ綿貫より私の方がずつと愛されてて、そのために結婚したがれへん。――子供出來たり、結婚したりしたら、私が逃げてしまふかも分れへん思て、一日延ばしに延ばしといて、そのうちにお腹の見ええやうにするとか、綿貫にイヤ氣おこさすとか、どないぞしよう思てる。――私はひがんでるせゐか、どないしても自分の方がそない愛されてる思へしませんのんに、「いや、さうです、たしかにさうです、お姉さんは仕合はせです」云うて、「ああ、ああ、それに引きかへて僕は何ちふ不幸な運命の下に生れたのんでせう」と、芝居のセリフみたいに節つけて云ひながら、今にも泣きさうな顏するのんです。それが、始めて會うた時から女みたいな男やと思てましてけんど、そない云うて話してますと、表情や物の云ひやうまで女の腐つたんみたいにねちねちしてて、何やうるさい程執拗うて、横眼でヂロヂロ邪推深さうに人の顏色うかがうたりして、成るほど此れやつたら、光子さんかてそない好きと違ふのんかなあ云ふ氣しますねん。そいからいつや笠屋町で着物取られた時にしたかて、綿貫は私呼ぶのんに反對やつた、もうあないになつてんやつたら度胸きめて、仲居さんの着物借つて歸つたらええ、そんで「此ない此ないの譯で遲う約束した男あります」云うたら、出來たことしようがないよつて却つて早う結婚出來る、出來なんだら驅け落ちする覺悟きめたら、ちよつとも恐いことあれへんのんに、あんな時に何も知らんお姉さん呼ぶやなんて、そんな卑怯か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ましいこと出來るもんか、第一呼んだかて來てくれへんにきまつてる云うてんけど、光子さんは「着物なかつたら今晩家い行なれへん」云うてどないしても聽きやはれへんなんだ。「それやつたら、いつそのこと此いから何處ぞい逃げよやないか」云うても、「そんなことしたら後のために惡いさかい、あてが巧アいこと云うて姉ちゃん呼んで見せる。あてが云うたら、あの人『イヤや』云ふこと云はれへん。ちよつとぐらゐ怒られたかてどないなと胡麻化してやる」云うて、自分でどんどん電話かけに行きやはつた。「そんでもあの時、誰ぞもう一人電話口に立つててコソコソ相談してたみたいでしたがなあ」云ひましたら、「そら僕かて心配やさかい、傍に附いてたんです」云ひますねん。

　そんなことといろいろ話ししいしい知らん間に三休橋渡つて、本町筋まで來てしまひましてんけど、私も綿貫も「もうちよつと話しまひよなあ」云うて、あの電車道越えて北濱の方い行きましてん。何せ私は今迄光子さんちふ人を通してばつかり想像してて、何かにつけてただもう男が惡いのんや思てましたが、さつきからの樣子見てましたら、そないウソつきみたいとも違ひますし、女性的なとこや疑ひ深いとこあるのんも、生れつきにも依るとしたかて、光子さんの態度がそないさしてしもたのんかも分れへんし、……私にしたかて今迄大分欺されたお蔭で僻んでるとこあるねんし、……それ考へたら無理もないとこあるのんで、まあちよつとぐらゐ邪推交つてるとしたかて、兎に角本氣で私に同情求めてるみたいに思はれますねん。尤も自分より私の方が愛されてる云ふのんは、どないしても私には信じられしませんのんで、「そら違ひますやろ、そら綿貫さん、あんまり氣イ廻し過ぎますで」云うて慰めたげたのんですが、「いやいや、僕かてそない思ひたいのんですけど、絶對にそんなことあれしません。お姉さんはまだほんまの光ちゃんの性質知りやはれしませんのんです」云うて、——光子さんは私に對しては綿貫を愛してるみたいに見せかけ、綿貫に對しては私を愛してるみたいに見せかけてる、そんなことするのん好きなたちなんや。けど孰方や云うたら、私の方餘計愛してるのんで、そやなかつたらあんなり絶交したみたいになつてたのんに、わざわざ病院の名前騙つたり何やして會ひに行く譯ないやないか。「いつたいあの時、光ちゃんはお姉さんとこい行てどんな工合に云うたのんですか、どんな事からよりが戻つたのんですか、僕は後から聞いたのんで詳しいことは知らんのんですが」云ひますよつて、あの出血騷ぎの一件みんな話して聞かしたげますと、「ふうん、ふうん」云うて一と言一と言ビツクリしながら、「そんな騷動したと云ふこと、僕は夢にも知れしません。そら、お腹大きかつたのんはほんまです。しかし僕は子供出來んねんやつたら出來た方がええと云ふ意見で、藥飮んだり不自然な手段

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

取つたりしたらいかん云うてたのんに、自分勝手にお姉さんのとこい相談しに行つた云ふのんで、後で怒つたくらゐですねん。そやけど、僕に內證で藥飲んだことあつたにしたかて、そない苦しんだり出血したりした云ふことウソに違ひあれしません。いつたいその血イみたいなもん何ですやろ」云うて、そない迄して仲好うなりたい云ふのんは、私を愛してるのんでないと出來んことや云ふのんです。成る程それもさうですけど、そんなら何で綿貫と會うてるねんやろ？ ほんまに私好きやつたら、もうとうに綿貫を放つてしまふのんが當り前やないか？ それがをかしい云ひましたら、光子さん云うたら自分がどない「好きやなあ」思てもその弱點見せんやうにして、向が自分を慕うて來るやうに仕向けたがる。自分は絶世の美人やよつて、いつも高う止まつてて、誰ぞに崇拜ささんと淋しい。自分の方から云ひ寄つたりしたら値打ちが下る思ひ込んでる。そやさかい私に嫉妬起さして、自分が優越な地位にゐるために綿貫云ふもん利用してるのんや。「それに一つは、別れるやなんて云ひ出したら僕が何するか分れへん思て、恐がつてるのんです。今更そんなこと云へる關係やあれしませんのんに、もしもそないなつたら、僕は名譽と生命を賭けてあらゆる復讐してやります」云うといて、蛇みたいな眼で人の顏ジロジロ睨むのんです。

（つゞく）

懸賞創作募集

『改造』昭和五年四月號、五月號に登載すべき創作を募集します。左記の規定御一讀の上奮つて應募せられたし。

一、創作は小說戲曲の二種とし一人一篇に限る。
一、原稿の枚數は四百字百枚內外。
一、〆切は昭和四年拾壹月三十日。
一、賞金は壹等壹仟五百圓（壹人）、貳等七百五拾圓（壹人）。尙選外として三四篇採用することあるべし。
一、應募原稿は當落共に一切返還せず。
一、應募者は略歷一通を添付すること。
一、宛名は「改造編輯部」とし、封表には必らず「懸賞創作」と明記すること。
一、壹貳等の版權は本社に歸するものとす。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

編輯室より

◇梅雨の上りをまたでそして、空前の不人氣を後にして田中内閣は野だれ死した。その上重要政策は何一つも實行するところなくして

◇濱口内閣は可なりの歡呼のもとに誕生したしかしたいへんな官僚臭である。黨外から偉材を拔擢することのできなかつたこと、新鋭の氣が乏しいこと、甚だしきは政務官任用に一期生、二期生なぞの階段を設けたなぞは愚の骨頂だ。ただ利權屋の顏だしを抑へたのは大手柄であるが、大衆を基調とした具體的政策が逸脫されておるのはどう云ふものか。

◇このごろの樞府はいつでも政變の本家本元だ。このまま樞府を存置しておくか否やは國民の愼重に考ふべき大問題だ。

◇政友會の總裁問題も政治季節の到來と共に可なりむづかしい議論があることだらう。

◇河上肇博士の「貧乏物語」は八月號より登載するつもりであつたが間に逢はず九月號より登載する。

◇懸賞文藝評論は嚴選中一等を宮本顯治君の「敗北の文學」二等を小林秀雄君の「樣々なる意匠」を採擇した。尙ほ選外佳作として黑木諄君「わが近代學文史より」春山行夫君「現代文學の技術的進化」二作が選み出された。

◇我農民運動の先驅須貝快天氏逝く。

◇「日本地理大系」はその後着々進捗しておるそして今回「改造社飛行班」を新設して日本全國を撮影することにした。而も飛行寫眞班以外の寫眞班も日本の最高權威三人を依囑した今までに見られぬ立派な美術的、藝術的の寫眞が見られるのは遠くではあるまい。

◇「現代短歌全集」は現代の「萬葉」たるべく堂々たる威容を具へて出來した。千古にのこるべく平福百穗畫伯の裝幀の苦心また錦上花を添へたかの觀がある。

◇「現代詩全集」本社版は刊行を中止して新潮社版の完成にまつことにした。その代り新潮社はその計畫たる短歌全集を中止して本社版を助援するに決した。

◇「子規全集」は全集界で尤も知識階級の支持を得た。

◇大衆より期待された大佛次郎君の「赤穗浪士」の下卷が漸く出來した。

◇「若山牧水」の歌碑が沼津千本松原に建つた、その代表作「幾山河越え去り行かば寂しさのはてなん國ぞ今日も旅ゆく」が銘刻された。これと同時に本社よりは若山牧水全集が發行された。

改造定價

冊數	定價	郵税
壹冊	五拾錢	參錢
半ヶ年	參圓	郵税不要
壹ヶ年	六圓	郵税不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す
▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す
▲外國よりの御註文は郵税實費を申受く
▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

昭和四年七月十八日 印刷納本
昭和四年八月一日 發行

(定價五拾錢)
(郵税三錢)

東京市芝區愛宕下町四ノ六
編輯兼發行人 山本三生

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所 秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町四ノ六
改造社
振替東京 八四〇二
電話芝(43) 一一三一 一一三二 一一三三 一一三四

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

見よ！眞に彼の藝術を傳ふべき定譯本！

ゴーリキイ全集（豫約豫告）

臺本＝勞農國立出版所最新刊行の全集

飜譯＝吾國露文學界の最高權威廿數氏

全廿四卷
四六判
約五百頁
壹册壹圓

飜譯者

石田喜與司　原久一郎　河村雅
金田常三郎　米川正夫　高橋晩成
高野孤龍　外村史郎　中村白葉
長岡義夫　村田春海　井田孝平
昇曙夢　岡澤秀虎　黒田辰男
黒田乙吉　藏原惟人　熊澤復六
山内封介　八住利雄　袋一平
湯淺芳子
（いろは順）

マキシム・ゴーリキイは革命時代を經て益々その偉大さを認められた。目下執筆中の三部作「四十年」の如き其の藝術的天禀と雄渾の筆力とを以て正に世界驚歎の的となつてゐる。文壇生活三十有餘年、長篇短篇、戲曲、評論、隨筆、凡て之れ彼の燃ゆる情熱と其の數奇な運命の反映であり、各篇悉く珠玉の如き藝術品である。此全集新氣運を孕める我社は我文壇に本全集を送るは多大の貢獻たるべきを信ず。吾社は文豪の藝術の眞を移植すべく、勞農國立出版所最新刊行の全集を臺本とし、露西亞文學界の權威に各其愛好する作品に得意の譯筆を揮ふべく依囑し、以て定譯本全集を刊行し得るを誇とする。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京二〇四八

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

大佛次郎著

下巻愈々發賣

赤穗浪士

最終篇 いよく討入り!!

◇上巻百版 中巻九十版◇

各巻壹圓五拾錢 送料各廿四錢

我が民族詩の最高峰

雪の中に見張りに立つてゐた神崎與五郎が山田宗徧の駕籠が吉良邸の門に入るのを見屆けてから突如として快速調を以て事件は展開する。二年間痺れをきらして待ち焦れてゐた時は來たのだ。なほ悠々閑々として出陣の盃を擧げ羅生門の謠を唄ふ四十六の元祿武士を見よ。日本人のみが所有し得た高貴なる生ける瞬間である。堀部彌兵衛老人の颯爽たる門出の一語は武士道の生んだ詩である。滿目の雪に月の映ゆる寒夜の凄壯たる劍戟の響を聞け。雪の中に銅像の如くがつしりと立つて戰況を見まもる内藏助を見よ。また塀越しに松の雪を染めて高張の光を集め、終夜浪士らの義擧に沈默の加勢をする快男兒旗本土屋主税の風格を見よ。本懐、黎明の引揚、暮れかたの泉岳寺の雨。この偉大なる瞬間の浪士たちの纎細なる心の動き、潜める苦悶が切腹前夜に生みたる「狂言」の近代的悲劇。――まことに、これは現代の心を通じて見たる民族の詩である。殊に討入り以後は新聞に發表しなかつた新稿、作者が單行本のために書きおろしたもので、浪人堀田隼人のテロリズムへの轉向、快盜蜘蛛の陣十郎のその後についても、諸君は初めて見られるのである。

ごろつき船

上巻發賣中◇

四六判六百頁 定價壹圓八拾錢 送料廿四錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: FIFTY SEN A COPY, SIX YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, ATAGOSHITA-MACHI SHIBA-KU, TOKIO.

海へ山へ

流行の海水・登山・旅行具・化粧具・寫眞機
書籍・食料品・藥品に至るまで各種豊富に
取揃ひ……何卒お支度は松屋へ御用命を

避暑旅行用 スーツケース

尺六……十四圓
尺八……十五圓半
二尺……十七圓半



松屋
東京・銀座

株式會社秀英舍印刷

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA